

Mameda Site
真米田遺跡

Nankaichimae Site
七日市前遺跡

－雇用創出ゾーン整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2014年3月
宮崎県都城市教育委員会

Mameda Site
真米田遺跡

Nankaichimae Site
七日市前遺跡

－雇用創出ゾーン整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序 文

本書は、「雇用創出ゾーン整備事業」に伴い、都城市教育委員会が平成23・24年度の二カ年にわたって実施した真米田遺跡と七日市前遺跡の発掘調査報告書であります。

本書に所収いたしました真米田遺跡と七日市前遺跡は、都城市の東部、高城町穂満坊と大井手地区にそれぞれ所在しております。平成23年度に調査した真米田遺跡は、主に平安時代（9～10世紀）の遺構・遺物が確認されました。この中には、大型掘立柱建物跡や円形周溝墓、土師器焼成土坑といった都城市内でも類例の少ない遺構があります。さらに、中国産の貿易陶磁器や国内産の緑釉陶器など当時の貴重品といえる遺物が量的にもまとまって出土しています。このような遺構・遺物からは、真米田遺跡は盆地内における有力者が居を構えた集落であったものと考えられます。さらには、当時の役所の一部であった可能性も残されています。

また、平成24年度に調査いたしました七日市前遺跡は、平安時代から鎌倉・室町時代にかけての遺跡であります。ここでも都城市内の遺跡では初となる錫杖が出土し、当時遺跡の近辺にあったと伝えられる高称寺というお寺との関連性が指摘できるなど、地域の歴史を読み解く上で重要な成果があげられています。本遺跡では古墳時代の土器もまとまって出土しており、周辺にこの時期の集落が存在していた可能性も考えられます。

本書がこうした地域の歴史や文化財に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料として多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご理解・ご協力をいただいた関係諸機関、発掘調査に従事していただいた市民の皆様から感謝の意を表します。

2014年3月

都城市教育委員会
教育長 黒木 哲徳

例言

1. 本書は、「雇用創出ゾーン整備事業」に伴い、都城市教育委員会が平成23年度に実施した真米田遺跡と平成24年度に実施した七日市前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 平成23年度の真米田遺跡の発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化財課主課山下大輔・加賀淳一、同嘱託下田代清海・外山亜紀子・岸田裕一が担当した。平成24年度の七日市前遺跡の発掘調査は、都城市教育委員会が主体となり、同市文化財課主課近沢恒典・山下、同嘱託下田代・早瀬航が担当した。
3. 本書で利用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は真北である。
4. 本書で利用した遺跡位置図は、国土地理院の許可を受け高城町が作成した町域図を基に作成した。
5. 現場における遺構実測は、真米田遺跡を発掘調査作業員および山下・加賀・下田代・外山・岸田が行い、七日市前遺跡を発掘調査作業員および近沢・山下・下田代・早瀬が行った。遺構図のトレースについては、株式会社CUBICのトレースくんを用い下田代・早瀬が行い、それを山下・下田代がAdobe社のIllustratorで編集した。
6. 本書に掲載した遺物の実測は整理作業員および山下・早瀬・谷口めぐみが行い、トレースは山下が行った。
7. 現場での遺構写真撮影は近沢・山下・加賀・外山・岸田が行い、出土遺物の写真撮影は山下が行った。空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
8. 石器の観察・分類・実測については、栗山葉子の助言・協力を得た。
9. 本書の遺物番号は遺跡ごとの通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。尚、遺構番号を割り振った後に遺構ではないことが判明したSC47・48・49・52、SD13は欠番とした。また、個別のピットとして遺構番号を割り振り後、独立建物遺跡の一部と判明したピットについては、名称を変更せず個別番号の前にSBを付している。
10. 土器と遺物の分類は『新版標準土色誌』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)2001年度前期版を参考にした。
11. 自然科学分析については、株式会社古環境研究所および株式会社吉田生物研究所に委託した。
12. 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は基本的に、独立建物跡を1/80、土坑・焼土範囲・礎石積遺構を1/40、溝状遺構は1/100・1/200としたが、遺構の規模によりこれ以外の縮尺で掲載しているものがある。遺物実測図は基本的に土師器・須恵器・陶磁器・製塩土器など土器類および土製品類は1/3、鉄製品・鉄洋・輪軸口は1/2、石器・石製品を1/1・1/2・1/3・1/4・1/6とし、各国版に示している。
13. 本書の執筆は第1章の自然科学分析を株式会社古環境研究所、第7章の自然科学分析を株式会社古環境研究所と株式会社吉田生物研究所に委託した。それ以外の執筆および編集は山下が行った。
14. 発掘調査および発掘調査報告書の作成にあたっては、以下の方々のご指導・ご協力を賜った(敬称略・五十音順)。網田龍生、岩永哲夫、大盛祐子、北山峰生、坂井秀一、柴川真一、谷口武蔵、水本修一、柴田博子、東 和幸、日高広人、深野信之、福田泰典、藤木 聡、堀田孝博、北澤泰道、松林豊樹、美濃口雅朗、柳田晴子、矢部喜多夫、山本信夫
15. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録(図面・写真など)は都城市教育委員会が保管している。
16. 遺構の表記に使用した略号は以下のとおりである。
SB: 独立建物跡・櫓列 SC: 土坑・井戸跡 SD: 溝状遺構・道跡 SH: 焼土範囲 SK: 楕円形周溝墓 SR: 土器埋設遺構・土器溜まり SS: 礎石積遺構 SX: 竪状遺構 SP: ピット
17. 出土遺物の時期比定に関しては、以下の編年研究の成果を参考とした。
上田秀夫 1982 『14～16世紀の青磁焼分類『貿易陶磁研究』No.2
桑畑光博 2004 『都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究(1)』『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
桑畑光博 2004 『第5章 調査のまとめ』『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書 第62集 都城市教育委員会
近沢恒典 2011 『都城盆地の古代土師器の編年について』『平成23年度埋蔵文化財担当専門職員研修会』
宮崎県埋蔵文化財センター
森田 勉 1982 『14～16世紀の白磁の型式分類と編年』『貿易陶磁研究』No.2
山本信夫 1990 『統計上の土器』『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
山本信夫 1999 『大宰府出土土器類の編年について』『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集
第12集 6～10区遺構配置図(S=1/300)……………19
第13集 10～14区遺構配置図(S=1/300)……………20
第14集 14～18区遺構配置図(S=1/300)……………21

本文目次

| | | | |
|------------------------|-----|-------------------------|-----|
| 第1章 序説 | 1 | 第5節 真米田遺跡における塗膜分析 | 248 |
| 第1節 調査の経緯と経過 | 1 | 第5章 真米田遺跡の調査のまとめ | 251 |
| 第2節 調査組織 | 2 | 第1節 出土遺物の様相 | 251 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 3 | 第2節 遺構の変遷 | 257 |
| 第1節 地理的環境 | 3 | 第3節 真米田遺跡の位置づけ | 258 |
| 第2節 歴史的環境 | 3 | 第6章 七日市前遺跡の調査 | 261 |
| 第3章 平安時代～中世の遺構の調査 | 6 | 第1節 調査の方法と概要 | 261 |
| 第1節 調査の方法と概要 | 6 | 第2節 遺跡の層序 | 263 |
| 第2節 遺跡の層序 | 8 | 第3節 古墳時代の遺構と遺物 | 266 |
| 第3節 平安時代～中世の遺構と遺物 | 17 | 1 土器埋設遺構・土器溜まり(SR) | 266 |
| 1 掘立柱建物跡・櫓列(SB) | 17 | 2 包含層出土遺物 | 266 |
| 2 土坑(SC) | 56 | 第4節 平安時代～中世の遺構と遺物 | 272 |
| 3 溝状遺構・道跡(SD) | 97 | 1 掘立柱建物跡(SB) | 272 |
| 4 焼土範囲(SH) | 111 | 2 土坑(SC) | 275 |
| 5 楕円形周溝墓(SK) | 114 | 3 溝状遺構・道跡(SD) | 285 |
| 6 ピット(P) | 116 | 4 焼土遺構(SH) | 300 |
| 7 礎石積遺構(SS) | 139 | 5 ピット(P) | 300 |
| 8 竪状遺構(SU) | 140 | 6 竪状遺構(SU) | 312 |
| 9 不明遺構(SX) | 141 | 7 包含層出土遺物 | 314 |
| 10 整地層出土遺物 | 146 | 第5節 その他の時代の遺物 | 316 |
| 11 窪地出土遺物 | 150 | 第7章 七日市前遺跡における自然科学分析 | 317 |
| 12 包含層出土遺物 | 167 | 第1節 七日市前遺跡における放射性炭素年代測定 | 317 |
| 第4節 その他の時代の遺物 | 231 | 第2節 七日市前遺跡における植物珪酸体分析 | 319 |
| 第4章 真米田遺跡における自然科学分析 | 232 | 第3節 七日市前遺跡における花粉分析 | 324 |
| 第1節 真米田遺跡における放射性炭素年代測定 | 232 | 第4節 七日市前遺跡出土土器製品の塗膜構造調査 | 329 |
| 第2節 真米田遺跡における植物珪酸体分析 | 235 | 第8章 七日市前遺跡の調査のまとめ | 331 |
| 第3節 真米田遺跡における花粉分析 | 240 | 第1節 古墳時代について | 331 |
| 第4節 真米田遺跡における珪酸分析 | 244 | 第2節 平安時代～中世について | 331 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------------|-------|---|-------|
| 第1図 遺跡位置図(S=100,000) | 5 | 第15図 19～23区遺構配置図(S=1/300) | 22 |
| 第2図 調査区位置図(S=10,000) | 6 | 第16図 SB1・2実測図(S=1/80) | 23 |
| 第3図 調査区区域図(S=1/1,000) | 7 | 第17図 SB3・4・5・10実測図(S=1/80) | 24 |
| 第4図 調査区土層断面図①(S=1/80) | 9 | 第18図 SB1・2・6出土遺物実測図(S=1/3・1/4) | 25 |
| 第5図 調査区土層断面図②(S=1/80) | 10 | 第19図 SB7実測図(S=1/80)・遺物出土状況(S=1/40) | 27・28 |
| 第6図 調査区土層断面図③(S=1/80) | 11 | 第20図 SB7出土遺物実測図①(S=1/2・1/3) | 29 |
| 第7図 調査区土層断面図④(S=1/80) | 12 | 第21図 SB7出土遺物実測図②(S=1/3) | 30 |
| 第8図 調査区土層断面図⑤(S=1/80) | 13 | 第22図 SB7出土遺物実測図③(S=1/2・1/3・1/4) | 31 |
| 第9図 調査区土層断面図⑥(S=1/80) | 14 | 第23図 SB7出土遺物実測図④(S=1/2・1/3) | 32 |
| 第10図 平安時代～中世遺構配置図(S=1/600) | 15・16 | 第24図 SB8実測図(S=1/80)・遺物出土状況(S=1/40) | 33・34 |
| 第11図 1～6区遺構配置図(S=1/300) | 18 | 第25図 SB6・11実測図(S=1/80)・SB11P2出土遺物出土状況(S=1/40) | 35 |
| 第12図 6～10区遺構配置図(S=1/300) | 19 | 第26図 SB8出土遺物実測図(S=1/2・1/3) | 36 |
| 第13図 10～14区遺構配置図(S=1/300) | 20 | 第27図 SB8・9・11出土遺物実測図(S=1/3) | 37 |
| 第14図 14～18区遺構配置図(S=1/300) | 21 | 第28図 SB9・13実測図(S=1/80) | 38 |

| | | |
|-------|--|-----|
| 第261図 | 包含層出土平安時代～中世遺物実測図 (S=1/3)…………… | 314 |
| 第262図 | 包含層出土中世遺物実測図 (S=1/3)…………… | 315 |
| 第263図 | 包含層出土平安時代～中世鉄製品・鉄滓・鉄貨実測図 (S=1/1・1/2)…………… | 316 |

| | | |
|-------|-------------------------------|-----|
| 第264図 | その他の時代の遺物実測図 (S=1/2・1/3)…………… | 316 |
| 第265図 | 暦年校正結果…………… | 318 |
| 第266図 | 七日市前遺跡・F2区における植物性炭体分析結果…………… | 322 |
| 第267図 | 七日市前遺跡・F2区における花粉ダイアグラム…………… | 327 |

表 目 次

| | | |
|-----|-------------------------|-----|
| 第1表 | 放射性炭素年代測定結果…………… | 233 |
| 第2表 | 真米田遺跡における植物性炭体分析結果…………… | 237 |
| 第3表 | 真米田遺跡における花粉分析結果…………… | 242 |
| 第4表 | 真米田遺跡における珪藻分析結果…………… | 246 |
| 第5表 | 真米田遺跡の試料一覧…………… | 248 |
| 第6表 | 生漆の赤外吸収位置とその強度…………… | 248 |

| | | |
|------|--------------------------|---------|
| 第7表 | 陶磁器の時期別出土点数・内訳…………… | 260 |
| 第8表 | 絲軸陶器の産地別出土点数…………… | 260 |
| 第9表 | 七日市前遺跡における植物性炭体分析結果…………… | 321 |
| 第10表 | 七日市前遺跡における花粉分析結果…………… | 326 |
| | 遺物観察表…………… | 333～402 |

図 版 目 次

| | | |
|------|----------------|-----|
| 図版1 | 真米田遺跡の調査①…………… | 403 |
| 図版2 | 真米田遺跡の調査②…………… | 404 |
| 図版3 | 真米田遺跡の調査③…………… | 405 |
| 図版4 | 真米田遺跡の調査④…………… | 406 |
| 図版5 | 真米田遺跡の調査⑤…………… | 407 |
| 図版6 | 真米田遺跡の調査⑥…………… | 408 |
| 図版7 | 真米田遺跡の調査⑦…………… | 409 |
| 図版8 | 真米田遺跡の調査⑧…………… | 410 |
| 図版9 | 真米田遺跡の調査⑨…………… | 411 |
| 図版10 | 真米田遺跡の調査⑩…………… | 412 |
| 図版11 | 真米田遺跡の調査⑪…………… | 413 |
| 図版12 | 真米田遺跡の調査⑫…………… | 414 |
| 図版13 | SB出土遺物①…………… | 415 |
| 図版14 | SB出土遺物②…………… | 416 |
| 図版15 | SB出土遺物③…………… | 417 |
| 図版16 | SB出土遺物④…………… | 418 |
| 図版17 | SB出土遺物⑤…………… | 419 |
| 図版18 | SC出土遺物①…………… | 420 |
| 図版19 | SC出土遺物②…………… | 421 |
| 図版20 | SC出土遺物③…………… | 422 |
| 図版21 | SC出土遺物④…………… | 423 |
| 図版22 | SC出土遺物⑤…………… | 424 |
| 図版23 | SC出土遺物⑥…………… | 425 |

| | | |
|------|------------------------|-----|
| 図版24 | SC出土遺物⑦…………… | 426 |
| 図版25 | SC出土遺物⑧…………… | 427 |
| 図版26 | SC出土遺物⑨…………… | 428 |
| 図版27 | SC出土遺物⑩…………… | 429 |
| 図版28 | SC出土遺物⑪…………… | 430 |
| 図版29 | SB出土遺物…………… | 431 |
| 図版30 | SH・SK・P（ピット）出土遺物…………… | 432 |
| 図版31 | ピット（P）出土遺物…………… | 433 |
| 図版32 | 整地層・窪地出土遺物…………… | 434 |
| 図版33 | 窪地出土遺物…………… | 435 |
| 図版34 | 包含層出土遺物①…………… | 436 |
| 図版35 | 包含層出土遺物②…………… | 437 |
| 図版36 | 包含層出土遺物③…………… | 438 |
| 図版37 | 包含層出土遺物④…………… | 439 |
| 図版38 | 包含層出土遺物⑤…………… | 440 |
| 図版39 | 包含層出土遺物⑥…………… | 441 |
| 図版40 | 包含層出土遺物⑦…………… | 442 |
| 図版41 | 七日市前遺跡の調査①…………… | 443 |
| 図版42 | 七日市前遺跡の調査②…………… | 444 |
| 図版43 | 七日市前遺跡の調査③…………… | 445 |
| 図版44 | 古墳時代の遺構内・包含層出土遺物…………… | 446 |
| 図版45 | 古代～中世の遺構内出土遺物…………… | 447 |
| 図版46 | 古代～中世の遺構内・包含層出土遺物…………… | 448 |

第1章 序説

第1節 調査の経緯と経過

都城市高城町徳満坊地区および大井手地区において、都城市により企業誘致・雇用創出を目的とする工業団地の造成・整備が計画された。それに伴い、平成22年8月17日付けで都城市経営戦略課から対象地における文化財所在の有無について照会がなされた。対象地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」の枠外ではあったものの、総面積が徳満坊・大井手の両地区を合わせて約23haと広大なものであったため、平成22年9月8日、同年11月18日～12月10日の2回に分けて都城市教育委員会文化財課が試掘調査を実施した。

試掘調査は対象地において、基本的に2m×2mの大きさのトレンチを満遍なく設定した。遺構等を確認した際には、随時トレンチの拡張と追加トレンチを設定し、遺跡の有無の確認および遺跡の残存範囲の絞り込みに努めた。最終的に設定したトレンチの数は100箇所にとぼる。この試掘調査の結果、徳満坊地区では約10,900㎡の範囲で、大井手地区では約2,900㎡の範囲でそれぞれ遺跡が遺存していることが判明した。これらの遺跡残存範囲はその小字名からそれぞれ「真米田遺跡（徳満坊地区）」・「七日前遺跡（大井手地区）」として新規発見の遺跡として登録した。真米田遺跡は試掘での出土遺物から平安時代中期（9～10世紀）を中心とし、中世を若干含む遺跡であると考えられた。七日前遺跡は真米田遺跡同様に平安時代から中世にかけての遺跡であると思われる。このような試掘調査の結果を受け、当該地における開発に際しては埋蔵文化財保護のための協議が必要である旨の回答を行った。

その後、市文化財課は市経営戦略課と協議を行い、本工事により遺跡に影響があると考えられる範囲については記録保存のための発掘調査を実施することで合意し

た。その後さらに協議を重ねた結果、対象地が二地区に別れ、しかも対象面積が広大であることから、平成23年度に徳満坊地区の真米田遺跡の調査を、翌平成24年度に大井手地区の七日前遺跡の調査を実施し、平成25年度に両遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書を作成・刊行することで合意した。真米田遺跡の発掘調査は当初平成23年5月9日から平成24年3月31日までの予定であったが、予想以上の遺構・遺物量のため現場での調査期間を2週間延長し、平成24年4月13日まで実施した。尚、工業団地部分（A地区）の北側に隣接して農業用水の送水管を施設する予定であった範囲に関しても、宮崎県文化財課が試掘調査を行った結果遺跡が残っていることが判明したため、真米田遺跡B地区として事前に調査を実施している。現場での発掘調査と並行して、現場事務所および市文化財課において出土遺物の水洗・注記作業を行った。

七日前遺跡の調査は平成24年4月9日から市道部分であるB地区の調査に入り、真米田遺跡の調査が終了次第、工業団地部分のA地区の調査に着手した。七日前遺跡の調査は同年9月21日まで行った。それに並行して出土遺物の水洗・注記・接合作業を発掘調査現場事務所および都城市文化財課で行った。

また、真米田遺跡の発掘調査を実施していた平成24年1月26・27日には宮崎県立都城工業高校の生徒240名に対し遺跡見学会を実施した。つづいて平成24年3月18日には一般市民を対象に遺跡見学会を実施し、市内外より約80名の方々の参加を得た。さらに、平成24年9月30日には七日前遺跡の遺跡見学会を行い、こちらも当日は激しい雨に見舞われたにもかかわらず約40名の市民の方々の参加をいただいた。

平成25年度は前年度に引き続き出土遺物の接合・復元・実測等の整理作業および遺構図の整理を行い、その後発掘調査報告書の執筆・編集を行った。



遺跡見学会の様子（左：真米田遺跡 右：七日前遺跡）

第2節 調査組織

平成23年度の組織（真米田遺跡発掘調査実施年度）

| | | | |
|--------|----------------------------|--------|--------|
| 調査主体者 | 宮崎県都城市教育委員会 | 文化財課嘱託 | 下田代 清海 |
| 調査責任者 | 教育長 酒匂 醸以 | | |
| 調査事務局長 | 教育部長 日高 裕文 | | |
| 文化財課長 | 坂元 昭夫 | | |
| 文化財副課長 | 山下 進一郎 | | |
| 文化財課主幹 | 松下 述之 | | |
| | 〃 桑畑 光博 | | |
| 調査担当者 | 文化財課主査 山下 大輔 | | |
| | (A地区：A～G 6区以东、B地区担当) | | |
| | 〃 加賀 淳一 | | |
| | (平成23年10月～、A地区：A～G 5区以西担当) | | |
| 文化財課嘱託 | 下田代 清海 | | |
| | (平成24年1月～) | | |
| | 〃 外山 亜紀子 | | |
| | 〃 岸田 裕一 | | |
| | (平成23年6月～) | | |

調査指導者 山本信夫（早稲田大学）

| | |
|---------|---|
| 発掘調査従事者 | 今村まさ子、今村ミツ子、内村好子、榎木ハナ、大盛祐子、奥 利治、小山田福子、土坂春雄、上西政実、木上 保、黒木トミ子、坂口米藏、塩屋貴士、下津佐ミエ子、庄司紀子、高尾和子、高橋露子、武石重利、竹中美代子、谷口清二、黒葛原忠夫、津曲節子、中原忠珍、抜迫清美、原田 貢、東 春雄、広畑雄二、平川洋子、馬龍恵子、満木テル子、宮田エイ子、森山タツ子、吉盛五恵子、脇田節子、渡司裕美子 |
| 整理作業従事者 | 内村ゆかり、奥 登根子、尾曲真貴、川野栄子、児玉信子、水光弘子、園田孝子、福藪泰子、榎尾恵美子、新徳より子、免田友香理、矢上由香利、山下美香 |

平成24年度の組織（七日市前遺跡発掘調査実施年度）

| | |
|--------|--------------|
| 調査主体者 | 宮崎県都城市教育委員会 |
| 調査責任者 | 教育長 酒匂 醸以 |
| 調査事務局長 | 教育部長 池田 文明 |
| 文化財課長 | 新宮 高弘 |
| 文化財副課長 | 松下 述之 |
| 文化財課主幹 | 桑畑 光博 |
| | (表土剥ぎ担当) |
| 調査担当者 | 文化財課主査 近沢 恒典 |

| | |
|--|--------------------|
| | (B地区担当) |
| | 〃 山下 大輔 |
| | (A地区担当) |
| | 〃 早瀬 航 |
| | (平成24年5月～、A・B地区担当) |

調査指導者 網田龍生（熊本市）

| | |
|---------|---|
| 発掘調査従事者 | 今村まさ子、今村ミツ子、内村好子、榎木ハナ、大盛祐子、奥 利治、小山田福子、土坂春雄、上西政実、木上 保、黒木トミ子、坂口米藏、塩屋貴士、下津佐ミエ子、庄司紀子、高尾和子、高橋露子、武石重利、竹中美代子、谷口清二、黒葛原忠夫、津曲節子、中原忠珍、抜迫清美、原田 貢、東 春雄、広畑雄二、平川洋子、馬龍恵子、満木テル子、宮田エイ子、森山タツ子、吉盛五恵子、脇田節子、渡司裕美子 |
|---------|---|

| | |
|---------|--|
| 整理作業従事者 | 内村ゆかり、奥 登根子、尾曲真貴、川野栄子、児玉信子、水光弘子、園田孝子、福藪泰子、榎尾恵美子、新徳より子、免田友香理、矢上由香利、山下美香 |
|---------|--|

平成25年度の組織（発掘調査報告書発行年度）

| | |
|-------|---------------|
| 調査主体者 | 宮崎県都城市教育委員会 |
| 調査責任者 | 教育長 酒匂 醸以 |
| | (平成26年2月24日) |
| | 〃 黒木 哲徳 |
| | (平成26年2月25日～) |

| | |
|-------|---------------|
| 調査事務局 | 教育部長 池田 文明 |
| | 文化財課長 新宮 高弘 |
| | 文化財副課長 松下 述之 |
| | 文化財課主幹 桑畑 光博 |
| 調査担当者 | 文化財課主査 山下 大輔 |
| | 文化財課嘱託 下田代 清海 |
| | 〃 早瀬 航 |
| | 〃 谷口 めぐみ |

調査指導者 山本信夫（早稲田大学）

| | |
|---------|--|
| 整理作業従事者 | 内村ゆかり、奥 登根子、尾曲真貴、川野栄子、児玉信子、水光弘子、園田孝子、福藪泰子、榎尾恵美子、新徳より子、免田友香理、矢上由香利、山下美香 |
|---------|--|

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回発掘調査の対象となった真米田遺跡は都城市高城町穂塚浜に、七日市前遺跡は同大井手に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央部を占める。平成18年1月1日に高崎町、高城町、山田町、山之口町の北諸県郡4町との合併により新都城府が誕生した。この合併に伴い現在人口は約17万人を数え、市域は約650k㎡に及ぶ。人口規模では南九州第3の都市となっている。

都城市が位置する都城盆地は、南北約25km、東西約15kmの楕円状を呈している。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鶴塚山・柳島を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみわずかに開かれた地勢を呈する。真米田遺跡・七日市前遺跡は市の東部、高城地区（旧北諸県郡高城町）に位置し、市域を南北に流れる一級河川大淀川とその支流である東岳川により形成された氾濫原に所在する。両遺跡の北側には、宮崎県指定史跡高城町古墳群が所在するシラス台地が広がる。このシラス台地は、さらに東に位置する鶴塚山から延びる山地に接し、標高は160～180m程で、真米田・七日市前両遺跡が立地する氾濫原との比高差は20～45mを測る。

両遺跡の周辺は、戦前から現代にいたるまで、数次にわたり耕地整備が行われた水田地帯であるが、県立高城高校・市立高城小学校・中学校や市役所総合支所（旧高城町役場）が隣接して所在しており、高城地区の中心地といえる場所でもある。

第2節 歴史的環境

真米田遺跡・七日市前遺跡が所在する高城地区（旧北諸県郡高城町）では、旧高城町教育委員会により数多くの発掘調査が実施されている。平成18年の合併以後、旧高城町域で本発掘調査が実施されたのは真米田遺跡が三例目となる。合併以前には旧高城町教育委員会により数多くの遺跡が調査されており、ここでは、主に旧高城町域において実施された発掘調査の成果を参考にして、本遺跡を取り巻く歴史的環境について触れてみたい。高城地区において確認されている最も古い遺跡としては、雀ヶ野第3遺跡が挙げられる。本遺跡では旧石器時代末時代から縄文時代草創期の細石刃・細石核・有否尖頭器が出土している。

縄文時代も早期以降になると確認・調査されている遺

跡が格段に増えてくる。真米田・七日市前遺跡の北3kmには市来式土器、孔列土器、刻目変型土器など後・晩期の遺物が出土した城ヶ尾遺跡が位置する。さらに旧高城町域の北部、有水地区の山地帯では、上述の雀ヶ野第3遺跡や榊井地区遺跡群、高々重遺跡、田辺開拓第2遺跡等、数多くの縄文時代の遺跡が調査・報告されている。

榊井地区遺跡群の山城第1遺跡第3次調査では、縄文時代の竪穴住居跡5軒、土坑8基、集石遺構6基が検出されている。竪穴住居跡は第1・2次調査を合わせるると合計59軒が確認されている。これらの竪穴住居跡の帰属時期は、出土石器型式から後期前葉指形器期、後期中葉草野式・市来式期、後期後葉黒色磨研土器期の3グループに分けられる。さらに第3次調査では市来式期の石剣が出土している。同じ榊井地区の上原第1遺跡では、円形を呈する後期の竪穴住居跡8軒が検出されており、市来式や丸尾式土器が出土している。上原第2遺跡でも後期中葉の竪穴住居跡1軒、後・晩期の遺物が検出されている。

近年調査された田辺開拓第2遺跡では、調査面積は狭小なトレンチ調査であったにもかかわらず、縄文時代の竪穴住居跡と考えられる遺構が4基をはじめ、この時期の宮之迫式、市来式土器等が大量に出土している。

縄文時代の遺跡に比べ、弥生時代の遺跡は多くない。この時代の遺跡としては、上述の城ヶ尾遺跡が挙げられる。城ヶ尾遺跡では、後期の住居跡が3軒検出されたのはをはじめ、包含層からは重弧文を有する器台が出土している。

先述のとおり、真米田・七日市前両遺跡の北側に位置するシラス台地上には県指定史跡高城町古墳群13基および未指定内墳1基が展開している。古墳自体の調査は試掘以外にはなされていないが、周辺では地下式横穴墓および箱式石槨墓が多数検出されている。また、高城町古墳群がある台地からは北へ約5～6kmの有水川周辺では古墳時代中期前半にあたる高取原地下式横穴墓、地下式板石積石室や地下式横穴墓が検出された奇神寺遺跡が確認されている。この他にも大淀川対岸でも志和池古墳群や築池地下式横穴墓群など多くの古墳・地下式横穴墓が確認・調査されている。

上述の榊井地区に所在する上原遺跡群や山城第1遺跡では、古墳時代中期の住居跡群が検出されている。高城町を含む都城盆地では、先述のように多くの高城時代地下式横穴墓が調査されているが、それ以外でであろう集落跡の調査例は決して多くない。その意味では集落跡の調査が実施された榊井地区遺跡群の調査成果は貴重な事

例といえる。

奈良・平安時代の遺跡の調査例は多くないが、城ヶ尾遺跡では古代の遺構・遺物が出土している。遺構は2×2+α間の掘立柱建物跡1棟が検出され、その他土師器・須恵器・製土器などの遺物が出土している。先述の山城第1遺跡第3次調査においても、掘立柱建物跡1基が検出されており、柱穴への一括廃棄と考えられる土器集積遺構が確認されている。また、同じ細井地区では、上原第2遺跡において古代の土坑4基と包含層から土師器や須恵器が出土している。

古代～中世にかけての遺跡としては、両遺跡の北側の台地上にある赤山原遺跡が挙げられる。ここでは、掘立柱建物跡や溝状遺構等が検出されている。また、平成15年度の牧ノ原遺跡群の調査では、古墳時代の遺構・遺物に加え、中世の掘立柱建物跡15棟をはじめ土坑や溝状遺構などが検出されている。さらに同台地の南端には、中世城郭である高城城址（月山日和城）が城域を形成している。

以上、旧高城町域の遺跡について概観してきた。次に、今回報告する真米田遺跡は、9～10世紀代を中心とする平安時代の遺跡であるため、この時代の遺跡については高城地区以外の遺跡にも若干触れておきたい。

まず真米田遺跡から南西へ3km程のところには、平安時代の道路状遺構が検出された並木源遺跡が位置する。ここで幅2～2.3m、全長420mにわたって北東-南西方向に走行する道路と考えられる硬化面がみついている。幅員は最大でも6m程で、側溝を備えるとされる官道に比べると貧弱な印象がある。しかし、平安時代の後期官道は奈良時代の前期官道に比べれば規模が縮小されるといわれおり、これが官道である可能性は十分に考えられよう。

さらに、並木源遺跡から南西に3km程のところには国指定史跡大島畠田遺跡が所在する。本遺跡は、孫廂を有する総面積290㎡にもおよぶ大型建物、池状遺構、四脚門などが検出され、在地有力者の居宅跡と考えられている。遺跡の帰属時期も9世紀第2四半期から10世紀前半と真米田遺跡とほぼ同時期の遺跡とされる。出土遺物も大量の緑釉陶器・越州窯系青磁が出土しており、これも真米田遺跡と共通する部分が多い。

大島畠田遺跡や真米田遺跡が帰属するであろう9世紀中頃から10世紀前半は、都城盆地で遺跡が急増する時期といえる。この時期の遺跡は市内のほぼ全域で見つかっているが、特に横市川流域での遺跡密度の高さは特筆される。その中でも、西面側の建物跡が検出された馬渡遺跡が目目される。本遺跡では、石製鉾具、「財」あ

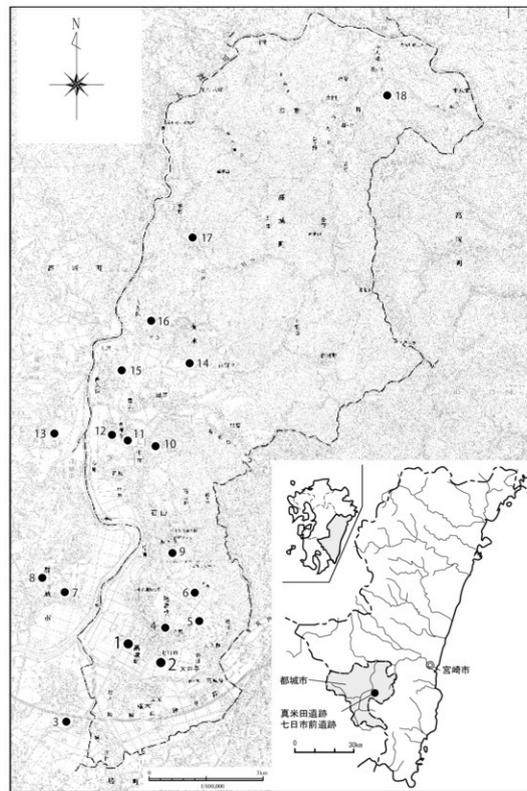
るいは「長」?と書かれた墨書土器なども出土していることなどから郷長クラスの下級役人の居宅跡と推定されている。

この馬渡遺跡が所在する横市川流域は、都城盆地の中心部に想定されている島津駅から現在の鹿児島県島市国分市に所在したとされる大隅国府に至る官道沿いである可能性が指摘されている。その中で、横市遺跡群の一つである平田遺跡では、側溝と考えられる溝が併走し、中間部に硬化面を有す遺構がみつかり、道路状遺構の可能性が指摘されている。官道のルートを考える上で示唆的であり重要である。

この他にも横市川流域を含めた市城南西部を中心に、当該時期の遺跡が多数確認・調査されている。このような調査事例の蓄積により、都城盆地全体での遺跡の動態についても言及が可能になってきている。今後さらなる資料の蓄積により、上述のような官道のルートや盆地内に存在したとされる島津駅・水伏駅の推定地のさらなる絞り込みも可能となつてこよう。今後さらなる調査事例の増加とともにそれらを総合的に吟味した上での堅実な検討が必要といえる。

【参考文献】

- 栗畑光博 2009『島津荘は無主の荒野に成立したのか』『南九州文化』第109号 南九州文化研究会
- 高城町 1989『高城町史』
- 高城町教育委員会 1989『城ヶ尾遺跡』高城町文化財調査報告書 第1集
- 高城町教育委員会 2004『細井地区遺跡群』高城町文化財調査報告書 第14集
- 高城町教育委員会 2005『雀ヶ野遺跡群』高城町文化財調査報告書 第18集
- 高城町教育委員会 2005『牧ノ原遺跡群』高城町文化財調査報告書 第20集
- 都城市 2006『都城市史 資料編 考古』
- 都城市教育委員会 2004『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書 第67集
- 都城市教育委員会 2008『平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書 第87集
- 都城市教育委員会 2009『高八重遺跡』都城市文化財調査報告書 第90集
- 都城市教育委員会 2012『国指定10周年記念シンポジウム大島畠田遺跡の時代を語る—島津氏成立以前の都城盆地の動向—』
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『大島畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第178集



- | | | | | |
|-------------|---------------|-----------------------|---------------|-----------|
| 1: 真米田遺跡 | 2: 七日市前遺跡 | 3: 並木源遺跡 | 4: 月山日和城址 | 5: 牧ノ原遺跡群 |
| 6: 赤山原遺跡 | 7: 平原地下式構六墓群 | 8: 築池地下式構六墓群 (志和池古墳群) | 9: 城ヶ尾遺跡 | |
| 10: 島井原第2遺跡 | 11: 高取原地下式構六墓 | 12: 香禰寺遺跡 | 13: 横尾地下式構六墓群 | 14: 高八重遺跡 |
| 15: 上原遺跡群 | 16: 山城第1遺跡 | 17: 田辺開拓第2遺跡 | 18: 雀ヶ野遺跡 | |

第1図 遺跡位置図 (S=100,000)

第3章 真米田遺跡の調査

第1節 調査の方法と概要

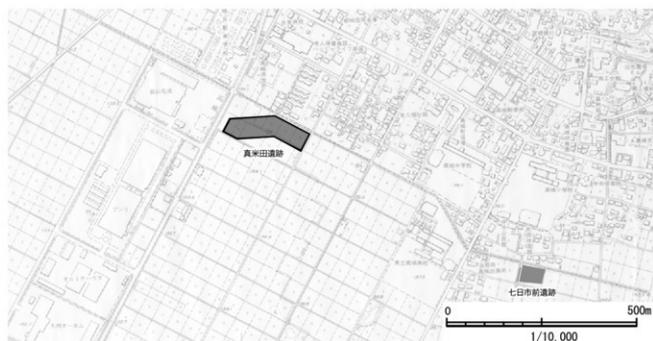
調査対象地は都城市高城町徳満坊地区、国道10号線沿いに位置し、調査前は水田であった。工事計画によれば、現地形に切り土および盛り土を行い、工業団地を造成するというものであった。そこで事前の試掘調査により遺跡が遺存している範囲である約10,900㎡について発掘調査を実施した。

調査区は南北に約50m、東西に約210mのいびつなへの形状を呈する。調査区の西には大淀川が、南にはその支流である東岳川が流れており、当遺跡は両河川により形成された氾濫原に位置する。標高は調査区の北東部が高く、そこから西に向かうにつれ緩やかに下っていく。このような地形面を平坦に造成して水田を造成していることから、標高の高い北東部分は表土直下で遺構検出面となる範囲が広く、遺物包含層は既に大きく削平ないしは流失したものと考えられた。標高が低くなる調査区中央から西・南側にかけては平安時代～中世相当の包含層が遺存する範囲が広がる。なお、調査区の設定にあたっては、公共座標軸系のSN座標線に一致した10×10mを1区画とし、東西方向を西から1、2、3…の順に算用数字で、南北方向を北からA、B、Cの順にアルファベットで表記した。この組み合わせで区名を付けた。

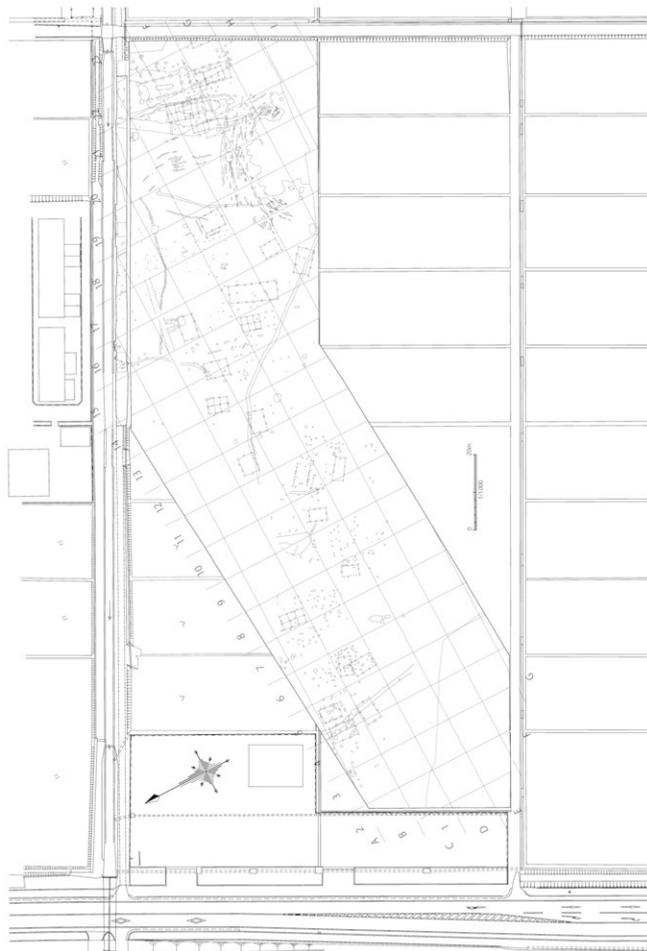
発掘調査はまず重機による表土剥ぎを行った。事前を実施した確認調査では、現在の水田面である表土層の直下で遺構検出面ないしは遺物包含層であったため、表土のみを重機により剥ぎ取った。それ以下は人力で掘り下

げ、基本土層のⅦ層上面での遺構検出を試みたが、一部包含層が厚く遺存する範囲では、基本土層のⅥ層上面ないしはⅤ層中で検出した遺構もある。その結果、大型掘立柱建物跡(SB7)をはじめとする掘立柱建物跡および柵列を合計28棟、楕円形周溝墓1基、土師器焼成土坑や井戸跡を含む土坑を71基、溝状遺構13条、ピットを650基程検出した。これらの遺構の中には、出土遺物から中世期のものと考えられる遺構もわずかに含まれるが、その大部分は平安時代(9世紀～10世紀代)に帰属するものといえる。この中で、土師器焼成土坑の検出は都城市内の遺跡では初例となる。また、径が1mを超える柱穴を有す大型掘立柱建物跡も検出されており、水俣駅や郡家別院等の公的施設の一部、あるいは在地有力者の邸宅など一般的な建物とは異なる位置づけが可能と考えられる。

遺物については実にコンテナケースで400箱程の大量の遺物が出土している。その多くは坏・椀等の土師器が大多数を占めるが、須恵器・貿易陶磁器・国産陶器類もその出土量は南九州の遺跡では随一といえる量が出土している。その中には、先述の土師器焼成土坑より出土した資料や掘立柱建物跡の柱穴からほぼ完全な形で出土した資料も含まれており、在地の土師器編年を構築する上で重要な資料といえる。また、都城市内の遺跡では初例となる風字硯が出土している。これ以外にも須恵器坏・甕などを再利用した転用硯も複数出土しており、これらの資料も当遺跡が何らかの公的施設に関連する遺跡であることを示す資料として重要といえる。



第2図 調査区位置図(S=1/10,000)



第3図 調査区域図(S=1/1,000)

第2節 遺跡の層序

本遺跡は大淀川・東岳川により形成された氾濫原に位置しており、通常都城盆地内で見られるような御池軽石やアカホヤ火山灰といったテフラは、一部二次堆積として確認できる箇所以外では認められない。標高的には北東部から河川の位置する南西に向けて緩やかに低くなる。基本土層の仮定にあたっては、確認調査で確認できていた層順を基準とした。一部自然地形の落ち込み範囲等では基本土層以外の層や、洪水等の水性作用による二次的な堆積もみられた。本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

- I層：褐灰色粘質土
- II層：褐灰色砂質土（小石・白色軽石多く含む）
＝水田基盤層
- III層：黄褐色砂質土（白色軽石多く含む）＝水田基盤層
- IV層：白色軽石＝碓島文明軽石
- V層：灰黄褐色砂質シルト土
- VI層：黒褐色粘質シルト土
- VIb層：黒色粘質シルト土
- VII層：黄褐色粘質土

I層は表土層で、現在の水田層である。確認調査時には近・現代の遺物が若干出土している。

II層は水田の基盤層と考えられるもので、小石や文明軽石と認められる白色軽石を多く含む層である。水田耕作の際に下層から持ち上げられたためか、古代・中世相当の遺物も出土している。硬くしめる。

III層もII層と同様の水田基盤層である。白色軽石を多く含む硬くしめる。やはり耕作時に持ち上げられたためか、古代・中世相当の遺物がわずかに出土している。II層とは色調・含有物がことなるため別したが、両者ともに現代の水田基盤層であると考えられる。

IV層は碓島文明軽石と考えられる層である。今回の調査区域では確認されていないが、確認調査時にはいくつかのトレンチにおいてブロック状に検出されたため、本調査時にも基本土層として設定した。上述のように、より上層のII・III層や洪水堆積層中に確認できる。

V層は灰黄褐色を示す砂質の強い層で、平安時代相当の遺物包含層である。本遺跡では、表土層である現在の水田面および基盤層の直下であり、一部標高の高い範囲では既に削平ないしは流失しており、全く遺存していない範囲もある。V層を埋土とする遺構はほとんどないが、埋土の最上層にブロック状に堆積している遺構は確

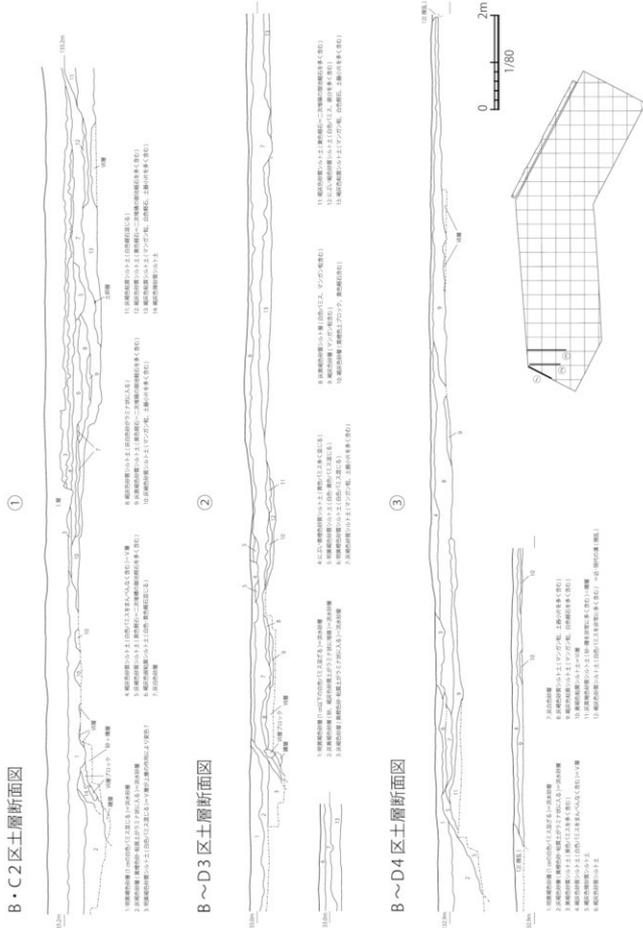
認できた。わずかではあるが中世期の遺物も出土していることから、中世期も一部含む遺物包含層であるといえる。

VI層は、V層の色調よりも黒色味が強くなり、粘性が強い層である。やはり平安期の遺物包含層と考えられる。V層と同様に、標高の高い調査区北東部においては、既に削平ないしは流失している範囲もみられた。遺物の取り上げ時には、V層・VI層の別を意識していたが、これらの層を乾燥すると見た目には区別が付きにくくなることもあり、出土遺物を完全には分離できていない。ただし、V・VI層を合わせても平安時代中期から中世期にほぼ限定できる遺物のみが出土しており、それより古い時代、新しい時代については自然流路・表土層以外からの出土はほぼ皆無といえる。

VI層よりさらにも黒色味・粘性が強いものをVIb層としてVI層と区別した。VIb層は調査区全体において確認できたものではなく、窪地状の地形や標高が低く、V・VI層共に厚く堆積していた箇所を確認できたものである。遺物も出土しているが、時間的にはV・VI層と大きな差はない。これらV～VIb層までが平安時代から中世までの遺物包含層といえるが、調査区の東部・西部では色調・質感が異なる場合が認められる。特に調査区南西部の標高の低い箇所では、洪水等の影響を受けやすかったためか、全体的に鉄分を多く含む色調も橙色を帯びていた。また、本来は砂質の強いV層も粘性を帯び、VI層との区別が困難な状況であった。

VII層は黄褐色粘質土の層である。遺物は全く含まない山層である。遺構の大部分はこの層の上面で検出している。VII層も地点によってその質感・色調が異なるが、大きく分けてより粘性の強い層と砂質が強く細かなシルト質の二種類がみられるが同一の層である。このVII層の下部には洪水堆積による硬層があり、調査区の一部では表土直下にこの硬層が露出している範囲も広く認められた。

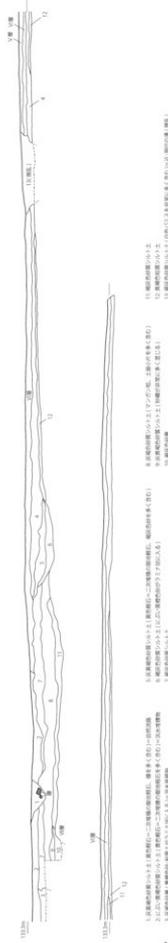
上述のI～VIIの基本土層以外にも洪水堆積層や窪地状の落ち込みのみにもみられる層などが確認されている。また、14区以西では奉・人頭大の礎が堆積する自然流路（旧河道）がみられた。トレンチによる断面調査のみであったが、流路の最下層ではローリングを受けて磨耗した平安時代相当の遺物が、最上層からは現代のガラス瓶の破片が出土しており、当時から比較的最近まで継続的に流路としての機能を有していたものと考えられる。ほとんどが未掘のため推論の域を出ないが、集落と大淀川等の大きな河川とをつなぐ河道であった可能性も考えられる。



第4図 調査区土層断面図①(S=1/80)

A～E 5区土層断面図

④



第5図 調査区土層断面図② (S=1/80)

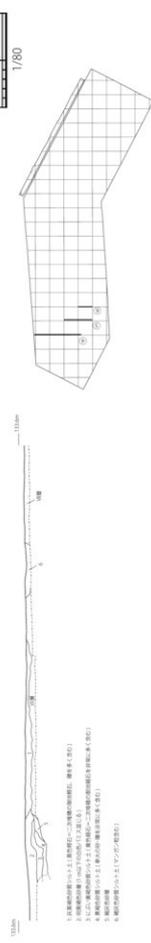
D・E 6区土層断面図

⑤



E 7区土層断面図

⑥



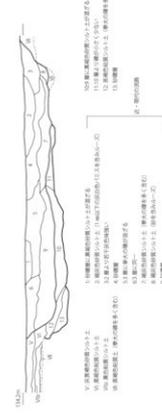
C・D10区土層断面図

⑦



B・C11区土層断面図

⑧



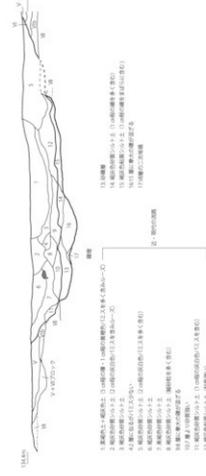
C・D12区土層断面図

⑨



D・E13区土層断面図

⑩



第6図 調査区土層断面図③ (S=1/80)

第3節 平安時代～中世の遺構と遺物

本遺跡の遺構の多くが平安時代（9世紀～10世紀代）の所産であると判断できる。しかし、少量ではあるが平安時代末から中世初頭に属すると考えられる遺物も出土しているため、遺物が出土していない遺構については、中世の所産である可能性も否定できない。そのため、ここでは平安時代から中世にかけての遺構と遺物として報告する。遺構内から遺物が出土しており、帰属時期がわかるものについてはその都度言及することとした。

この時期の遺構としては、掘立柱建物跡・柵列が28棟、土師器焼成土坑や井戸跡と考えられるものも含め土坑としたものが71基、槽形円周溝墓1基、溝状遺構13条、ピット類を650基程確認している。以下、それぞれの遺構および出土遺物について報告する。

1 掘立柱建物跡・柵列 (SB)

今回の調査では掘立柱建物跡27棟と柵列と考えられるピット列1基を検出している。これらの建物跡は主軸方向でみると南北方向が18棟、東西方向が9棟と圧倒的に南北方向が多い。平面プランでは3間×2間のものが23棟と大部分を占め、残りが5間×2間が2棟、6間×2間と3間×1間がそれぞれ1棟づつ、柵列が1基となる。

SB1 (第16図)

G・H20区で検出しており、桁行3間(6.24m)、梁行2間(4.04m)で総面積は25.21㎡を測る。柱間距離は桁行平均2.08m、梁行平均2.02mとなる。検出面からの柱穴の深さは5～35cmである。主軸はN-10°-Eにとる。ピットの掘り形は径20cm前後の円形を基本とし、柱痕跡は認められなかった。柱穴のいくつかは重複するSD4の埋土を掘り下げた後に検出しているが、P2はSD4を切る形で検出していることから、本来はSD4を切っているものと考えられる。

遺物はP9から須恵器甕(1)と縦型把手の滑石製石鍋(2)が出土している。その他にも図化し得なかったが土師器坏や碗が出土している。

SB2 (第16図)

E18区で検出しており、桁行3間(5.64m)、梁行2間(4.56m)、総面積25.72㎡を測る。柱間距離は桁行平均1.88m、梁行平均2.28mとなる。柱穴の検出面からの深さは46～56cmとなる。主軸はN-0.5°-Wにとる。ピットの掘り形は、径50cm程の円形ないしは不整形なものである。確実に柱痕跡と考えられるものは確認できていない。建物の北側と西側には軸に沿って浅い溝状遺

構(SD9・10)を検出した。検出位置からSB2に伴う雨落ち溝であるものと考えられる。

P4からは須恵器壺の高台部(3)が出土しており、P5からは砂岩製の砥石(4)が出土した。

SB3 (第17図)

F20・21区で検出しており、一部ピットを検出できていない箇所もあるが、桁行3間(6.08m)、梁行(4.12m)であるものと考えられる。柱間距離は桁行平均2.03m、梁行平均2.06mとなる。総面積は25.04㎡を測る。柱穴の検出面からの深さは、3～40cmを測る。主軸はN-79°-Wにとる。ピットの掘り形は径40cm前後の円形である。SD4を切り、SX1に切られるものと考えられる。SD4との前後関係については、P4は確実にSD4の埋土層で検出していることからSB3の方が新しいといえる。SX1との関係は、SX1の埋土を掘り下げた後にSB3を検出したことから、SB3の方が古いものと判断した。SX1に切られるため北東部のピット2箇所は既に削平されたものと考えられる。

遺物は土師器の薄片がわずかに出土しているが、いずれも図化し得なかった。

SB4 (第17図)

F17区で検出しており、桁行3間(4.85m)、梁行2間(3.6m)で総面積は17.46㎡を測る。柱間距離は桁行平均1.61m、梁行平均1.8mとなる。柱穴の検出面からの深さは、45～65cmを測る。主軸はN-1°-Wにとる。ピットの掘り形は径30cm前後の円形を呈す。確実に柱痕跡といえるものは検出できていない。

図化できる遺物は出土していない。

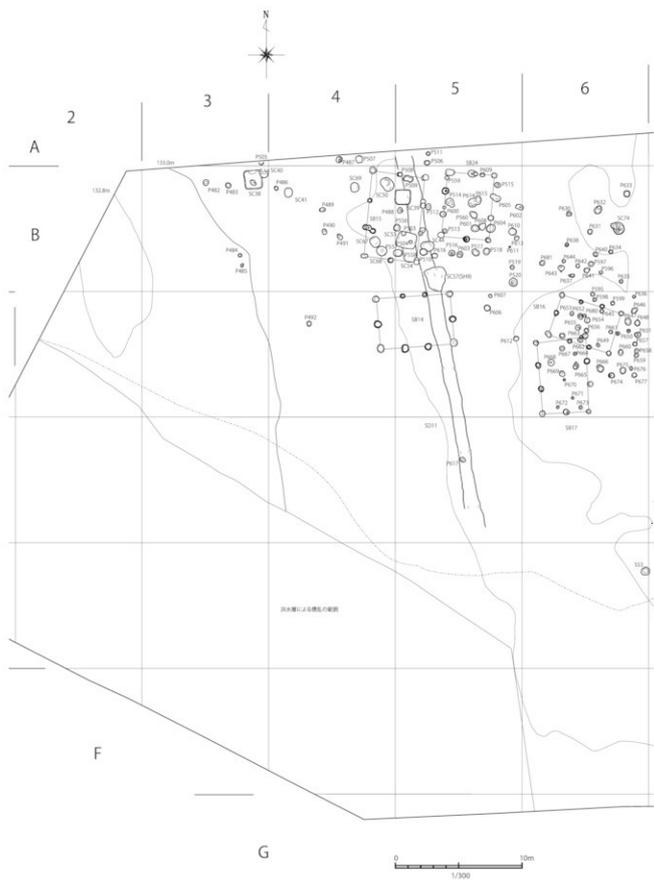
SB5 (第17図)

F21区で検出しており、一部の柱穴を検出できていないが、桁行3間(5.82m)、梁行2間(4.06m)になるものと考えられる。柱間距離は桁行平均1.94m、梁行平均2.03mとなる。総面積は23.63㎡を測る。柱穴の検出面からの深さは、最深でも16cmと浅く、最も浅いものでは3cmを測るのみである。主軸はN-8°-Eにとる。ピットの掘り形は20～30cm程の槽形を呈すものが多い。SB3同様にSX1を掘り下げた後に検出していることから、SX1に切られるものと考えられる。基本土層のV層を埋土とするSD3には切られる。いずれにせよ柱穴が浅く、その大部分は既に大きく削平されているものと推測される。

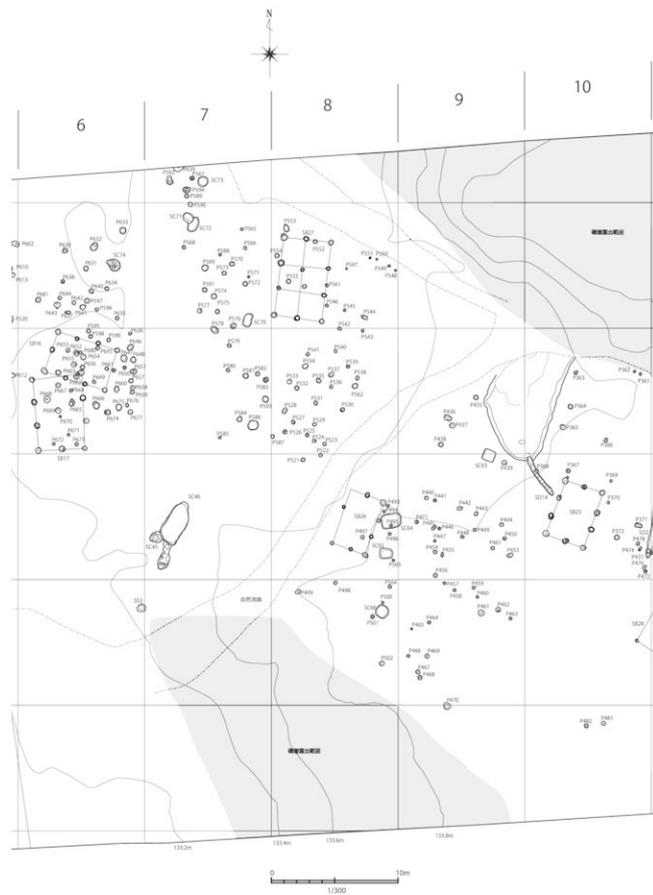
遺物は土師器の小破片が出土しているが、いずれも図化し得なかった。

SB6 (第25図)

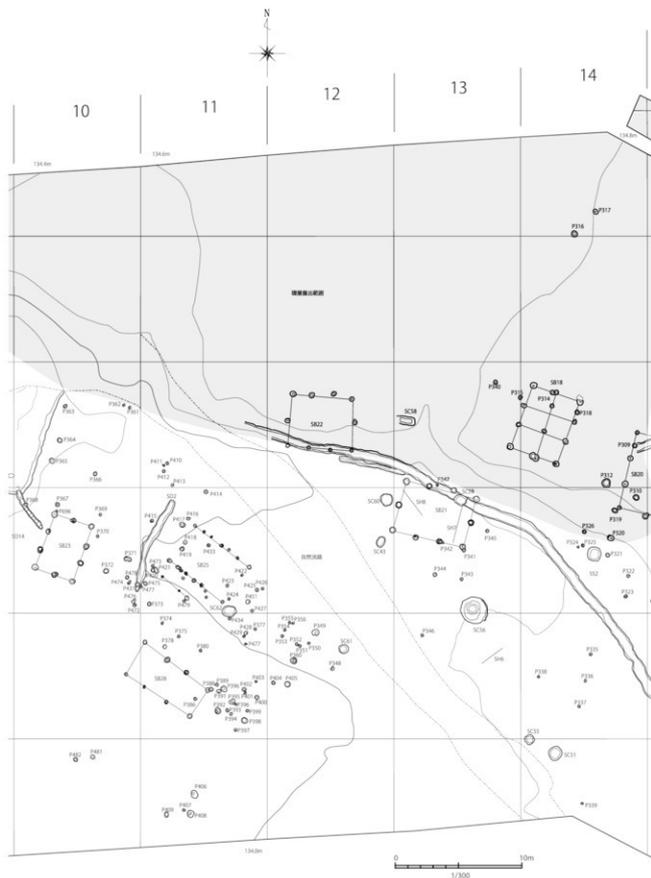
E・F21区で検出しており、一部SX1aと重複する部分



第 11 図 1～6 区遺構配置図 (S=1/300)



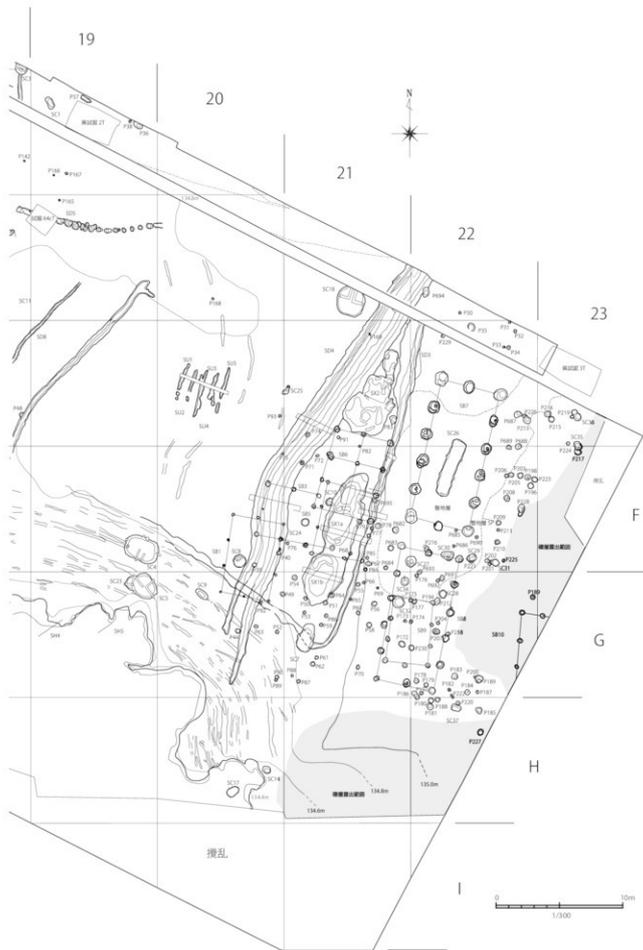
第 12 図 6～10 区遺構配置図 (S=1/300)



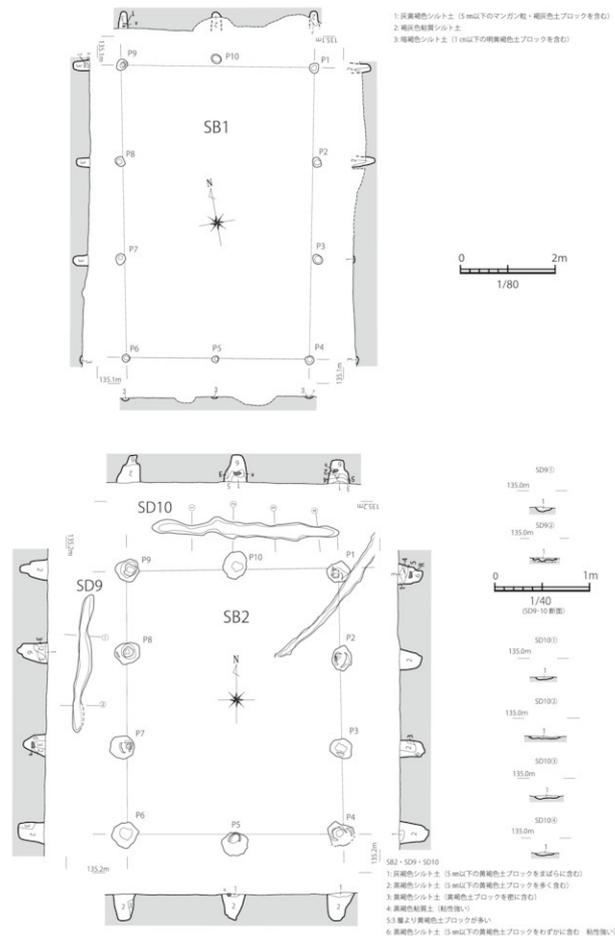
第 13 图 10 ~ 14 区遺構配置図 (S=1/300)



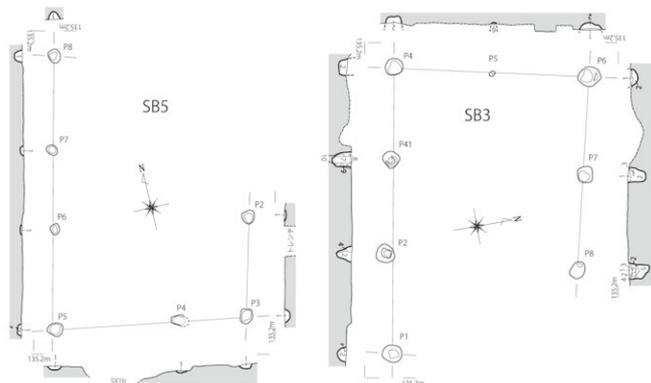
第 14 图 14 ~ 18 区遺構配置図 (S=1/300)



第15図 19～23区遺構配置図 (S=1/300)

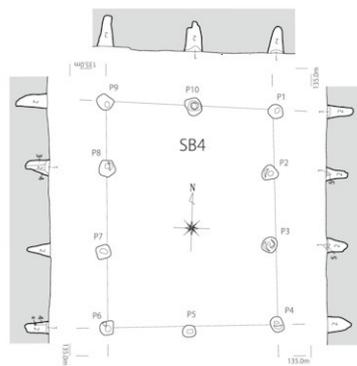


第16図 SB1・2実測図 (S=1/80)



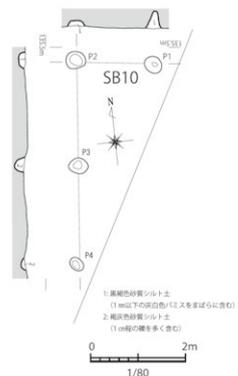
1. 灰黄褐色シルト土 (5.0m以下の黄褐色土・黄褐色土ブロックを多く含む)

1. 黄褐色シルト土
2. 黄褐色粘質シルト土 (5.0m以下の黄褐色土のブロックをわずかに含む)
3. 黄褐色ブロック
4. 黄褐色シルト土 (2.0m以下の黄褐色土・黄褐色土ブロックを多く含む)
5. 黄褐色粘質シルト土 (マンガン酸鉄を多く含む)
6. 黄褐色シルト土 (マンガン酸鉄を多く含む)
7. 黄褐色粘質シルト土 (粘質層あり)
8. 黄褐色粘質シルト土 (黄褐色土ブロックをまばらに含む)
9. 黄褐色粘質シルト土 (黄褐色土ブロックを多く含む)
10. 7層より粘性が強い



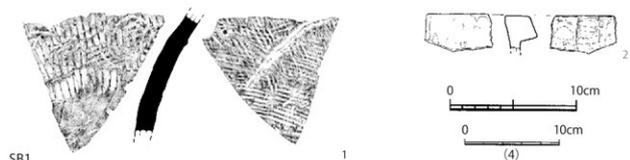
1. 灰黄褐色シルト土 (5.0m以下の黄褐色土ブロックを多く含む)
2. 黄褐色シルト土 (5.0m以下の黄褐色土ブロックをわずかに含む粘質層あり)
3. 黄褐色シルト土 (5.0m以下の黄褐色土ブロックを多く含む)
4. 黄褐色シルト土 (粘質層あり)
5. 灰黄褐色シルト土 (5.0m以下の黄褐色土ブロック・黄土・炭化材料をわずかに含む)

第17図 SB3・4・5・10実測図 (S=1/80)

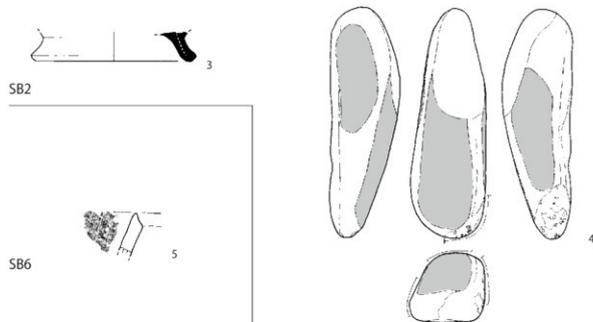


1. 黄褐色粘質シルト土 (1.0m以下の灰白色土(Fe土をまばらに含む)
2. 黄褐色粘質シルト土 (1.0m以下の黄褐色土を多く含む)

0 1 2m
1/80



SB1



SB2

SB6

第18図 SB1・2・6出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

のピットを検出できていないが、桁行3間(6.42m)、梁行2間(4.36m)の総柱建物になると考えられる。柱間距離は桁行平均2.14m、梁行平均2.18mとなる。総面積は28㎡を測る。主軸はN-14°-Eにとる。ピットの掘り形は円形ないしは不整形を呈し、径は最大68cmから最小で30cm程と幅がある。検出面からの深さも16~67cmと幅がみられる。SX1aを精査した際には柱穴を検出できていないため、本建物跡の柱穴の一部はSX1aに切られるものと考えられる。建物東側の柱穴列はSB3に切られる。

5はP7から出土した製塩土器である。その他にも土師器等が出土しているが小破片のため図化し得なかった。

SB7(第19図)

E・F22で検出した大型掘立柱建物跡である。桁行5間(11.3m)、梁行2間(4.96m)で、総面積は56.05㎡を測る。廂はもたない。柱間距離は桁行平均2.26m、梁行2.48mとなる。主軸はN-12.5°-Eにとる。表土直下で検出しており、柱穴の検出面からの深さは深いもので1m、最も浅いもので35cmを測る。柱穴の掘り形は

最大で1.2m程、最小のものでも80cm程を測る。平面プランは円形ないしは楕円形を呈す。柱穴の検出の際に段掘りをして柱痕跡の確認を行ったが、平面的には明確な痕跡は捉えきれなかった。しかし、断面で確認するとP3やP5のように柱痕跡と考えられるものが確認できるものがある。P3には掘り形底面に柱のあたりと考えられる浅い窪みがあり、断面にも柱痕跡とも整合的である。P5には柱痕跡と考えられるもの底面に礎が置かれる。P2やP12でも柱痕跡は認められないが、底面には柱のあたりと考えられる浅い窪みが確認できる。さらに、P4・P8・P13などは柱痕跡の上部が広がっており、抜き取り痕の可能性が考えられる。これらの痕跡からは、柱の直径は20~25cm程だったものと推測される。

次に出土遺物をみてみたい。SB7の柱穴からは多くの遺物が出土している。6~9はP1から出土した遺物である。6・7は底部へラ切りの土師器。8は高台付椀である。口縁部と高台先端を欠くが、比較的高い高台を有する。9は須恵器製の胴部であろう。

10~16はP2から出土している。10~12は土師器環

であるが、いずれも底部と体部の境は明瞭で、直線的に立ち上がる。口径が12 cm弱、底径が5 cm前後、器高が4～5 cmとまとまりがある。13・14は製塩土器で、内面には布痕が残る。15は高台付椀、16は須恵器甕の肩部付近である。

17・18・20・21はP3から出土している。17は胎土が硬質な京都産洛西型ないしは東海産の緑軸陶器である。柄ないしは皿と考えられる。18は高台付椀である。

22～24はP4からの出土。22・23は土師器環で23は底部が若干高台状となる。24は土師器椀で口径14.2 cmを測り、高台部を欠く。

25～30はP5からの出土遺物である。25～27は土師器環。27は底径が6.8 cmと大きい。28は低い高台が付く土師器椀である。29も土師器椀であるが、内面を黒色処理された黒色土器A類である。30は土鍾。

31～37はP6からの出土遺物である。31は刷毛塗りの灰軸陶器である。皿か。32は土師器甕の口縁部、33は製塩土器の口縁部である。34～37は土師器環の底部である。いずれも底径5.0～5.5 cmを測る。

38～41はP7からの出土。38は軟質胎土で明緑色を呈する緑軸陶器。防長産と考えられる。39は土師器環で底部が円盤(柱状)高台である。口径11.6 cm、底径5.2 cm、器高4.6 cmを測る。

42～49はP8から出土している。いずれも土師器で、43～46は環、42・47～49は高台付椀である。42は口径14.0 cmを測る。

50・51はP9から出土している。50は土師器甕で外面はオサエおよび縦方向のハケメ、内面はナデ・斜めのケズリが加えられる。P10から出土した破片とも接合する。51は須恵器の甕か。

52～63はP10からの出土。52～60は土師器環でいずれも底部のみの資料である。円盤高台(58～60)、柱状高台(53・55)などがある。

64～69はP11から出土している。64は底部を欠くが、土師器椀であろう。67は整石製品で、一部整形の痕跡を残すが全体的には不整形となる。68・69は須恵器甕で、68は頸部付近、69は胴部であろう。

70は土師器環でP12からの出土。P7出土の破片と接合する。口径11.5 cm、底径5.0 cm、器高4.7 cmを測る。

19・71・72はP13からの出土である。19は軟質の須恵器甕で内面には車輪文、外面には格子目タタキがみられる。71は土師器環、72は長い高台の付く椀である。

73～76はP14からの出土。73は土師器の円盤高台環、74・75は須恵器甕と考えられる。76は鉄釘であろうか。

では、これらの出土遺物からSB7の帰属時期を考えて

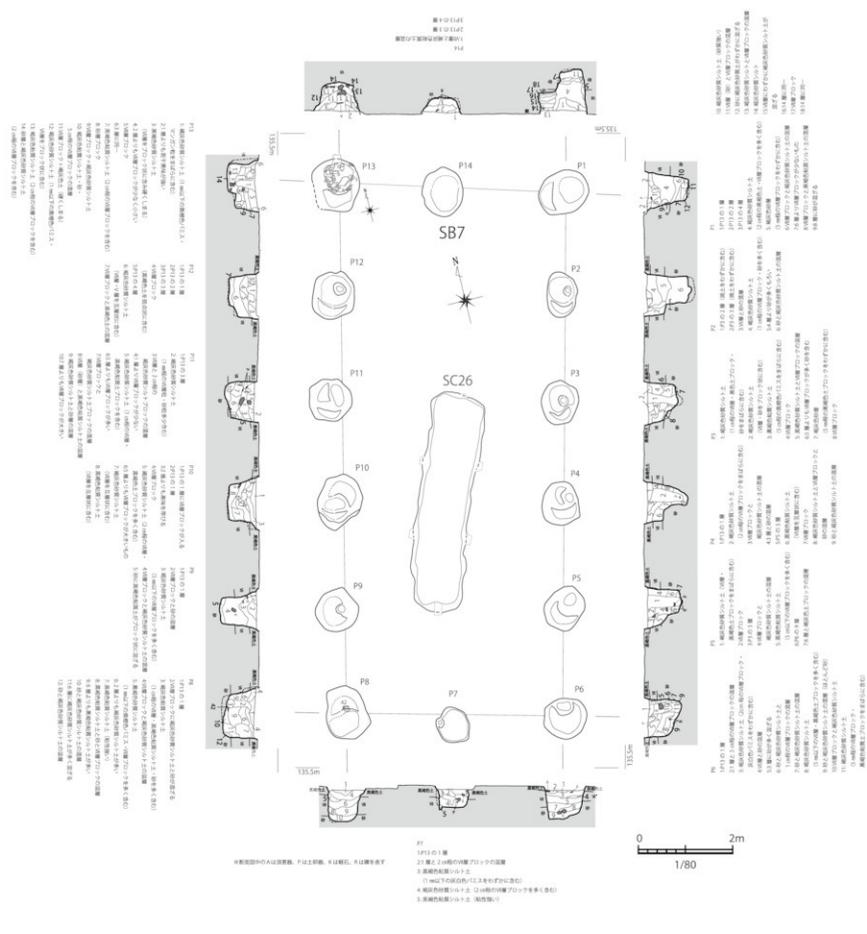
みたい。いずれの柱穴から出土した遺物も、破片であったり、中・上層からの出土であったりと確実に遺構に伴うと断定できる資料は多くない。柱を抜き取った後に入ったと考えられる遺物も多いことから、出土遺物にはある程度の時間幅を想定する必要がある。それとも、P2やP7、P12で出土した完形ないしは完形に近い資料が法的にまとまりが強いことから、これまでに構築されている都城盆地の土師器環の年代観を当てはめると、9世紀末～10世紀初頭という年代観が得られる。ただし、後出する時期の可能性がある遺物も出土していることから、ここではやや幅をもたせ9世紀末～10世紀前半(大宰府編年のⅧ・Ⅹ期)という位置づけを与えたい。この年代観は出土した緑軸陶器・灰軸陶器の評価とも齟齬はないといえる(山本信夫氏教示)。

尚、SB7P3埋土中層より出土した炭化材の放射性炭素年代測定からは1300±20BP(AD660～780)という値が得られている。これは出土遺物の年代観と大きな齟齬がありコンタミネーションの可能性もあるため、参考値として提示したい。

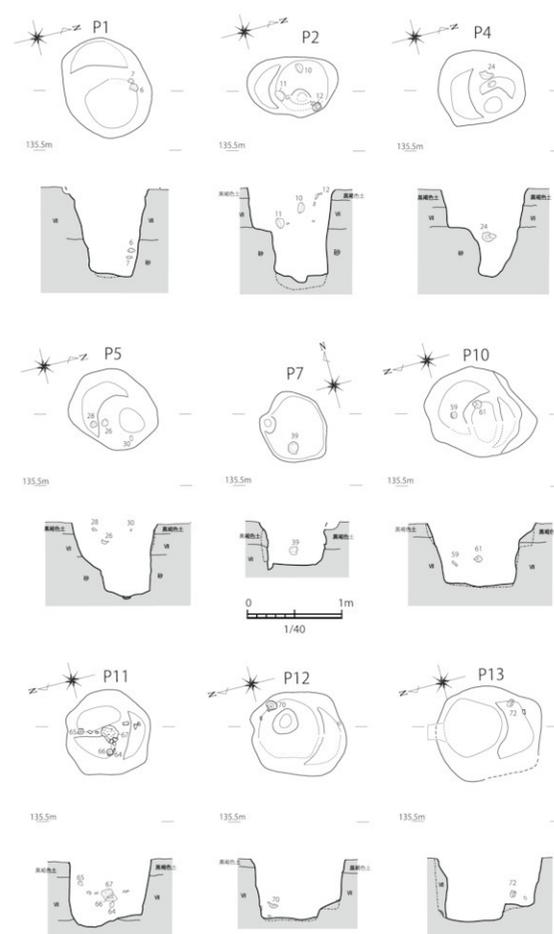
また、SB7と後述するS8の周辺には整地層と考えられる層が確認できた。深さ20 cm程の窪み状の範囲があり、下層には自然堆積と考えられる黒褐色粘質土が、上層には細かく砕かれた土師器片を混ぜた土を敷いて固められていた。自然の窪地を人為的に整地し、建物を建てるために平坦面を作り出したものと考えられる。

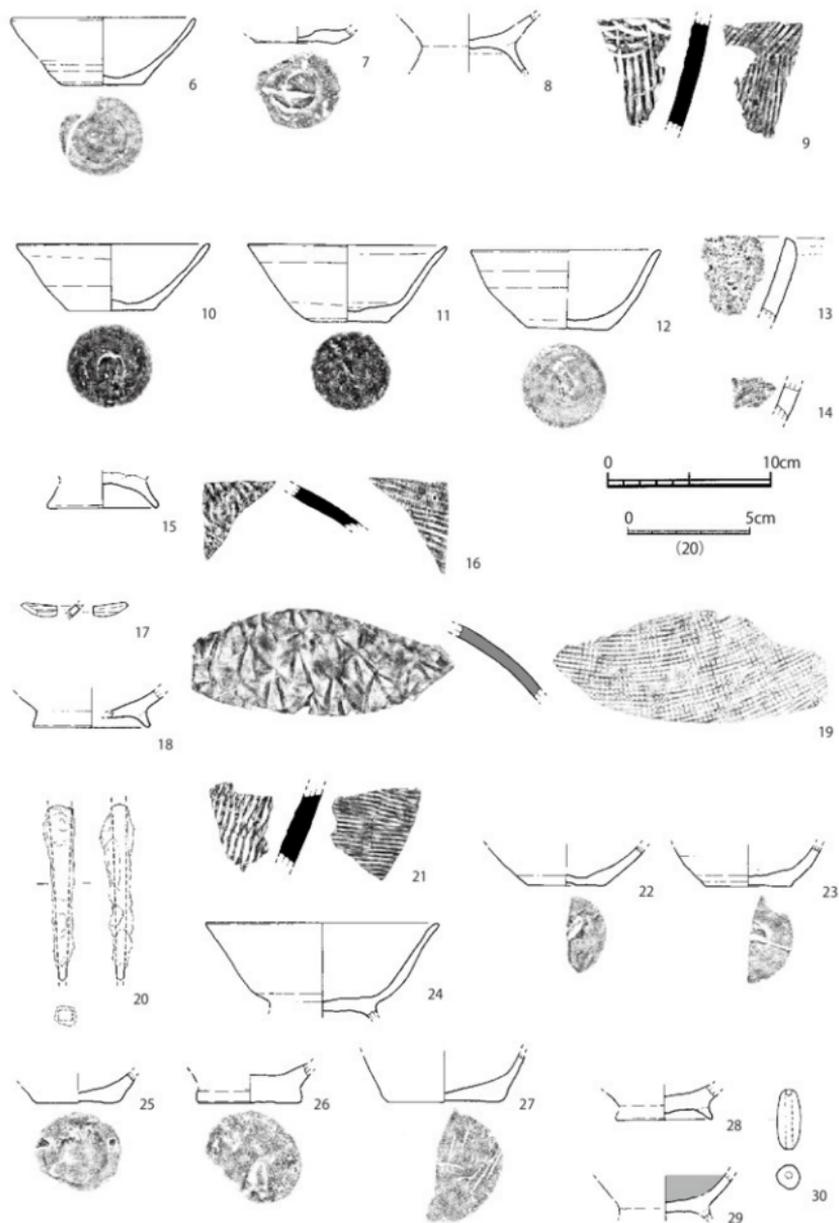
さらに、SB7の柱穴に囲まれるように建物の中央や南よりにはSC26を検出している。直接的な切り合い関係はなく、前後関係を判断するのは困難であるが、主軸がずれていることからSB7に伴う同時期の遺構である可能性は低いと考える。ただし、出土遺物からはほぼ時期差を読み取れず、近い時期の遺構であると推測される。SB8(第24図)

P21・22、621・22区で検出しており、上述のSB7の南西に隣接して確認されている。桁行5間(10.69 m)、梁行2間(4.64 m)で、総面積49.6 m²を測る。柱間距離は、桁行平均2.14 m、梁行平均2.32 mとなる。廂はもたない。主軸はN-9°Eにとる。柱穴掘り形の平面形態は円形ないしは楕円形を呈し、径は大きなもので68 cm、小さなもので44 cmである。全体的にSB7より一回り小振りといえる。柱穴の検出面からの深さは、35～80 cm程となる。全体的に東側の柱穴が浅い傾向になる。これは東側の地山が緩じりじりの砂層になるためであろう。SB8もSB7と同様に、柱痕跡を確認するため検出時に段取りをしているが、やはり確実に柱痕跡といえるものは平面では確認できなかった。ただし、断面の観察からは、P4・

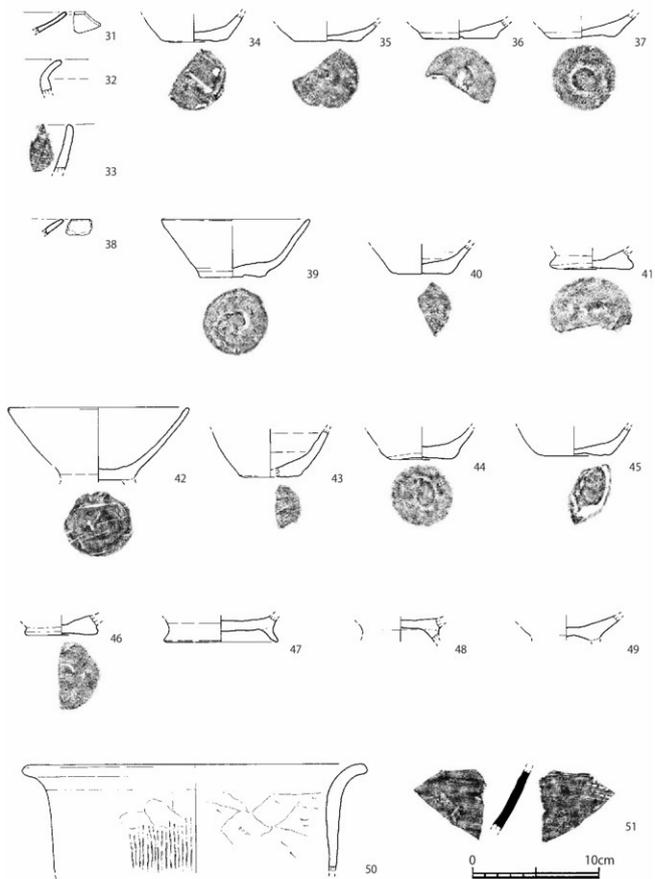


第19図 SB7実測図(S=1/80)・遺物出土状況(S=1/40)



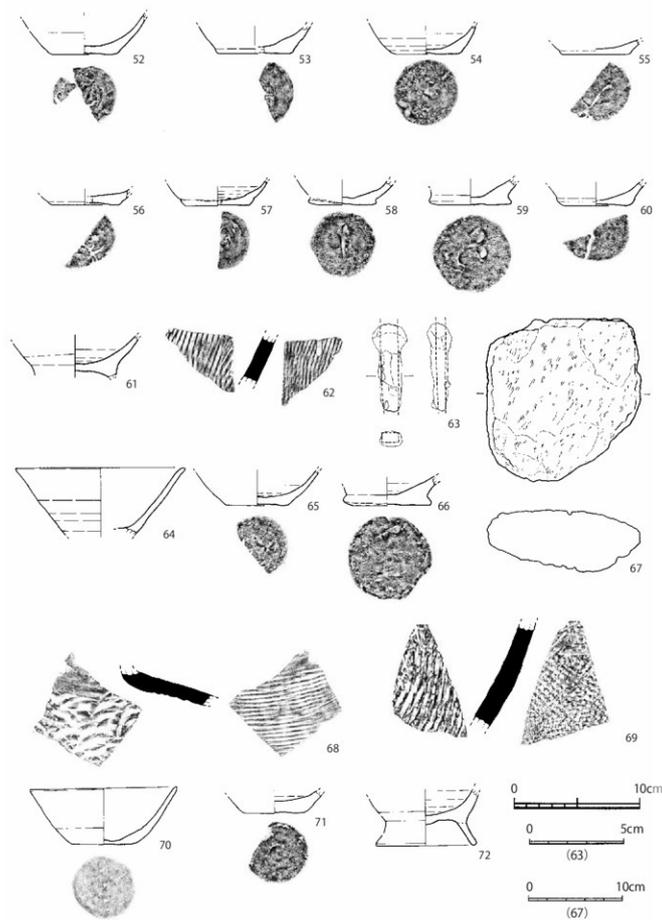


第 20 图 SB7 出土遺物実測図① (S=1/2・1/3)

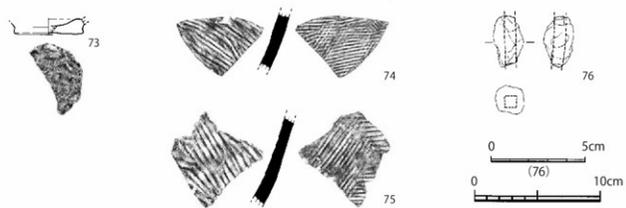


第21図 SB7 出土遺物実測図② (S=1/3)

7・10・14のように、柱痕跡と考えられるもの上部が、られる。そのため、これらの柱穴では柱が抜き取られて
 広がっていたり異なる層が堆積していたりする柱穴もみ いた可能性が考えられる。また、P14では柱のあたりと



第22図 SB7 出土遺物実測図③ (S=1/2・1/3・1/4)



第23図 SB7 出土遺物実測図④ (S=1/2・1/3)

考えられる浅い窪み状の痕跡が確認できる。柱の径は20 cm前後だったものと推測される。

他遺構との切り合い関係をみると、P5がSB9のP195を切る。ここからSB9→SB8という時間的流れが読み取れる。また、P2が単独のピットであるP216を切る。

次に出土遺物を見てみたい。SB8からもSB7ほどではないが多くの遺物が出土している。77はP1から出土している須恵器杯の口縁部である。

78～84・102はP2から出土した遺物である。78は土師器杯で高台状の底部と内湾する体部を有す。80は長い高台を有す椀である。81は器種不明の黒色土器A類である。体部外面に蹄状の突起をめぐらせ内湾して立ち上がる。口縁端部は直立する。内面はミガキが加えられ、黒色処理される。84は断面方形の鉄釘で、頭がくの字に折れる。

85～87はP3から出土した。85は土師器杯で底部へろ切り痕が明瞭に残る。体部下端にはヘラズリ状の面取りがみられる。口径11.2 cm、底径5.0 cm、器高4.8 cmを測る。86も同様の土師器杯、87は須恵器甕の体部である。

88・89はP4から出土している。88は口縁部・高台部共に欠くが、内黒の黒色土器A類である。89は須恵器甕で外面に格子目タタキ、内面には平行当て具が残る。

90～92はP6出土。91は脚台付鉢の脚部である。92は製埴土器の口縁部。

93・94はP7から出土した。共に土師器杯の底部片である。93は内外面に赤彩がみられる。

95はP8、96はP9より出土した。95は脚台付鉢の脚部で、径は復元できなかつたが、かなり大型とみられる。96は短い高台を有す土師器杯で、内外面共にミガキを加え、黒色処理する。黒色土器B類。

97～100はP11から出土している。97は越州窯系青磁の椀Ⅱ類である。98は土師器杯、99・100は土師器の

高台付椀である。99の高台内面には放射状の圧痕が残る。101はP12、103・104はP14からの出土。101は高台部は欠くが高台付椀であろう。103はやや硬質な胎土の緑釉陶器皿。京都産洛西型ないしは東海産であろう。

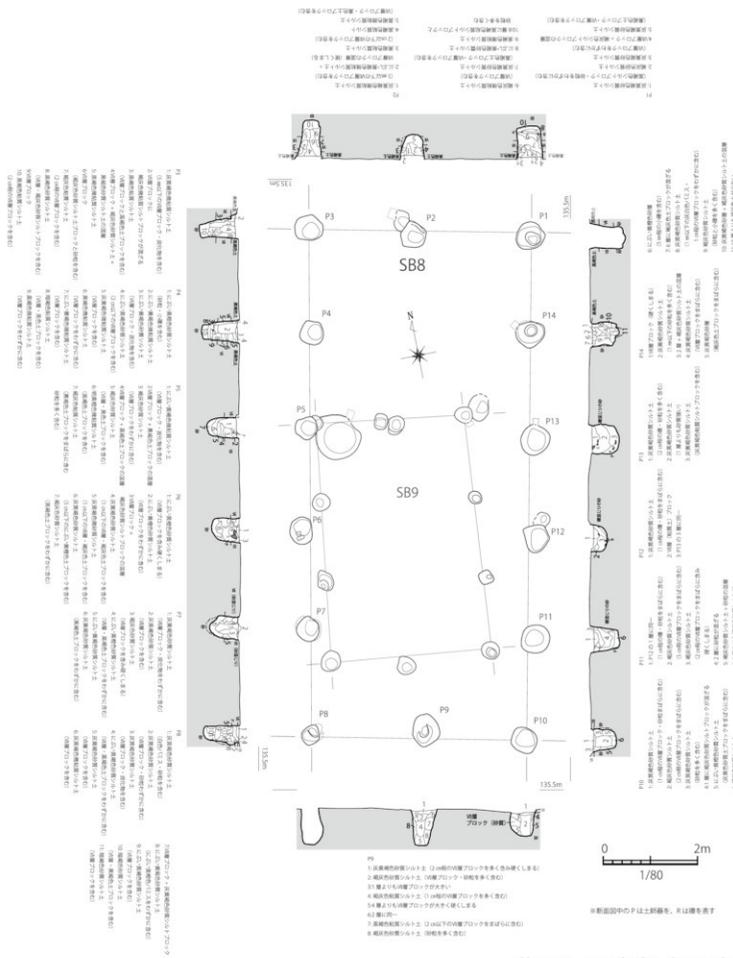
ここで、出土遺物からSB8の帰属時期を検討したい。SB7同様に、確実に遺構に伴うと考えられる遺物を抽出することが困難であることや、完形に復元できる遺物が少ないことなどから帰属時期の推定は難しい。まずは、完形に復元できる78や85の資料を見てみたい。78はやや特異な形態を呈するが、法量をそのまま評価すれば、10世紀前半の資料と考えられる。また、85はやや口径が小さめであるが、9世紀末～10世紀初頭の資料と考えられる。その他の底部資料も概ね5 cm前後であり、これら二つの資料とほぼ同時期のものである可能性が高い。よって、SB8については9世紀末～10世紀前半の遺構であるものと考えたい。この年代観は、P2の上層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定値(1095±20年即(AD890～1000年))とも整合的である。

次にSB7との関係を考えてみたい。主軸を完全に同じくするものではないが、出土遺物の年代がほぼ同時期であることや、切り合うことなく隣接していることなどから、少なくとも全く時間的な重なりがないという可能性は低いだろう。SB7からSB8への建て替えという可能性はあるが、ここではほぼ同時期の遺構と考えたい。

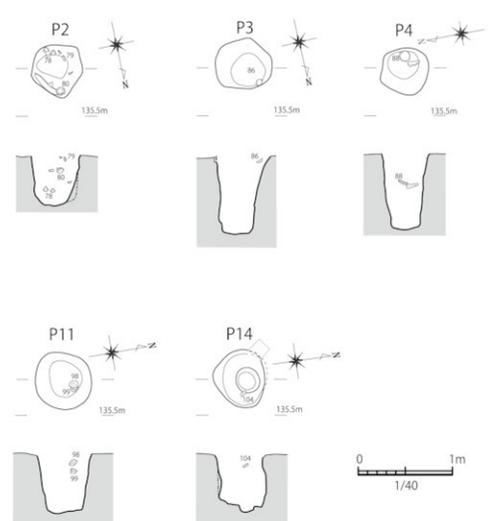
SB9 (第28図)

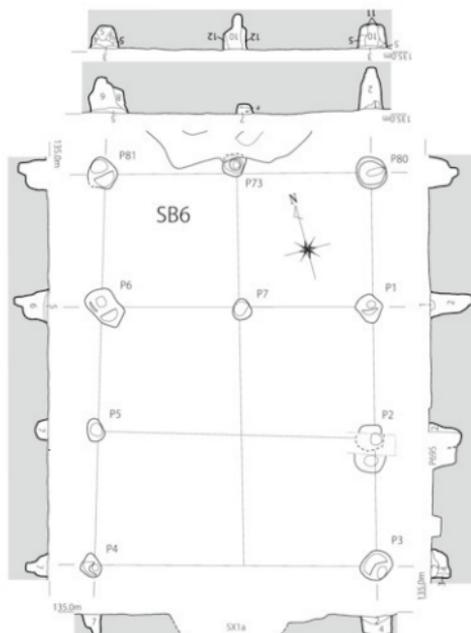
621・22区で検出しており、SB8と重複関係にある。桁行3間(5.1 m)、梁行2間(3.4 m)で総面積は17.34 m²を測る。柱間距離は、桁行平均1.7 m、梁行平均1.7 mとなる。主軸はN-8°-Eに作る。柱穴掘り形の平面形態は円形で、大きさは径26 cm～48 cmとなる。検出面からの深さは深いもので62 cm、浅いもので23 cmを測る。

明確な柱痕跡は平面・断面共に検出できなかった。先述のように、P195はSB8のP5に切れられ、SC32を切る。また、

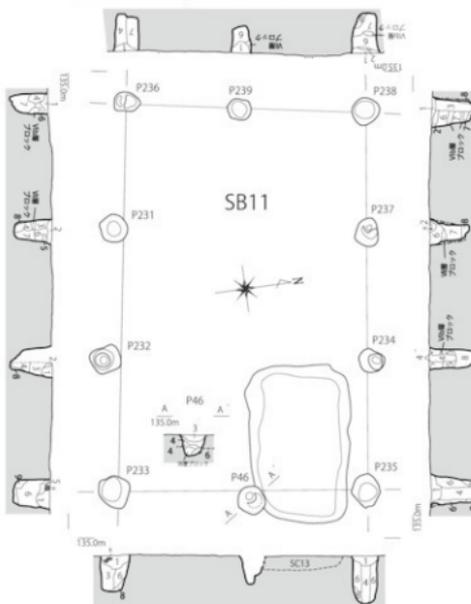


第24図 SB8 実測図 (S=1/80)・遺物出土状況 (S=1/40)

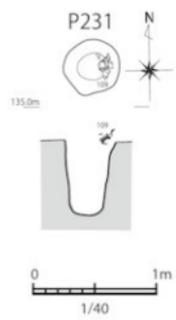




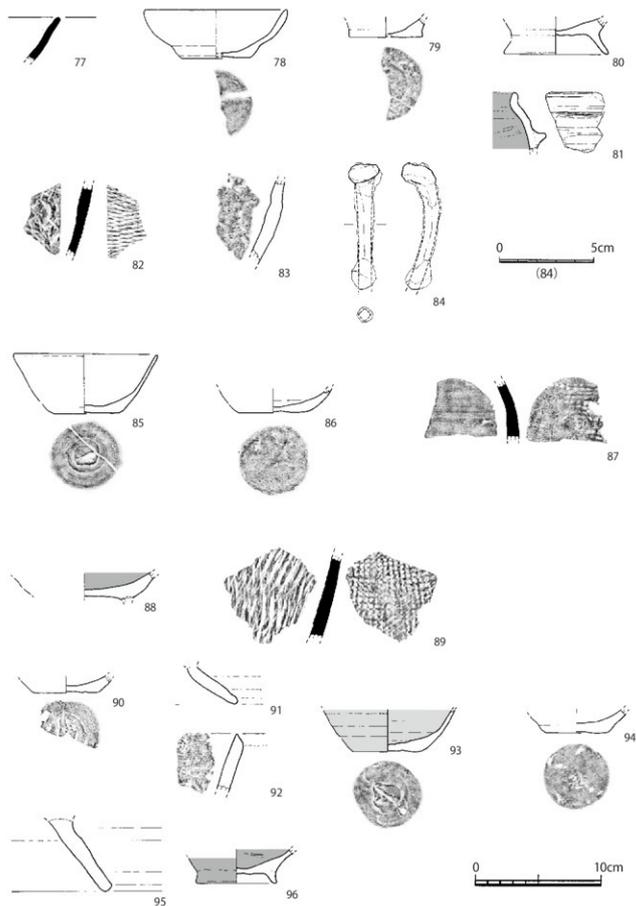
1. 褐色粘結層シルト土 (黄褐色土ブロック・炭化物を含む)
2. 灰黄色シルト土 (3 cm以下の黄褐色土ブロックを含む)
3. 褐色粘結層シルト土
4. 褐色粘結層シルト土 (にぶい黄褐色土ブロックを多く含む)
5. 灰黄色シルト土 (黄褐色土ブロックを多く含む)
6. 7層に黄褐色土ブロックを含むもの
7. 灰黄色シルト土 (3 cm以下の黄褐色土ブロックを含む)
8. にぶい黄褐色粘結層シルト土
9. 褐色粘結層シルト土 (砂質強し)
10. 黄褐色粘結層シルト土 (1 cm程度の黄褐色土ブロックを多く含む)
11. 基本土層の塊のブロック (わずかに黄褐色土ブロックを含む)
12. 10層に1 cm程度の黄褐色土ブロックを含むもの



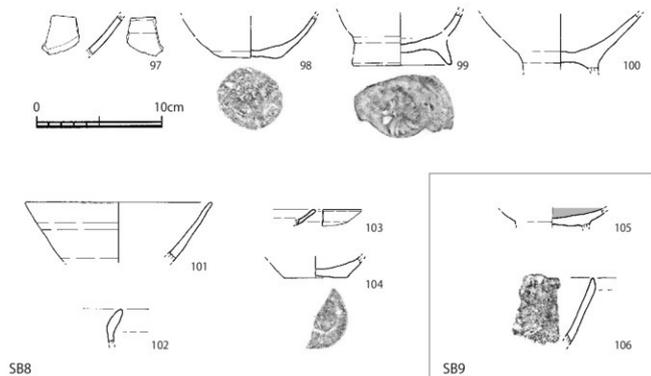
1. 褐色粘結層シルト土 (瓦層ブロックを含む)
2. 褐色粘結層シルト土 (黄褐色土「ミ」をわずかに含む)
3. 褐色粘結層シルト土
4. 褐色粘結層シルト土 (3 cm以下の塊層ブロックを含む)
5. 4層に10 cm程度の塊層ブロックが混ざるもの
6. 褐色粘結層シルト土 (瓦層・黒褐色土ブロックを含む)
7. 褐色粘結層シルト土と瓦層ブロックの互層
8. にぶい黄褐色粘結層シルト土 (褐色粘結層シルト土ブロックをわずかに含む)



第25図 SB6・11 実測図 (S=1/80)・SB11 P231 遺物出土状況 (S=1/40)

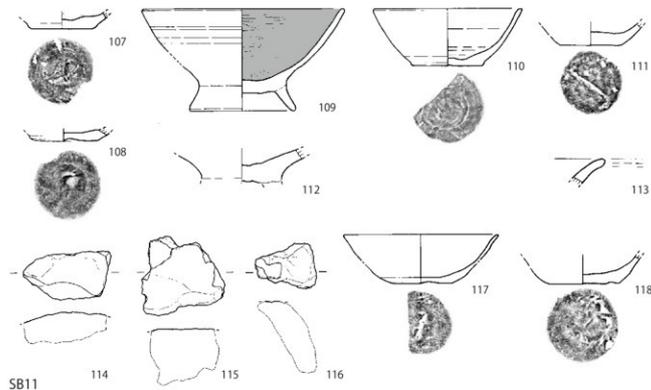


第26図 SB8 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)



SB8

SB9



SB11

第27図 SB8・9・11 出土遺物実測図 (S=1/3)

P194 は単独のピットである P212 を切る。

遺物を見てみると、P170 から黒色土器 A 類の高台付碗 (105) が、P177 から製塩土器の口縁部片 (106) が出土している。

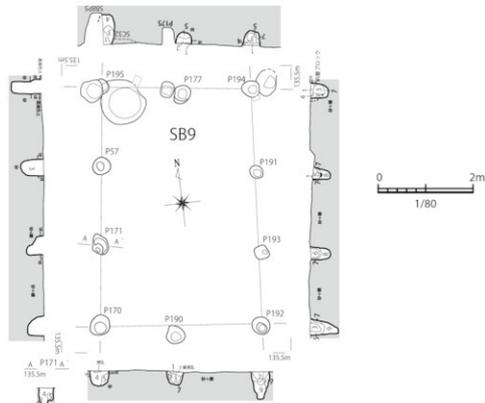
SB10 (第17図)

G22・23区で検出した。大部分が調査区外に延びるため、

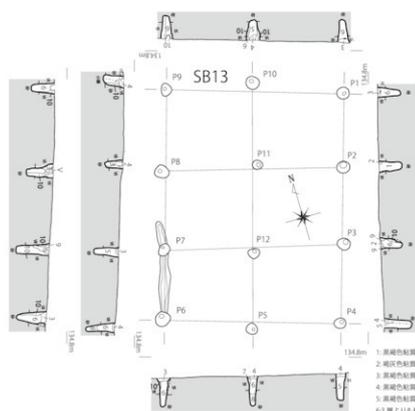
全体像は判然としない。おそらく主軸はN-4.5°-Eにこだるものと思われる。検出できた範囲での桁行は2間(4.36 m)、梁行は1間(1.68 m)となる。柱穴掘り形は径35 cm前後の円形を呈し、深さは8~36 cmとなる。

SB11 (第25図)

C16区で検出しており、桁行3間(6.4 m)、梁行2間(4.1



- 1.黒褐色粘質シルト土 (1m以下の深層色) (土をまばらに含む)
- 2.土と砂の混層
- 3.黒褐色粘質シルト土 (3m以下の深層層色) (土を含む)
- 4.土と砂の混層
- 5.土と砂の混層
- 6.黒褐色粘質シルト土 (1m以下の深層色) (土をまばらに含む)
- 7.赤褐色粘質シルト土 (黒褐色のブロック・粘着ブロックを含む)
- 8.黒褐色粘質シルト土 (黒褐色のシルトを含む)
- 9.黒褐色粘質シルト土 (黒褐色のシルトを含む)
- 10.黒褐色粘質シルト土 (黒褐色のシルトを含む)



- 1.黒褐色粘質シルト土
- 2.黒褐色粘質シルト土 (粘着ブロック)
- 3.黒褐色粘質シルト土 (土をまばらに含む)
- 4.黒褐色粘質シルト土 (2m以下の深層ブロック・粘着を含む)
- 5.黒褐色粘質シルト土 (1m程度の粘着ブロック・粘着を含む)
- 6.土と砂の混層
- 7.土と砂の混層
- 8.土と砂の混層
- 9.黒褐色粘質シルト土 (粘着ブロック)
- 10.黒褐色粘質シルト土 (5m程度の粘着ブロックをまばらに含む)
- 11.黒褐色粘質シルト土 (5m程度の粘着ブロックをまばらに含む)

第28図 SB9・13実測図 (S=1/80)

m)で総面積は26.24㎡を測る。柱間距離は桁行平均2.13m、梁行平均2.05mである。検出面からの柱穴の深さは45～75cmを測る。主軸はN-84°-Wにとる。柱穴掘り形は径30～50cm前後の円形を呈する。平面精査では柱痕跡は確認できなかったが、断面観察からは柱痕跡と考えられるもの上部が広がるもの (P234・235・238) がみられ、これが柱の抜き取り痕である可能性が考えられる。他遺構との関係をみてみると、P46がSC13を切る。

107～118はSB11の柱穴から出土した遺物である。107・108はP46から出土しており、いずれもヘラ切りによる底部切り離しの土師器環である。

109はP231から出土している、高台付筒の黒色土器A類である。内面はミガキ、外面は回転ナデにより調整される。緩やかに内湾する体部を有し、やや厚みがあり、ハの字に開く高台が付く。口径15.9cm、底径8.4cm、器高8.1cmを測る。出土状況図にあるように、柱穴の検出面に近いレベルで出土している。

110～113はP232から出土している遺物である。110は柱状の高台を有し、底部にはヘラ切りの痕跡を残す。口径11.6cm、底径5.4cm、器高4.6cmを測る。112は高台付筒、113は土師器製の口縁部である。

114～116はP233からの出土である。粘土塊としているが、いずれも凝灰岩製の可能性があり、一部被熱した痕跡がある。鍛冶関連の遺物であろうか。

117・118はP234から出土した土師器環である。117は器壁が薄く、体部下端にはヘラズリ状の面取りがみられる。P232から出土した破片と接合する。118は径5.5cmを測る底部片である。

これらの出土遺物から遺構の帰属時期を考えてみたい。完形に復元できる110や117の土師器環の法量からは、9世紀末～10世紀前半までの時間幅が認められる。109の黒色土器A類については、やや丸みをおびる体部と長くハの字に開く高台などの形態的特徴から、10世紀代の資料と考えられる。いずれも埋土層からの出土であり、時期決定の根拠としては脆弱であるが、ここでは10世紀前半頃の年代を与えておきたい。

SB12 (第29図)

F15、E・F16区で検出しており、桁行6間(12.55m)、梁行2間(4.84m)で総面積は60.74㎡を測り、本遺跡で検出された掘立柱建物跡では最大規模を誇る。柱間距離は桁行平均2.09m、梁行平均2.42mである。主軸はN-21.5°-Eにとる。検出面からの柱穴の深さは27～95cmを測る。柱穴掘り形は径30～40cm前後のものも多く、最大で52cm程度である。平面プランは円形を呈する。柱痕跡を確認するため、検出後に段掘りしているが明

確な柱痕跡は確認できなかった。埋土は全般的に似ているものが多く、断面観察からも確実な柱痕跡を捉えられていないが、柱穴の大部分に色調が暗く粘性の強い土が堆積しており、これが柱痕跡であった可能性が考えられる。他遺構との切り合いはない。

119～128はSB12の柱穴より出土した遺物である。119・120はP2からの出土。120は高台付筒で灰白色を呈する精緻な胎土を有す。口縁部を欠くが、体部から内湾して立ち上がる器形を呈す。119は底部を欠き口徑も復元できていないが、高台付筒であろう。

121はP4、122はP14から出土している。121は円盤高台を有す環で、122は高台付筒である。

123～125はP6から出土した遺物である。123・124は環で、形態・法量が近似する。両者共に底径が大きく、器高が低いことが特徴である。底部と体部の境が丸みをおび明瞭でない。125は高台付筒である。これら3点の土器は、浅黄褐色で精緻な胎土をもつことで共通する。同一の柱穴から出土していること鑑みれば、これらの資料が1セットを成す可能性が高い。

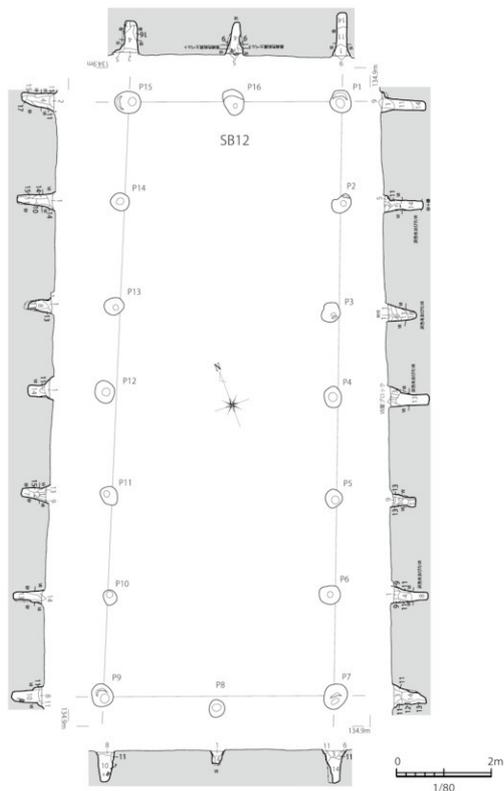
126・127はP16からの出土である。126は口縁部・底部共に欠くが、黒色土器A類の高台付筒である。

128はP12からの出土。砂器製で中央が凹み、わずかに擦れた痕が認められる。

SB12については、出土遺物の良好なセットが得られており、これらを基準に帰属時期を判断したい。123・124のような形態・胎土を有す土師器環は、都城盆地では大宰府で出土する資料に酷似しており、大宰府から搬入された土器である可能性も考えられる(山本信夫氏談)。このような法量・形態的特徴を有す資料は、大宰府元年のIX期(10世紀中頃)に位置づけられている。よって、本資料にも同様の年代が付与できるものと考え、SB12は10世紀中頃の所産としたい。

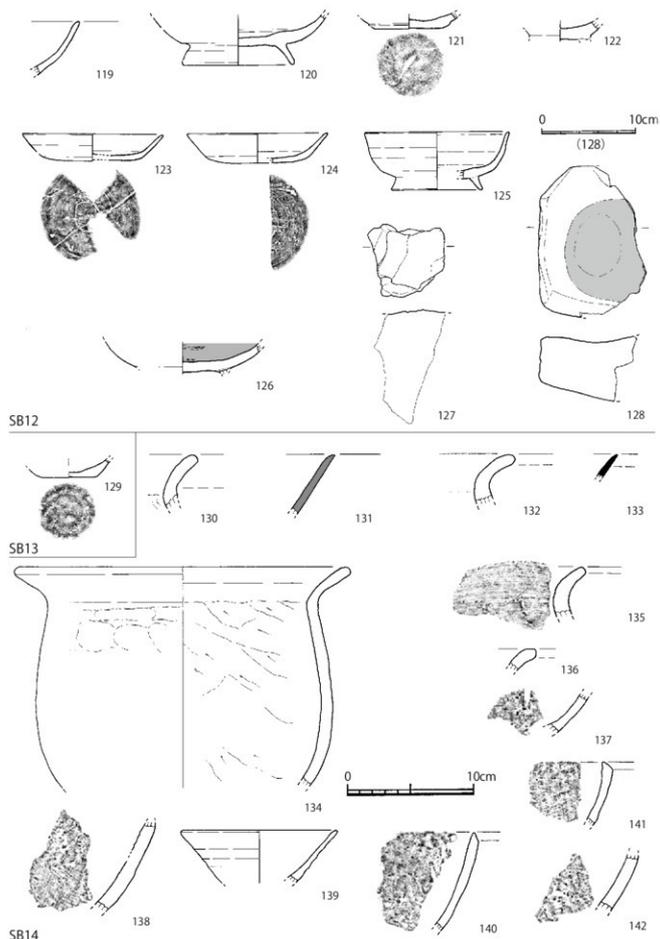
SB13 (第28図)

SB12の西側、E15区で検出しており、桁行3間(5.26m)、梁行2間(3.7m)の総柱建物である。総面積は19.46㎡を測る。柱間距離は桁行平均1.75m、梁行平均1.85mである。主軸はN-15°-Eにとる。検出面からの柱穴の深さは42～70cmを測る。柱穴掘り形は径20～30cm前後で、他の掘立柱建物跡と比べて一回り小振りと異なる。平面プランは比較的整った円形を呈す。断面を観察すると、埋土層から底面まで単一で粘性の強い層が堆積するものが多く、これが柱痕跡であった可能性が高い。柱穴と柱はほぼ同じ大きさであったものと考えられる。畝状遺構であると考えられるSB7を切る。



1. 黒褐色粘質シロト土 (5 m以下の浅層ブロック・細砂をまばらに含む)
2. 黒褐色粘質シロト土 (2 m程度の浅層ブロック・鉄分をまばらに含む硬くしめる)
3. 黒褐色粘質シロト土と浅層ブロックの混層 (極めて硬くしめる)
4. 黒褐色粘質シロト土 (2 m程度の浅層ブロックをまばらに含む。粘性強い)
5. 2層と2 m程度の浅層ブロックの混層
6. 5層より浅層ブロックが少ない
7. 黒褐色粘質シロト土と2 m程度の浅層ブロックと砂粒ブロックの混層
8. 黒褐色粘質シロト土 (粘性強くて強い)
9. 黒褐色粘質シロト土
10. 黒褐色粘質シロト土 (5 m以下の浅層ブロックをまばらに含む。粘性強くしめる強い)
11. 黒褐色粘質シロト土 (2 m程度の浅層ブロックをまばらに含む)
12. 1層と浅層ブロックの混層
13. 黒褐色粘質シロト土 (2 m程度の浅層ブロックをまばらに含む。粘性強い)
14. 黒褐色粘質シロト土 (1 m程度の浅層ブロックをまばらに含む。粘性強い)
15. 7層によく硬く砂粒ブロックと砂粒の割合が多いもの
16. 黒褐色粘質シロト土 (粘性強い)
17. 炭褐色粘質シロト土 (1 m程度の浅層ブロックをまばらに含む)
18. 黒褐色粘質シロト土 (粘性強く地中に硬く)

第29図 SB12 実測図 (S=1/80)



第30図 SB12～14 出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

SB14 (第31図)

調査区の西側、C4・5区で検出しており、桁行3間(5.84 m)、奥行2間(3.96 m)で総面積は23.12 m²を測る。柱間距離は桁行平均1.94 m、奥行平均1.98 mである。主軸はN-86°-Eにとる。検出面からの柱穴の深さは20～46 cmを測る。柱穴掘り形は径40～60 cm前後のものが多い。平面プランは比較的整った円形を呈する。柱痕跡は確認できていない。SD11と重複し、P6がSD11を切る。

130～142はSB14の柱穴から出土した遺物である。130はP1から出土した土師器甕の口縁部片である。131はP2から出土した須恵器環の口縁部である。焼きが悪くやや軟質。

132・133はP5から出土した。132は土師器甕の口縁部、133は須恵器環の口縁部片。

134～137はP6から出土した遺物である。134は外面ナデおよびオサエが、内面はナデ・ケズリである。135の内面にはハケメが確認できる。137は磨けするが製塩土器である。

138はP7から出土した製塩土器で内面には布目が残る。139～142はP8からの出土。139は土師器の坏。140～142は製塩土器でいずれも内面には布目が残る。このように、SB14は比較的多くの遺物が出土しているが、時期決定の大きな要素となる土師器環がほとんど出土しておらず、判断材料が乏しい。また、131・133といった須恵器環と134のようなナデ調整が基本となる土師器甕が出土していることから、時間幅のある遺物が混在して出土している状況といえる。そのため、9世紀代～10世紀前半までの時間幅をもたせた。

SB15 (第31図)

SB14の北側、B4・5区で検出しており、桁行3間(6.88 m)、奥行2間(4.2 m)で総面積は28.89 m²を測る。柱間距離は桁行平均2.29 m、奥行平均2.1 mである。主軸はN-8°-Eにとる。柱穴の検出面からの深さは32～80 cmを測る。柱穴掘り形は径40～50 cm前後を測る。平面プランは比較的整った円形を呈する。明確な柱痕跡は確認できていない。東側のP6～9は2基の柱穴が重複して検出されており、建て替える可能性が考えられる。SD11、SC54を切る。

143～153がSB15から出土した遺物である。143・144はP1からの出土である。143はやや高台状の底部を有す坏である。144は須恵器大甕の口縁部である。内外面共に整形・最終調整後に器壁の均一化のためか、粘土が貼られる。後述するSC50出土の461とは同一個体であると考えられる。

145はP2から出土した緑釉陶器の皿で、胎土は軟質で

ある。京都産洛北型ないしは防長産といえる。146・147・149はP3から出土している。146は底部切り離しへ切り切りの土師器環である。口径11.4 cm、底径4.8 cm、器高4.1 cmを測る。149は反釉陶器甕の胴部片である。

148は越州窯系青磁の匏ないしは皿であろう。1類か、150はP6から出土した土師器環で、口径10.9 cm、底径5.8 cm、器高4.7 cmを測る。151～153はP7から出土した。151は口径11.4 cm、底径5.4 cm、器高4.1 cmを測る坏である。152は円盤高台坏の底部片。153は輪割口である。

出土した土師器環の年代観をみてみると、法量に若干のバラつきが認められるもの、口径が縮小し、器高が低くなる特徴を有す。概ね10世紀前半の資料とみてよいだろう。

SB16 (第32図)

C6区で検出しており、桁行3間(5.06 m)、奥行2間(3.3 m)で総面積は16.7 m²を測る。柱間距離は桁行平均1.68 m、奥行平均1.65 mである。主軸はN-72°-Wにとる。柱穴の検出面からの深さは15～35 cmを測る。柱穴掘り形は径30～40 cm前後の円形を呈す。明確な柱痕跡は確認できていない。切り合はないが、SB17と重複する。

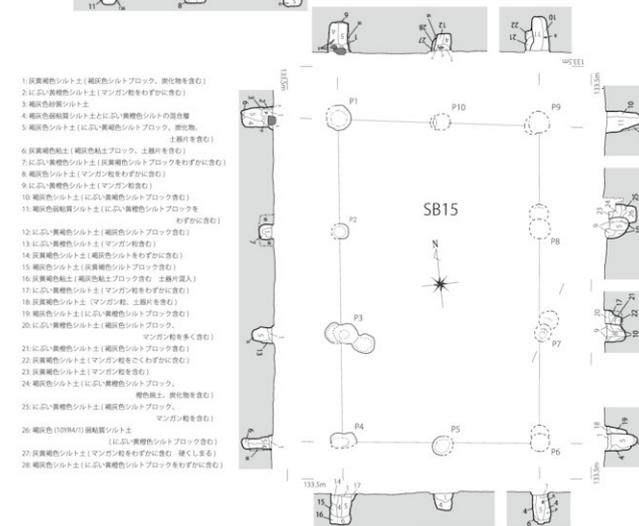
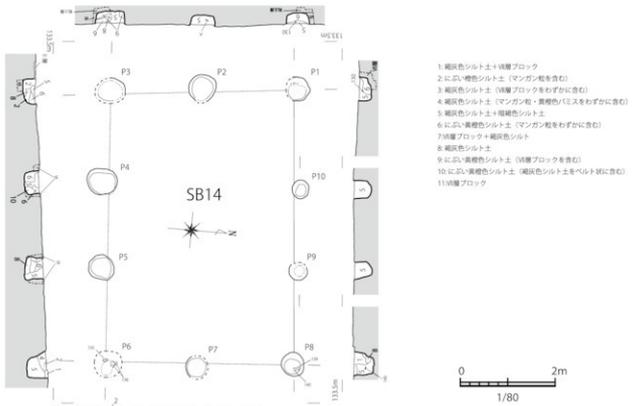
154～160がSB16の柱穴から出土した遺物である。154はP1から出土した円盤高台を有す土師器環である。155はP2から出土した土師器環の底部。底径4.6 cmを測る。

156はP3出土の脚台付鉢の脚部であろう。157・158はP5から出土した遺物である。157は土師器環で、口径10.8 cm、底径4.7 cm、器高3.9 cmを測る。体部に丸みをもつ。158は土師器甕の口縁部で端部が玉縁状に肥厚する。

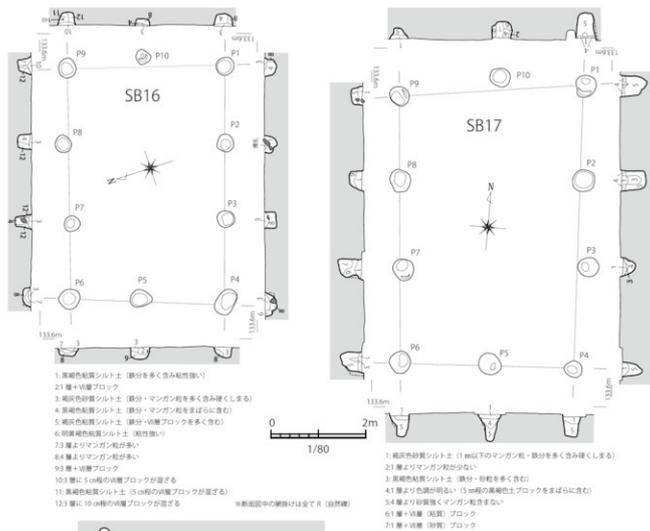
159・160はP9から出土している。159は底径5.4 cmの土師器環。160は高台付椀である。SB16からの出土遺物は多くないが、完形に復元できる157の資料を積極的に評価すれば、10世紀前半の年代が与えられる。

SB17 (第32図)

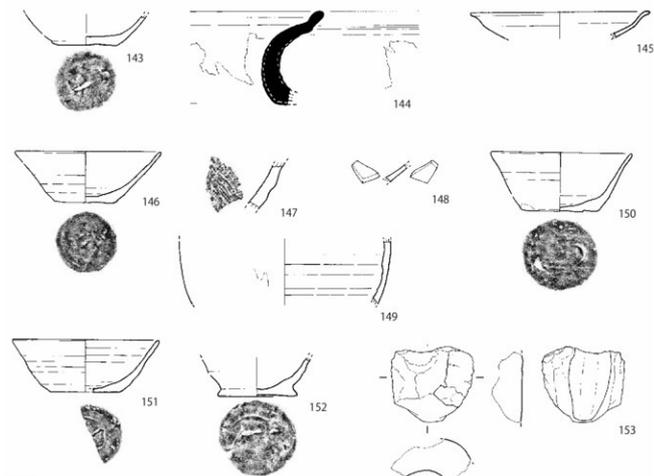
C6区でSB16と重複して検出している。桁行3間(6.06 m)、奥行2間(3.66 m)で総面積は22.18 m²を測る。柱間距離は桁行平均2.02 m、奥行平均1.83 mである。主軸はN-3°-Wにとる。柱穴の検出面からの深さは22～60 cmを測る。柱穴掘り形は径40 cm前後の円形を呈す。柱痕跡を確認するために段掘りしているが、明確な柱痕跡は確認できていない。断面を観察すると、全体的に似かよった層が堆積しており、地山であるVI層と区別が難



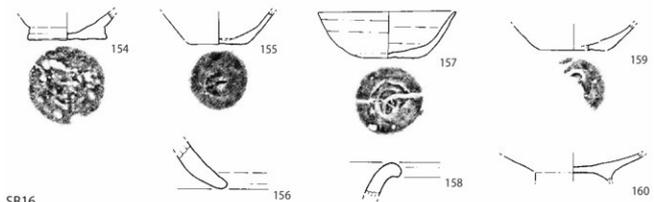
第31図 SB14・15実測図 (S=1/80)



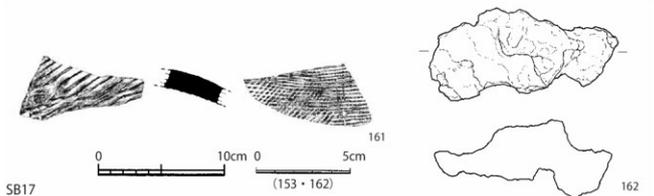
第 32 図 SB16 ~ 18 実測図 (S=1/80)



SB15



SB16



SB17

第 33 図 SB15 ~ 17 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

しいものが多い。切り合いがないためSB16との前後関係も不明である。

出土遺物は多くなく、図化できたものはP5から出土した須恵器甕(161)と鉄滓(162)のみである。

SB18 (第32図)

C13・14区で検出しており、桁行3間(5.3 m)、梁行2間(3.9 m)の総柱建物となる。総面積は20.67 m²を測る。柱間距離は桁行平均1.76 m、梁行平均1.95 mである。主軸はN-19°-Eにによる。中央の柱穴配置が若干ゆがむ。柱穴の検出面からの深さは18～50 cmを測る。柱穴掘り形は径30 cm前後のものとして50 cm前後の二種類認められる。平面プランは円形ないしは不整形を呈する。埋土は単一層のものが多い。P5については建て替えがあったものと推測される。P10と切り合うが、切られるP10を最終的な柱穴とした方が柱筋が通るため、建て替えではなく切り合いとした。

P4からは須恵器大甕の頸部(163)、P8からは製塩土器片(164)が出土している。

SB19 (第34図)

G・H16区で検出しており、桁行3間(6.88 m)、梁行2間(4.26 m)で、総面積は29.3 m²を測る。柱間距離は桁行平均2.29 m、梁行平均2.13 mである。主軸はN-50°-Wにによる。柱穴の検出面からの深さは25～42 cmを測る。柱穴掘り形は径40 cm前後の整った円形を呈する。平面では柱痕跡は確認できなかったが、断面を観察するとP1・5・7・8で柱痕跡であると考えられるものが確認できた。これらは異なる埋土が堆積して上部が広がっていることから、抜き取り痕の可能性も考えられる。P5では柱穴の底面が小ピット状に二段掘りとなっており、ここに柱を設置したものと考えられる。これらの痕跡から、柱の径は10～20 cm程であったと推測される。

他遺構との切り合いをみると、P10がSD1を、P9が単独のピットであるP334を切る。また、P2はSC6に切られる。

出土遺物は少ない。165はP8から出土した土師器環で、口径17.0 cm、底径10.0 cm、器高5.7 cmとかなり大型である。底部の切り際はヘラ切りである。

SB20 (第34図)

C13・14、D13・14区にまたがって検出している。桁行3間(6.14 m)、梁行2間(4.26 m)で、総面積は28.24 m²を測る。柱間距離は桁行平均2.04 m、梁行平均2.13 mである。主軸はN-13°-Eにによる。柱穴の検出面からの深さは16～40 cmを測る。柱穴掘り形は径30～40 cm前後の整った円形を呈するものが多い。検出時には掘立柱建物跡として認識できていなかったため、柱穴の埋

土の観察は十分にできていない。P10はSD6の埋土を掘り上げた後に検出していることから、SB20はSD6よりも古い時期の遺構といえる。

170はP304から出土した土師器の高台付椀である。

SB21 (第35図)

C・D13区で検出しており、桁行3間(5.72 m)、梁行2間(4.0 m)で総面積は22.88 m²を測る。柱間距離は桁行平均1.9 m、梁行平均2.0 mである。主軸はN-76°-Wにによる。柱穴の検出面からの深さは45～64 cmを測る。柱穴掘り形は径40～50 cm前後を測る。平面では柱穴痕跡はみられなかったものの、断面観察からは、柱痕跡として、掘り形中央付近に粘性の強い黒褐色土が堆積している柱穴があることが分かる。これらの痕跡からは柱は15～20 cm程であったものと推測される。

SB21の柱穴配置の内部で焼土遺構であるSH7・8を検出した。検出レベルもほぼ同一の高さであることや、SH7とSB21P10から出土した遺物が接合することから、SB21に伴う遺構であると考えられる。全体的に広く被焼するのではなく、ブロック状で点的に焼土が堆積する範囲が確認できる。鍛冶工房の痕跡である可能性が高い。

他遺構との関係のみをみると、P8がSD1を切る。同様にSD1を切るSC59との関係は不明である。

166～169、171～179はSB21から出土した遺物である。166はP1から出土した土師器甕で、外面は縦方向のハケス、内面にはナゲおよびケズリにより調整される。

167・168はP2から出土している。167は製塩土器の口縁部である。168は土師器の高台付椀である。断面台形の低い高台が付く。P10およびSH7から出土した資料(708)と接合する。

169はP4から出土した須恵器環である。断面台形の低い高台が底部のやや内側に付く。

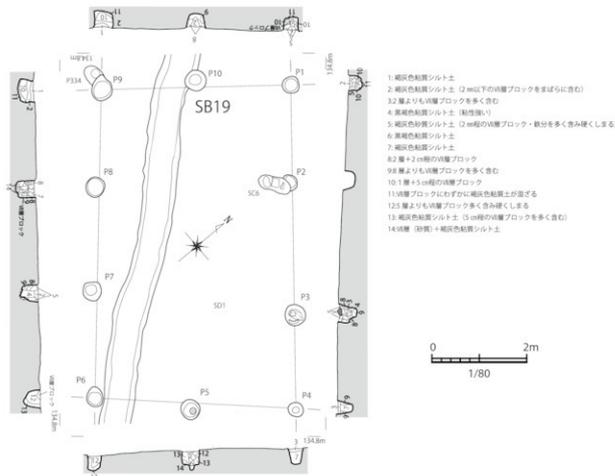
171～174はP5から出土している。171～173は製塩土器で171は口径が14.1 cmを測る。174は粘土塊で取り痕が認められる。

175・176はP9から出土した製塩土器。

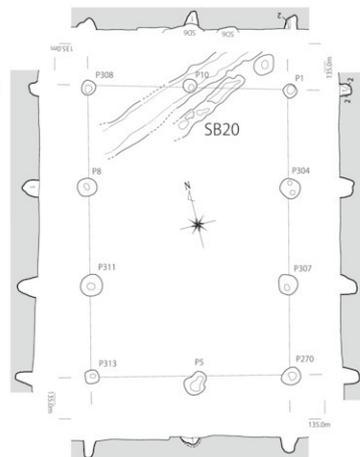
177～179はP10から出土した。177はくの字に屈曲する土師器甕の口縁部、178は鬮羽口である。後述するSH7出土の717の資料と接合する。179は鉄滓である。

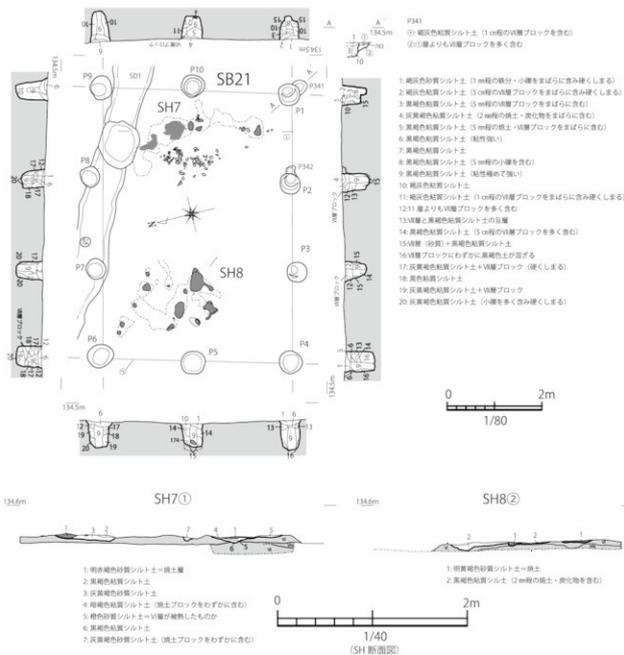
次にSH7から出土した遺物(708～717)について報告する。708は168と接合する土師器の高台付椀である。口径15.6 cm、底径7.8 cm、器高7.0 cmを測る。709～711は土師器甕である。いずれも強くくの字に屈曲する口縁部を有す。712は甕の把手である。713～716は製塩土器である。717は鬮羽口で178と接合する。

この他、出土状況図で示した遺物は大部分が土師器



第34図 SB19・20実測図 (S=1/80)





第35図 SB21・SH7・8実測図 (S=1/40・1/80)

甕と製土器であるが、小破片で接合しなかったため図化はしていない。

SB22 (第37図)

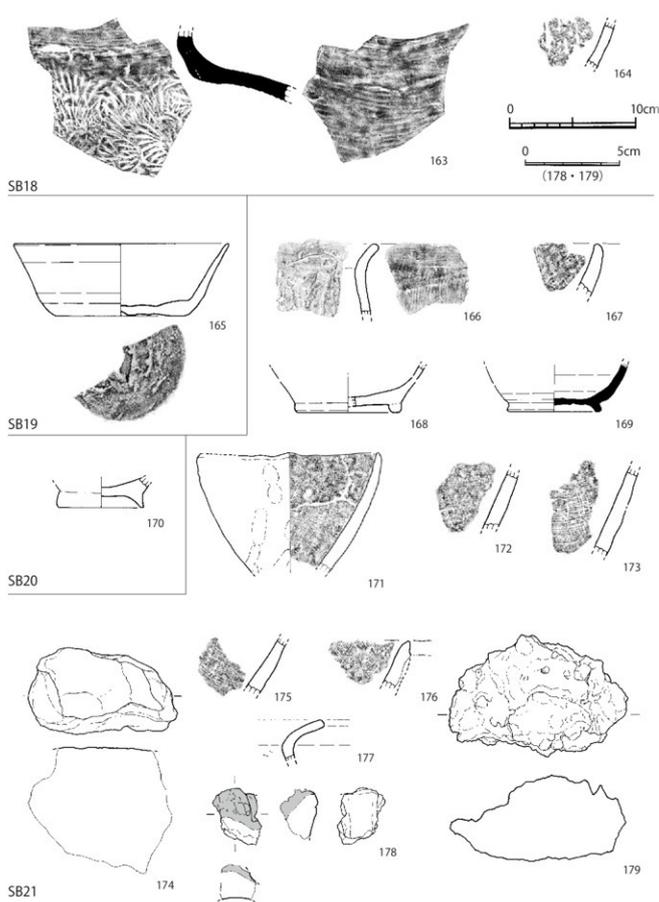
C12区で検出しており、桁行3間(5.08 m)、梁行2間(4.15 m)で、総面積は21.08 m²を測る。柱間距離は桁行平均1.69 m、梁行平均2.07 mである。主軸はN-87.5° -Wにとる。柱穴の検出面からの深さは3~40 cmを測る。検出面の南北でレベル差があるため、低い方にある南側の柱穴が浅く、高い方にある北側の柱穴が深くなる傾向にある。同一レベルを基準にすると、南側の柱穴の方が深く掘られていることから、現状の差はないまでも、当時の生活も南北で若干の高低差があったも

のと推測される。柱穴掘り形は径23~44 cmを測る。浅い南側の柱穴底面が低くなる。SD1に切られる。

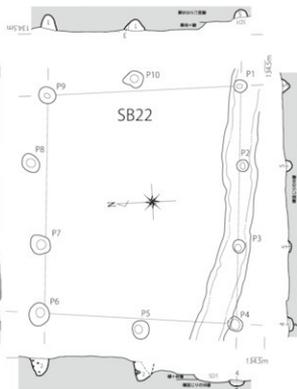
遺物は出土していない。

SB23 (第37図)

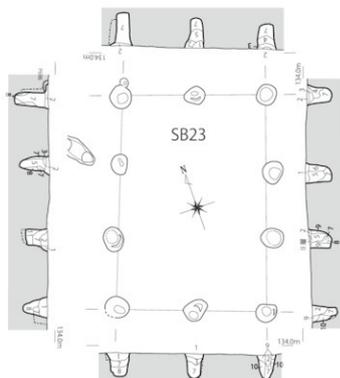
D10区で検出しており、桁行3間(4.65 m)、梁行2間(3.15 m)で、総面積は14.64 m²を測る。柱間距離は桁行平均1.55 m、梁行平均1.57 mである。主軸はN-19° -Eにとる。柱穴の検出面からの深さは45~69 cmを測る。柱穴掘り形は径40~50 cm前後の円形を呈す。桁行の中で、P7~8間が1.6 mを超え、わずかに間隔が広がる。道跡と考えられるSD14が丁度P7~8間に向かって終息しており、これら二つの遺構がなんらかの関係性



第36図 SB18~21出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)



1. 黒褐色粘質シルト土 (5 cm程度の硬・粘砂を多く含む層)
2. 黒褐色粘質シルト土 (5 cm程度の硬く含む)
3. 黒褐色粘質シルト土 (5 cm程度の硬・粘砂を多く含む層)
4. 黒褐色粘質シルト土 (硬砂をまばらに含む)
5. 黒褐色粘質シルト土
- ※断面図中の網線は自然露



1. 黒褐色粘質シルト土 (5 cm程度の硬質ブロック・砂砂をまばらに含む層)
2. 黒褐色粘質シルト土 (黒く多量)
3. 黒褐色粘質シルト土 (5 cm程度の硬質ブロック・砂砂を多く含む層)
4. 黒く多量
5. 黒褐色粘質シルト土 (硬質シルト土の割合が高い)
6. 黒く多量
7. 黒褐色粘質シルト土 (5 cm程度の硬質ブロックをまばらに含む)
8. 硬質シルト土 (硬質シルト土の割合が高い)
9. 黒く多量
10. 黒褐色粘質シルト土 (硬質シルト土がまばらに含む層)

第 37 図 SB22・23 実測図 (S=1/80)

をもっていた可能性を指摘しておきたい。さらにSB14は、底面に硬化面を有す窪地状の落ち込みに接続しており、この窪地に隣接して自然流路が流れている。より推論を飛躍させれば、自然流路は集落内を流れる旧河道、硬化面を有す窪地は船着場の一部であった可能性も考えられる。現場での調査からは、各遺構の配置以外には実証を得られていないため、ここでは一つの可能性として提示しておきたい。

出土遺物は 180 ~ 186 である。P1 から出土した 180、P2 からの 182、P7 からの 184、P10 からの 185・186 はいずれも製塩土器である。181・183 は土師器甕の口縁部。これ以外にも土師器坏などが出土しているが、小破片のため図化し得なかった。

SB24 (第 38 図)

B5 区、SB15 の東に隣接して検出しており、桁行 3 間 (5.16 m)、梁行 2 間 (3.72 m) で、総面積は 21.27 m² である。柱間距離は桁行平均 1.72 m、梁行平均 1.86 m である。主軸は N- π -E にとる。柱穴の検出面からの深さは 45 ~ 69 cm を測る。柱穴掘り形は径 40 ~ 50 cm 前後の円形を呈す。明確な柱痕跡は確認できない。P10 は建て替への可能性がある。

SB24 からは多くの遺物が出土している (187 ~ 206)。187・188・190 は P1 から出土した。187 は円盤高台坏で加工・面取りされた軽石製品。188 は砥石で磨痕が残る。190 は楕円形に加工・面取りされた軽石製品。

189・191・192 は P2 からの出土。189 は大きく外反する口縁部を有す土師器坏である。口径 13.0 cm、底径 5.5 cm、器高 4.7 cm を測る。191 は土師器の高台付椀、192 は須恵器甕の肩部である。

193・194 は P3 からの出土で、193 が土師器坏、194 が甕である。193 は口径 13.4 cm、底径 5.1 cm、器高 4.7 cm を測る。底面はヘラ切り後に丁寧にナゲられる。

195 ~ 197 は P4 から出土した。195 は土師器坏、196 は須恵器坏、197 は砂岩製の砥石であろう。

198 ~ 201 は P5 から出土している。198 は口径 12.4 cm、底径 5.3 cm、器高 5.2 cm を測る土師器坏である。199 と 200 は土師器甕で、両者共に外面はナゲ、内面はナゲズリ調整が加えられる。201 は須恵器甕で内面に車輪文、外面に格子目タタキがみられる。

202 は P6 から出土した土師器の高台付椀である。204 は P7 から出土した土師器甕である。器高の低い鍋形の資料であろうか。

205 は P10 から出土した製塩土器である。

206 は P8 から出土したチャート製の火打石である。縁辺に稜を作り出す。この稜部は使用によりつぶれる。

これらの出土遺物から SB24 の帰属時期を検討してみたい。比較的多くの遺物が出土しているが、出土した土師器坏はその形態的・法量的特徴から、9 世紀第 3 四半期の所産と考えられる。遺構の帰属時期もこの時期としておきたい。

SB25 (第 38 図)

D11 区で検出した櫛列と考えられる遺構である。5.3 ~ 5.4 m 程の距離に、直径 25 cm 前後のビレットが不等間隔で直線的に二列並ぶ、もう一列 2.6 m 程の距離で配列する。主軸は N-52.5° -W にとる。埋土にはルーズな崩れやすい土が堆積する。距離の短い一列 (P16 ~ 18) は、主軸が若干ずれているが、堆積する埋土が他の二列と同じであったため、これらと同一の遺構と判断した。

遺物は出土していない。

SB26 (第 40 図)

D8 区で検出しており、桁行 3 間 (4.4 m)、梁行 2 間 (2.8 m) で、総面積は 12.32 m² を測る。柱間距離は桁行平均 1.46 m、梁行平均 1.4 m である。主軸は N-17° -E にとる。西側の柱穴の一部が確認されていないが、これは西側が自然流路と近接しており、既に削平されている可能性が高いためと考えられる。柱穴の検出面からの深さは 15 ~ 40 cm を測る。柱穴掘り形は径 25 ~ 40 cm 前後の円形を呈す。明確な柱痕跡は確認できない。

図化できる遺物は出土していないが、P10 からはコナラと考えられる炭化ドングリが数点出土している。

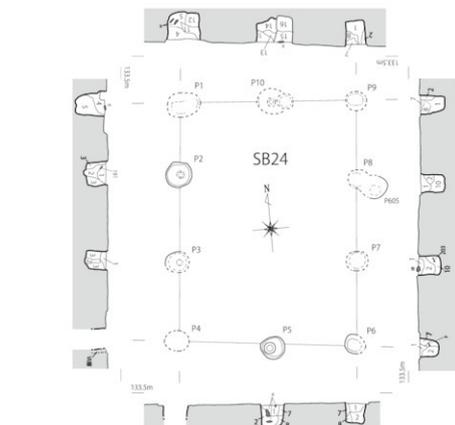
SB27 (第 40 図)

B8 区で検出しており、桁行 3 間 (6.34 m)、梁行 2 間 (3.82 m) の総柱建物である。総面積は 24.21 m² を測る。柱間距離は桁行平均 2.11 m、梁行平均 1.91 m である。主軸は N- π -E にとる。中央 2 基の柱穴配列がゆがんだり、浅かったりするが、他の柱穴と同様の埋土が堆積しているため総柱建物跡の可能性が高いと考えた。柱穴掘り形は径 25 ~ 50 cm を測る円形を呈す。検出面からの深さは 8 ~ 34 cm を測る。P6・8・9 では断面観察から、柱痕跡と考えられるものが検出された。これらの痕跡から、柱は 10 ~ 20 cm 程であったものと推測される。

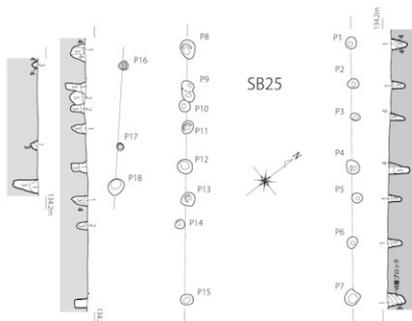
207・208 が SB27 から出土した遺物である。207 は P6 から出土している黒色土器 A 類である。高台付椀であろうか。208 は P4 から出土している製塩土器である。

SB28 (第 40 図)

E10・11 で検出しており、桁行 3 間 (6.0 m)、梁行 1 間 (3.0 m) で、総面積は 18 m² を測る。柱間距離は桁行平均 2 m である。主軸は N-57° -E にとる。柱穴掘り形は径 25 ~ 40 cm 程の円形を呈す。検出面からの深さは 12 ~ 28 cm を測る。この遺構は、検出時には掘立柱建物跡

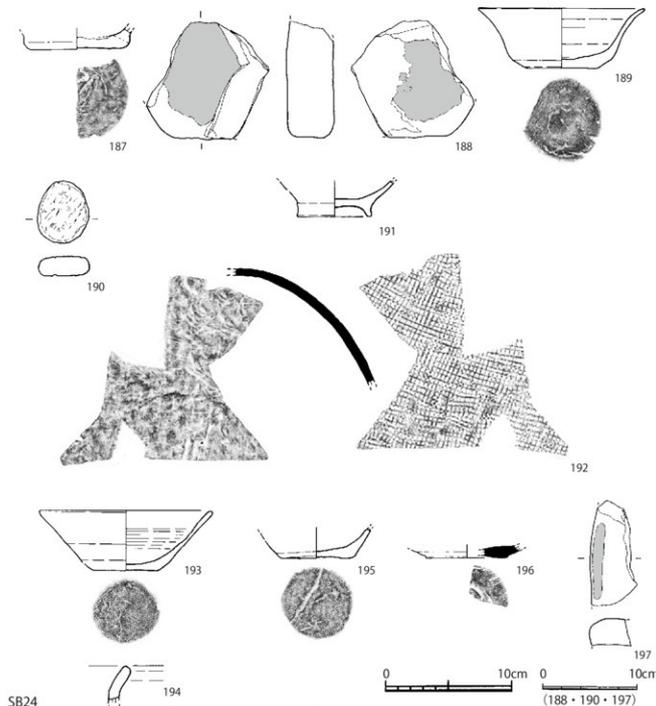
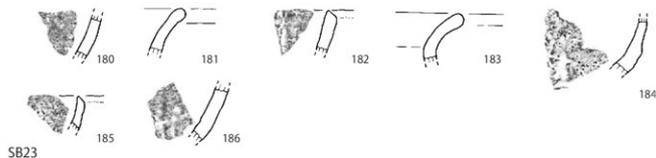


1. 褐色粘質シルト土 (灰層ブロック遺さる マンガン粒を含む)
2. 褐色粘質シルト土
3. 灰白色粘質シルト土 (マンガン粒を含む)
4. 褐色粘質シルト土 (マンガン粒を含む)
5. 褐色粘質シルト土 (灰層ブロックを含む)
6. 灰白色粘質シルト土 (黒色土ブロックを含む)
7. 灰白色粘質シルト土 (マンガン粒を含む)
8. 灰白色粘質シルト土 (マンガン粒を含む)
9. 灰黒粘質粘質シルト土 (マンガン粒を含む)
10. 灰白色粘質シルト土 (マンガン粒を含む)
11. 褐色粘質シルト土 (灰層ブロックを含む)
12. 褐色粘質シルト土 (灰層ブロックをばらばら含む)
13. 褐色粘質シルト土 (灰層ブロック・マンガン粒・粘土を含む)
14. 褐色粘質シルト土 (灰白色シルトブロックを含む)
15. 灰白色粘質シルト土
16. 褐色シルト土 (灰層ブロックを含む)



1. 褐色粘質シルト土 (1mm程度の灰白色(ヒス・矽粒をばらばら含むヒス)
2. 黒に5mm程度の灰層ブロックが遺さる
3. 褐色粘質シルト土 (ヒス)
4. 灰層ブロック・褐色粘質シルト土
5. 褐色粘質シルト土 (5mm程度の灰層ブロックをばらばら含む)

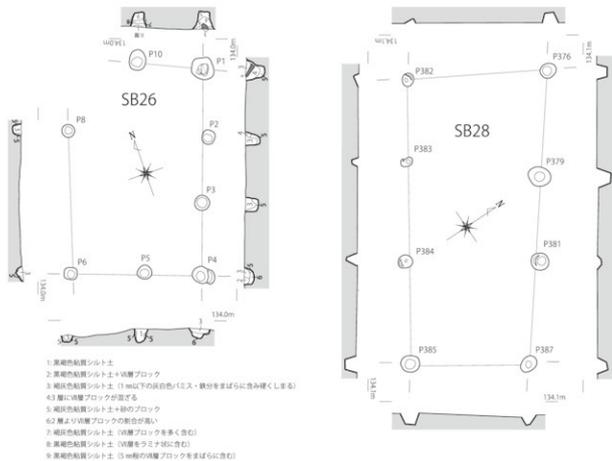
第38図 SB24・25実測図 (S=1/80)



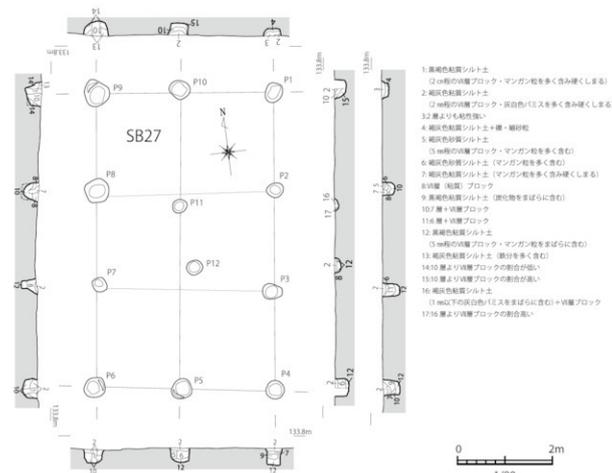
SB24

第39図 SB23・24出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

として認識できておらず、平面図の配列によって掘立柱断面は十分に観察・検討できていない。柱痕跡の有無等建物跡であると判断したものである。そのため、柱穴の断面も不明である。遺物は出土していない。

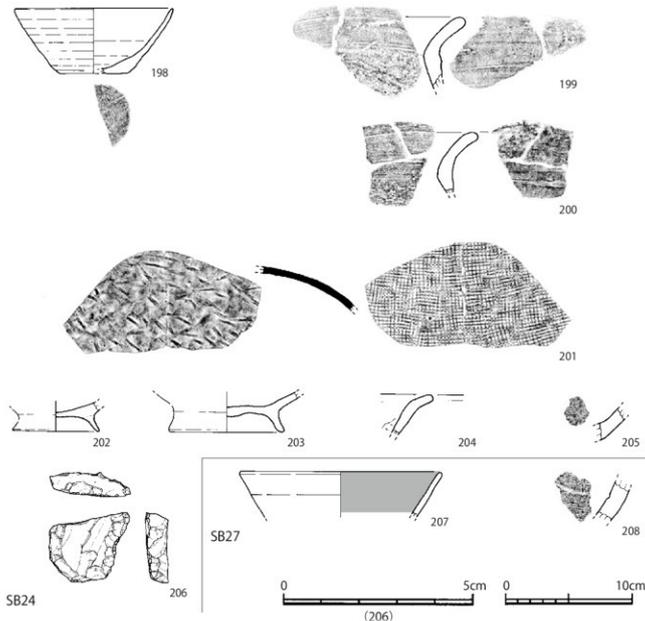


1. 黒褐色粘質シルト土
2. 黄褐色粘質シルト土+焼層ブロック
3. 黄褐色粘質シルト土 (1mm以下の灰白色(土系・鉄分をまばらに含み硬くしまる)
- 4.3 層より焼層ブロックの割合が高い
5. 黒褐色粘質シルト土+鉄分のブロック
- 6.2 層より焼層ブロックの割合が高い
7. 黄褐色粘質シルト土 (焼層ブロックを多く含む)
8. 黄褐色粘質シルト土 (焼層ブロックが少含む)
9. 黒褐色粘質シルト土 (5mm程度の焼層ブロックをまばらに含む)



1. 黒褐色粘質シルト土
2. ①中程度の焼層ブロック・マンガン酸を多く含み硬くしまる
2. 黄褐色粘質シルト土
3. ②中程度の焼層ブロック・灰白色(土系を多く含み硬くしまる)
- 3.2 層より灰白色強い
4. 黒褐色粘質シルト土+焼・焼粒
5. 黒褐色粘質シルト土
6. 黒褐色粘質シルト土 (マンガン酸を多く含む)
7. 黒褐色粘質シルト土 (マンガン酸を多く含み硬くしまる)
8. 焼層 焼粒) ブロック
9. 黄褐色粘質シルト土 (焼層ブロックを多く含む)
- 10.2 層+焼層ブロック
- 11.6 層+焼層ブロック
12. 黒褐色粘質シルト土
13. ①中程度の焼層ブロック・マンガン酸をまばらに含む)
13. 黒褐色粘質シルト土 (焼層ブロックを多く含む)
- 14.10 層より焼層ブロックの割合が高い
- 15.10 層より焼層ブロックの割合が高い
16. 黒褐色粘質シルト土
17. ①mm以下の灰白色(土系をまばらに含む)+焼層ブロック
- 17.6 層より焼層ブロックの割合が高い

第40図 SB26～28 実測図 (S=1/80)



第41図 SB24・27 出土遺物実測図 (S=1/1・1/3)

さて、これまで掘立建物跡および構列について報告してきたが、ここで建物の主軸によるグルーピング・出土遺物から同時期に存在したと考えられる建物跡を抽出し、その年代観について検討していきたい。

まず、建物主軸をみてみると南北方向18棟 (SB1・2・4・5・6～9・12・13・15・17・18・20・23・24・26・27) で、東西方向が9棟 (SB3・11・14・16・19・21・22・25・28) となる。さらに前後2°の範囲に入る建物を一つのグループとしてみると、前者では主軸が8°前後東に振れるグループAがSB1・5・8・9・15・27・13°前後東に振れるグループBがSB6・7・20、1°前後西に振れるグループCがSB2・4・17、20°前後東に振れるグループDがSB12・18・23、16°前後東に振れるグループEがSB13・26、東に4°振れるグループFがSB24となる。後者ではややばらつきが大きく、厳密なグルーピングは難

しい。大枠で見れば72～87.5°西に振れるグループGがSB3・11・16・21・22、50～62°西に振れるグループHがSB19・25・28、86°東に振れるグループIがSB14となる。

出土遺物からある程度帰属時期が推測できる建物跡を挙げると、SB14が9世紀代～10世紀前半、SB7・8が9世紀末～10世紀前半、SB11・15・16が10世紀前半、SB12が10世紀中頃、SB24が9世紀第3四半期となる。

以上から、主軸によるグルーピングが同様の帰属時期を有す遺構群を示すものと仮定すると、グループFが9世紀第3四半期、グループA+Bが9世紀末～10世紀前半、グループIが9世紀代～10世紀前半、グループGが10世紀前半という年代観が得られる。ただし、同一グループの中にも切り合い関係にある遺構があり、この年代観は厳密な意味での同時性を示すものではない。

2 土坑 (SC)

真米田遺跡では、土師器焼成土坑や井戸跡と考えられるものも含め土坑としたものが71基検出されている。基本的には径が1m前後以上のものを土坑としているが、それより小振りなものについても、円形以外の平面プランを有するものについては土坑として報告している。以下、それぞれの土坑および出土遺物について報告する。

SC1 (第42図)

B区の内9区で検出しており、長軸1m、短軸0.5m、深さ12cmの隅丸方形を呈す。遺物は出土していない。

SC2 (第42図)

B区の内16区で検出しており、長軸1.32m、短軸0.86m、深さ13cmの隅丸方形を呈す。V層最下部から掘り込まれる。遺物は出土していない。

SC3 (第42図)

B区の内C・18区で検出しており、両端が調査区外へ延びる。径1m程を測る浅い土坑部分とそれに連結する溝状部分からなる。土坑部分の深さは10cm程、溝状部分は4cm程と浅い。

SC4 (第42図)

F19区で検出しており、長軸2.72m、短軸1.92m、深さ64cm程を測る。埋土上半には縄や炭化物、焼土が入る層が堆積しており、遺物の多くも埋土・中層から出土している。床面近くにおいても焼土や炭化物を確認しており、炉跡である可能性が考えられる。埋土の下部には基本土層のⅧ層の二次堆積と考えられる層が堆積しており、床面の判別が困難であった。層がほぼ水平に堆積することからも、おそらく遺構の半分までは人為的に短期間で埋め戻されたものと考えられる。

209～226がSC4から出土した遺物である。209・210は土師器形で、法量・形態共に似る。211は円盤高台を有す坏である。口径は14.2cmを測る。212も同様の円盤高台坏。213～216は坏底部。217～223は高台付椀である。217は口径12.2cm、底径・器高7.0cmを測る。218の高台内面には圧痕が残る。この他も高台が遺存する資料については、共通して細く長い高台が付く。223は黒色土器A類の高台付椀である。224は越州窯系青磁の椀I類。225は須恵器製の頸部～肩部にかけて、226は外面ナデ調整の土師器製である。

以上の遺物からは、9世紀末～10世紀初頭の年代が付与できる。尚、床面近くの炭化材の炭素14年代測定値は、1155±20年BP(AD780～970年)という値が得られている。

SC5 (第43図)

G19区、SC4の南に隣接して検出した。長軸2.12m、短軸1.74m、深さ48cmを測る。平面プランは楕円形を

呈す。SC23と切り合が、当初は一つの遺構として考えていたため、断面にて前後関係を確認することはできていない。埋土中層から上層にかけては礎が廃棄されたような状態で大量に出土している。その中には若干の遺物や焼土ブロックも含まれる。埋土の下層にはⅧ層によく似た土が堆積していることから、ここまでは人為的に短期間で埋め戻された可能性が高い。

227～238がSC5から出土した遺物である。227は土師器坏である。228～232は高台付椀である。229は底径が8.8cmを測る。234は須恵器製の底部、235～237は土鍾。238は砂岩製の砥石である。完形に復元できる資料がないため時期判断が困難であるが、227の底径や229の丸みをおびる体部などから、9世紀末～10世紀前半頃の所産といえる。

SC6 (第43図)

G16区で検出しており、長軸0.7m、短軸0.34m、深さ42cmを測る。SB19のP2を切る。底面は二段掘りとなる。検出面近くで土師器製である239が出土している。口縁端部に平坦面を作出し、内面には凹線を巡らす。外面は丁寧にナデられており、全体的にも丁寧な作りとなる。坏等の共存遺物がないため時期比定は難しい。

SC7 (第43図)

G21で検出しており、長軸2.28m、短軸1.32m、深さ62cmの楕円形を呈す。SD3に切られる。底面近くからは自然縄が多く出土した。出土遺物には土師器坏の240、鉄滓の241がある。

SC8 (第43図)

F20区で検出しており、径0.98m円形を呈す。深さは最深で52cmを測る。底面全体には厚さ2cm程の炭化物が堆積する層がある。そこから一部二段掘りされるが、底面の炭化物層を切って掘り込まれている。この二段掘りの底面にも同様の炭化物の層が確認できる。一度火を使い燃料を燃やした後、再度小規模なピットを掘り込み、そこでも燃料を燃やしたものと考えられる。

この二段掘りピット中からは炭化材に貼りつく形で土鍾(248・249)が出土している。また、土坑内からは刀子(246・247)や土鍾(250)が出土している。

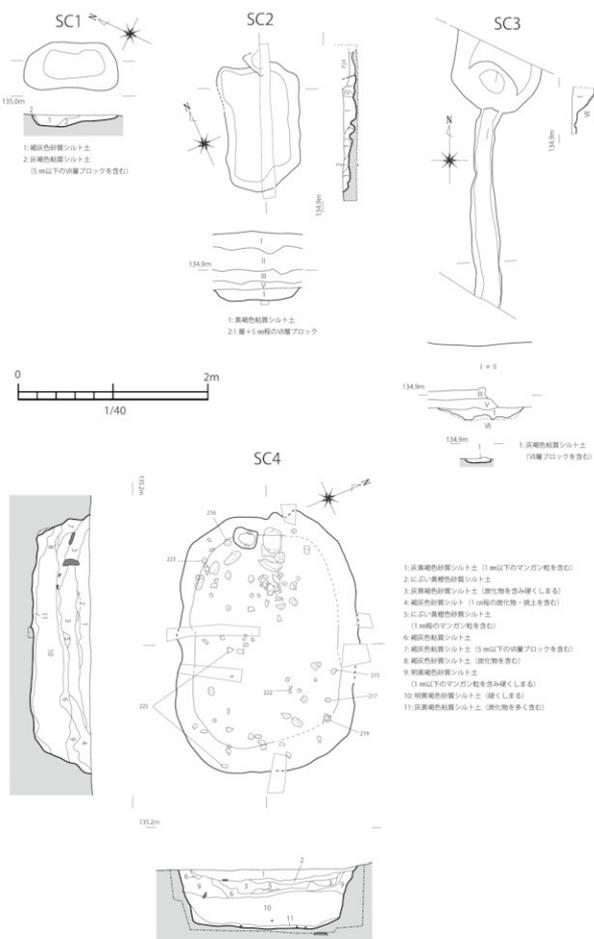
尚、床面内の炭化材の炭素14年代測定では、1095±20年BP(AD890～1000年)という数値が得られている。

SC9 (第46図)

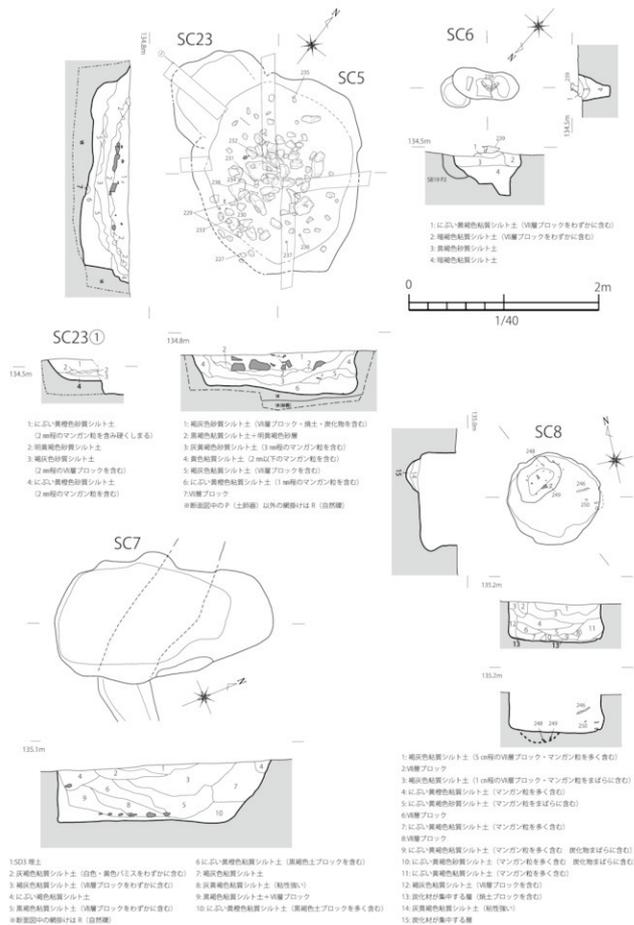
G20区で検出しており、長軸1.12m、短軸0.54m、深さ22cmの楕円形を呈す。遺物は出土していない。

SC10 (第46図)

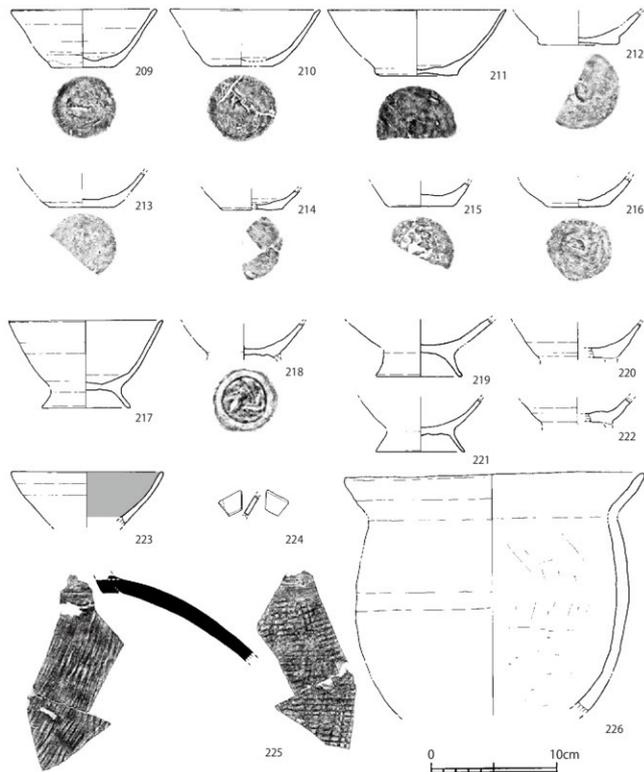
F21区で検出しており、SX1に切られる。径0.6m程の円形を呈すものと考えられる。遺物は出土していない。



第42図 SC1～4実測図 (S=1/40)



第 3 図 SC5 ～ 8・23 実測図 (S=1/40)



第 4 図 SC4 出土遺物実測図 (S=1/3)

SC11 (第 46 図)

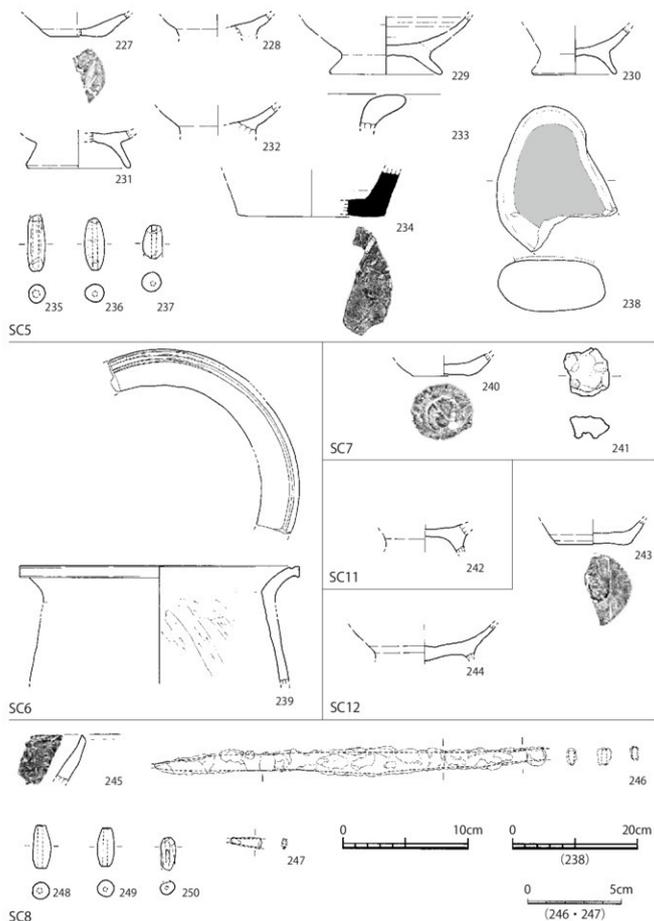
D18 区で検出しており、径約 1.0 m の円形を呈す。深さは 24 cm を測る。242 は高台付碗である。

SC13 (第 46 図)

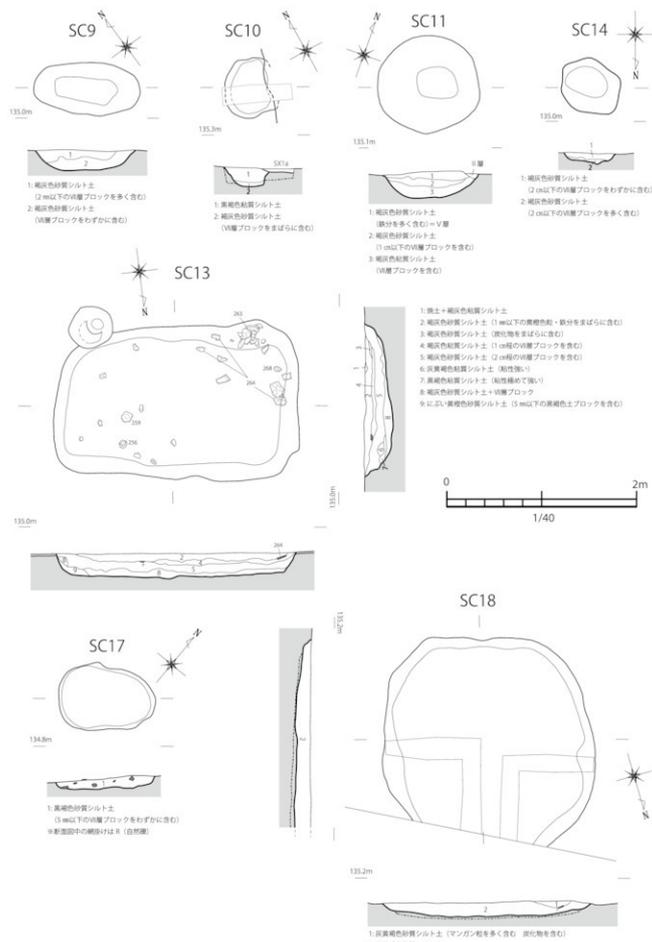
C16 区で検出しており、長軸 2.56 m、短軸 1.62 m、深さ 24 cm の隅丸方形を呈す。SB11P46 に切られる。埋土 259 は高台付皿であらうか。261 は瓶の底部と考えられる。262 は緑釉陶器の皿であらうか。淡緑色を呈し、硬質な

こから多くの遺物が出土している。

251 ～ 268 が SC13 出土遺物である。251 ～ 256 は土師器環。251 は口径 10.8 cm、底径 4.8 cm、器高 3.1 cm を測る。体部がやや丸みをおびる。その他の資料は底径 4 ～ 5.4 cm を測る。257 ～ 260 は土師器の高台付碗である。



第45図 SC5～8・11・12 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3・1/6)



第46図 SC9～11・13・14・17・18 実測図 (S=1/40)

胎土を有しており、京都産洛西型ないしは東海産と考えられる。263・264は土師器甕である。調整・形能共によく似る。外面がナデ・タタキ、内面がナデ・ケズリにより調整される。263の口縁端部は平坦面が作出され、264は舌状を呈する。265は須恵器大甕の底部付近、266は須恵器壺の肩部付近。267は輪羽片、268は鉄滓である。

出土遺物は埋土上層からの出土が多く、確実に遺構に伴うと考えられる遺物は少ない。遺構の廃絶後ある程度埋没した後に廃棄ないしは流れ込んだ遺物の可能性が高い。唯一完形に復元できる土師器杯(251)をみると、形能的・法量的には10世紀後半の資料といえる。土師器甕については、外面にタタキ調整がみられることから、9世紀第3四半期以前の所産である可能性が考えられる。SC13を切るSB11はその出土遺物から、10世紀前半頃の所産と考えられる。そのためSC13は、9世紀第3四半期～10世紀前半頃の所産と考える。

SC14 (第46図)

H20区で検出しており、長軸0.7m、短軸0.64m、深さ10cmの円形を呈す。269は埋土上層から出土した製塩土器の底部である。

SC17 (第46図)

H20区で検出しており、長軸1.02m、短軸0.72m、深さ10cm程の楕円形を呈す。周辺に広がる窪地状の落ち込みの堆積土に掘り込まれる形で検出している。270は埋土上層から出土した土師器杯で、円盤高台を有す。

SC18 (第46図)

D21区で検出しており、一部は調査区外に延びる。径2.2m程の円形を呈すものと考えられる。埋土にはマンガング粒を含む土が堆積しており、地山Ⅶ層とよく似る。図化できる遺物は出土していない。

SC19 (第48図)

G18区で検出しており、SD7とした溝状遺構と連結する。それぞれSC19、SD7と別の名称を付けているが、本来は同一遺構であったものと考えられる。長軸2.52m、短軸1.8m、検出面からの深さ42cmを測り、平面プランは楕円形を呈す。埋土上層から下層にかけて同一と考えられる層が厚く堆積していることから、短期間のうちに埋没したのと考えられ、人為的に埋め戻された可能性が高い。底面近くには炭化物を多く含む薄い層が確認できる。

標高の高い方から低い方にかけて溝状遺構が走行し、最終的に土坑に連結するという平面形態を考えると、農耕用の溜め井状の遺構とも考えられる。ただし、土坑の底面には炭化物を含む層が確認できることから、当初は工房跡であった遺構を、後に溜め井として再利用した可

能性も考えられる。

遺物は埋土の上層から多く出土している。271～280がSC19出土遺物である。271～274はいずれも完形に復元できる土師器杯である。いずれも底部がわずかに突出し円盤高台状を呈す。275～280は高台付椀である。高台部を欠くものが多い。体部はほぼ直線的に立ち上がる。土師器杯の形態・法量はややばらつきがあるが、概ね9世紀第3四半期～10世紀初頭に収まるものといえる。

SC20 (第48図)

H18区で検出しており、長軸1.76m、短軸1.06m、深さ18cmを測る。平面プランは楕円形を呈す。底面が平坦でなく、中央が一段突出する。

埋土より越州窯系青磁褐彩が出土している(281)。外面に褐彩が認められ、内面に目跡が残る。

SC21 (第48図)

G18区で検出しており、長軸1.42m、短軸0.98m、深さ28cmの楕円形を呈す。底面は平坦でない。

282～285がSC21出土遺物である。282・283は土師器杯、284は高台付椀、285は土師器甕である。282は口径10.4cm、底径5.0cm、器高3.1cmを測り、体部がやや丸みをおびる。10世紀後半の所産であろう。

SC22 (第48図)

G・H18区で検出しており、長軸0.98m、短軸0.66m、深さ22cmの楕円形を呈す。Ⅶ層中に掘り込まれており、埋土上位にはⅤ層が堆積する。土師器の高台付椀である286が出土している。

SC23 (第43図)

G19で検出した径1.1m、深さ24cmの土坑で、SC5と切り合うが前後関係は不明である。遺物の出土はない。

SC24 (第48図)

F21区で検出しており、径0.64cmの円形を呈す。検出面からの深さは12cmを測る。遺物は出土していない。

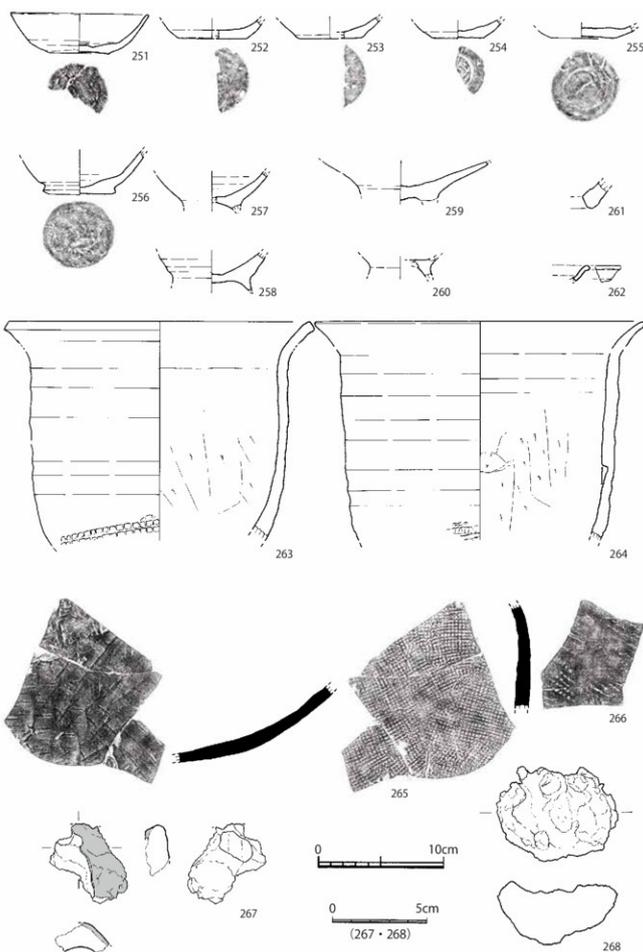
SC25 (第48図)

E21区で検出しており、長軸0.84m、短軸0.4m、深さ32cmの不整形を呈す。二つの別ピットが重なるようにも見えるが、断面観察から一つの遺構とした。遺物は出土していない。

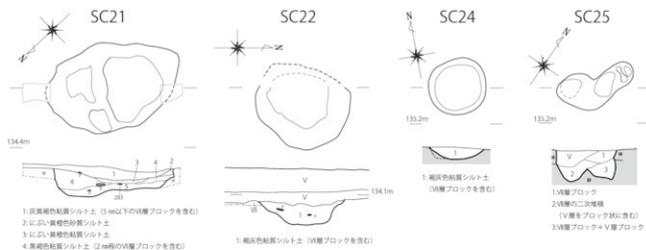
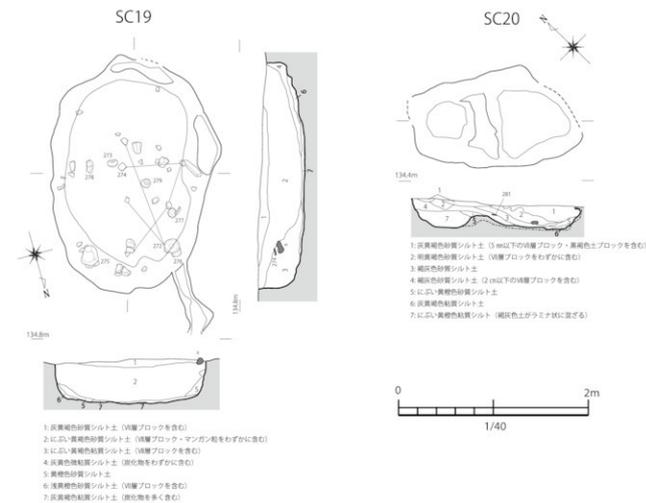
SC26 (第50図)

E・F22区においてSB7の柱穴列に囲まれるように検出されている。主軸はN-20°-Eに亘る。SB7の項でも述べたように、SB7とは若干主軸がずれるため、別遺構として認識した。長軸4.68m、短軸1.18m、検出面からの深さ36cmを測る。平面プランは隅丸方形を呈す。

遺構の底面には、奉天・人頭大の礎が0.8～1.5mの間隔で置かれられている。埋土からは鉄釘が大量に出土



第47図 SC13出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)



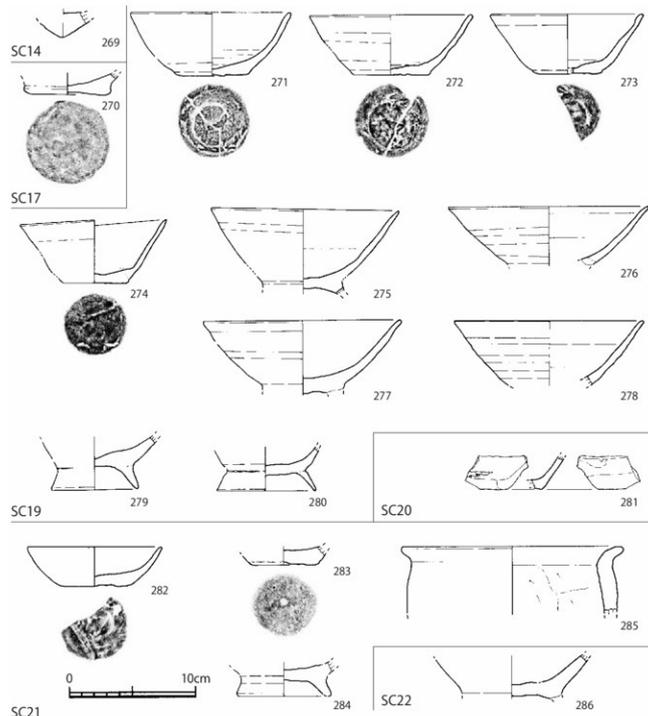
第 48 図 SC19～22・24・25 実測図 (S=1/40)

していることから、木棺や木桶等が石の上に置かれていた可能性も考えられるが、土層断面からはそのような木材の痕跡は看取できなかった。また、後述するように多くの遺物が出土しているが、破片資料が多く、供献したような完形の遺物は出土していない。そのため遺物の性格は不明とせざるを得ない。

287～348が遺構内埋土中より出土した遺物である。

287～296は土師器環である。比較的多くの破片が出土しているが、接合するものが少なく、287が唯一の全体的な形態が復元した資料であるが、摩耗しているため本来はまだ口縁が延びる可能性がある。297・299～301は高台付碗。300の高台内面には放射状の圧痕がみられる。

302～304・308は緑軸陶器で、302は淡緑色を呈し、軟質な胎土を有する皿であろう。京都産洛北型ないしは



第 49 図 SC14・17・19～22 出土遺物実測図 (S=1/3)

防長産であろう。303も硬質な胎土を有す、京都産洛北型ないしは防長産の緑軸陶器である。304は硬質な胎土、削り出しの輪状高台を有す。京都産洛西型の資料である。308も緑軸陶器片である。硬質な胎土を有す、京都産洛西型ないしは東海産と考えられる。

305～307は土鍾である。305のみが完形資料で、長さ3.4cmを測る。

309は越州窯系青磁椀Ⅱ類の口縁部片である。

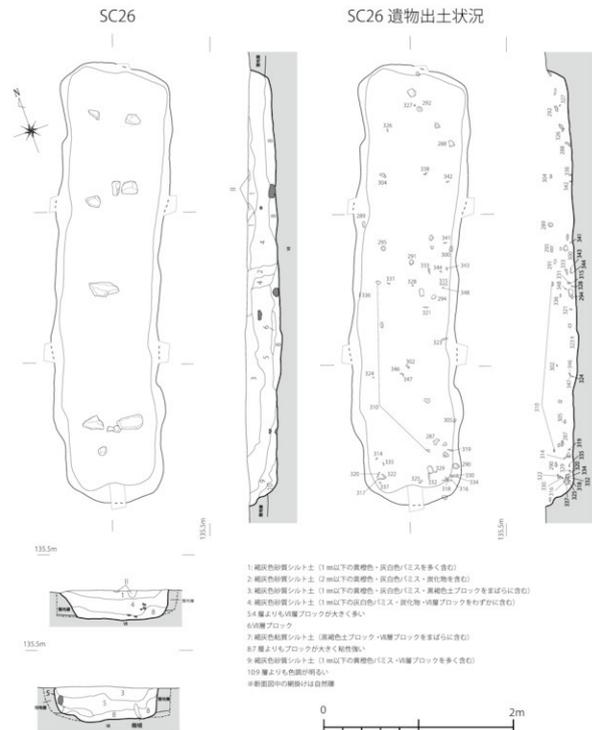
310～313は須恵器である。310・311は甕の口縁部、

312・313は甕の胴部片である。

314～348は鉄釘である。断面形態は大部分がほぼ正方形のものないしは若干横長の長方形を呈す。完形品は少ないが、全長が推測できるものについては、8～10cm前後のものが多い。また、頭が残る資料については、くの字に折れ曲がるものがほとんどである。

完形に復元した287も資料的には不安定なもので、遺構の帰属時期を割り出すのは難しい。環の底部が5cm程度であることを評価すれば、9世紀末以降の資料といえる。SC27 (第53図)

F21・22区で検出しており、径0.88mの円形を呈する。



1. 褐色砂質シルト土 (1m以下の黄褐色・灰白色) (土を多く含む)
 2. 褐色砂質シルト土 (2m以下の黄褐色・灰白色) (土・炭化物を含む)
 3. 褐色砂質シルト土 (1m以下の黄褐色・灰白色) (土・炭化物・黒土ブロックをまばらに含む)
 4. 褐色砂質シルト土 (1m以下の灰白色) (土・炭化物・黒土ブロックをわずかに含む)
 5. 4層よりも厚層ブロックがまばらに含む
 6. 黒層ブロック
 7. 褐色粘質シルト土 (黄褐色土ブロック・黒層ブロックをまばらに含む)
 8. 黒層ブロックがほとんど含まれない
 9. 褐色砂質シルト土 (1m以下の黄褐色) (土・黒層ブロックを多く含む)
 10. 9層よりも色調が明るい
- ※断面図中の縦線は自然層

第50図 SC26 実測図・遺物出土状況 (S=1/40)

検出面からの深さは30 cmを測る。

349～352がSC27より出土した遺物である。349・350は土師器である。349は柱状の内盤高台を有す。口径12.1、底径5.0、器高4.4 cmを測る。351は両里の高台付椀である。外面のミガキ調整は磨耗のためはっきりしない。352は布痕が残る製塩土器である。

出土した土師器の形態・法量からは、9世紀末～10

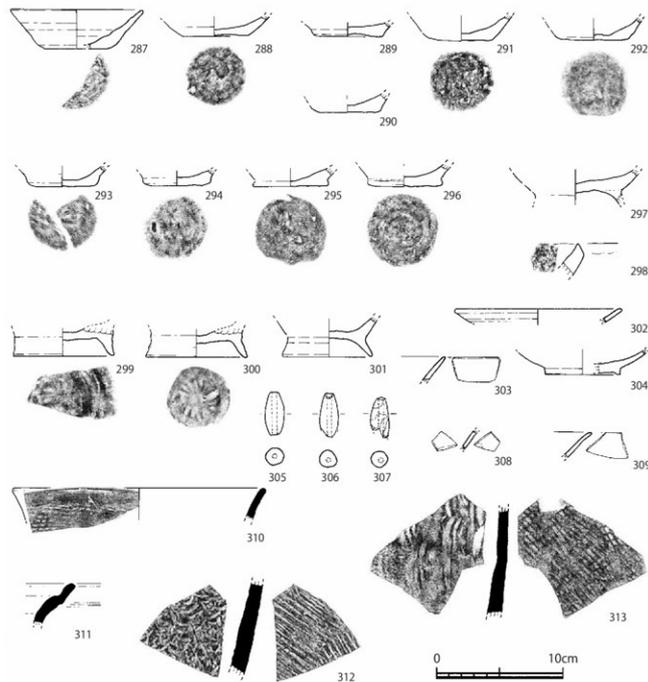
世紀初頭の所産と考えられる。

SC28 (第53図)

G22区で検出しており、長軸0.66 m、短軸0.58 m、深さ28 cmの楕円形を呈す。出土遺物は製塩土器である。353がある。

SC29 (第53図)

F22区で検出しており、長軸0.79 m、短軸0.56 m、



第51図 SC26 出土遺物実測図① (S=1/3)

深さ52 cmの楕円形を呈す。P221を切る。

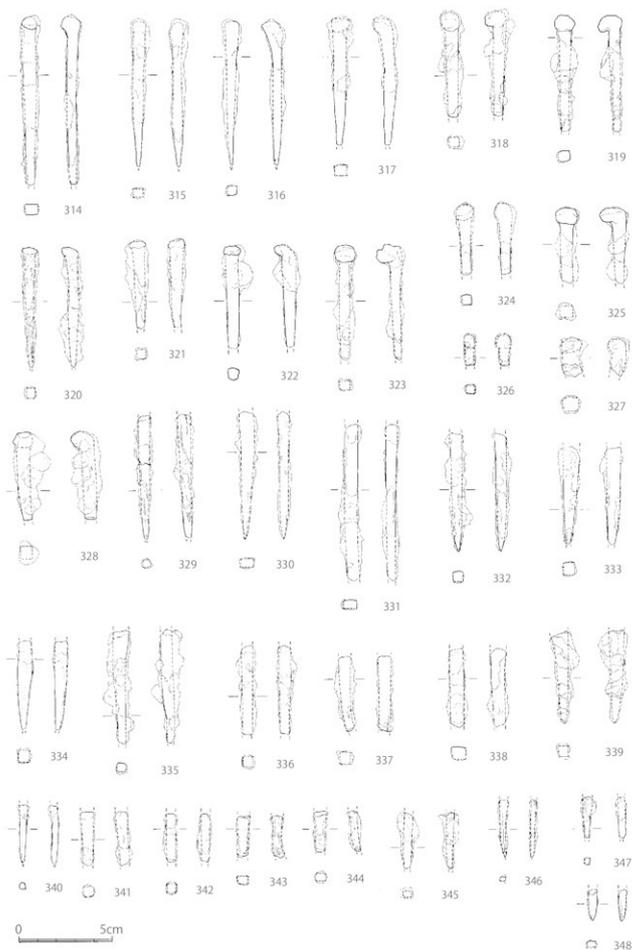
354～356がSC29出土遺物である。354は土師器、355は高台付椀である。356は須恵器甕の胴部片と考えられ、外面は格子目タキ、内面は平行タキの後ナデが加えられている。

SC30 (第53図)

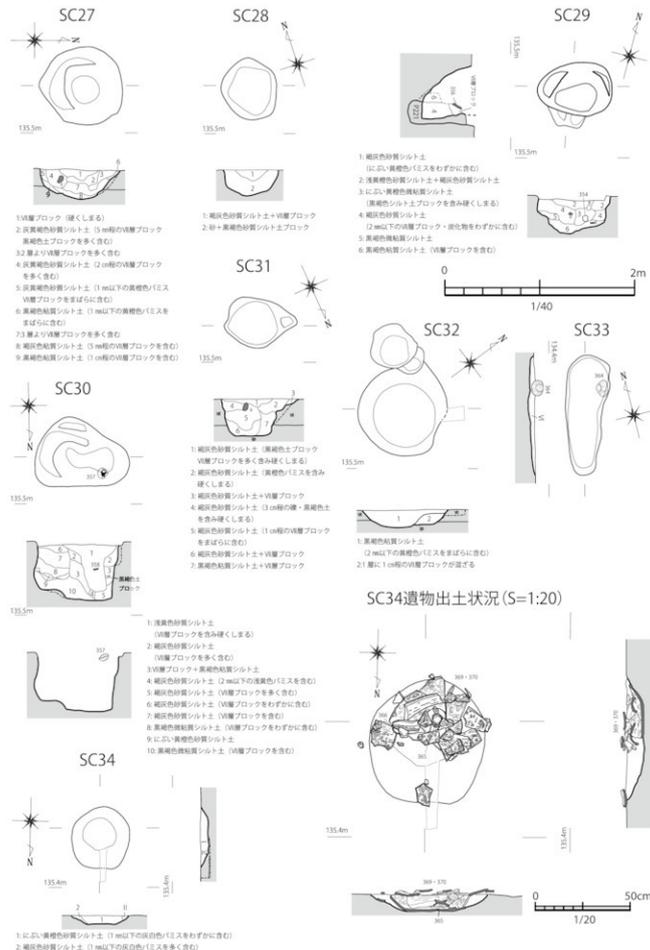
F22区でS8の北側の柱穴に重複して検出されているが、他遺構との切り合い関係はない。長軸0.98 m、短軸0.76 m、深さ62 cmを測り、ひょうたん形の平面プランを呈す。底面は二段掘り状となり、段差を有す。断面観察からは、上部が広がる柱状の痕跡が確認でき、

れが柱の抜き取り痕である可能性が考えられる。このように、柱痕跡と考えられるものが断面で確認されたが、掘立柱建物跡のような柱穴(土坑)の配列がみられなかったため、単体の土坑として報告している。

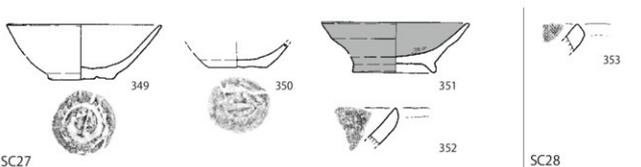
埋土からは357～362の遺物が出土している。357～359は土師器で、357の内面には漆と考えられる痕跡の付着物がある。この資料は赤外線分光分析を行っているが、その結果からも付着物は漆の可能性が指摘されている(第4章第5節参照)。法量は、口径11.6 cm、底径5.5 cm、器高4.5 cmを測る。358も同様の法量を示す。360は高台付椀、361は須恵器の口縁部、362は製塩土器である。



第52図 SC26 出土遺物実測図② (S=1/2)

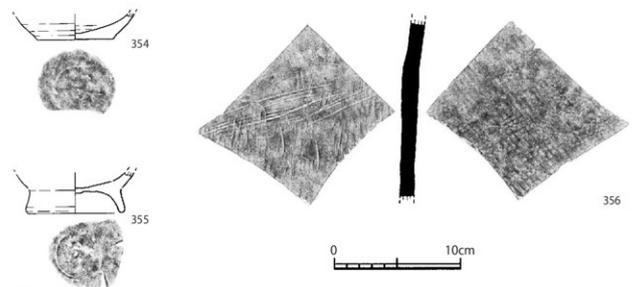


第53図 SC27 ~ 34 実測図 (S=1/40)・遺物出土状況 (S=1/20)



SC27

SC28



SC29

SC30

第54図 SC27～30 出土遺物実測図 (S=1/3)

ここでは完形に復元できる土師器環から帰属年代を考えてみると、法量的にまとまりのある357・358からは9世紀末～10世紀初頭の年代が得られる。ただし、359の

ような底径が6cm台で口径が10cm前後になると思われる資料も出土していることから、やや幅を持たせ、9世紀末～10世紀前半代の所産としておきたい。

SC31 (第53図)

F22区で検出しており、長軸0.76m、短軸0.54m、深さ38cmの不整形形を呈す。363は埋土上層から出土した土師器の高台付桶と考えられる資料である。磨耗が著しく調整等は判然としない。

SC32 (第53図)

G21区で検出しており、SB9のP195に切られる。P195はさらに、SB8のP5に切られる。長軸1.02m、短軸0.86m、深さ18cmの楕円形を呈す。遺物は出土していない。

SC33 (第53図)

F15区で検出しており、長軸1.26m、短軸0.42m、深さ8cmの長楕円形を呈す。埋土には基本土層のVI層が堆積している。現況では最も深いところでも8cm程しかないが、本来はこれよりかなり上面から掘り込まれていたものと考えられる。掘り形に口縁部を立てて立かけられるように完形の黒色土器A類の高台付桶(364)が出土している。土坑の平面プランや完形の土器が出土していることから、土坑墓であった可能性が高い。その他の遺物は出土していない。

364をみると、腰部に丸みをおびて立ち上り、口縁部付近で外反する器形を呈す。高台は長くハの字に開く。このような形から10世紀前半代の資料と考えられる。

SC34 (第53図)

G21区で検出しており、径約0.65mの円形を呈す。検出面からの深さは浅く、約10cmを測るのみである。検出面が表土の直下であり、土坑の上部は既に削平されているものと考えられる。この土坑から、同一個体と考えられる369・370をはじめ、遺物が埋納されている状況が確認された。ただし、検出面付近の破片は原位置をとめていない可能性がある。

365は高台付皿である。出土状況図にあるように、須恵器の大甕である369・370の破片に挟まれるような状況で出土している。366は土師器環、367は製塩土器である。368は須恵器大甕の口縁部であるが、369とは別個体である。底径が5cmで口径もさほど大きくならないと考えられる366や、皿部が扁平で高台の短い365から判断すると、概ね10世紀代の資料と考えられる。遺物の帰属時期を判断するには材料が少ないが、ここでは10世紀代頃の所産と考えておきたい。

SC35 (第55図)

E・F23区で検出しており、長軸0.74m、短軸0.52m、深さ44cmの不整形形を呈す。P217を切る。埋土には焼土が混ざり、腐化できた遺物は出土していない。

SC36 (第55図)

SC36の北側、E23区で検出しており、長軸0.94m、

短軸0.54m、深さ78cmを測る。平面プランはひょうたん形を呈す。P219に切られる。平面プランには異なる二つの土坑が切り合うようにも見え、土層断面の観察から一つの遺構と判断した。底面は平坦でなく、テラス状の段差を有す。SC35同様埋土には焼土を含む。さらに、埋土の中心から下位にかけては人頭大の礫を多く出土している。

371～374が出土遺物である。371は土師器甕の口縁部である。372～374は須恵器甕の破片である。

SC37 (第55図)

H22区で検出しており、長軸0.78m、短軸0.46m、深さ34cmを測る。出土遺物には須恵器環の375、製塩土器の376がある。

SC38 (第55図)

B3区で検出しており、長軸1.46m、短軸1.38m、深さ38cmの隅丸方形を呈す。SC40に切られる。土坑の中央やや南よりに小ビット状の落ち込みがみられ、そのビットに貼りつく形で焼土層が堆積する。周辺には炭化物も散在していることから、炉跡であるものと考えられる。鍛冶関連の遺物は出土していないが、何らかの工務跡の可能性もある。

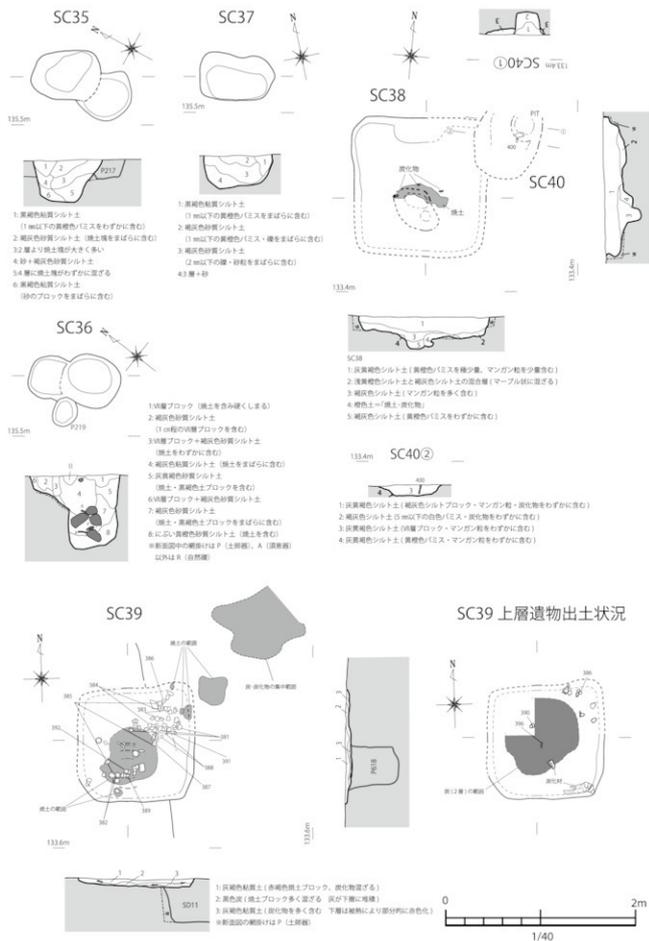
377～380はSC38より出土した遺物である。377は製塩土器、378は須恵器環、379は須恵器甕の胴部、380は土鐘である。

SC39 (第55図)

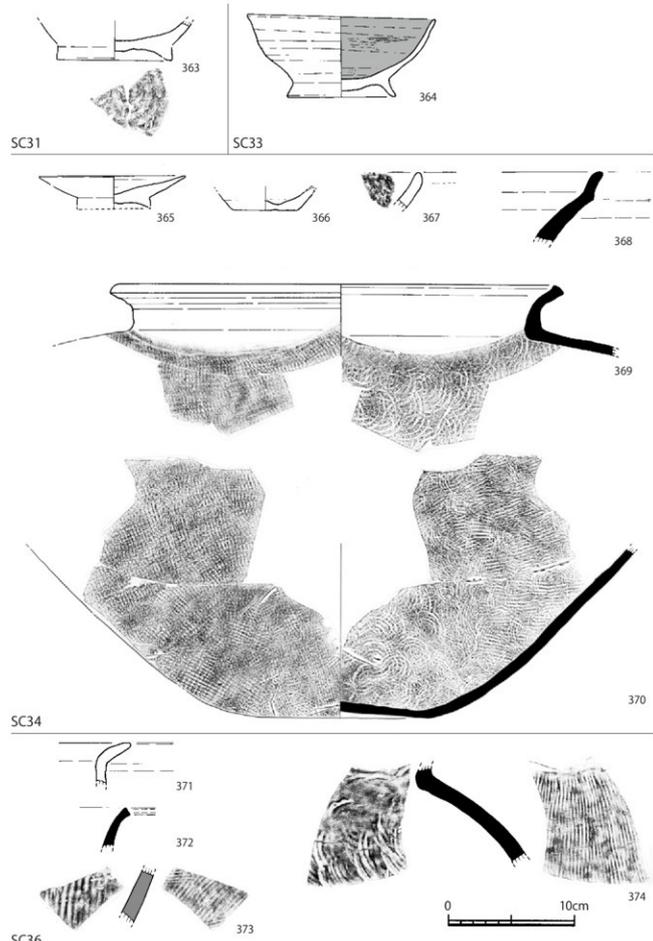
B5区で検出した土師器焼成土坑と考えられる遺構である。一边1.2m程の隅丸方形を呈す。検出面からの深さは浅く、最大でも8cm程を測るのみである。SD11およびP618を切る。埋土の最上部には焼土や炭化物を含む層が堆積しており、中位には燃料と考えられる木材の炭化したものが広がる層が確認できる。底面は被熱し、赤色化する。

さらに、遺構の周辺には焼土や炭化物が集中する範囲がみられる。出土遺物の多くが小破片となり遺構の北東隅にかたまつて出土していることや、遺構外の北東部にも上述のような焼土や炭化物の範囲があることから、焼成した遺物を遺構の北東側からかき集めたのではないかと推測される。遺物をかき集め、取り上げようとした際に焼き歪みのひどいものや破損したものをそのまま廃棄したのではないだろうか。遺構外にみられる焼土や炭化物もこの作業の際に出たものと推測される。そうすると、現在の検出面は実際の生活面と大きく変わらないということになり、本遺構の深さは当初より浅かったものといえる。

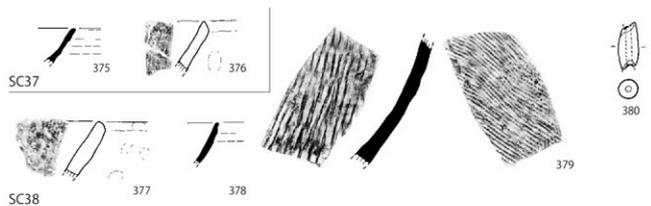
381～396がSC39から出土した遺物である。刀子片と



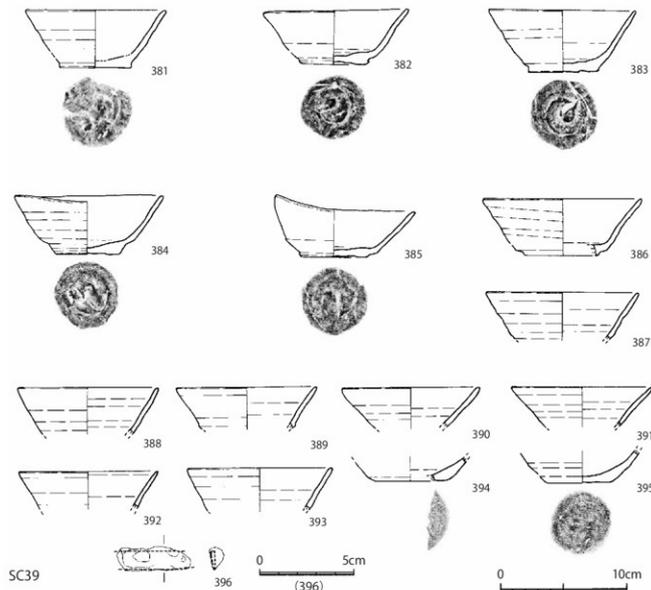
第55図 SC35～40実測図 (S=1/40)



第56図 SC31・33・34・36出土遺物実測図 (S=1/3)



SC38



第57図 SC37～39 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

考えられる396以外は全て土師器環で、底部が残る資料は全て円盤高台を有す。これらの資料の法量を見てみると、口径が11～12.3cmで平均11.3cm、底径が5.0～5.5cmで平均5.3cm、器高3.7～5.0cm、平均4.7cmを測る。胎土は浅黄橙色系である。384・385は焼き歪みが見られ

る。上述のような土師器環の法量から、口径については若干ばらつきが見られるが、焼き歪みによるところが大きく、法量的・形態的にはかなりまとまった資料といえる。具体的には9世紀末～10世紀初頭の資料と考えられる。

SC40 (第55図)

B3区で検出しており、短軸0.68mの楕円形を呈すものと考えられるが、調査時に大部分を掘り過ぎていたため、詳細は不明である。断面図をみると別ピットに切られるようであるが、これも平面形態等は不明といわざるを得ない。本来であれば別遺構として報告すべきであるが、遺物の取り上げについてもSC40と混同して取り上げてしまっているため、ここでは同一遺構として報告する。

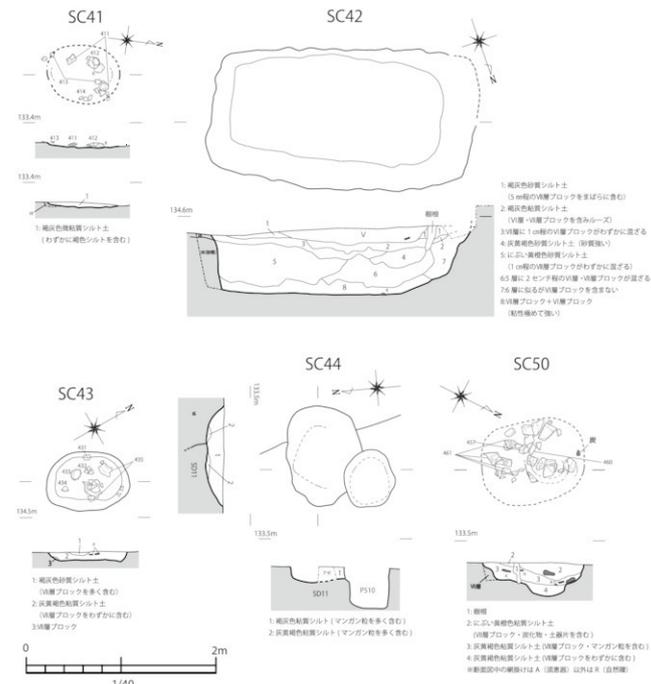
出土遺物は397～410である。397は土師器環、398・399は高台部を欠くため断定はできないが、高台付椀で

だろうか、400は黒色土器A類の高台付椀、402は土師器環であるが、外面には墨書がみられる。文字であるのか記号であるのか判断としない。403～410は製土器である。403は完形に復元できるもので、口径12cmを測る。404はそれより一回り大きな口縁を有す。磨耗しているものが多いが、いずれも内部には布目を残す。

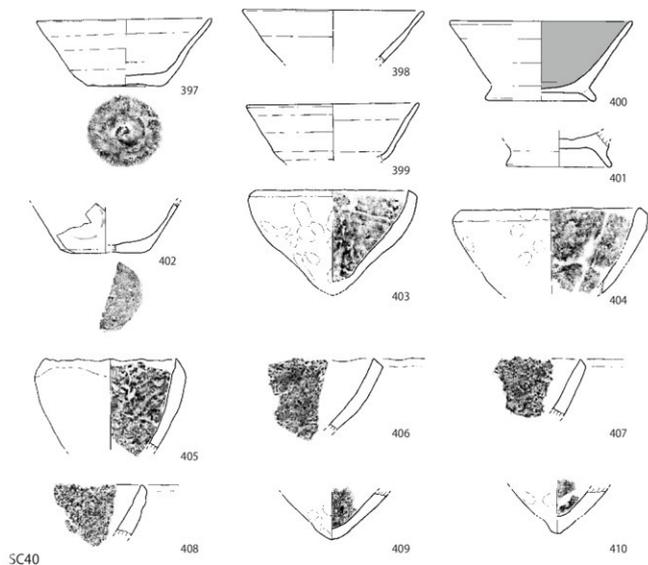
SC41 (第58図)

B4区で検出しており、長軸0.78m、短軸約60cm、深さ4cm程度の楕円形を呈すものと思われる。大部分を掘り過ぎてしまっているため、全体的なプランは不明である。

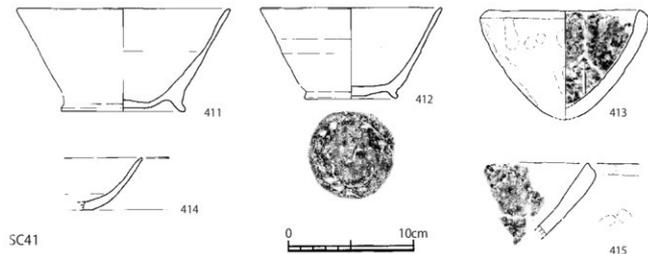
411～415がSC41出土遺物である。411・412は土師



第58図 SC41～44・50 実測図 (S=1/40)



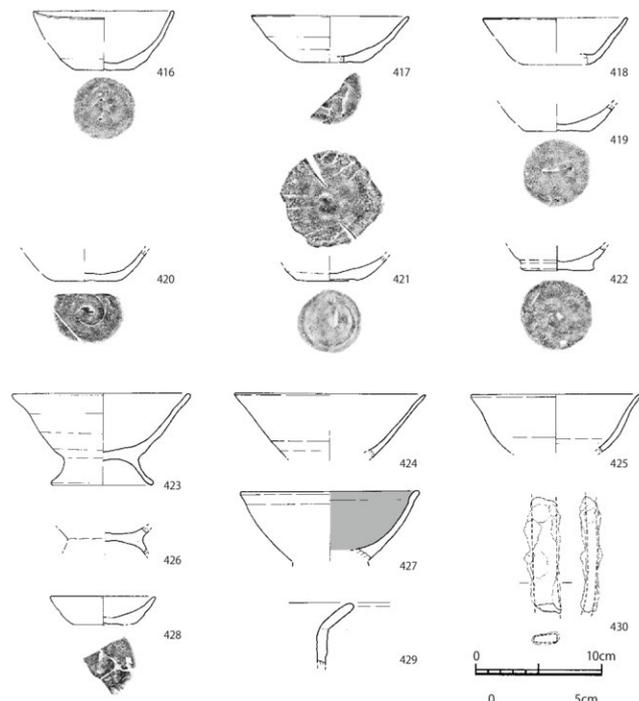
SC40



SC41

第59図 SC40・41 出土遺物実測図 (S=1/3)

器の高台付椀である。法量には差があり、411が一回り大きくなるが、形態的にはよく似る。逆台形の椀部分に短く外に折れ曲がる高台が付く。須恵器的な器形を呈す。胎土の色調は異なり、411が浅黄橙色系、412が橙色系を呈す。413・415は製塩土器である。413は口径11.9cmを測る。
SC42 (第58図)
G17区で検出しており、長軸2.78m、短軸1.48m、



第60図 SC42 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

深さ68cmの長方形を呈す。埋土の最上部には基本土層のV層が堆積している。中位から下位にかけては、基本土層のVII層によく似た土が堆積する。基本土層の各層がブロック状に堆積していることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。
遺物の多くは埋土上層から出土している。416～430がSC42の出土遺物である。416～422は土師器類。全体的な器形が分かる416～418をみると、法量にややばらつきみられる。422は内盤高台を有す。423～427は高台付椀である。423はほぼ完形の資料で、椀部の体部下端にはケズリ状の面取りがみられる。長く細身の高台が付く。体部はやや丸みを帯び、口縁部付近でわずかに外反する。427は内黒の黒色土器A類である。428は小環のように復元しているが、口縁端部が磨耗することから、もう少し口縁部が延びる可能性がある。429は土師器製の口縁部、430は不明鉄製品である。
SC43 (第58図)
D12区で検出しており、長軸0.86m、短軸0.62m、深さ10cmの楕円形を呈す。埋土からは431～433が出土している。431～433は土師器類である。いずれも磨耗が著しい。法量・形態共にまともは認められない。433は底部から粘土紐の巻上げで形成される。434は焼

成不良の須恵器蓋である。435は土師器鉢である。

SC44 (第58図)

B5区で検出しており、長軸1.06m、短軸0.8m、深さ18cmの楕円形を呈す。F510に切れ、SD11を切る。

436は埋土層から出土した土師器杯である。

SC45 (第62図)

D7区で検出しており、長軸0.97m、短軸0.88m、深さ30cmの不整円形を呈す。SC46を切る。遺構内に堆積する埋土はSC46とよく似る。

437・438がSC45出土遺物である。437は土師器蓋、438は土鍾である。

SC46 (第62図)

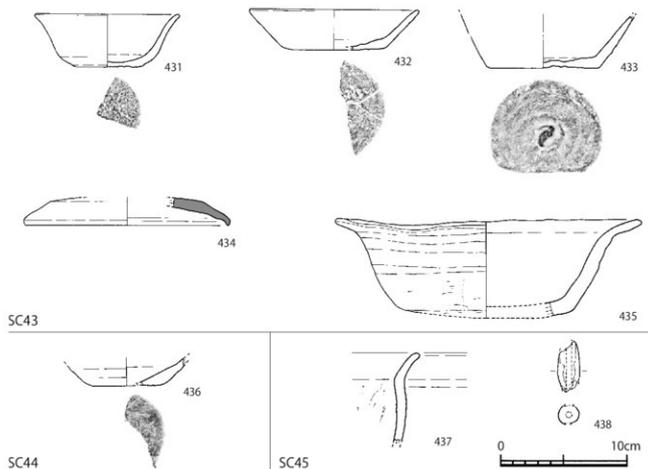
D7区で検出しており、SC45に切られる。長軸5.64m、短軸1.62m、深さは検出面からの深さは30cmを測る。平面形態は、一段深い楕円形の土坑部分に、さらに小さく浅い土坑が取り付くような形を呈す。遺構内埋土の中層には焼土を多く含む層が堆積しており、その下位には被焼したためか、硬化した小さな土塊となった層が部分的にみられる。最下層には粘質土が堆積する。埋土内からは遺物が多く出土しているが、特に焼土を含む中層から多く出土した。土師器焼成土坑と考えられるSC39

やSC63のような焼成用燃料の痕跡である炭化材の層は確認できなかったが、焼土を多く含む層や被焼したと考えられる層が確認されたことから、やはり土師器焼成土坑であった可能性が考えられる。ただし、黒色土器や越州窯系青磁なども出土していることから、全ての資料がこの遺構に伴うものではないといえる。

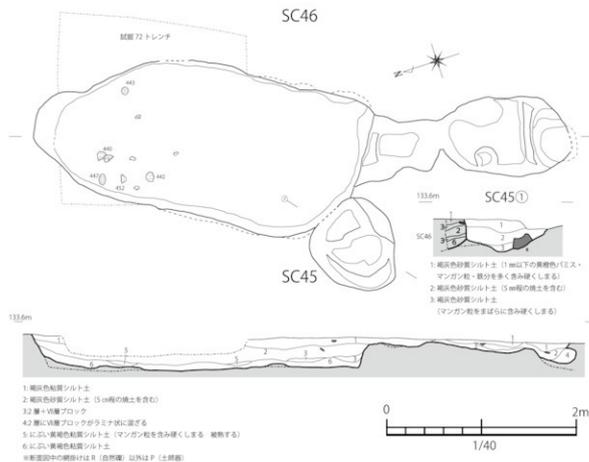
出土遺物をもとに、完形に近い資料が多く出土していることも上述の見解を支持するものといえる。439～456がSC46出土遺物である。439～446は土師器杯で、439～442は完形に復元できる資料である。法量を見ると、口径は10.7～12.1cmで平均が11.3cm、底径は5.1～6.5cmで平均が5.9cm、器高は4.4～4.8cmで平均が4.6cmとなる。440のような焼き歪みの大きい資料もある。

447～453は土師器の高台付椀である。447は完形品で、口径11.9cm、底径6.2cm、器高6.1cmを測る。底部が厚く、充実高台にさらに直線的な高台が付くような形態を呈す。高台内面には放射状の圧痕が残る。453は黒色土器A類で、丸みをおびる体部に短い高台が付く。456は越州窯系青磁の大型椀1類である。

上述のように、これらの遺物の中には遺構に伴うものではなく、流れ込みと考えられる資料も存在していると



第61図 SC43～45 出土遺物実測図 (S=1/3)



第62図 SC45・46実測図 (S=1/40)

いえる。そのため、ここではほぼ完形に復元でき、法量や器形が明確な資料を取り上げて編年時期を考えてみたい。土師器杯である439～442の法量にはややばらつきがみられるものの、体部が丸みをおびる器形や口径が12cm以下に縮小することなどから、10世紀前半頃の年代を与えたい。高台付椀である447も同様の年代が付与できるものとする。

SC50 (第58図)

B4区で検出しており、長軸1.08m、深さ36cmを測る。短軸については、遺構の大部分を掘り過ぎているため判断としない。検出時の状況からは、楕円形を呈すものと推測される。

埋土からは須恵器をはじめとする遺物が多く出土している(457～461)。457は土師器杯で口径10.8cm、底径4.6cm、器高4.3cmを測る。458は小皿のように復元しているが、口縁端部が磨耗することから、もう少し口縁部が延びる可能性もある。460・461は同一個体と考えられる須恵器大甕である。SB15のP1出土須恵器(144)とも同一個体と考えられるが、接合はしない。

SC51 (第64図)

F14区で検出しており、径1.1mの円形を呈す。検出

面からの深さは30cm程を測る。462～464が出土遺物で、いずれも製塩土器である。

SC53 (第64図)

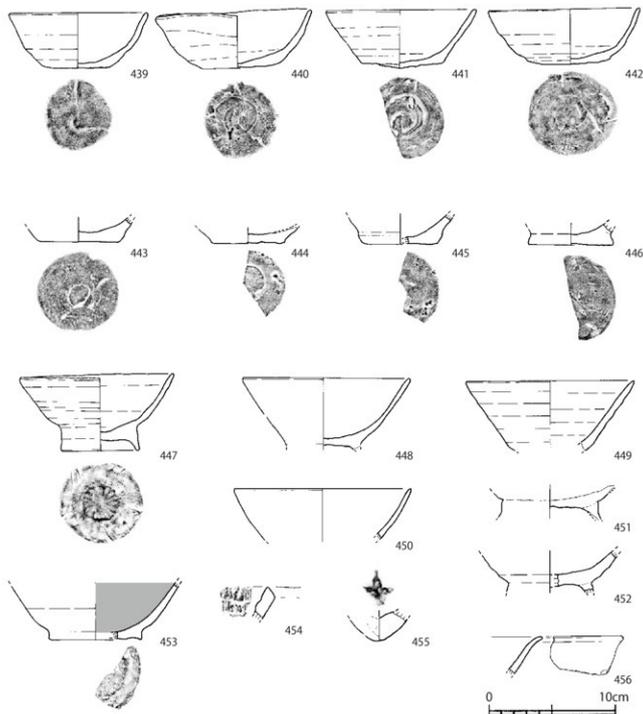
B5区で検出しており、SC54・SD11を切り、P503・504には切られる。遺構を掘り過ぎてしまっており、断面図と平面図が整合性をもたないため、土層断面から遺構の掘り形を復元している。そのため、全体的な形状・規模は不明といわざるを得ない。検出写真のみとおそらく隅丸方形を呈していたものと考えられる。

465～481が出土遺物である。465～469は土師器杯。465は口径14.8cm、底径7.8cm、器高4.5cmを測る。470は軟質の須恵器杯、471は椀であろうか。472～481は土鍾である。

SC54 (第64図)

B5区で検出しており、SC53・SB15のP6に切られる。SC53と同様に、断面図から平面プランを復元しているため、規模等は不明である。検出写真からは、やはり隅丸方形を呈していたものと考えられる。

482～485がSC54出土遺物である。482・483は土師器杯で、底部が若干円盤高台状に切り離される。484・485は土鍾。



第 63 図 SC46 出土遺物実測図 (S=1/3)

SC55 (第 64 図)

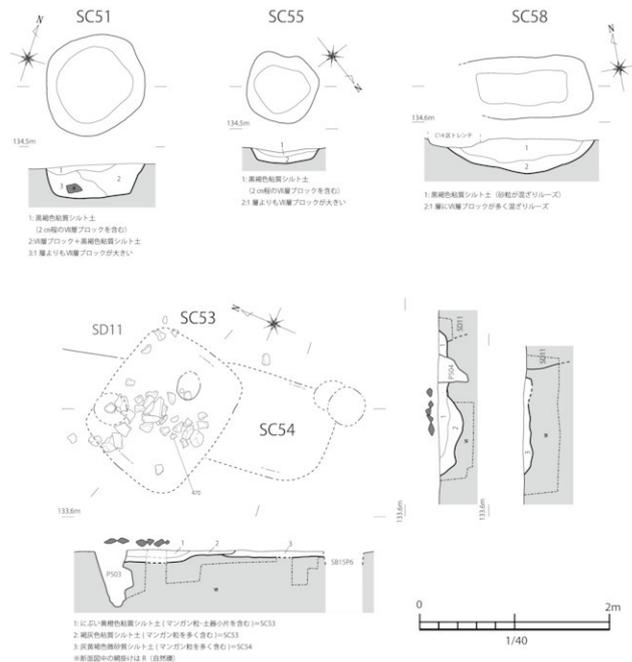
E・F14区で検出しており、径約0.8mの不整形円形を呈す。検出面からの深さは16cmを測る。遺物は出土していない。

SC56 (第 66 図)

D・E13区で検出しており、径約2.3mの円形を呈す。検出面からの深さは1.6mを測る。埋土中位で薄い炭化物の層を確認し、その直上には人頭大の縄が焼土・炭化物を多く含む層にバックされる形で出土している。丁度このあたりのレベルから地山層は、拳大・人頭大の礫層となる。平面形態およびその深さから井戸跡である可能

性が高い。埋土の下半には地山のⅧ層とよく似た層が厚く堆積することから、井戸を廃棄する際にある程度まで人為的に埋め戻されたものと推測される。

486～495はSC56から出土した遺物である。486は坏で底径は9cmを測る。487・488は小皿である。いずれも底部の切り離し技法はヘラ切りとなる。489は土師器の高台付転を転用した紡錘車である。490は大宰府分類白磁椀IV類の口縁部、口径18cmを測る。491は須恵器環・492は須恵器大甕の口縁部で、波状線文がみられる。493は粘土塊が被熱し、赤色化したものである。炉壁等



第 64 図 SC51・53・54・55・58 実測図 (S=1/40)

の鍛冶関連遺物であろうか。494・495は砂岩製の砥石。486の环、487・488の小皿はその形態・法量から、11世紀の新しい段階から12世紀初頭の資料といえる。大宰府分類白磁椀IV類が共出していることもこの年代観を支持するものである。遺構の年代もこの時期と考えておきたい。

SC57 (第 66 図)

B5区で検出しており、SC75・SD11を切る。埋土の上最上部にはSB9が堆積する。これも遺構を掘り過ぎているため、平面プランについては断面図から復元しているため、詳細は不明といわざるを得ない。

496～498が出土遺物である。496・497は土師器環、

498は布目の残る製土器である。

SC58 (第 64 図)

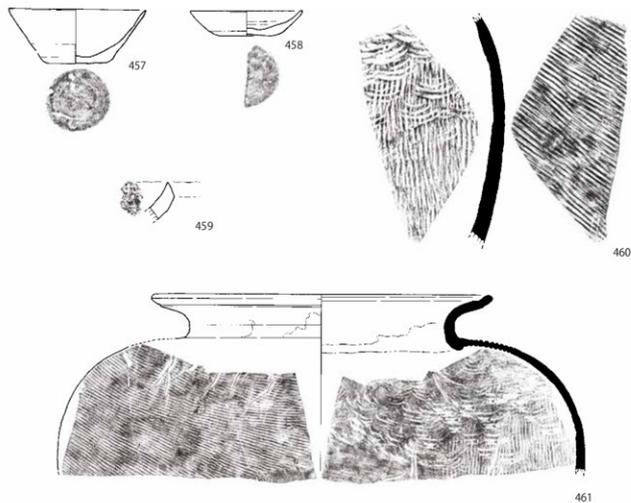
C13区で検出しており、長軸1.54m、短軸0.64m、深さ32cmの隅丸長方形を呈す。遺構の西側は土層確認トレンチによって一部破壊される。499は埋土上層から出土した須恵器甕である。底径は12cmを測る。

SC59 (第 69 図)

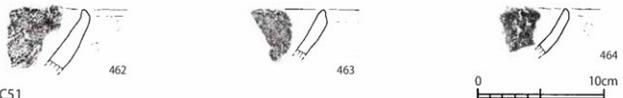
D13区で検出しており、SB21と重複し、SD1を切る。長軸0.98m、0.8m、深さ12cmの楕円形を呈す。遺物は出土していない。

SC60 (第 69 図)

SB21の西側に隣接してD12区で検出しており、径1m、



SC50



SC51

第 65 図 SC50・51 出土遺物実測図 (S=1/3)

深さ 14 cm の円形を呈す。遺物は出土していない。

SC61 (第 69 図)

E12 区で検出しており、径 0.75 m、深さ 14 cm で円形を呈する。出土遺物には 500 の甌がある。破片で出土しており、接合しない部分もあったが図面上で復元している。本来はここに把手が付くものと考えられる。外面の調整はナデおよびハケメ、内面はナデとケズリとなる。

SC62 (第 69 図)

D・E11 区で検出しており、長軸 1.12 m、短軸 0.84 m、深さ 20 cm で楕円形を呈する。遺物は出土していない。

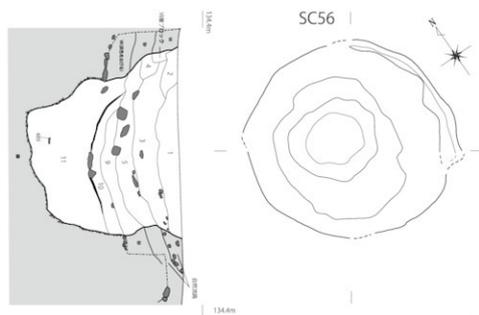
SC63 (第 69 図)

C・D9 区で検出しており、長軸 0.95 m、短軸 0.87 m、検出面からの深さ 48 cm の隅丸方形を呈す。土師器の焼

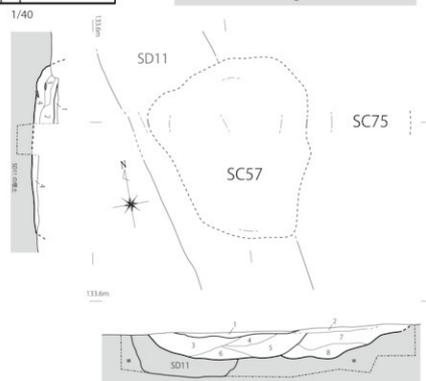
成土坑と考えられる遺構である。

理土の上位から中位にかけては他の遺構と同様の、灰褐色粘質シルト土が堆積する。最下層には焼成用燃料が炭化したものが厚く堆積する層が確認でき、焼土塊も含まれる。この炭化材の堆積層の直上には粘性の極めて強い黒褐色土が 10 cm 程の厚さで堆積する。他の遺構ではみられないほぼ粘土といえる理土であることから、焼成後、遺構を廃棄する際に人為的に埋められた際の土である可能性が考えられる。

遺構の西側壁には、一部被熱により赤化する範囲が認められる。被熱による壁面の赤化が西側でのみられること、出土遺物のほとんどが西側に偏っていることや、最下層に堆積する炭化材の層も西側が厚く東側が薄いこ

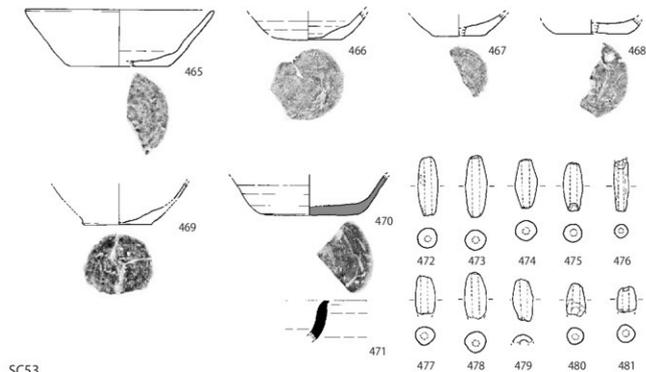


- 1: 褐色粘質シルト土 (1 m以下) の灰白色・黒褐色 (ヒメ土、酸分をまばらに含む)
- 2: 褐色粘質シルト土 (酸分をまばらに含む)
- 3: 褐色粘質シルト土 (黒粘土をわずかに含む)
- 4: 褐色粘質シルト土 (3 m以下の焼成ブロックをまばらに含む)
- 5: 褐色粘質シルト土 (2 m以下の焼成ブロックを多く含む)
- 6: 褐色粘質シルト土 (2 m以下の焼成ブロックを多く含む)
- 7: 層+厚層ブロック
- 8: 褐色粘質シルト土 (3 m以下の焼成ブロックをまばらに含む)
- 9: 層+厚層ブロック
- 10: 層+最下層に炭化物・焼土
- 11: 同様に褐色粘質土をわずかに含む

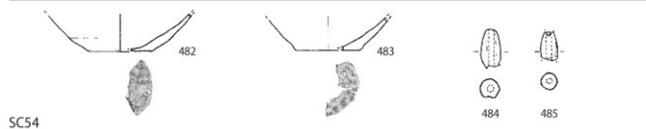


- 1: 灰褐色粘質土 (赤褐色焼土ブロック・炭化物が多く含む) =999
- 2: 灰褐色粘質土 (1層が全体の99%の厚さにより赤化?)
- 3: 褐色粘質土 (マンガンを含む、炭化物も含む)
- 4: 3層に同様な褐色粘質土ブロックを呈する
- 5: 褐色粘質土 (マンガンが多く含む、明褐色粘質土が少し入り)
- 6: 灰褐色粘質土 (明褐色粘質土ブロックを呈し)
- 7: 灰褐色粘質土 (マンガンを含む)
- 8: 灰褐色粘質土 (明褐色粘質土ブロックを呈し、マンガンを含む)

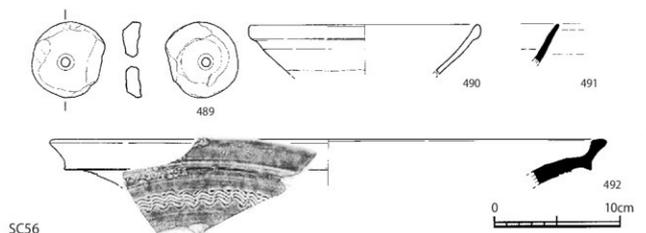
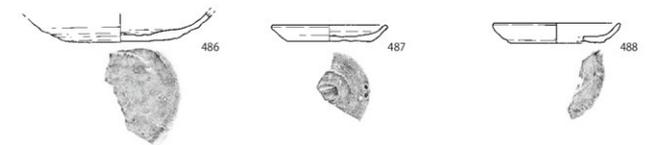
第 66 図 SC56・57・75 実測図 (S=1/40)



SC53

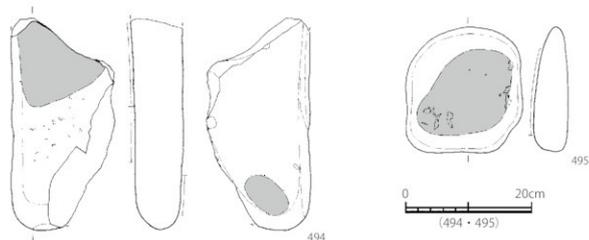
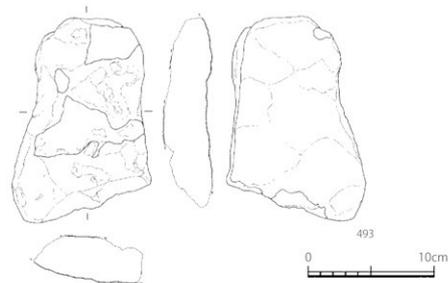


SC54



SC56

第 67 図 SC53・54・56 出土遺物実測図 (S=1/3)



第 68 図 SC56 出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

となどから、遺物は土坑の西半に偏った状態で焼成されたものと推測される。

501～507が出土した遺物である。501は土師器環である。検出時には確認できていなかったが、掘り下げの際に501の周辺で柱状にSC63の埋土とは異なる粘質の土が確認できた。おそらく、本来は別ビットがSC63を切っており、501はそのビット内からの出土と考えられる。

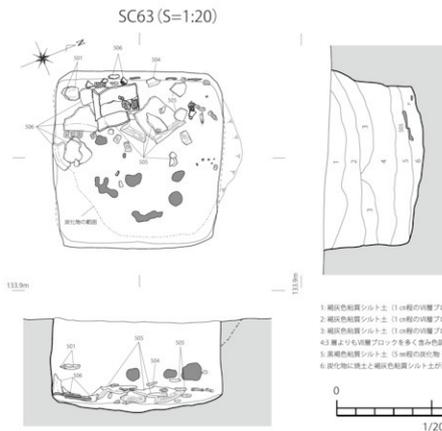
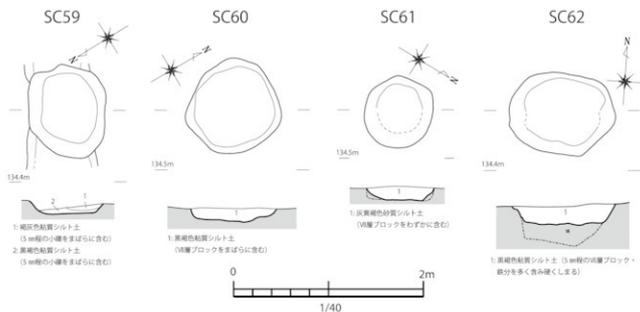
502～506は土師器甕である。502～504は出土位置が若干高く、遺構の廃絶後に入った遺物と考えられる。505・506はほぼ完形に復元できる資料で、法量に差があるものの、形態的には酷似する。丸底を呈し、胴部中央に彫らみをもつ。口縁部はくの字に屈曲し、端部が若干玉縁状に肥厚する。調整は外面の胴部上半がタテ・ヨコ方向のハケメ。下半がナナメ方向のハケメとなる。内面

ストロークの長いケズリが加えられる。法量は506が一回り小型である。

507は須恵器環と考えられるが、これも埋土中層からの出土で、遺構に伴うものではないといえる。

上述のように、SC63は土師器焼成土坑と考えられる遺構であるが、実際に土坑内で焼成されたと考えられる遺物は505・506の土師器甕である。図面上では完形に復元してあるが、実際には505が底部付近の一部、506が胴部から口縁部にかけての約1/4が欠損している。おそらくこの2個体の甕は焼成段階で破損したためそのまま土坑内に廃棄されたものと考えられる。破損して破片になっていたであろう欠損部分は、他の遺物を取り出す際と一緒に遺構外に持ち出されたものと推測される。

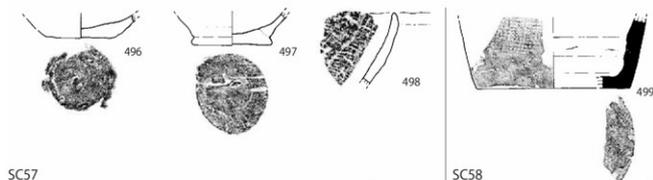
505・506の資料は、製作時の同時性を担保された一括遺物といえる。ここで、その帰属時期についても検討し



第 69 図 SC59～63 実測図 (S=1/20・1/40)

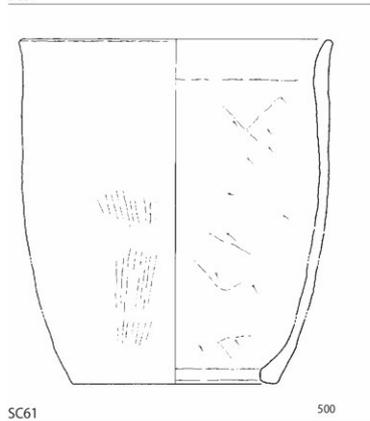
ておきたい。従来、土師器甕の内面調整にみられるハケメは、ナデおよびタキ調整に先行するものと考えられており、年代的には9世紀前半頃に描かれている。また、501の土師器杯は、その出土状況から505・506よりは後出すると考えられるが、年代的には9世紀第3四半期の所産といえる。これらのことから、505・506は9世紀前半の所産と考える。

SC64 (第71図)
SB26の東側、D8・9区で検出しており、長軸1.58m、短軸1.16m、深さ8cmの隅丸長方形を呈す。P495を切る。遺物は出土していない。
SC65 (第71図)
SC64の南側、D8区で検出しており、長軸1.02m、短軸0.84m、深さ16cmの隅丸長方形を呈す。遺物は出土

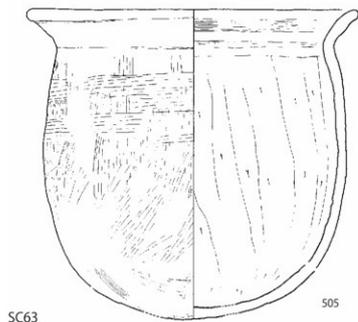
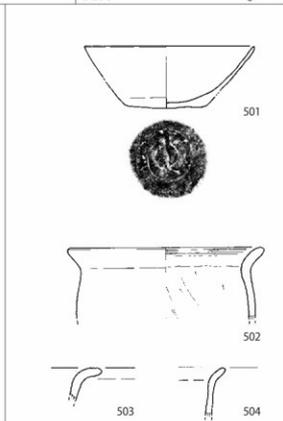


SC57

SC58

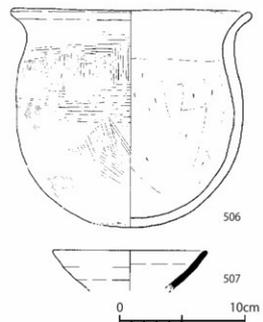


SC61



SC63

第 70 図 SC57・58・61・63 出土遺物実測図 (S=1/3)



507

していない。

SC66 (第71図)

B8区で検出しており、径1.1m、深さ16cmの円形を呈す。508・509が埋土中より出土している。508は土師器で、外面および内面口縁部付近にヨコ方向のハケ目がみられる。509は輪郭口である。

SC67 (第71図)

B4区でSC67に隣接して検出した。長軸0.86m、短軸0.76m、深さ34cmの楕円形を呈す。埋土には炭化物を含む。円盤高台を転用した紡錘車の510、土師器環の511が出土した。

SC68 (第71図)

B4区でSC68に隣接して検出している。径0.78mの円形を呈す。埋土には炭化物を含む層が堆積する。

512～515が出土した。512は土師器環で口径12.3cm、底径4.8cm、器高5.3cmを測る。9世紀末～10世紀初頭の所産であろう。514は土師器の高台付碗で、長く細い

高台が付く。515は須恵器製の口縁部。

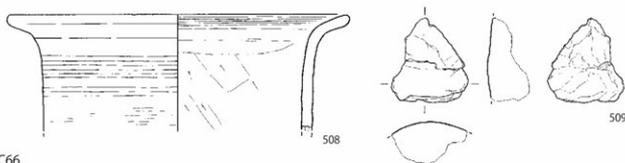
SC69 (第71図)

B4区で検出しており、長軸0.76m、短軸0.66m、深さ20cmの楕円形を呈す。埋土は単一で、細かな土師片を含む。516・517が埋土から出土しており、共に製塩土師の口縁部片である。

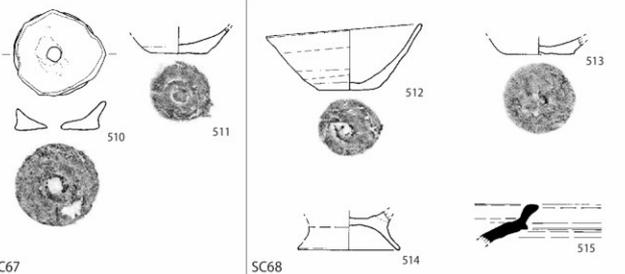
SC70 (第73図)

B7区で検出しており、長軸1.08m、短軸0.68m、深さ6cmの楕円形を呈す。表土直下で検出しており、土質の上部は既に削平されている可能性が高い。ここで多くの遺物が埋納されたような状態で出土している。

518～550が本土坑から出土した遺物である。518～529は土師器環である。形態的には518～521のような薄い器壁を有し、底部から直線的に立ち上がる資料や、524・526・529のような体部が丸みを帯び、底部との境が明確でないものがみられる。また、胎土も数種類あり、浅黄褐色系で細かな炭物を含むもの(519～521・527～



SC66



SC67

SC68



SC69

第72図 SC66～69 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

529)、橙色系で赤色炭物を含むもの(518・522・523・525)、灰白色系を呈し重量感のあるもの(524・526)に大別できる。法量のみと、口径11.9～13.4cmで平均12.6cm、底径5.2～6.4cmで平均6.1cm、器高4.9～5.9cmで平均5.3cmを測る。全体的にみると口径や底径にばらつきがみられるが、いくつかのまとまりが抽出できる。口径13cm前後、底径6cm前後、器高5cm前後のⅠ類(518・520・521)、口径12.2cm前後、底径6cm程、器高5cm前後のⅡ類(524～529)、口径13cm程、底径6～6.5cm、器高6cm弱のⅢ類(522・523)に分けられる。519のみこの中にはイレギュラーな法量を有す。519の底部、527の内外面には赤彩がみられる

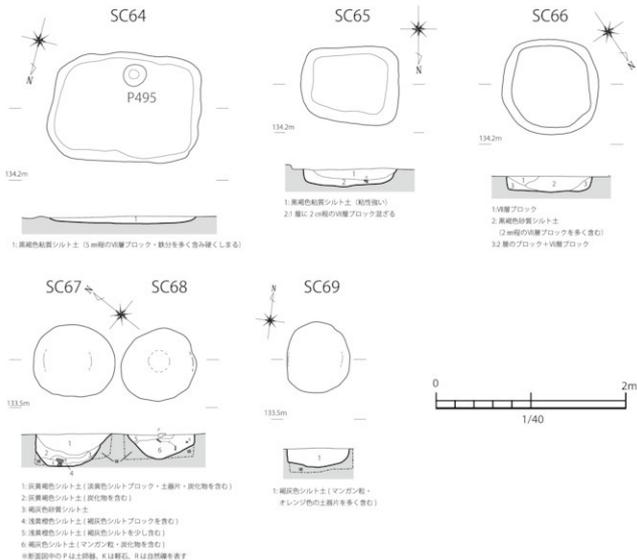
のも認められるが、多くが点的な出土をみせる。断面図をみても分かるように、526・528・529のように重ねられたような状態で出土している資料もある。つまり、長期間にわたる廃棄の累積ではなく、単一回で埋納されたものと理解できる。よって、Ⅲ類についてもⅠ・Ⅱ類と同様の年代的位置づけを与えておきたい。

530～532は高台付碗である。530と531は低い高台が付き、わずかに丸みを帯びる体部をもつ。口縁部付近で短く外半する。530の体部外面には記号のような黒彩がみられ、底部は穿孔される。532は高台部が欠け、直線的に口縁部に向かい立ち上がる器形を呈す。

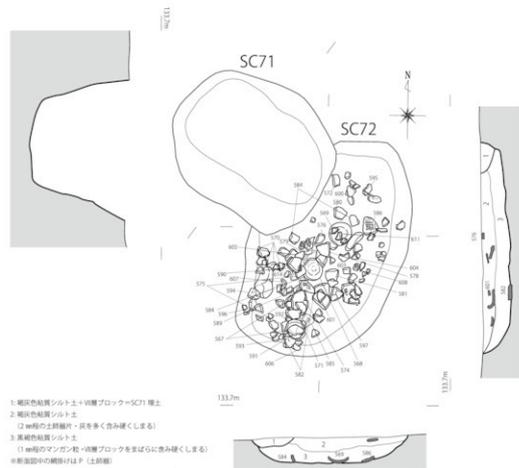
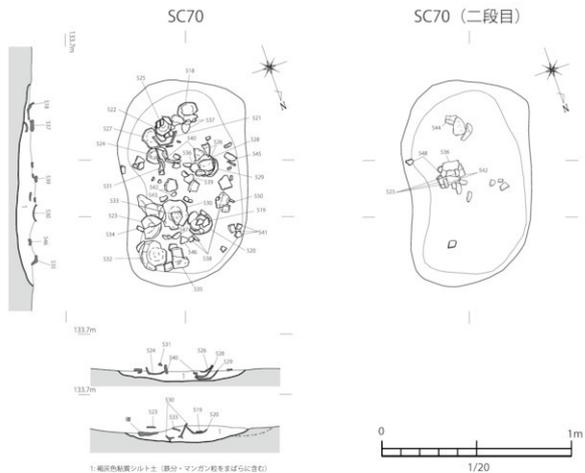
535は土師器環である。全体的に磨耗が、外面にはハケ目がみられる。

536～549は製塩土師器である。内面の布目は磨耗により残っていないものが多い。Ⅲ類については器高が6cm弱あり、その位置づけに苦慮する。そこで、遺構での出土状況とみると、離れた位置で接合関係にあるも

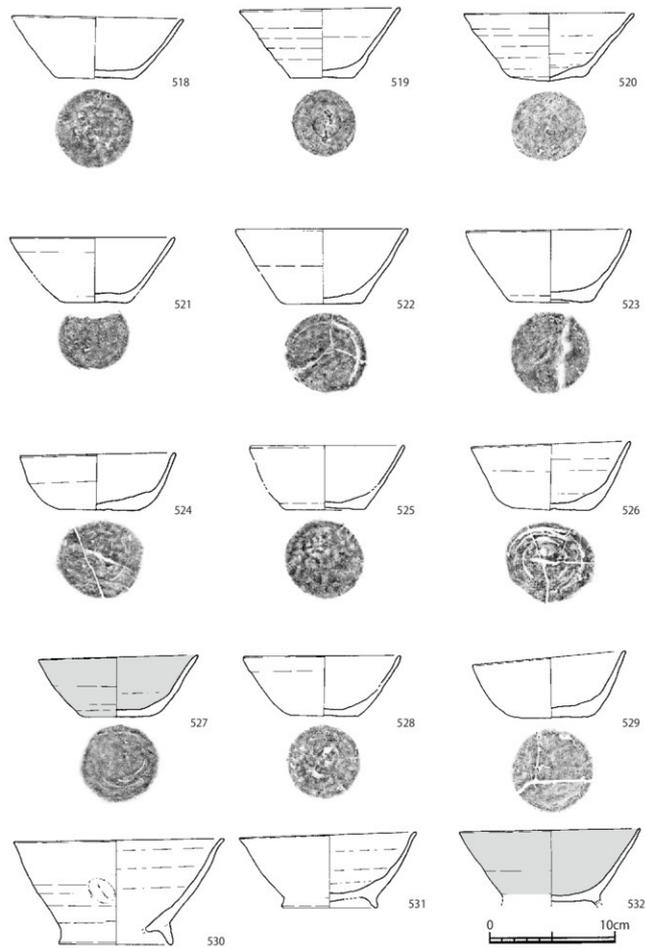
550は刀子片。刃側に間があり、背部は直線的である。



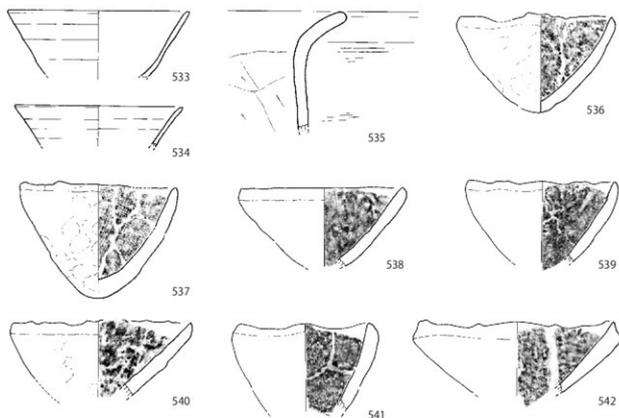
第71図 SC64～69 実測図 (S=1/40)



第73図 SC70～72 実測図 (S=1/20)



第74図 SC70 出土遺物実測図① (S=1/3)



第75図 SC70 出土遺物実測図② (S=1/2・1/3) (550)

SC71 (第73図)

B7区で検出しており、長軸0.88m、短軸0.71m、深さ51cmの楕円形を呈す。SC72を切り、調査時のミスで土層断面の観察ができていないが、切り合い関係はSC72の土層観察値により確認している。

551～566が出土遺物である。551は土師器高台付椀の黒色土器A類である。逆台形の椀部に細く低い高台が付く。552は土師器甕である。

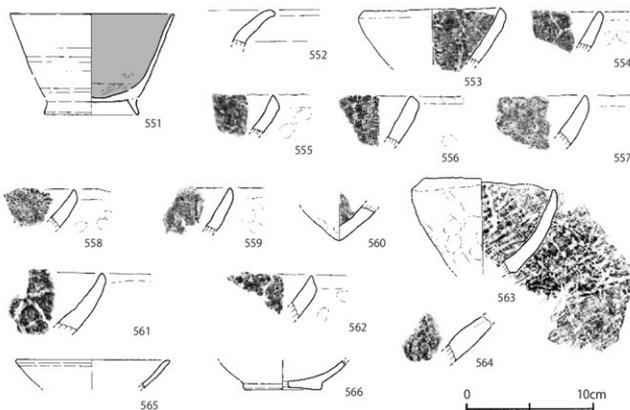
553～564は布目の残る製塩土器である。口径が分かる553・563の資料をみるといずれも11cm前後を測る。

563は異なる織りの布目痕が同一個体中にみられる。中にはSC72出土の破片と接合する資料がみられる。

565・566は緑軸陶器である。いずれも淡緑色の釉がかり、胎土は軟質である。同一個体とも考えたが、口径と底径が整合性に欠けるため、別個体として報告する。京都産落北型ないしは防長産と考えられる。

SC72 (第73図)

B7区で検出しており、長軸1.25m、短軸0.81m、深さ15cmの楕円形を呈す。北西隅をSC71に切られる。検出面からの深さは浅いものの、堆積する埋土は二層に分



第76図 SC71 出土遺物実測図 (S=1/3)

けられる。いずれの層からも製塩土器をはじめとする遺物が廃棄されたような状態で大量に出土している。しかも、埋土が二層にわけられ、出土レベルにも差がみられることから、大量の遺物は長期間にわたる廃棄行為の累積によるものと理解できる。

567～618がSC72出土遺物である。567～573は土師器杯である。完形に復元できるものうち、567は埋土土層から、569は埋土中位、それ以外は下層から出土している。567は焼き歪みがあるが、口径12.8cm、底径5.6～6.2cm、器高4.8～5.7cmを測る。それ以外は口径11.9～12.3cmで平均12.1cm、底径5.4～6.4cmで平均6cm、器高3.9～5.4cmで平均4.8cmを測る。567の口径が若干大きい他は、いずれの資料も似た法量を示す。年代的には、上層出土資料も下層出土資料も9世紀第3四半期の特徴を有す。廃棄行為もこの年代幅で捉える必要があろう。

574は高台付椀である。逆台形の椀部に短い高台が付く。575も高台部を欠くが、高台付椀であろうか。

576は土師器甕の口縁部である。

577は淡緑色の色調と軟質な胎土を有す、緑軸陶器である。京都産落北型ないしは防長産であろう。

578～618は製塩土器である。全体的な法量に分かる資料も多く出土している。口径は10～14cmを測るが、13cm前後のものが多い。器壁も厚いもの、薄いものがある。

SC73 (第79図)

A7区で検出しており、径約0.8m、深さ14cmの円形を呈す。

619～621がSC73より出土した遺物である。619は土師器杯で口径11.7cm、底径5cm、器高5.3cmを測る。体部下端にはケズリ状の面取りがみられる。法的には9世紀末～10世紀初頭の特徴を有す。

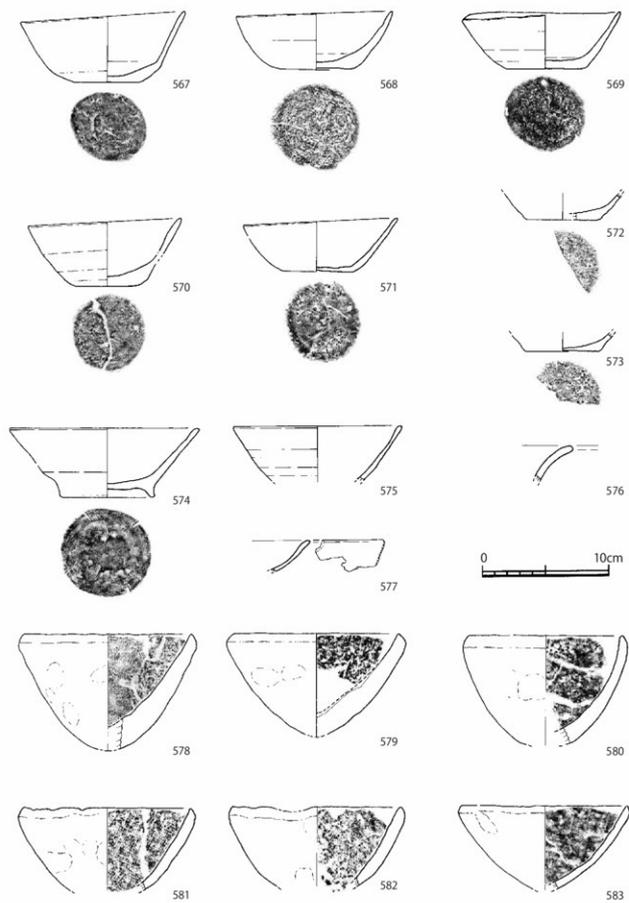
620は大型の高台付皿であろうか。欠損する部分が多いが、坏部が直線的に延びており皿状を呈する。621は高台付椀で、短い高台が付く。

SC74 (第79図)

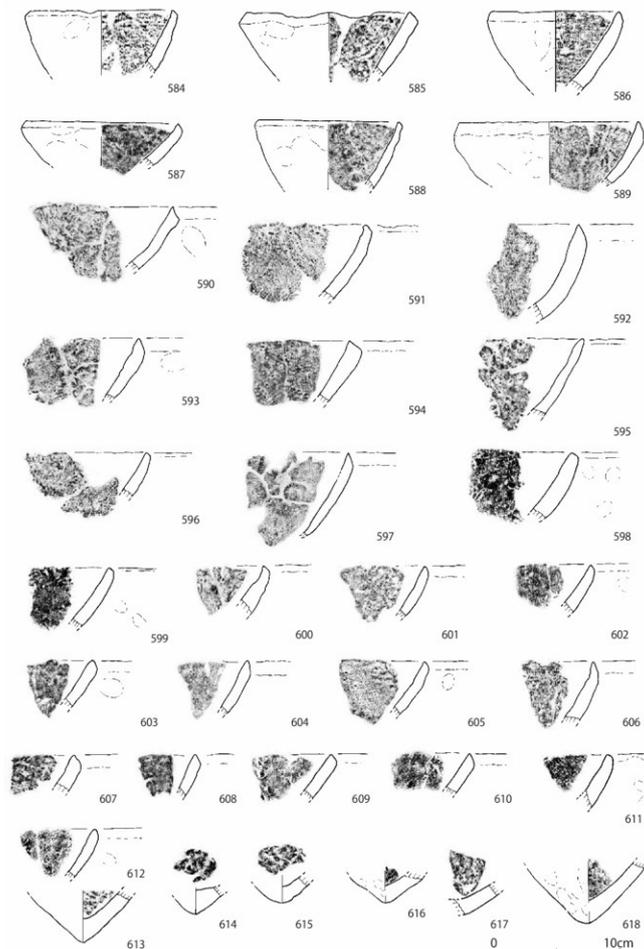
B6区で検出しており、長軸1.14m、短軸0.92m、深さ62cmの不整形を呈す。遺構の南東側がテラス状になり、北西側が深いビット状を呈す。遺物の多くは埋土土層から出土している。埋土の中位には炭化物を含む層が確認できる。

622～629がSC74出土遺物である。622・623は円盤高台杯で、622は外面下半と底部には赤彩の痕跡がみられる。内面には確認できないが、本来は赤色顔料が塗布されていた可能性がある。

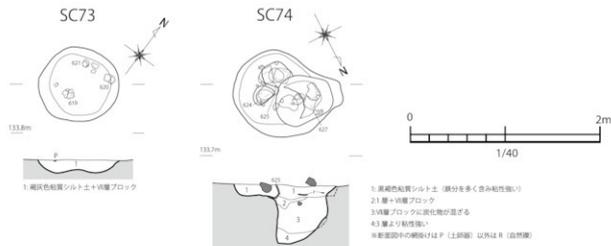
624～627は土師器の高台付椀である。624は短い高台から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。625は若干外に開く短い高台を有し、体部がわずかに丸みをおびる。624の胎土は橙色、625は浅黄褐色を呈す。626は土師器



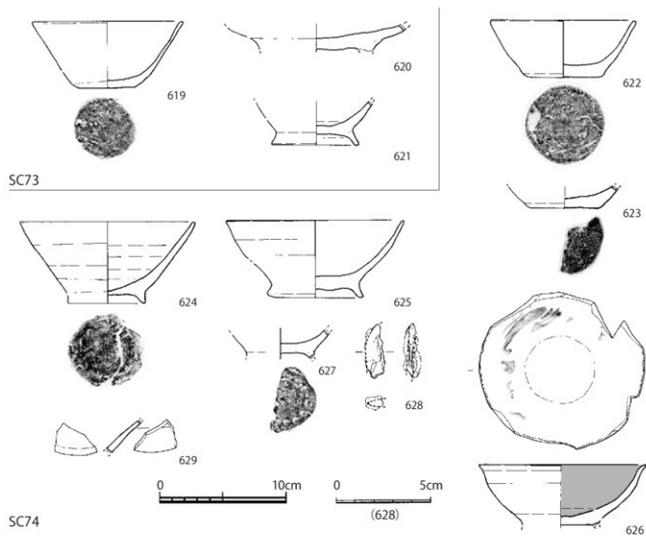
第 77 図 SC72 出土遺物実測図① (S=1/3)



第 78 図 SC72 出土遺物実測図② (S=1/3)



第 79 図 SC73・74 実測図 (S=1/40)



第 80 図 SC73・74 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

の高台付椀で、黒色土器 A 類である。丸みをおびる体部をもち、口縁部は短く外反する。内面には炭素がうまく吸着せず、胎土の素地がみえる範囲があるが、そこに茶褐色の付着物がみえる。被熱した際のススの痕跡であるうか。

628 は鉄鏝の刃部先端であろうか。
629 は越州窯系青磁椀 I 類の体部片である。内面には貫入がみられる。

3 溝状遺構・道跡 (SD)

真米田道跡では溝状遺構および道跡と考えられる所謂波板状ピットを合計 13 条確認している。以下、それぞれの遺構および出土遺物について報告する。

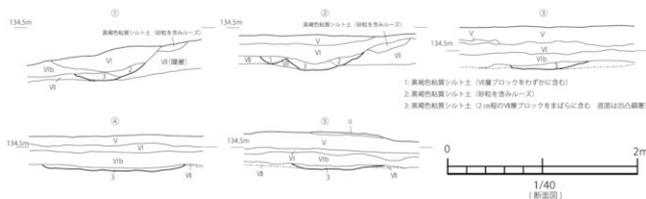
SD1 (第 81 図)

調査区の 11～16 区にかけて検出した溝状遺構である。総延長は約 68 m を測り、D13 区周辺で北側の標高が高くなる自然地形に沿ってへ字に折れる。幅は約 0.8 m、検出面からの深さは深い所でも 8 cm 程を測るのみである。溝の南東端は調査区外に延びて行き、北西端は自然流路

に切られるように終息する。D13 区で先端が二股に分かれる。SB19・21・22 等と切りあうが、SB22 以外はいずれも SD1 が他遺構に切られる。

土層断面を確認すると、基本土層 VII 層に掘り込まれており、遺構の上位には VI 層ないしは VI b 層が堆積する。そのため、実際に遺構はかなり浅かったものと推測される。また、実測図では表現していないが、底面には拳大の小さな窪みが無数にみられた。

遺構自体がかなり浅いため、出土した遺物量も少ない。630～634 が SD1 出土遺物である。630・631 は土師器環



第 81 図 SD1 実測図 (S=1/40・1/400)

と考えられるが、いずれも底径が10 cm程とかなり大きい。
632は土師器甕で外面はナデ調整である。**633**は須恵器大甕の胴部で外面には格子目タタキ、内面は格子目・同心円当て具痕がみられる。**634**は須恵器杯の底部である。
SD2 (第82図)

D10・11区で検出しており、長さ7.8 m、幅0.65 m、深さ10 cm程を測る。断面形態は逆台形状を呈す。埋土にはV1b層が堆積する。出土遺物には土師器甕の口縁部(635)、須恵器甕の底部付近(636)がある。

SD3 (第83図)

調査区東端の19～22区で検出しており、検出長44.5 m、幅0.4～1.65 m、深さ6 cm程の浅い溝である。埋土には基本土層のV層が堆積する。SC7をはじめ多くの遺構を切る。本遺跡で検出された遺構の中でも、新しい時期に属する遺構の一つといえる。丁度SC7付近で逆くの字に折れる。そこから北西方向にさらに伸びていくが、この方向と、周辺で検出されている畝状遺構の方向とが合致する。埋土も同じV層であることから、SD3はV層を埋土とする窪地周辺で検出された畝状遺構と同時期の遺構と考えられる。溝の北端は調査区外に伸びるが、北側に位置するB区では検出できていない。途中で浅くなり、終息するものと考えられる。

出土遺物には**637・638**がある。**637**は硬質な胎土の絨軸陶器の椀ないしは皿である。京都産洛西型ないしは東海産であると考えられる。**638**は刀子で切先および基部は欠損する。

SD4 (第84図)

調査区東端、20・21区で検出した北東-南西方向に伸びる溝状遺構で、長さ約36 m、幅2～2.8 m、深さ最大で46 cmを測る。南西では溝幅が細くなり、若干蛇行しながら終息する。溝の中央は凸状に盛り上がり、その両側を二本の溝が並走するような形状を呈す。断面形態は、中央の凸部分を抜くと西側溝部分は逆台形、東側は横長のU字形を呈す。中央の盛り上がりには硬化層は認められず、断面形態もかまぼこ状を呈するところが多い。遺構の埋土には、全体的にマンガング粒を含む層が堆積しており、特に西側溝部分の最下層には砂質が強く多くのマンガング粒・鉄分を含む層が堆積する。溝底面にも鉄分が沈着する。このことから、少なくとも西側の溝部分には恒常的に水が存在した可能性が高い。ただし、底面のレベルをみると、水の流れを意識したような、一方から逆方向への勾配はみられず、むしろ検出した範囲の中央部が最も深くなるといえる。水を流すのではなく、常に蓄えた状態であった可能性が考えられる。何か区画するような目的があったのであろうか。

639～644がSD4からの出土遺物である。**639**は小型の土師器甕で、外面はナデ、内面はオサエにより調整される。

640・641は越州窯系青磁である。**640**は椀Ⅱ類、**641**は椀Ⅰ類であろうか。

642・643は土師器環である。**643**は円盤高台環。**644**は須恵器甕の口縁部である。

SD5 (第86図)

調査区東側の16～20区で検出されている所謂波状ピットと呼ばれる小ピットの連続する遺構である。溝状の掘り込みはなく、ピット部分のみをV1層中で検出している。検出長は42 mにわたり、東西方向に緩やかに蛇行しながら続いていく。楕円形溝溝底であるSK1と重複するが、丁度現代の攪乱が走行するため、どのような関係にあるのかは不明である。しかし、SD5はSK1よりも大分高い位置で検出していることから、SD5がSK1よりも時間的に新しい所産であるものと考えられる。

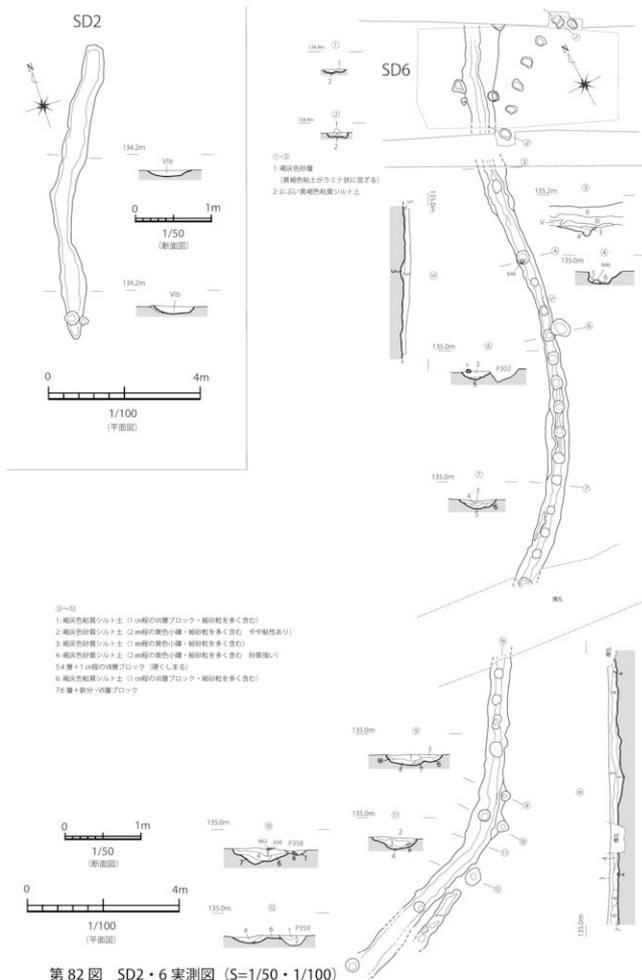
検出したピット群は不整形なものも多くみられるが、基本的に長軸50 cm前後、短軸30～40 cm前後の長楕円形のもの、一辺30 cm前後の方形ないしは横長楕円形が交互に並ぶ一セットが連続する。この一セットの間隔は概ね70 cm前後を測る。底面には特に硬化するような範囲は認められないが、一部に川砂のようなきめの細かい砂粒が薄く堆積しているピットがみられた。積極的に道跡と評価できる要素は多くないが、規則性の中にもある程度ランダムな要素が看取できることから、なんらかの反復的な作業ないしは動作の結果残された痕跡と考えられる。よって、ここでは道跡の可能性が高い遺構として報告する。

出土遺物はほとんどなく、**645**が唯一図化できた遺物である。須恵器甕の胴部片と考えられる資料である。

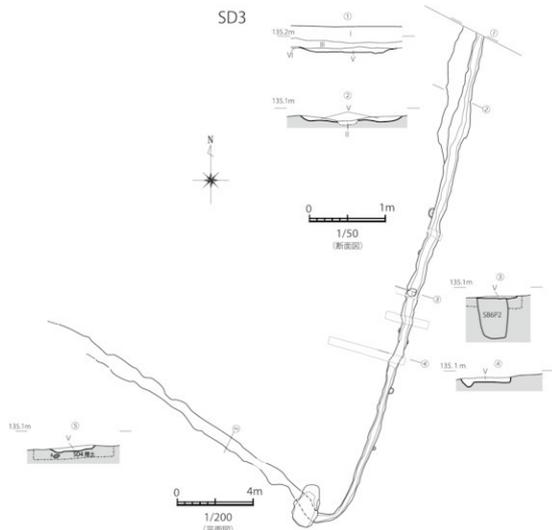
SD6 (第82図)

調査区の14～16区にかけて検出しており、長さ約25 m、幅0.5～0.6 m、深さ最大で20 cm程の溝状遺構である。北東-南西方向に緩やかに蛇行しながら伸びる。北東部は調査区外に伸びていく。B区で検出した範囲は、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した確認調査においてである。この範囲では、A区で検出したような溝状遺構の底面にピットが並ぶものではなく、溝状部分はそのまま直線的に、底面のピット部分だけが溝部分からはずれ、さらに北東方向に伸びていく。また、溝の南西端は徐々に浅くなりC14区に入ると消失する。その直前には二股に分かれるようである。

溝の断面形態は地点によって異なり、逆台形や横長U字形を呈す。底面にはピット列が検出されているが、こ



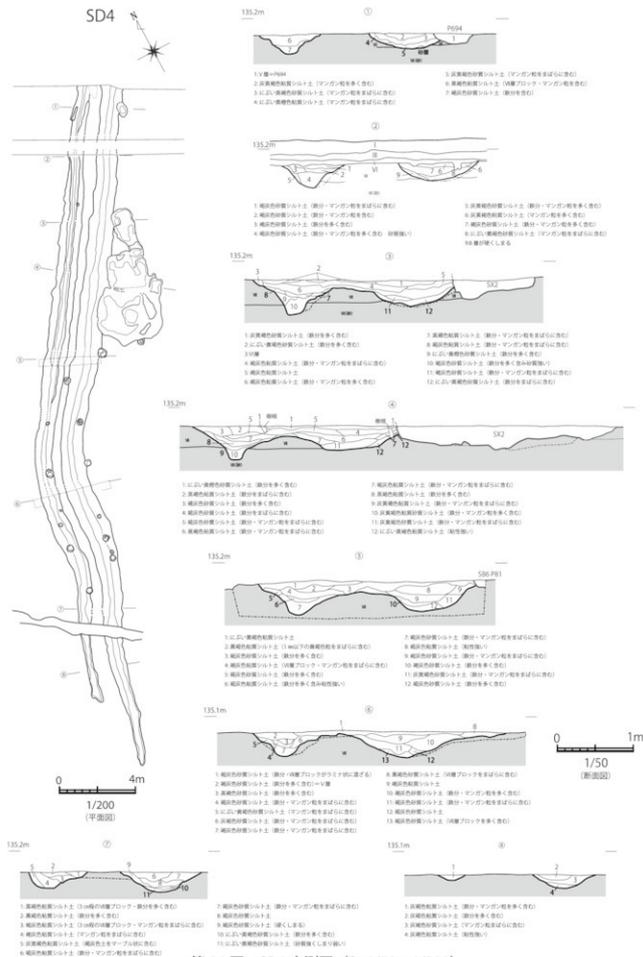
第82図 SD2・6実測図 (S=1/50・1/100)



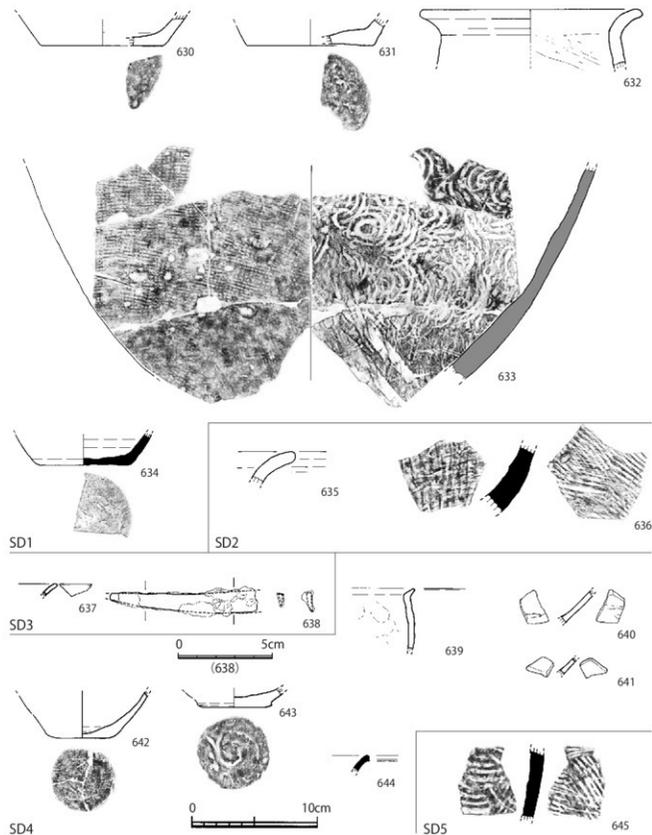
第 83 図 SD3 実測図 (S=1/50・1/200)

れは溝の底面全てに確認できたわけでなく、検出できていない範囲や上述のように溝の外に延びていく範囲も確認できる。底面のピットの芯々間は約 60～70 cm を測る。底面は全てが硬化するわけではないが、ピットがある範囲については、その底面が鉄分や細砂粒を含み硬化する。これも SD5 と同様で踏跡である可能性が高いと判断した。遺構内からは多くの遺物が出土している (646～671)。646 は底面のピットの一つに伏せて張り付いた状態で出土した土師器環である。口径 11.7 cm、底径 5.5 cm、器高 4.6 cm を測る。647 も土師器環、648・649 は円盤高台環である。650 は甌の底部であろうか。先端がやや先細る。651～654 は製塩土器である。655 はやや軟質な胎土で淡緑色を呈す。京都産 (洛北型・洛西型) ないしは防長産であろう。656 は軟質な胎土で淡緑色を呈す。京都産洛北型ないしは防長産と考えられる。657 は硬質な胎土で、外面のみにミガキがみられる。京都産洛西型、近江産、東海産のいずれかであろう。

658 は大宰府分類白磁類 II 種の口縁部片である。C 期 (11 世紀後半～12 世紀前半) の所産。659 は不明土製品。660～670 は鍛冶関連の遺物と考えられる資料である。660 は軀羽口。通風孔も一部残存する。661 は内面が被熱のため硬化する。662 は軀羽口のように円孔をもつ筒状の形態を呈すものと考えられる。先端部および内面にはスラグが付着し、内面は全体的に硬化する。やはり鍛冶関連遺物であろうか。663～667 は粘土塊であるが、内外面が被熱により硬化したり、スラグが付着したりする。668～670 は鉄滓である。671 は三角柱状を呈す土製品である。一部の面が被熱し硬化する。やはり鍛冶関連遺物であろうか。このように、SD6 の埋土内からは大量の鍛冶関連遺物が出土している。これは SD6 に伴うものではなく、後に報告する SK3 の遺物が SD6 に廃棄された可能性が高いと考えられる。確実に SD6 に伴う遺物は底面のピット内から出土した 646 であるが、この土師器環の法量からは 9 世紀末～10 世紀初頭の年代が導き出される。遺構の廃



第 84 図 SD4 実測図 (S=1/50・1/200)



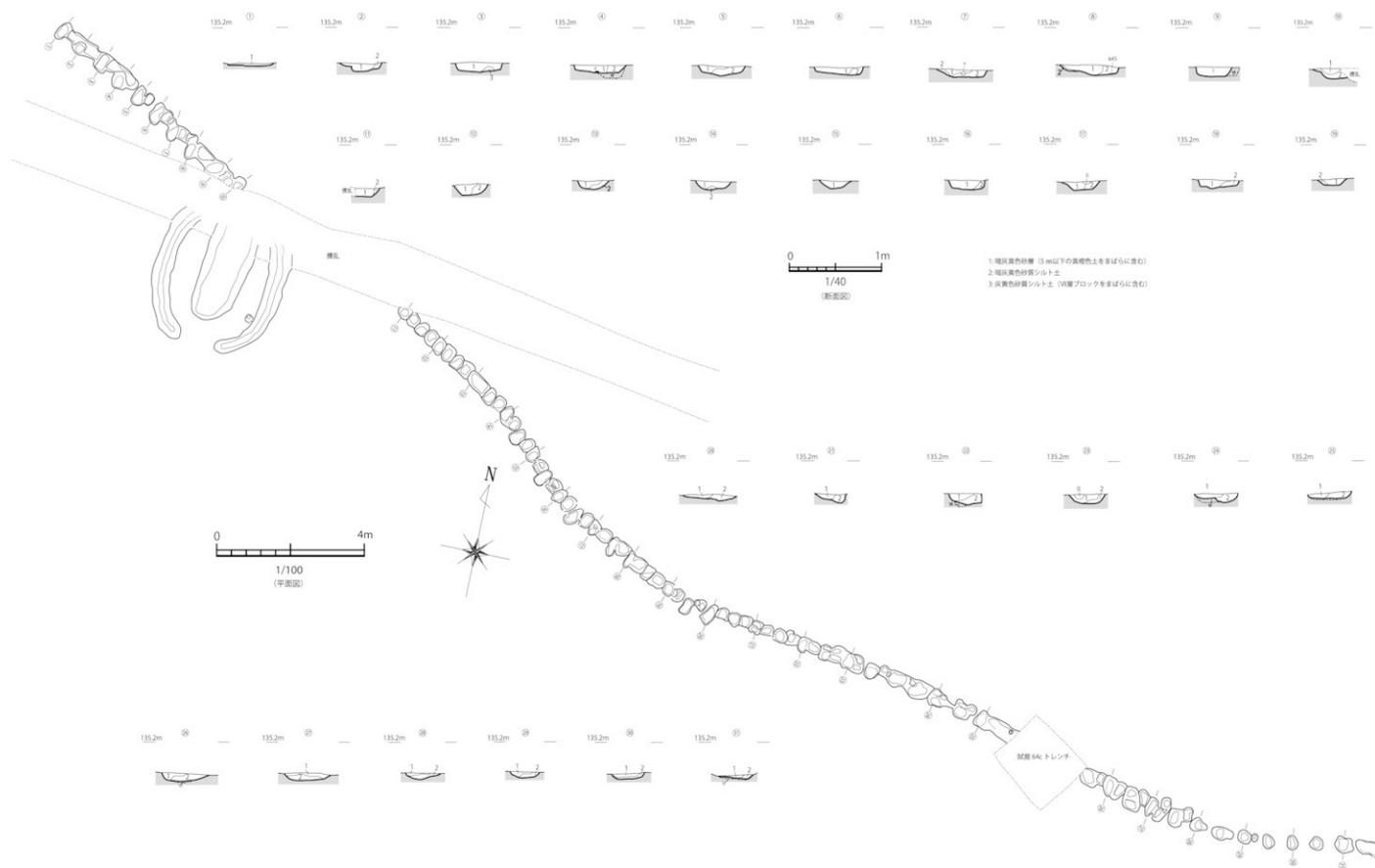
第 85 図 SD1～5 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

絶時期もこの頃と考えたい。

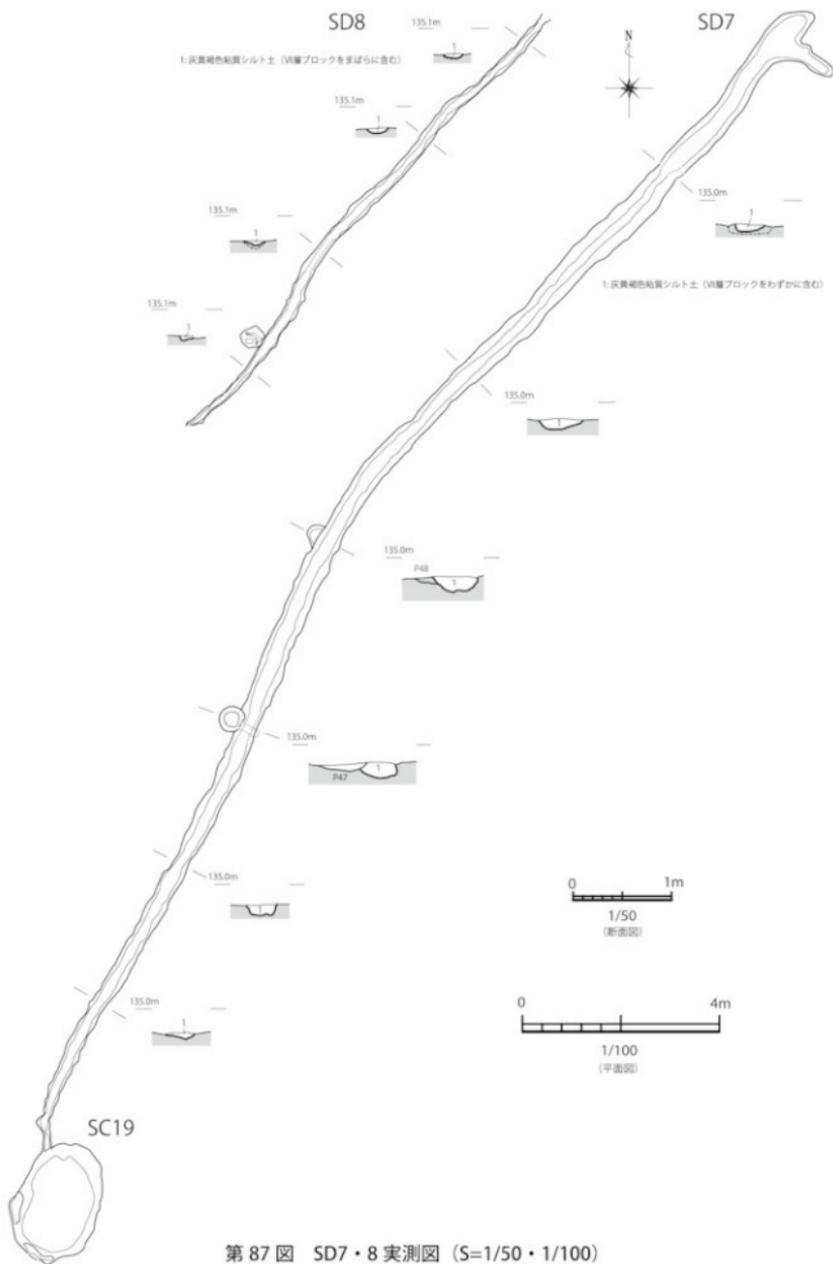
SD7 (第 87 図)

調査区東側、18・19 区で検出した北東-南西方向に走行する溝状遺構で、南西端で SC19 に連結する。長さ約

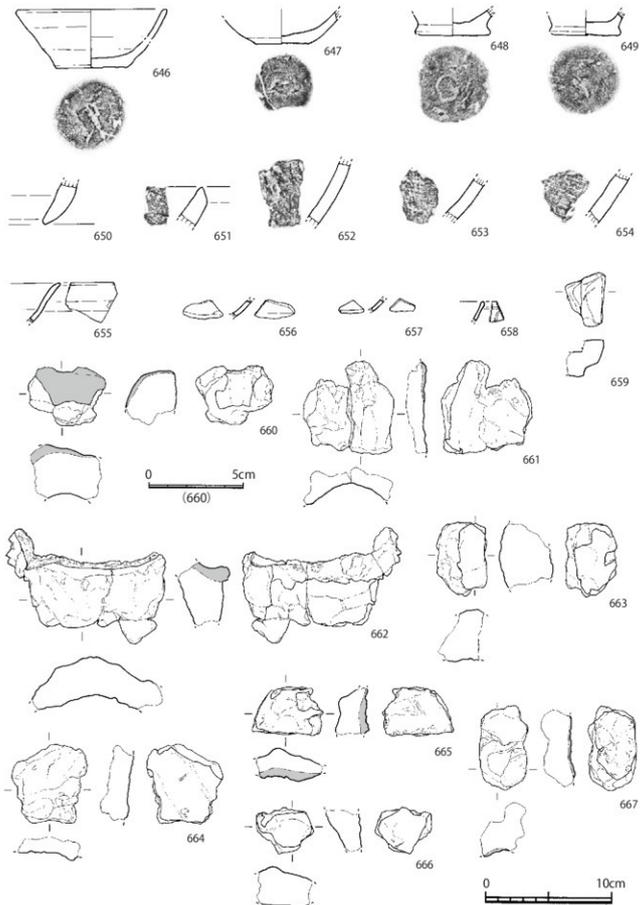
29 m、幅 0.2～0.6 m、深さ最大で 16 cm を測る。P47 に切れ、P48 を切る。SC19 の項でも述べたように、土坑部分 (SC19) と溝部分 (SD7) で別の遺構名を付しているが、本来は同一遺構であるものといえる。埋土は単



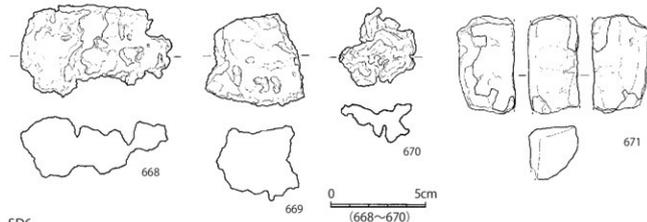
第 86 図 SD5 実測図 (S=1/40・1/100)



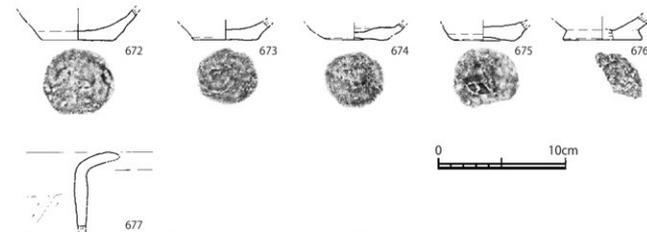
第 87 図 SD7・8 実測図 (S=1/50・1/100)



第88図 SD6出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)



SD6



SD7

第89図 SD6・7出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

一層で、SC19の最上層に堆積する土と同一のものと考えられる。標高の最も低いところと土坑 (SC19) と連結することから、溜め井等の貯水施設の可能性が考えられる。ただし、溝状部分 (SD7) の底面のレベルはどれもほぼ平坦であり、SD4 同様に明確な勾配がみられるわけではない。

672 ~ 677 が SD7 出土遺物である。672 ~ 676 は土師器杯の底部である。底径は 5 ~ 5.7 cm を測る。676 は円盤高台杯である。677 は土師器甕で、外面はナデにより調整される。

SD8 (第87図)
SD7の西側、18・19区で検出しており、長さ約11m、幅0.15 ~ 0.3m、深さは最大で9cmを測る。SD7に並走するように北東-南西方向に延びる。堆積する埋土は単一層で、SD7の埋土に似る。SB2のP1を切る。遺物は出土していない。

SD11 (第90図)
調査区西端の5区で検出した溝状遺構で、南北に走行する。検出長約30m、幅1 ~ 1.5m、深さは最大で50cmを測る。断面形態は逆台形を呈す。北端は調査区外に延び、南端は洪水堆積層に切られる。SC39をはじめ、多

くの遺構に切られており、切り合い関係からは、調査区の4・5区付近では最も古い段階の遺構の一つといえる。

678 ~ 703 が SD11 から出土した遺物である。678 ~ 683 は土師器杯である。678 は口径 13.7 cm、底径 8.5 cm、器高 3.2 cm を測る。679 は口径 12.9 cm、底径 7.5 cm、器高 4.4 cm を測る。682・683 は円盤高台杯である。

684 ~ 686 は土師器高台付碗である。684 は逆台形の浅い腕部に短い高台が付く。外面の色調が黒味をおびる。

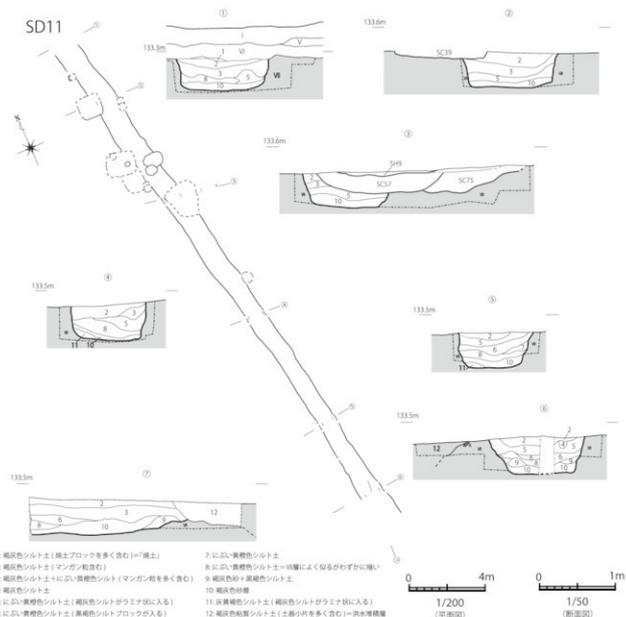
687 ~ 689 は土師器甕。いずれも外面はナデにより調整される。688 の口縁部内面には回線が巡る。

690 ~ 696 は製塩土器である。690 は口径が 18 cm を測る。内面の布目は磨耗して残っていないものが多い。

697 ~ 701 は須恵器である。697 ~ 699 は須恵器杯で、697 は焼成不良で胎土が軟質となる。逆台形の器形を呈し、口径 12.7 cm、底径 7.5 cm、器高 4.7 ~ 4.9 cm を測る。700 は壺の口縁部、701 は小型壺の底部であろうか。

702 は緑釉陶器の碗ないしは皿の口縁部である。釉は緑色を呈し、胎土は硬質である。京都産洛西型ないしは東海産であろう。703 は輪羽口。一部通風孔部分も残る。

SD12 (第93図)
SB20の東側、C-D15区で検出しており、検出長は3.7m、



第90図 SD11 実測図 (S=1/50・1/200)

深さは浅く5cm程を測るのみである。走行方向がSR20の主軸とはほぼ同一であるが、若干距離があるため、SR20に伴うものかは判断としない。埋土にはVI b層が堆積する。遺物は出土していない。

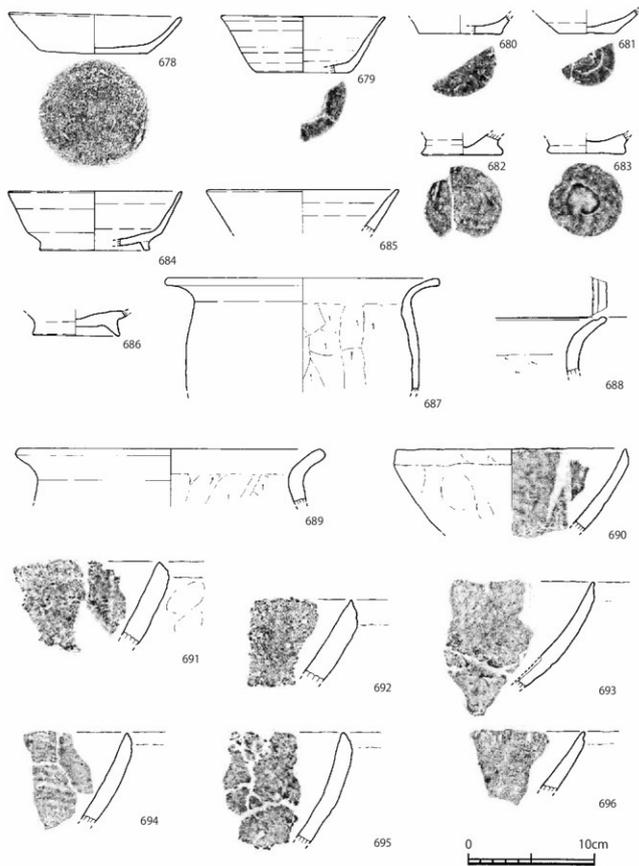
SD14 (第93図)

D10区で検出しており、溝状部分の検出長は3.5m、幅0.4m弱、深さ8cm程を測る。断面形態は逆台形状を呈す。北西～南東方向に走行するが、北西側は硬化面を有す窪地に、南東端はSB23の柱穴手前で終息する。SR24の項でも述べたとおり、窪地とSD14は本来一つの遺構であると考えられる。底面には芯々間が60cm前後の浅いビットを有す。このビットは窪地の底面にも続いていることから、やはりSD14と窪地部分は一連の遺構であることが分かる。このビットの底面には土師器や

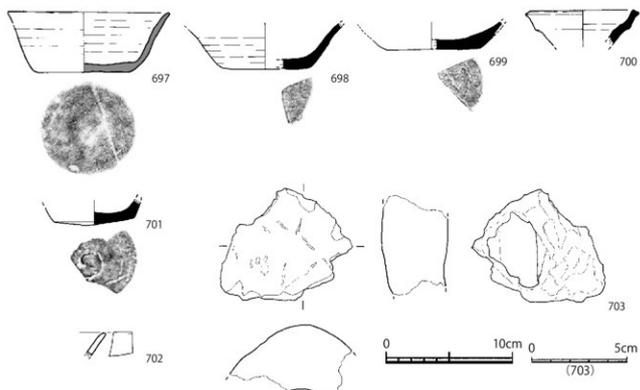
須恵器の小破片が数多く蓄められていたが、図化できるような遺物は出土していない。

これまでみてきたように、本遺跡で検出された溝状遺構の中で、その機能等の位置づけに関して断定できるものはほとんどない。SD5・6・14といった底面に所謂波板状ビットと呼ばれるビット列をもつものについては、道跡である可能性が指摘できる。これらのビット列の芯々間は60～70cmを測り、これまで報告されているこの種の遺構とはほぼ同様の傾向を示す。

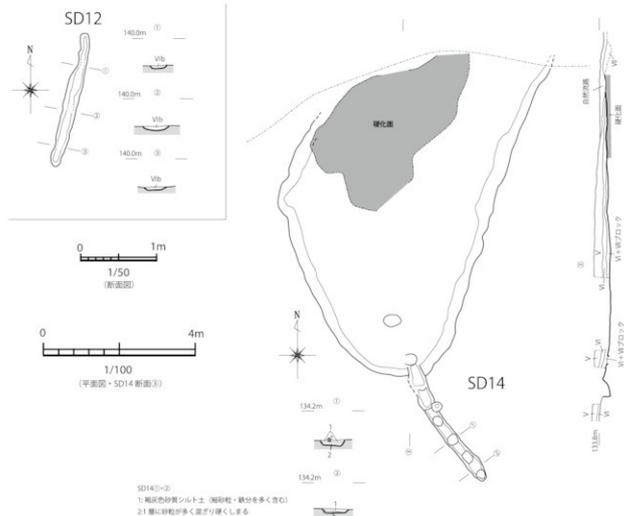
また、SD4やSD7のように遺構内に水の存在が想定される遺構もあるが、これが具体的にどのような機能を有していたのかについては断定することは困難であり、可能性を指摘するに止めたい。



第91図 SD11出土遺物実測図① (S=1/3)



第92図 SD11 出土遺物実測図② (S=1/2・1/3)

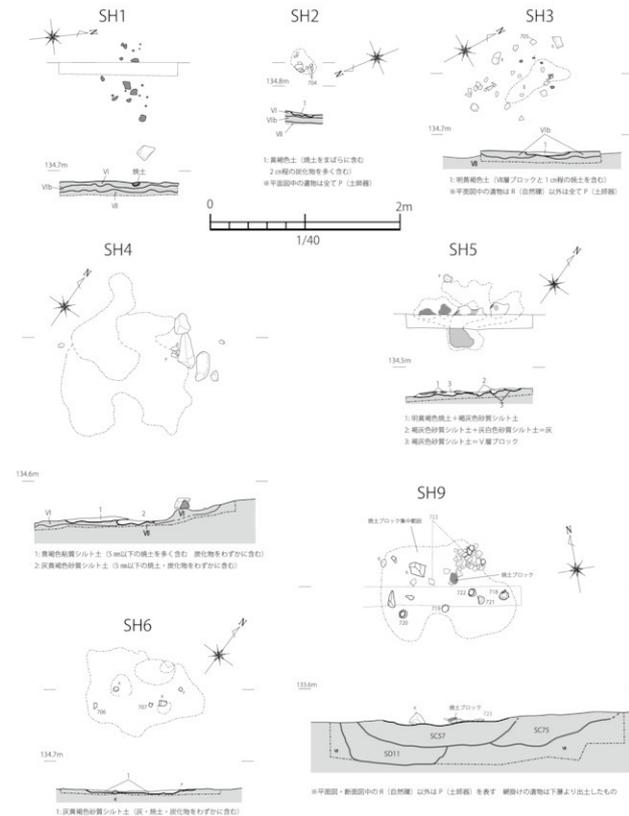


第93図 SD12・14 実測図 (S=1/50・1/100)

4 焼土範囲 (SH)

包含層 (基本土層 V・VI・VIb 層) の掘り下げの際に、焼土ブロックが広がる範囲や面的に土が被熱している範囲を SH (焼土範囲) として、調査・記録した。その多くが伊路のような確実に遺構といえるものではなく、焼土

や炭化物、あるいは灰と考えられる堆積物がブロック状にみられる範囲が確認されているのみである。遺構そのものではなくても、その痕跡である可能性が高いため、以下個別に報告する。SH7 と SH8 については、SB21 に伴うものと考えられるため、SB21 の項で報告している。



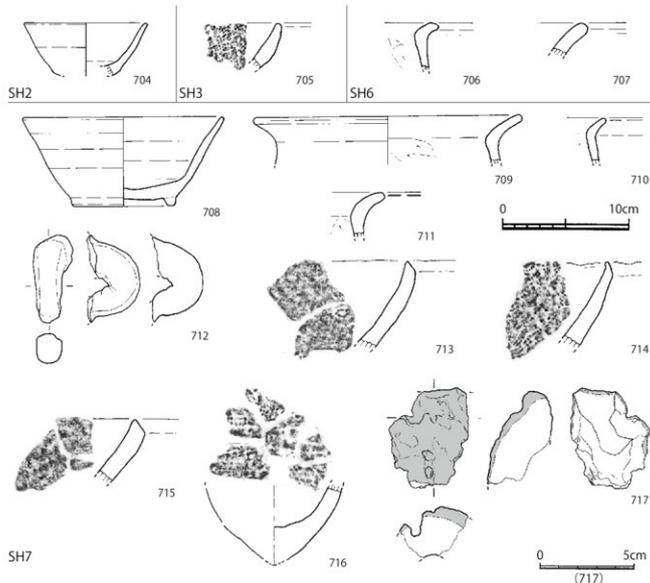
第94図 SH1～6・9 実測図 (S=1/40)

SH1 (第94図)

F16区で検出しており、ブロック状の焼土が 0.9×0.3 mの範囲に広がる。掘り込みはもたない。ここで火を使い、床が被熱したものではなく、本来別の場所にあった焼土がこの場所に廃棄されたものを検出したものと考えられる。VI層中で検出している。これに伴うような遺物も出土していない。

SH2 (第94図)

SH1の西側、F16区で、SB12と重複して検出している。SH1と同様に掘り込みはもたず、約30 cm四方の範囲で基本土層のVII層と考えられる黄褐色土中に焼土・炭化物が含まれた層が堆積する。VI層中で検出している。これもSH1と同様に、本来別の場所にあったであろうが等の遺構の土がきかき出されるなどして、二次的に堆積したものを検出したと考えられる。この範囲から土師器の坏と考えられる資料が出土した(704)。口径は10 cmに満たず、小型である。



第95図 SH2・3・6・7 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

SH3 (第94図)

SH1の東側、F16区で検出しており、 0.7×0.4 mの範囲で焼土ブロックを含む明黄褐色土が検出されている。この明黄褐色土は基本土層のVII層と考えられ、それ自体がブロック状に堆積する。状況としてはSH2と同じように、炉のような火を使用する遺構の土が廃棄され、二次的に堆積したものを検出したと考えられる。つまり遺構そのものではなく、二次堆積した焼土および地山層がブロック状に散在する範囲として認識したものである。

この範囲の周辺からは705の製塩土器が出土した。内面には布目の痕が残る。

SH4 (第94図)

G19区の窪地の落ち跡で検出した。径1.4 m程の範囲に炭化物と焼土を含む層を確認した。遺構というよりは、炉跡等の被熱した土が二次的に窪地に流れ込んだ可能性が高い。周辺からは図化できる遺物は出土していない。

SH5 (第94図)

SH4と同様に、G19区の窪地の落ち跡で検出した。これも焼土や灰がブロック状に入る層を検出したもので、遺構の土が水流などにより二次的に窪地に流れ込んだものと考えられる。周辺から図化できる遺物は出土していない。

SH6 (第94図)

E13区で検出しており、やはり 1.2×0.8 mの範囲で、焼土・炭化物・灰が混ざった層が検出された。周辺から土師器の甕である706・707が出土した。

SH7・SH8 (第35図)

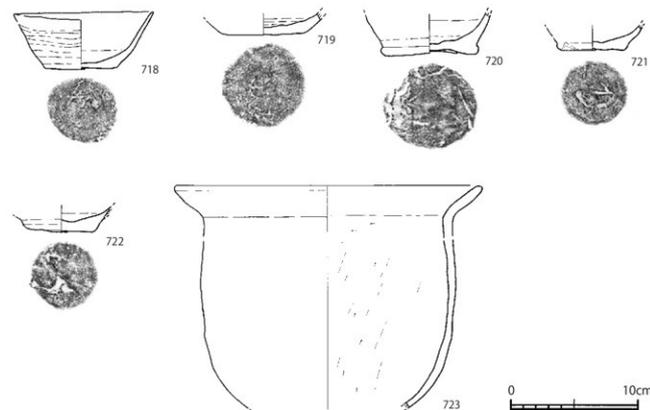
遺構の詳細および出土遺物については、SB21の項で報告している。

SH9 (第94図)

B5区で、SC57の上部に堆積する形で検出された焼土ブロックが集中する範囲である。この範囲は 1.4×1.0 mにおよび、比較的多くの遺物が出土している。

718～723がSH9の範囲内から出土した遺物である。718～722は土師器の坏。718はやや歪みがみられるが、口径10.8 cm、底径5.5 cm、器高4.5 cmを測る。底部は円盤状を呈す。720は大きく突出する円盤高台を有す。

723は土師器甕である。口径23.8 cmを測る。外面はナデ、内面はナデおよびケズリにより調整される。



第96図 SH9 出土遺物実測図 (S=1/3)

以上のように、焼土範囲(SH)として認識したものは、その名称が示すとおり、炉跡等の遺構そのものではなく、なんらかの理由で被熱の痕跡である焼土を含む層が流出し、二次的に堆積した範囲を検出したものである。SB21内で検出したSH7およびSH8についても、鍛冶作業等により形成された床面ないしは炉跡の被熱の痕跡が、焼土ブロックとして二次的に堆積したものである可能性が高い。

尚、今回の真米田遺跡の調査では、輪郭羽、鉄滓、炉壁と考えられる被熱して硬化する粘土塊など、鍛冶関連の遺物が大量に出土している。鉄製品も鉄釘をはじめかなりの量が出土しているといえる。しかしながら、上述のように、ある程度長時間にわたる被熱の痕跡と考えられる焼土塊や炭化物を含む層の二次堆積は確認しているものの、炉跡のような確実に鍛冶の痕跡であるといえる遺構は検出できていない。ただし、このような炉跡の残骸である可能性のあるものや、大量の関連遺物が出土していることから、集落内で鍛冶作業が行われていた可能性は極めて高いといえよう。

ここで報告した焼土範囲以外にも、同様の遺構としてSX3とした遺構が挙げられる。焼土範囲とは異なり、断面観察から掘り込み状のものが確認できたため、別途報告する。

5 楕円形周溝墓 (SK)

SK1 (第 97 図)

C16 区で検出した遺構で、北側約 1/3 程が現代の攪乱により削平されるため、全体的な規模は不明である。残存する規模・形態から推測すると、周溝外周径は、長軸 3.2 m + α、短軸が 3.54 m の長楕円形を呈すものと考えられる。主軸は N-11°-E にとる。周溝は南西側で途切れ、幅 1 m 程の陸橋がつくられる。残存する範囲での周溝の幅は約 30 ~ 60 cm、検出面からの深さは 14 ~ 26 cm を測る。断面は U 字状を呈す。周溝内に堆積する埋土は、場所により若干異なるが、基本的には黒褐色粘質土である。

墓壙も周溝同様、北側の一部が現代の攪乱により削平されており、正確な規模は不明となる。長軸 2.3 m + α、短軸 1.32 m の隅丸長方形を呈す。検出面からの深さは 10 ~ 24 cm で周溝と変わらない。床面は北側に向かい緩やかに傾斜する。断面で遺構内埋土を観察すると、上平

には硬くしまる黒褐色粘質土が堆積しており、下半には褐灰色砂質土が幾層かに分かれ堆積する。断面観察からは確実に木棺の痕跡といえるものは確認できていない。また、鉄釘は墓壙内からは出土していないことから、埋葬施設が木棺であった可能性は低いと考える。墓壙内からはほとんど遺物が出土しておらず、しかも破片資料が多い。供献したと考えられる遺物は出土していない。

724 ~ 737 が SK1 から出土した遺物である。724 はやや硬質な土師器環である。周溝内から出土。口径は 10.6 cm を測る。725 は円盤高台杯。726 は土師器甕、727・728 は甕の底部である。

729 は須恵器甕の胴片である。

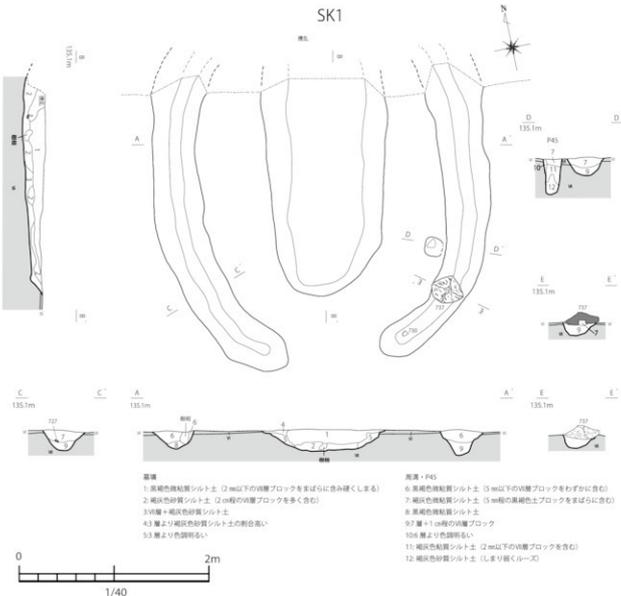
730・731 は緑釉陶器である。730 は暗緑色を呈し、硬質な胎土を有す。ミガキはみられない。京都産洛西型ないしは近江産であると考えられる。731 はやや軟質な胎土で、色調は淡緑色を呈す小碗ないしは皿である。京都

産洛西型、防長産、東海産のいずれかと考えられる。

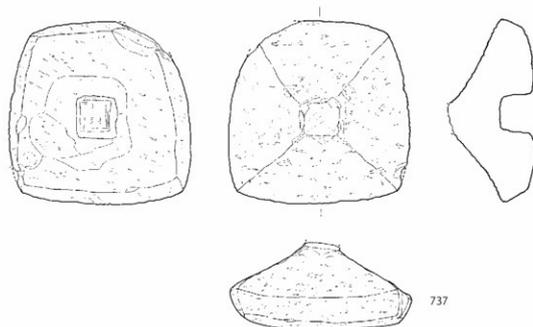
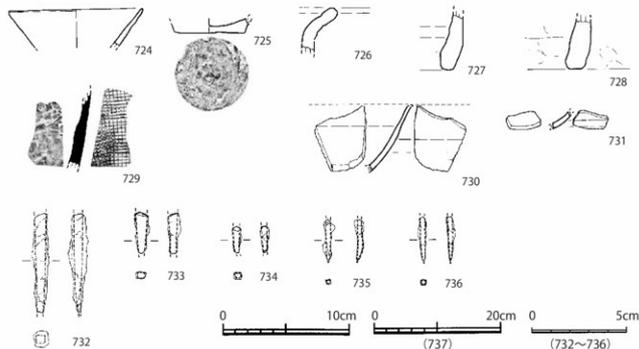
732 ~ 736 は鉄釘である。いずれも断面形態は四角形を呈す。頭部が保存するものはない。

737 は軽石製笠石である。上面視は各辺の中央が丸みをおびる四角形を呈す。屋根上部に欠損痕とみられる痕跡があり、本来は宝珠が付いていた可能性がある。また、裏面には一辺 6.5 cm 四方の四角形の鱗孔がみられ、その周囲に方形のあたり痕が認められる。塔身の痕跡と考えられる。これらのことから、本資料は笠塔婆の笠ないしは板碑の屋根であり、みつがっていない塔身部分は木質であった可能性がある (狭川真一氏教示)。

上述の出土遺物のうち、墓壙から出土しているのは 725・726 のみで、その他は周溝内から出土している。737 の軽石製笠石も周溝の南東部で出土している。ある程度周溝内に土が流入・堆積した後に入り込んだものと考えられるため、本遺構に確実に伴うものとは断定できない。出土遺物が少なく遺構の帰属時期の決定には苦慮するが、本遺跡の主要時期である 9 世紀後半 ~ 10 世紀代の所産と考えたい。上述の軽石製笠石についても、後世の流れ込みである可能性が十分に考えられるため、ここでは 9 世紀後半頃 ~ 中世までの時間幅で捉えておきたい。



第 97 図 SK1 実測図 (S=1/40)



第 98 図 SK1 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3・1/6)

6 ビット (P)

真米田遺跡では、掘立柱建物跡や柵列のように、建物跡の一部を構成する柱穴として認識できたもの以外の小穴は、単独のビットとして調査・記録している。調査区全体では合計 650 基検出している。基本的には 1 m 前後の土坑と区別して、径が 0.5 m 以下の円形を基調とする遺構をビットとしているが、線引きは厳密なものではない。それより大型のものも若干含まれている。土層断面の観察から、柱痕跡が認められるビットも存在することから、本来は建物の一部を構成していた可能性があるビットも少なくない。以下、埋土が複数層確認されたビット、図化できる遺物が出土したビットについて個別に報告している。個別の平面・断面図を掲載しておらず、出土遺物のみを報告しているビットの位置・形態については第 11～15 図の遺構配置図を参照されたい。

P39 (第 15 図)

F20 区で検出した。738 は土師器環で底径が 5.8 cm を測る。

P40 (第 99 図)

F20 区で検出しており、径 0.34 m の円形を呈す。検出面からの深さは 48 cm を測る。739 は土師器環である。口径 11.4 cm、底径 5.9 cm、器高 4.7 cm を測る。

P42 (第 99 図)

G16 区で検出しており、径 0.28 m の円形を呈す。検出面からの深さは 56 cm を測る。埋土中からは縄が多く出土している。

P44 (第 99 図)

G20 区で検出しており、径 0.38 m の円形を呈す。検出面からの深さは 18 cm を測る。

P49 (第 99 図)

G20 区で検出しており、径 0.38 m の円形を呈す。検出面からの深さは 28 cm を測る。

P54 (第 99 図)

G21 区で検出しており、径 0.44 m の円形を呈す。検出面からの深さは 16 cm を測る。

P56 (第 99 図)

G21 区で検出しており、長軸 0.46 m、短軸 0.36 m の楕円形を呈す。検出面からの深さは 42 cm を測る。742 は製塩土器の底部片である。

P60 (第 99 図)

G21 区で検出しており、長軸 0.34 m、短軸 0.28 m の楕円形を呈す。検出面からの深さは 18 cm を測る。740 は土師器環で底部は円盤高台となる。底径 5.5 cm を測る。

P62 (第 99 図)

G21 区で検出しており、径 0.38 m の円形を呈す。検出

面からの深さは 20 cm を測る。

P67 (第 99 図)

F21 区で検出しており、長軸 0.46 m、短軸 0.38 m の不整形円形を呈す。検出面からの深さは 28 cm を測る。

P68 (第 99 図)

F21 区で検出しており、長軸 0.4 m、短軸 0.34 m の不整形円形を呈す。深さは 20 cm を測る。SX1 に切られる。

743 (土師器環の底部)

底径 5.2 cm を測る。

P71 (第 15 図)

F21 区で検出している。SD4 を切る。744 は埋土下層から出土した鉄斧である。

P74 (第 99 図)

E21 区で検出しており、長軸 0.38 m、短軸 0.32 m の円形を呈す。検出面からの深さは 34 cm を測る。SD4 を切る。遺構の北西側にテラスを有し、二段掘りになる。断面観察からは柱痕跡と考えられる土層が確認できた。

P77 (第 99 図)

F21 区で検出しており、径 0.3 m の円形を呈す。検出面からの深さは 18 cm を測る。

P79 (第 99 図)

F21 区で検出しており、長軸 0.42 m、短軸 0.36 m の楕円形を呈す。検出面からの深さは 38 cm を測る。検出面近くで 745 の製塩土器が出土した。口径 11.4 cm を測り、内面には布目痕が残る。

P84 (第 99 図)

F21 区で検出しており、径 0.3 m の円形を呈す。検出面からの深さは 20 cm を測る。底面近くからは小縄が多く出土した。

P86 (第 99 図)

G21 区で検出しており、長軸 0.3 m、短軸 0.26 m の楕円形を呈す。深さは 24 cm を測る。

P92 (第 99 図)

G20 区で検出しており、長軸 0.24 m、短軸 0.2 m の楕円形を呈す。検出面からの深さは 24 cm を測る。

P94 (第 14 図)

D17 区で検出した。741 は土師器の高台付椀である。

P124 (第 14 図)

E17 区で検出した。746 は鉄斧である。

P172 (第 99 図)

G21 区で検出しており、長軸 0.56 m、短軸 0.44 m の楕円形を呈す。検出面からの深さは 12 cm を測る。747 は完形の土師器環である。若干焼き歪みが見られるが、口径 11.1～11.5 cm、底径 5.0 cm、器高 4.5 cm を呈す。

P175 (第 99 図)

G21・22 区で検出しており、長軸 0.34 m、短軸 0.26



第 99 図 ビット (P) 実測図①(S=1/40)

mの隅丸方形を呈す。深さは30 cmを測る。748・749は製塩土器である。いずれも口縁部片である。

P178 (第99図)

G22区で検出しており、長軸0.42 m、短軸0.38 mの不整形形を呈す。検出面からの深さは34 cmを測る。

P179 (第99図)

G22区で検出しており、径0.36 mの不整形形を呈す。検出面からの深さは10 cmを測る。

P180 (第99図)

H22区で検出しており、径0.44 mの円形を呈す。検出

面からの深さは14 cmを測る。

P181 (第99図)

H22区、P180に隣接して検出しており、長軸0.54 m、短軸0.5 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは42 cmを測る。断面観察からは柱痕跡と考えられる土層が確認できた。750は円盤高台環である。底径は5.4 cmを測る。

P182 (第99図)

G22区で検出しており、長軸0.26 m、短軸0.22 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは20 cmを測る。遺構の西側がテラス状を呈し、二段掘りとなる。

P183 (第99図)

G22区で検出しており、径0.46 mの不整形形を呈す。検出面からの深さは88 cmを測る。751は須恵器環である。底径5 cmを測る。752は土師器の高台付椀。

P184 (第101図)

G22区で検出しており、長軸0.42 m、短軸0.38 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは44 cmを測る。

P186 (第101図)

G22区で検出しており、長軸0.76 m、短軸0.36 mを測る。平面形態はひょうたん形を呈す。遺構の南東側がわずかにテラス状を呈し、北西側が若干深くなる。

P188 (第101図)

H22区で検出しており、長軸0.46 m、短軸0.38 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは36 cmを測る。

P189 (第101図)

G22区で検出しており、径0.64 mの円形を呈す。検出面からの深さは60 cmを測る。753は土師器環で、円盤高台を有す。口径12.5 cm、底径6.4 cm、器高5.1 cmを測る。

P196 (第101図)

F22区で検出しており、径0.5 mの円形を呈す。検出面からの深さは20 cmを測る。

P198 (第101図)

F22区で検出しており、長軸0.48 m、短軸0.42 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは44 cmを測る。埋土の最上層には炭化物や焼土を含む層がみられる。754は口縁部のみであるが、高台付椀であろうか、口径は13.8 cmを測る。胎土は硬質。

P200 (第101図)

G22区で検出しており、P189に切られる。径0.2 m程のビットと考えられる。検出面からの深さは52 cmを測る。757は鉄釘である。断面四角形で、頭部が残る。

P201 (第101図)

F22区でSC31やP202に隣接して検出した。長軸0.26 m、短軸0.2 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは36 cmを測る。755は刀子である。刃部にゆるい間部がみられる。背部は錆により変形しているためか、若干湾曲する。切先は欠損する。756は土師器の高台付椀である。底径は7.3 cmを測る。

P202 (第101図)

F22区でSC31・P201に隣接して検出した。長軸0.38 m、短軸0.32 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは26 cmを測る。

P203 (第101図)

F22区で検出しており、長軸0.5 m、短軸0.46 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは34 cmを測る。

P205 (第101図)

F22区で検出しており、長軸0.44 m、短軸0.36 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは62 cmを測る。埋土中位からは人頭大の礎が出土している。

P207 (第101図)

G22区で検出しており、長軸0.56 m、短軸0.44 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは54 cmを測る。断面形態をみると、底面中央が径20 cm程の円形に一段深くなる。埋土の観察からは柱痕跡は認められなかったが、この二段掘り部分が柱の痕跡の可能性がある。

P208 (第101図)

F22区で検出しており、長軸0.5 m、短軸0.44 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは40 cmを測る。遺構の南東側がテラス状になり、北西側が一段低くなる。758は埋土上層から出土した土師器の高台付椀である。磨耗する。

P209 (第101図)

F22区で検出しており、径0.4 mの不整形形を呈す。検出面からの深さは52 cmを測る。

P210 (第101図)

F22区で検出しており、径0.4 mの不整形形を呈す。検出面からの深さは42 cmを測る。遺構の西側がテラス状になり、東側が深くなる。

P212 (第101図)

G22区で検出しており、SB9のP194に切られる。長軸0.54 m、短軸0.44 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは64 cmを測る。断面を観察すると、中央に垂直方向の立ち上がり認められるため、これが柱痕跡である可能性が高い。その上部には異なる土が堆積し、大きく開くため、柱は抜き取られたものと考えられる。759は埋土の下層より出土した製塩土器である。

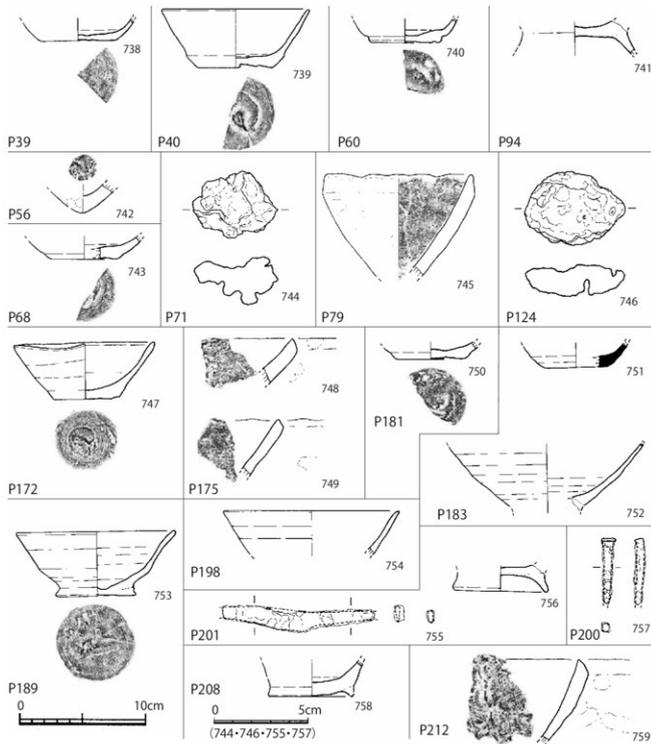
P213 (第103図)

E22区で検出しており、長軸0.66 m、短軸0.54 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは68 cmを測る。埋土には焼土や炭化物を多く含み、須恵器が大量に出土している。

760～765が出土した須恵器である。760は須恵器の甕で、外面には平行タタキが、内面は車輪文の後ナデが加えられる。口縁はくの字に屈曲し、口径17.8 cmを測る。761～763も甕の口縁部で、くの字に屈曲する。764は甕の胴部、765は肩部であろうか。

P214 (第103図)

E23区でP215に隣接して検出している。径0.5 mの円形を呈す。検出面からの深さは42 cmを測る。断面を観察すると、中央に幅20 cm程の垂直方向の立ち上がりが



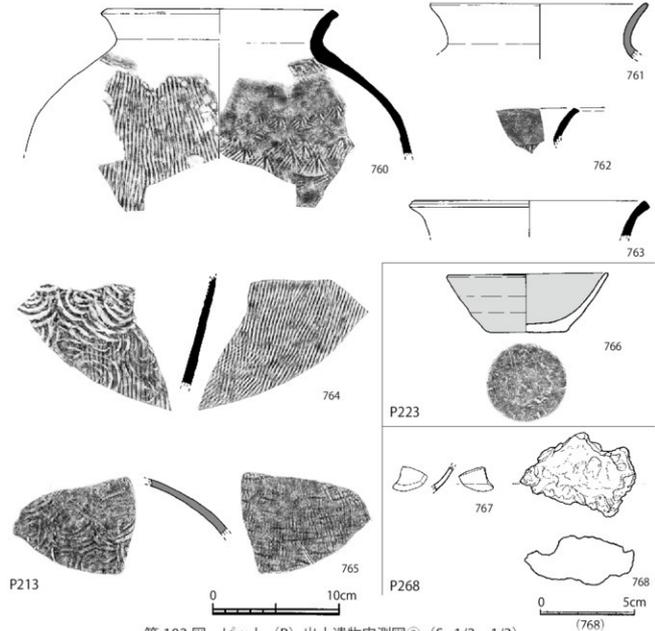
第100図 ビット(P)出土遺物実測図① (S=1/2・1/3)



第101図 ビット(P) 実測図② (S=1/40)

認められる。柱痕跡であると考えられるが、この部分には焼土が混ざる。
P215 (第103図)
 E23区でP214に隣接して検出しており、径0.48mの円形を呈する。検出面からの深さは42cmを測る。埋土には焼土・炭化物が多く含まれる。P213と同様に、埋土中からは須恵器をはじめとする遺物が多く出土した。

P216 (第103図)
 F22区で検出しており、SBSのP2に切られる。径0.4m程の楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは80cmを測る。
P223 (第103図)
 F22区で検出しており、長軸0.5m、短軸0.42mの楕円形を呈す。検出面からの深さは20cmを測る。**766**は土師器環である。底部は円盤状に厚くなり、内外面に赤彩される。口径12.4cm、底径6.3cm、器高4.7cmを測る。
P240 (第103図)
 F16区で検出しており、長軸0.38m、短軸0.32mの楕円形を呈す。検出面からの深さは46cmを測る。遺構



第102図 ビット(P) 出土遺物実測図② (S=1/2・1/3)

P244 (第103図)

E16区で検出しており、径0.2mの円形を呈す。検出面からの深さは20cmを測る。

P245 (第103図)

E16区で検出しており、径0.36mの円形を呈す。検出面からの深さは48cmを測る。

P246 (第103図)

E16区で検出しており、長軸0.36m、短軸0.3mの楕円形を呈す。検出面からの深さは62cmを測る。

P247 (第103図)

E16区で検出しており、径0.26mの楕円形を呈す。検出面からの深さは46cmを測る。

P248 (第103図)

E16区で検出しており、径0.34mの円形を呈す。検出面からの深さは52cmを測る。

P249 (第103図)

D・E16区で検出しており、長軸0.56m、短軸0.5mの楕円形を呈す。検出面からの深さは12cmを測る。

P250 (第103図)

E16区で検出しており、径0.2mの円形を呈す。検出面からの深さは26cmを測る。

P256 (第103図)

E16区で検出しており、径0.22mの円形を呈す。検出面からの深さは30cmを測る。

P266 (第103図)

C15区で検出しており、径0.26mの円形を呈す。検出面からの深さは30cmを測る。

P268 (第14図)

C15区で検出した。767は軟質な胎土で、色調は淡緑色を呈す練輪陶器の部品片である。椀ないしは皿であろう。防長産と考えられる。768は鉄滓である。重量は68gを計る。

P274 (第103図)

D15区で検出しており、径0.4mの円形を呈す。検出面からの深さは20cmを呈す。

P276 (第103図)

D15区で検出しており、長軸0.38m、短軸0.34mの楕円形を呈す。検出面からの深さは40cmを測る。遺構の北側がテラス状を呈し、南側が深くなる。土層断面の観察から、垂直方向の立ち上がりが確認できる。柱痕跡と考えられる。

P278 (第105図)

D15区で検出しており、長軸0.66m、短軸0.52mの楕円形を呈す。検出面からの掘り込みの深さは52cmを測る。

P281 (第105図)

D15区で検出しており、長軸0.3m、短軸0.24mの楕円形を呈す。検出面からの深さは54cmを測る。776は鉄製の紡錘車である。径5.2cmを測る。軸部分は出土していない。

P282 (第105図)

D15区で検出しており、長軸0.4m、短軸0.34mの楕円形を呈す。検出面からの深さは42cmを測る。

P283 (第105図)

D15区で検出しており、長軸0.5m、短軸0.3mのひょうたん形を呈す。検出面からの深さは36cmを測る。遺構の西側がテラス状を呈し、東側が深くなる。埋土中で人頭大の縄が出土している。

P293 (第105図)

E15区で検出しており、径0.34mの円形を呈す。検出面からの深さは40cmを測る。

P294 (第105図)

E15区で検出しており、径0.22mの円形を呈す。検出面からの深さは16cmを測る。

P296 (第105図)

E15区で検出しており、径0.34mの円形を呈す。検出面からの深さは42cmを測る。

P297 (第105図)

E15区で検出しており、長軸0.32m、短軸0.24mの楕円形を呈す。検出面からの深さは20cmを測る。底面の北西側に偏って深さ4cm程の浅い窪みがみられる。

P298 (第105図)

E15区で検出しており、径0.3mの円形を呈す。検出面からの深さは48cmを測る。777は内面にミガキが加えられ、黒色処理される黒色土器A類である。内面の炭素の吸着が悪く、黒色を呈していない範囲が多い。

P299 (第105図)

E15区で検出しており、径0.34mの円形を呈す。検出面からの深さは24cmを測る。

P312 (第14図)

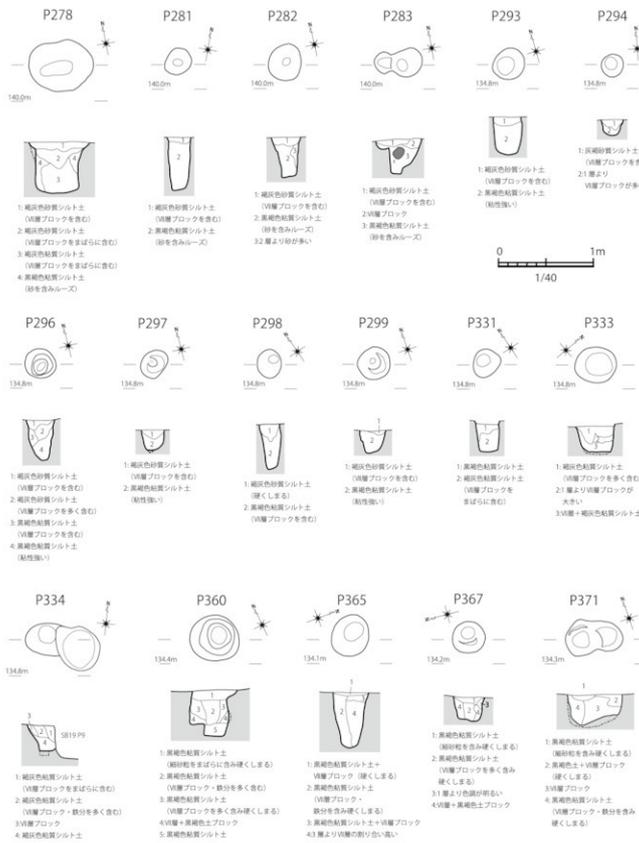
C14区で検出した。779は断面四角形の鉄釘と考えられる。錆のため小錠が付着する。

P321 (第14図)

D14区で検出した。782は須恵器製の胴部片であろう。内外面共に平行タキがみられる。

P331 (第105図)

G16区で検出しており、径0.3mの円形を呈す。検出面からの深さは32cmを測る。778は土師器器底で、底部から体部下半がケズリ状の調整となる。口径15cm、底径7cm、器高2.2cmを測る。



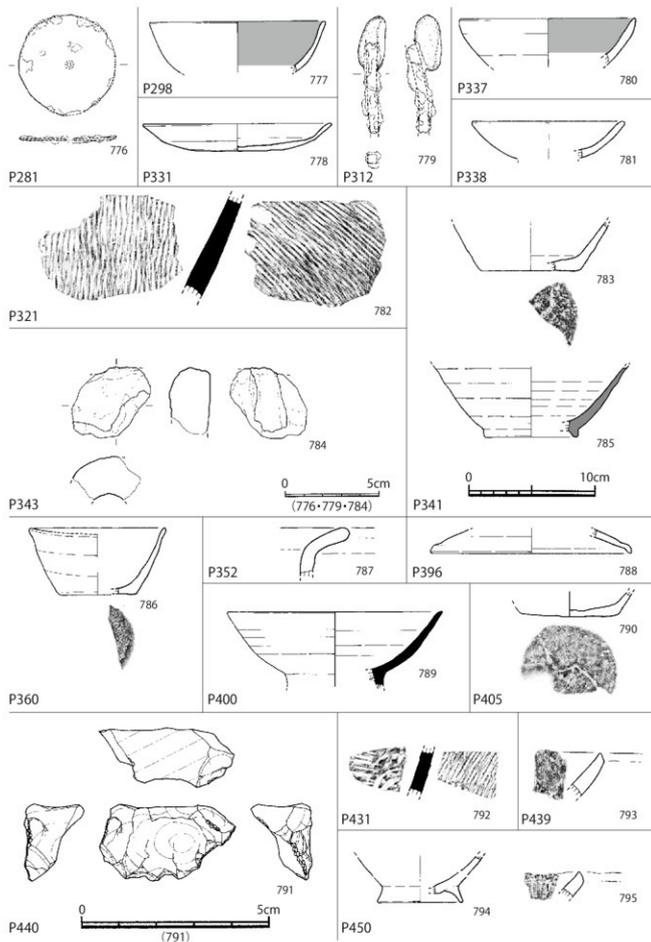
第105図 ビット(P) 実測図④(S=1/40)

P333 (第105図)

G16区で検出しており、長軸0.44m、短軸0.38mの楕円形を呈す。検出面からの深さは28cmを測る。

P334 (第105図)

G16区で検出しており、SB19のP9に切られる。平面形態は楕円形を呈するものと推測される。検出面からの



第106図 ビット(P) 出土遺物実測図④ (S=1/1・1/2・1/3)

深さは26 cmを測る。

P337 (第14図)

E14区で検出している。780は口縁部のみが遺存するが土師器の高台付碗と考えられる。内面が黒色処理される黒色土器A類。口径は14 cmを測る。

P338 (第14図)

E14区で検出している。781は土師器の高台付碗であろうか。口径は12 cmを測る。

P341 (第35図)

D13区で検出しており、SB21のP1に切られる。783は土師器環である。底径7.7 cmを測る。785は焼成不良のためか、にぶい橙色を呈する須恵器の高台付環である。底部には短い高台が付く。

P343 (第13図)

D13区で検出している。784は輪郭口である。

P352 (第13図)

E12区で検出している。787は土師器甕の口縁部。硬く焼きしまる。

P360 (第105図)

E12区で検出しており、径0.5 mの円形を呈す。検出面からの深さは50 cmを測る。底面は二段掘りされる。786は土師器環である。口径10.5 cm、底径5.8 cm、器高5.3 cmを測る。

P365 (第105図)

C10区で検出しており、長軸0.46 m、短軸0.38 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは58 cmを測る。

P367 (第105図)

D10区で検出しており、径0.34 mの円形を呈す。検出面からの深さは26 cmを測る。

P371 (第105図)

D10区で検出しており、長軸0.6 m、短軸0.4 mのひょうたん形を呈する。検出面からの深さは32 cmを測る。

P388 (第107図)

E11区で検出しており、径0.34 mの不整形円形を呈す。検出面からの深さは24 cmを測る。

P396 (第13図)

E11区で検出した。788は土師器蓋である。口径15.8 cmを測る。

P398 (第107図)

E11区で検出しており、長軸0.5 m、短軸0.46 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは26 cmを測る。

P400 (第13図)

E11区で検出している。789は須恵器の高台付環である。高台部先端は欠損する。口径17 cmを測る。器面が荒れざらつく。

P404 (第107図)

E12区で検出しており、径0.28 mの円形を呈す。検出面からの深さは22 cmを測る。断面観察からは、柱痕跡の可能性ある土層が確認されている。

P405 (第107図)

E12区で検出しており、径0.44 mの円形を呈す。検出面からの深さは18 cmを測る。断面にみられる垂直方向の立ち上がりは柱痕跡の可能性はある。790は土師器の環である。底径は7.9 cmを測る。

P416 (第107図)

D11区で検出しており、長軸0.32 m、短軸0.22 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは18 cmを測る。

P417 (第107図)

D11区で検出しており、長軸0.46 m、短軸0.36 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは46 cmを測る。遺構の東側にテラスを有し、東側が一段深くなる。

P418 (第107図)

D11区で検出しており、径0.3 mの円形を呈す。検出面からの深さは36 cmを測る。

P419 (第107図)

D11区で検出しており、長軸0.36 m、短軸0.32 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは50 cmを測る。

P420 (第107図)

D11区で検出しており、径0.3 mの円形を呈す。検出面からの深さは46 cmを測る。

P431 (第13図)

D10区で検出しており、SD2を切る。792は須恵器甕の胴部片である。

P439 (第12図)

D9区で検出した。793は製塩土器の口縁部片である。

P440 (第12図)

D9区で検出した。791はチャート製の火打ち石。両端は稜を作り出し、機能部としている。使用によるつぶれが認められる。一部捩理面を残す。

P442 (第107図)

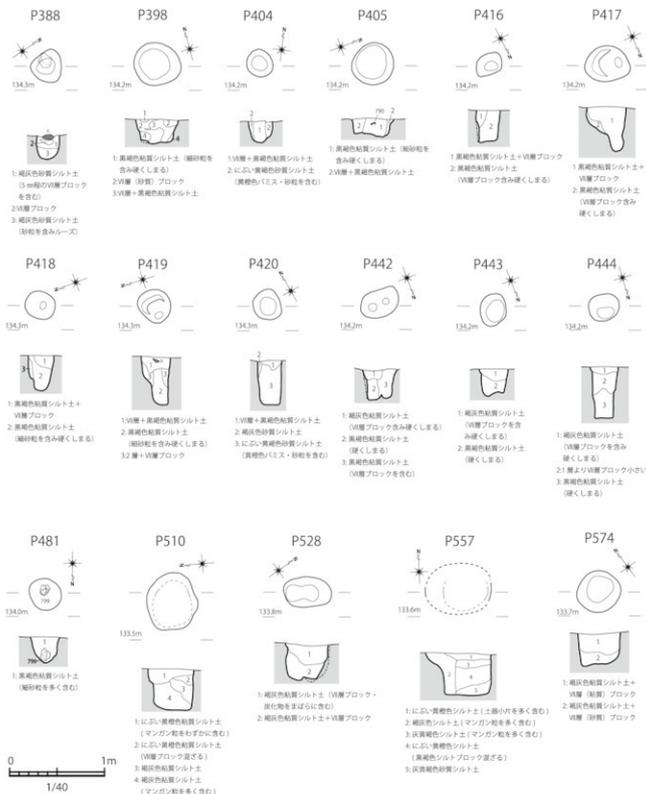
D9区で検出しており、長軸0.42 m、短軸0.28 mの楕円形を呈す。底面が二箇所にみられるため、二つのビットが重なっていた可能性もあるが、断面観察からは同一遺構と判断した。

P443 (第107図)

D9区で検出しており、長軸0.36 m、短軸0.26 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは28 cmを測る。

P444 (第107図)

D9区で検出しており、長軸0.32 m、短軸0.26 mの楕円形を呈す。検出面からの深さは54 cmを測る。



第107図 ビット (P) 実測図⑤ (S=1/40)

P450 (第12図)

D9区で検出した。794は土師器の高台付椀である。口縁部を欠くが、底部には短い高台が付く。底径は6.6 cmを測る。795は製塩土器の口縁部。

P453 (第12図)

D9区で検出している。796は須恵器甕を再利用した転

用甕である。内面に磨痕が認められる。

P463 (第12図)

E9区で検出している。798は土師器環、口径12.4 cm、底径5.4 cm、器高4.7 cmを測る。

P468 (第12図)

E9区で検出している。797は須恵器甕である。

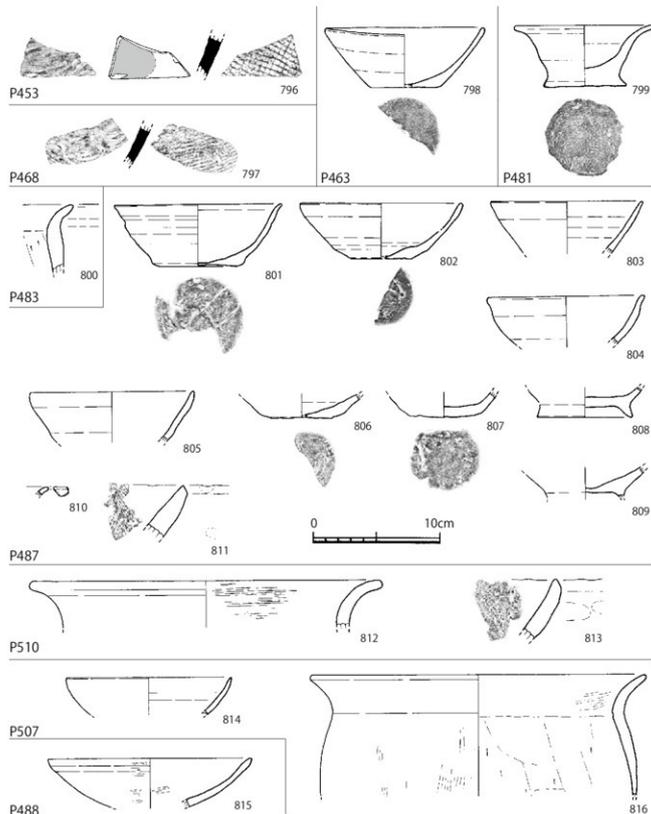
P481 (第107図)

F10区で検出しており、径0.34 mの円形を呈す。検出面からの深さは26 cmを測る。799は底面近くから出土している。一見すると土師器の脚台のようにもみえるが、糸切り痕が残る平坦面を底部と判断し、小鉢として報告する。肉厚な底部があり、口縁部に向かい外反して立ち

上がる。内面は非常に丁寧な調整が加えられる。ここでは小鉢として報告しているが上下逆転し、脚台状になる可能性もある。

P483 (第11図)

B2区で検出している。800は土師器甕である。口縁部が短く外反する。



第108図 ビット (P) 出土遺物実測図⑤ (S=1/3)

P487 (第11図)

A4区で検出している。801～811が出土した。801～803、805～807はいずれも土師器杯、801は円盤高台を有し、口縁端部が外反する。口径13cm、底径7.2cm、器高5cmを測る。802は底部が切り離しの際に薄く円盤高台状に切り残されている。口径12.6cm、底径5cm、器高4.5cmを測る。804は底部を欠くが、器形から高台付椀と考えられる。808・809も高台付椀である。810は防長産と考えられる緑軸陶器である。軟質な胎土を有す。811は製塩土器の口縁部片。

P488 (第11図)

B5区で検出している。815は内外面にミガキが加えられる椀である。黒色処理はされていない。

P507 (第11図)

A1区で検出している。814は全体的に磨耗するが、土師器椀であろうか。816は土師器甕で、外面と内面口縁部付近にハケメが認められる。

P508 (第11図)

B5区で検出している。817は土師器杯である。口径11.5cm、底径5cm、器高3.2cmを測る。819は土師器甕。外面はナデ、内面はナデ・ケズリにより調整される。

P510 (第107図)

B5区で検出しており、長軸0.6m、短軸0.54mの楕円形を呈す。SD11・SC44を切る。検出面からの深さは42cmを測る。812は土師器甕で口径27.4cmを測る。内面にハケメがみられる。813は製塩土器の口縁部である。

P511 (第11図)

A5区で検出している。818は土師器杯。底径7.8cmを測る。

P516 (第11図)

B5区で検出している。820は製塩土器の口縁部である。

P517 (第11図)

B5区で検出している。821は製塩土器であるが、内面は磨耗し、布目は残らない。

P519 (第11図)

B5区で検出している。822は土師器の高台付椀。ハの字に開く短い高台が付く。底径7.9cm。

P526 (第12図)

C8区で検出している。823は土師器杯の底部である。底径6cmを測る。

P528 (第107図)

C8区で検出しており、長軸0.5m、短軸0.32mの楕円形を呈す。検出面からの深さは40cmを測る。824は底部を欠くが、高台付椀と考えられる。口径15cm。

P533 (第12図)

C8区で検出している。825は天草陶石製の砥石である。欠損する部分以外は全ての面に磨痕が認められる。上面には円形の窪みがある。石材等の穿孔の際に使われた痕跡であろう。

P557 (第107図)

B4・5区で検出している。大部分を掘り過ぎているため、全体的な形態・規模は不明である。遺構の検出面からの深さは44cmを測る。827は土師器杯である。口径13.4cm、底径6.6cm、器高3.8cmを測る。

P569 (第12図)

B7区で検出している。826は軟質胎土の緑軸陶器である。椀ないしは皿であろう。胎土に粘り気があり、防長産と考えられる。

P573 (第12図)

B7区で検出している。830は土師器杯、口径13cm、底径6.2cm、器高5.1cmを測る。831は口径13cm、底径6.8cm、器高4.7cmを測る。底部は切り離しの際に薄く円盤状に残される。

P574 (第107図)

B7区で検出しており、径0.44mの円形を呈す。検出面からの深さは36cmを測る。

P576 (第12図)

B7区で検出している。832は土師器杯。底径4.9cmを測る。

P577 (第12図)

B7区で検出している。829は土師器杯である。底径4.6cmを測る。

P578 (第12図)

B・C7区で検出している。828は土師器杯である。底部は円盤高台を呈す。底径5.8cmを測る。

P583 (第12図)

C7区で検出している。833は土師器杯の口縁部である。口径は13.2cmを測る。

P586 (第110図)

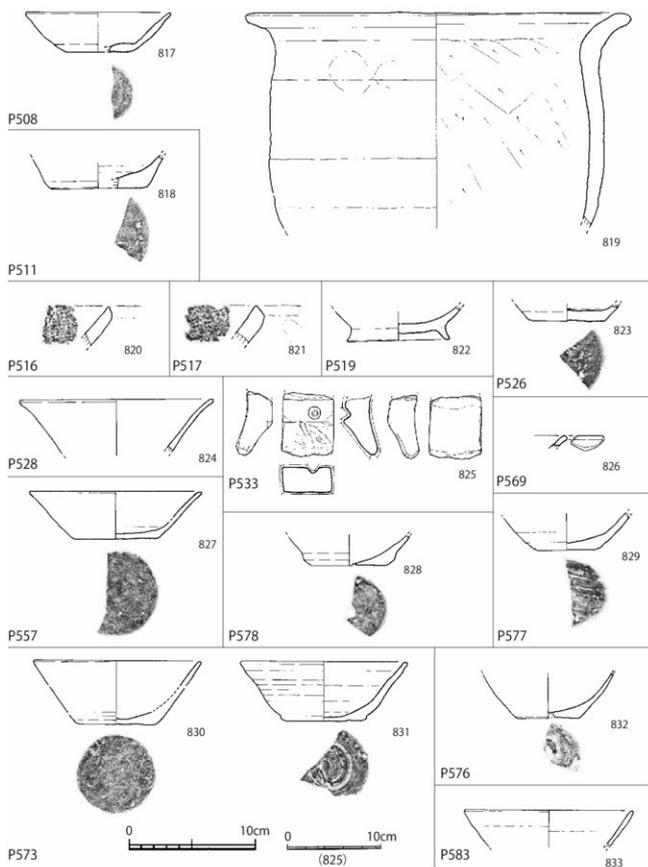
C7区で検出しており、長軸0.84m、短軸0.78mの楕円形を呈す。検出面からの深さは30cmを測る。834は土師器杯で、口径13.1cm、底径6cm、器高5cmを測る。835は器高が低い土師器鉢であろうか。口縁部周辺にはふきこぼれの痕跡が残る。836は製塩土器である。

P591 (第12図)

B7区で検出している。843は土師器杯の底部である。底径5.8cmを測る。

P592 (第110図)

A7区で検出しており、長軸0.7m、短軸0.48mのひょうたん形を呈す。検出面からの深さは30cmを測る。遺

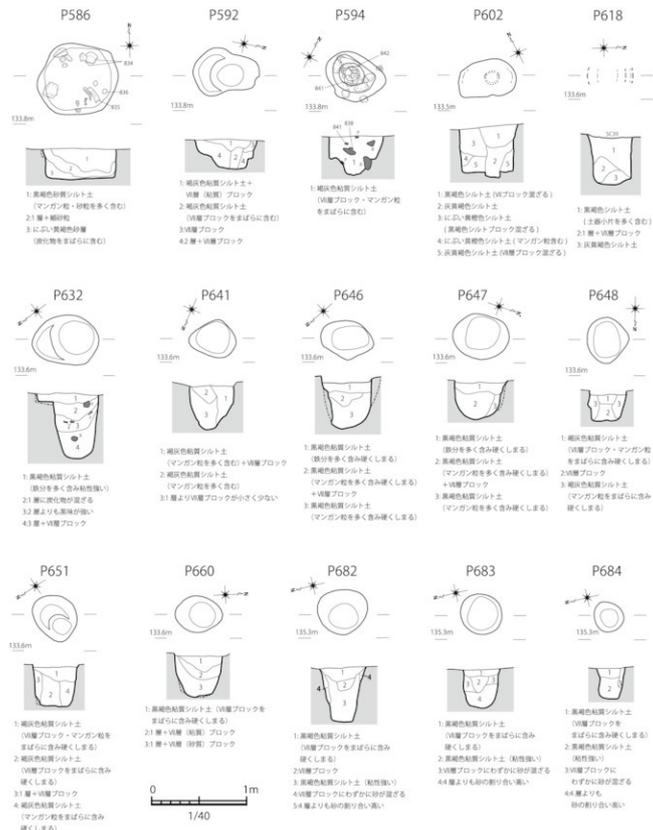


第109図 ビット(P)出土遺物実測図⑥ (S=1/3・1/4)

構の南側がテラス状を呈し、中央が一段深くなる。断面積することから、柱の抜き取り痕であると考えられる。観察からは、ビット中央で、幅10cm程の垂直方向の立ち上がりが確認できる。その上部が広がり、別の土が堆積することから、柱の抜き取り痕であると考えられる。P594 (第110図) A7区で検出しており、長軸0.62m、短軸0.48mの楕

円形を呈す。検出面からの深さは40cmを測る。遺構底面の中央が深くなる。壁面には地山の礫が露出する部分が認められる。埋土中からも多くの礫が出土した。木ボットからは837~842が出土している。837~

839は土師器の坏、837は焼き歪みがみられ、上面視は楕円形を呈す。838は837に比べて器高が低い。840は土師器の高台付碗。841は土師器の甕で外面にはハケメ調整が認められる。842は鉄滓である。



第110図 ビット(P) 実測図⑥(S=1/40)

P595 (第12図)

B6区で検出している。844は土師器坏の底部。底径5.7cmを測る。

P596 (第12図)

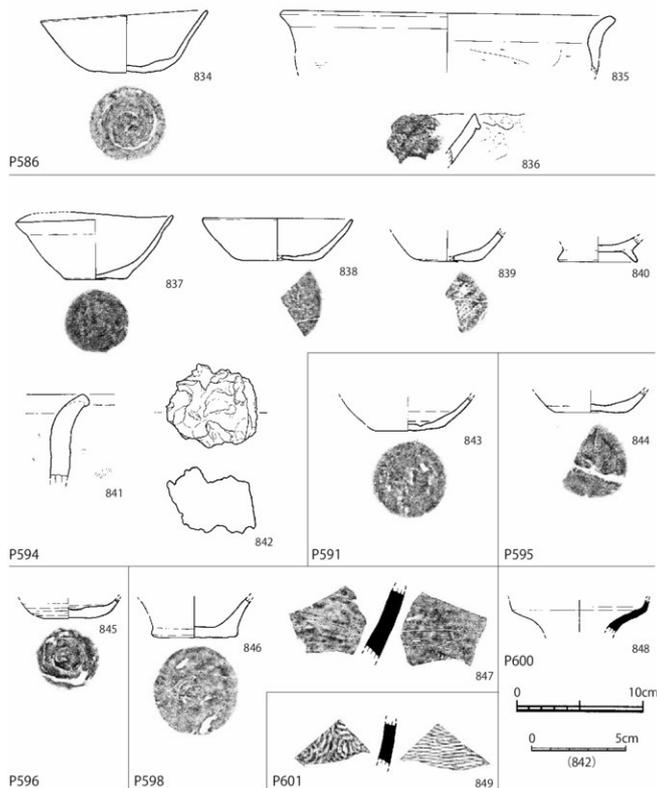
B6区で検出している。845は土師器坏の底部である。底径4cm。

P598 (第12図)

B6区で検出している。846は円盤高台の土師器坏である。底径6.8cmを測る。847は須恵器壺。

P600 (第11図)

B5区で検出している。848は須恵器壺の口縁部付近である。



第111図 ビット(P) 出土遺物実測図⑦(S=1/2・1/3)

P601 (第11図)

B5区で検出している。849は須恵器甕の胴部片。外面には平行タタキ、内面には同心円当て具痕がみられる。

P602 (第110図)

B5区で検出しており、長軸0.6m、短軸0.38mの楕円形を呈す。検出面からの深さは54cmを測る。底面には柱のあたり痕と考えられる浅い窪みがみられる。この窪みから垂直方向の立ち上がりが見られ、その上部が広がる状況が観察される。柱の抜き取り痕であろう。850は須恵器の坏、851は製塩土器である。

P603 (第11図)

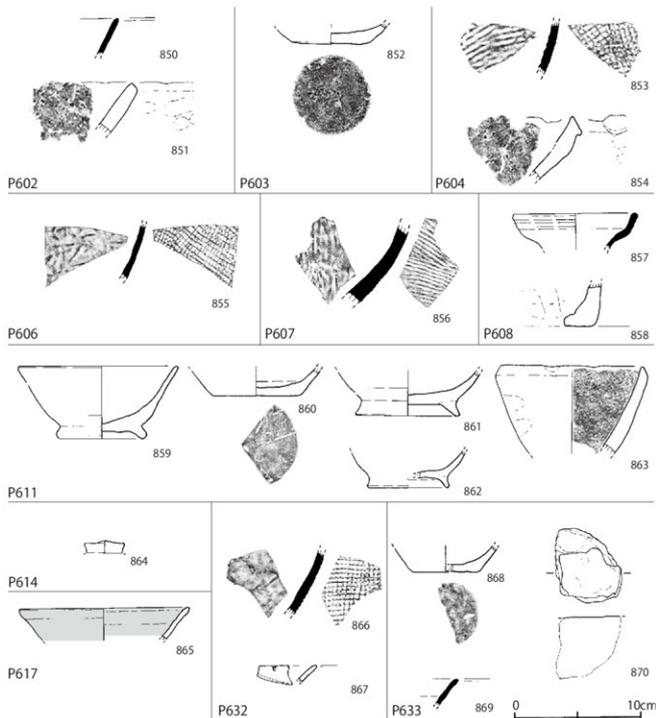
B5区で検出している。852は土師器坏で、底径は6cmを測る。

P604 (第11図)

B5区で検出している。853は須恵器甕の胴部、854は製塩土器である。

P606 (第11図)

C5区で検出している。855は須恵器甕の胴部片であろう。外面には格子目タタキ、内面には車輪文が認められる。



第112図 ビット(P) 出土遺物実測図⑨ (S=1/3)

P607 (第11図)

C5区で検出している。856は外面平行タタキ、内面平行タタキ後ナデ調整が加えられる。

P608 (第11図)

B5区で検出している。857は須恵器甕の口縁部で、口径9.7cm、858は甕の底部であろう。内面はケズリにより調整される。

P611 (第11図)

B5区で検出している。859～863が出土している。

859は土師器の高台付椀である。低く分厚い高台が付く。口径12.4cm、底径7.1cm、器高5.8cmを測る。内外共に磨耗が著しく表面が剥落する。

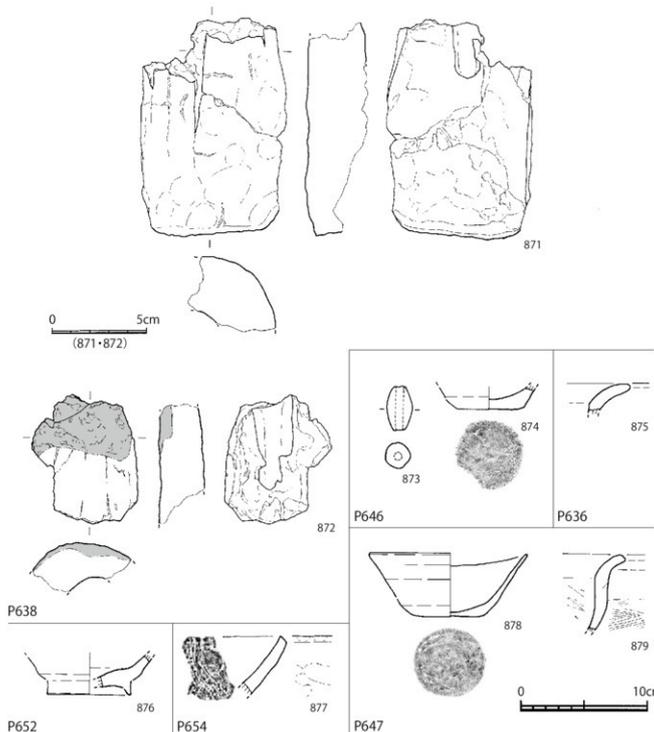
860は土師器坏。底径6.8cm。861・862も土師器の高台付椀である。863は製塩土器で口径11cmを測る。

P614 (第11図)

B5区で検出している。864は土師器蓋のつまみである。

P617 (第11図)

D5区で検出しており、SD11を切る。865は土師器坏な



第113図 ビット(P) 出土遺物実測図⑨ (S=1/2・1/3)

いしは柄の口縁部で、内外面に赤彩が認められる。口径13.4cm。

P618 (第110図)

B5区、SC39の床面で検出されたビットである。調査時のミスで平面の図面を取り忘れていたため、断面でしか確認できていない。SC39に切られるものと考えられる。検出面からの深さは52cmを測る。

P632 (第110図)

B6区で検出しており、長軸0.7m、短軸0.5mの楕円形を呈す。検出面からの深さは66cmを測る。866は須恵器甕の胴部片である。867は土師器の坏ないしは柄の口縁部片。内面に漆と考えられる模様の付着物が認められる。

P633 (第12図)

B6区で検出している。868は土師器環の底部で、底径5cmを測る。869は須恵器環の口縁部片。870は粘土塊で一部面取りがされる。

P636 (第12図)

C6区で検出している。875は土師器甕の口縁部である。

P638 (第12図)

B6区で検出している。871・872は輪割口である。871は径8cm程を測るものと推測される。872は先端部付近と思われる、融液物が付着し、一部硬化する。

P641 (第12図)

B6区で検出しており、長軸0.48m、短軸0.38mの不整形円形を呈す。検出面からの深さは46cmを測る。

P646 (第110図)

C6区で検出しており、長軸0.56m、短軸0.4mの楕円形を呈す。検出面からの深さは54cmを測る。873は完

形の土甕である。長さ3.5cmを測り、中央部がやや膨らむ。重さは12gを計る。874は土師器環で底径は5.4cmを測る。

P647 (第110図)

C6区で検出しており、長軸0.58m、短軸0.4mの楕円形を呈す。検出面からの深さは40cmを測る。878は土師器環で焼き歪みが見られ、器高は個体内で幅がみられる。口径12.3cm、底径5.6cmを測る。879は器高の低い土師器の鉢であろう。外面にはハケメがみられる。

P648 (第110図)

C6区で検出しており、長軸0.48m、短軸0.44mの楕円形を呈す。

P651 (第110図)

C6区で検出しており、長軸0.5m、短軸0.44mの楕円形を呈す。検出面からの深さは44cmを測る。遺構の東側がテラス状を呈し、西側がわずかに深くなる。

P652 (第12図)

C6区で検出している。876は土師器の高台付椀である。短い高台が付く。

P654 (第12図)

C6区で検出している。877は内面に布目が残る製塩土器である。外面がわずかに硬化する。

P659 (第12図)

C6区で検出している。880は製塩土器の口縁部片。

P660 (第110図)

C6区で検出しており、長軸0.48m、短軸0.38mの楕円形を呈す。検出面からの深さは44cmを測る。

P664 (第12図)

C6区で検出している。881は越州系赤青磁E1類であ

る。B5区出土資料と接合する。

P665 (第12図)

C6区で検出している。882は土師器甕の口縁部である。

P666 (第12図)

C6区で検出している。884は須恵器甕の胴部片であろう。外面は格子目タタキ、内面は車輪文が認められる。

P669 (第12図)

C6区で検出している。885は黒土器A類の口縁部片である。内面のミガキの単位は不明瞭である。

P673 (第12図)

C6区で検出している。886は須恵器環の口縁部と考えられる。

P674 (第12図)

C6区で検出している。887は土師器甕の口縁部である。

P675 (第12図)

C6区で検出している。888は製塩土器の底部。889は土師器環で、口径11.8cm、底径6cm、器高4.4cmを測る。

P682 (第110図)

F21区で整地層を掘り上げた際に窪地の底面で検出している。長軸0.52m、短軸0.48mの楕円形を呈す。検出面からの深さは56cmを測る。

P683 (第110図)

F21区で整地層の土層を除去した際に窪地の底面で検出している。径0.44mの円形を呈す。検出面からの深さは40cmを測る。

P684 (第110図)

P82・683同様に、F21区で窪地の整地層を除去した際に検出した。径0.32mの円形を呈し、検出面からの深さは32cmを測る。892は須恵器の坏である。

P687 (第114図)

E22区で窪地の整地層を除去した際に検出した。長軸0.62m、短軸0.5mの不整形円形を呈す。検出面からの深さは50cmを測る。埋土には焼土を多く含む層が確認できる。

890は須恵器甕の頸部である。891は須恵器甕の胴部片であろう。外面は格子目タタキ、内面はナデにより調整される。894も須恵器の甕である。底部付近と考えられる。外面には平行タタキが、内面には同心円当て具痕の後にナデ調整が加えられる。

P688 (第114図)

E・F22区で窪地の整地層を除去した際に検出した。長軸0.5m、短軸0.4mの楕円形を呈す。検出面からの深さは60cmを測る。P687同様に、埋土には焼土が多く含まれる。893は須恵器甕である。内外面共に平行タタキ・当て具痕が認められる。

P689 (第114図)

E・F22区で窪地の整地層を除去した際に検出している。長軸0.42m、短軸0.34mの不整形を呈す。検出面からの深さは30cmを測る。埋土には焼土が多く含まれる。

P691 (第114図)

G22区で窪地の整地層を除去した際に検出した。長軸0.48m、短軸0.4mの不整形円形を呈す。検出面からの深さは56cmを測る。

895は土師器環で、口径11.2cm、底径5.6cm、器高4.3cmを測る。896は粘土塊で表面が被熱のため黒色を呈す。粘土塊としているが、凝灰岩の可能性もある。

P693 (第114図)

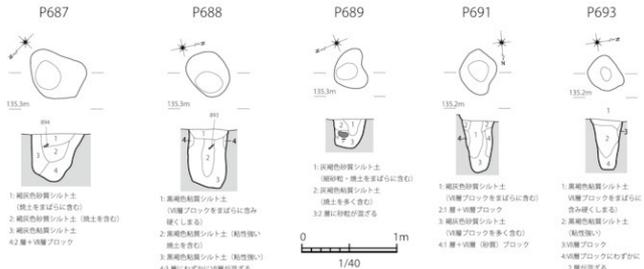
F・G22区で整地層を除去した際に窪地底面で検出している。長軸0.38m、短軸0.32mの楕円形を呈す。検出面からの深さは50cmを測る。

897は土師器の高台付椀である。短い高台から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。高台内面には接合時のオサエの痕跡が残る。口径14.9cm、底径8.4cm、器高6.3cmを測る。898は内面に布目が残る製塩土器である。

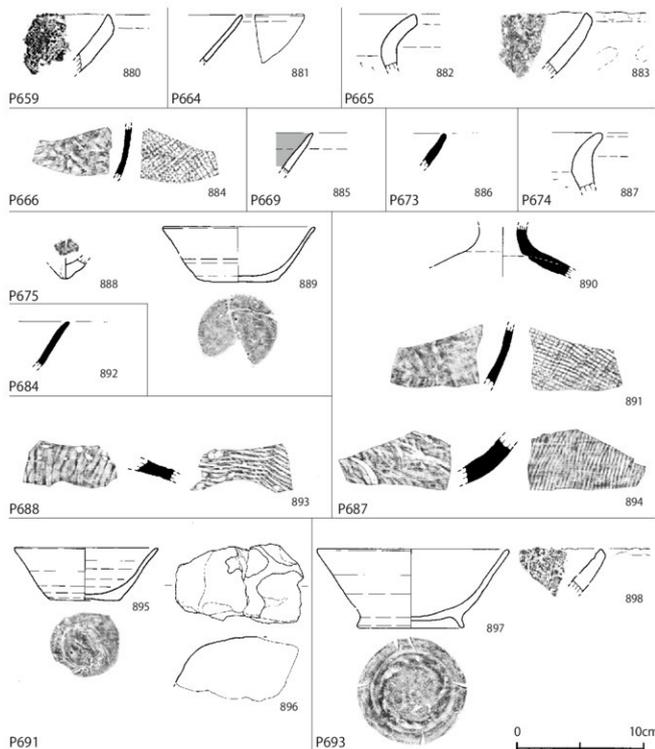
以上、遺物が出土したビットおよび埋土が単一土層ではないビットについて報告してきた。これまでみてきたように、建物跡を構成するものでなく、単独のビットとして報告した遺構の中にも、柱痕跡やのびのびの痕跡の痕跡と考えられる土層が確認されているものがある。そのため、本来は掘立柱建物跡の間で報告した以上の建物跡が存在していた可能性が高い。現場での調査はまず、平面での柱穴配列から掘立柱建物跡の存在を抽出し、それに加え検出面や構内埋土の整合性から建物跡としての妥当性を確認してきた。このような条件を満たさないビット群は、建物跡の一部である可能性は認識しながらも、それぞれ単独のビットとして報告している。

例えばここで報告してきた単独ビットのうち、F23棟周辺で検出したP228、P203、P688、P687、P214、P219、SC35の配列は、平面上では3間×2間の掘立柱建物跡の一部のようにも見える。しかし、検出面が異なることや、埋土の差異および深さ、さらには一部配列としては検出できていない柱穴が存在するため、積極的に建物跡として認識するには至っていない。また、P213、P215、SC36の配列についても埋土に焼土を大量に含むという共通点もあり、掘立柱建物跡の一部である可能性があった。しかし、これも一辺しか検出できていないため、ここではそれぞれ単独のビット・土坑として報告している。

この他にも、E14区で検出しているP335、P336、P337の配列についても一辺しか検出しておらず、掘立柱建物跡として認識するには至っていない。



第114図 ビット(P) 実測図⑦(S=1/40)



第115図 ピット(P) 出土遺物実測図⑩ (S=1/3)

7 礫集積遺構 (SS)

本遺跡では、掘り込みを伴っておらず、礫を集積したと考えられる遺構を1基、掘り込みを伴っており、その掘り込み内および上部に礫を集積・充填したものを2基検出している。これらの遺構について、礫集積遺構として以下に報告する。

SS1 (第116図)

G18区、自然窪地の底面で検出している。そのため、人為的に礫を集積したものは断定できないが、この範囲のみ礫が集中していたため、礫集積遺構とした。

礫は1.08×1.12mの範囲に集中する。明確な掘り込みは検出できていないが、礫の検出面をみると若干掘り鉢状に窪む。周辺からは899～902の遺物が出土している。899・900は土師器環である。899は底径5.8cm、900は口径10cmを測る。901は土師器の高台付椀である。口径14cmを測る。902は須恵器甕。

SS2 (第116図)

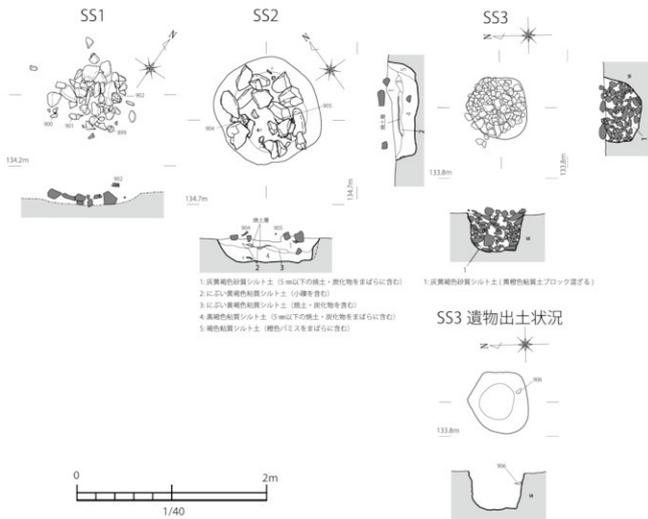
D14区で検出している。長軸1.18m、短軸1.06mの円形を呈する掘り込みの上部で、直径10～30cmの礫が

集中して検出された。検出面からの掘り込みの深さは24cmを測る。礫の多くは検出面近くの遺構埋土上部に入り込む。埋土には炭化物や焼土が多く含まれる。埋土の上部で検出された多量の礫は、本来は土坑に伴うものではなく、土坑がある程度埋没後に廃棄されたものと考えられる。本遺構の北側には、地山である自然の礫層が露出している範囲が広がる。SS2として検出された遺構の礫も、このような自然の礫層の礫と考えられる。

903は土坑部の埋土下層から出土している。土師器環である。底部は円盤高台となる。口径15.4cm、底径6.2cm、器高3.7cmを測る。904は須恵器甕、905は鉄釘である。この2点は土坑の埋土内ではなく、上部の礫に混ざって出土している。

SS3 (第116図)

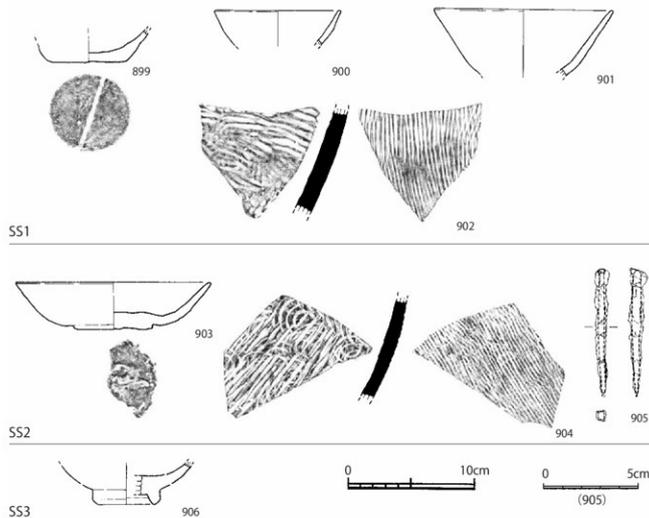
E6区で検出している。長軸0.7m、短軸0.62mの楕円形を呈す掘り込み中に、径5～10cm程度の小礫が充填されていた。掘り込みの埋土中位からは龍泉窯系青磁椀の底部片(906)が出土している。楕円型以降(明代)の資料と考えられる。14世紀以降、中世の所産といえる。



1. 灰黄褐色砂質シルト土 (50cm以下の埋土・炭化物をまばらに含む)
2. 濃い黄褐色粘質シルト土 (少量含む)
3. 濃い黄褐色粘質シルト土 (埋土・炭化物を含有)
4. 黄褐色粘質シルト土 (50cm以下の埋土・炭化物をまばらに含む)
5. 褐色粘質シルト土 (埋物1区をまばらに含む)

SS3 遺物出土状況

第116図 SS1～3 実測図・遺物出土状況 (S=1/40)



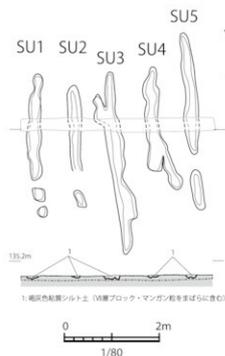
第117図 SS1～3出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

B 畝状遺構 (SU)

真来田遺跡では、大きく分けて二時期の畝状遺構が検出されている。一つは基本土層のV層を埋土とするもの。もう一つは基本土層のVI層あるいはVI層起源と考えられる土が堆積するものである。

前者はH19区の周辺にみられる自然の窪地を取り巻くように、小溝が途切れ途切れに巡っている。本遺跡の中でも最も新しい段階の遺構といえ、SD4やSD7など周辺にある遺構を切る。窪地周辺の等高線に沿うように東西方向に走行する。このV層期の畝状遺構については、残存状況が悪く、検出面からの深さも数センチであったため、走行方向を平面的に捉えたのみである。

後者はE20区周辺で検出されており、南北方向に走行する。こちらも残存状況が悪く、最も残りのよかったSU1～5を調査している。いずれも長さ4m以下、幅0.4m程の小溝である。検出面からの深さは最大で8cmを測るのみである。隣接する畝間の間隔は80cm前後となる。遺物は出土していない。



第118図 SU1～5実測図 (S=1/80)

9 不明遺構 (SX)

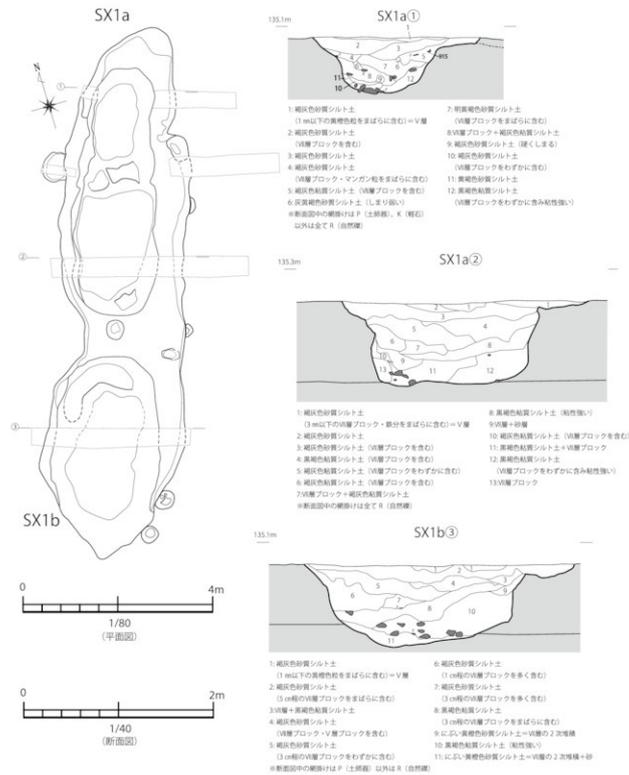
土坑やピットの中にも用途が特定できない遺構は多いが、その中でも特に平面・断面形態あるいは規模に關し、他の遺構分類のいずれにも属さないものを不明遺構として以下に報告する。

SX1 (第119図)

F・G21区で検出しており、平面プランは長軸11.2m、

短軸2.68mの縦長ひょうたん状を呈す。さらに遺構の南北に二つの楕円形の土坑が掘り込まれる。遺構の中央やや南寄りに浅いテラス部分があり、上面観が畝状を呈している。この北側の土坑をSX1a、南側の土坑をSX1bとして異なる名称で調査しているが本来はSX1という一つの遺構といえる。

北側のSX1aは長軸5.2m、短軸1.6mの長楕円形を



第119図 SX1実測図 (S=1/40・1/80)

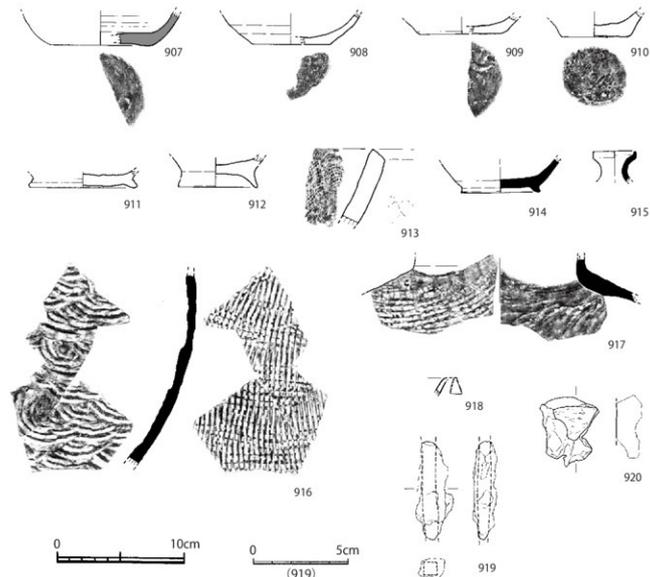
呈し、底面は北側がテラス状となり、南半が一段深くなる。検出面からの深さはテラス部が約60 cm、南側が90 cmを測る。断面形態は基本横長のU字形を呈すが、形は整っていない。埋土を観察すると、最下層には粘性が強く水分を多く含んだ黒褐色土が堆積しており、中位には地山Ⅷ層ブロックを多く含む層、上層にはⅤ層あるいはⅤ層起源の砂質土が堆積する。また、埋土下層から中層にかけては多くの礎がまともに出土している。このことから、遺構の中は恒常的に水分の多い湿地状になっており、そこに礎や遺物等が投げ込まれたものと推測される。また、水分があるため、壁が崩れやすく、それが崩落し地山のⅧ層がブロック状に堆積したものと考えられる。ある程度遺構が埋まった後は、その上に流入土が堆積したのであろう。遺構自体は捨て場のような場所だった可能性がある。

907～920がSX1aから出土した遺物である。907は須

恵器の坏。908～910は土師器の坏で、底径は5.5～6.5 cmを測る。911・912は土師器の高台付椀で、911はつぶれたような短い高台が付く。913は製埴土器。914は須恵器の高台付坏。915は須恵器壺の口縁部である。916・917は須恵器の甕。916はSX2から出土した資料と接合する。918は硬質胎土で淡緑色を呈す緑軸陶器である。京都産洛西型ないしは東海産であろう。919は断面四角形の鉄釘である。頭部は欠損する。920は粘土塊。

南側のSX1bは、長軸4.24 m、短軸2.2 mの長楕円形を呈す。検出面からの深さは88 cmを測る。遺構内埋土は、SX1aとほぼ同様の堆積状況を見せる。埋土中位から下位にかけてはSX1a同様に礎が検出されているが、SX1a程多くはない。

921～935がSX1bから出土した遺物である。921～928は土師器坏である。923～928は円盤高台坏である。底径は4.8～6.5 cmを測る。929・930は須恵器壺



第120図 SX1a出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

は焼成不良でやや軟質である。931・934は須恵器甕である。931はSX1a出土の916と同一個体と考えられる。932は鉄鏝、933は鉄釘であろう。935は輪羽口である。

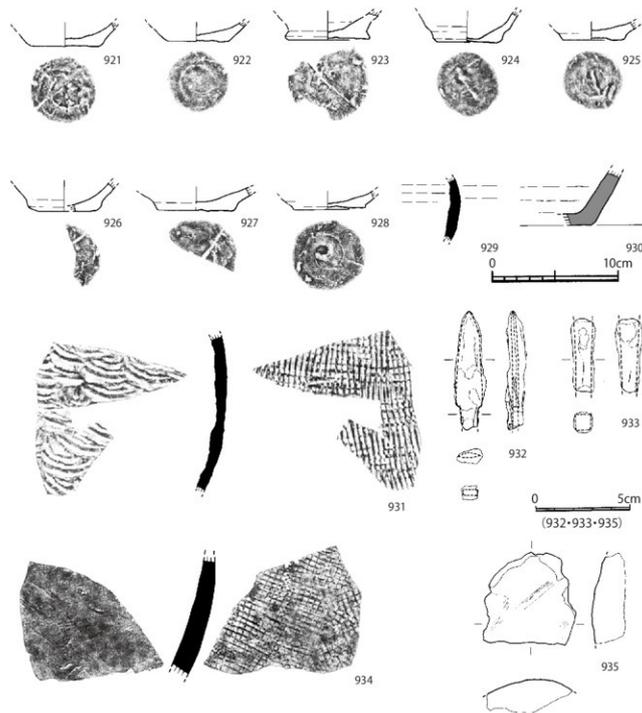
以上のような出土遺物を見てみると、須恵器の高台付坏と底径5 cm前後の土師器坏や円盤高台坏が混在して出土していることから、かなりの時間幅を有すものと捉えられる。比較的長期間にわたって遺物の廃棄・流入があったものと推測される。

また、SX1の周辺には、SB3・5・6が重複して存在するが、いずれもSX1の埋土を掘り下げた後に検出していること

から、SX1の方がこれらの掘立柱建物跡を切るものといえる。

SX2 (第122図)

SX1aの北側、E21区で検出している。長軸7.28 m、短軸3.36 mの不整形を呈す。検出面からの深さは最深で50 cmを測る。浅いところは10 cm程である。底面は平坦でなく、凹凸が激しい。西側に隣接するSD4およびSD6のP73を切る。断面を観察すると、埋土の上下にわたって砂や地山Ⅷ層がラミナ状に二次堆積する層がみられるなど、恒常的な水の存在を想起させる。人為的に掘り込



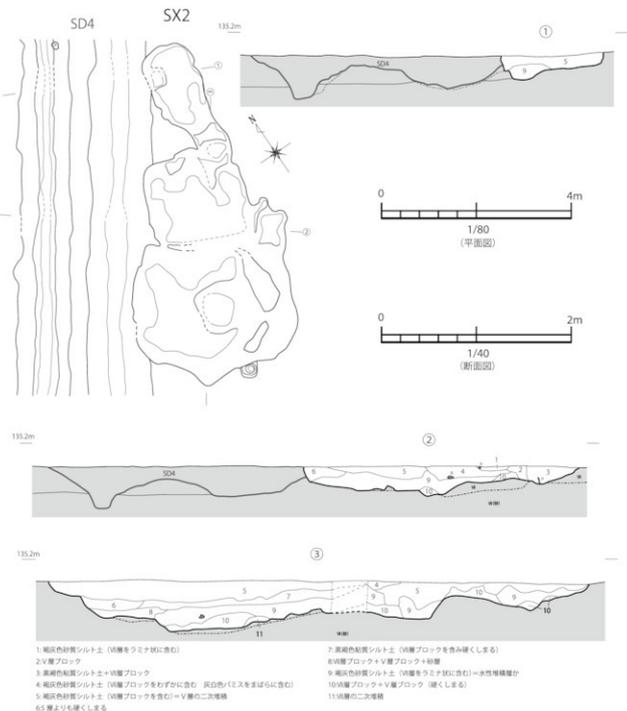
第121図 SX1b出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

まれた遺構ではなく、洪水など水の影響により形成された窪地状の地形である可能性がある。

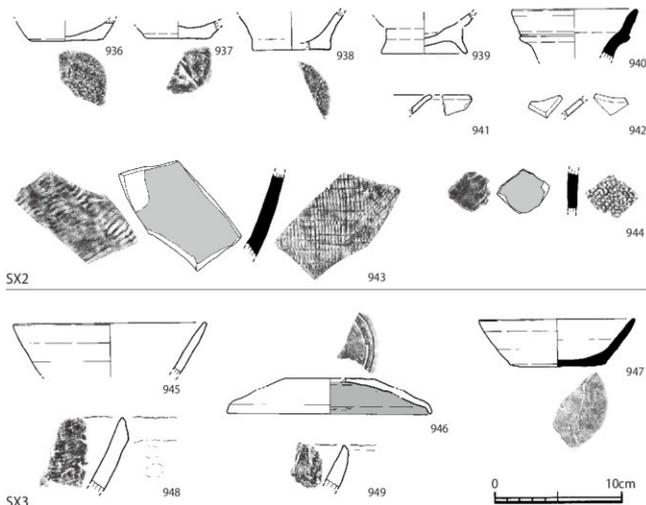
936～944がSX2より出土した遺物である。936～938は土師器坏である。937・938は円蓋高台杯、939は土師器の高台付碗である。底部が厚く、円蓋高台杯にさらに輪高台を付けたような形態を呈す。940は須恵器壺。口径9.7cmを測る。941は緑釉陶器の椀ないし皿である。軟質な胎土を有し、軸の色調は淡黄緑を呈す。防長産と考えられる。942は越州窯系青磁1類である。椀ないしは皿。943は須恵器甕を転用した転用甕である。内面の

平行当て具痕の凹凸を甕として利用したと考えられる。944も小破片であるが、内面に磨痕がみられる須恵器の転用甕である。

SX1の出土遺物でみように、SX1aとSX2出土須恵器片が互いに接合しており、SX1bからもそれと同一個体と考えられる須恵器が出土している。そのため、SX1とSX2は同時期か少なくともかなり近い時期に存在したものと推測される。どちらも埋土の観察からは、水の存在あるいはその影響を受けていた様子が窺える。機能的には捨て場のような場所であったと考えられる。



第122図 SX2 実測図 (S=1/40・1/80)



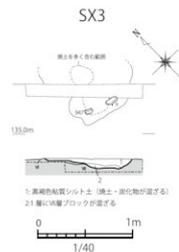
第123図 SX2・3 出土遺物実測図 (S=1/3)

SX3 (第124図)

C15区でSD6に隣接して検出している。0.9m×0.7m程の範囲で焼土・炭化物が混ざる落ち込みを検出した。土坑のようなしっかりとした掘り込みではなく、断面形態をみても自然地形の落ち込みに土が流入したような状況であった。この範囲以外にも地山であるVII層の上面が被熱により橙色化している範囲が認められた。焼土範囲(SH)として報告したものと同様の遺構と考えられる。焼土を含む層が堆積する落ち込み以外にも、周辺にはその場で被熱したような痕跡が認められたり、小さな焼土ブロックが散在していたため、それらも含めて一連の遺構と捉えたい。

SX3やSD6の周囲には現代の擾乱が東西方向に延びており、SX3もこれにより大きく削平されている。本来は炉跡等の遺構が存在していたが、擾乱により破壊された残骸がSX3として調査した遺構である可能性が高い。実際に東側に隣接するSD6の埋土上部からは、弱羽口や鉄滓など鍛冶関連の遺物が出土している。SX3に伴っていた遺物がSD6内に流れ込んだ可能性が高い。

945～949が出土した遺物である。945は土師器椀と考えられ、口径は15cmを測る。946は内面ミガキ調整が加えられる黒色土器A類の蓋。口径16cmを測る。947は須恵器の坏。口径12.2cm、底径7.5cm、器高3.7cmを測る。948・949は製塩土器である。内面には布目が残る。



第124図 SX3 実測図 (S=1/40)

10 整地层出土遺物

掘立柱建物跡の項でも述べたように、大型掘立柱建物跡であるSB7およびSB8周辺に自然の隆地に土師器の碎片を混ぜた土を敷き詰め、整地している層が確認された。SB7・8の帰属年代を考える際に、この整地层から出土している遺物の位置づけが重要な位置を占めることになる。以下、整地层出土遺物を種別ごとに報告する。

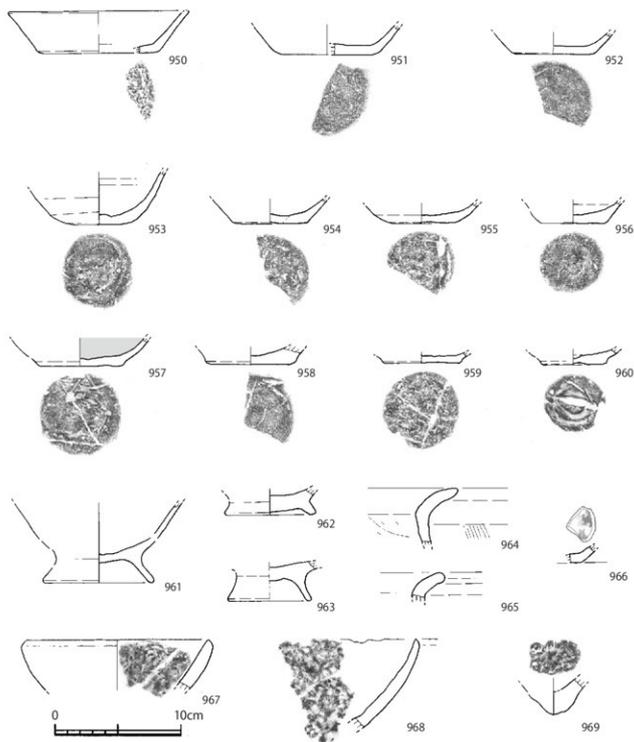
①土師器 (第125図)

950～966は土師器環である。全体的な器形が分

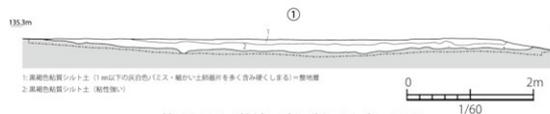
かるのは950のみでそれ以外は底部資料となる。950は口径14.0cm、底径8.8cm、器高3.3cmを測る。957～960は円盤高台環である。966も環の底部と考えられるが、内面に漆と考えられる模様の付着物が認められる。

961～963は土師器の高台付碗。961は長いハの字状に開く高台が付く。962は肉厚の底部に短い高台が付く。963も961同様に長い高台が付くが、径は小さい。

964・965は土師器甕。964は外面に縦方向のハケメが残る。965は口縁端部が玉縁状に肥厚する。



第125図 整地层出土土師器環・高台付碗・甕・製塩土器実測図 (S=1/3)



第126図 整地层土層断面図 (S=1/60)

967～969は製塩土器である。967は口径14.2cmを測る。

969は底部である。

②須恵器 (第127図)

970～977は須恵器である。970は坏の口縁部。971は高台付坏である。断面台形の短い高台が付く。972・973は甕の口縁部。974・975は甕である。976・977は甕で、器壁が厚い。

③国産施釉陶器・質易陶磁器 (第127図)

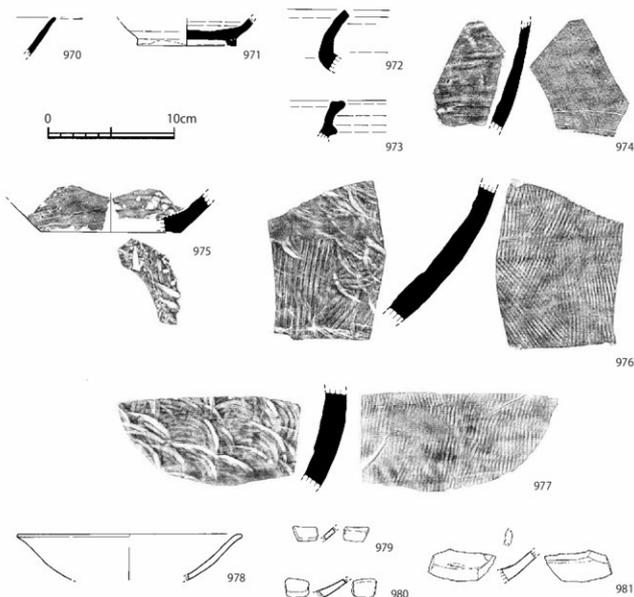
978～980は緑釉陶器である。978は硬質な胎土の椀で、口径17.6cmを測る。京都産洛西型である。979も硬陶で、釉が淡緑色を呈す。京都産洛西型か。980は軟質胎土の椀ないし皿である。防長産ないしは京都産洛北型と考えられる。

981は越州窯系青磁椀Ⅱ類である。底部付近の資料で、内面には目跡が残る。

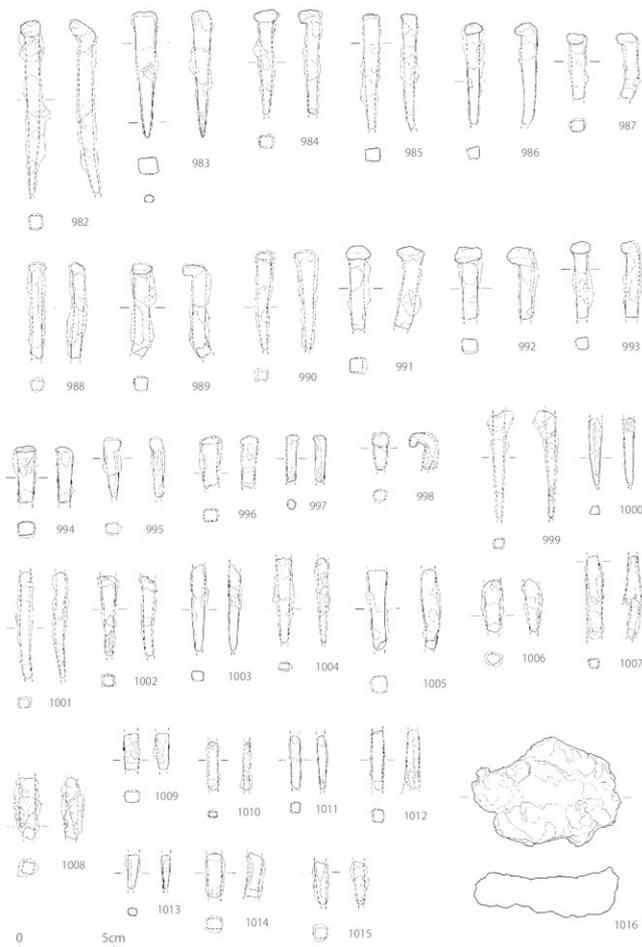
④鉄製品 (第128図)

982～1015は鉄釘である。982はほぼ完形の資料で、わずかに先端が欠ける。頭部はくの字に折れる。長さ9.2cmを測る。983も完形資料であるが、かなり太い。長さ6.8cmで、幅は1.2cmを測る。多くが一部を欠損するため、全体的な法量がわかるものは限られている。断面形態はほぼ正方形ないしは横長長方形を呈す。頭部が残るものについては、くの字に折れる資料が多い。1016は鉄滓。

上述の出土遺物を見ると、950・951のように底径が7cmを超える資料と953～956のように底径が5cm台の資料が混在している。さらに970や971といった須恵器の坏がみられること、京都産洛西型の緑釉陶器や越州窯系青磁Ⅱ類が出土していることなどから、大枠では9世紀代から10世紀前半の中に収まるといえる。9世紀末～10世紀前半の所産と考えられるSB7・8との関係を考えても整合的といえよう。



第127図 整地層出土須恵器・甕・甕・緑釉陶器・越州窯系青磁実測図 (S=1/3)



第128図 整地層出土鉄製品・鉄滓実測図 (S=1/2)

11 窪地出土土物

調査区東端、H19区周辺には自然地形の窪地が広がる。洪水等の水流の影響を受けていたようで、落ち跡が削り取られたり、底面には地山の二次堆積層や粘質の強い黒色土が堆積する状況がみられる。この窪地の埋土について実施した土壌分析の結果からも、河川に付随する水城であったことが示されている（第4章第4節参照）。

この窪地の埋土内からは大量の遺物が出土している。自然地形を利用した捨て場のような場所であったものと考えられる。人為的に掘削された遺構ではないが、それに準ずるものとして、埋土内から出土した遺物を包含層出土遺物とは区別し、以下に報告する。尚、窪地出土資料の出土層位は5層オチないしは6層オチとし、注記もこれを用いている。

①土師器（第129～141図）

1017～1151は土師器である。1017～1030は口径11.5 cm前後、底径5～6 cm前後、器高4～5 cm前後を測る。底部が切り離しの際に薄く円盤状に残されるものや（1017・1021・1025・1029）、体部下端にケズリ状の面取りがみられるもの（1028・1030）がある。底部と体部の境は明瞭なものが多い。これらをⅠ類としておく。

1031・1032は口径10 cm程、底径5.5 cm前後、器高4.5 cm前後を測る。1031は体部から口縁部にかけて丸みをおび内湾する。上述の資料よりも口径が縮小するこれらの資料をⅡ類とする。

1033は口径11.2 cm、底径6.2 cm、器高4.7 cmを測る。

1034・1035は口径10 cm程、底径5.5 cm前後、器高3.0 cm前後を測る。器高が低いのが特徴であるこれらの資料をⅢ類とした。

以上みてきた土師器について、都城盆地における古代土師器の編年案を参照しつつ、その年代的位置づけをみておきたい。Ⅰ類とした資料は、やや幅がみられるもののSC30出土資料と類似する。9世紀末～10世紀初頭の資料と考えられる。Ⅱ類は口径が縮小傾向にあることから10世紀前半に位置づけられよう。Ⅲ類はこれまで類例が少なく年代的位置づけは定まっていないが、器高の低下と体部の曲線化が顕著であることから、10世紀中頃～後半の資料と位置づけたい。さらに器高の低くなる坂元B遺跡SC2出土資料のような小型の坏が11世紀代の資料と考えられる。

1036～1072は底部資料である。全体的な器形が不明なため、正確な年代的位置づけは難しい。1036～1040のように底径6 cmを超えるものもあるが、多くが5～5.5 cm前後を測る。この数値だけを見ると上述の全体的な器形に分かる資料群と共通する。底部はヘラ切り離しの後

にナデを加えることでヘラ切りの痕跡を消しているものも多くみられる。胎土に注目すると、橙色系を呈するものは少数で、多くが浅黄橙系ないしは灰白色系を呈す。1061の内外面には赤彩の痕跡がみられる。

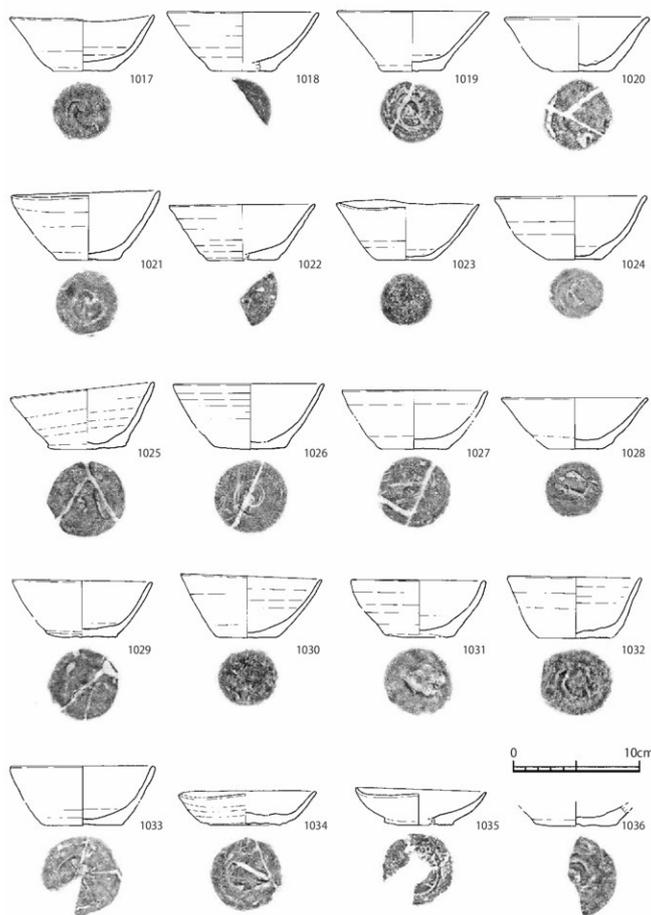
1073～1106は所謂円盤高台坏である。1073～1077は直線的に開く器形と、外側に張り出す円盤高台を有す。法量的にもまとまっており、口径12.5 cm前後、底径6.5 cm前後、器高5.8 cm前後を測る。1078は口径が11 cm前後と縮小傾向にある。1079はさらに口径が小さく、10.4 cmを測る。器高も低くなり、3 cm強を測るのみである。1080～1106は底部資料。高台部の張り出し具合や厚みには差異がある。1081・1083・1084のように、底部内部が凹む資料が多い。また、底部の切り離し技法はヘラ切りであるが、その後ナデ調整を加えるものも多く認められる。底径は大きなもので7 cmを超えるものもあるが、多くは6 cm台の資料である。

1107～1151も円盤状の高台を有すものであるが、外への張り出しが弱く、柱状を呈すものである。外側大へく張り出すものとは法量の点からみた際に異なる傾向を示すため、ここでは別類型としてみていきたい。ここでは底部の厚みには差がみられ、1107や1108のように底部の厚みがあり高台部が明瞭なものや、1140～1144のように高台部がかなり薄く、張り出しも弱い資料等がある。これは製作技法上の差異を示す可能性があるが、視覚的には高台を有すという点で大きな共通要素といえ、ここでは同類型の資料として報告する。

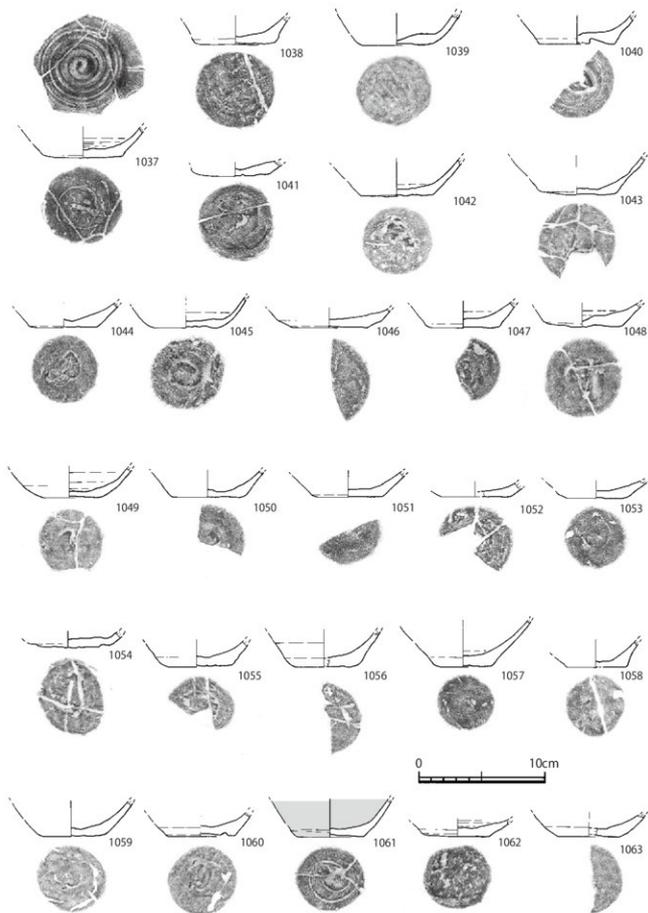
1107～1116は全体的な器形が分かる資料である。1107は口径13.5 cm、底径6.3 cm、器高5.4 cmを測る。1108・1109は口径12 cm前後、底径6 cm前後、器高5 cm前後となる。1110～1114は口径11 cm前後、底径5.5 cm前後、器高4.5 cm前後を測る。1115と1116は器高に差がみられるが、口径10 cm前後、底径5.5 cm前後である。口径・底径が縮小するに従い、体部に丸みをおびる傾向にある。

1117～1151は底部資料。最大で7 cmを超える資料があるが、多くは5.5 cm前後を測る。張り出しの強い円盤高台坏に比べると、底径が小さくなる傾向にある。

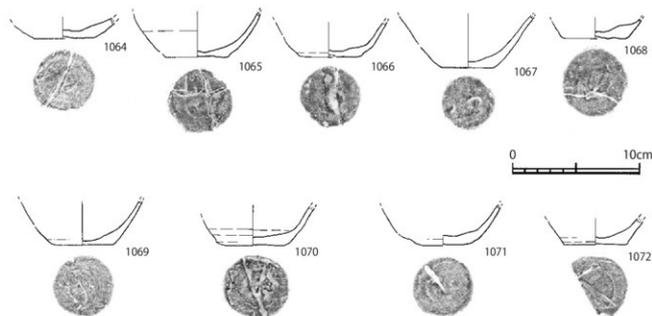
1152～1212は土師器の高台付碗。その中で1152～1160は全体的な器形・法量に分かる資料である。形態的にはほぼ直線的に立ち上がる碗部に長い高台が付くものが多い。強くナデられることで内面見込み中央が凹む資料が多く、それに従い高台天井部が突出するものもある。1152・1153・1160の高台は2 cm以下であるが、それ以外の資料はいずれも2 cmを超える長い高台が付く。1159は4 cm近い高台を有す。法量についてははばらつきが大きく、



第129図 窪地出土土師器坏実測図① (S=1/3)



第130図 窪地出土土師器坏実測図② (S=1/3)



第131図 窪地出土土師器坏実測図③ (S=1/3)

口径13 cm 台 (1152・1153)、14 cm 前後 (1154・1157)、15～16 cm 前後 (1155・1156・1158)、18 cm 弱 (1159) に分けられる。1160は低い高台を有し、体部が浅く丸みをおびる。时期的に後出する資料であろう。また、1155の椀部外面には線刻がみられる。

1161～1173は高台部が欠き、口縁部みの資料である。高台部が全く残らない資料についても、口径ないしは器形から高台付椀と判断した資料も含んでいる。口径は12 cm 台～17 cm 台と幅広い。椀部が直線的に立ち上がる資料が目立つ。

1174～1209は高台部である。1174～1177のような低い高台が付くものもあるが、多くは2 cm 前後の長く細い高台が付くものである。1202～1209は2 cm を超える細い高台が付く。1209は底の厚い円盤高台にさらに脚台を付け加えたような形態を呈する。1179は磨耗のため内面のミガキはみえないが、色調が褐色を呈しており、黒色土器A類であると思われる。

1210～1212は口縁部・高台部共に欠く資料である。1212は高台が付いていたと考えられる部分に放射状のエビオサエ痕が残る。

1213～1218は土師器の小皿である。1213～1216は底部切り離し技法がヘラ切りである。口径は9 cm 前後、底径は6～7 cm にまとまる。11世紀の新しい段階から12世紀初頭の資料と考えられる。1218は底部に糸切り痕がみられる。

1219は土師質の資料であるが、器種が審であると考えられるため、須恵器である可能性も考えられる。底径8.6 cm を測る。

1220は高台付皿。口径12.2 cm、底径7.4 cm、器高4.4 cm を測る。

1221は土師器の大型鉢である。底径は24 cm を測る。長くハの字に開く脚台が付く。内面はケズリ調整が加えられる。

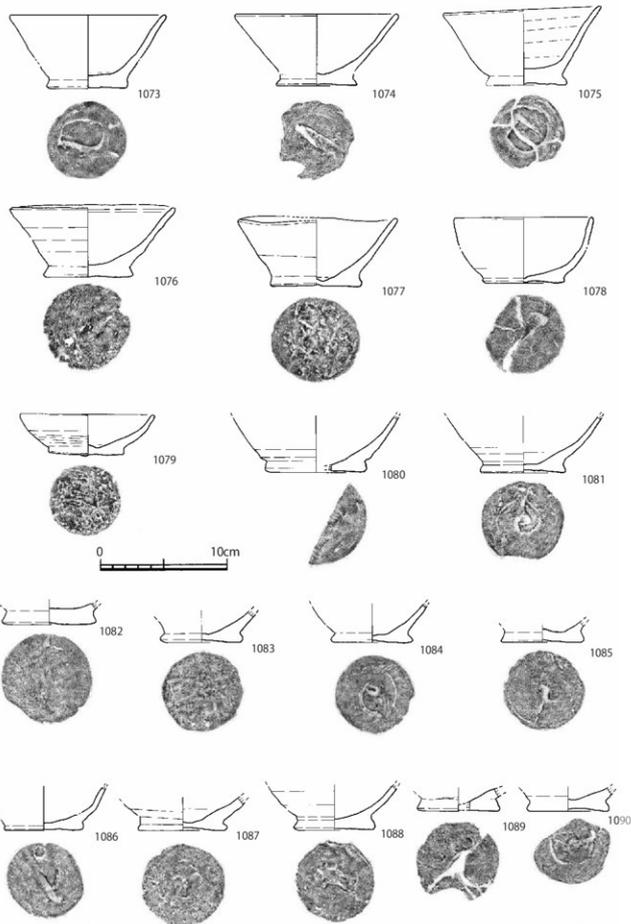
1222は底部切り離し系切りの鉢である。底部は若干高台状を呈し、そこから口縁部に向かい緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁端部が主線部に内内に向けて肥厚する。口径22.6 cm、底径9.8 cm、器高11.5 cm を測る。胎土は灰白色を呈し、硬く焼きしまる。

1223～1229は土師器の椀ないしは高台付椀で、内面もしくは内外面を黒色処理される黒色土器A・B類である。

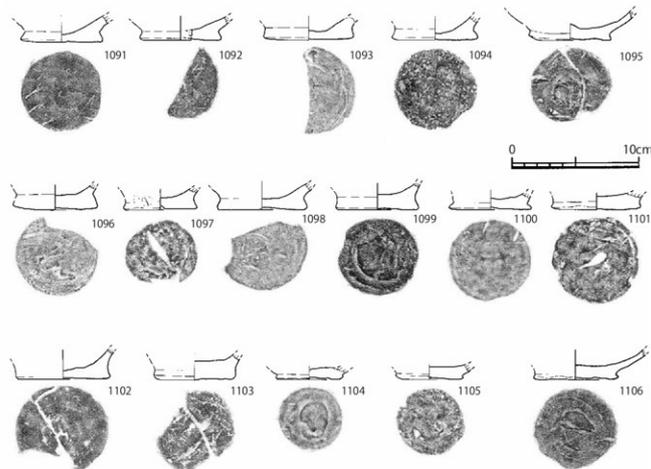
1223～1226は内面のみが黒色処理される黒色土器A類。内面にはミガキが加えられる。1224は円盤状の高台が付く。1225は短くハの字に開く高台を有す。

1227～1229は内外面を黒色処理される黒色土器B類である。内外面にミガキが加えられる。1228はわずかに突出する高台が、1229も短く丸みをおびる高台が付く。

1230～1249は土師器の甕である。1230は外面に横・斜め方向のハケメが認められる。内面は頭部の屈曲から若干下がった位置からストロークの長いミガキが加えられる。それより上位はナデにより調整される。口径は24.4 cm を測る。1231は小型の甕で体部外面に横・斜めのハケメが残る。内面は体部下半にケズリが、それより上位にはナデ調整が認められる。口径は14.3 cm。1232は口縁部内面にハケメがみられる。1234～1247は外面がナデ、内面がナデおよびケズリにより調整される資料である。口縁端部はやや短めにくハの字に外折するものが



第132図 窪地出土土師器坏実測図④ (S=1/3)



第133図 窪地出土土師器坏実測図⑤ (S=1/3)

多い。1248・1249は頸部の屈曲部より上位の破片ということもあり内面のケズリはみられない。1248はかなり薄手である。

1250は瓶の環状把手であろう。1251・1252は瓶の底部と考えられる。内面はナデにより調整される。破片資料であるため断定はできないが、やや直線的な器形になるため、移動式カマドの破片である可能性も考えられる。

1253～1255は製塩土器である。1253は口径13.2 cmを測る。内面は磨耗のため布目が残っていない。1254・1255は内面に布目が残る。被熱のためか胎土が硬化し、須恵器のような質感になる。

②須恵器 (第141～143図)

1256～1278は須恵器である。1256・1257は坏である。1257は底径が大きく、箱型を呈すものと推測される。

1258は蓋である。つまみはないものと考えられる。口径13.9 cmを測る。口縁端部を下方に小さく屈曲させ、身受けとする。

1259は坏の高台部であろうか。

1260～1273は甕である。1260は口径18.4 cmを測り、口縁部はくの外反する。1262～1264も同様の甕口縁部。1261は複合口縁を呈す。1265は口縁部外面に波

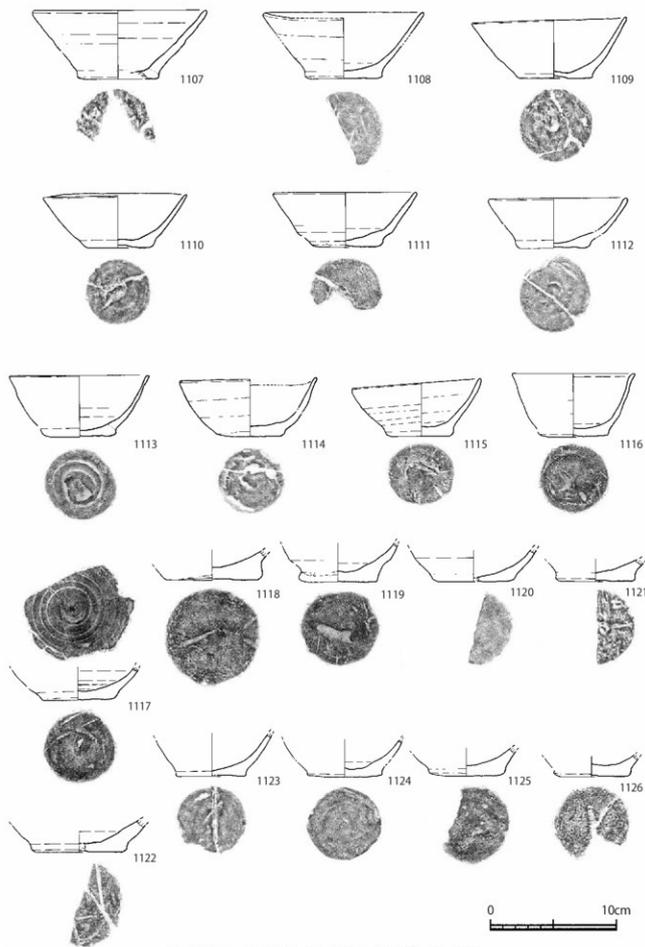
状文がみられる。1266は甕の胴部片。外面には平行タタキが格子目状に、内面には平行状で具痕がみられる。1267は肩部付近であろう。1268は底部付近で、外面は擦れが認められる。1269も甕胴部片。内外面に平行タタキがみられる。1270は外面格子目タタキ。1271は外面格子目タタキで、内面には車輪文が確認できる。1273は底部付近であろう。外面には接地による擦れがみられる。

1274・1275は須恵器甕を再利用した転用甕である。1274は甕の胴部、1275は底部付近と考慮される。いずれも内面の当て具の凹凸を礎として利用しており、磨痕が残る。両者ともに胎土の色調が灰白色を呈しており、微細な白色粒を含む精緻な胎土を有す。

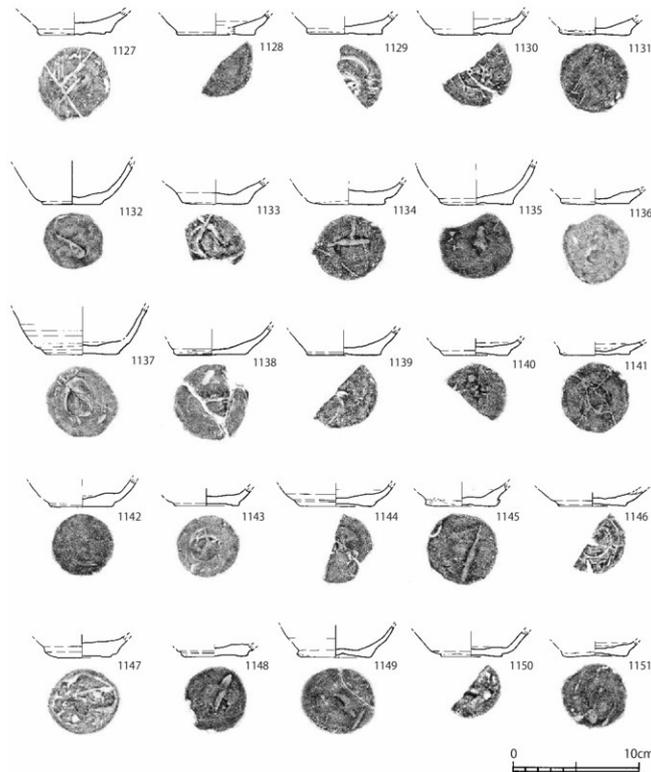
1276・1277は耳甕の把手部分である。1278も剥離しているが、同様の把手が付くものと考えられる。

③産陸陶器・貿易陶磁器 (第144図)

1279～1288は緑軸陶器である。1279は輪状高台が付く甕である。高台は貼り付けられる。粘り気のある軟質な胎土であることから防長産(長門系)であると考えられる。底径8.5 cmを測る。1280は附り出しの輪状高台を有す。軸が薄く、淡緑色を呈す。胎土は硬質である。京都産洛西型。1281は同じく硬質な胎土を有す京都産洛西



第134図 窪地出土土師器坏実測図⑥ (S=1/3)



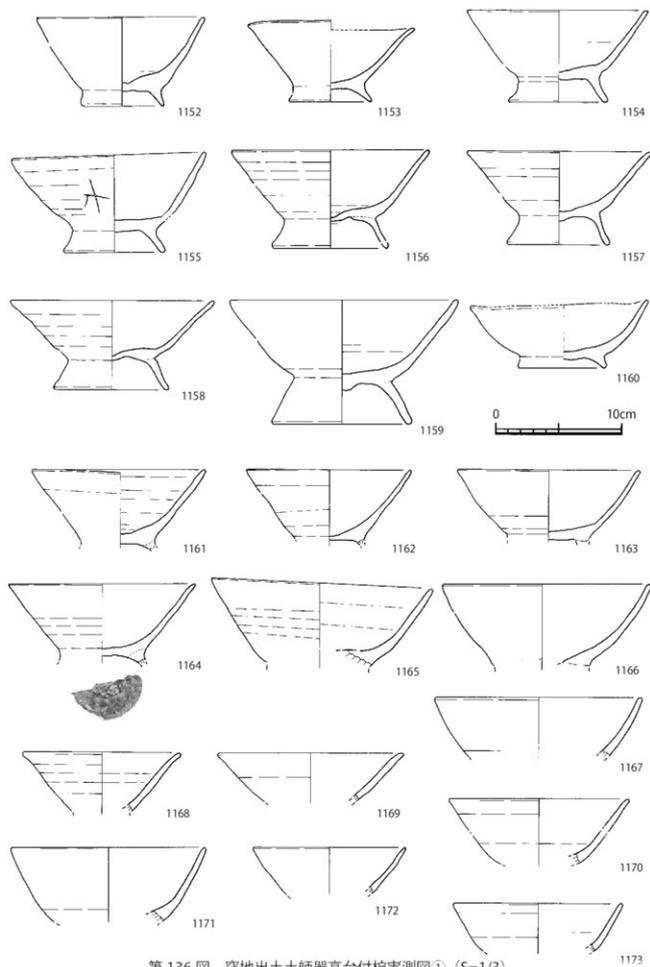
第135図 窪地出土土師器坏実測図⑦ (S=1/3)

型の皿と考えられる。1282は硬質な胎土であり、京都産洛西型ないしは東海産の皿。1283も硬質な胎土から京都産洛西型ないしは東海産と考えられる。1284はG19区とH19区から出土した4点の破片が接合している。やはり硬質な胎土を有す京都産洛西型ないしは東海産と考えられる。1285～1287も京都産洛西型あるいは東海産と思われる。1288はG18・19区、H19・20区で出土した6点の破片が接合した資料である。軸は濃緑色を呈し、胎土

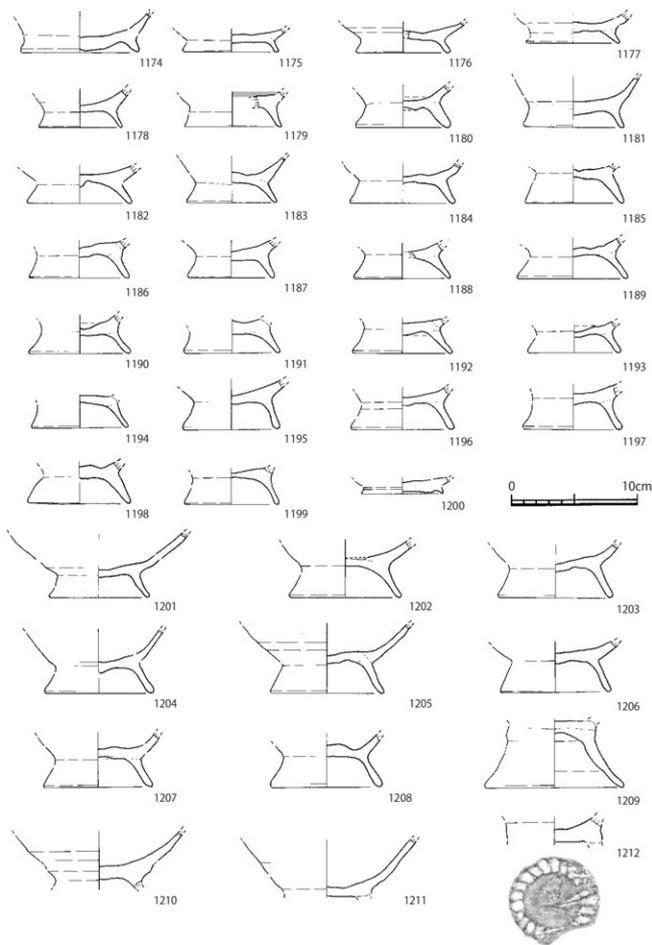
は硬質である。貼り付け高台を有すことから近江産である可能性が高い。

1289～1296は越州窯系青磁である。1289は椀I-1b類で蛇ノ目高台を有すものと考えられる。内外面共に軸の多くが剥落する。内面には目跡が残る。1290は口縁部片で、椀ないしは皿のI類である。1291～1293も同様の椀ないしは皿のI類と考えられる。

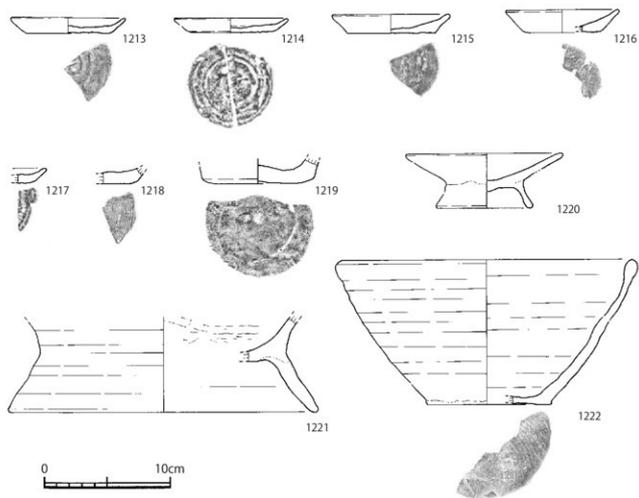
1294は椀ないしは皿II類である。1295は瓜胴の甗で



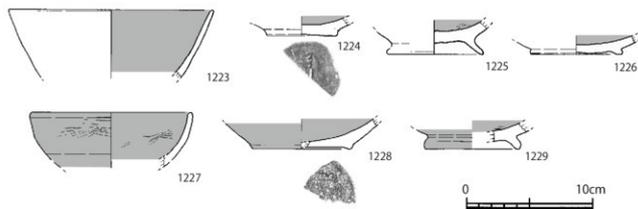
第 136 图 窪地出土土師器高台付椀実測图① (S=1/3)



第 137 图 窪地出土土師器高台付椀実測图② (S=1/3)



第138図 窪地出土土師器小皿・高台付皿・その他実測図 (S=1/3)



第139図 窪地出土黒色土器実測図 (S=1/3)

あろうか。外面にはヘラによる縦沈線が確認できる。1296は坏Ⅱ類である。内面に目跡を残す。撮影を有す可能性が高い。

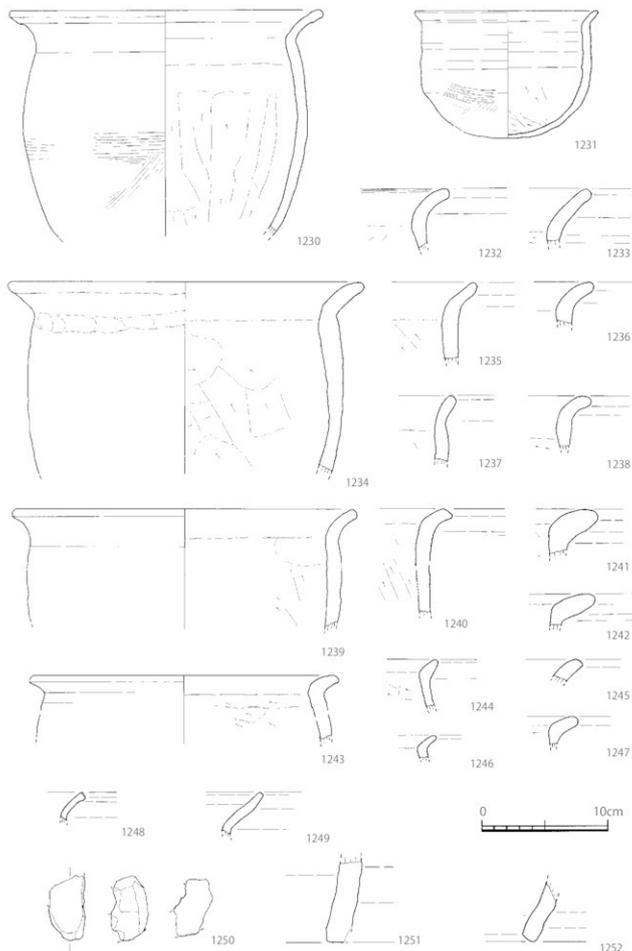
1297は灰軸陶器片である。椀ないしは皿であろう。

1298・1299は白磁椀である。1298は大宰府分類の白磁椀Ⅳ類の底部～体部にかけての資料である。軸は高台付近までかかる。胎土には微細な黒色粒が多く含まれ、

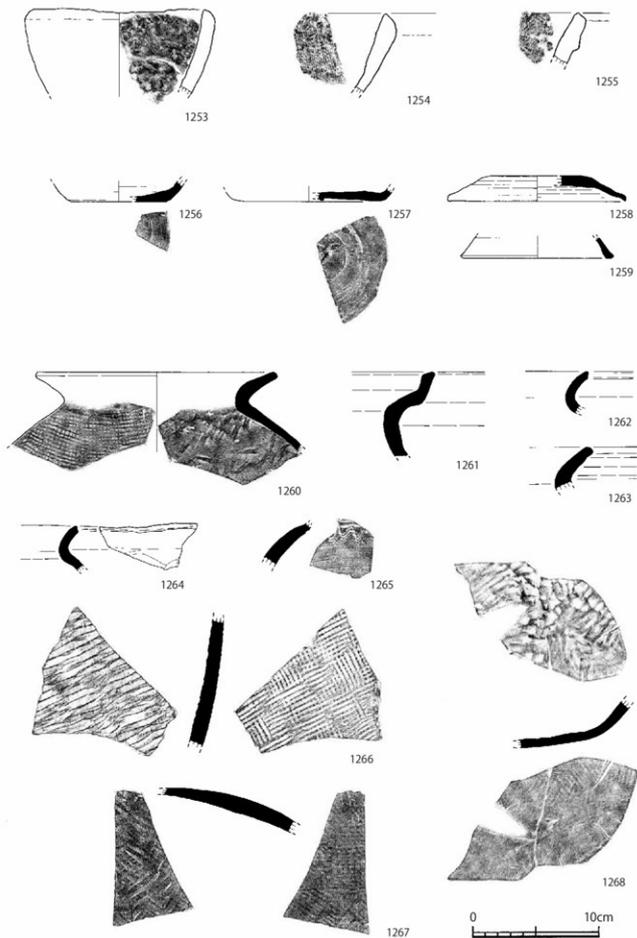
軸は白色を呈す。大宰府編年C期（11世紀後半～12世紀前半）の所産といえる。1299は白磁椀V類である。わずかに口縁端部が外反する。大宰府編年C・D期（11世紀後半～12世紀中頃）の所産である。

④鉄製品・銀冶関連遺物（第145図）

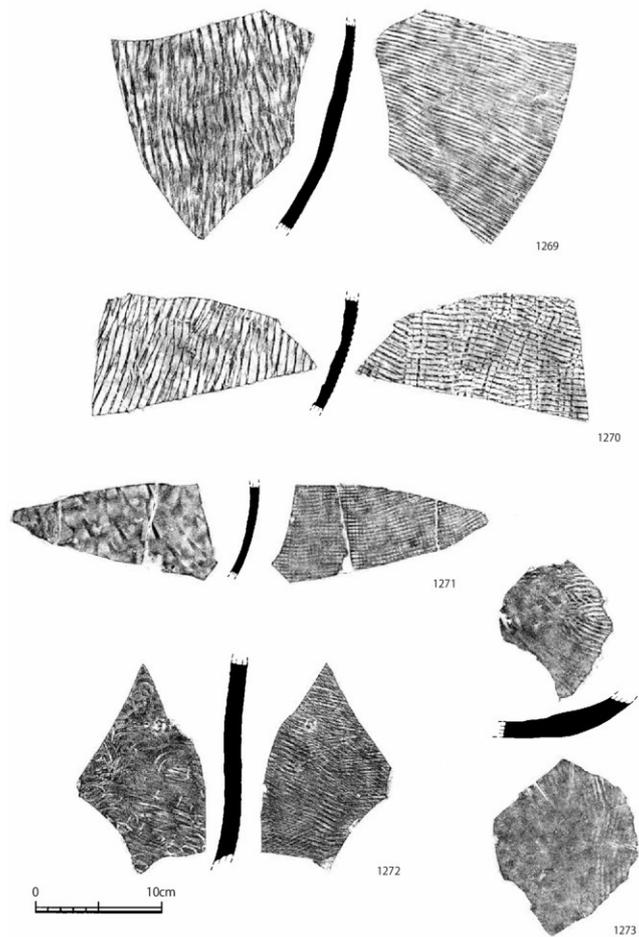
鉄製品に関してはX線写真の撮影を行っておらず、錆跡の著しい範囲は形態を推定しているところが多い。



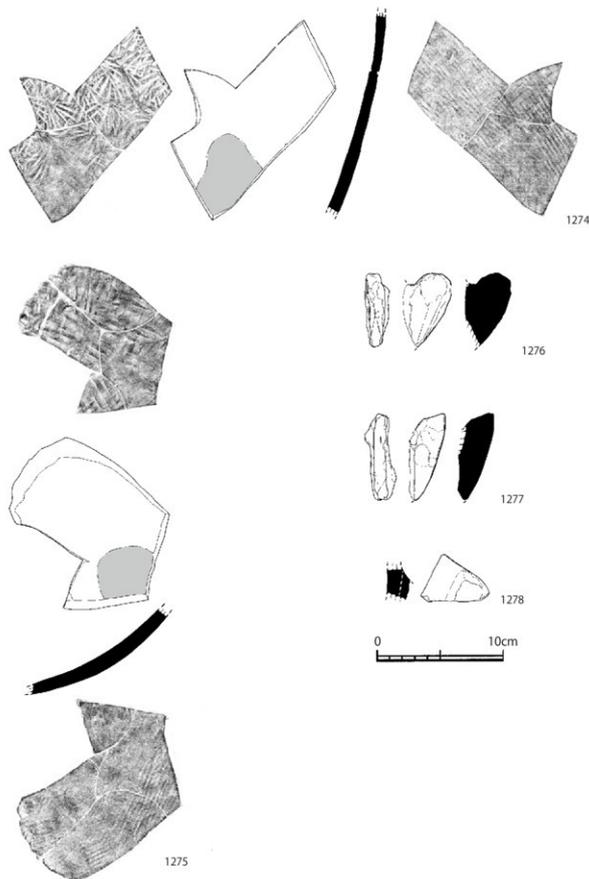
第140図 窪地出土土師器甕・甌実測図 (S=1/3)



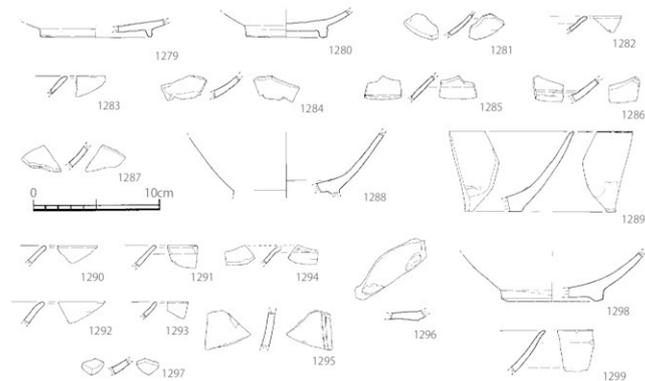
第 141 図 窪地出土製塩土器・須恵器坏・蓋・甕実測図 (S=1/3)



第 142 図 窪地出土土須恵器甕実測図 (S=1/3)



第143図 窪地出土須恵器転用硯・壺実測図 (S=1/3)



第144図 窪地出土緑釉陶器・越州窯系青磁・白磁実測図 (S=1/3)

本遺跡で出土した鉄製品は、水の影響を受けやすい土壌にあったためか、大部分の資料に錆跡れが確認され、しかも処理前は原型が分からないほどのものもあった。完形品が少なく折損する資料が多かったため、断面形状については破断面を観察し、そこから全体的な形状を推定している範囲が多い。

1300は刀子である。切先を欠く。間は刃部と背部にそれぞれあるものと推測される。刃部は直角、背部はナゼ間と考えられる。刃部の残存長は7.7cmを測る。1301も刀子と考えられるが小型である。残存部分は少ないが、やはり刃部・背部両方に間があるものと推測される。いずれもナゼ間であろうか。

1302～1305は鉄鎌と考えられる。1302はほぼ完形の資料であり、長さ13cmを測る。鎌身部は5.5cmを測る。間はナゼ間であろう。1303も同様の鎌で鎌身部分の先端部は欠損する。残存長10.9cmを測る。1304・1305は雁又鎌である。いずれも鎌身部の多くを欠損する。

1306～1315は鉄釘と考えられる資料である。1306は唯一頭部が残る。断面形態は正方形ないしは横長長方形を呈す。鉄釘としているが、1308や1311などの横長長方形の断面形態を有するものをはじめ、頭部や先端部を欠損する資料については、鉄鎌の基部など他の器種の可能性も考えられる。

1316は輪羽口である。先端部と考えられ、融溶物が付着する。大部分が欠損するため、羽口そのものの径およ

び通風孔の径は不明である。
1317～1325は鉄滓である。大きさや形態、重量はさまざまである。重量は最小のもので6g、最大のもので59gを計る。

⑤土製品・土鍾 (第146図)

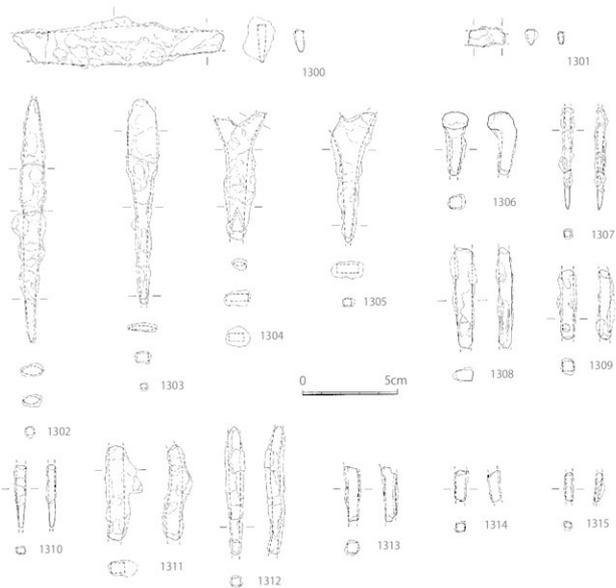
1326・1327は土師器杯を転用した鈴鐘車である。1326は土師器の高台付椀の転用品であろう。1327は円盤高台形の転用品。

1328・1329は用途不明の土製品である。1328は断面台形を呈し、そのうち三面が面取りされており、残りの一面が垂直に剥離している。剥離面以外には赤彩が認められる。土師器の脚部分の可能性があるので、ここでは用途不明の土製品として報告する。1329はおぼろげな形状の土製品で土師器の転用品と思われる。端部を再加工して円形にしている。用途は不明。

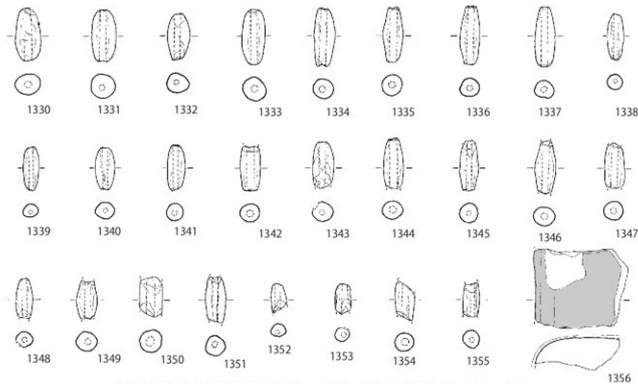
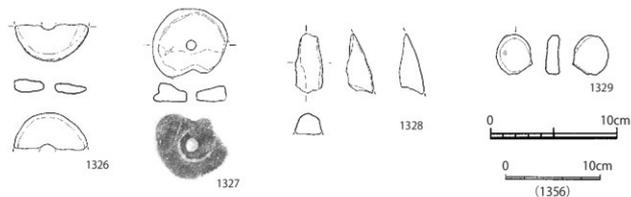
1330～1355は土鍾である。形態・大きさはさまざまである。1330や1331のように肉厚の印象を受けるものや、1335・1349のような中央部がやや太くなるもの、1337や1338のように細長いものがある。完形品である1330～1341の重量をみると、最小で4g、最大で15g、平均9gを計る。

⑥石器 (第146図)

1356は砂岩製の砥石である。多くが欠損するものと考えられるが、欠損部以外の範囲に広く磨痕が残る。重量は428gを計る。



第 145 図 窪地出土鉄製品・鞆羽口・鉄滓実測図 (S=1/2)



第 146 図 窪地出土土製品・土錘・石器実測図 (S=1/3・1/4)

12 包含層出土遺物

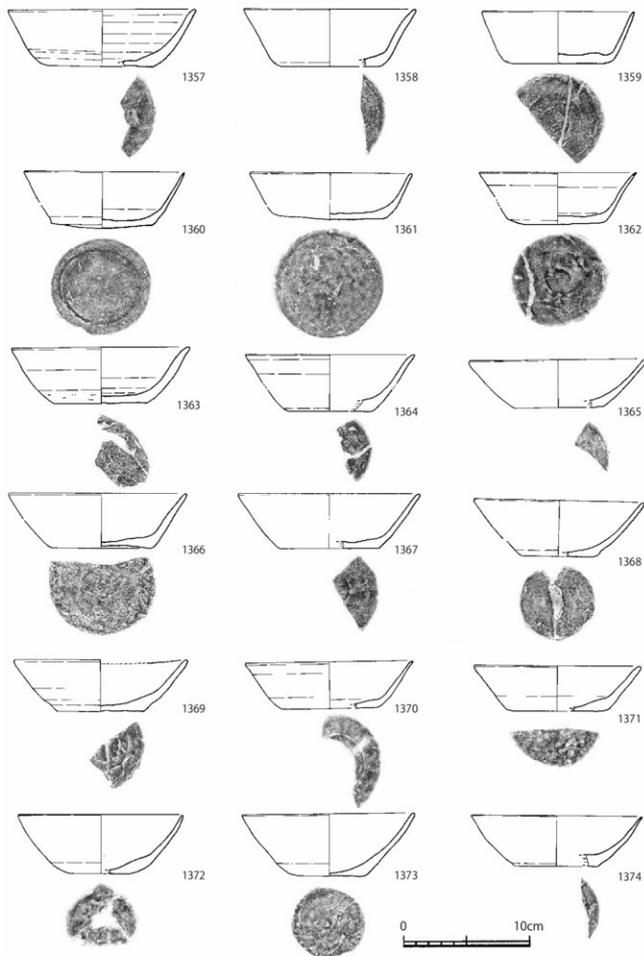
本遺跡では、基本土層 V・VI 層中より大量の遺物が出土している。最も多いものは土師器環・椀類であるが、須恵器や国産輪軸陶器・貿易陶磁器なども、南九州の同時期の遺跡の中でも群を抜く出土量を誇る。以下、包含層出土遺物を種別ごとに報告する。

①土師器 (第 147～178 図)

A 環 (第 147～160 図)

1357～1543 は底部が単純な平底となる土師器環である。本遺跡では最も多く出土している。1357～1362 は口径に近い大きな底部をもち、断面形態が箱型を呈す資料である。口径 11.8～14.5 cm で平均 12.9 cm、底径 7.5～8.8 cm で平均 8.2 cm、器高 3.5～4.6 cm で平均 4.2 cm を測る。口径/底径から求めた形状比は平均で 1.55 を示す。底部から口縁部にかけては直線的に立ち上がるもの (1357・1359・1360・1361) とやや外反するもの (1358・1362) がある。胎土は浅黄橙色系ないしは灰白色系である。出土地点は調査区中央の 13～15 区に集中する傾向にある。これらの一群を包含層出土土環 1 類とする。

1363・1365～1367 は口径 13.6～14.2 cm で平均 13.8 cm、底径 7～7.9 cm で平均 7.5 cm、器高 3.8～4.4 cm で平均 4.3 cm を測る。上述の 1 類とした資料より口径が拡大し、底径が縮小する。1363 は橙色を呈し、硬質な胎土を有す。体部下端に広く楯状の調整がみられる。胎土の発色は橙色系のもの (1363・1367) と浅黄橙色系 (1364～1366) とがある。出土地点は調査区西端の B5 区と、中央 13～15 区に分かれる。破片資料から反転復元して法量を書き出している資料が多いが、このような法量および器形を特徴とする一群を II 類としておきたい。都市市義原町所在の馬渡遺跡環 I-a 類に相当する。



第147図 包含層出土土師器環実測図① (S=1/3)

1364・1368・1369・1373・1374・1376 は口径13.1～13.5 cmで平均13.3 cm、底径5.6～6.8 cmで平均6.3 cm、器高4～5.1 cmで平均4.5 cmを測る。Ⅱ類とした資料よりも口径・底径共に縮小する。底部と体部の境は明瞭で、直線的に開く器形を呈すが大部分を占める。1376はわずかに内湾する。胎土は浅黄橙色系のもので多い、これらの資料をⅢ類とする。SC70 出土土Ⅰ類および馬渡遺跡環Ⅱ-b類に相当する。1370・1371は口径13 cm、底径8 cm前後、器高3.7 cm程を測り、底部から口縁部に向かい直線的に開く器形を呈す。同様の資料はSC43でも出土している(432)。器形以外の法量で見ればⅠ類に近く、器形と法量を総合的にみるとⅡ類とⅢ類の中間的な要素をもつといえる。このような法量・器形をもつ一群が一つの類型として抽出できる可能性がある。しかし、資料数が少ないため、ここでは位置づけを保留にしたい。

1375・1377～1420は口径11～12 cm台、底径5～6 cm前後、器高4～5 cm前後の資料である。法量的にはこの幅に収まる資料の出土量が最も多い。さらに細かく法量を基に分類してみると、口径12.5 cm前後、底径6 cm前後、器高5 cm前後の資料(1375・1377～1385・1392・1393・1396)、口径12 cm程、底径5.5 cm前後、器高5 cm前後の資料(1403～1405・1417)、口径12.5 cm前後、底径5 cm前後、器高5 cm前後のもの(1391・1394・1395・1397・1398)、口径11.5 cm前後、底径5～6 cm前後、器高5 cm前後の資料(1401・1402・1407・1408・1410～1416)、口径11.5 cm前後、底径5 cm程、器高4 cm前後の一群(1418～1420)というまとまりが抽出できる。これらの資料群をそれぞれⅣ～Ⅷ類としておく。

このうち、Ⅳ類(口径12.5 cm前後、底径6 cm前後、器高5 cm前後)とした資料は、SC70で出土した土師器環Ⅱ類および馬渡遺跡環Ⅲ-a類に相当する。Ⅴ類(口径12 cm前後、底径5.5 cm前後、器高5 cm前後)とした資料は、馬渡遺跡出土の環Ⅲ-b類に相当する。Ⅵ類(口径12.5 cm前後、底径5 cm前後、器高5 cm前後)とした資料は、本遺跡の遺構内からは類似する資料群の出土はないが、都城市養原町所在江内谷遺跡のSD02出土資料でこれに相当する一群がみられる。Ⅶ類(口径11.5 cm前後、底径5～6 cm前後、器高5 cm前後)は、SC30出土資料および窪地出土土Ⅰ類と法量的に近似する。Ⅷ類(口径11.5 cm前後、底径5 cm程、器高4 cm前後)はSB15出土資料や江内谷遺跡SD01出土資料と同様の環がみられる。

1422～1429は口径9～10 cm台、底径5～6 cm前後、器高2～4.2 cmを測る小型の環である。Ⅷ類に比べると口径と器高の縮小と体部が丸みをおびることが特徴といえる。これらの資料をさらに法量から細分してみると、口径10.5 cm前後、底径5 cm前後、器高4 cm前後(1423～1425)のものや口径10 cm前後、底径5.5 cm前後、器高3 cm前後(1422・1426～1429)とに分かれる。前者をⅨ類、後者をⅩ類とする。Ⅸ類については、窪地出土土Ⅱ類と近似する。Ⅹ類はSC13出土資料(251)、SC21出土資料(282)、窪地出土土Ⅱ類と同類と捉えられる。

ここで、上でみてきた各類型の年代的な位置づけについて検討しておきたい。

まず、包含層出土土師器環Ⅰ類であるが、口径11.8～14.5 cm、底径7.5～8.8 cm、器高3.5～4.6 cmという法量と、口径に対して底径が大きな箱型の器形から、9世紀第1四半期の所産と考える。

環Ⅱ類はⅠ類に比べてやや口径が増大し、底径が縮小すること、および口径平均13.8 cm、底径平均7.5 cm、器高平均4.3 cmという法量から、9世紀第2四半期の資料と考える。

環Ⅲ類は口径平均13.3 cm、底径平均6.3 cm、器高平均4.5 cmと口径・底径が縮小傾向にある。口径に対して底径が小さくなるのが特徴である。9世紀第3四半期の資料といえる。

環Ⅳ類は環Ⅲ類よりさらに口径が縮小する。口径12.5 cm前後、底径6 cm前後、器高5 cm前後を測る。本類と上述の環Ⅲ類はSC70において共存しており、同じく9世紀第3四半期の資料と理解できる。

環Ⅴ類は口径12 cm程、底径5.5 cm前後、器高5 cm前後を測り、環Ⅳ類よりも口径・底径が若干縮小する。9世紀第3四半期の資料と考えられる。

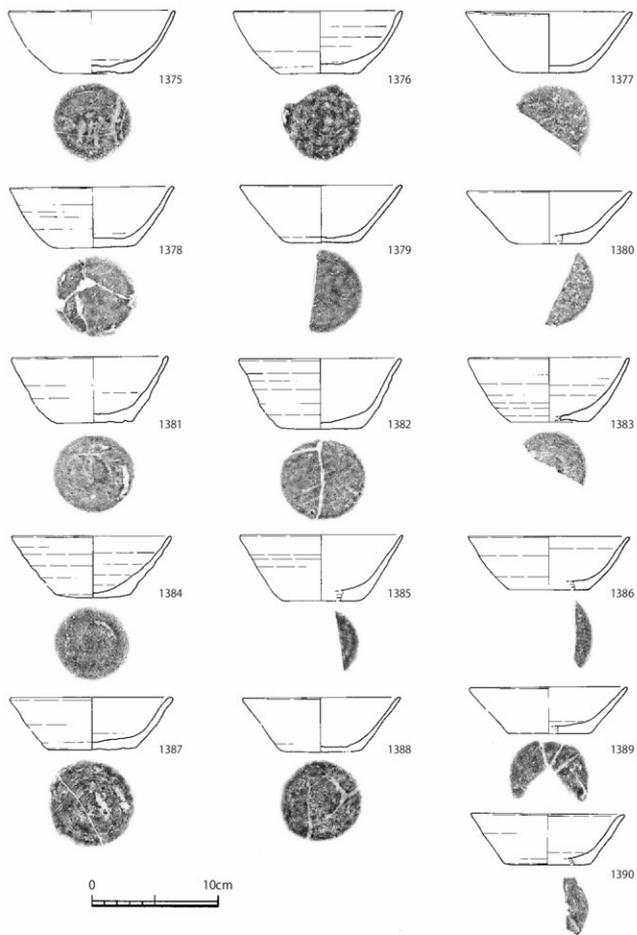
環Ⅵ類は口径12.5 cm前後、底径5 cm前後、器高5 cm前後で口径・底径は縮小するものの底径が縮小する。9世紀末～10世紀初頭の資料と考えられる。

環Ⅶ類は口径11.5 cm前後、底径5～6 cm前後、器高5 cm前後で口径の縮小が特徴といえる。器高の低下がみられず、口径は縮小するが、法量的にはⅥ類と近似する。やはり9世紀末～10世紀初頭の資料と考えられる。

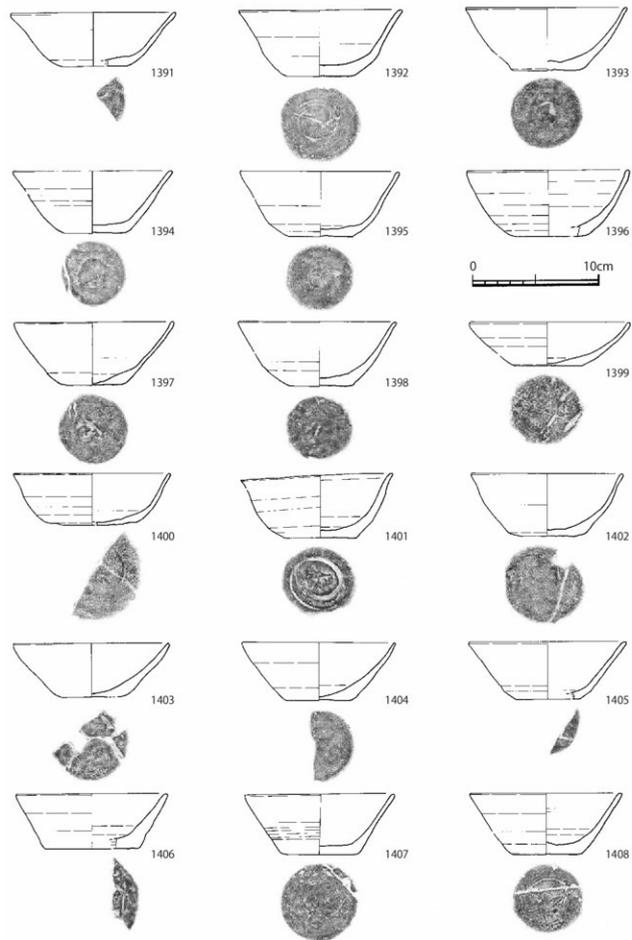
環Ⅷ類は口径11.5 cm前後、底径5 cm程、器高4 cm前後と器高の低下が特徴的である。10世紀前半の資料と考えられる。

環Ⅸ類は口径10.5 cm前後、底径5 cm前後、器高4 cm前後となり、Ⅷ類よりさらに口径が縮小する。Ⅷ類とは時期差を有す可能性もあるが、これまで調査された他遺跡での出土状況から10世紀前半の所産と考える。

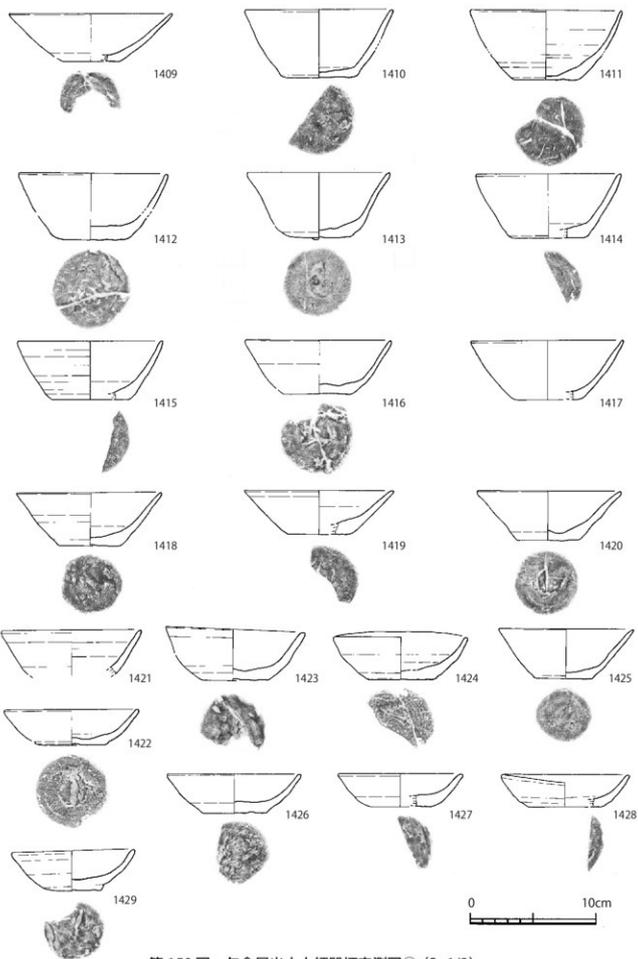
環Ⅹ類は口径10 cm前後、底径5.5 cm前後、器高3 cm前後とⅦ類よりさらに口径・器高の縮小化が進み器形の曲線化が定着する。10世紀中頃～後半の所産と位置づけたい。



第 148 图 包含层出土土器坏实测图② (S=1/3)



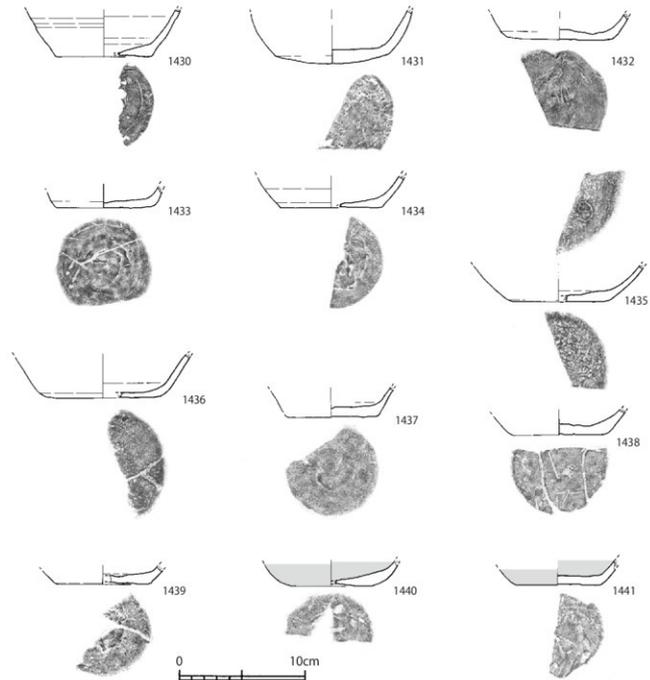
第 149 图 包含层出土土器坏实测图③ (S=1/3)



第 150 図 包含層出土土師器実測図④ (S=1/3)

1430 ~ 1543 は土師器杯の底部資料である。1430 ~ 1439 は底径が 7 ~ 9 cm 台の資料である。1431・1436 のみ底径 9 cm を測るが、その他は 7 ~ 8 cm を測る。この 2 点は遺存する器形から、箱型を呈すものと推測される。底部切り離し技法はいずれもヘラ切りで、その後ナデを加えるものが多い。

1440 ~ 1483 は底径 5.2 ~ 7 cm を測る底部片である。底部の切り離し技法はヘラ切りで、大部分はその痕跡がナデ消される。底部および体部の下半のみが遺存する資料が多いため、全体の器形は不明である。しかし、底径および体部の立ち上がり具合から、上述の資料は 9 世紀第 3 四半期 ~ 10 世紀初頭の資料であると推測される。

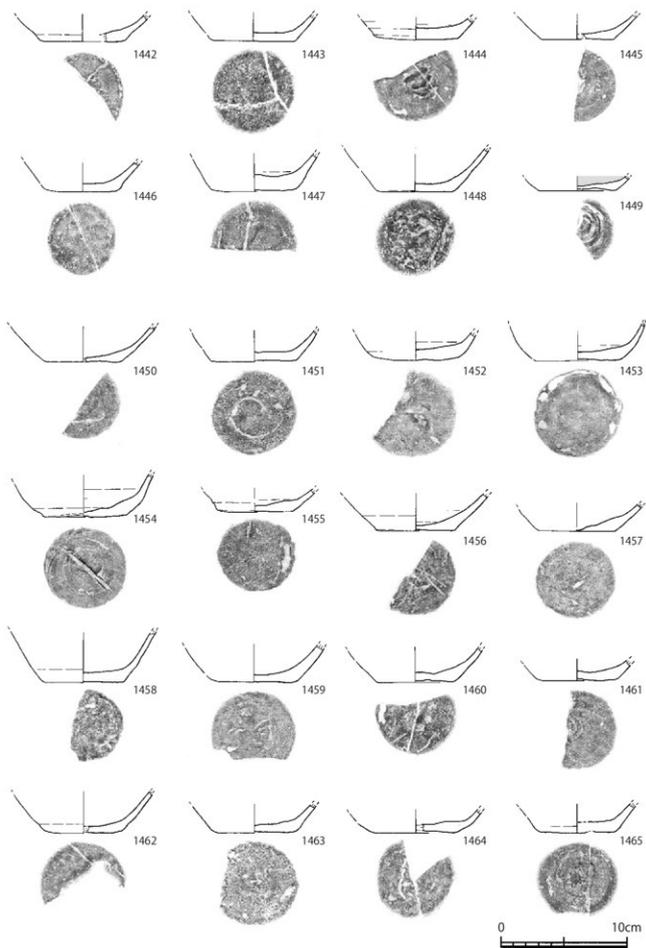


第 151 図 包含層出土土師器実測図⑤ (S=1/3)

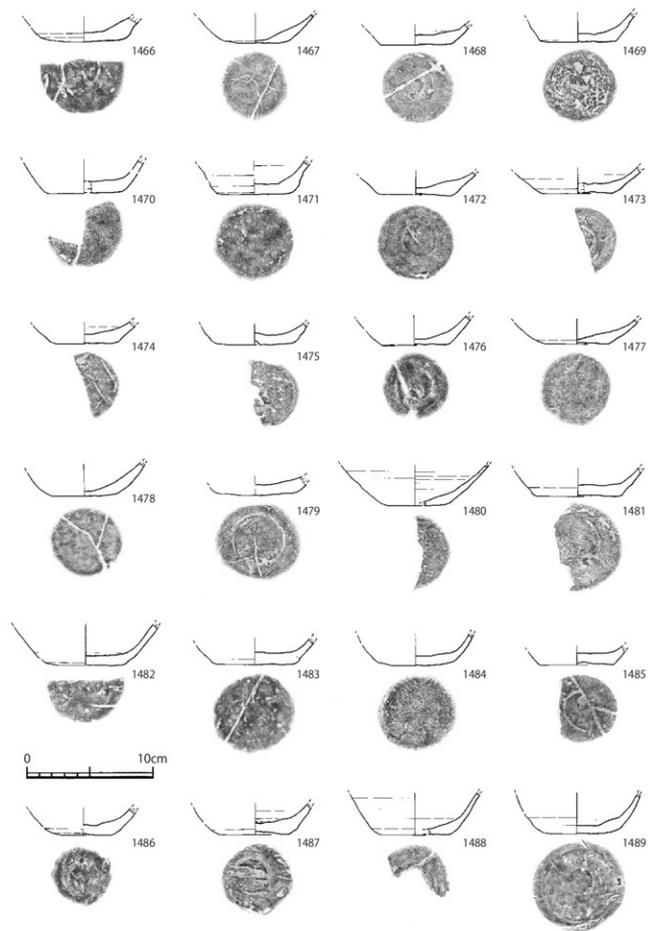
また、1440・1441 には内外面に、1449 には内面に赤彩の痕跡が認められる。

1484 ~ 1525 は 4.8 ~ 7 cm を測る底部片である。これらも底部の法量および体部遺存部の立ち上がりでしか推測できないが、7 cm を超える大型の底部がほとんど無く、体部に丸みをおびる資料がみられることから、9 世紀第 3 四半期 ~ 10 世紀前半頃の資料であると思われる。

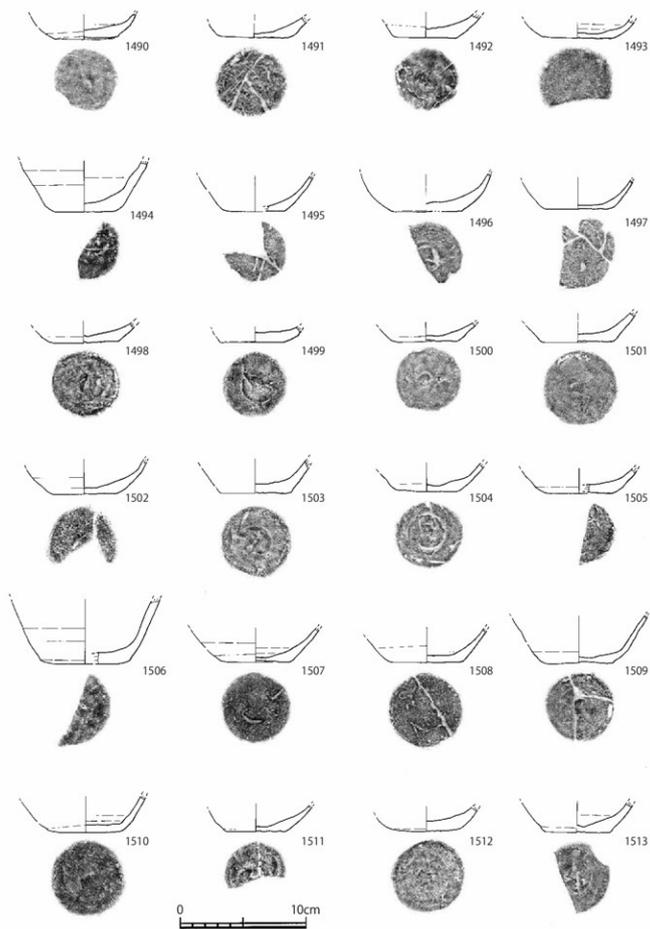
1526 ~ 1543 は 3.6 ~ 5.6 cm を測る底部片である。5 cm 前後の資料が多い。遺存する体部の立ち上がりを見ると、丸みをおびる資料が多く、大きく開く器形は少ない。これも底径と体部の立ち上がり具合から判断すると、9 世紀末 ~ 10 世紀頃の資料であると推測される。



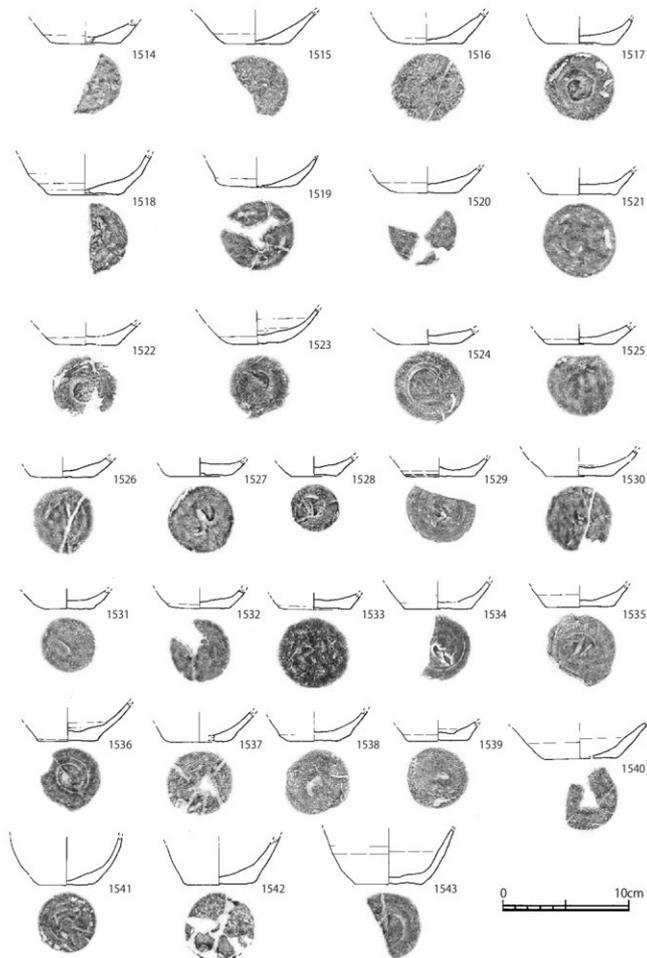
第 152 图 包含層出土土師器坏实测图⑥ (S=1/3)



第 153 图 包含層出土土師器坏实测图⑦ (S=1/3)



第 154 图 包含层出土土师器坏实测图⑧ (S=1/3)



第 155 图 包含层出土土师器坏实测图⑨ (S=1/3)

1544 ~ 1587 は土師器の円盤高台杯。1544 ~ 1546 は全体的な器形・法量が分かる資料である。1544 は口径 14.2 cm、底径 6.8 cm、器高 6.7 cm を測る。1545・1546 は 1544 よりも若干小ぶりで、口径 13 cm 強、底径 6.6 cm、器高 6 cm 前後を測る。1544・1546 は体部が若干丸みをおびる。1545 は口縁端部がわずかに外反する。1546 は円盤状の底部とは別に、体部は粘土紐を巻き上げて成形されているのが分かる。

1547 ~ 1552・1556・1560・1561・1572 は底径 7 ~ 8 cm を測る資料である。1547 ~ 1549 のような底部が厚くなるもの、1550 ~ 1552 のように薄いものなど個体によって大きな差がみられる。1556 の内面には線刻のようなものが認められる。

1553 ~ 1555・1557 ~ 1559・1562 ~ 1571・1573 ~ 1587 は 5 ~ 6.8 cm を測る。底部はヘラ切りの後でサを加えられるものが大部分を占める。1558 の底部には板状圧痕がみられる。胎土については全体的な傾向として浅黄褐色系や灰白色系のものが多く、褐色系は少ない。

1588 ~ 1648 も円盤高台を有する資料であるが、高台の外への張り出しが弱く、直線的な柱状を呈するものである。外に張り出す円盤高台とは、同様の法量・器形を有する資料でも、底径に大きな差異が認められることが予想されるため別類型として報告する。

1588 ~ 1593 はほぼ完形に復元できた資料である。法量は口径 11 ~ 12.2 cm で平均 11.5 cm、底径 5.1 ~ 6 cm で平均 5.6 cm、器高 4.4 ~ 5.6 cm で平均 5 cm を測り、法量的にはまとまりをみせる。1588 や 1589 など体部が丸みをおびる資料と、1590・1593 のような直線的に立ち上がる資料とが認められる。

1594 ~ 1648 は底部資料であるが、底部径および厚みには大きな差異がみられる。底径は 4.8 ~ 7.8 cm を測り、平均は 6 cm 程といえる。底部の厚みをみると、1596 や 1600・1603 のような体部よりも明らかに厚くなる資料や、1611 や 1615 のように体部とほぼ変わらない厚さのものがある。さらに 1623 や 1630 のように底部の切り離しの際に円盤高台状に薄く切り残されたと考えられる資料も認められる。このような資料は、切り離しの際に偶然に高台状を呈してしまった可能性もある。しかし、出土量的に一定数が確認されていることから、円盤高台を意識して作成していた可能性が高いと考える。1648 はかなり肉厚な高台が付く。

1649 は底部が若干薄い円盤高台状を呈し、口縁端部がわずかに外反する。口径 12.8 cm、底径 5 cm、器高 4.6 cm を測る。底部が円盤高台状を呈するため、ここで報告しているが、他の円盤高台杯とは顔つきが異なる。器壁も

薄く、全体的な器形は越州窯系青磁碗に似る。

B 高台付椀 (第 161 ~ 163 図)

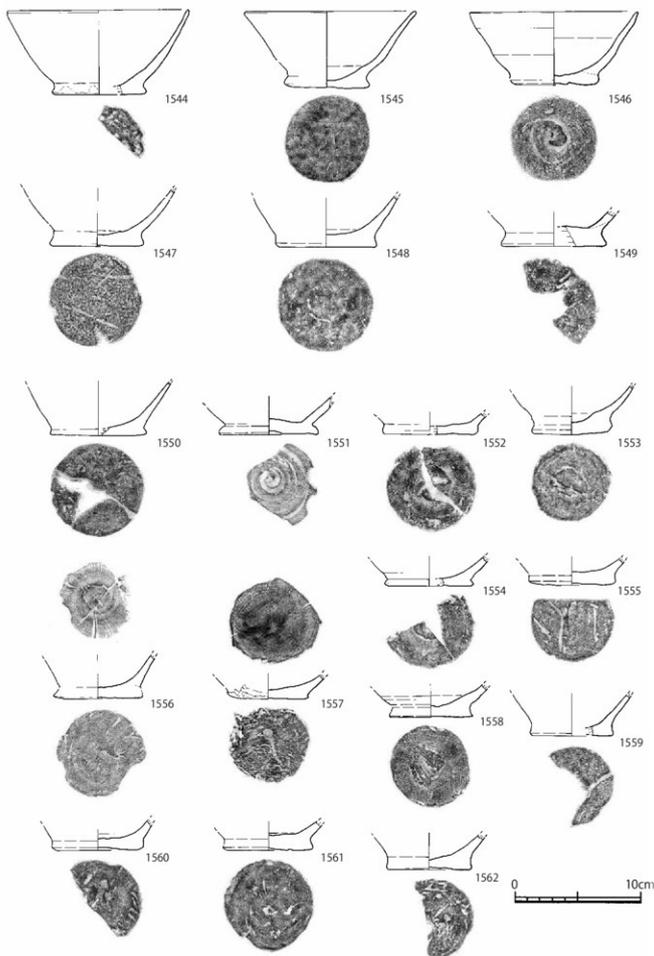
1650 ~ 1761 は土師器の高台付椀である。1650 は箱型の部部に短い高台が付く。須恵器的な器形を呈す。口径 12.6 cm、底径 7.4 cm、器高 5.2 cm を測る。椀 I 類とする。

1651 ~ 1654・1656・1657・1659・1660 はほぼ直線的な口縁端部を有する。須恵器的な器形を呈す。口径 13 cm 前後のもの (1651・1652・1660)、14 ~ 15 cm を測るもの (1653・1654・1657)、15 cm 以上のもの (1656) がある。1653 の内面には赤彩が施される。これらを椀 II 類とする。1661・1662・1674 も高台部が欠けがこの類型に含まれる可能性が高い。

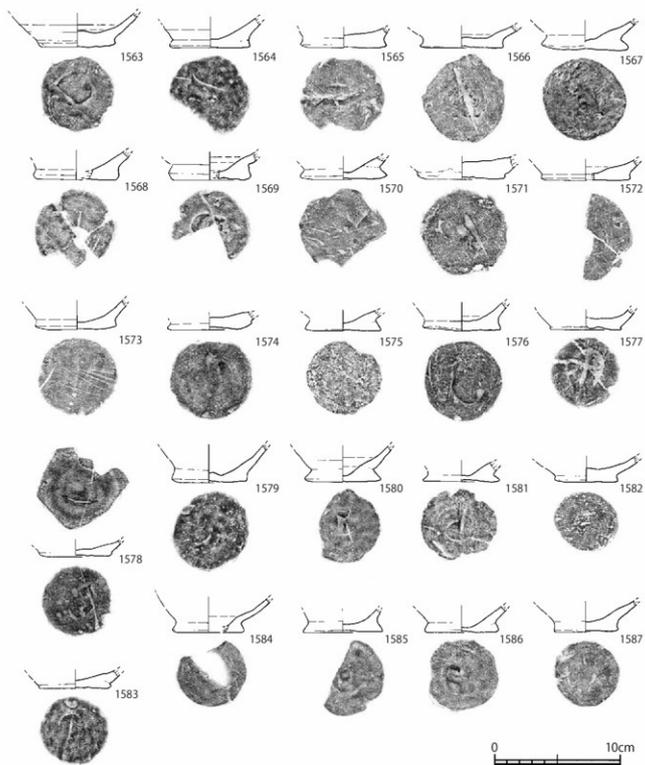
1666 ~ 1673・1675 ~ 1677 は高台部が欠け資料である。全体的な器形は不明といわざるをえないが、椀部が直線的に立ち上がるもの (1664 ~ 1672・1675)、直線的に立ち上がり、口縁端部が外反するもの (1676)、体部が丸みをおび内湾するもの (1673・1677) などが認められる。1669 はやや軟質であるが須恵器である可能性もある。1670 の内面にはわずかに赤彩の痕跡が残る。

1678 ~ 1761 は高台部である。1678 はやや軟質であるが須恵器の可能性もある。多くが短い高台が付く資料である。1680 は磨耗のためミガキは確認できないが、内面が褐灰色を呈しており、本来は黒色土器 A 類であったものと考えられる。1692 は柱状の円盤高台に短い突起のような高台が付く。1693 は高台が蛇ノ目高台となる資料である。管見によれば類例はなく、高台部がはずれた痕跡が偶然ノ目状にみえる可能性も考えられる。しかし、観察する限りでは丁寧に面取りしているようにみえるため、蛇ノ目高台の土師器椀として報告する。1701 は高台内面に放射状の圧痕が残る。1721 にも同様の圧痕が確認できる。1717 の内面にはミガキが残る。1718 は磨耗のため内面のミガキが不明瞭であるが黒色土器 A 類と考えられる。1719 は椀部と高台部に異なる粘土が使われているためか、胎土の発色が異なる。1722 の内面見込みには布痕がみられる。型作り成形の痕跡と薄く考えられる。型に押し付けられたためか底部がかなり薄くなる。1756 の内面にも同様の布痕がみられる。1729・1740・1742・1755・1757 は細く長い高台が付く。1759 ~ 1761 は高台部が接合部からきれいに剥離したものである。1670 は内面が黒色化しており、本来は黒色土器 A 類であったものと思われる。

ここで、上でみた高台付椀の補属年代について考えてみたい。I 類とした箱型の部部を有する資料については、須恵器の高台付椀の器形を模倣したものと考えられる。やや時間幅をもたせり 9 世紀前半の資料としておく。



第 156 図 包含層出土土師器杯実測図® (S=1/3)

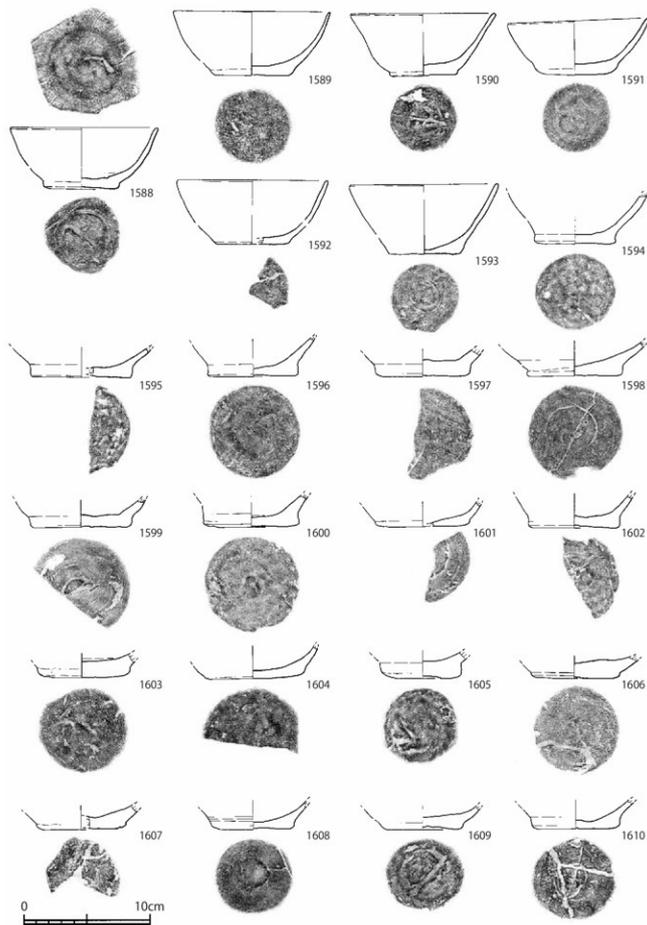


第 157 図 包含層出土土師器坏実測図⑩ (S=1/3)

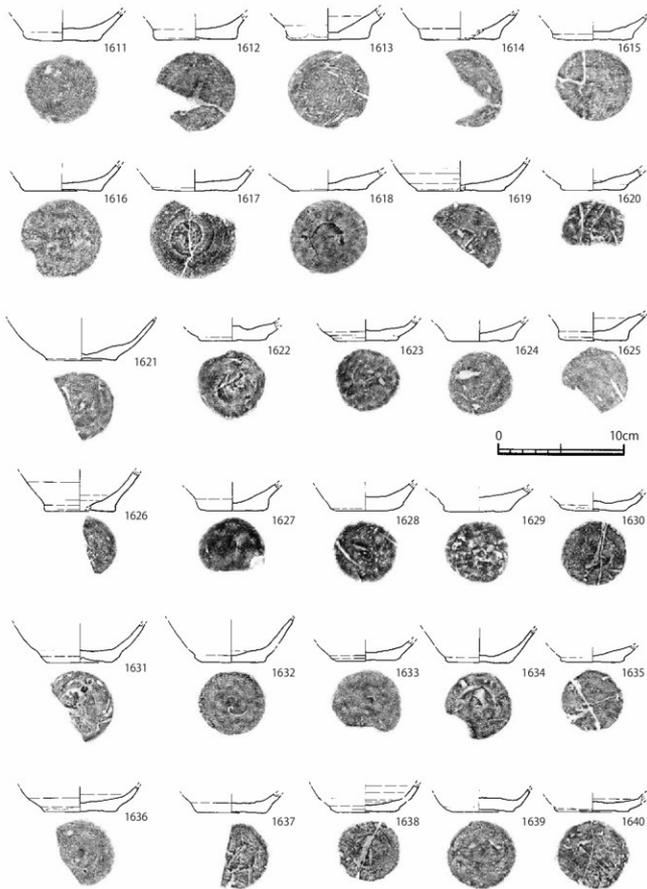
Ⅱ類については、同様の資料が SC70 や SC72 において 9 世紀第 3 四半期の所産と考えられる坏と共存している。よって、高台付碗Ⅱ類についても同様の時期が付与できるものとする。

1740 や 1742、1757・1758 などの細く長い高台が付くタイプの碗については、包含層出土資料の中では全体的な器形が分かる資料が皆無であったため、類型設定

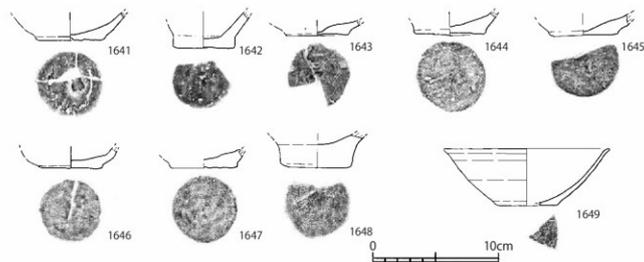
に至っていない。しかし、この種の細く長い高台をもち、直線的に開きながら立ち上がる器形の碗については、SC4 において 9 世紀末～10 世紀初頭の土師器坏と共存している。さらに、窪地出土の高台付碗の大部分も、これと同様の高台が付き直線的に開きながら立ち上がるタイプであるといえる。しかも、窪地出土の坏の年代観が 9 世紀末～10 世紀代であることも、このような器形・



第 158 図 包含層出土土師器坏実測図⑩ (S=1/3)



第159図 包含層出土土師器実測図⑬ (S=1/3)



第160図 包含層出土土師器実測図⑭ (S=1/3)

高台を有す碗がこの時期の所産であることの傍証となろう。

C 漆付着碗・碗 (第163図)

1762～1771は土師器の碗ないしは碗の破片である。内外面に漆と思われる模様あるいは固形の黒色を呈する付着物が認められる資料である。1762～1764は口縁部、1765～1768は体部、1769～1771は底部片である。1769と1770については赤外分光分析を実施しており、その結果付着物は漆であると同定されている(第4章第5節参照)。

D 坏・小皿 (第164図)

1772・1773は土師器坏である。1772は底部切り離し技法が糸切りである。口径14.8cm、底径8.8cm、器高3.4cmを測る。1773は底部がヘラ切りであるが、口径14.8cm、底径7.8cm、器高3.4cmとほぼ共通する。両者共に12世紀前半～中頃の資料と考えられる。1774～1776も同様の土師器坏と考えられ、底部切り離しは糸切りである。量法は不明。

1777～1781は土師器の小皿。1777は口径11.6cm、底径8cm、器高1.7cmを測る。底部切り離しは磨耗のため判然としながへら切りと思われる。1778～1780は底部へら切りの小皿である。1779と1780は量法が共通しており、口径9.5cm前後、底径6.8cm、器高1.8cmを測る。11世紀代の資料であろうか。1781は底部糸切りである。

E 蓋 (第164図)

1782～1788は土師器蓋である。1782は自然流路からの出土で、磨耗が著しい。つまみが付き、口径は12.3cmを測る。1783～1785はつまみをもたない。口縁端部が短く直立させ、かえりとする。1786も同様の形態を呈

すがやや扁平である。1787は円盤状を呈し、かえりもない。蓋であろうか。口径が復元できた資料については、14cm前後で共通する。

F その他 (第164図)

1789は鉢の口縁部であろうか。玉縁状に肥厚する。断面形態は東播系須恵器の口縁部に似る。

1790は小型の碗。器壁はかなり薄い。内外面共に黒色を呈すため、黒色土器である可能性も考えられるが、ミガキがみられないため土師器の小型碗とした。

1791は大型の脚台付皿と考えられる。口縁部と脚台部は欠くが、かなり大型になるものと思われる。脚台の上には扁平な皿が付くものと推測される。1792～1794はいずれも脚台付鉢と考えられる。内面はいずれもナデにより調整される。

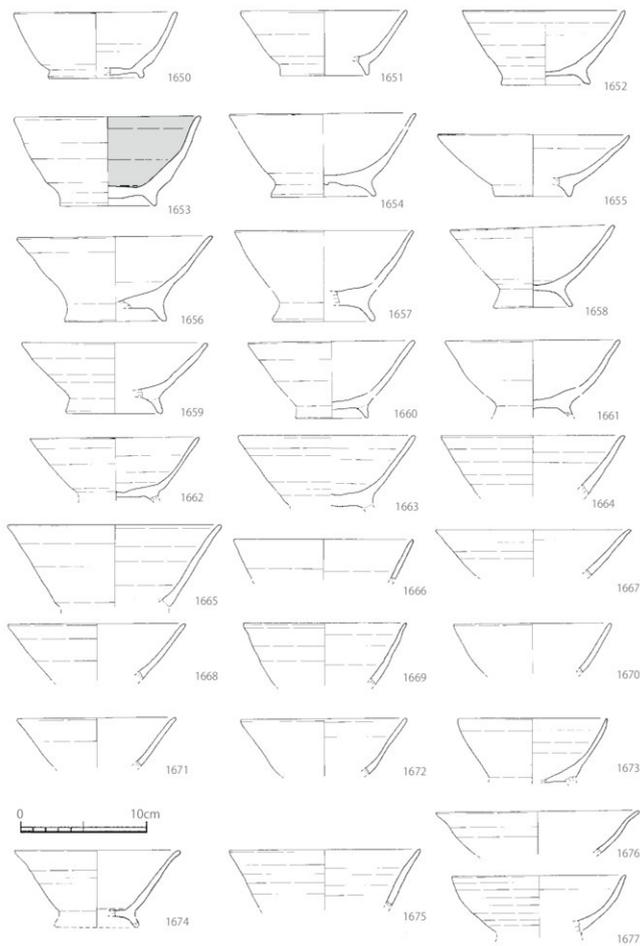
1795は高台付皿である。高台部は欠損する。口径12.4cmを測る。

1796は托上碗である。高台に加え、垂直方向に延びる鐙が巡るものと考えられるがこの部分は欠損する。碗部は大きく湾曲しながら立ち上がる。黒色処理はされておらず、内外面共に回転ナデにより調整される。南九州での出土は初例と思われる。

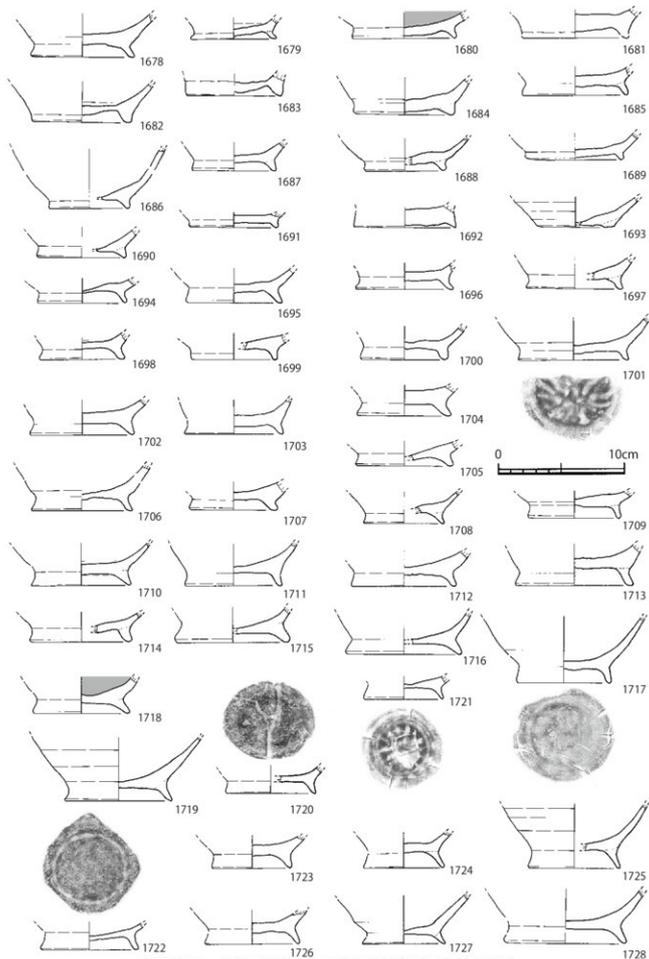
G 黒色土器 (第165・167図)

1797～1851は所謂黒色土器A類と呼ばれる資料で、内面を黒色処理するものである。1797～1838は高台付碗である。1797は直線的に開く器形にハの字状の高台が付く。内面はやや炭素の吸着が悪く、完全に黒色を呈していない範囲が広く残る。ミガキの単位も不明である。この形態の資料を1類とする。1798～1799も高台部を欠くが、この類型に属するものと推測される。

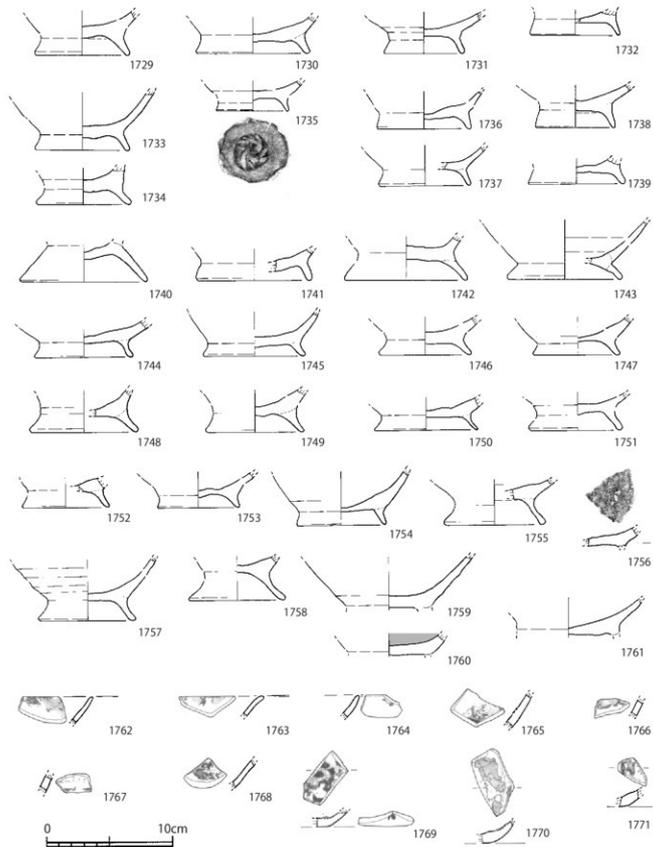
1801は体部がやや丸みをおびて立ち上がり、半球形の器形を呈す。ハの字の高台が付く。口径12.2cm、底径



第 161 图 包含層出土土師器高台付椀実測图① (S=1/3)



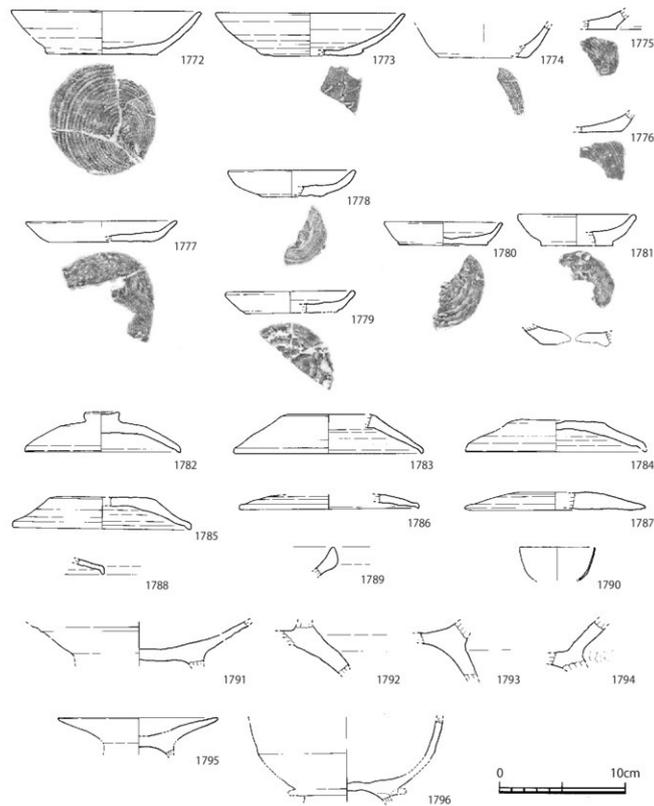
第 162 图 包含層出土土師器高台付椀実測图② (S=1/3)



第163図 包含層出土土師器高台付椀・漆付着土器実測図 (S=1/3)

6.2 cm、口径5.6 cmを測る。この形態の椀をⅡ類とする。1804のような口縁端部がわずかに外反する資料も、この類に属するものと考えられる。

1802は体部の曲線化がさらに進み半球形を呈す。口縁端部はわずかに外反し、底部には低い高台が付く。この種の椀をⅢ類とする。両黒の黒色土器Ⅱ類である1852



第164図 包含層出土その他の土師器実測図 (S=1/3)

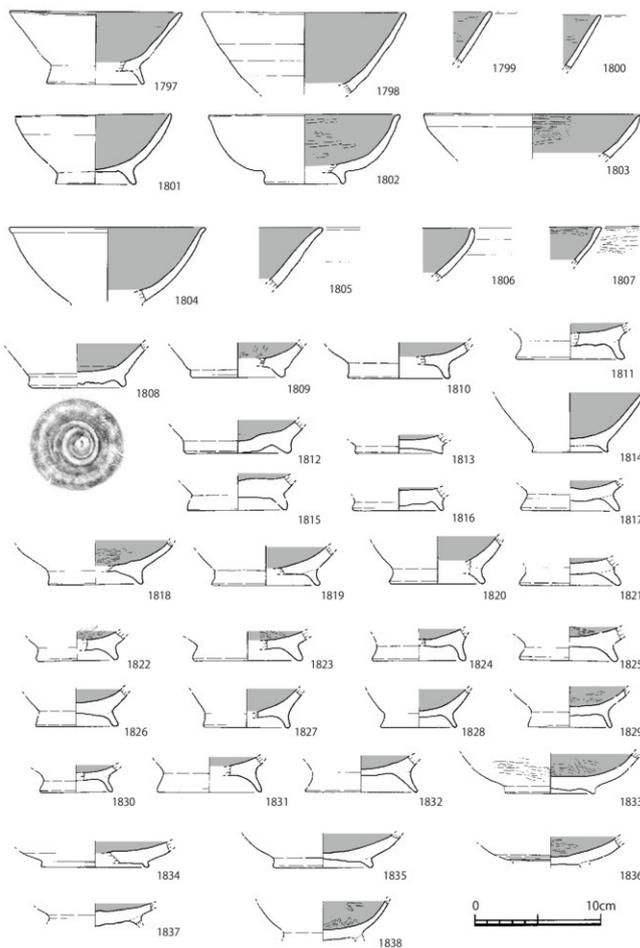
もこの類型に属するものといえる。

1807は外面も回転ナデの後にミガキが加えられるが、黒色処理はされていない。

1808～1835は底部資料である。高台には1808～1810のように低いものや、1829～1832のように細く長いも

のがみられる。1833～1835のようにかなり丸みをおびる体部と短い高台が特徴的な資料も認められる。1833は内外面共に丁寧なミガキが加えられるが、外面は黒色処理していない。

1839～1840は円盤高台を有す坏である。1841は円盤

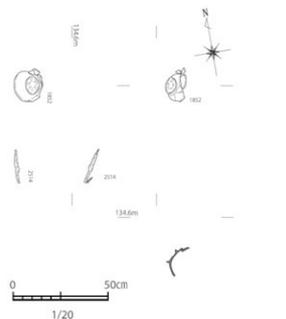


第165図 包含層出土黒色土器実測図① (S=1/3)

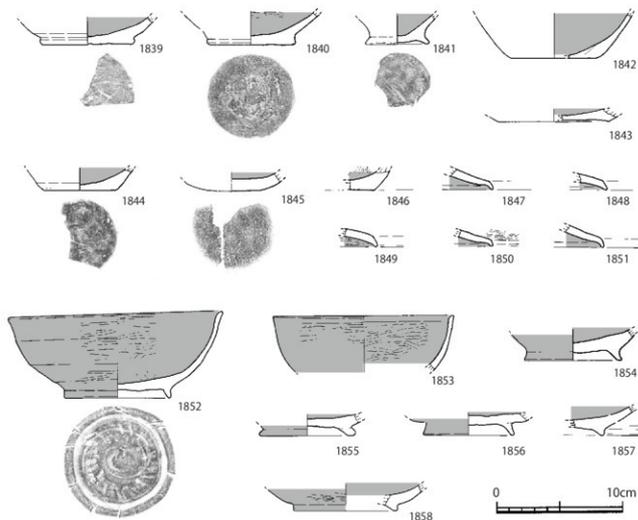
高台の端部をさらにつまみ、短い高台を作り出す。1842～1846は坏である。1842は底部外周に色調が異なる範囲があるため、高台がはずれている可能性もある。1843は底部外面を削り薄くしている。

1847～1851は蓋である。土師器坏の蓋と同様に端部を短く折ることで、かえりにしている。1850は外面もミガキを加える。このような黒色土器の蓋も、少なくとも南九州では他に出土例を知らない。

1852～1858は内外面を黒色処理した黒色土器B類である。1852はF15区で出土した完形の資料である(第166図)。後述する刀子(2514)と近接して出土している。当初は土坑墓等の遺構に伴うものと考え、周辺を断ち割って断面で掘り込みの有無を確認した。その結果、遺構と考えられる掘り込みは伴っていないため、包含層出土の遺物として報告する。口径16.7cm、底径8.4cm、器高6.9cmを測る。体部が丸みをおび半球形を呈す。端部がわずかに外反し、底部には短い高台が付く。高台内面には放射状の圧痕が残る。黒色土器桶Ⅲ類である。1853も同類であろうか。1855・1858は短く外に折れる



第166図 F15区遺物出土状況 (S=1/20)



第167図 包含層出土黒色土器実測図② (S=1/3)

高台を有す。

黒色土器は、他の土器器に比べ出土量も少なく、全体的な器形を窺い知ることができている個体も限られている。しかし、上でみたように、器形からいくつかの類型に分類できる。ここでは、これらの類型の帰属時期を考えてみたい。

直線的な体部を有す黒色土器Ⅰ類については、一括資料としては不安定な資料であるが、SC40で9世紀第3四半期の所産と考えられる土師器環と共出している。さらに、同様の共出関係は馬渡遺跡SD12でも確認されている。よって、黒色土器Ⅰ類類は9世紀第3四半期頃の所産と考えられる。ここではやや時間幅をもたせ、9世紀中頃～後半の資料とする。

Ⅱ類はSB11で同一柱穴内からではないが、9世紀末～10世紀前半の所産と考えられる土師器環と共出している。よって、Ⅱ類についてはこの時期の所産と捉えておきたい。

Ⅲ類類については、SB12において類似する器形を呈する土師器碗が出土している。さらには口縁部と高台部は欠くが、Ⅲ類に属すると思われるかなり体部に丸みを帯びる黒色土器A類が出土している。よって、Ⅲ類類はSB12の年代観を充て、10世紀中頃以降の所産と考える。

H 壺 (第168～173図)

1859～1981は土師器の壺である。1859～1890・1892・1894は内外面の調整にハケメがみられる資料である。1859～1861は外面に横および縦のハケメがみられる。口縁部は曲線的に長く外反する。1860の口縁端部は玉縁状に肥厚する。1865も体部のみであるが、横・縦方向のハケメが認められる。

1862・1864・1866～1890・1892・1894は外面ないしは口縁部内面の頭部屈曲部より上位をハケメにより調整する資料である。1866は口縁端部に平坦面を作り、先端が外に突出する。1876も同様の口縁端部を有す。緩やかに外反する長めの口縁部を呈す資料が多い。1890は外面にハケメおよびタタキがみられ、口縁部内面にはミガキ調整が加えられる。1892は胴部が屈曲し、器高の浅い鉢型を呈すものと考えられる。1893の口縁部内面には浅い凹線が巡る。口径をみると、25～30cm程の資料と、20cm前後の大きく分けて二種類認められる。器形全体が分かる資料はほぼ皆無であるが、長くくの字状に外反する口縁部と、内外面のハケメ調整を有す資料をⅠ類とする。

1891・1893～1963は外面の調整がナデを基本とする資料である。ただし、1906～1913のような口縁部のみである資料については、胴部の調整が不明であるため、

本来はハケメが施されていた可能性も考えられる。1896は胴部上半がナデ調整、下半にタタキが認められる。1900の口縁部内面にはまのような線刻がみられる。1908～1913は口縁端部が外に肥厚するタイプである。この種の口縁を呈すものは、本来はハケメ調整であった可能性が高い。口縁部は長くくの字に外反する資料が多いが、1916・1923～1926のような短く外反する資料も確認できる。さらには、1951・1953・1955・1958のような短く外反した上に屈曲した口縁端部が肥厚するような個体も認められる。口径は25～30cm程のものが多い。これらの外面ナデ調整を主体とする一群をⅡ類とした。

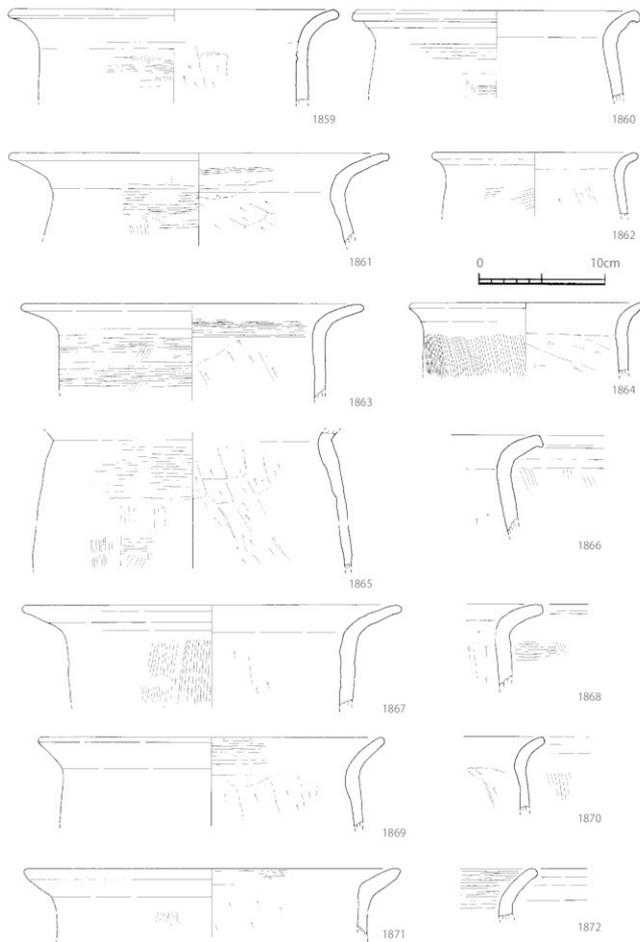
1964は胴部片で外面に格子目タタキがみられる。1965は丸底気味の底部。1966は土師器環のような平底の底部であるが、胎土が甕のみみられる大きめの砂粒を多く含む胎土であるため、甕の底部とした。1967は小型の壺であらう。1968・1969は甕の底部付近。

1970～1981は小型の甕である。最も小さい1976は口径8.8cm、底径2cm、器高7.4cmを測るのみである。外面はナデ調整、内面はケズリないしはナデ調整となる。1973は内外面共に丁寧にナデられており、器壁も薄い。このような小型の甕はこの調整技法からⅡ類に伴うものと考えられる。

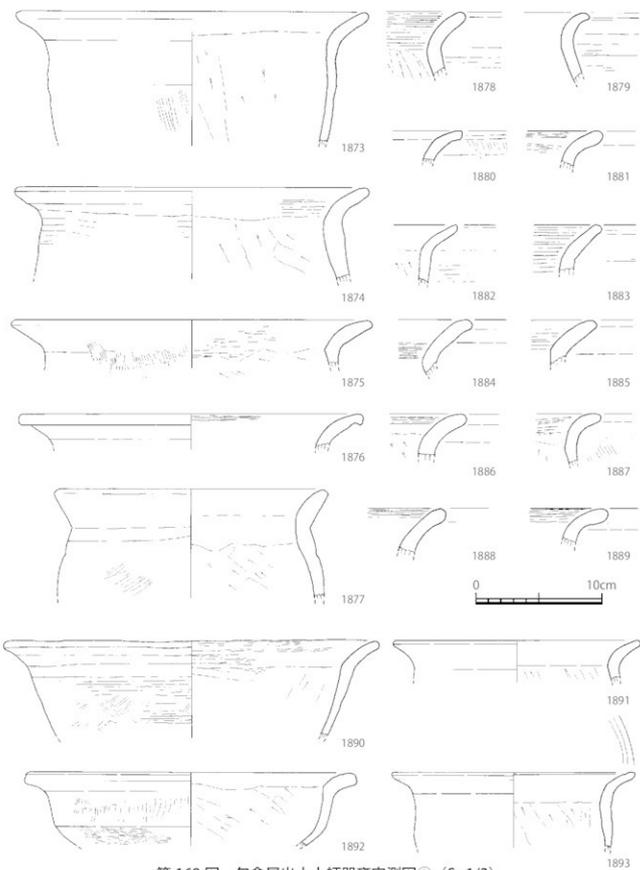
土師器壺については、遺構内での良好な共存関係が分かる資料がなく、包含層出土資料についても全体的な器形および調整技法が確実に分かる資料が少ないため、その年代的な位置づけおよび他器種とのセット関係の抽出は容易ではない。大枠ではハケメ調整を基調とし、長く外反する口縁部を有すⅠ類とした一群が9世紀代、ナデ調整を基調とするⅡ類類が10世紀代を占めるものと考えられる。ただし、従来から指摘されているように、ハケメを施すⅠ類の中でも、縦および横方向のハケメが組み合わされたものが古く、単一方向のハケメを有す資料が新しい段階の資料である可能性は高い。また、本遺跡でもⅠ・Ⅱ類の両群でタタキを有する資料が出土しているが、これも既に指摘されているように、Ⅰ類とⅡ類とにまたがって存在しているものと考えられる。このように考えると、タタキがみられるハケメ基調の資料はより新しく、タタキを有すナデ調整の資料はより古い段階のものと考えられる。よって、タタキ調整が加えられる壺については9世紀中頃～後半頃の所産と考える。

I 甕・羽釜・カマド・鍋 (第174図)

1982～2001は甕および甕の把手と考えられる資料である。1982・1984は口縁部である。1982は口径27cmを測る。内面はケズリが加えられる。1983・1985～1990は甕の把手部分と考えられるものである。1983は甕の手

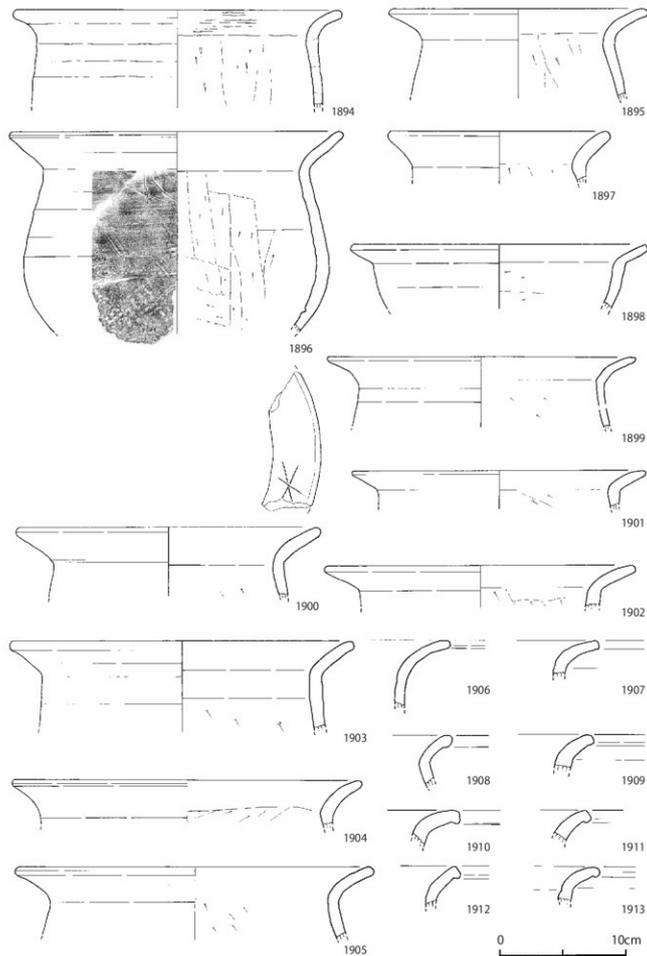


第168図 包含層出土土師器甕実測図① (S=1/3)

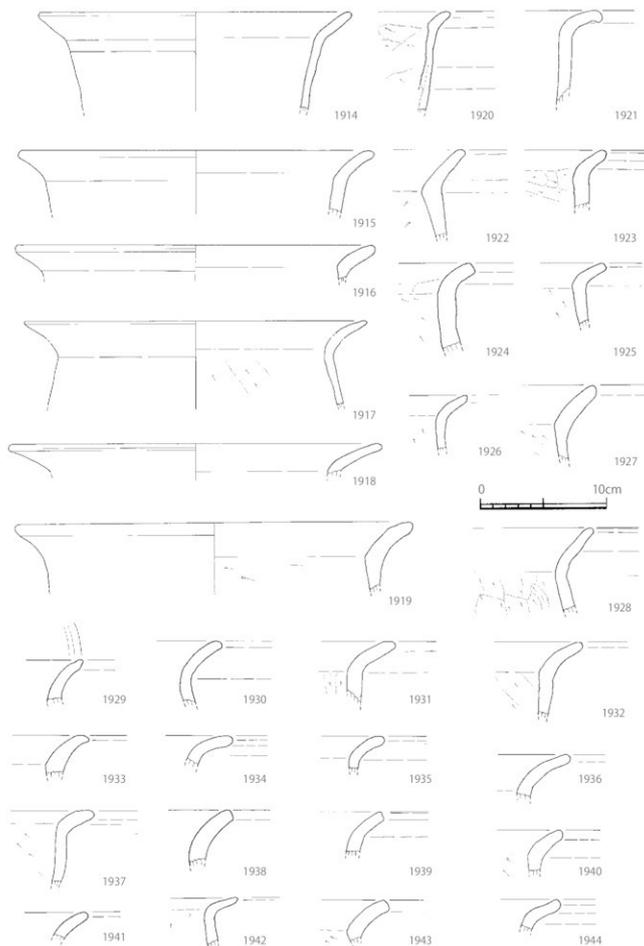


第169図 包含層出土土師器窠実測図② (S=1/3)

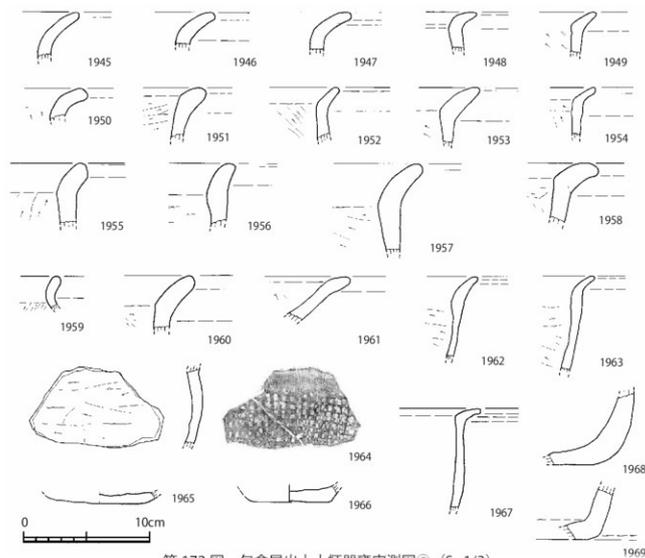
状を呈す。1985～1989は牛角状、1990は皿状把手である。1991～2001は甕の底部と考えられる。中にはほとんどアールがつかず、直線的な器形を呈すため、移動式
 カマドの底部片の可能性もある資料も存在する。しかし、破片資料であるため、ここでは甕の底部として報告する。2002は土師器の羽釜である。口縁部外面には蹄状の突



第170図 包含層出土土師器窠実測図③ (S=1/3)



第171図 包含層出土土器器底実測図④ (S=1/3)



第172図 包含層出土土器器底実測図⑤ (S=1/3)

起が薄る。内面はケズリにより調整される。口径15 cmを測る。2003も同様の跡が薄る。

2004は移動式カマドの底部片と考えられる。甌の底部に比べ内厚で重量感がある。器形も直線的でほとんどアールがつかない。

2005は口縁部外面に縦長の把手が付く鍋であろうか。把手部分のみが遺存するため、全体的な器形は不明である。胎土は土師器窯や甌と共通する。

J 製塩土器 (第175～178図)

2006～2130は製塩土器である。2006～2018は口径が復元できた資料である。2006は唯一全体的な器形が分かる資料である。口径12 cm、器高8.1 cmを測る。磨耗しており内面の布目が残っていない資料が多い。口径が復元できる資料をみると、10 cm前後～15 cmまで幅がある。割り合いとしては、12 cm前後の口径を有す資料が最も多い。

2025は二次的な被熱のためか、胎土が硬化して須恵質を呈す。さらに外面は自然釉のような光沢を有す。口径は11～13 cm前後を測る。

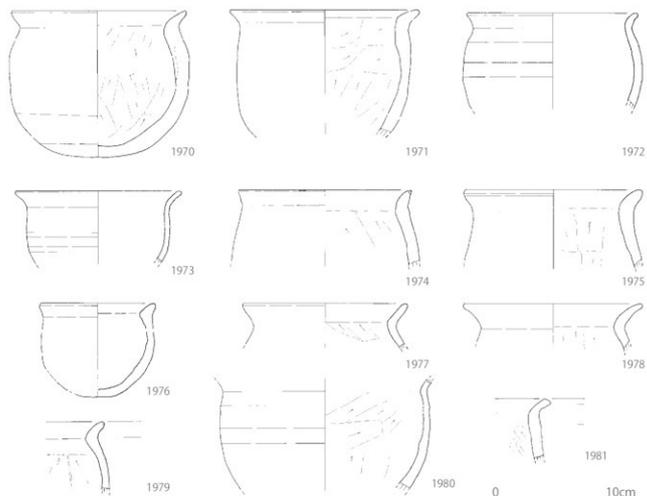
2040・2049・2066・2076・2083・2084・2089・2094・2097～2099・2104・2107～2110・2116～2121・2123も同様に胎土が硬化し、一部色調も須恵器のような灰色を呈す資料も認められる。

2122～2130は底部片。いずれも尖底を呈する。外面はオサエにより調整され、内面には布目を残す。

②須恵器 (第179～184図)

A 坏 (第179・180図)

2131～2247は須恵器である。2131～2160は坏、2131は丸みをおびる体部から直線的に口縁部に向かう。端部がわずかに外反する。内面には火燗が認められる。口径15.6 cm、底径7.6 cm、器高6.6 cmを測る。2132～2138は底部ヘラ切りの平底の坏である。2132には体部下端にヘラケズリ状の面取りがみられる。底部はヘラ切りの後ナデ調整される。2134は底部から口縁部に向かい大きく開く器形を呈す。底部はヘラ切り後ナデ。2135には火燗が認められる。2136は底部下端に段が付き、高台状を呈す。口径は11～13 cm前後を測る。



第 173 図 包含層出土土器残実測図⑥ (S=1/3)

2139 ~ 2147 は平底杯の底部である。いずれも底部切り離し技法はヘラ切りである。その後ナゲ調整を加えるものも多い。2144 には体部下端にヘラケズリ状の面取り有。2147 はやや軟質な胎土を有す。底径は 5.1 ~ 7.2 cm を測る。

2148 ~ 2152 は杯の口縁部である。2149 は大きく開く口縁部で、口径 20 cm を測る。2150 はやや内湾する口縁部で、焼き歪みがみられる。2152 は片口の杯である。

2153 ~ 2160 は円盤高台杯である。2153 は焼成は良好であるが、褐色に発色する。2154 は緑釉陶器のような器形の円盤高台杯。底部外面に十字の線刻が認められる。2158 は胎土が軟質。2159 は円盤高台としたが、高台部が低く、底部切り離し技法によるものと考えられる。

B 高台付杯・皿 (第 180 図)

2161 ~ 2172 は高台付杯である。2161 は唯一完形に復元できる資料で、口径 13.4 cm、底径 7 cm、器高 5.5 cm を測る。短く端部に平坦面を有す高台から、ほぼ直線的に立ち上がる。2162 も同様の器形を呈す。2163 は口縁部を欠くが、箱型の杯部に短い高台が底部のやや内側に付く。2164・2165 は胎土が軟質。2167 や 2171 も高台端

部が平坦になる高台を有す。2172 はかなり低い高台をもつ。

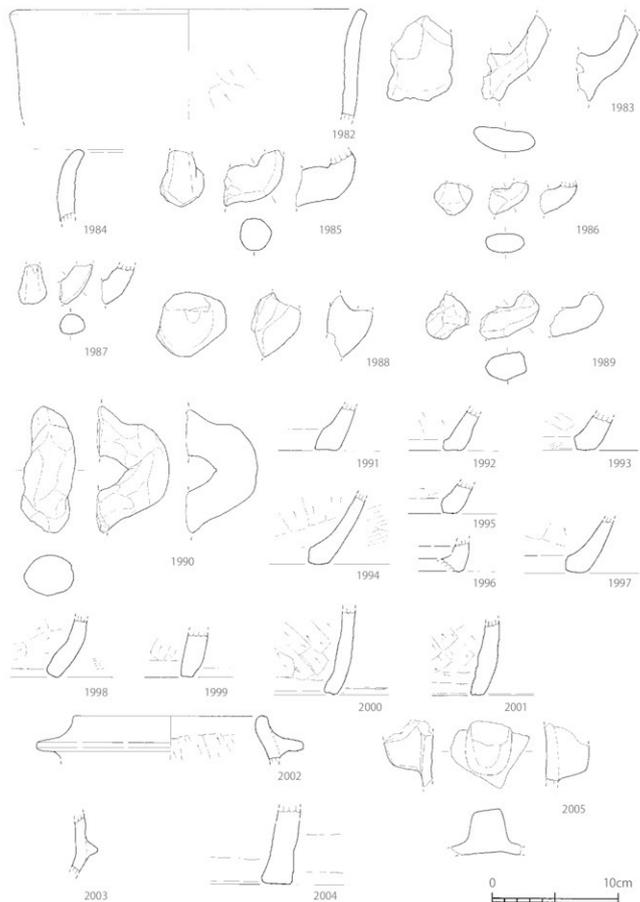
2173 は高台付皿で、高台は太く端部に凹線が巡る。口径 13 cm、底径 8.1 cm、器高 4.2 cm を測る。

C 蓋 (第 180 図)

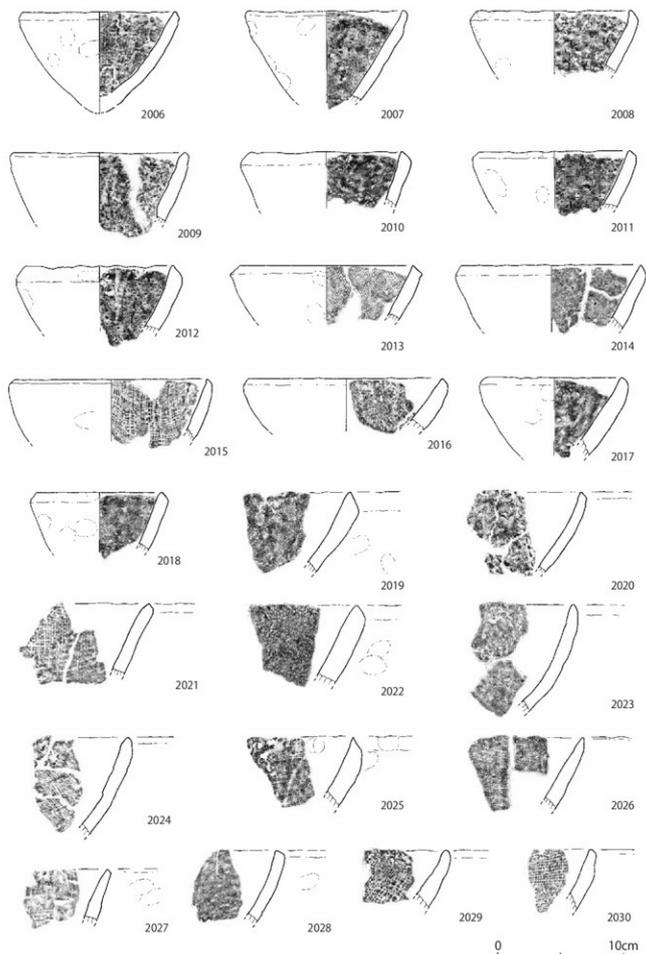
2174 ~ 2191 は須恵器の蓋である。2174 は口径 23.4 cm とかなり大型で、天井部に向かいかなり上向きに立ち上がるため、高杯の脚部の可能性もある。2175 は扁平な器形を呈す。端部を直立させてかえりを作る。2176 はかえりが 2175 より明瞭となる。焼きがあまり軟質である。2177・2178 は蓋の天井部で、外面は回転ヘラケズリが顕著である。2179 ~ 2190 はいずれも端部がわずかに直立させてかえりを作る資料である。2191 はつまみ部である。軟質な胎土を有す。

D 壺 (第 181・182 図)

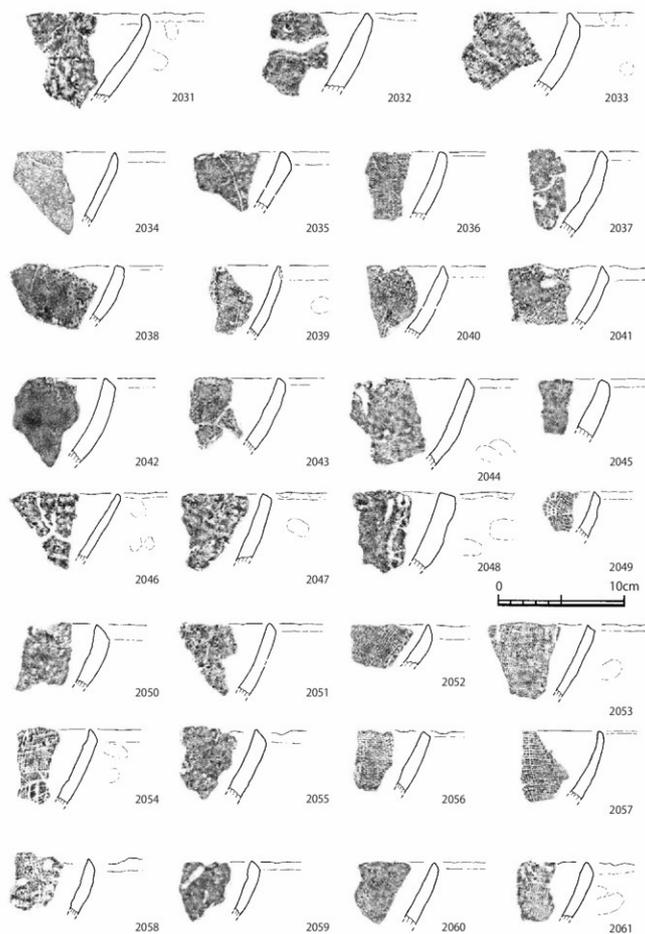
2192 ~ 2213 は壺である。2192 ~ 2202 はいずれも瓶形壺と考えられる。2192 は二重口縁を呈す。口径 11 cm を測る。2193 は外面に自然釉が付く。胎土や色調、調整が類似し、出土地点も近接することから高台付壺の 2208 と同一個体の可能性も考えられる。2194 ~ 2196 は瓶形



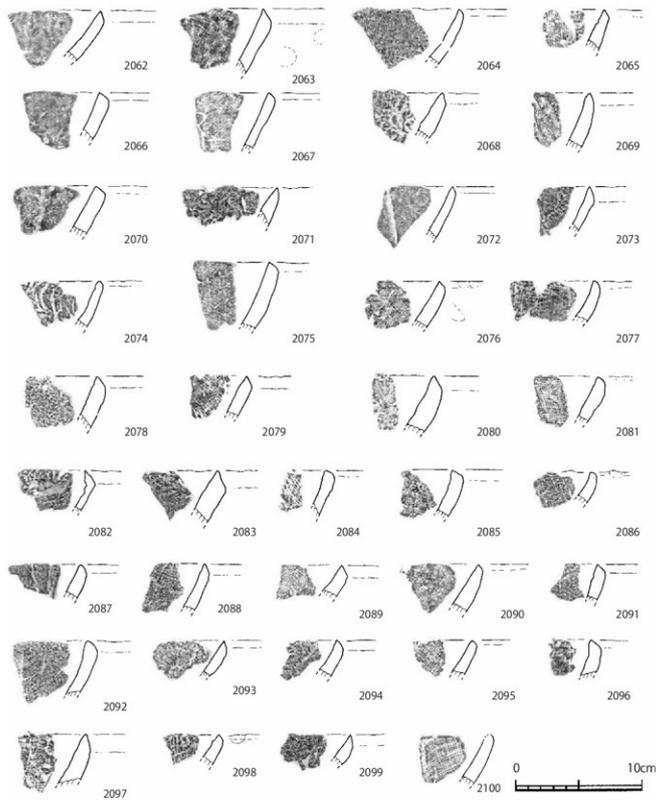
第 174 図 包含層出土土器瓶・羽釜・カマド・鍋実測図 (S=1/3)



第 175 图 包含層出土製塩土器実測图① (S=1/3)



第 176 图 包含層出土製塩土器実測图② (S=1/3)



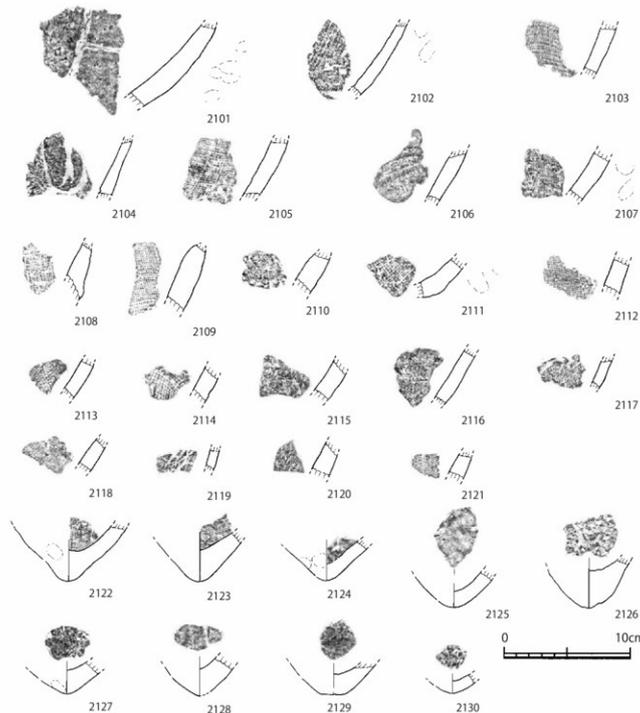
第 177 図 包含層出土製塩土器実測図③ (S=1/3)

壺で肩部に耳が付く。2194 は外面に格子目タタキがみられ、内面はナデおよびオサエにより調整される。2197 ~ 2207 は底部である。2204 は小型の資料で、底径 6 cm を測るのみである。内面はナデにより調整される資料が多いが、2207 は同心円当てで具痕がわずかに残る。最終的にナデ消されているが、2197 や 2206 も外面にタタキが

みられるため、タタキ成形であった可能性が高い。2208 ~ 2213 は高台付壺である。いずれも短い高台が付き、端部が平坦になるかわずかに凹線状を呈す。底径は 8 ~ 9 cm 前後を測る。

E 壺 (第 182・183 図)

2214 ~ 2235 は須恵器壺である。2214 ~ 2229 は口縁



第 178 図 包含層出土製塩土器実測図④ (S=1/3)

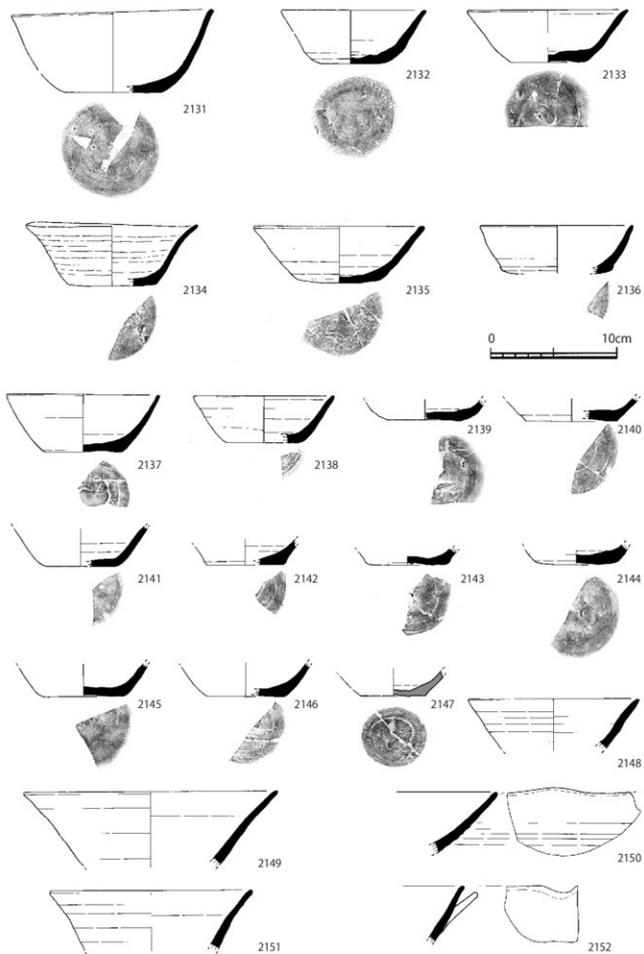
部資料である。そのうち 2214 ~ 2226 は頭部でくの字に屈曲するタイプである。2218・2222・2223 の口縁端部は外に肥厚する。2225・2226 は胎土軟質。2218 と 2220 の胎土には黒色鉱物が斑点状に多く認められる。2227 ~ 2229 は二重口縁を呈す。2228・2229 の外面には一条の波状沈線がみられる。2228 は橙色に発色する。2230 ~ 2235 は壺の肩部ないしは胴部片である。2230 は外面に自然釉が付着する。胎土も黒色鉱物が斑点状に含まれており、他の須恵器の胎土とは異なる。上述の 2218 や 2222 の胎土と類似する。2232 ~ 2234 も同類とみられる。

2231 は外面に格子目タタキが、内面には同心円当てで具痕が残る。

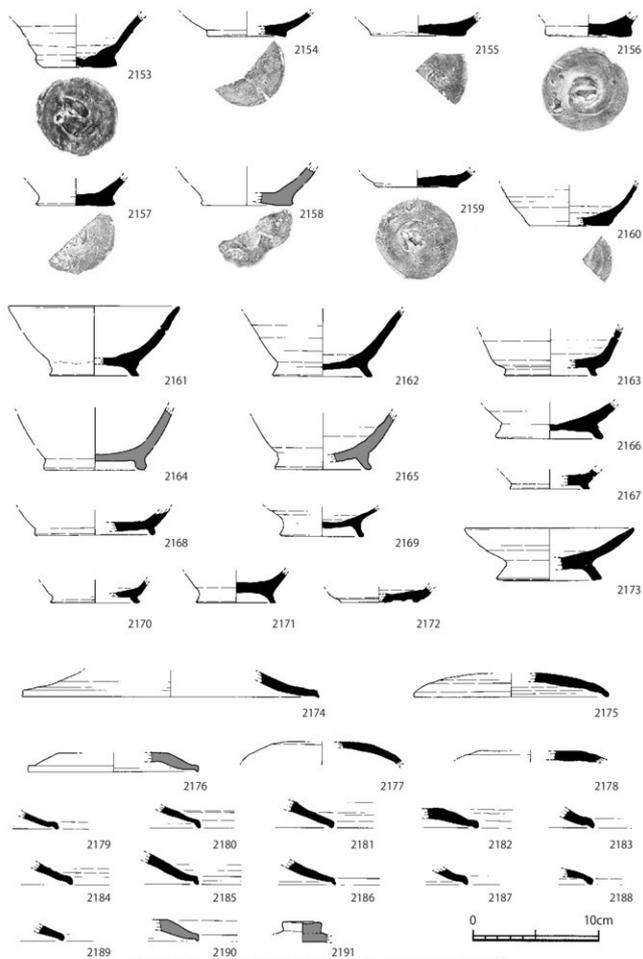
F 鉢・小壺 (第 183 図)

2236・2237 は鉢である。体部外面中央に逆 D 字状の浅い連続的な刻みが二段にわたって確認できる。それ以下は格子目タタキがみられるが、内面には当て具痕はなく、ナデが加えられる。2236 は口径 21 cm、底径 11.4 cm、器高 12.7 cm を測る。

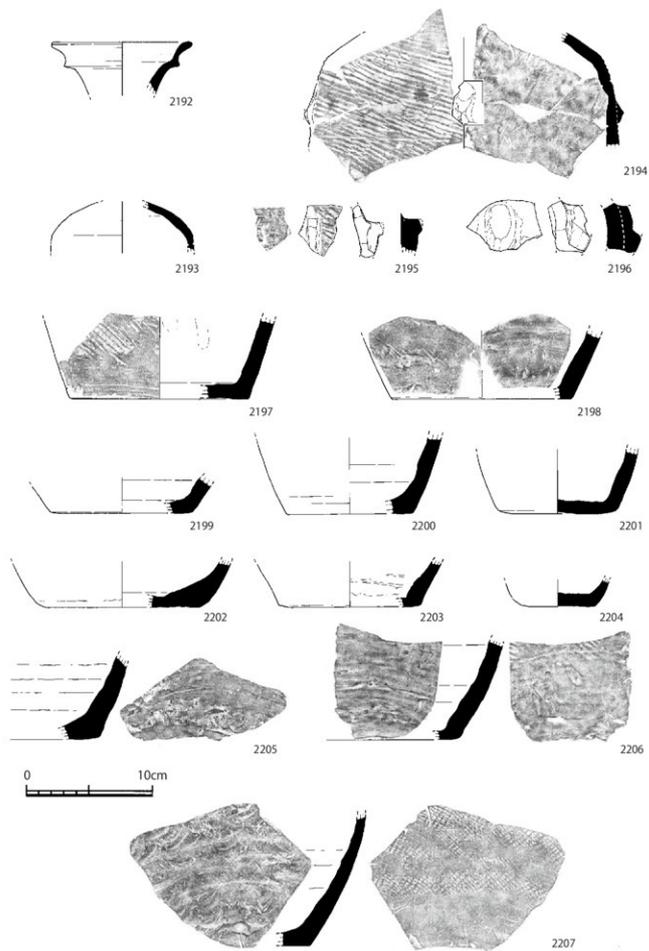
2238 は小壺で短くてやや内傾する口縁を有す。口径 5 cm を測る。



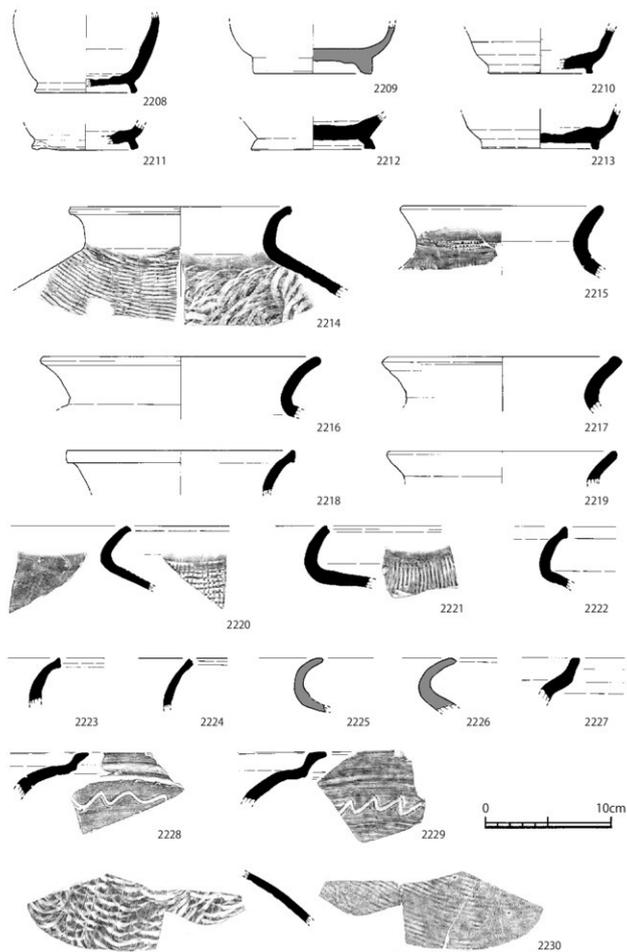
第 179 图 包含层出土须惠器坏实测图 (S=1/3)



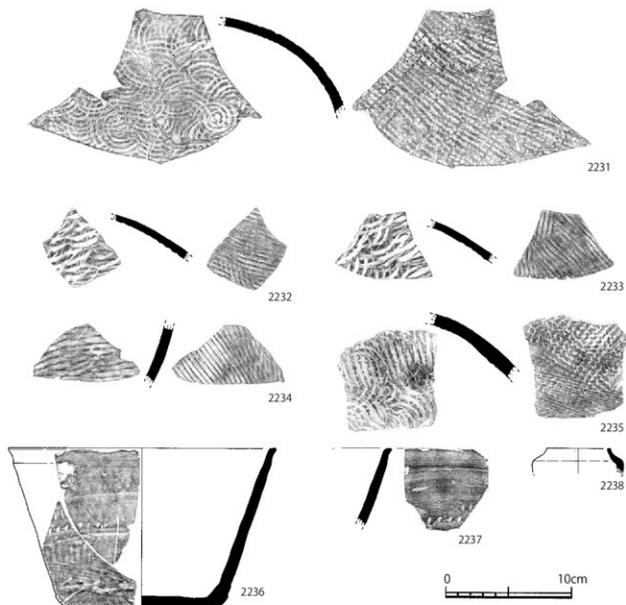
第 180 图 包含层出土须惠器坏·皿·盖实测图 (S=1/3)



第 181 图 包含層出土須惠器壺実測図 (S=1/3)



第 182 图 包含層出土須惠器壺・甕実測図 (S=1/3)



第 183 図 包含層出土須恵器甕・鉢・小壺実測図 (S=1/3)

G 転用硯・風字硯 (第 184 図)

2239 ~ 2245・2247 は須恵器甕・坏・蓋を利用した転用硯である。2239・2243 ~ 2245・2247 は甕を転用したものである。いずれも内面の当て具痕の凹凸を利用して磨り込んでおり、磨耗する。

2240・2242 はいずれも高台付坏の見込み部分を磨面とした転用硯である。2240 は口径 15.2 cm、底径 8.4 cm、器高 6.5 cm を測る。端部に平坦面を有す短い高台が付く。2242 は高台端部が欠損する。

2241 は蓋であり、二点の破片を同一個体の可能性が高いと認識し、図上で復元したものである。つまみの内面部分には磨面に加え墨痕と考えられる黒色の範囲が広がる。口縁部片については磨面は認められないが、黒色を呈する範囲が確認できる。

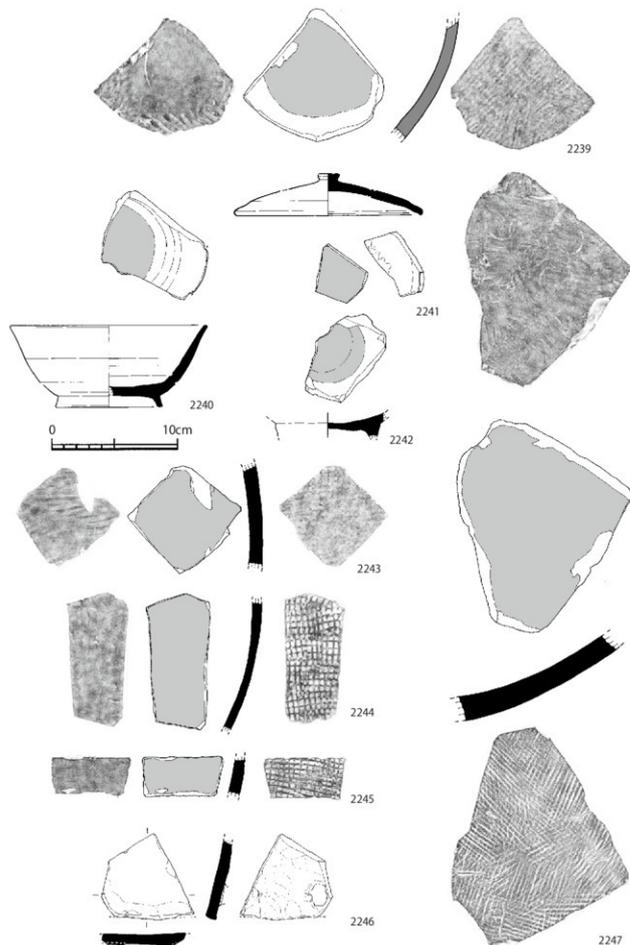
2246 は風字硯の破片と考えられる資料である。海部は

完全に欠損しており、墨痕は確認できない。硯背後方部には脚が剥離した痕跡が認められる。明確なのは一箇所のみであるが、その反対側にもわずかではあるが剥離した痕跡が認められる。硯背はオサエにより調整されており、指紋と思われる痕跡までもが残る。硯面は硯尻付近にやはり指面によるオサエ調整の痕跡が認められる。硯尻側面はヘラケズリにより面取りがなされる。硯面のオサエ調整の状況から、脚の剥離痕跡が明確に残る左側は、側縁に近いものと推測されるが、縁の立ち上がり何を合わせる雰囲気はなく、断面形態は平坦となる。

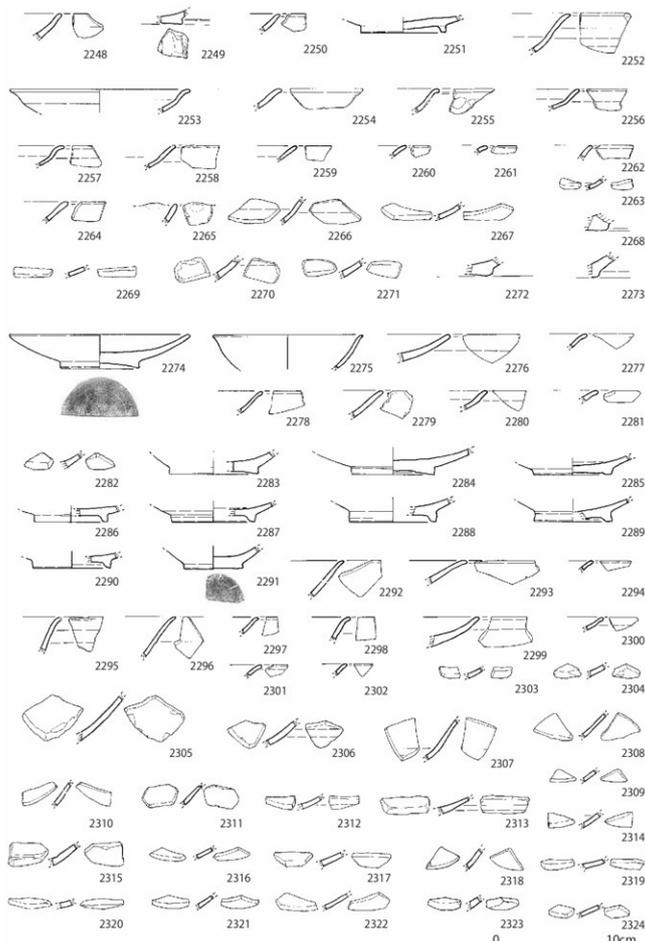
③ 国産施軸陶器・貿易陶磁器 (第 185 ~ 192 図)

A 緑軸陶器 (第 185・186 図)

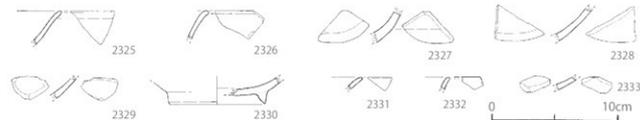
2248 ~ 2333 は緑軸陶器である。本道跡では遺構内出土資料も含めて 136 点の緑軸陶器が出土しており、その内 123 点を図化している。尚、緑軸陶器・貿易陶磁器の



第 184 図 包含層出土須恵器転用硯・風字硯実測図 (S=1/3)



第185図 包含層出土緑釉陶器実測図① (S=1/3)



第186図 包含層出土土緑釉陶器実測図② (S=1/3)

分類・同定作業については、山本信夫氏よりご指導いただいた。

2248～2273は軟質（土師質）な胎土を有す資料である。2248は軸がやや黄色味をおびる柄である。京都産洛北型ないしは防長産と考えられる。2249は蛇ノ目高台の柄ないしは皿。底部は無軸である。軟質な胎土を有し、京都産（洛北型ないしは洛西型）と考えられる。2250は軟質な胎土をもつ柄ないしは皿である。防長産と考えられる。2251も軟質な胎土の資料で、貼り付けの軸状物をもつ。裏付けは沈線が深。防長産（長門タイプ）であろう。2252～2262・2264・2265は口縁部片で、柄または皿と考えられる。2253は皿と考えられる資料で、口径13.8cmを測る。これらは軟質な胎土の京都産洛北型ないしは防長産と考えられる。2263・2266・2267・2269～2271は皿と考えられる。2268・2272・2273は底片。いずれも軟質な胎土の京都産洛北型ないしは防長産と考えられる資料である。

2274・2275・2277～2291は硬質（須恵質）な胎土を有す柄ないしは皿で、胎土および削り出し高台等の特徴から京都産洛西型と考えられる資料である。2274は6点の破片が接合した皿である。高台内面には×状のヘラ沈線がみられる。2275は軸が濃緑色を呈す柄である。2280は段皿であろうか。2283～2291は底片で、いずれも削り出し高台である。2284・2285は蛇ノ目高台。2291は円盤高台の底部に糸切り痕が認められる。これら京都産洛西型の緑釉陶器は9世紀後半～10世紀代の資料とされる。

2276・2292・2293・2295～2297・2299～2302・2304～2308・2310・2312～2324は硬質な胎土を有す京都産洛西型ないしは東海産と考えられる資料である。2276は皿であろう。2292・2293・2295～2297・2299・2302は口縁部資料。柄ないしは皿と考えられる。軸は淡緑色や緑色を呈すものが多い。

2294・2298・2311・2325はやはり硬質な胎土を有す、濃緑色を呈す軸調またはミガキがみられないという特徴から京都産洛西型・東海産・近江産のいずれかと考えられる資料である。

2303はやや軟質な胎土を有しており、京都産洛北型の

可能性があるが、軸調からは古い時期の東海産の資料である可能性も考えられる。

2309は硬質な胎土の資料で、京都産（洛北型ないしは洛西型）と考えられる。

2326～2330は軸が濃緑色を呈す近江産と考えられる資料である。2326は胎土が硬質な口縁部片で、それ以外の資料はいずれも胎土が軟質なものである。2330は貼り付け高台の底部資料で、高台付内側には段がみられる。10世紀後半～11世紀初頭の資料と考えられる。

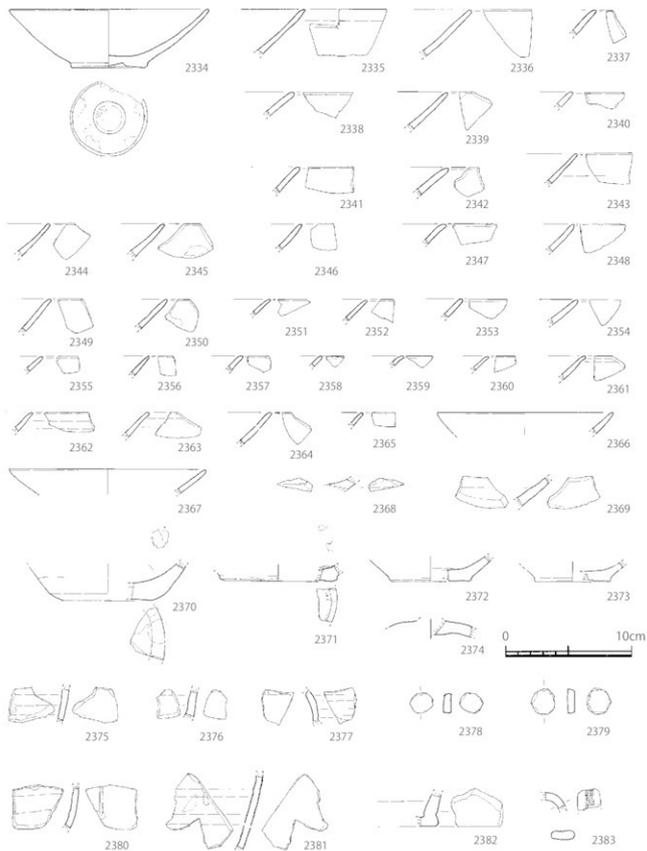
2331～2333は淡緑色の軸と硬質な胎土を有す京都産（洛北型・洛西型）ないしは東海産と考えられる資料である。

これら緑釉陶器の出土地点をみてみると、比較的偏南なく出土しているが、調査区西端の3～7区、東側窪地周辺の18～20区で多く出土しているのが分かる。

B 越州窯系青磁 (第187・188図)

越州窯系青磁およびその可能性が高いと考えられる資料は、遺構内出土のものも含めて合計172点が出土している。内訳はI類が103点、II類が57点、その他I類・II類の判別ができない資料などが12点となる。これらの内89点を図化している。

2334～2379は越州窯系青磁I類と考えられる資料である。2334はほぼ完形の資料で、越州窯系青磁I類1-a類である。口径15.5cm、底径5.6cm、器高4.7cmを測る。口縁部は直口し、底部は蛇ノ目高台である。一部欠損するが高台には5箇所の日跡が残る。2335～2342・2345も直口する口縁部で、蛇ノ目高台であるI類の可能性が高い。2363はI-2類であろうか。それ以外も口縁部資料は直口するものが多く、2361のように外反する資料は少ない。2366は直口する口縁部を有すI類である。口径は13.8cmを測る。2367は口径15.4cmを測る柄I類である。2368は柄ないしは皿の底部付近で内面には日跡が残る。2370～2373は底部資料である。2370は平底の柄I-5類である。体外外面下位以下には施軸しない。内外面に日跡がみられる。2371も同様の柄I-5の平底類。軸は底部付近までかかる。2372・2373はI-1a類の蛇ノ目高台を呈す底部である。それぞれ底径6cmと5.8cmを測る。

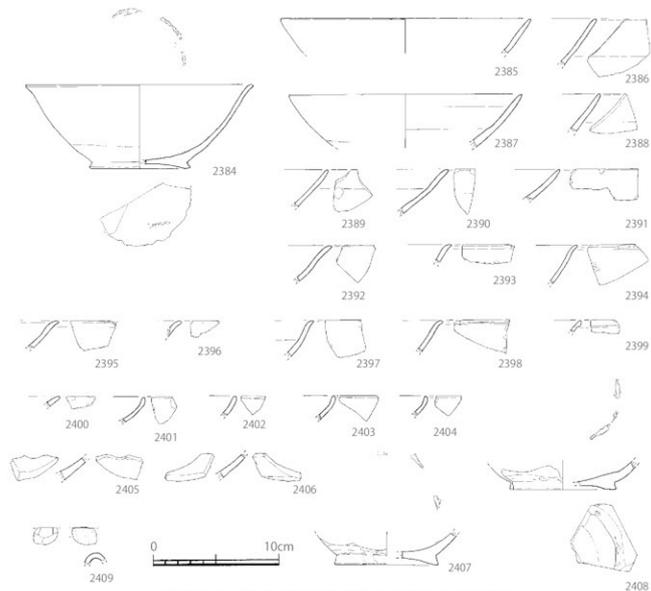


第 187 図 包含層出土越州窯系青磁（・長沙窯系青磁）実測図（S=1/3）

2374 は壺類の蓋と考えられる。1 類であろうか。軸測からは元の可能性もあるが、軸が薄いため越州窯系青磁として報告する。

2375・2376 は壺 1 類。いずれも胴部片であろう。

2377 は香炉蓋と考えられ、わずかに透かし部分が遺存する。



第 188 図 包含層出土越州窯系青磁実測図（S=1/3）

2378・2379 は 1 類の加工品で、円盤状に打ち欠いて成形される。

越州窯系青磁 1 類の出土地点をみると、ほぼ調査区西端 3～7 区に集中することが分かる。完形に近い 2334 の資料もここで出土している。

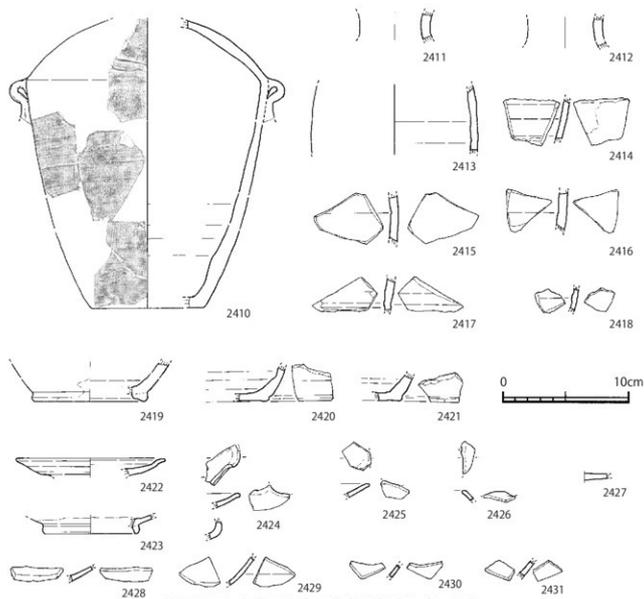
2380～2383 は長沙窯系青磁ないしは越州窯系青磁 1 類と考えられる資料である。2380 は瓜胴を呈す水注であろうか。胎土には微細な白色粒が含まれる。2381 も同様の水注の胴部片と考えられる。2382 は底部片で、底部内面にまで施釉される。やはり胎土には微細な白色粒が含まれる。2383 は水注把手部分である。外面には 3 本の沈線が入る。いずれの資料も灰オリーブの釉がかかる。

2384～2409 は越州窯系青磁 II 類である。2384 は完形に復元できる資料で、底部が上げ底の内盤高台状を呈す椀 II-2b である。口径 17.8 cm、底径 8 cm、器高 6.6 cm を測る。内面および底面に目跡がみられる。体外面

下位は露胎となる。2385 も椀 II-2b 類と考えられ、復元口径は 19.6 cm とやや大型である。2386 も椀 II-2b ないしは 2c 類と考えられる。2387 は口径 18.2 cm を測る。

2391・2393 も円盤状高台の椀 II-2b ないしは e 類の可能性がある。2394 は口縁端部が外反する椀 II-2c ないしは d 類と考えられる。2395・2397 も口縁が外反しており、椀 II-2c ないしは e 類。2396 も口縁部が外反し、輪花を有す。2398 は外反口縁と輪花を有す椀 II-2c 類と考えられる。2399 は口縁端部が玉縁状を呈す椀 II-2f 類である。2401～2404 は内湾口縁の椀 II-2d 類である。2407・2408 は内盤状高台を呈す椀 II-2 類。2407 は内面に、2408 は内面および体外面下部に目跡を残す。

2409 は水注の注口であろう。内面にも釉薬がかかっている。これら越州窯系青磁 II 類の出土地点をみると、やはり調査区西側の 5・6 区で最も多く出土していることがわかる。ただし、越州窯系青磁 1 類に比べると、全体



第189図 包含層出土灰釉陶器実測図 (S=1/3)

量が少ないこともあるが、他の地点と大きな差はないといえる。

C 灰釉陶器 (第189図)

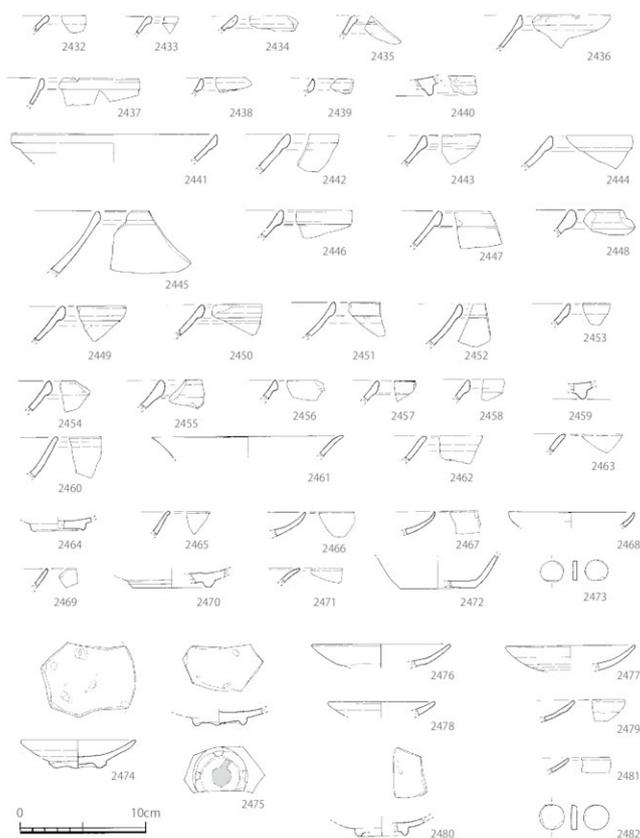
2410～2431は灰釉陶器である。31点(同一個体は1点とする)が出土し、25点を図化した。2410は接合しない3点の部位(肩・耳部、胴部、底部)をつないで図面上で復元したものである。双耳壺であると思われるが、耳部は1箇所のみが残る。頸部から口縁部片も出土していない。外器面全体に櫛歯状の工具で細沈線を施す。肩部より上位は横方向に、それより下位は縦・横方向の組み合わせとなる。底部にも同様の文様が施される。胎土には黒色鉱物が含まれる。底部も含め外面全体に灰オリーブ色の釉がかけられる。胴部下平から底部にかけては釉が薄くなる。底径9cm、遺存高は22.8cmを測る。

2411～2421は壺である。2411・2412は頸部、2413～2418は胴部である。2419～2421は底部片。2419は輪状

高台、2420・2421は平底を呈すものと考えられる。2422・2423は皿である。2422は漬け掛けの段皿である。内外面共に軸の大部分が剥離する。口径11.6cmを測る。2423も漬け掛けの皿と考えられる資料である。軸は体部下位以下には掛からない。低い三日月状の高台を有す。黒笹K90窯式の新しい段階から折戸0-53窯式頃の資料であろうか。2424～2426は耳皿である。2424は刷毛塗りである。尾北産の可能性が考えられ、K90窯式と同時期の資料であると思われる。2425・2426も耳皿の口縁部片である。2427～2431は椀ないしは皿と考えられる資料である。2427は底部片と考えられる。2428はD13区とG17区出土資料が接合した資料で、軸は刷毛塗りである。

D 白磁 (第190図)

白磁は大宰府編年のC期(11世紀後半～12世紀前半)～H期(14世紀後半～15世紀中頃)までの資料合



第190図 包含層出土白磁実測図 (S=1/3)

計126点が出土している。その内、半数以上の66点がC・D期(11世紀後半～12世紀後半)の資料である。A期(8世紀末～10世紀中頃)の資料である椀1類は5点(I類ないしはII-5類と考えられる1点を含む)出土している。B期(10世紀後半～11世紀中頃)の標識時期である椀X1類は出土していない。2432・2433・2435は白磁椀1類の口縁部である。いずれも小さな玉縁口縁を呈す。2434はやや玉縁が長く、I

類ないしはII-5類と考えられる。

2436 ~ 2440 は白磁椀II類と考えられる資料である。2436 ~ 2439 は口縁部、いずれも小振りな玉縁口縁を呈す。2438 は椀II-1ないしは5類、2439 は胎土からはII-5類と考えられるが、IV類の可能性もある。2440 は椀II類の底部である。白磁II類は合計12点出土している。

2441 ~ 2459 は白磁椀IV類である。全体では24点出土している。2441 ~ 2458 は口縁部。いずれも肉厚な玉縁口縁を呈する。2441 は口径16 cmを測る。2459 は底部片である。

2460 は口縁部がわずかに外反する資料で、白磁椀V・VI・VII類のいずれかであろう。

2461 は口縁部が弱く外反する椀VI類と考えられる。口径は15 cmを測る。

2462 は白磁皿IIないしはIII類と考えられる。2463 も皿で、II・III・VII類のいずれかと考えられる。大宰府編年C・D期の所産といえる。

2464 は白磁皿II-1類の底部である。底径4 cmを測る。

C期の所産である。

2465 は口縁部が弱く外反する白磁椀V-2・VI・VII類のいずれかと考えられる。C・D期の所産である。

2466 は白磁皿V・VI・VII類のいずれかであろう。やはりC・D期の所産。

2467・2468 は白磁皿で、2467 はVI類、2468 はVIないしはVII類と考えられる。C期の所産である。

2469 は直口口縁の椀で、VIないしはVII類と考えられる。2470 は内面見込みの軸が環状に掻き取られた椀VIII類である。底径6.2 cmを測る。D期の所産。

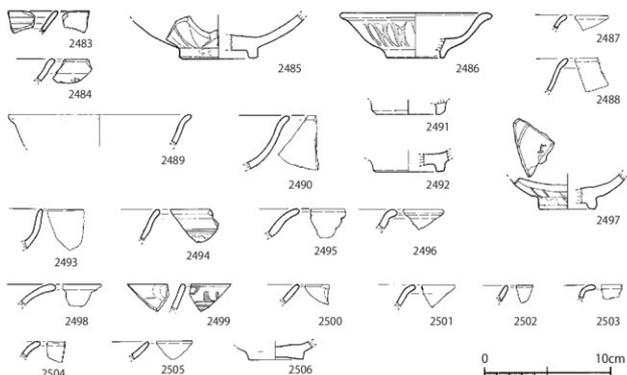
2471 は口縁内面の軸が掻き取られた口弁げの椀IX類。F期(13世紀中頃~14世紀初頭)の所産である。

2472 は白磁皿IX-1b~d類と考えられる資料である。底径6 cm。F期の所産である。

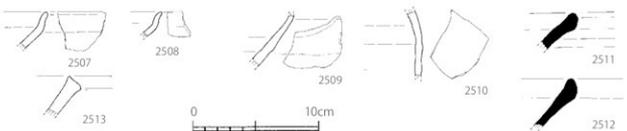
2473 は白磁の加工品で、側面を打ち欠いており円盤状を呈す。

2474 ~ 2481 は森田D群の白磁皿である。2474・2475・2480 は挟入高台付皿である。2474 は口径8.8 cm、底径3.8

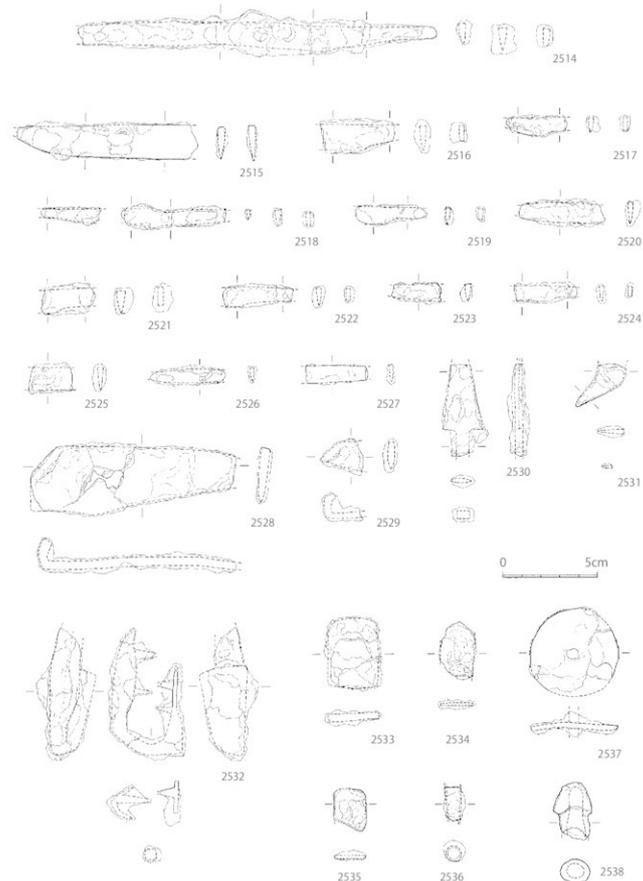
cm、器高2.2 cmを測る。内面には目跡が残る。2475も挟入高台付皿で、高台内面には朱書きがみられる。2480も同様の資料である。2476 ~ 2479・2481 は口縁部片である。これらの資料は大宰府編年のH期の資料である。



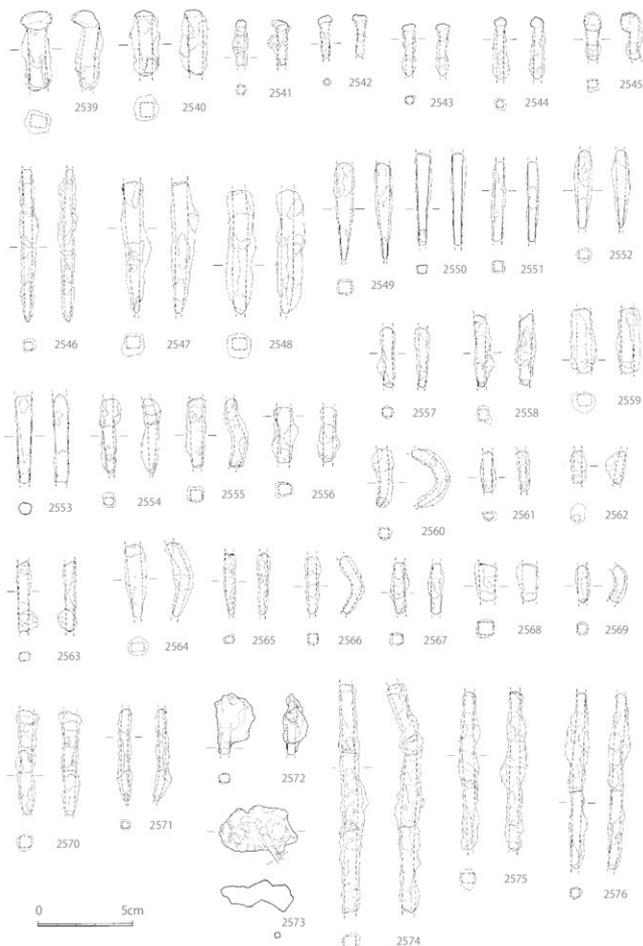
第191図 包含層出土青磁実測図 (S=1/3)



第192図 包含層出土中世陶磁器実測図 (S=1/3)



第193図 包含層出土鉄製品実測図① (S=1/2)



第194図 包含層出土鉄製品実測図② (S=1/2)

2482は白磁を再利用した円盤状加工品である。白磁の軸調・胎土から森田D群の白磁皿の可能性はある。

E 青磁 (第191図)

青磁は龍泉系青磁I類等の大宰府編年D期(12世紀中頃～後半)以降、上田BIV類のJ期(15世紀末～16世紀前半・中頃)まで合計52点出土している。最も多くの出土をみているのは、龍泉系青磁IV類以降(G期・14世紀初頭以降)で17点を数える。

2483は龍泉系青磁碗I-2～4類と考えられる資料である。D期の所産である。

2484は同安系青磁碗III類の口縁部片である。外面にわずかに瓣目文が残る。同安系青磁は本遺跡ではこれ1点のみが出土した。D期の所産。

2485は織蓮弁文を有す龍泉系青磁碗II-b類である。

底径6.2cmを測る。E期(13世紀前後～前半)の所産。

2486はやや器高が高いが龍泉系青磁碗IV類と考えられる。外面の蓮弁文はかなり略化する。口径12cm、底径4.5cm、器高3.5cmを測る。

2487・2488は産地が福建系系と考えられる青磁碗で、元以降(G期以降)の所産と考えられる。

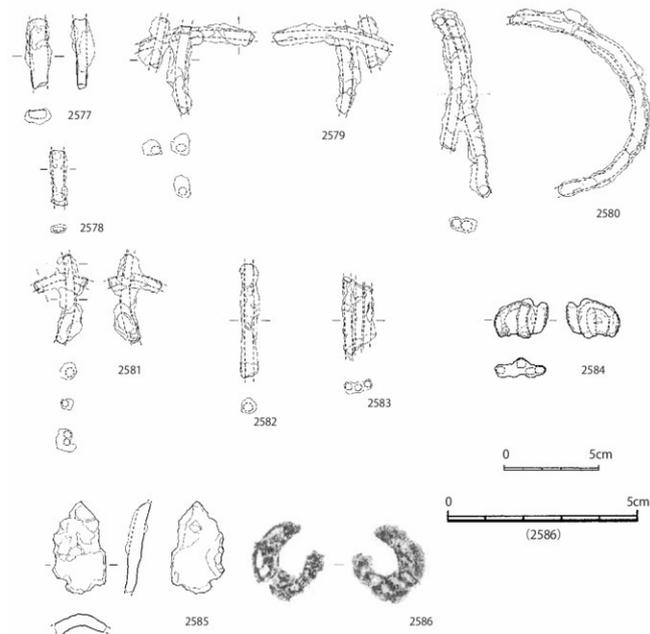
2489・2490・2498は龍泉系青磁碗IV類以降の時期の資料と考えられる。2492は龍泉系青磁碗IV類以降の所産といえる。底径5.6cmを測る。

2491は極ないしは皿の底部で、元～明代の所産である。

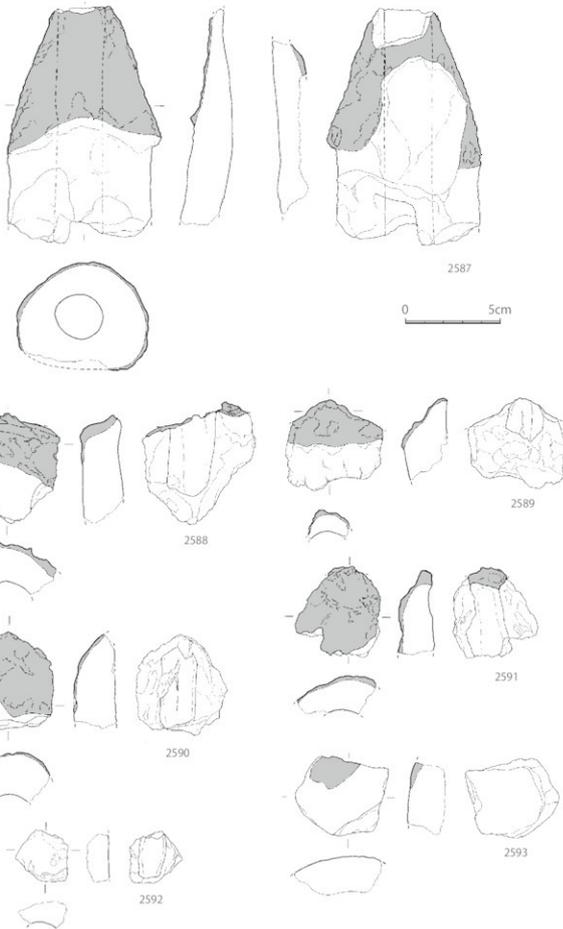
2493は直口口縁の青磁碗で明代の所産であろうか。

2494・2495は外反口縁の龍泉系青磁碗でやはり明代の所産と考えられる。

2496は外反する口縁を呈す青磁碗で、これも明代の所



第195図 包含層出土鉄・銅製品実測図 (S=1/1・1/2)



第196図 包含層出土縄羽口実測図① (S=1/2)

産であろう。

2497は上田B IIIないしIV類の青磁椀。底径4.4cmを測り、内面見込みにはスタンプ文がみられる。I・J期の所産。

2499は上田C II類の椀で、外面には雷文帯が認められる。H期(14世紀後半・末～15世紀前半・中頃)の所産といえる。

2500・2502は直口縁の龍泉窯系青磁椀I類ないしはII類であろうか。

2501・2503・2504は外反する口縁の龍泉窯系青磁椀IV類である。G期の所産。

2505は龍泉窯系青磁椀ないし皿、2506は香炉である

うか。2506は底径4.3cmを測る。

F その他の陶磁器 (第192図)

2507は瀬戸天目茶碗と考えられる。胎土は浅黄橙色を呈する。

2508・2509は中国産の天目茶碗であろう。胎土は灰色を呈し、釉は茶褐色に発色する。

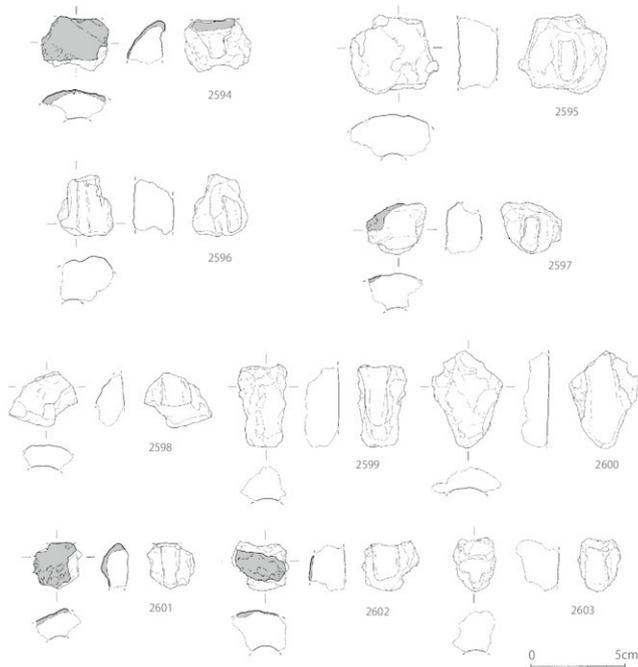
2510は中国産黒釉陶器の壺である。

2511・2512は東播磨須恵器の口縁部片である。いずれも外に肥厚する口縁部を有す。

④鉄製品・銅製品・銀冶関連遺物 (第193図～203図)

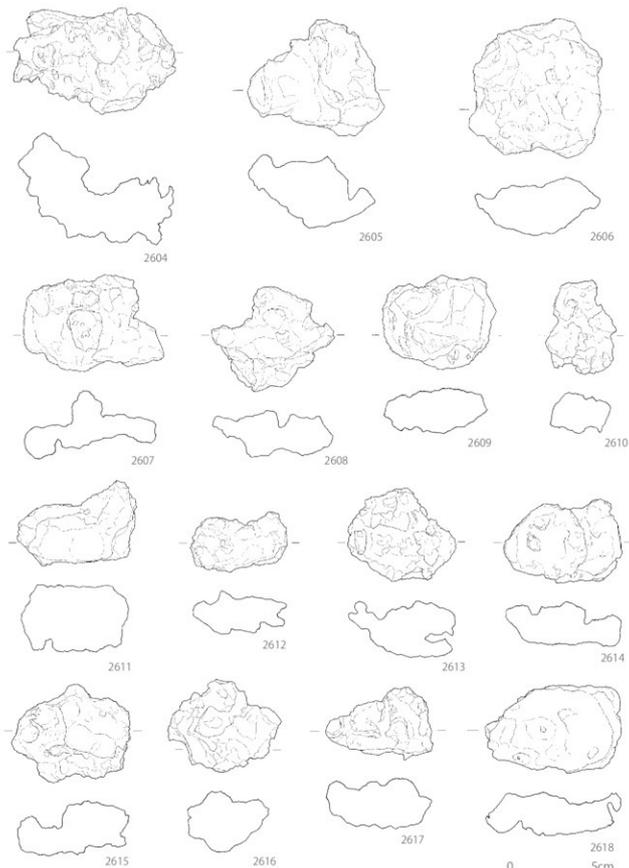
A 鉄製品 (第193～195図)

本遺跡で出土した鉄製品に関しては、X線写真の撮影

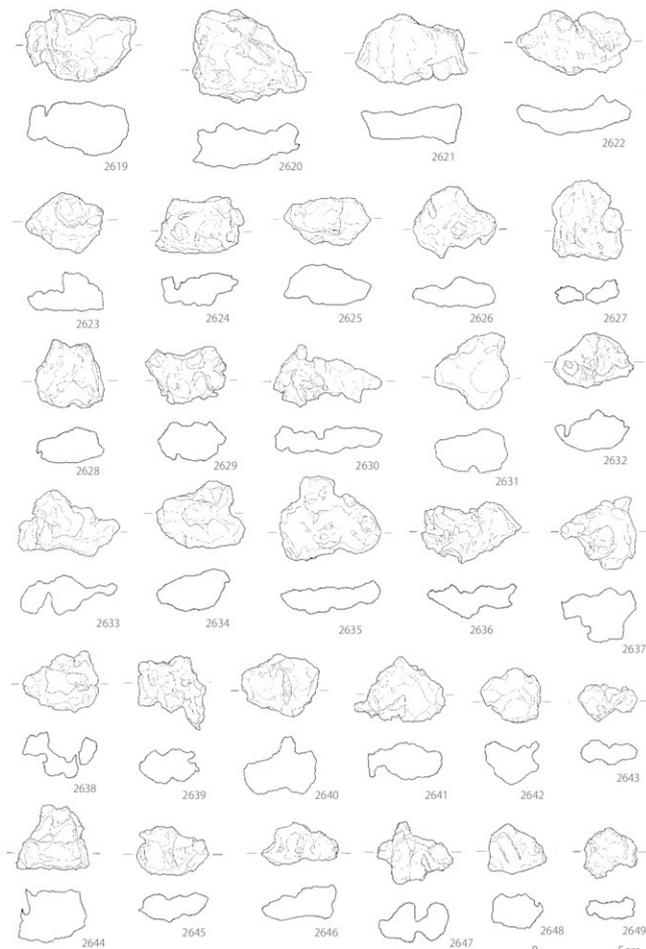


第197図 包含層出土縄羽口実測図② (S=1/2)

を実施できておらず、錆跡の著しい範囲に関しては、
 形態等を推定しているところが多い。実測図においては
 推定範囲は点線で示し、本来の形態と判断できる範囲に
 関してのみ実線で表現している。
 2514 ~ 2527 は刀子と考えられる資料である。2514 は
 包含層出土黒色土器の項で述べたように、完形の黒色土

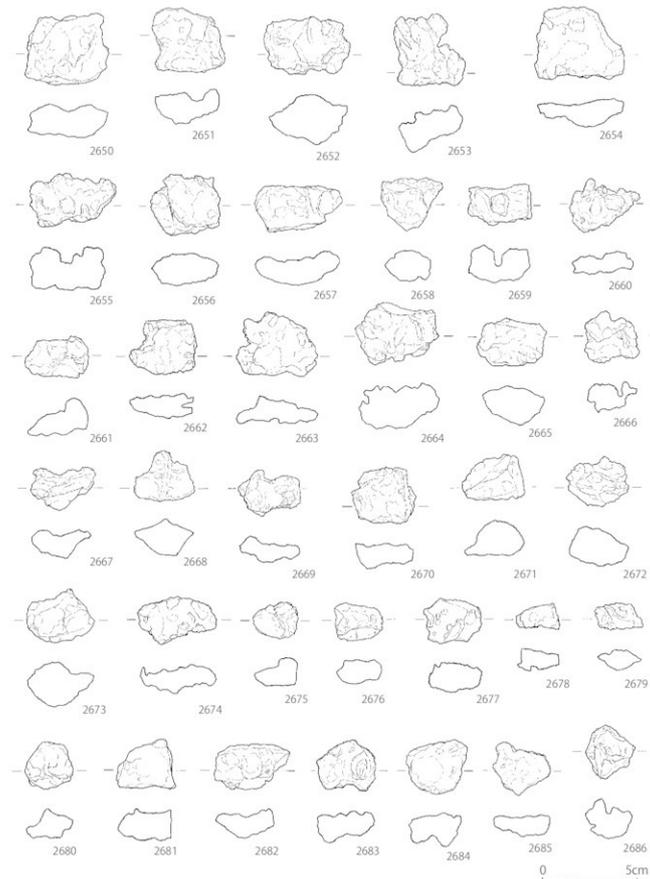


第 198 図 包含層出土鉄滓実測図① (S=1/2)



第 199 図 包含層出土鉄滓実測図② (S=1/2)

器B類の土師器柄である1852と近接して出土している(第166図)。しかし、掘り込みがみつかっておらず、確実に遺構内共伴といえるような出土状況ではなかったため、包含層出土資料として個別に報告する。残存長18.9cm、刃部の最大幅は1.3cm程を測る。大分錆蝕れており、形態は推定している範囲が多いが、断面図を取った



第200図 包含層出土鉄滓実測図③ (S=1/2)

部分3箇所で折損しており、そこで断面形態の確認と刃部等の幅を観察した。間は緩やかなナゲ間と推測される。2515は刃部のみが遺存する。切先は欠損する。残存長9.6cm、刃部幅1.8cmを測る。2516も同様の刀子と考えられ、丁度間部分が遺存する資料である。間は刃部側であり、やはり緩やかに湾曲するナゲ間である。2517は刃部がやや縮身である。やはり間周辺の資料で、間部付近の刃部幅は1cm程で、切先に向けて細くなる。2518は接合はしないが同一個体と考えられる資料である。間部が刃部側と背部側にみられる。2519・2521・2522・2524も間部付近と考えられるものであるが、いずれも間部は刃部側にあり、ゆるやかに湾曲する形態を呈すものと推測される。2520・2523・2525～2527は刃部のみである。切先を折損しているものが大部分であるため、ここでは刀子として報告しているが、本来は鉤等の別器種である可能性も考えられる。

2528・2529は両端を折り曲げる手鎌である。2528は刃部先端が折損するため、基部が折り曲げられているものと考えられる。2529は刃部先端が折り曲げられている。2530は三角形である。刃部先端は折損する。2531も鉄鏃であろうか、外側に刃部が付く。2532は不明鉄製品。火鉢状の形態を有し、中央でコの字に折れる。両先端部には2箇所ずつ突起が付く。傾斜をしらないが、古代相当の包含層であるVI層より出土しているため、不明鉄製品として報告する。

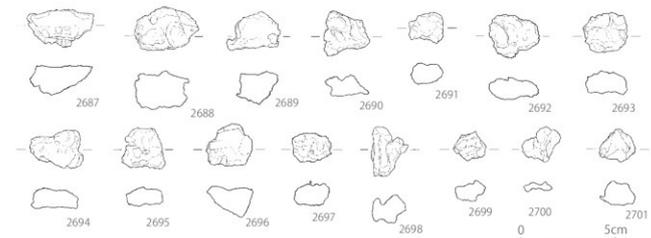
2533～2535は不明鉄片である。これらも錆蝕れがあるため、孔の有無は不明である。現況では隅丸長方形を呈す。2536も不明鉄製品である。薄い筒状を呈す。中央は空洞である。2537は鉄製鈴鐘車。径4.6cm程で、孔には折損した軸棒がわずかに残る。2538は正確には鉄製品ではなく、土壌の鉄分が植物の根の周囲に付着し、固化した所謂高師小僧であるものと考えられる。男根状の形態を呈す。偶然的な産物である可能性も考えられる。

2539～2571は鉄釘と考えられる資料である。2539～2545は頭部が残存する資料である。断面形態はほぼ正方形のものから横長長方形を呈すものまでである。完形はない。2544～2552のような頭部を欠いているが先端部に向かい先細りになっている資料については、やはり釘である可能性が高いと考える。それ以外の頭部も先端部も欠損し断面形態が横長長方形を呈すものについては、鉄鏃など他の器種である可能性も考えられる。

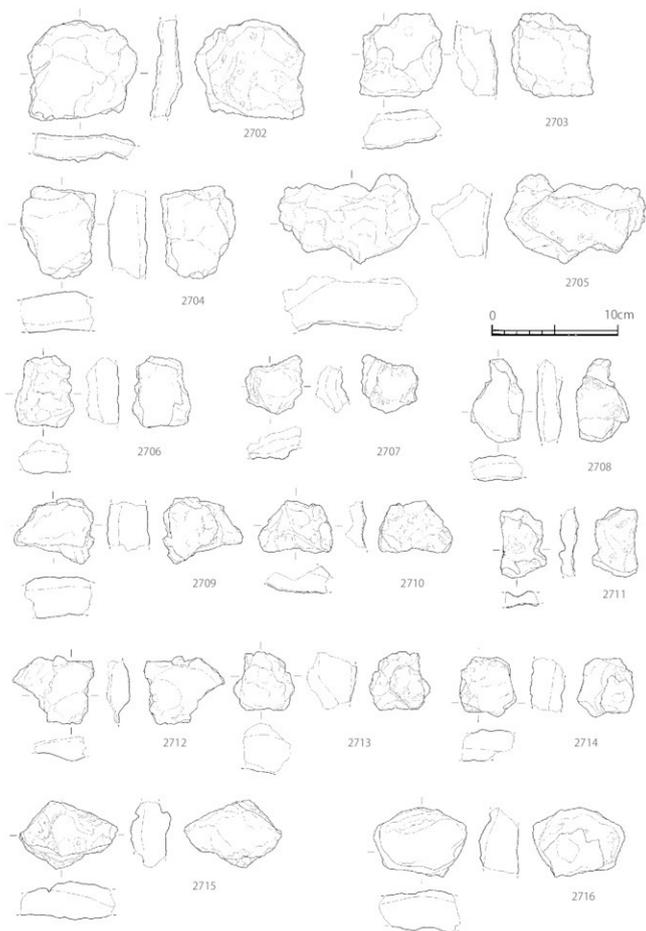
2572・2573は鉄滓の中に鉄釘と思われるものが取り込まれて同化している資料である。2574～2584は用途・器種不明の棒状鉄製品である。2574・2576は断面正方形、2575・2577・2578は断面横長長方形を呈す。2579～2584については、断面がほぼ円形のもの、何本も組み合わさるような状態で固着している。これが本来的に棒状に成形した鉄を固着させたのか、錆蝕れのためかは判然としない。

B 銅製品 (第195図)
2585は用途不明の銅製品である。約5cm程が遺存しており、やや筒状に丸みをおびる可能性もある。内面についてガジリからは地金が露出している。重さ29gを計る。2586は銅銭である。錆と腐食が著しく、欠損する部分も多いことから、元と實の二文字のみ判読可能である。D9区から出土している。

C 輪羽口 (第196・197図)
2587～2603は輪羽口である。2587は先端が先細りし、表面に融着物が付着する。断面形態は楕円形を呈す。通風孔の径は2.5cm程で、最先端部は外径と通風孔の大きさがほぼ変わらず、器壁がかなり薄くなる。縦に切った断面形態をみると、通風孔の断面は直線的でなく、やや湾曲・蛇行しているのが分かる。2588～2603は輪羽口の断面図。断面形態は楕円形を呈す。通風孔の径は2.5cm程で、最先端部は外径と通風孔の大きさがほぼ変わらず、器壁がかなり薄くなる。縦に切った断面形態をみると、通風孔の断面は直線的でなく、やや湾曲・蛇行しているのが分かる。



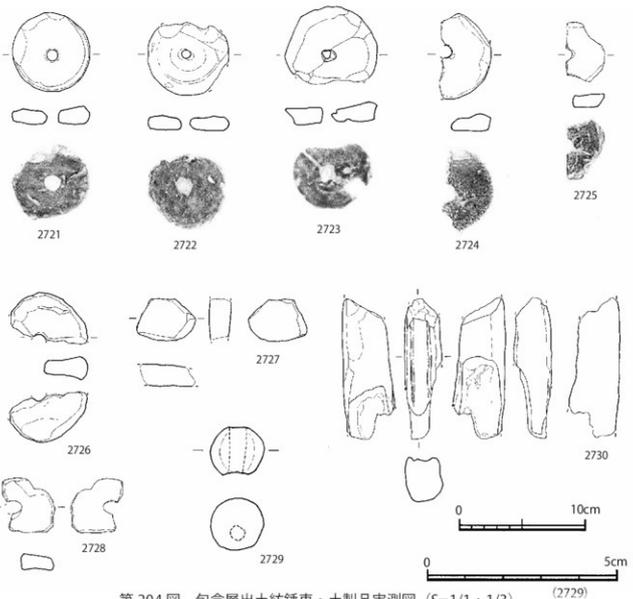
第201図 包含層出土鉄滓実測図④ (S=1/2)



第 202 図 包含層出土粘土塊実測図① (S=1/3)



第 203 図 包含層出土粘土塊実測図② (S=1/3)



第 204 図 包含層出土紡錘車・土製品実測図 (S=1/1・1/3)

2588～2591・2594・2597・2598・2601も輪羽口の先端部である。やはり最先端が先細りし、表面には融溶物が付着する。2588は先端にガラス質の融溶物が付着する。先端部から徐々にグラデーションで胎土が硬化しているのが分かる。2591には一部濃い青色を呈すスラグが付着する。通風孔の径が確実に分かる資料はほとんどない。2603も胎土の硬化具合から先端部に近い資料と推測される。2603の外面には溝状の窪みが認められる。

D 鉄滓 (第198～201図)

2604～2701は鉄滓である。包含層からだけでも150点程の鉄滓が出土した。大きさ重量に関しては、大小様々な資料が出土している。今回はこれらの資料について金属学的な分析は実施できていないため、一括して鉄滓として報告する。

2604～2606は比較的大型の鉄滓である。2605は重量100gを、2604と2606は200gを超える。全体的な傾

向としては50g以下のものが9割を超え、半数近くは20g以下となる。

これらの鉄滓の出土地点をみると、掲載遺物97点中36点は調査区中央の15区で出土している。その内30点はC15区での出土である。これは鍛冶炉の痕跡であると考えたSK3が存在することと強く関連するものだろう。SK3の周辺では鉄滓だけではなく、炉壁など鍛冶関連の遺物が多く出土しており、周辺で鍛冶が行われていた可能性は極めて高いといえる。

E 炉壁・粘土塊 (第202・203図)

2702～2717は炉壁の一部と考えられる資料である。素材は粘土であり、粘土塊ともいえるものの表面が硬化し、中には2702・2703・2705のようにガラス質融溶物が付着するものがある。厚みは2711のような薄いものでは1.3cm、2705のような資料では、残存部分の厚みだけでなく4.5cm程を測る。各資料の硬化具合をみると、被熱部から外側に向かって徐々に硬化していくことが分かる。2715や2717などは最も外側まで硬化し須恵器のような質感を呈する。出土地点は掲載した16点中11点はC15区からの出土で、その他も13～16区と比較的近い位置から出土している。やはりこの周辺で鍛冶が行われていた可能性が高いことを示す資料と理解できる。

2718～2720は胎土にスサが多く含まれた粘土塊である。やはり被熱のためか硬化(須恵質化)しているが、融溶物の付着は認められない。また、出土地点も全てB3区と上述の炉壁の可能性が高いと考えた粘土塊とは異なっており、ここでは粘土塊として報告する。

⑤土製品・土鍾 (第204～206図)

A 紡錘車・土製品 (第204図)

2721～2726は土師器を転用した紡錘車である。いずれも土師器の円盤高台坪を打ち欠いて紡錘車に転用している。

2727は用途不明の土製品。残存する範囲に関しては、土師器の転用品のように、アールが付いておらず扁平である。欠損する部分が多いため断定はできないが、転用品ではなく、元々土製品として製作された可能性がある。

2728は土師器の転用品ではなく、焼成前に穿孔されているようである。用途は不明である。

2729は数珠球であろうか。径1.4cm程の楕円形を呈す土師の玉に穿孔が施される。

2730も用途不明の土製品である。断面は隅丸形状を呈し、一面には2本の沈線が施される。色調・胎土は土師器類や甎に類似する。土師器の脚部のようにみえるが、全体的な器形が不明であるため、不明土製品として報告する。

B 土鍾 (第205・206図)

2731～2847は土鍾である。形態・法量共に様々である。法量的には、長さ5cm前後で幅が2～3cmのもの、長さ3～4cmで幅が2cm前後のもの、長さは3～4cmで幅1.5cm前後のものなどに大きく分けられる。どこかしら欠損している資料が多く、本来の重量は現状より多くなるであろう資料が大部分を占める。現況で完形である資料の平均重量は10g程を計る。最も重いもので28g、最小で4gとなる。形態をみると、2731・2734などのように両端が平坦となり、中央部が膨らむもの、2747～2754のように長さが短く、中央が力こぶ状に膨らむもの、2766や2774のように細長いものなどヴァリエティー豊かである。包含層出土資料の掲載遺物117点中6割以上が調査区西端3～6区で出土している。調査区中央の10～17区ではほとんど出土していない。

⑥石器・石製品 (第207・208図)

A 滑石製石鐮・滑石製品 (第207図)

本遺跡からの滑石製石鐮および滑石製品の出土は多くない。2848～2852は石鐮と考えられる資料である。2848の内面には沈線状の削痕が残る。また、1箇所に穿孔がみられる。2849～2852は石鐮の口縁部片である。遺存している範囲では把手はみられない。

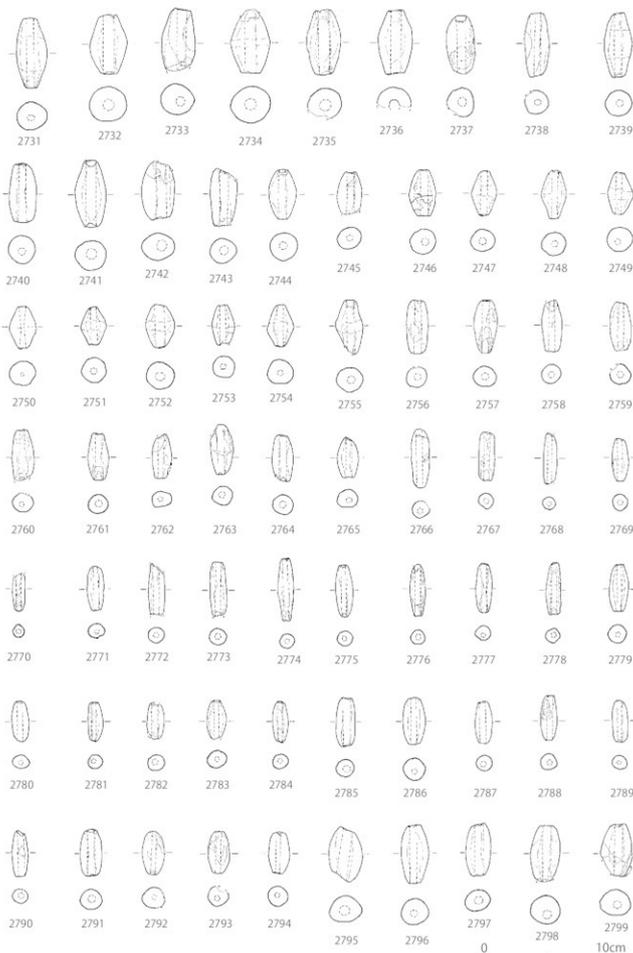
2853は滑石製品で、本来は四角形を呈すものと推測される。中央部には穿孔が施されるが、径の約半分は欠損する。石鐮の転用品であろうか。用途は不明である。

2854は板状の滑石製品である。両側縁が砥石のように磨き込まれ、平滑になる。上面も平坦であるが側縁のような平滑はない。裏面は破断面となる。これも用途不明である。

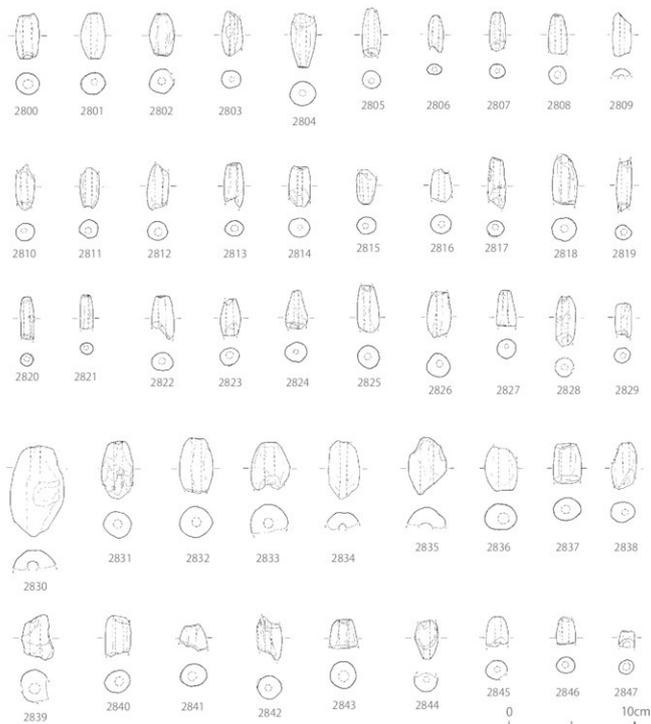
B 石器 (第207・208図)

2855～2866は砥石である。2855は天草陶石製で、上部の破断面以外は全て砥面となる。下端には円形の窪みが2段にわたってみられる。穿孔の際に使用した痕跡の可能性はある。2856は砂岩製の砥石。厚さ0.8cmとかなり薄い。手持ちの砥石であろうか。2857は乳棒状の砥石である。天草陶石製。全ての面で研磨痕がみられる。2858・2859は断面四角形の棒状を呈す砂岩製の砥石である。2858は上面と側縁に研磨痕が残る。上面には鉄が付着している。2859は表裏2面に磨面が認められる。

2860～2864・2866は台石状の砥石と考えられる。2860は上面と左側面に磨面がみられる。左側面の方がよく使い込まれ、平滑になる。2861も同様の砥石である。表裏2面に砥面がみられる。砂岩製。2862も砂岩製の砥石で、表裏2面に砥面が残る。大部分は欠損する。表面の方がよく使い込まれており、裏面には鉄分が付着する。



第205図 包含層出土土鍾実測図① (S=1/3)



第206図 包含層出土土錘実測図② (S=1/3)

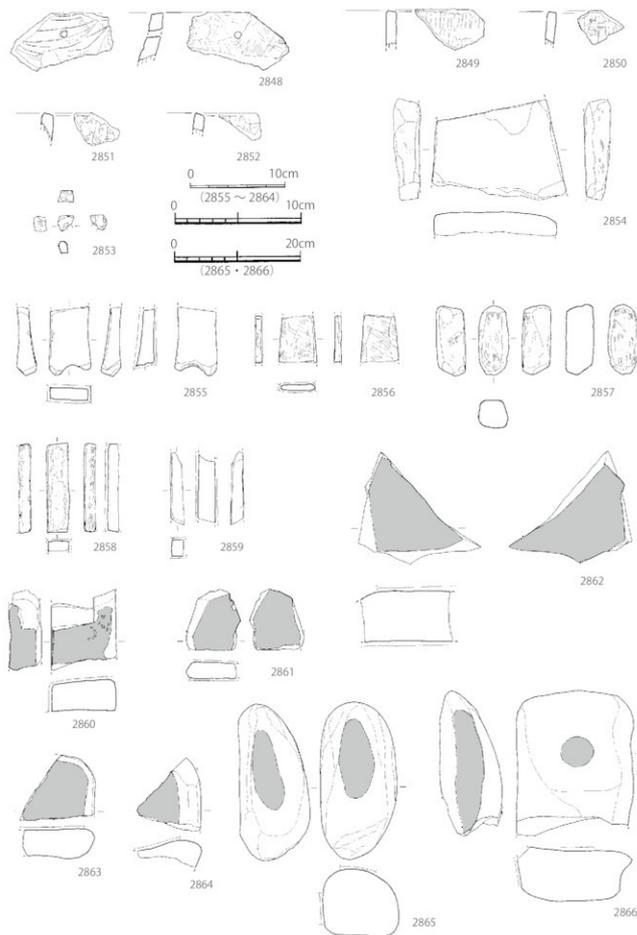
2863・2864も砂岩製の砥石と考えられるが、砥面に石皿状に窪む。いずれも砂岩製である。2865は大型の礫を利用しており、上面と左側面に磨痕が認められる。重量5.1kgを計る。2866も大型砂岩製の砥石である。若干石皿状に窪む上面中央と、左側面に磨痕がみられる。

2867～2872は基石状石製品である。いずれも両面が研磨され光沢を有す。2867・2872はチャート製で暗い灰色を呈し、2868は蛇紋岩製で灰白・黒色を呈する。2871も蛇紋岩製で浅緑白色と白色がマーブル状に混ざる。2869と2870は石英製で黄色味の強い白色を呈している。

2873は凝灰岩製の石錘と考えられる。両端に穿孔の痕跡があるものの、貫通はしない。重量は88gを計る。2874は石製紡錘車である。砂岩製で表裏面および側面を丁寧に研磨している。中央には軸棒を通すための穿孔がなされている。約半分が欠損するが、径7cm程であると推測される。

2875は軽石製品である。縦長楕円形の軽石の側縁から切り込みを入れて、中央部がくびれる形態を呈する。上半には円形の窪みもみられる。浮子であろうか。

2876は良質な水晶を素材とした玉状の製品である。約



第207図 包含層出土滑石製品・石器実測図 (S=1/3・1/4・1/6)

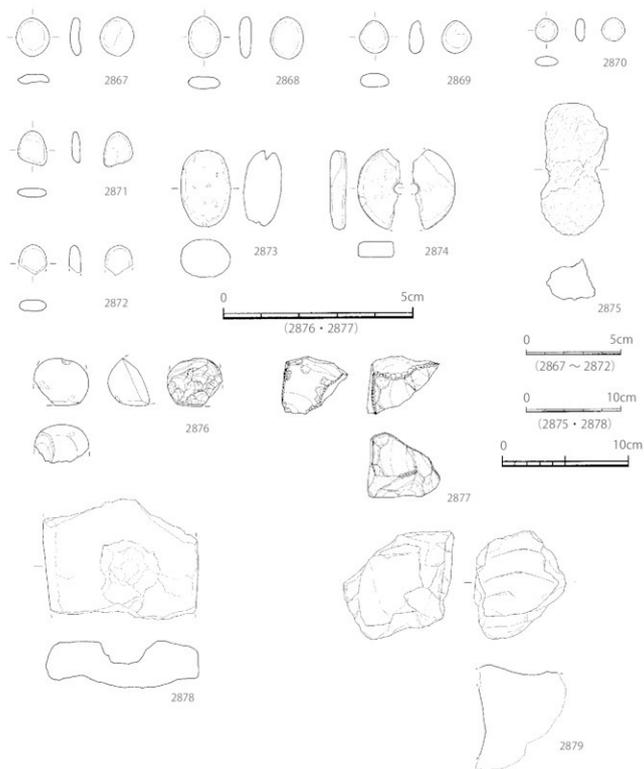
半分が欠損するが、穿孔の痕跡はみられず、少なくとも穿孔の際の破損ではない。表面には整形の際の敲打痕が残り、破断面には破損後の微細剥離も認められる。底面が緩やかに丸みをおびることから、台座のようなものに設置していた可能性も考えられる。

2877はチャート製の火打ち石。上面には節理面を残す。両端は稜を作り出し機能部としている。稜には使用に伴

うつぶれが認められる。

2878は花崗岩製の凹み石である。全体的に淡い橙色を呈すが、側面や裏面には被熱のためか茶褐色や黒色を呈す範囲もみられる。

2879は粘土塊としているが、凝灰岩の可能性もある。上面には工具痕が残り、左側面には研磨の痕がみられる。用途不明の加工品といえる。



第 208 図 包含層出土石器・石製品実測図 (S=1/1・1/2・1/3・1/4)

第 4 節 その他の時代の遺物

真米田遺跡においては、遺構については平安時代～中世以外の時期のものは皆無であり、遺物についてもこれ以外の時代に属すると考えられる資料は極少量が出土しているのみである。ここでは、平安時代～中世以外の時代の遺物を一括して報告する。

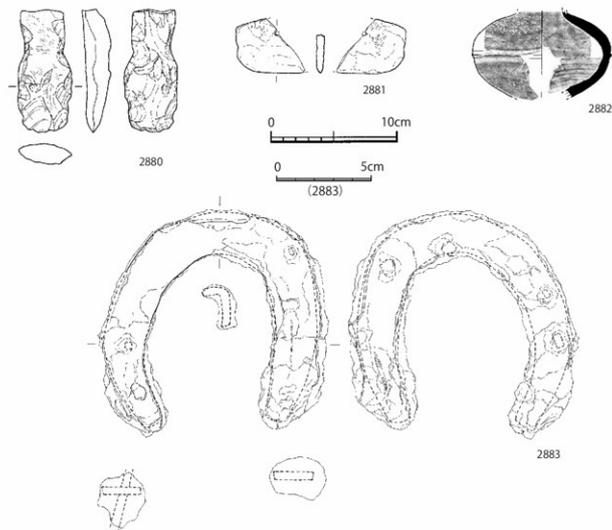
2880はホルンフェルス製の打製石斧である。基部が若干抉れる態形を呈す。表面の基部から刃部にかけて磨かれて

残る。圃文時代に属する遺物であろう。

2881はホルンフェルス製の磨製石筥丁である。表裏面共に風化する。側面には浅い抉りが入る。弥生時代の所産である。

2882は古墳時代の須恵器である。孔部は認められないがハソウであろうか。体部中央には一条の突帯が巡り、その上位には櫛描波状文がみられる。

2883は締鉄である。表土層からの出土であり、近現代の所産と考えられる。鉄釘状の痕も遺存している。



第 209 図 その他の時代の遺物実測図 (S=1/2・1/3)

第4章 真来田遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 真来田遺跡における放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射状崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2. 試料と方法

次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。

| 試料No. | 採取箇所 | 種類 | 前処理・調整法 | 測定法 |
|-------|---------------|-----|------------------|-----|
| No.1 | G18区、VI層落ち込み | 炭化材 | 超音波洗浄、酸-7x31-酸処理 | AMS |
| No.2 | SB 7、P3、中層 | 炭化材 | 超音波洗浄、酸-7x31-酸処理 | AMS |
| No.3 | SB 8、P2、上層 | 炭化材 | 超音波洗浄、酸-7x31-酸処理 | AMS |
| No.4 | SC 8、床面 | 炭化材 | 超音波洗浄、酸-7x31-酸処理 | AMS |
| No.5 | SC 4、下層(床面近く) | 炭化材 | 超音波洗浄、酸-7x31-酸処理 | AMS |

AMS：加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。第1表にこれらの結果を示し、第210図に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を用いた。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2%確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率率により 1σ (68.2%確率) と 2σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1の炭化材では1095 ± 20年 BP (2 σ の暦年代で AD 890 ~ 995年)、No.2の炭化材では1300 ± 20年 BP (AD 660 ~ 780年)、No.3の炭化材では1095 ± 20年 BP (AD 890 ~ 1000年)、No.4の炭化材では1220 ± 20年 BP (AD 710 ~ 750, 760 ~ 890年)、No.5の炭化材では1155 ± 20年 BP (AD 780 ~ 970年) の年代値が得られた。

文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p. 425-430.

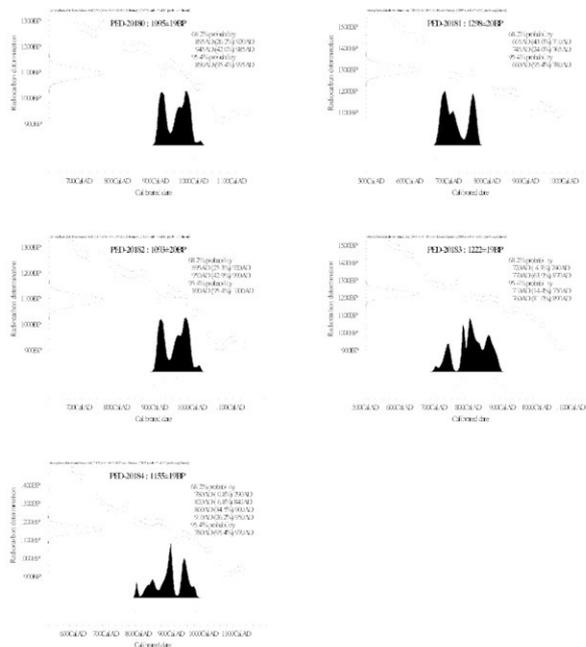
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p. 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, p. 1111-1150.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の14C年代, p. 3-20.

第1表 放射性炭素年代測定結果

| 試料No. | 測定番号 PED- | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | 暦年較正用 年代(年BP) | ^{14}C 年代 (年BP) | 暦年代 (較正年代) : cal- | |
|-------|--------------|------------------------------|------------------|-----------------------------|--|--|
| | | | | | 1 σ (68.2%確率) | 2 σ (95.4%確率) |
| 1 | 20180 | -27.18 ± 0.11 | 1095 ± 19 | 1095 ± 20 | AD895-920 (26.2%) AD945-985 (42.0%) | AD890-995 (95.4%) |
| 2 | 20181 | -25.28 ± 0.12 | 1298 ± 20 | 1300 ± 20 | AD665-710 (43.6%) AD745-765 (24.6%) | AD660-780 (95.4%) |
| 3 | 20182 | -25.90 ± 0.12 | 1093 ± 20 | 1095 ± 20 | AD895-920 (25.3%) AD950-990 (42.9%) | AD890-1000 (95.4%) |
| 4 | 20183 | -24.75 ± 0.13 | 1222 ± 19 | 1220 ± 20 | AD720-740 (4.3%) AD770-870 (63.9%) | AD710-750 (14.4%) AD760-890 (81.0%) |
| 5 | 20184 | -28.75 ± 0.12 | 1155 ± 19 | 1155 ± 20 | AD780-790 (0.8%) AD820-840 (6.8%) AD860-900 (34.5%) AD910-950 (26.2%) | AD780-970 (95.4%) |



第 210 図 暦年較正結果

第 2 節 真米田遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO₂) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、D14 区の V 層～VII 層から採取された 5 点および H19 区の V 層～VII 層から採取された 5 点の計 10 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105℃ で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気灰化法 (550℃・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパレート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機能細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパレート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機能細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 2 表および第 211 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類 (頭の表皮細胞)、ヨシ属、キビ族型、ヌスギ風型 (おもにヌスギ風)、ウシクサ族 A (チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、クスノキ科、マンサク科 (イヌノキ属)、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検出

稲作跡 (水田跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体 (プラント・オパール) が試料 1g あたり 5,000

個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) D14区

V層（試料1）からVII層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、V層（試料1）では密度が13,800個/gとかなり高い値であり、VI層（試料3）、VIb層（試料4）、VII層（試料5）でも3,200～4,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) H19区

V層（試料1）からVII層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、V層（試料1）とV'層（試料2）では密度が5,600個/gおよび5,000個/gと高い値であり、VIb層（試料4）でも4,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

VII層（試料5）では、密度が600個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の同定

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒメ属型（ヒメが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は、D14区のV層（試料1）から検出された。密度は700個/gと低い値であるが、穎（幼穀）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には検出が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題とした。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、VIb層より上位層を中心にネザサ属型が比較的多く検出され、ヨシ属、ウシクサ族A、メダケ属型、および樹木（照葉樹）のマンサク科（イヌノキ属）なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ属型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、古代とされるVIb層からV層にかけては、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、D14区のV層では、ムギ類が栽培されていた可能性も認められる。各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、古代とされるVIb層からV層にかけては、各地点ともイネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、D14区のV層では、ムギ類が栽培されていた可能性も認められた。各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-, 考古学と自然科学, 19, p.69-84.
 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史, 第四紀研究, 38(2), p.109-123.
 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）, 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）-プラント・オパール分析による水田跡の探索-, 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第2表 真米田遺跡における植物珪酸体分析結果

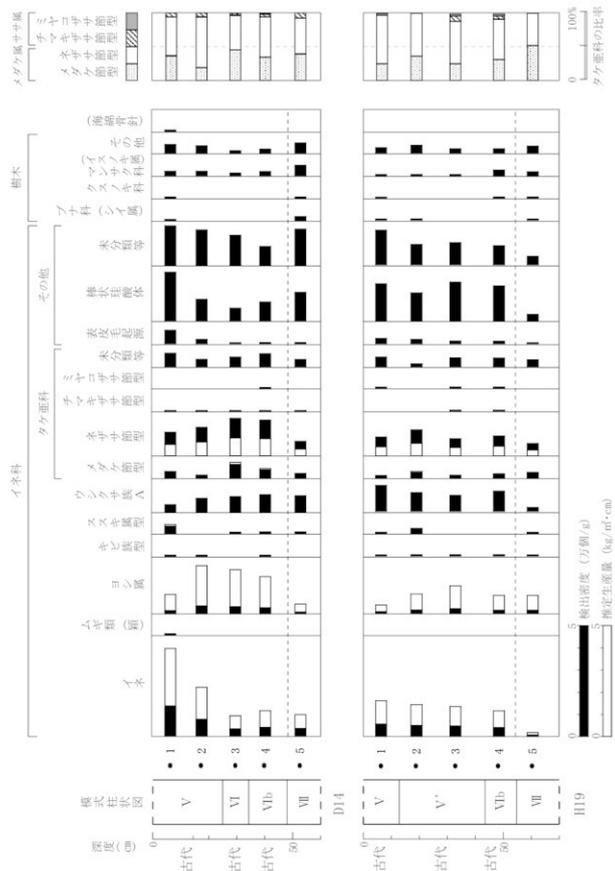
| 検出密度 (単位: ×100個/g) | 学名 | D14区 | | | | | H19区 | | | | | | | |
|--------------------|--|---|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|--|--|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | | | |
| イネ科 | Gramineae | | | | | | | | | | | | | |
| | <i>Oryza sativa</i> | 138 | 77 | 32 | 40 | 34 | 56 | 50 | 47 | 40 | 6 | | | |
| | ムギ類(穎の表皮細胞) | 7 | | | | | | | | | | | | |
| | <i>Hordeum-Triticum</i> (husk Phytolith) | | | | | | | | | | | | | |
| | ヨシ属 | 14 | 35 | 32 | 27 | 7 | 6 | 14 | 20 | 13 | 13 | | | |
| | <i>Phragmites</i> | | | | | | | | | | | | | |
| | キスミ属型 | 7 | 7 | | 7 | | 6 | 7 | 7 | 7 | 6 | | | |
| ススキ属型 | <i>Miscanthus</i> type | 34 | | 6 | 7 | 7 | 6 | 21 | 6 | | 6 | | | |
| | <i>Miscanthus</i> type | | | | | | | | | | | | | |
| ウシクサ族A | <i>Andropogoneae A</i> type | 34 | 63 | 71 | 80 | 75 | 119 | 86 | 74 | 93 | 19 | | | |
| タケ亜科 | Bambusoideae | | | | | | | | | | | | | |
| | メダケ属型 | <i>Phitoblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i> | 28 | 14 | 65 | 40 | 20 | 13 | 29 | 14 | 20 | 26 | | |
| | ネザサ属型 | <i>Phitoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> | 110 | 133 | 174 | 166 | 68 | 88 | 121 | 81 | 93 | 58 | | |
| | ナマキザサ属型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc. | 7 | 6 | 7 | 7 | 7 | | | | | 7 | | |
| | ミヤコザサ属型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i> | | | | 7 | | 6 | | 7 | 7 | | | |
| | 未分類等 | Others | 62 | 35 | 45 | 60 | 34 | 44 | 14 | 41 | 40 | 32 | | |
| | その他のイネ科 | Others | | | | | | | | | | | | |
| | 表皮毛起源 | Husk hair origin | 62 | 21 | 6 | 7 | 7 | 25 | 21 | 14 | 13 | 6 | | |
| | 棒状起源 | Rod-shaped | 220 | 98 | 58 | 86 | 130 | 169 | 128 | 176 | 160 | 32 | | |
| | 未分類等 | Others | 179 | 161 | 136 | 86 | 164 | 157 | 93 | 101 | 87 | 39 | | |
| 樹木起源 | Arboreal | | | | | | | | | | | | | |
| | ブナ科(シイ属) | <i>Castanopsis</i> | 7 | | | | 20 | 6 | 7 | | 6 | | | |
| | クスノキ科 | <i>Laurocaceae</i> | 7 | | | | 7 | 4 | | 7 | 4 | | | |
| | マンサク科(イヌノキ属) | <i>Ostrya</i> | 21 | 21 | 13 | 20 | 48 | 25 | 21 | 34 | 27 | 19 | | |
| | その他 | Others | 41 | 35 | 13 | 20 | 48 | 25 | 36 | 20 | 20 | 32 | | |
| | (南産育射) | <i>Sponge spicules</i> | 7 | | | | | | | | | | | |
| | 植物珪酸体総数 | Total | 977 | 708 | 659 | 657 | 676 | 759 | 649 | 641 | 633 | 312 | | |

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

| | | | | | | | | | | |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| イネ | 4.05 | 2.27 | 0.95 | 1.17 | 1.00 | 1.66 | 1.47 | 1.39 | 1.17 | 0.19 |
| ヨシ属 | 0.87 | 2.21 | 2.04 | 1.68 | 0.43 | 0.40 | 0.90 | 1.28 | 0.84 | 0.82 |
| ススキ属型 | 0.43 | | 0.08 | 0.08 | 0.08 | 0.08 | 0.27 | | | 0.08 |
| メダケ属型 | 0.32 | 0.16 | 0.75 | 0.46 | 0.24 | 0.15 | 0.33 | 0.16 | 0.23 | 0.30 |
| ネザサ属型 | 0.53 | 0.64 | 0.84 | 0.80 | 0.33 | 0.42 | 0.58 | 0.39 | 0.45 | 0.28 |
| ナマキザサ属型 | 0.05 | 0.05 | 0.05 | 0.05 | 0.05 | | | | 0.05 | 0.05 |
| ミヤコザサ属型 | | | | | | 0.02 | | 0.02 | | 0.02 |

タケ亜科の比率 (%)

| | | | | | | | | | | | |
|---------|---|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|-----|
| メダケ属型 | <i>Phitoblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i> | 36 | 19 | 46 | 35 | 39 | 25 | 36 | 25 | 31 | 52 |
| ネザサ属型 | <i>Phitoblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> | 59 | 75 | 51 | 60 | 53 | 72 | 64 | 63 | 60 | 48 |
| ナマキザサ属型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc. | 6 | 6 | 3 | 4 | 8 | | | | 8 | 7 |
| ミヤコザサ属型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i> | | | | 1 | | | 3 | | 3 | 3 |
| メダケ率 | Medaka ratio | 94 | 94 | 97 | 95 | 92 | 97 | 100 | 88 | 91 | 100 |



第 211 図 真米田遺跡における植物珪酸体分析結果

真米田遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



第3節 真米田遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、D14区のV層、VI層、VI b層から採取された3点およびH19区のV層、V'層、VI b層から採取された3点の計6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加えて15 分間煮沸
- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で糞などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1 のエドマン氏液を加え1 分間煮沸）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉8、シダ植物胞子2形態の計17 である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を第3 表に示し、花粉数が100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、タンポポ科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単葉溝胞子、三葉溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) D14 区

V層（試料1）では、花粉密度が低く、草本花粉が86.0%を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科、チドメグサ亜科が優勢で、キク亜科、タンポポ亜科、セリ亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に認められた。VI層（試料2）とVI b層（試料4）では、花粉がほとんど検出されなかった。

2) H19 区

V層（試料1）では、花粉密度が低く、草本花粉の占め割合が44.5%、樹木・草本花粉が47.5%となっている。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属が優勢で、タンポポ亜科、チドメグサ亜科、キク亜科などが伴われる。樹木・草本花粉ではマメ科が卓越しており、ここで検出されたものはゲンク属-ミヤコグサ属に類似する小型の草本が大半である。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属などが低率に認められた。V'層（試料3）とVI b層（試料4）では、花粉が検出されなかった。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

(1) D14 区

V層では、花粉密度が低いことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、ヨモギ属、イネ科、チドメグサ亜科をはじめキク亜科、タンポポ亜科、セリ亜科なども生育する草本類を主体とした植生であったと考えられ、日当たりの良い人里の環境が示唆される。森林植生としては、周辺地域に落葉広葉樹のナラ類（コナラ属コナラ亜属）や照葉樹のカシ類（コナラ属アカガシ亜属）などが分布していたと考えられる。花粉分析では、植物珪酸体分析で比較的多く検出されたイネ（イネ属型）が認められないが、これは花粉密度が低いためと考えられる。

VI層とVI b層では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、1) 乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2) 土層の堆積速度が速かったこと、3) 水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが想定される。ここでは土層の堆積状況などから、1) の要因が大きいと考えられる。

(2) H19 区

V層では、花粉密度が低いことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、マメ科（ゲンク属など）、イネ科、ヨモギ属をはじめタンポポ亜科、チドメグサ亜科、キク亜科なども生育する草本類を主体とした植生であったと考えられ、日当たりの良い人里の環境が示唆される。V'層とVI b層では、花粉が検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

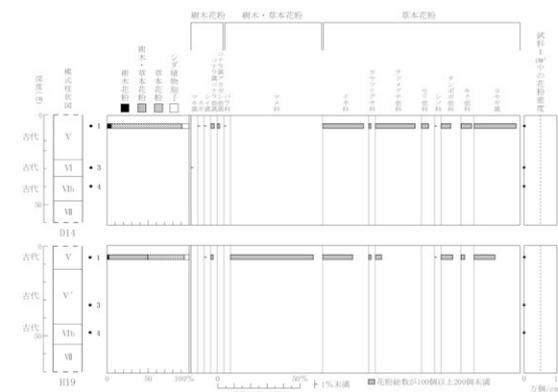
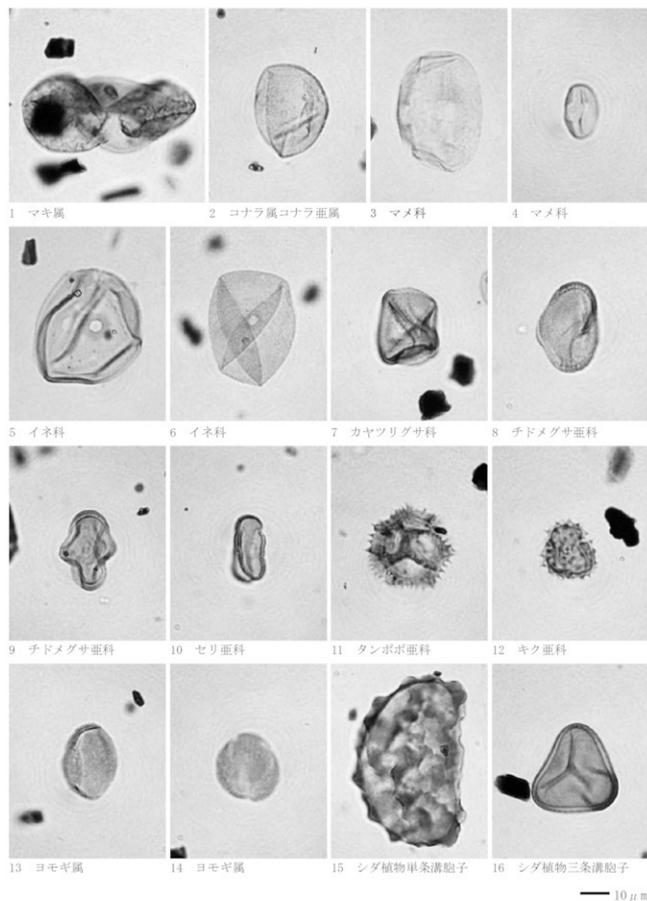
文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。
島倉己三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p。
中村純（1967）花粉分析。古今書院。p.82-110。
中村純（1980）日本産花粉の標本。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p。

第3表 真米田遺跡における花粉分析結果

| 学名 | 分類群 | 和名 | D14区 | | | H19区 | | |
|---|---------------------------|-----------|------|------|------|------|-----|-----|
| | | | 1 | 3 | 4 | 1 | 3 | 4 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | | | | | | | |
| <i>Podocarpus</i> | | マキ属 | | 1 | | | | |
| <i>Cryptomeria japonica</i> | | スギ | 1 | | | | | |
| <i>Castanopsis</i> | | シイ属 | 1 | | | 1 | | |
| <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> | | コナラ属コナラ亜属 | 3 | | | 2 | | |
| <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> | | コナラ属ワカシ亜属 | 2 | | | | | |
| Arboreal・Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | | | | | | |
| Rosaceae | | バラ科 | 1 | | | | | |
| Leguminosae | | マメ科 | | | | 63 | | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | | | | | | | |
| Gramineae | | イネ科 | 34 | | | 23 | | |
| Cyperaceae | | カヤツリグサ科 | | | | 2 | | |
| Hydrocotyloideae | | チドメグサ亜科 | 33 | | | 5 | | |
| Apioidae | | セリ亜科 | 6 | | | | | |
| Labiatae | | シソ科 | 1 | | | 1 | | |
| Lactucoidae | | タンポポグ亜科 | 8 | | | 9 | | |
| Asteroidae | | キク亜科 | 9 | | | 3 | | |
| <i>Artemisia</i> | | ヨモギ属 | 35 | | | 16 | | |
| Fern spore | | シダ植物胞子 | | | | | | |
| Monolate type spore | | 単条溝胞子 | 9 | 2 | | 5 | | |
| Trilate type spore | | 三条溝胞子 | 4 | | | 3 | | |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | | 7 | 1 | | 3 | | |
| Arboreal・Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | 1 | | | 63 | | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | | 128 | | | 59 | | |
| Total pollen | 花粉総数 | | 136 | 1 | | 125 | | |
| Pollen frequencies of 1cm ² | 試料1cm ² 中の花粉密度 | | 8.2 | 1.2 | | 7.9 | | |
| Unknown pollen | 未同定花粉 | | 1 | 1 | | 7 | | |
| Fern spore | シダ植物胞子 | | 13 | 2 | | 8 | | |
| Helminth eggs | 寄生虫卵 | | (-) | (-) | (-) | (-) | (-) | (-) |
| Stone cell | 石細胞 | | (-) | (-) | (-) | (-) | (-) | (-) |
| Digestion remains | 明らかな消化残渣 | | (-) | (-) | (-) | (-) | (-) | (-) |
| Charcoal fragments | 微細炭化物 | | (±) | (++) | (++) | (+) | (+) | (+) |

真米田遺跡の花粉・胞子



第212図 真米田遺跡における花粉ダイアグラム

第4節 真米田遺跡における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 試料

分析試料は、H19区のV層、V'層、VIb層から採取された計3点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

(1) 分類群

分析結果を第4表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを第213図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性についてはLowe (1974) や渡辺 (2005)、陸生珪藻については小杉 (1986)、環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉 (1988)、淡水生種については安藤 (1990) の記載を参照した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[貧塩性種]

Amphora copulata, *Cymbella amphioxys*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella* spp., *Cymbella tunida*, *Cymbella turgidula*, *Eunotia minor*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula cuspidata*, *Navicula elginensis*, *Navicula laevisissima*, *Navicula mutica*, *Navicula placenta* v. *obtusata*, *Neidium ampliatum*, *Nitzschia clausii*, *Pinnularia aescrophaeria*, *Pinnularia aestuarii*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia divergens*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia interrupta*, *Pinnularia microstaurum*, *Pinnularia obscura*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia viridis*, *Rhopalodia gibberula*, *Stauroneis anceps*

(2) 珪藻群集の特徴

下位のVIb層（試料4）では珪藻密度が比較的低く、貧塩性種（淡水生種）で流水不定性種の占める割合が42.0%、陸生珪藻が38.0%、真・好止水性種性が17.0%である。流水不定性種では*Cymbella silesiaca*、*Rhopalodia gibberula*、陸生珪藻では*Navicula mutica*、*Pinnularia schroederii*、*Hantzschia amphioxys*が比較的多く、沼沢湿地付着生種の*Pinnularia aescrophaeria*、*Pinnularia viridis*、好塩性の*Rhopalodia gibberula*なども認められた。V'層（試料3）では珪藻密度が低く、陸生珪藻の占める割合が63.5%に増加し、流水不定性種は21.5%に減少している。陸生珪藻では*Navicula mutica*が優占し、沼沢湿地付着生種の*Pinnularia aescrophaeria*、*Pinnularia viridis*はみられなくなっている。また、真・好流水性種性の*Cymbella turgidula*、

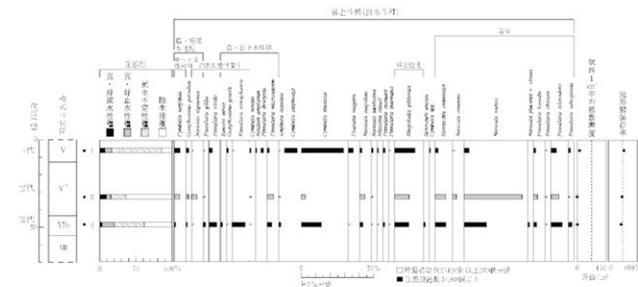
沼沢湿地付着生種でもある*Navicula elginensis*が低率に認められた。V層（試料1）では、流水不定性種の占める割合が69.0%に増加し、陸生珪藻は14.0%に減少している。流水不定性種では*Cymbella silesiaca*が優占し、*Rhopalodia gibberula*、*Cymbella amphioxys*などが伴われる。V'層で優占した陸生珪藻の*Navicula mutica*は大幅に減少している。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

古代とされるVIb層からV層にかけては、層位によって多少の変化はあるものの、流水の影響のある沼沢湿地、水草の生育する不安定な滞水域、湿潤な陸域など多様な環境が共存もしくは繰り返されていたと考えられ、水田域もしくはその周辺の環境が反映されていると推定される。また、各層準で本邦の河川における代表的種である*Cymbella turgidula*が認められることから、河川に付随する水域であったことが示唆される。さらに、各層準で好塩性の*Rhopalodia gibberula*が認められることから、水域の水循環が停滞した際に、蒸散によって塩分濃度が上がった可能性が想定される。

文献

- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of freshwater diatoms. National Environmental Research Center, 333p.
 安藤一男 (1990) 淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
 伊藤良水・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.
 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
 渡辺仁治 (2005) 群集解析に基づく汚濁指数DALPO, pH耐性種. 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴園, 666p.

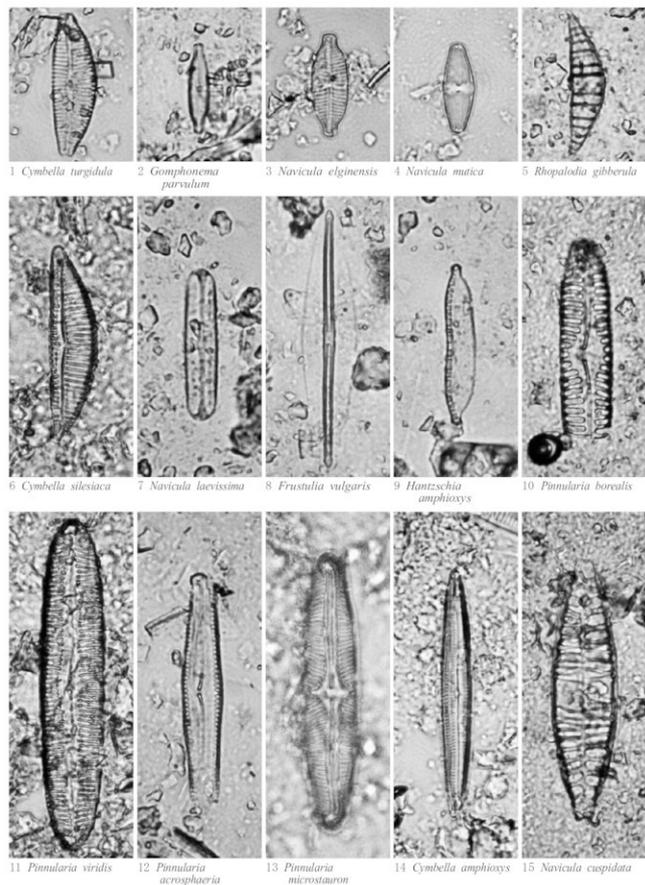


第213図 真米田遺跡 H19区における主要珪藻ダイアグラム

第4表 真米田遺跡における珪藻分析結果

| 分類群 | H19区 | | |
|---|---------------|---------------|---------------|
| | 1 | 3 | 4 |
| 着殖性種 (淡水生種) | | | |
| <i>Achnanthes brevipes</i> | | 1 | 1 |
| <i>Amphora copulata</i> | 1 | 1 | 5 |
| <i>Caloneis hyalina</i> | | | 1 |
| <i>Caloneis silicula</i> | 1 | | |
| <i>Cymbella amphioxys</i> | 34 | | |
| <i>Cymbella gracilis</i> | 2 | | |
| <i>Cymbella silesiaca</i> | 112 | 3 | 40 |
| <i>Cymbella</i> spp. | 4 | | |
| <i>Cymbella lamida</i> | 5 | 1 | 2 |
| <i>Cymbella turgidula</i> | 16 | 4 | 3 |
| <i>Diploneis elliptica</i> | 1 | 1 | |
| <i>Eaotia minor</i> | | | 4 |
| <i>Eaotia paludosa-rhomboida</i> | | 1 | |
| <i>Eaotia praerupta</i> | 2 | | 1 |
| <i>Fragilaria capucina</i> | | | 1 |
| <i>Frustulia vulgaris</i> | 14 | | 1 |
| <i>Gomphonema augur</i> | 1 | | |
| <i>Gomphonema gracile</i> | 5 | | 2 |
| <i>Gomphonema parvulum</i> | 7 | 2 | 3 |
| <i>Gomphonema sphacrophorum</i> | | | 1 |
| <i>Gomphonema</i> spp. | 1 | | 1 |
| <i>Hantzschia amphioxys</i> | 8 | 8 | 22 |
| <i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i> | | | 1 |
| <i>Navicula confervacea</i> | 1 | 1 | |
| <i>Navicula contenta</i> | 2 | 3 | |
| <i>Navicula cuspidata</i> | 6 | 4 | 7 |
| <i>Navicula elginensis</i> | 1 | 4 | 2 |
| <i>Navicula gallica</i> | 1 | | |
| <i>Navicula goeppertiana</i> | 2 | | |
| <i>Navicula kotschyi</i> | | | 2 |
| <i>Navicula laevissima</i> | 5 | 1 | 1 |
| <i>Navicula mutica</i> | 14 | 43 | 46 |
| <i>Navicula placenta</i> v. <i>obtusata</i> | | | 4 |
| <i>Navicula pupula</i> | 1 | | |
| <i>Neidium affine</i> | 2 | | |
| <i>Neidium ampliatum</i> | 5 | | |
| <i>Nitzschia clausii</i> | 4 | | 1 |
| <i>Nitzschia nana</i> | | 1 | |
| <i>Nitzschia palea</i> | 1 | | |
| <i>Pinnularia aculeolata</i> | 1 | | |
| <i>Pinnularia acrosphaeria</i> | 2 | | 27 |
| <i>Pinnularia aestuarii</i> | 6 | | 4 |
| <i>Pinnularia appendiculata</i> | 1 | 1 | |
| <i>Pinnularia borealis</i> | 6 | 3 | 7 |
| <i>Pinnularia leuani</i> | 2 | | 1 |
| <i>Pinnularia divergens</i> | 7 | | |
| <i>Pinnularia gibba</i> | 2 | 1 | 5 |
| <i>Pinnularia hemiptera</i> | | | 1 |
| <i>Pinnularia interrupta</i> | 3 | | 2 |
| <i>Pinnularia microstauron</i> | 6 | 5 | 10 |
| <i>Pinnularia obscura</i> | 2 | 1 | 1 |
| <i>Pinnularia schroederii</i> | 15 | 6 | 23 |
| <i>Pinnularia</i> spp. | | | 1 |
| <i>Pinnularia subcapitata</i> | 6 | 1 | 7 |
| <i>Pinnularia viridis</i> | 9 | | 16 |
| <i>Rhopalodia gibba</i> | 1 | | |
| <i>Rhopalodia gibberula</i> | 55 | 11 | 29 |
| <i>Stauroneis anceps</i> | | | 4 |
| <i>Sarirella ovata</i> | 3 | | |
| <i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i> | | | 1 |
| 合 計 | 396 | 108 | 291 |
| 未同定 | 14 | 1 | 9 |
| 破片 | 342 | 116 | 370 |
| 試料 1 cm ³ 中の殻数密度 | 7.8 | 1.8 | 6.0 |
| | $\times 10^5$ | $\times 10^4$ | $\times 10^4$ |
| 定形殻保存率 (%) | 53.9 | 48.4 | 44.8 |

真米田遺跡の珪藻



第5節 真米田遺跡における塗膜分析 (FT-IR 分析)

1. はじめに

真米田遺跡の発掘調査では、内面に黒色～黒褐色の付着物のある土器片が検出された。ここでは、付着物の成分を調べる目的で赤外分光分析 (FT-IR 分析) を行った。

2. 試料

分析試料は、土器No.1～No.3の内面付着物である。試料の詳細を第5表に示し250頁に試料の実体顕微鏡写真を示す。

3. 方法

手術用メスを用いて付着物を削り取り、厚さ1mm程度に截断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 (日本分光株製 FT/IR-410、IRT-30-16) を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

4. 結果

第214図に各試料と生漆の赤外吸収スペクトル図を示す。スペクトル図の縦軸は透過率 (%R)、横軸は波数 (Wavenumber (cm⁻¹); カイザー) である。なお、スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は生漆の赤外吸収位置 (第6表) を示す。

(1) 土器No.1 (報告書掲載番号 357)

付着物は光沢のある黒色を呈し、全体的に薄く付着する。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール の吸収 (吸収No.6～No.8) は認められなかった。ただし、生漆に見られる CH 基に由来する 2927 (cm⁻¹)、2858 (cm⁻¹) の吸収が明瞭に見られた。なお、1030cm⁻¹ では漆の劣化に伴うゴム質の大きな吸収が確認された (第214図-1)。以上の結果から、付着物は漆の可能性が考えられる。

(2) 土器No.2 (報告書掲載番号 1770)

付着物は光沢のない黒褐色を呈し、全体的にやや厚く付着する。赤外分光分析では、明瞭ではないが生漆を特徴づけるウルシオール の吸収が一部 (吸収No.7) に認められた。また、生漆に見られる CH 基に由来する 2927 (cm⁻¹)、2858 (cm⁻¹) の吸収が明瞭に見られた (第214図-2)。以上の結果から、付着物は漆と同定される。

(3) 土器No.3 (報告書掲載番号 1769)

付着物は光沢のある黒色を呈し、全体的にやや厚く付着する。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオール の吸収が一部 (吸収No.7) に認められた。また、生漆に見られる CH 基に由来する 2927 (cm⁻¹)、2858 (cm⁻¹) の吸収が明瞭に見られた (第214図-3)。以上の結果から、付着物は漆と同定される。

5. まとめ

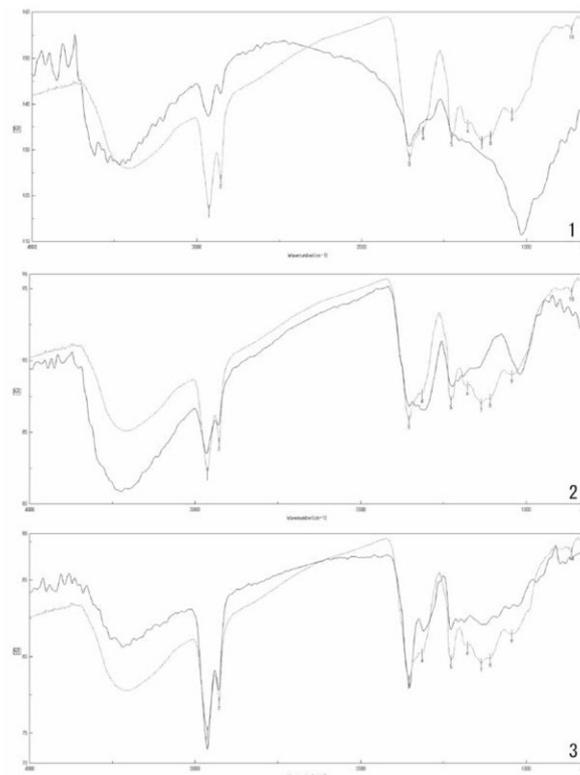
赤外分光分析 (FT-IR 分析) の結果、土器No.2 と土器No.3 の付着物は漆と同定された。また、土器No.1 の付着物は漆の可能性が認められた。

第5表 真米田遺跡の試料一覧

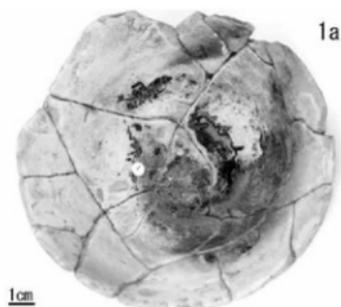
| 試料No. | 報告書番号 | 地点 | 出土層位 | 付着部位 | 付着物の特徴 |
|-------|-------|------|-----------|------|---------------|
| 1 | 357 | SC30 | 上層 15447 | 底部内面 | 光沢のある黒色層 (薄) |
| 2 | 1770 | B8 | 6層オチ (一括) | 底部内面 | 光沢のない黒褐色層 |
| 3 | 1769 | D14 | 5・6層 (一括) | 底部内面 | 光沢のある黒色層 発泡痕有 |

第6表 生漆の赤外吸収位置とその強度

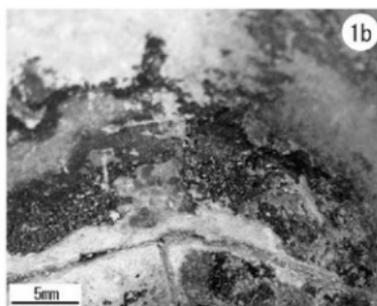
| 吸収No. | 生漆 | | |
|-------|---------|---------|--------|
| | 位置 | 強度 | ウルシ成分 |
| 1 | 2925.48 | 28.5337 | |
| 2 | 2854.13 | 36.2174 | |
| 3 | 1710.55 | 42.0346 | |
| 4 | 1633.41 | 48.9327 | |
| 5 | 1454.06 | 47.1946 | |
| 6 | 1351.86 | 50.8030 | ウルシオール |
| 7 | 1270.86 | 46.3336 | ウルシオール |
| 8 | 1218.79 | 47.5363 | ウルシオール |
| 9 | 1087.66 | 53.8428 | |
| 10 | 727.03 | 75.3890 | |



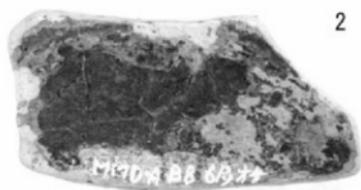
第214図 土器内面付着物の赤外分光スペクトル図 (縦軸は透過率、横軸は波数)



1a

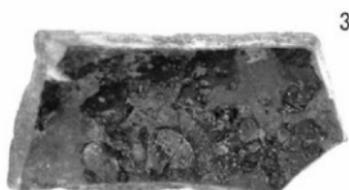


1b



2

5mm



3

5mm

試料の実態顕微鏡写真

1a-1b:No.1 (土器内面附着物)

2:No.2 (土器内面附着物)

3:No.3 (土器内面附着物)

第5章 真米田遺跡の調査のまとめ

第1節 出土遺物の様相

真米田遺跡では実に多種多様な遺物が量的にもまさに大量といえる程の出土をみている。包含層出土資料だけに限ってみても、土師器環・椀類は432kg、黒色土器が26kg、土師器甕が477.2kg、製塩土器が72.8kg、須恵器が106.3kgの合計1,114.3kgを測る。ここに遺構内出土資料や陶磁器類、鉄滓等の鍛冶関連遺物を加えれば、さらに多くの遺物が出土しているといえる。このような多量に出土した遺物を器種・種別ごとに整理し、それぞれの帰属年代を詳細に把握することで、より正確な遺跡の評価が可能となる。

これまでみてきたように、本遺跡では遺構内からも多くの遺物が出土しており、中には製作時ないしは廃棄時の確実な同時性が担保された一括資料も含まれている。各遺構の報告の項や、包含層出土資料を報告する中で、各遺物の分類や年代的な位置づけについても言及してきた。ここではまず、遺構内出土資料を中心に、再度、本報告において提示した分類・年代観を総合的に検討してみたい。特に当該時期の遺跡において最も普遍的に出土する土師器環・椀類およびセット関係に焦点を当て、時期ごとの各器種の特徴およびセット関係の抽出を試みる。そこで得られたこれらの遺物の年代観を基に同時期に存在したと考えられる遺構群を抽出し、遺跡の時期ごとの変遷について考えてみたい。

ところで、本報告においてこれまで提示してきた土師器の年代観は、柴畑光博氏や近沢恒典氏により、都城盆地の遺跡において出土した資料を基に構築されてきた編年案に拠るところが大きい(柴畑2004・近沢2011)。この土師器編年(以下都城編年とする)は、都城市養原町所在の馬渡遺跡およびその周辺遺跡の出土資料を用い、柴畑氏が土師器環を時間軸上に配列したものを骨子とする。そこに、近沢氏がその後調査された遺跡の新たな資料も追加して肉付けを行ったものである。ここでも、両氏の編年案を基礎とし、この編年案の妥当性を検討するとともに、本遺跡の出土資料からさらなる肉付けを行うたい。

まずは土師器の環から検討を加える。良好な遺構内一括資料として、まずSC70出土資料が挙げられる。本土坑からは、環12点、高台付椀5点が出土した。しかも、重ねて置かれたような状態ではほぼ完形の資料が出土していることから、同時に埋納された可能性が高い。このSC70では、環と高台付椀のセット関係が見出せるだけでなく、法量が異なる環のセット関係も看取でき、重

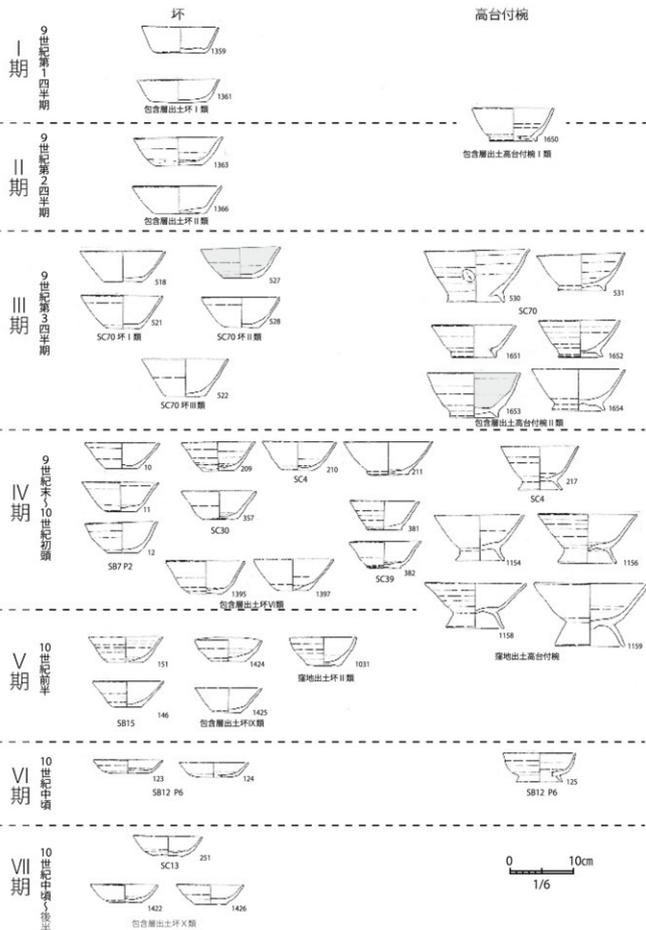
要である。これらの環は口径13cm前後、底径6cm前後、器高5cm前後のI類(518・520・521)と、口径12.2cm前後、底径6cm程、器高5cm前後のII類(524～529)、口径13cm程、底径6～6.5cm、器高6cm弱のIII類に分けられる。都城編年では、I・II類は共に9世紀第3四半期に措かれる。III類は器高が若干高めであり、都城編年の各類型にはみられない資料であるが、SC70の出土状況から、I・II類と同時期の資料と理解できる。また、SC72でもSC70環II類と同様の法量を有す環と高台付椀が共存している。また、これらの資料は窪地内からは出土しておらず、出土状況を勘案した遺物の引き算から確実に独立した一時期を形成する資料群と理解できる。

さらに良好な一括資料として、SB7のP2出土資料をみてみたい。10～12は口径12cm弱、底径5cm前後、器高4～5cmにまとまる。出土状況をみても、それぞれ出土レベルが若干異なるが、ほぼ完形の資料であり、柱の抜き取り後に同時に埋納された可能性が高い。都城編年に照らし合わせれば、9世紀末～10世紀初頭という年代が得られる。この年代観は、SB7の周辺に広がる整地層出土遺物との関係からみても、極めて整合的といえる。さらに、SC4では上述のSB7のP2出土資料と同様の器形・法量をもつ土師器環と円盤高台付、高台付椀が共存して出土した。

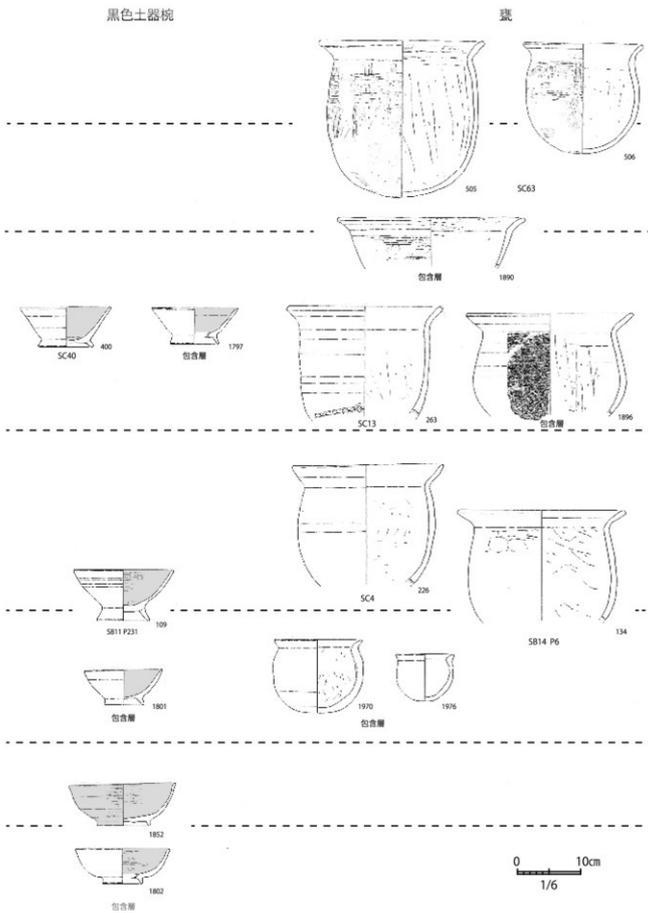
同一柱穴内からの出土ではないが、SB15のP3から出土した146とP7から出土した151は口径11.5cm前後、底径5cm前後、器高4cm程にまとまる。同一の柱穴からの出土ではないが、同じ掘立柱建物跡の柱穴から出土しており、同時期の資料として差し支えないだろう。ただし、P6からは法量的に異なる資料も出土しており、注意が必要である。146・151は都城編年では10世紀前半の資料とされる。

SB12からも良好な一括資料が得られている。123・124は口径11cm前後、底径7.5cm前後、器高2.2cm程と共通する。胎土や器形も共通性が高い。これらの環には125の高台付椀が伴う。3点ともにSB12のP6から出土しており、1セットと捉えて良いだろう。このような資料はこれまでの都城盆地内の遺跡ではほとんど出土していない資料である。大宰府で出土している同様の法量・形態をもつ資料の年代観から10世紀中頃の資料と考えられる。

10世紀後半～11世紀代にかけての資料は、都城盆地では遺跡自体の数が減ることもあり、不明瞭であった。この時期の資料としては、大宰府分類白磁焼X I類と共存した坂元B遺跡のSC02出土資料や、口径10cm前後に縮小する平田遺跡B地点SD12出土資料などが充てられ



第 215 图 土師器変遷図①(S=1/6)



第 216 图 土師器変遷図②(S=1/6)

てきた。本遺跡においても、白磁焼X1類の出土は皆無であり、確実に11世紀代といえる資料は出土していない。しかし、10世紀前半に播かれる資料に後続すると考えられる資料が、窪地や包含層から出土している。窪地出土土師器Ⅲ類や、包含層出土土師器Ⅹ類に分類した資料がこれにあたり、口径10cm前後、底径5.5cm前後、器高3cm程を測る。前段階からさらに口径・底径が幅小傾向にある資料であり、遺構内一括資料ではないが、型式学的には一つの類型を構成する一群とみて差し支えないだろう。これらの資料が10世紀中頃～後半の所産と考えられる。1点のみの出土だが、SC13からも同様の器形・法量をもつ環が出土している。

さて、上では遺構内出土資料を中心にみてきたが、本遺跡では包含層からも遺物がまとまって出土しており、次はこれらの資料を遺構内出土資料と比較しつつ、みていきたい。

上でみてきた遺構内一括資料の中には9世紀前半代の坯資料は含まれていない。すなわち、本遺跡の遺構群の中で、確実に9世紀前半代に遡るものはほぼ皆無といえる。中にはSB11のように、9世紀前半代に帰属する可能性のある土師器や須恵器の供養具が出土している遺構もあるが、かなり時期幅のある遺物が出土している場合が多く、これらの遺物が確実に遺構に伴うと判断できるものではない。

しかしながら、包含層出土資料に目を向けると、器形・法量から判断して9世紀前半代に属すると考えられる資料も量的には少ないながら存在している。包含層出土遺物の項で、環1類（口径11.8～14.5cm、底径7.5～8.8cm、器高3.5～4.6cmで箱型の器形を呈すもの）および環Ⅱ類（口径平均13.8cm、底径平均7.5cm、器高平均4.3cmを測るもの）に分類した資料は、都城編年に照らし合わせれば、それぞれ9世紀第1四半期と、第2四半期の資料といえる。包含層出土環Ⅲ～Ⅹ類として分類した資料群についても器形および法量から、Ⅲ～Ⅴ類はSC70出土資料段階（9世紀第3四半期）、Ⅵ～Ⅶ類はSB7・SC4出土資料段階（9世紀末～10世紀初頭）、Ⅷ・Ⅹ類はSB15出土資料段階（10世紀前半）、Ⅹ類はSC13出土資料段階にそれぞれ比定できる。

つまり、真米田遺跡出土土師器からは9世紀第1四半期にはじまり、10世紀中頃～後半頃までをⅠ～Ⅶ期という7段階の時期区分が可能といえる。この後、出土遺物からは11世紀代の様相が不明瞭となり、11世紀末～12世紀初頭に再度遺構・遺物が確認できるようになる。この時期を若干の空白期をおいてからのⅧ期としたい。検出された遺構の帰属時期は、Ⅲ期（9世紀第3四半期）

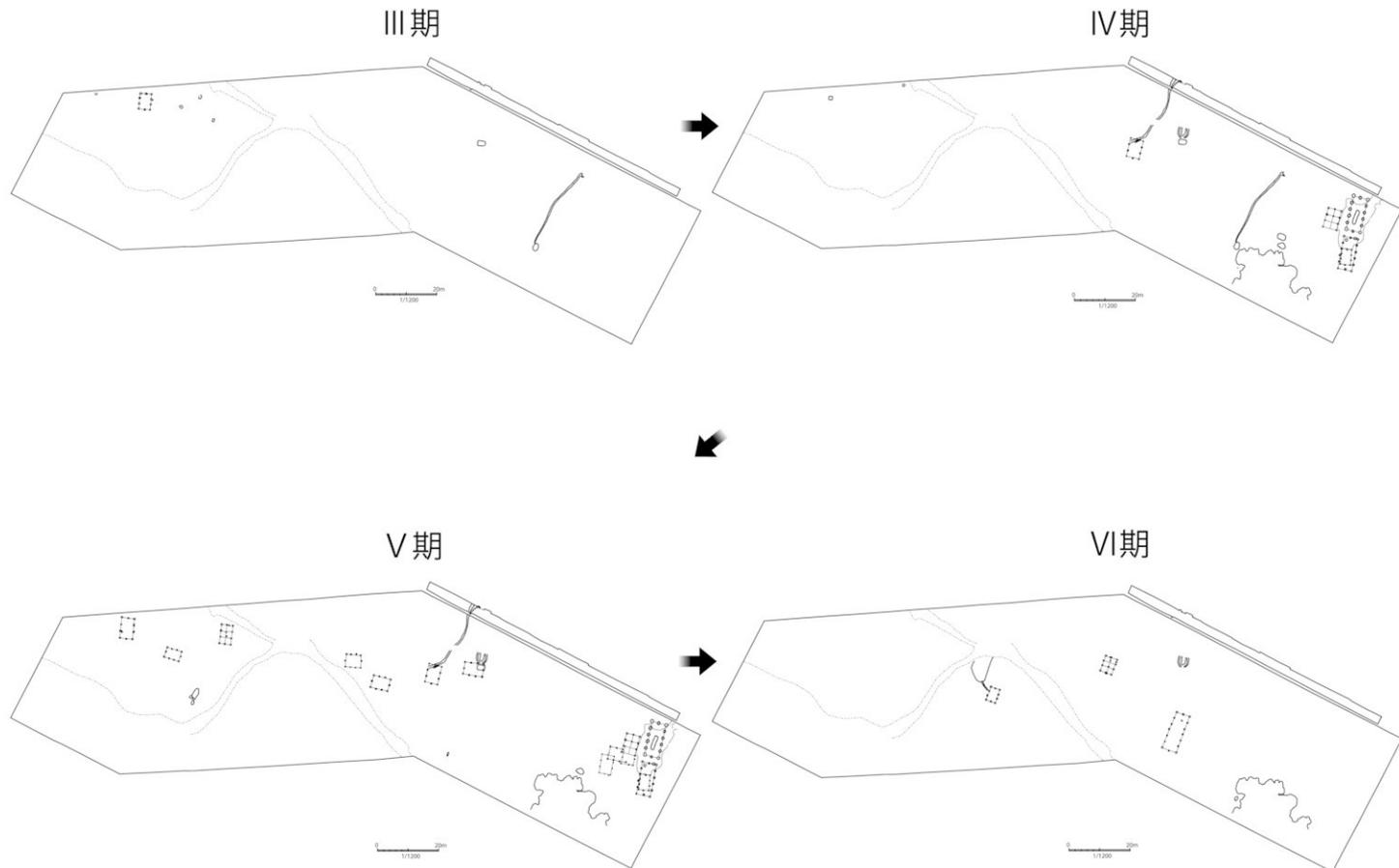
～Ⅶ期（10世紀中頃～後半）にほぼ限定できるものと考えられる。

次に、これまでに得られた土師器の年代観を基に、その他の器種とのセット関係についても検討してみたい。高台付碗についても、やはり9世紀代前半の資料は限定的な出土をみせる。遺構内出土資料ではないが、包含層出土高台付碗1類とした資料は、坯部の形態から9世紀前半代の資料と考えられる。さらに、SC70での共存状況から、包含層出土の碗Ⅱ類とした一群は、Ⅲ期の資料といえよう。同様に、高台部が細長く、碗部が直線的に開く器形を呈す資料は、SC4での共存関係から、Ⅳ期以降の資料といえる。また、SB12のP6で得られた一括資料からは、碗部が半球形で短い高台の付く資料（125）は、Ⅵ期のもと考えられる。まとめると、坯部が逆台形の箱型を呈し、短い高台が付く資料→直線的ないしはわずかに丸みをおびる器形で短い高台を有す資料→細く長い高台に直線的に開きながら立ち上がる器形のもの→半球形状の丸みをおびる碗部に短い高台が付く資料への変遷が想定される。

次に黒色土器碗をみてみる。本遺跡では他の器種に比べ、良好な資料は得られていない。ただし、SC40ではⅢ期の土師器と直線的に開く器形で短い高台を有す資料（400）が共出している。10世紀前半頃の所産と考えられるSB11の柱穴からは、丸みをおびる半球形の器形を呈し、ハの字形の高台が付く資料が出土している。SB11の年代観をそのまま当てはめればⅤ期前後の資料と考えられる。さらに器形の曲線化が進み体部の丸みが強くなる碗Ⅲ類は、Ⅵ期の高台付碗との類似性から同様の年代観が与えられる。

最後に土師器甕であるが、焼成土坑であるSC63出土資料が得られたり、多くの出土資料があるにもかかわらず、帰属時期が特定できる資料は少ない。外面に縦・横方向のハケム調整が認められるSC63出土資料については、切り合い関係にあるピット出土の土師器環との関係から9世紀前半頃の所産と考えられる。これは都城編年の年代観とも合致する。本遺跡では数少ない9世紀前半代の遺構といえる。SC4ではナデ調整の差がⅣ期の環・高台付碗と共存している。丁寧なナデ調整を基調とする小型の甕もこの頃の所産であろう。タタキ調整がみられる資料については、ハケム調整の新しい段階、ナデ調整の古い段階にみられる要素と考えられるため、Ⅲ期前後に位置づけたい。

この他にも、所謂円盤高台を有す坯も本遺跡では多く出土しており、本来ならばその年代的な位置づけを示す必要がある。しかし、遺構内での良好な共存関係が確認で



第 217 図 遺構変遷図

きる資料が限定的であるため、これらの資料については明確な位置づけを提示できていない。ただし、焼成土坑と考えられるSC39から出土した遺物については、その法量はIV期の平底の坏と近似する。また、SC4での共伴関係から、平底の坏よりも法量的に一回り大きな資料が伴う可能性が高い。

以上、遺構内出土の土師器の編年とその年代観を基軸に置き、9世紀～10世紀代における土師器各器種の組列および器種間のセット関係について検討した。その結果、9世紀～10世紀代の真米田遺跡出土土師器は、I～VII期までの時期区分が可能であった。土師器環に関しては、都城編年で提示された変化の方向性および年代観とほぼ軌を一にする様相が看取できた。甕についてもほぼ都城編年を承認する結果が得られたといっていざらう。黒色土器碗については、良好な一括資料が少なくさらなる検討が必要と考えるが、大枠での変化の方向性は得られたと考える。高台付碗は、SC70やSC4で共伴資料を得られており、器種間のセット関係を考える上で一定点となり得るといえる。また、従来不明瞭であった10世紀中頃～後半にかけての資料については、包含層出土資料も含めて重要な出土事例であると考える。これらの結果をまとめたのが第215・216図に示した変遷図である。次節ではこの年代観・時期区分を基に、検出遺構の変遷について検討する。

第2節 遺構の変遷

前節では本遺跡で出土した土師器資料の検討から、9世紀～10世紀にかけての時期を、I～VII期まで細分設定した。本節では、そこで設定した各時期ごとの掘立建物跡を中心とする遺構の変遷について検討する。同時期の遺構の抽出に際しては、出土遺物の年代観および建物の主軸方位を基に行った。

I～II期の遺構としてはSC63があるが、それ以外の遺構が確実にこの時期に帰属すると断定できる遺構はない。SB19やSD11などは、この時期の所産の可能性がある遺物が出土しているが、全体的には時間幅が認められる。

このように、I～II期の掘立柱建物跡は抽出できなかったが、帰属時期を絞り込めなかったSB14やSB19がこの期の建物跡である可能性は考えられる。しかし、いずれにせよこの時期に属す遺物の出土量からみても、まだ遺跡利用は限定的であったといえる。

III期になると調査区の西側で建物跡が出現する。ただし、この時期の掘立柱建物跡は、主軸を南北方向にと

り、4°程東に振れるSB24のみである。その他、この建物跡の周辺にみられるSC40やSC70・72・74もこの時期の所産と考えられる。調査区の東側では、SC13とSC19およびSD7がこの時期の所産である可能性がある。しかし、いずれの遺構もある程度の時間幅を想定する必要がある。この時期に限定できるものではない。やはりこの時期も遺跡利用の痕跡は限定的といえる。

IV期に入ると調査区東側で大型掘立柱建物跡であるSB7をはじめ複数の建物跡がみられるようになる。主軸を南北方向にとり、13°前後東に振れるグループBとした一群が相当する。また、主軸が8°前後東に振れるグループAの一部もこの時期に出現していた可能性が高い。H19区周辺に広がる窪地もこの時期からみられるようになる。さらに、楕円形周溝墓であるSK1も帰属時期の上限は本期と考えられる。遺跡と考えられるSD6もSB20と重複するもの出土遺物からはこの時期の所産といえよう。さらに、重複するSB8とSB9がいずれも本期に出現したものと捉えられることから、同期に分類した遺構についてもこの時間幅の中でさらなる時期差があるものと理解できる。

V期にはさらに建物跡が増える。前期に出現していたと考えられるグループA・Bについても、出土遺物からはこの時期まで含めた幅で捉える必要があるため、必然的に建物跡の数は増えることになる。新たに主軸を東西方向にとり72～87.5°西偏するグループGが加わる。調査区東側のSB7周辺では複数の建物跡が重複していることから、やはりV期の中でもさらに時期差が存在するものと推測される。本期に入ると調査区全体で建物跡がみられるようになる。比較的多くの建物跡がみられるが、コの字状やロ字状の配置はみられない。

VI期は主軸が20°前後東に振れるグループDの建物跡で構成される。楕円形周溝墓であるSK1はIV期から本期までの時間幅をみている。窪地もこの時期まで連続と存在していたと思われる。SB23とSD14および連結する硬化面を有す窪地は一連の遺構として捉えた。前期に比べるとこの時期の遺構数は減る。これはこの時期の遺物の出土量とも整合的である。

以上、遺構が複数みられるようになるIII期から遺構の変遷について俯瞰してみた(第217図)。検出遺構と出土遺物の数量からいえば、IV～V期(9世紀末～10世紀前半)が本遺跡の盛花期といえる。この後しばらくの断絶の後、11世紀末～12世紀初頭(VIII期)に再び遺構が構築され、わずかではあるが遺物も出土するようになる。出土土師器はこのような遺構の消長と整合的であるが、陶磁器だけはVIII期以降の資料も継続的に出土している。

第3節 真米田遺跡の位置づけ

これまで、本遺跡の出土土師器から時期区分を行い、それに基づいて検出遺構の変遷についてみてきた。その結果、遺跡の盛行期は真米田IV期からV期にかけての中期（9世紀末～10世紀前半）といえ、2間×3間を基本とする掘立柱建物跡と土坑、道跡を含む溝状遺構などから構成される。SB7のような柱穴の径が1mを超えるような大型建物や、SB8の2間×5間、SB12の2間×6間といった建物面積が大きな建物跡も検出されている。しかし、それ以外の建物跡は「一般的な集落」とされる遺跡と大差はない。ただし、楕円形溝溝墓や土師器焼成土坑など類例の限られる遺構も検出されており、単純にそのような評価を与えることはできない。前節でもみたように、大型の建物跡は存在するものの、それらから官衛的な配置を読み取れる訳ではない。唯一調査区東端のSA7とSA8の配置が顕眼的に2棟並ぶが、これもコの字状の配置をみても決らない。つまり、検出遺構からは一般的なか集落とは異なるものの、確実に官衛的と断定できる要素は見当たらない。

出土遺物のみでみると、国産施輪陶器・貿易陶磁器共に量的にも膨大な量が出土しており、その中には長沙窯系青磁の可能性のある資料や越州窯系青磁1類の香炉蓋など良品が含まれる。その他にも国産緑釉陶器が136点、越州窯系青磁が1・II期合わせて合計172点も出土しており、量・質共に南九州の同時期の遺跡では群を抜くものと評価してよいだろう。緑釉陶器の産地に関しては、体系的破片資料が多く、ピンポイントで産地を確定できるものは多くない。しかし、同定できた資料の中では京都産洛西型の25点が最も多く、これにその可能性が高いものを加えれば京都産（洛北型・洛西型）が大部分を占めるものといえる。確実に防長産といえる資料は7点と多くない。それでも、このように京都産・防長産の両者が出していることは、白磁硯1類や越州窯系青磁の出土と併せ、複数の流通ルートが存在していたことを示す。また埴土器も大量に出土しており、陸上交通のルートを考える上で示唆的な遺物といえる。このような遺物の出土状況からは、真米田遺跡は物資流通に関し拠点的な役割を担った遺跡とも評価できる。

これに対して、遺跡の評価を行う際に大きな判断材料の一つとなる墨書土器等の文字資料はほとんど出していない。都城盆地では初出土となる風字硯をはじめ、比較的多くの須恵器転用硯が出土しているにも関わらず、墨書土器は可能性のある402・530の資料を除けばほぼ皆無である。このような風字硯や転用硯の出土に加え、

多くの刀子の出土は、文章行政を物語る遺物として遺跡の官衛的な性格を連想させる。しかし、上述のように検出遺構からは官衛遺跡としての位置づけは難しい。

より細かく出土遺物を見ると、SB12で出土した123～125の農具は大宰府で出土する資料と遜色ないものであると評価できる。さらに、西北九州（肥前・筑後国府周辺）に特有とされる楕円形溝溝墓が検出されていることも併せて、SB12は西北九州や大宰府周辺からの役人ないしは有力者層が居住した居宅跡、SK1はそのような人物が埋葬された墓であった推測も可能である。SB7やSB8といった大型建物についても、豪族居宅の土屋に多くみられる廂付建物ではないものの、その規模からみれば可能性は十分に考えられる。上述のような数多くの良質な陶磁器類の出土からも、少なくともある程度の財力・地位を保有していた人物の存在が浮かび上がる。

この点に関して、9世紀中葉～10世紀前半は、それまでの中央政府からの規制を強めていた大宰府の管内支配が大きく変質し、管内諸国を政を委任されるようになったとされる。このような情勢の下、従前の律令体制下における役人や在地有力者に加え、新たな勢力が台頭してきたと考えられる。鹿児島県薩摩市内の京田遺跡で出土した木簡からは、この頃薩摩国では田代村と呼ばれる有力農民層が台頭していた様子が見え、日向国でも同様であったと推測される（永山2012）。こういった状況の中で、日向国諸県郡に属する都城盆地周辺でも、複数の有力者の台頭がめざましく推測される。真米田遺跡の盛行期、つまりSB7などの大型建物を含め、多くの建物跡が出現するのはIV期とした9世紀末～10世紀初頭で、それは次のV期（10世紀前半）まで継続していく。これは、真米田遺跡から南西に約6km程のところと所在する大島岳田遺跡において、有力者の居宅跡と考えられる大型建物跡が出現・存続する時期と符号する。つまり、2つの遺跡はほぼ同時に存在した遺跡であり、この時期に複数の有力者の邸宅跡が、同じ地域で確認された貴重な事例といえよう。大島岳田遺跡の大型建物（SB1）と真米田遺跡の大型建物（SB7）は主軸方向が東に12.5°振れるという点でも共通する。建物の規模や門・池状遺構といった層数地としての内容でいえば圧倒的に大島岳田遺跡の居宅跡がランクが上と判断できる。検出された遺構や遺物を総合的に判断すると、国クラス的人物の邸宅という評価もなされている（都市圏教育委員会編2013）。真米田遺跡も大島岳田遺跡についていえば、出土量・内容共に表に出た大島岳田遺跡に引けをとらぬものといえる。ただし、上述のように居宅としてはかなり見劣りするものである。居宅の主がどのような人物であったか

特定することは容易ではないが、上述のように風字硯や転用硯が出土していることから、官人クラス的人物であったものと推測される。

さらに、今回の調査では、都城市内では初となる土師器焼成土坑が検出されている。1基（SC39）は土師器類のみが検出されており、もう1基（SC63）は土師器類のみが出土した。また、赤外分光分析からは、土師器に付着した漆の存在が指摘でき、遺跡内で漆製品の加工を行っていた可能性が考えられる。伊勢などの遺構は検出できていないものの、騎弓口や鉄斧、炉壁と考えられる遺物が集中して出土している地点があることから、本遺跡内では銀箔も行われていたと考えられる。このように、真米田遺跡では遺跡内で手工業生産が行われた工務所としての性格も付与できる。同様の生産活動は、大島岳田遺跡でも確認されている。

ところで、大島岳田遺跡は、上述のような居宅的な性格と共に、コの字状配置の建物群がみられることから、都賀別荘のような公的な機能としての一面も指摘されている（谷口・福田2008）。これまでの検討からは、真米田遺跡については、検出遺構からは公的な施設としての位置づけは難しいといえる。しかし、廂をもたない大型建物跡が2棟並ぶことや風字硯の出土からは、全く可能性がないとは言いつてもいい。おそらく、遺跡は今回の調査区よりも北側にまで延びると考えられ、調査区外に存在する建物とSA7とSA8を含めた建物群が、官衛的なコの字状の配置を呈す可能性もなくなはない。現在では、本来は公的施設の一部である可能性があることを指摘するに止めた。

以上のように、検出された遺構・遺物から真米田遺跡の位置づけを考えてきた。良品を含む大量の国産施輪陶器および貿易陶磁器、コの字配置をみせない大型建物跡、風字硯の出土などの諸要素から、官人クラス的人物の居宅跡の可能性を考えた。同時に物資物流の拠点であった可能性が高い。大島岳田遺跡のような、寝殿造を意識したと考えられる邸宅配置や廂付の建物跡はみられないが、都城盆地内でも最も大型の部類に入る建物跡が検出されており、明らかに通常の集落とは異なるものといえる。さらに、遺跡内では土師器や漆製品、鉄器が生産されていたと考えられ、検出された掘立柱建物跡や大型の土坑は、工房群であった建物跡も考えられる。

このような、有力人物の居宅跡としての評価以外にも、何らかの公的施設の一部であった可能性も残されている。実際に検出された大島岳田遺跡などから直接的にえる要素ではないが、風字硯や転用硯等の文書行政を物語る遺物が出土していることや、調査区東端に位置するSB7

とSB8が2棟並んで存在しており、その可能性はある。

これらのことから、9世紀末～10世紀中頃までの真米田遺跡は、有力者の居宅跡であると同時に何らかの公的施設である可能性を指摘した。この後10世紀後半までは、遺跡の利用が継続するが、11世紀代の様相は不明になり、再び遺構・遺物が確認されるのは11世紀末～12世紀初頭になってからである。

真米田遺跡では、9世紀初頭から11世紀代の空白以降も、12世紀初頭までは土師器類が出土しており、その降みの遺物は陶磁器類に限定される。加えてこの時期の遺構は全く検出されていない。出土品的には決して多くないものの、D期（12世紀中頃～後半）以降も、D期（15世紀末～16世紀中頃）まで、連続と青磁ないしは白磁が出土している。繰り返すが、この時期の土師器は出土しておらず、遺構も検出されていない。このような状況から推測すると、12世紀以降の真米田遺跡は、大きな河川に隣接する立地から、河川交通を利いた物資流通の拠点という役割のみを前代から引き継いでいた可能性がある。ただし、陶磁器の出土量的にはかなり限定的であり、その可能性を指摘するに止めた。

真米田遺跡の盛行期である9世紀末～10世紀前半は、都城盆地でも数多く遺跡が確認され、調査が行われている。その中で、豪族居宅であると共に都賀別荘等の公的施設の可能性が高い大島岳田遺跡をはじめ、官直あるいはそれと準じるような幹線道路として使用されたと考えられる高木町並本跡遺跡、郷長クラスの下級官人の居宅跡と考えられる黄原町馬渡遺跡など一般集落と異なる遺跡もみつかっている。真米田遺跡もこれらの遺跡と同様、一般的なか集落とは異なる位置づけが可能である。今後はこのような調査事例を蓄積から得られた情報を総合的に検討し、遺跡間の比較がより多くの情報を引き出す必要がある。盆地内に存在したとされる島津水戸屋の所在地の特定も今後の大きな課題である。

今回は真米田遺跡の出土資料を用い、在地土師器の変遷の過程と年代観の検討を行った。調査した遺跡をより正確に評価するためには時間のものさしとなる在地土師の編年の確立は必須といえる。ここで提示した編年観は、発掘現場に立ち返って検証作業を継続していきたい。さらに、今回はほとんど検討できなかったが、本遺跡では須恵器も大量に出土している。少なくとも9世紀代の資料については、肥後からの影響はみられず、裏内面の車輪文や円盤高台杯の存在からも、下村窯など日向国内部あるいは隣接する大隅との関連を考える必要がある（綱田龍生氏教示）。これら須恵器資料の産地同定や年代観の整理についても今後の大きな課題といえる。

【参考文献】

- 網田龍生 2001「九州における須恵器の製作技法とその転換」『古代の土器研究－律合的土器様式の西・東6 須恵器の製作技法とその転換－』
古代の土器研究会
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2
- 桑畑光博 2004「第5章 調査のまとめ」『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書 第62集 都城市教育委員会
- 桑畑光博 2009「島津荘は無主の荒野に成立したのか」『南九州文化』第109号 南九州文化研究会
- 坂井秀弥 2012「全国の古代遺跡からみた大島畠田遺跡」『国指定10周年記念シンポジウム大島畠田遺跡の時代を語る－島津荘成立以前の
都城盆地の動向－』都城市教育委員会
- 谷口武範 2012「大島畠田遺跡調査概要」『国指定10周年記念シンポジウム大島畠田遺跡の時代を語る－島津荘成立以前の都城盆地の動向－』
都城市教育委員会
- 谷口武範・福田泰典 2008『国指定史跡大島畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第178集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 近沢恒典 2010「中尾下遺跡」都城市文化財調査報告書 第98集
- 近沢恒典 2011「都城盆地の古代土師器の編年について」『平成23年度埋蔵文化財担当専門職員研修会』宮崎県埋蔵文化財センター
- 永山修一 1997「律令制と都城」『都城市史 通史編 自然・原始・古代』
- 永山修一 2012「奈良・平安時代の南九州～大島畠田遺跡理解の前提として～」『国指定10周年記念シンポジウム大島畠田遺跡の時代を語
る－島津荘成立以前の都城盆地の動向－』都城市教育委員会
- 奈良文化財研究所編 2004『古代の宮内遺跡 II 遺物・遺跡編』
- 堀田孝博 2010「物の動きからみた都城盆地の境界性－古代後期の陶磁器類を中心として－」『南九州の地域形成と境界性－都城からの歴
史像－』藤山閣
- 都城市教育委員会編 2013『国指定10周年記念シンポジウム大島畠田遺跡の時代を語る－島津荘成立以前の都城盆地の動向－ 記録集』
- 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
- 山下大輔 2012「都城盆地内の奈良・平安時代の遺跡概観」『国指定10周年記念シンポジウム大島畠田遺跡の時代を語る－島津荘成立以前の
都城盆地の動向－』都城市教育委員会
- 山本信夫 1990「統計上の土器」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会
- 山本信夫 1999「大宰府出土土師陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集
- 山本信夫編 2000『大宰府委坊跡XV－陶磁器分類編－』大宰府市の文化財 第49集 大宰府市教育委員会

第7表 陶磁器の時期別出土点数・内訳

| 磁器区分 | 白磁数量 | 白磁内訳 | 青磁数量 | 青磁内訳 | 合計 |
|---------------------|------|-----------------------|------|-------------|-----|
| A期(8c末～10c中) | 5 | 椀Ⅰ類 | 165 | 越Ⅰ・Ⅱ類、越Ⅰ×長沙 | 170 |
| B期(10c後～11c中) | 0 | | 0 | | 0 |
| C期(11c後～12c前) | 41 | 椀Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類、皿Ⅱ・Ⅴ×Ⅶ類、壺Ⅱ | 0 | | 41 |
| C～D期(11c後～12c後) | 23 | 椀Ⅱ×Ⅳ×Ⅴ×Ⅵ×Ⅶ×Ⅷ類、皿Ⅱ×Ⅴ×Ⅶ類 | 0 | | 23 |
| D期(12c中～12c後) | 2 | 椀Ⅶ類 | 4 | 龍椀Ⅰ類、同椀Ⅲ類 | 6 |
| E期(13c初前後～13c前) | 0 | | 3 | 龍椀Ⅱ類 | 3 |
| F期(13c中～14c初前後) | 2 | 椀・皿Ⅹ類 | 5 | 龍椀Ⅲ類 | 7 |
| F期以降(13c中～) | 0 | | 4 | 元～明代 | 4 |
| G期(14c初～14c中) | 1 | 森田B群 | 1 | 龍椀Ⅳ類 | 2 |
| G期以降(14c初～) | 0 | | 11 | 龍椀Ⅳ類～ | 11 |
| H期(14c後・末～15c前・中) | 16 | 森田D群 | 2 | 上田CⅡ類椀 | 17 |
| I～J期(15c前・中～16c前・中) | 0 | | 2 | 上田BⅢ×ⅣⅡ類椀 | 2 |
| J期(15c末～16c前・中) | 0 | | 2 | 上田BⅣⅡ類椀 | 2 |
| 合計 | 90 | | 198 | | 288 |

※ある程度時期の絞れる資料のみで、時期幅の大きいものおよび時期不明の資料は除く ×はないは、～以降を表す

第8表 緑釉陶器の産地別出土点数

| 産地 | 数量 |
|----------------|----|
| 防長 | 7 |
| 京都産洛西型 | 25 |
| 近江 | 7 |
| 京都産(洛北・洛西型) | 7 |
| 京都産(洛北・洛西型)×東海 | 2 |
| 京都産洛北型×東海 | 1 |
| 京都産洛北型×防長 | 38 |
| 京都産洛西型×東海 | 45 |
| 京都産洛西型×東海×近江 | 4 |
| 京都産洛西型×近江 | 2 |

※×は「or」を表す

七日市前遺跡

第6章 七日市前遺跡の調査

第1節 調査の方法と概要

調査対象地は都城市高城町大井手地区、真米田遺跡から南西へ700m程のところであり、調査前は水田であった。真米田遺跡同様、現地形に切り土および盛り土を行い、工業団地を造成するというものであった。さらに、西側に隣接する市道についても改良拡幅が予定されたため、同時に調査を実施した。この市道部分も含め遺跡が遺存している約2,900㎡の範囲で発掘調査を実施した。

調査区は南北に約45m、東西に約65mの横長台形状を呈する。遺跡の西には大淀川が、さらに南にはその支流である東岳川が流れており、真米田遺跡同様、氾濫原に位置する。標高は調査区の北東側が高く、そこから南西に向かうにつれ緩やかに下っていく。水田層（表土）の直下が遺物包含層となる。標高の高い調査区北東側についてはこの遺物包含層が薄く、南東側は厚く堆積する傾向にある。なお、調査区の設定にあたっては、公共座標軸系のSN座標線に一致した10×10mを1区画とし、東西方向を西から1、2、3…の順に算用数字で、南北方向を北からA、B、Cの順にアルファベットで表記した。この組み合わせで区名を付けた。

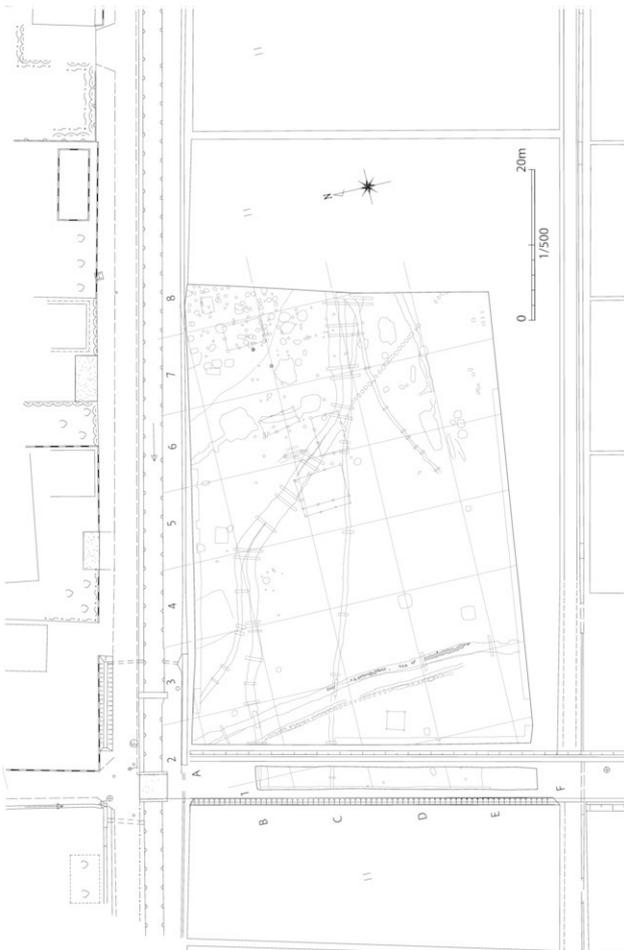
発掘調査はまず重機による表土剥ぎを行った。事前に実施した確認調査では、現在の水田面である表土層の直下が遺物包含層であった。しかし、この層からは表土剥ぎの際にほとんど遺物が出土しなかったため、一部表土直下の遺物包含層（基本土層V層）も重機により剥ぎ取っている範囲がある。ただし、これは調査区全体ではなく、表土直下で多くの遺構が検出された調査区北東側ではV層が残っている範囲がある。それ以下は人力で掘り下げ、基本土層のVI層上面およびVII層上面での遺構検

出を試みた。その結果、検出面の差から基本土層のV層期およびVI層期という大別2時期の遺構群を検出している。検出された遺構は、古墳時代の土器溜まりおよび埋設土器を2基、古代～中世の掘立柱建物跡5棟、土坑45基、道跡を含む溝状遺構14条、ピットを150基検出した。上述のように、V層期とVI層期と2時期の存在を想定していたが、実際にはV層期とVI層期の遺構にはそれほど時期差はみられない。少ない出土遺物からは中世期の所産と考えられるものが多い。VI層の中でもより黒味および粘性が強いものをVIb層として区別しているが、ここからは古墳時代の遺物がまどまって出土している。出土地点は調査区の中でも標高の低い南西部に集中しており、近隣からの流れ込みであるものと考えられる。検出した遺構の中には古墳時代の遺物が出土しているものもあるが、これらも流れ込みである可能性が高く、古墳時代の遺構は上述の埋設土器のみであるといえる。検出された掘立柱建物跡のうち、SB1のみ西側1面に扉をもつが、それ以外は2間×3間の一般的な建物跡といえる。検出遺構からは、おおよそ一般的集落と評価できる。

出土遺物はかなり少ない。先述のように、検出された遺構の多くは古代～中世期の所産と考えられるが、出土遺物に関してはその多くが古墳時代の土器である。古代～中世期の遺物は少なく、特に遺構内からの遺物は極めて限定的といえる。そのため、遺構の帰属時期の判断は埋土や検出面に拠る所が大きい。しかし、少ない出土遺物の中には、都城市内の遺跡では初出土となる錫杖や、漆椀と考えられる遺物が出土している。錫杖については、遺跡の周辺にあったと伝えられる時宗の寺院である高称寺と関連する遺物として重要である。古墳時代の遺物としても、須恵器の筒形器台と考えられる資料や古手のハソウが出土するなど、貴重な資料が得られている。



第218図 調査区位置図(S=1/10,000)



第219図 調査区域図(S=1/500)

第2節 遺跡の層序

七日市前遺跡は、真米田遺跡同様大淀川・東岳川により形成された氾濫原に位置しており、通常都城盆地内でみられる御池砂石やアカボヤ火山灰といったテフラは、一部二次堆積として確認できる箇所以外は認められない。標高的には、調査区の中で最も高い北東部から南西部にむけて緩やかに傾斜していく。基本土層の設定にあたっては、確認調査で確認できていた層順を基準とした。基本的には真米田遺跡でみられた基本土層と整合性をもつが、出土する遺物の年代が若干異なる。本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

- I層：黄灰色砂質土（灰白色軽石・小礫を多く含む）
- II層：黄灰色砂質土（灰白色軽石・小礫を多く含む硬くしまる）＝水田基盤層
- III層：明黄褐色砂質土（灰白色軽石を多く含む硬くしまる 鉄分沈着し橙色を呈す）＝水田基盤層
- IV層：灰白色軽石＝板島文明軽石
- V層：黄灰色砂質シルト土
- Vb層：黄灰色砂質シルト土（灰白色軽石をまばらに含む）
- VI層：黒褐色粘質シルト土
- VIb層：黒色粘質シルト土
- VII層：にぶい黄褐色砂質シルト土

I層は表土層で、現在の水田層である。遺物は出土していない。

II層は水田の基盤層と考えられるもので、板島文明軽石と考えられる灰白色軽石と小礫を多く含む、硬くしまる層である。耕作時に下位の層から持ち上げられたためか、中世の陶磁器類が出土している。

III層もII層と同様の水田基盤層である。やはり灰白色軽石と小礫を多く含む硬くしまる。鉄分が沈着して橙色を呈する範囲が多い。II層とは色調・含有物が異なるため区別したが、両者共に現代の水田基盤層であると考えられる。

IV層は板島文明軽石と考えられる層である。調査区全体で確認できたものではなく、調査区の南壁および西壁の一部でブロック状に堆積している範囲がわずかに残るのみである。より上層のI～III層の中に含まれているのを確認できる。

V層は黄灰色を呈する砂質の強い層で、古代～中世相当の遺物包含層である。出土遺物は少ない。

Vb層はV層と同様の黄灰色を呈する砂質の強い層であるが、灰白色軽石をまばらに含むV層に比べると色調

が暗い。これもIV層と同様に調査区全体でみられる層ではなく、標高の低い調査区南西側の一部で確認できる層である。遺物はV層と同時期のものがごく少量出土するのみであったため、取り上げ時にはV層として一括して取り上げている。

VI層はVb層よりもさらに黒色味が強くなり、砂質ではなく粘性が強くなる層である。古墳時代～中世までの遺物が混在して出土する。量的には古墳時代の土師器が最も多く出土している遺物といえる。調査区の北側から北東側にかけてはこの層がみられず、V層の下位はVIb層が堆積する範囲が広がる。そのため、遺物の取り上げ時にはVI層とVIb層は区別せず一括してVI層として取り上げている。この層の上面で検出し、V層を起源とすると考えられる埋土が堆積する遺構群をV層期の遺構としている。

VIb層はVI層よりもさらに黒色味・粘性共に強くなる黒色粘質シルト土層である。上述のように調査区北北東部にかけては、上位のVI層が堆積せず、V層の下位はVIb層となる範囲が多い。さらに、調査区南東部ではこのVIb層さえも存在せずV層の下位がVII層になる範囲も確認されている。遺物はVI層と同様に古墳時代の土師器が多く出土している。

VII層はにぶい黄褐色砂質シルト土で、遺物を全く含んでいない地山層である。埋土にVI層起源と考えられる層が堆積する遺構はこの層の上面で検出している。真米田遺跡でみられたような、地点による相違はほとんどみられない。この層の下位には洪水によると考えられる礫層が厚く堆積している。

真米田遺跡では上で設定したような基本土層以外にも洪水堆積層や窪地状の落ち込みのみみられる層が多く確認されている。七日市前遺跡では、そのようなイレギュラーな層はほとんどみられず、上記で設定した基本土層が地点により層厚は異なるものの、比較的安定した堆積をみせる。ただし、調査区B4区の壁際では基本土層にみられない層が堆積する窪地状の範囲がみられた。また、C7区においては、谷状の深い落ち込みがみられ、そこにVIb層が厚く堆積する状況が確認された。

また、上でみたように、基本土層が地点により堆積していない範囲もみられることから、洪水等の水的作用下により層の流出があったものと想定される。地形的に高い調査区東側ではこのような層の流出がより頻繁に起こっていたものと考えられる。現実には、発掘調査中も夏の集中豪雨の際には、調査区の北東から南西に向けて包含層が流出し、南西部に設けた排水用の雨水槽の中に層が二次的に堆積する状況がみられた程である。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

本遺跡の遺構の大部分は古代～中世の所産であるといえる。包含層からは多くの古墳時代の土師器が出土しているが、確実にこの時代の遺構と考えられるのは、調査区東側で検出した土器埋設遺構および土器溜まり (SR) のみである。以下、古墳時代の遺構・遺物について報告する。

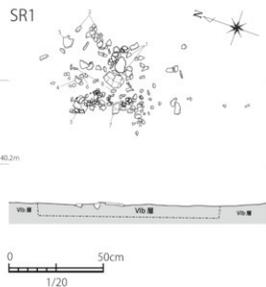
1 土器埋設遺構・土器溜まり (SR)

古墳時代の土師器が埋設されたと考えられる遺構を1基検出した。また、掘り込みがなく、数個体の土師器がまぎらって出土した範囲を1箇所確認している。両者は本来、意図的に土坑内に埋設されたものと、単純にまぎらめて廃棄されたものという大きな違いがある。しかし、検出遺構が少なく、遺存度の高い遺物が出土しているという共通点から、ここでは土器埋設遺構と土器溜まり (SR) として一括して報告する。

SR1 (第222図)

C7区で検出しており、1.1m×0.6mの範囲で古墳時代の土師器が集中して出土している。VI b層中で検出しており、VI層期の遺構といえる。掘り込みは伴っていない。出土した遺物は破片が多く、同一個体と考えられるが接合しない資料が多い。

1～8が図化した資料である。甕および坏と考えられる。1は土師器甕である。やや膨らむ胴部から内湾しながら立ち上がり、頭部でくの字に外反する。口径24.2cmを測る。2・3は直口ないしは内湾する土師器甕の口縁部である。両者共に口径22cm前後を測る。2は輪積みの痕跡が明瞭に残る。4は刻目突帯をもつ甕の頭部である。



第222図 SR1・2 実測図 (S=1/20)

刻目内部には布目圧痕が残る。5は1と同様の外反する甕の口縁部。6は内面に赤彩の痕跡が残る土師器坏と考えられる。7と8は甕の底部で、7は平底、8は丸底を呈する。

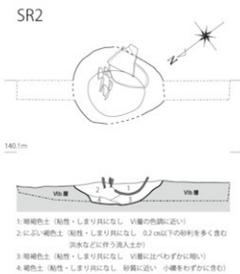
SR2 (第222図)

F7区で検出しており、長軸0.48m、短軸0.4mの楕円形の土坑中に土師器甕が埋設されていた。ただし、土坑の底部付近には流入土と考えられる砂質の強い土が堆積しており、出土した甕も欠損する部分がある。そのため、当初より完形品を土坑に埋設したのではなく、ある程度土坑が埋まった後、その窪みを利用して破損した土器を埋設したものと考えられる。土器の破断面には新しい欠損と考えられる部分も認められるため、欠損部は重機による表土剥ぎの際に剥ぎ取ってしまった可能性も考えられる。

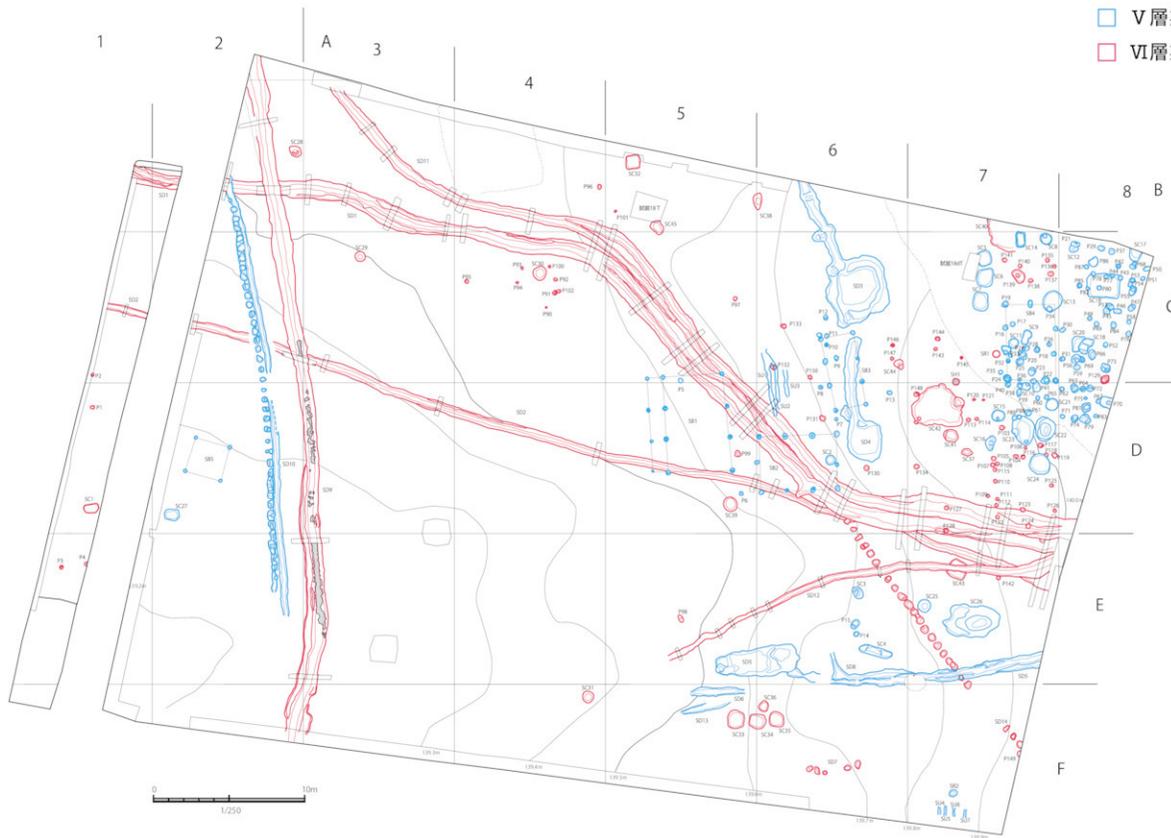
9が土坑内より出土した土師器甕である。図面上では完形に復元するが、大きく口縁部と胴部～底部に分かれて割れており、口縁部も約半分は欠損する。平底を呈し、頸部から口縁部にかけてくの字に外反する。内外面共に丁寧なナデ調整が加えられる。胎土には角閃石・石英を多く含む。口径24cm、底径7.7cm、器高28cmを測る。

2 包含層出土遺物

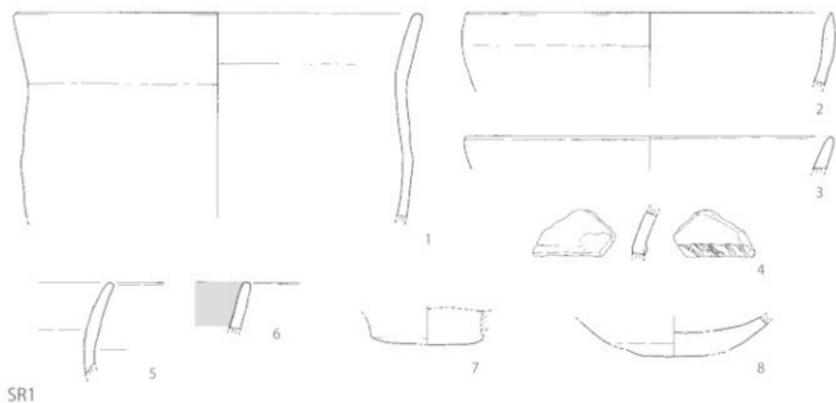
10～52が包含層から出土した古墳時代の遺物である。10～21は土師器甕。10は頸部の屈曲が弱く、胴部からほぼ直線的に開きながら立ち上がる器形を呈す。口径22cmを測る。11も大きく開く甕の口縁部である。頸部で強くくの字に屈曲する。外面にはハケム様の調整がみられる。12～16は甕の頸部付近と考えられる資料である。いずれも刻目突帯を有す。12と15の突帯にはヘラ状工



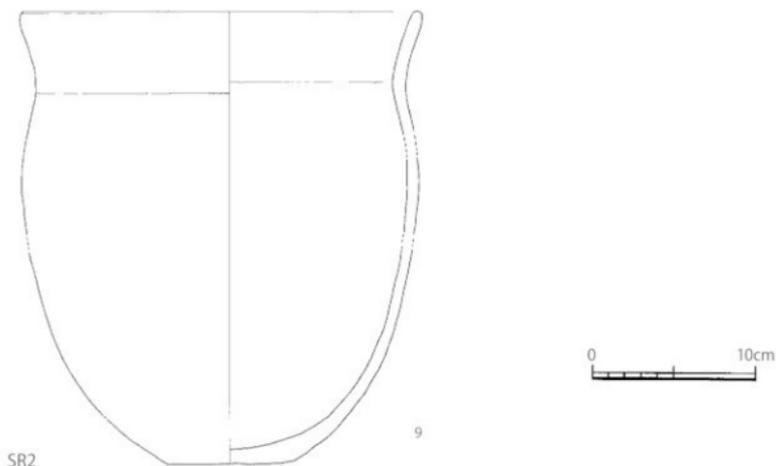
1. 褐色土 (焼性・しまり弱) にし、VI層期の色調に近い
2. 赤い-褐色土 (焼性・しまり弱) にし、0.2cm以下の砂利を多く含む 灰赤などに伴う流入土が
3. 褐色土 (焼性・しまり弱) にし、VI層期の色調に近い
4. 褐色土 (焼性・しまり弱) にし、砂質に近い (小礫をわずかに含む)



第223図 古墳時代～中世遺構配置図 (S=1/250)



SR1



SR2

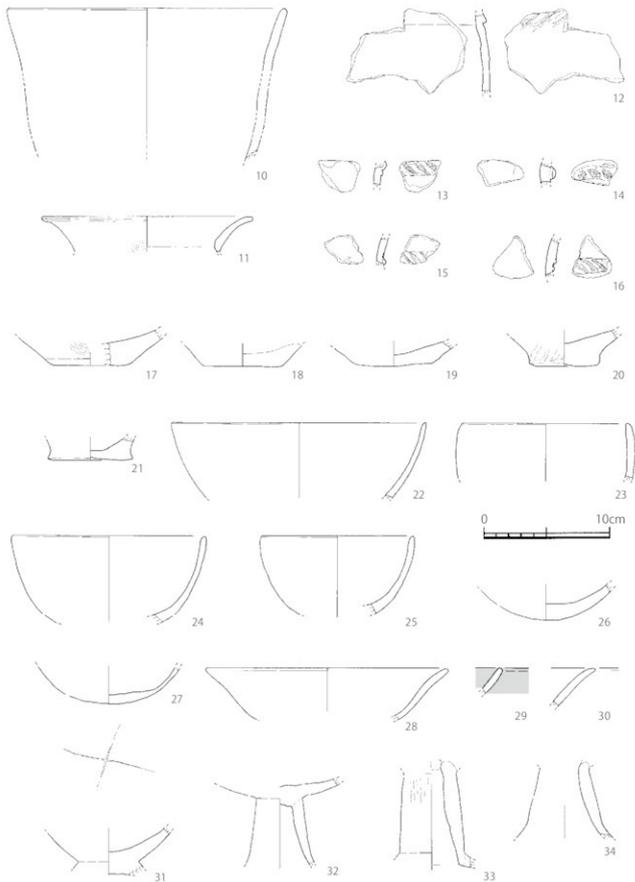
第 224 図 SR1・2 出土遺物実測図 (S=1/3)

具により斜めの刻目が施される。それ以外の突帯には布目圧痕が残る。17～21は甕の底部である。17～19は平底、20は円盤状の平底となる。21は底部中央がわずかに上げ底状を呈す。

22は半球形状の器形を呈す鉢であろうか。環にしては口径が大きく、20 cmを測る。23～27は土師器環。23～25は体部から口縁部にかけての資料で、いずれも半球形状の器形を呈し、口縁部は直口ないしはやや内湾する。26・27は底部片で、27の外面には×字の線刻がみられる。

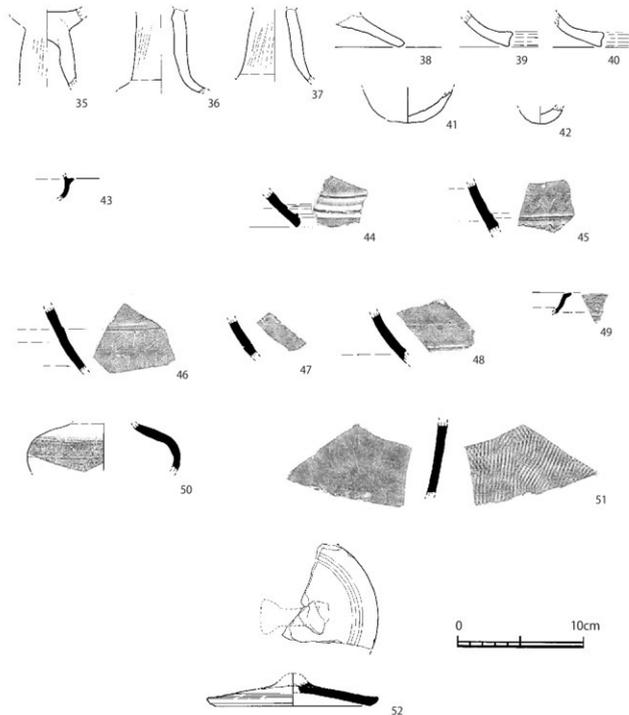
28～30は高環の口縁部片と考えられる。28は緩いS字状の器形を呈す。口径18.8 cmを測る。29も高環ないしは環の口縁部で、内外面に赤彩の痕跡がみられる。30はやや外反気味の高環の口縁部片。29・30は内外面にミガキが加えられる

31は脚台状の底部を有す鉢ないしは高環であろうか。32～37は高環の脚柱部である。35がわずかにエンタシス状を呈す他は、ハの字状に開くもの(32・34・37)やほぼ直線的に裾部へ下がるもの(33・36)がある。外面



第 225 図 包含層出土古墳時代遺物実測図① (S=1/3)

にはミガキを施すものが多い。38～40は高環の脚部である。39・40の裾端部は凹線状に窪む。
 41・42はミニチュア土器である。41は42に比べるとやや大型である。
 43～52は須恵器である。43は坏身。44～48は同一個体の可能性が高い資料である。筒形器台の脚部から裾部にかけてであろうか。径はかなり大きくなるものと推測される。突帯と突帯の間に櫛描波状文を施す。器壁は薄く、胎土は中央が青灰色を呈し、内外側が灰色を呈すサンドイッチ状となる。
 49は櫛描波状文を施すハソウの口縁部、50は体部である。50の肩部下位には櫛描波状文とそれを挟むように2条の沈線がみられる。
 51は須恵器甕の胴部片か。外面には格子目タタキが、内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。
 52は蓋であろうか。大部分が欠損するが、上面観がリボン状を呈すつまみがつくようである。端部にかえりではなく、内傾するように斜めに面取りされる。



第 226 図 包含層出土古墳時代遺物実測図② (S=1/3)

第4節 平安時代～中世の遺構と遺物

前節でみたとおり、包含層からは古墳時代に帰属すると考えられる遺物が平安時代～中世の遺物よりも多く出土している。しかし、検出された遺構についてはその大部分が平安時代～中世の所産であるとと考えられる。

この時期の遺構としては、掘立柱建物跡が5棟、土坑45基、溝状遺構14条、ビットが150基程を数える。その他鉄杖遺構と考えられる小溝列をわずかな範囲で検出している。以下、それぞれの遺構および出土遺物について報告する。

1 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡は合計5棟を数える。2間×3間を基本とし、廂をもつ建物が1棟検出されている。5棟全ての建物跡はVI層上面で検出されており、V層期の遺構と考えられる。

SB1 (第228図)

C・D5区で検出しており、身舎の規模は桁行3間(6.32m)、梁行1間(4.2m)で西側に1面廂が付く。廂までいれると梁行は5.28mを測る。柱間距離は桁行平均2.1mである。主軸はN-3°-Eにとる。身舎の面積は26.54㎡、廂まで入れると33.36㎡を測る。身舎柱掘り形は径30cm弱のきれいな円形を呈す。廂部分の柱穴の径は一回り小振りとなる。検出面からの深さは廂部分も入れて10～35cmを測る。柱痕跡と考えられるものは確認できなかった。SD1・2・11を切る。周辺を走行する溝状遺構群よりは新しい遺構と考えられる。

遺物は出土していない。

SB2 (第228図)

SB1の東側に隣接してD6区で検出している。桁行3間(5.12m)、梁行2間(3.65m)で総面積は18.68㎡を測る。柱間距離は桁行平均1.7m、梁行平均1.83mを測る。主軸はN-87°-Eにとる。柱穴の検出面からの深さは15～35cmを測る。梁行の中央の柱穴が浅い傾向にある。柱穴掘り形は、径25～40cm程の楕円形を呈すものが多い。平面・断面共に柱痕跡と考えられるものは確認できなかった。P7のみ建て替えがみられる。SB1同様にSD1・2・11を切る。

遺物は出土していない。

SB3 (第229図)

SB2の北東、C・D6区で検出している。桁行3間(4.84m)、梁行1間(2.16m)で総面積は10.45㎡を測る。桁行の柱間距離は平均1.61mを測る。主軸はN-11°-Eにとる。検出面からの深さは、17～42cmを測る。柱穴の掘り形は、

径20～40cmの円形ないしは楕円形を呈す。柱痕跡と考えられるものは検出できていない。P4は二つのビットが切り合う状況であったため、柱の建て替えの可能性を考えた。しかし、より新しいP4aよりも切られるP4bの方が柱筋が通るため、P4aとした柱穴は掘立柱建物跡とは別の遺構である可能性もある。P6がSB4に切られる。

図化できる遺物は出土していない。

SB4 (第229図)

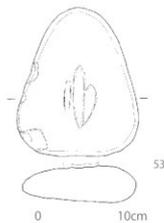
C7区で検出しており、桁行3間(5m)、梁行2間(3.25m)で総面積16.25㎡を測る。建物の北東隅の柱穴はSC13に切られており、検出できていない。主軸はN-1°-Eにとる。検出面からの深さは19～67cmを測る。柱穴の掘り形は、径30cm～52cmの不整円形を呈す。P2～4の土層断面中央には垂直方向の立ち上がりが見られる。P3の断面ではこの土層の輪郭に沿って柱の木質部分が残存していた。そのため、埋土の2層としたものは柱痕跡であるものといえる。本遺構のP5が単独のビットであるP41を切る。同様にP7はSC11を切る。

遺物は出土していない。

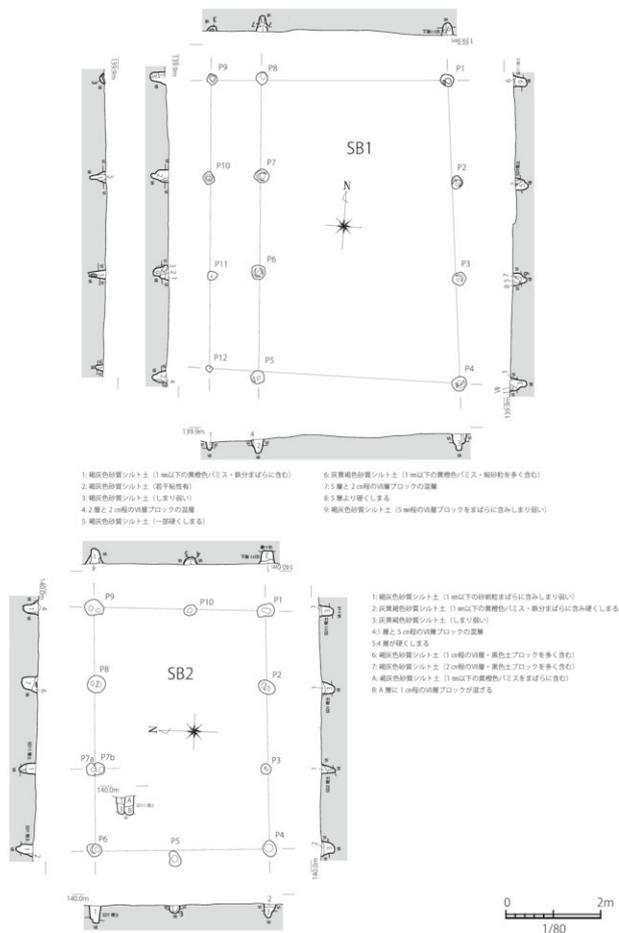
SB5 (第229図)

D2区で検出した桁行1間(2.44m)×梁行1間(2.28m)の掘立柱建物跡である。VI層中で検出している。主軸はN-75°-Wにとる。検出面からの深さは50～60cm前後を測る。柱穴の掘り形は、径20cm前後の円形ないしは楕円形を呈す。土層断面の観察からは、埋土上位から下位まで同一の黒色土が堆積しており、柱穴の径がほぼばの径と考えられる。

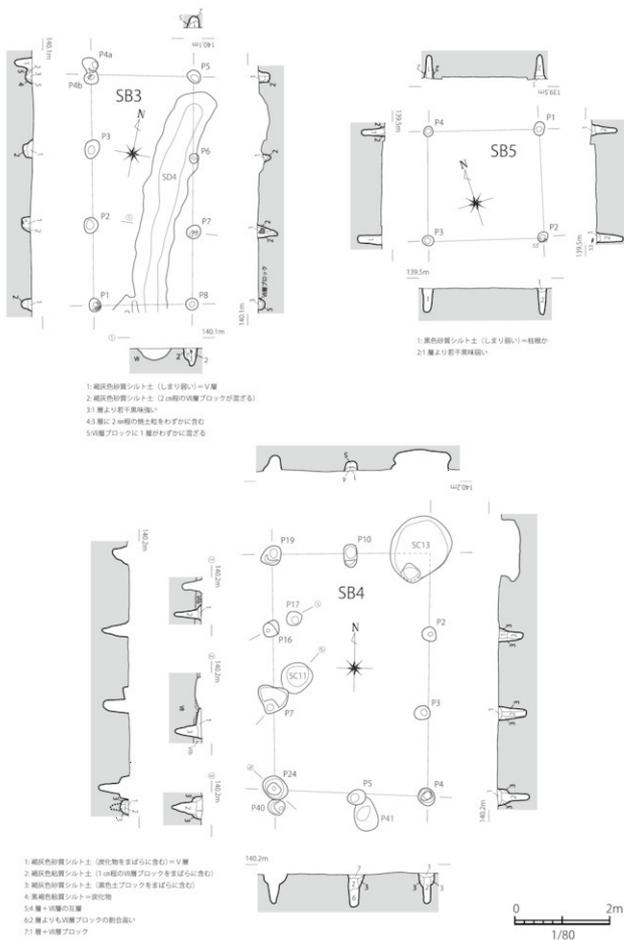
53がSB5のビットから出土した砂岩製の砥石である。最終的な柱穴の検出面からは若干浮いた状態で出土しているが、本来はSB5のP2に伴う遺物と判断した。扁平な砂岩製の1面に砥面が認められ、3条の磨痕を伴う溝が確認できる。



第227図 SB5 出土遺物実測図 (S=1/4)



第228図 SB1・2実測図 (S=1/80)



第229図 SB3～5 実測図 (S=1/80)

2 土坑 (SC)

七日市前遺跡では、井戸跡の可能性が高いものも含めて、合計45基の土坑を検出した。真米田遺跡と同様に、基本的には径が1m前後より大きなものを土坑として調査しているが、それより小振りなものでも、円形以外の平面プランを呈するものは土坑として分類した。また、出土遺物からは大きな時期差は認められないもの、検出したレベルおよび堆積する埋土から大きくV層期とVI層期の遺構に分かれる。以下、それぞれの遺構および出土遺物について、まずはVI層上面検出遺構 (V層期)、次にVII層上面検出遺構 (VI層期)の順に報告する。

SC2 (第230図)

D6区でSB2の柱穴配置の内部、VIb層上面で検出している。径0.64mの円形を呈す。検出面からの深さは14cmを測る。遺物は出土していない。

SC3 (第230図)

E6区、VIb層上面で検出している。長軸0.84m、短軸0.6mの楕円形を呈す。検出面からの深さは26cmを測る。図化できる遺物は出土していない。

SC4 (第230図)

D6区、VI層上面で検出している。長軸2.24m、短軸0.54mの長楕円形を呈す。検出面からの深さは24cmを測る。遺構の中央が一段窪みその両側がわずかにテラス状となる。遺物は出土していない。

SC5 (第230図)

C7区、VI層上面で検出している。長軸1m、短軸は一部試掘18dトレンチに破壊されるため不明であるが、0.9m程の隅丸方形を呈すと推測される。検出面からの深さは16cmを測る。

54は埋土内より出土した中国産の黒陶器である。破片のため器種は不明である。

SC6 (第230図)

SC5の南に隣接してC7区で検出した土坑である。長軸1.2m、短軸1.04mの隅丸方形を呈す。検出面からの深さは16cmを測る。堆積する埋土はSC5と似る。図化できる遺物は出土していない。

SC7 (第230図)

SC6の南に隣接してC7区で検出した。長軸1.22m、短軸1mの隅丸方形を呈す。検出面からの深さは24cmを測る。埋土はSC5・6のものに似る。遺物は出土していない。

上述のSC5～7については、検出した当初、3基の似たようなプランを有す土坑が並んでいたため、近世築の可能性も考えていた。しかし、上で報告したようにそのよな要素はみられなかった。いずれも用途不明の土坑で

ある。

SC8 (第231図)

C7区でVIb層上面にて検出しており、径0.8mの円形を呈す。検出面からの深さは二段掘りの最も深いところで38cmを測る。遺構の北側の底面が小ビレットが穿たれたような二段掘りとなる。遺物は出土していない。

SC9 (第231図)

C7区でVIb層上面にて検出しており、長軸1m、短軸0.56m、深さ10cmを測る。平面形態はひょうたん形を呈す。遺物は出土していない。

SC10 (第231図)

D7区でVIb層上面にて検出しており、P38に切られる。長軸0.6m、短軸0.5mの楕円形を呈すものと考えられる。検出面からの深さは14cmを測る。P38は径0.4m程の円形を呈し、深さは64cmを測る。SC10の北側底面は二段掘りとなる。

55がSC10の埋土から出土した土師器である。底部切り際は糸切りである。口径13cm、底径6.5cm、器高2.7cmを測る。底部から直線的に開きながら立ち上がる器形を呈す。法蔵からは13世紀前半頃の所産と考えられる。

SC11 (第231図)

C7区でVIb層上面にて検出しており、SB4のP7に切られる。径0.68mの円形を呈し、検出面からの深さは12cmを測る。遺物は出土していない。

SC12 (第231図)

C8区でVIb層上面にて検出しており、P21に切られる。長軸0.56mを測り、楕円形を呈すものと推測されるが、短軸はP21に切られるため不明である。検出面からの深さは56cmを測る。P21は0.56×0.3mの楕円形を呈し、深さは66cmを測る。遺物は出土していない。

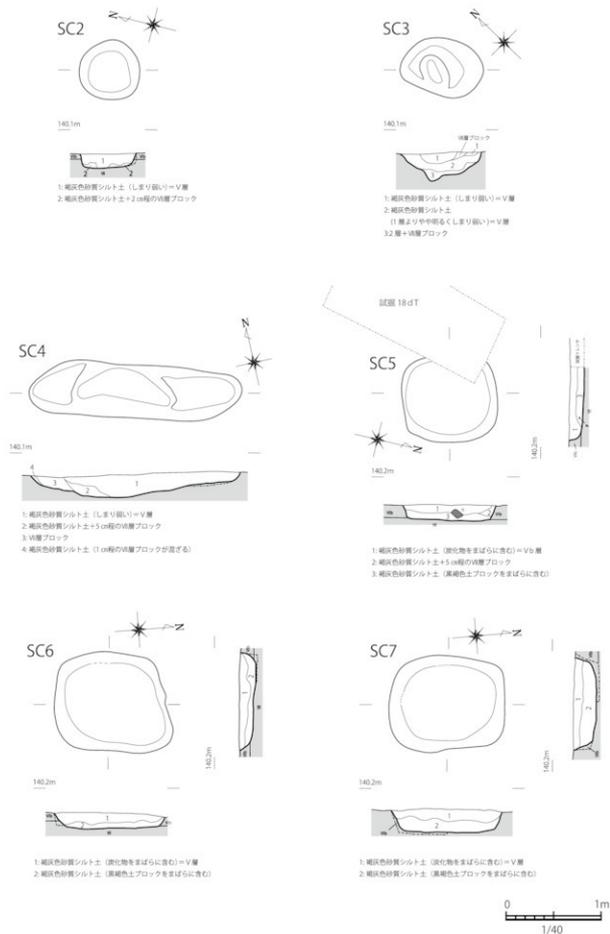
SC13 (第231図)

C7・8区でVIb層上面にて検出しており、P34に切られる。長軸1.46m、短軸1.2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。P34は0.4mの円形を呈し、深さは54cmを測る。

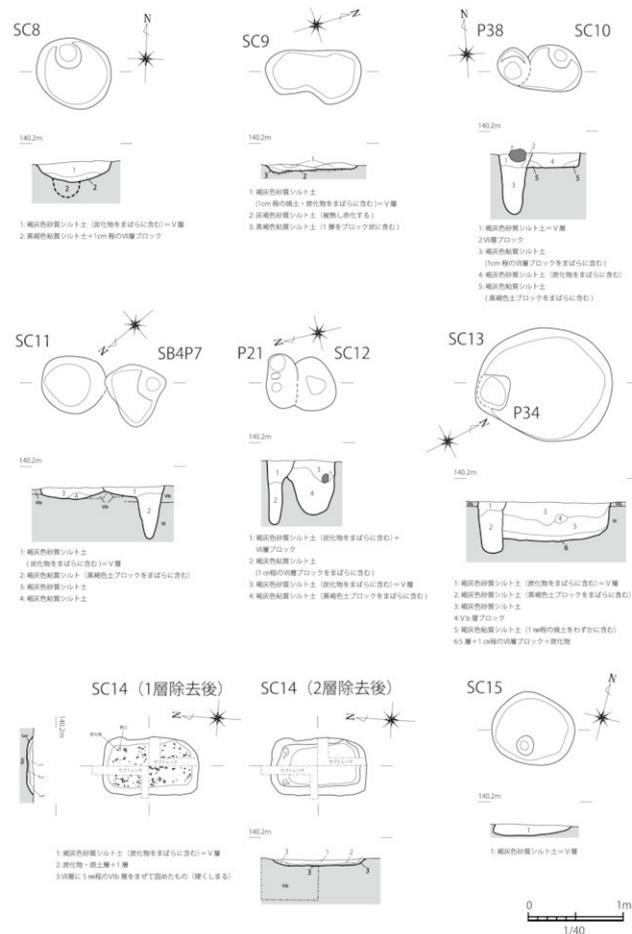
56・57はSC13出土遺物である。56は底部糸切りの土師器。57は器種不明の陶磁器である。内外面共に施されるが、ほとんどが剥離する。

SC14 (第231図)

C7区、VIb層上面で検出しており、長軸1m、短軸0.6mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは8cmと浅い。埋土の最上層である1層を除去すると焼土や炭化物が薄く堆積する層を確認した。それより下位には土坑の掘り形に沿って、基本土層のVII層にVIb層のブロックを混ぜて固めた層が貼り付けられていた。V層を掘り下げた後



第 230 図 SC2 ~ 7 実測図 (S=1/40)



第 231 図 SC8 ~ 15・P21・34・38 実測図 (S=1/40)

に検出していることから、掘り込みは本来からかなり浅かった可能性が高い。遺物が出土していないため、その評価は難しいが、壁面・床面に固めた土を貼り付けていることや、焼土と炭化物を含む層がその上位で検出されていることから、厳密に関連ないは焼成土坑であったものと推測される。

SC15 (第 231 図)

D7 区の VI b 層上面で検出している。長軸 0.88 m、短軸 0.76 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 12 cm を測る。南側の底面には小さなピットが穿たれ、二段掘りとなる。遺物は出土していない。

SC16 (第 233 図)

D7 区の VI b 層上面にて検出している。長軸 1 m、短軸 0.6 m の不整形円形を呈す。検出面からの深さは 10 cm を測る。遺構の南北両側が一段窪み、上面観が眼鏡状を呈

す。遺物は出土していない。

SC17 (第 233 図)

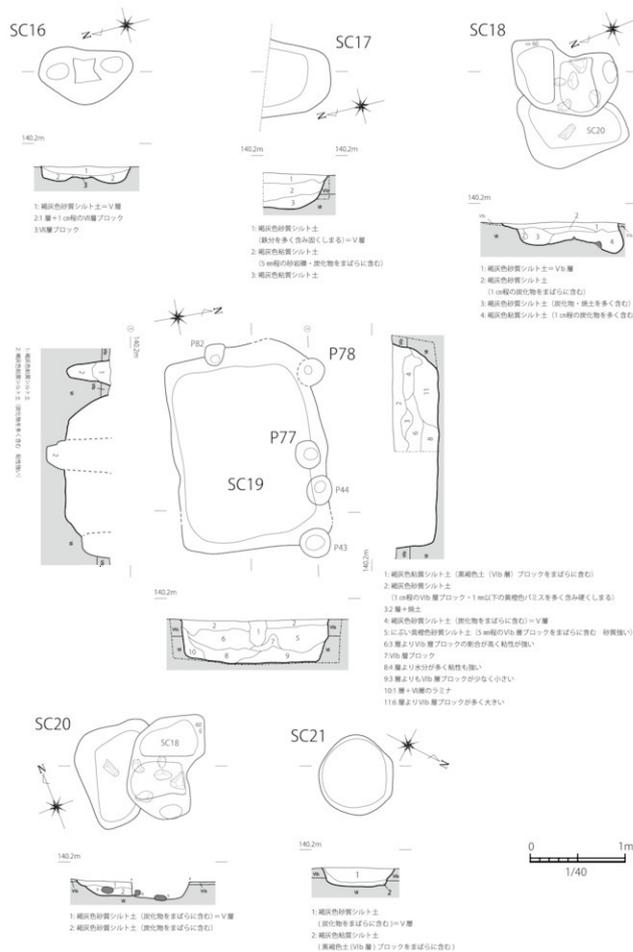
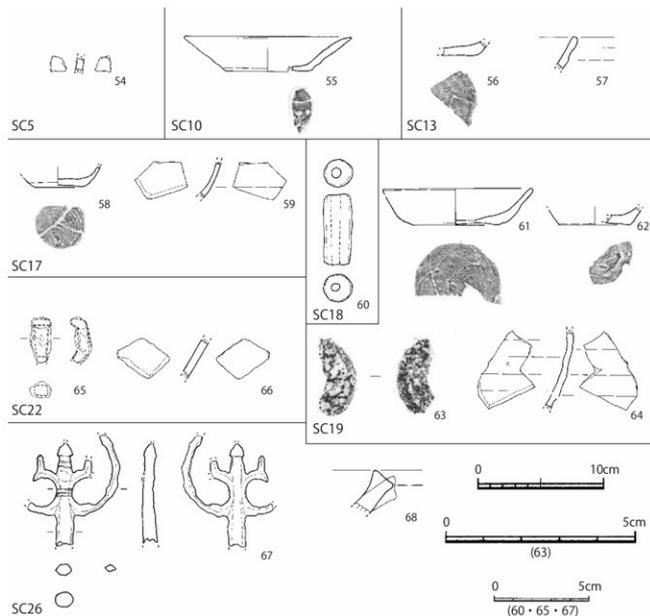
C8 区の VI b 層上面にて検出している。調査区外にも延びるため、規模は不明である。検出面からの深さは 36 cm を測る。

遺物は 58・59 が出土している。58 は底部系切り土の師器小皿。底径 3.8 cm を測る。59 は龍泉系素青磁碗Ⅳ類である。

SC18 (第 233 図)

C8 区の VI b 層上面にて検出している。SC20 を切る。長軸 1.1 m、短軸 0.74 m、深さ 32 cm の不整形を呈する。底面は平坦でなく、南側に段状に傾斜する。

60 は SC18 の埋土上層で出土した土製管玉である。長さ 3.7 cm、厚さ 1.4 cm を測る。また、底面からは礎が多く出土している。



SC19 (第233図)

C8区のVIb層上面で検出している。P43・44・77・78・82に切られる。長軸2.2m、短軸1.6mの長方形を呈す。検出面からの深さは最大で48cmを測る。底面はほぼ平坦となる。埋土にはVIb層ブロックが含まれる層が2つみられるため、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は61～64が出土している。61は土師器坏で、底部は糸切りである。口径11.7cm、底径6.8cm、器高2.9cmを測る。62は土師器小皿。口縁部は欠け、底径は5.6cmを測る。これら土師器坏・小皿の法量からは15世紀中頃の所産と考えられる。

63は銅銭である。大きく欠損する上に錆が著しく、文字は判読できない。

64は中国産黒釉陶器の壺あるいは鉢であろうか。埋土中層から出土した破片とC7区で出土した破片が接合している。

SC20 (第233図)

C8区のVIb層上面で検出した。SC18に切られるため、全体的な規模は判然としなが、長軸1.2mの不整形形を呈すものと推測される。検出面からの深さは14cmを測る。底面からは縄が出土しているが、その他の遺物は出土していない。

SC21 (第233図)

D7区のVIb層上面にて検出した。径0.8mの円形を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。埋土の大部分には基本土層のV層が堆積する。

SC22 (第234図)

D7区のVIb層上面で検出した。SC23に隣接している。長軸1.6m、短軸1.32mの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.1mを測る。断面形態はロート状を呈し、底面の幅は20cm程と狭くなる。最下部は地山層であるVII層を抜いて砂礫層まで到達し、湧水が認められる。平面規模・形態、深さを考えると井戸である可能性が高い。

65・66はSC22の出土遺物である。65は鉄釘で、頭部が残る。断面は横長長方形を呈するものと考えられる。

66は中国陶器の壺であろうか。外面には黄褐色の釉薬がかかる。

SC23 (第234図)

SC22の西側に隣接してD7区のVIb層上面で検出した。P88と89に切られる。長軸1.94m、短軸1.56mの楕円形を呈する。検出面からの深さは22cmを測る。

SC24 (第234図)

D7区で検出しており、径1.4mの円形を呈する。検出面からの深さは26cmを測る。VII層上面で検出しているが、

これはSC24の周辺にはV層の下位にVIb層が堆積しており、その直下にVII層のみみられることに起因する。堆積する埋土から、本来はV層期の遺構といえる。

SC25 (第234図)

E7区のVIb層上面で検出している。径0.86mの円形を呈す。検出面からの深さは22cmを測る。埋土の大部分にはV層が堆積する。遺物は出土していない。

SC26 (第234図)

E7区のVIb層上面で検出している。長軸3.7m、短軸2.1mの不整形楕円形を呈する。遺構の西側から東側に向けて緩やかに深くなる。最も深いところで検出面から34cmを測る。埋土の最上層にはV層が堆積する。

67と68が出土遺物である。67は銅製の錐杖である。埋土の上層から出土している。輪の多くは欠損しており、輪頂部も残っていない。輪中央部の宝塔を表したと考えられる部分も多くは欠損する。腐食が著しく土と同化している部分が多く、取り上げることが出来なかった部位も多い。形態的にはかなり簡略化された作りであるため、中世以降の資料であると考えられる。また、小型であることから羊銅銭の可能性もある。

68は備前焼の楕円の口縁部と考えられる。

SC27 (第234図)

D2区で検出しており、長軸0.98m、短軸0.72mの不整形丸方形を呈する。検出面からの深さは18cmを測る。埋土にはV層が堆積する。遺物は出土していない。

以上、VI層上面で検出した土坑を報告してきた。以下、VII層上面で検出したVI層期と考えられる土坑を報告する。

SC1 (第236図)

市道部分であるD1区で検出した。長軸1m、短軸0.6m、深さ2cm程の浅い土坑である。平面プランは隅丸方形形を呈する。遺物は出土していない。

SC28 (第236図)

B2区で検出しており、長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形を呈する。遺構の南側がわずかにテラス状を呈し、北側がやや深くなる。検出面からの深さは14cmとなる。

SC29 (第236図)

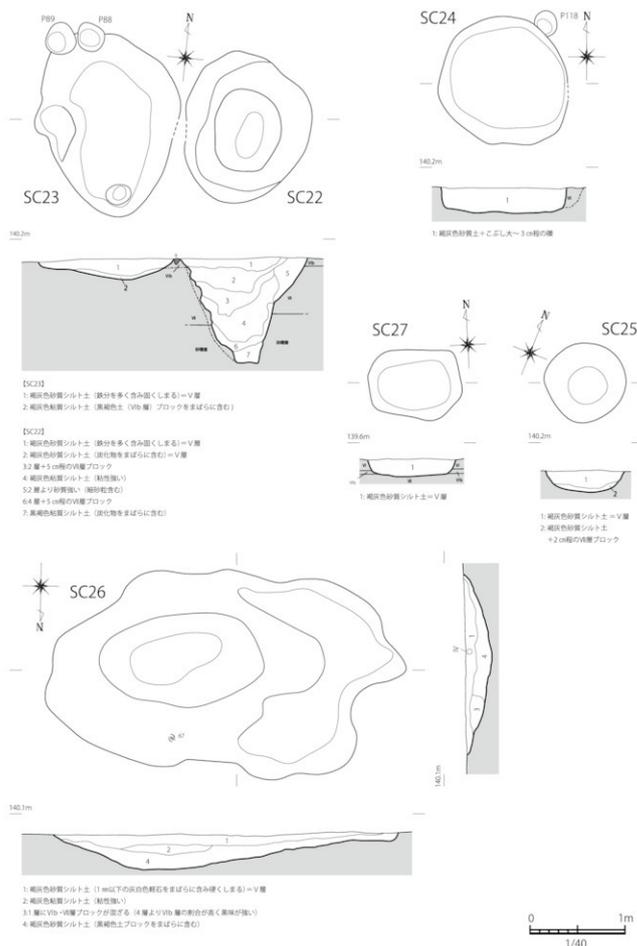
C3区で検出しており、径0.68mの円形を呈す。検出面からの深さは16cmを測る。埋土にはVIb層が堆積する。

SC30 (第236図)

C4区で検出しており、径0.94mの円形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。遺物は出土していない。

SC31 (第236図)

F4区で検出しており、径0.78mの円形を呈す。検出面からの深さは32cmを測る。埋土上層にはVIb層が堆



第234図 SC22～27実測図 (S=1/40)

積する。遺物は出土していない。

SC32 (第236図)

B5区のVII層上面で検出している。長軸0.96 m、短軸0.9 m、検出面からの深さは36 cmを測る。平面形態は隅丸方形を呈する。埋土の上層にはVI b層が堆積する。

SC33 (第236図)

F5区で検出しており、長軸1.22 m、短軸1.1 mの不整形隅丸方形を呈する。検出面からの深さは20 cmを測る。埋土の大部分はVI層である。遺物は出土していない。

SC34 (第236図)

F5・6区で検出しており、長軸1.1 m、短軸0.92 m、深さ18 cmを測る。平面形態は不整形隅丸方形を呈す。

SC35 (第236図)

F5区で検出しており、一辺1 m程の隅丸方形を呈する。検出面からの深さは18 cmを測り、埋土の大部分はVI層である。平面形態や規模、堆積する埋土の類似性から、関連する遺構である可能性が高い。しかし、遺物が出土しておらず、本来の機能・用途等は不明である。

SC36 (第236図)

F5区、SC33～35の北側に隣接して検出されている。長軸0.68 m、短軸0.62 mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは12 cmを測る。埋土の大部分はVI層が堆積する。遺物は出土していない。

SC37 (第237図)

D7区で検出しており、長軸0.72 m、短軸0.46 mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは12 cmを測る。埋土の上層にはVI層が堆積する。遺物は出土していない。

SC38 (第237図)

D5・6区で検出しており、長軸1.12 m、短軸0.56 mの不整形円形を呈す。検出面からの深さは30 cmを測る。

SC39 (第237図)

D5区で検出しており、長軸0.96 m、短軸0.9 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは14 cmを測り、埋土にはVI b層が堆積する。遺物は出土していない。

SC40 (第237図)

B・C7区で検出しているが、遺構の大部分は調査区外、およびV層側の遺構が集中する範囲に伸びていく。そのため規模は不明であるが、検出できた範囲をみるとかなり大型の土坑になると思われる。遺構の深さは最大で54 cmを測る。遺物は出土していない。

SC41 (第237図)

D7区で検出しており、長軸1 m、短軸0.8 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは20 cmを測る。

遺物は69の鉄釘が出土している。頭部および先端部は欠損する。

SC42 (第238図)

D7区のVII層上面で検出した大型の土坑である。長軸3.44 m、短軸2.7 mの不整形形を呈する。検出面からの深さは最大で22 cmを測る。不整形ではあるが、掘り込みはしっかりとしており、断面U字形を呈する。埋土の最上層にはVI層が堆積する。底面には小さなピットや土坑状の窪みが認められるが、それ以外は平坦となる。

70・71が出土遺物である。70は龍泉窯系青磁の大坯ないしは盤皿類であろうか。小さな口縁破片である。F期(13世紀中頃～14世紀初頭前後)の所産と考えられる。

71は軽石製品。上端が細くなる円柱状を呈する。上端および側面は丁寧に整形される。支脚であろうか。

SC43 (第237図)

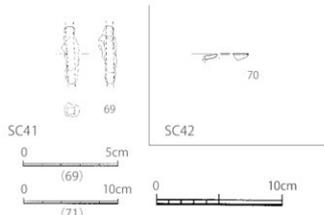
E7区で検出しており、一辺約0.6 mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは28 cmを測る。SD12に切られる。

SC44 (第237図)

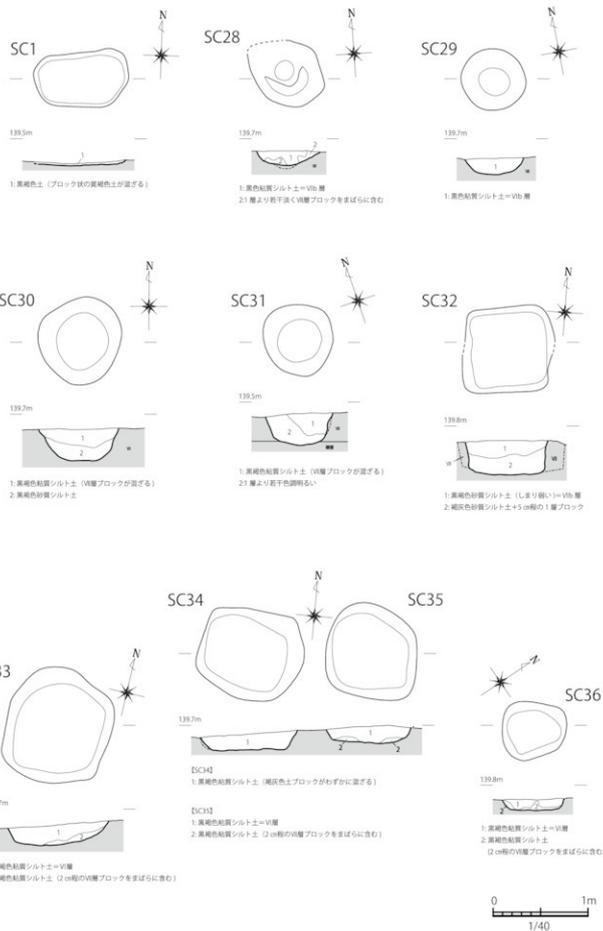
C6区で検出しており、長軸0.68 m、短軸0.6 mの不整形形を呈する。検出面からの深さは22 cmを測る。遺物は出土していない。

SC45 (第237図)

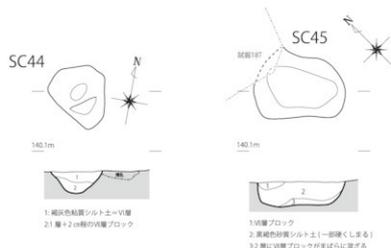
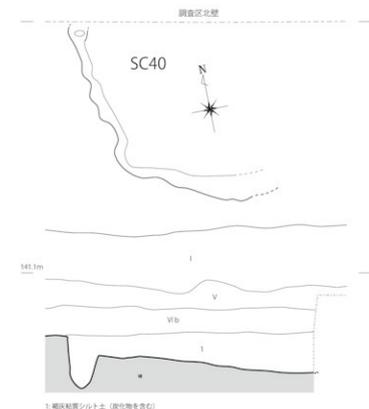
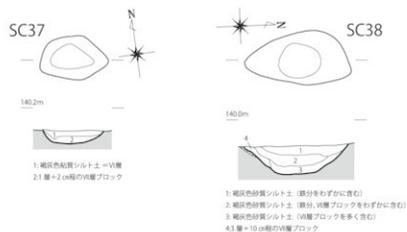
B・C5区、VII層上面で検出している。一部試掘18センチによって破壊される。長軸0.96 m、短軸0.74 mの不整形隅丸方形を呈する。検出面からの深さは28 cmを測る。



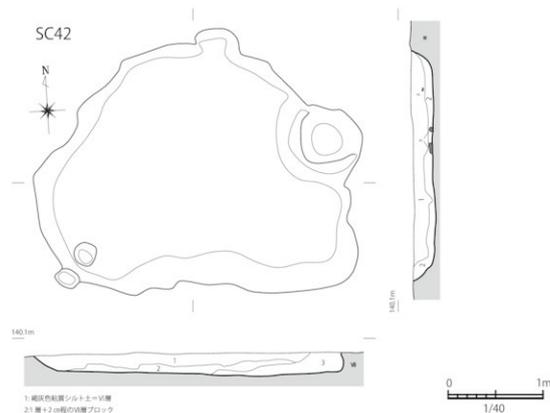
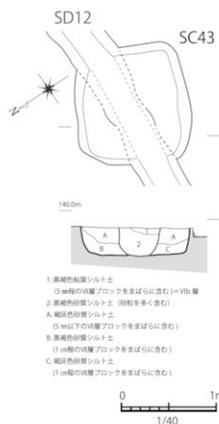
第235図 SC41・42 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3・1/4)



第236図 SC1・28～36 実測図 (S=1/40)



第237図 SC37～41・43～45 実測図 (S=1/40)



第238図 SC42 実測図 (S=1/40)

3 溝状遺構・道跡 (SD)

七日市前遺跡では、道跡と考えられる遺構も含め14条の溝状遺構を検出した。以下、検出した遺構について、V層期、VI層期の順に報告する。

SD3 (第239図)

B・C6区で検出しており、土坑状の窪みに溝が連結するような形態を呈する。VI層上面で検出しているが、これはSD3を検出した周囲にVI層ないしはVIb層がほとんど堆積していなかったことに起因する。埋土にV層が堆積していることから、本来はV層期の遺構といえる。一辺4m程を測る隅丸正方形の土坑部に、幅0.3～1.6mの溝状部分を取り付く。この溝状部分の底面はほぼ平坦で、土坑部に向かい傾斜がみられるわけではない。しかし、土坑部は深いところで検出面から40cmを測り、溝部分の30cm程よりは深くなる。そのため、溝状部分から土坑部へ水を流して貯水した溜め井状の遺構と考えられる。上述のように、埋土の上半にはV層起源と考えられる層が堆積する。

72～74がSD3出土遺物である。72・73は小皿の底部。共に底部は糸切りである。72は底径5cmを測るが、全体的な分量は不明である。

74は鉄釘と考えられ、頭部が遺存する。断面は不整形四角形を呈する。

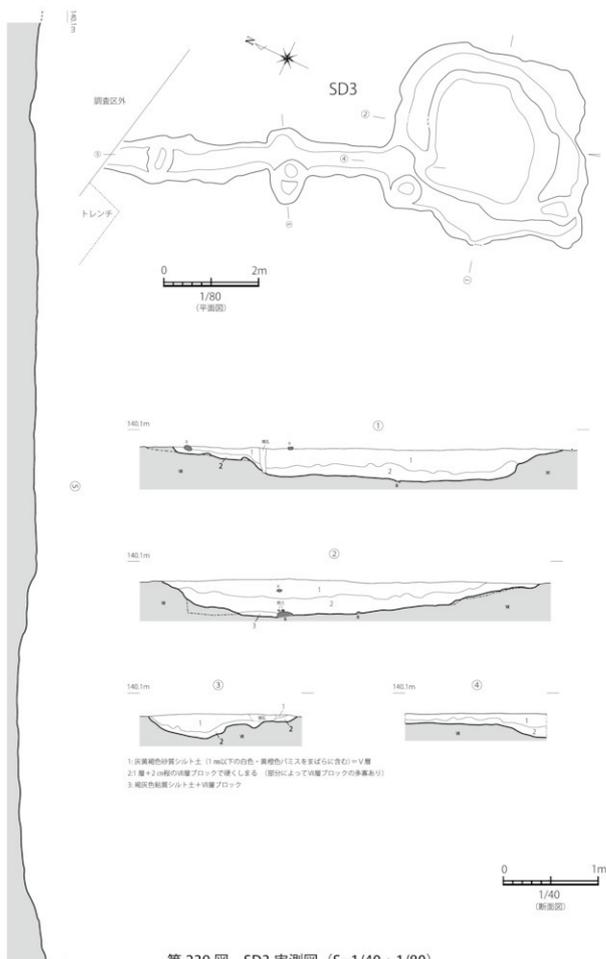
SD4 (第240図)

C・D区で検出しており、SD3と同様の土坑部に溝状部分が連結する形態を呈する。全体的な規模はSD3より小型といえる。土坑部は長軸2.68m、短軸2.22mの不整形隅丸方形を呈する。溝部分は、土坑との結節点から先端までで5.6mを測る。SD3とは異なり、溝部分の底面と土坑部分の底面はほぼ平坦で、むしろ溝部の先端が最も深くなる。検出面からの深さは最深度で24cmを測る。結節部の断面を確認しており、埋土の堆積状況からは別遺構でなく溝部と土坑部から構成される一つの遺構と判断できる。埋土にはSD3と同様のV層起源と考えられる層が堆積している。形態や検出位置を考えるとほぼ同時期の関連する遺構である可能性が高い。やはりSD3のような溜め井としての機能が想定される。

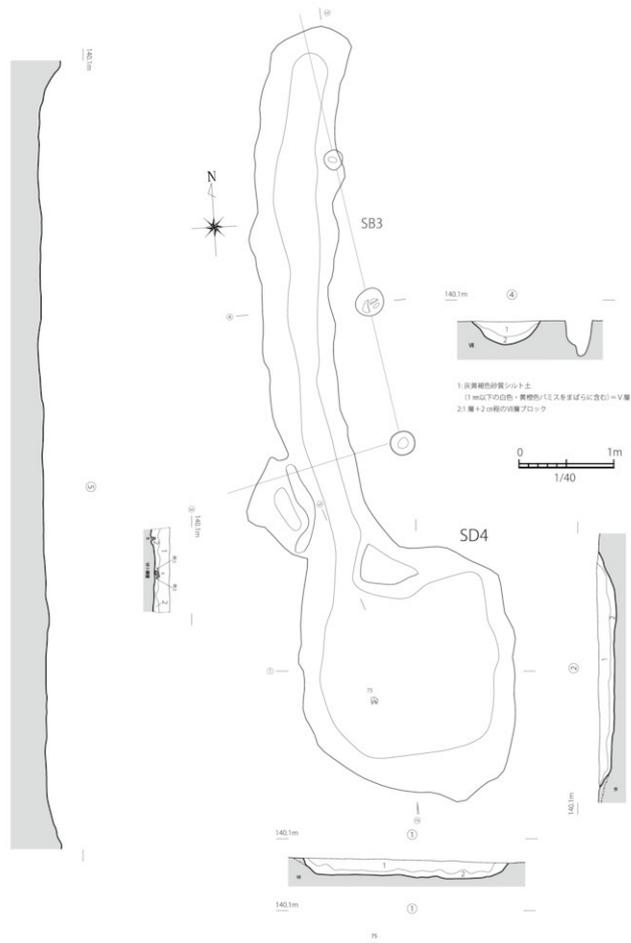
75～80がSD4から出土した遺物である。75は本来は木製桶に入っていたと考えられる漆の塊である。木製の漆を塗った椀をバレットとして再利用していたものが、木質は既に腐食し、そこに溜まっていた漆のみが遺存したものと推定されている (第7章第4節参照)。

76は土師器小皿で底径4cmを測る。底部糸切り。77は土師器杯の底部である。径は復元できなかった。底部には板状圧痕がみられる。

78・79は龍泉窯系青磁碗と考えられる資料である。78



第 239 図 SD3 実測図 (S=1/40・1/80)



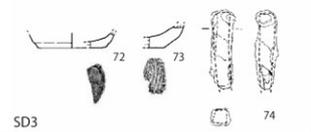
第 240 図 SD4 実測図 (S=1/40)

は龍泉窯系青磁Ⅳ類から上田Ⅱ類の資料と考えられる。口縁端部が短く外反する。G～H期（14世紀初頭～15世紀前半・中頃）の所産といえる。口径14.8cmを測る。79も同様の短く外反する口縁部の青磁碗である。上田Ⅱ類以降の資料と考えられる。14世紀後葉以降の所産といえる。80は備前徳の壺と考えられる。胴部片であろう。P88から出土した破片と接合している。

高、埋土下層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定では、605 ± 20BP (AD1290 ~ 1410) という値が得られている。出土遺物の年代観とも概ね整合的といえる。

SD5 (第242図)

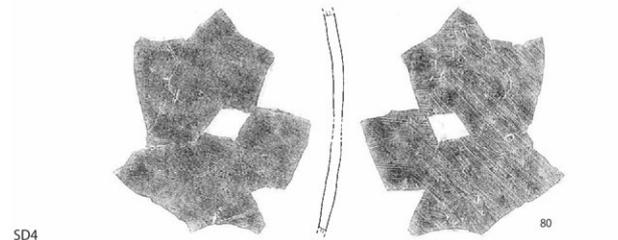
E6・7区のⅥb層上面およびⅦ層上面で検出している。Ⅶ層期の溝状遺構である。途中途切れる範囲がある



SD3



SD4



SD5



81

0 5cm

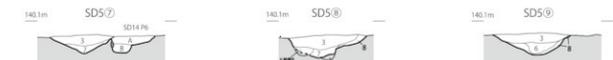
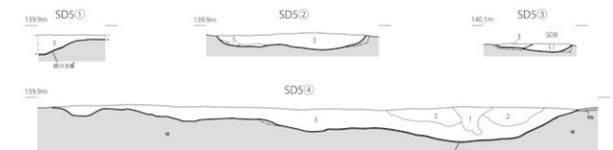
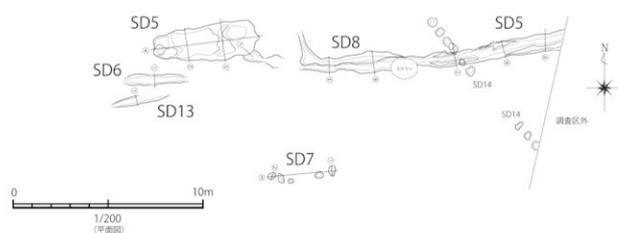
(74)

0 10cm

第241図 SD3～5 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

が、東西方向に走行する長さ17m程の溝部分と長軸5.6m、短軸1.9mの楕円形の溝を呈す土坑部が連結する。溝部分の検出面からの深さは最深で24cmを測る。溝部は土坑から離れた東側の方が深く、土坑に近い西側が浅くなる。土坑部分の検出面からの深さは最深部で38cmを測る。土坑の西側から東に向けて緩やかに傾斜するため、底面は平坦ではない。この底面は、鉄分が固着しており、水が恒常的に溜まっていた可能性が高い。溝部分は重複して走行すると考えられるSD8・14を切る。溝と土坑が連結する形態と土坑部に水が溜まっていたと考えられることから、SD3・4と同様の溜め井のような機能が想定される。

81は唯一図化できた出土遺物である。古墳時代の壺で、外反する頸部には刻目突帯が付く。流れ込みであろう。



1. 褐色色鉄質シルト土 (鉄分を多く含む深くしる)
- 2.1 層より鉄分少なくS=層の砂層をばらに含む
3. 褐色色鉄質シルト土 (鉄分をマゼンダに含む 水分を多く含む)
- 4.3 層+砂
- 5.1 層+砂層ブロック
6. 褐色色鉄質シルト土 (粘性強い、3層より若干褐色色強い)
- 7.6 層に5m程の砂層ブロックがばらばらに混ざる
- 8.6 層+砂層ブロック
9. 褐色色鉄質シルト土+溝底
10. 褐色色鉄質シルト土 (1m程の褐色色(紅土)を多く含む) = 8層
11. 褐色色鉄質シルト土 (砂質に傾斜・砂粒層を含む)



1. 褐色色鉄質シルト土 (SD5の1層に当たるより厚くしる水質ない)
1. 褐色色鉄質シルト土 (深くしる)=V層



1. 褐色色鉄質シルト土 (1m以下の砂層に、鉄分多く含む) = V層

0 1m

1/40 (断面図)

第242図 SD5～8・13 実測図 (S=1/40・1/200)

SD6 (第242図)

F6区で検出している。検出できた範囲では東西方向に長さ3.2m、幅0.6mを測る。検出面からの深さは6cm程を測るのみである。遺物は出土していない。

SD7 (第242図)

F6区で検出しており、径50cm前後のピットが並ぶ溝状遺構と考えられる。ただし、ピットは連続して並ぶものではなく、検出できていない範囲もある。芯々間の距離も40～70cmと幅がある。そのため、断定はできないがここでは波板状ピットの可能性が高い遺構として報告する。遺物は出土していない。

SD8 (第242図)

E6区でSD5に重複して検出されている。ほぼSD5と同

じ範囲を東西方向に走行しているようであるが、途中でややルートがずれ、北に向かい屈曲する。検出面からの深さは8cmを測る。遺物は出土していない。

SD10 (第243図)

調査区西側B～E2区で検出した南北方向に走行する溝状遺構である。北端は調査区外に延びていき、南端は徐々に浅くなり終息する。平面形態をみると、東側に溝状遺構が走行し、それに隣接して波板状のピット列が並走していることが分かる。断面を確認すると、わずかではあるがピット列のほうが溝部分を切っている。おそらく、溝部分がある程度埋没した後にピット列が形成されたものと推測できる。北端の調査区隔に向かうにつれ、溝部分とピット列が同化し、ピットがなくなる。北端の

ピットがみられなくなる場所には奉火の礎が置かれる。溝部分も、ピット列共に底面に硬化面は認められない。

波板状ピット列の断面をみると、南端からしばらくは底面の右側、左側、右側の順で交互に深くなっていることが分かる。このようなピット列は道路と認識される場合が多いが、ここでみられるような左右交互に深くなる場所が変わることは、歩行による窪みの形成を示唆する可能性があると考えられる。ピットの芯々間は70cm前後を測る。遺物は出土していない。

SD13 (第242図)

F6区でSD6の南に隣接して検出している。検出面はSD6に比べて20cm弱い。東西方向に走行し、検出できた範囲では長さ3.2m、幅0.5mを測る。検出面からの深さは4cm程とかなり浅い。遺物は出土していない。

以上、VI層上で検出したV層期と考えられる溝状遺構について報告してきた。次に、VI層期の溝状遺構を報告する。

SD1 (第244図)

調査区北半を蛇行しながら東西方向に走行する溝状遺構である。調査区壁の土層断面を確認すると、VI層中から掘り込まれているようであるが、堆積する埋土もVI層に類似したものも多く、明確な掘り込み面(生活面)は検出できなかった。調査区は幅である66.5mにわたって検出しており、幅員はSD11と重複・切り合い関係にあることから、不明瞭な範囲も多い。B区では1m程、そこから徐々に広くなり、最大で1.5m程になると推測される。検出面からの深さは14～32cm程を測る。

埋土はVI層をベースとし、そこに砂礫や細砂礫を含む層が幾層もみられる。そのため、溝内では水が流れていたが、もしくはは洪水等の影響を頻繁に受けていたものと推測される。溝の掘り形や底面の形状が地点によって異なることから、そのように判断される。さらに、溝の断面をみると、底面がW字状を呈している範囲が確認される。蛇行する範囲で特に顕著であることから、溝の走行方向は常に一定でなく、流れる水の量・速さによりわずかにずれることがあったものと考えられる。

調査区北半では数条の溝状遺構が重複しながら走行しており、複雑な様相を呈する。SD1はSD11に切られ、SD2を切る。SD12とは調査区東壁の土層断面でのみ切り合い関係が確認でき、SD12がSD1を切ることが分かる。SD11と12の前後関係は不明である。よって古い方からSD2→SD1→SD11・SD12となる。

82～93がSD1の埋土内から出土した遺物である。その内82～86は古墳時代の所産。82～84は土師器製の底部と考えられる。82は平底、83・84は丸底を呈する。

85は古墳時代の高坏の脚部である。86は古墳時代須恵器の坏蓋である。側面の段は比較的光明で、口縁部は直線的となる。

87～93は平安時代の遺物である。87は土師器環と考えられ、口径は12.6cmを測る。88も土師器の坏であろう。

89は底部にヘラ切り痕を残す環である。底径6.2cm、90は土師器蓋である。口縁部が短く反する。内面の段以下にはケズリが加えられる。口径18cmを測る。91～93は須恵器の環。91と93には火槽がみられる。93は底径7cm。

古墳時代の遺物については流れ込みである可能性が高く、遺構自体は平安時代の所産と考えられる。

SD2 (第245図)

調査区中央を横断するように、東西方向に走行する溝状遺構である。ほぼ直線的に延びており、検出した範囲では調査区幅の65m程を測る。幅は0.5m前後を測る。調査区壁の断面を確認すると、VI層中から掘り込まれているようである。検出面からの深さは20～30cm前後を測る。底面のレベルをみると、調査区の東側から西に向けて緩やかに傾斜していくことが分かる。埋土の下層には粒の大きな砂を多く含む層が堆積していることから、やはり水の流れがあったものと考えられる。水路のような機能をもち、東から西に向けて流れていたものと推測される。SD1と12に切られる。

94は唯一図化できた出土遺物である。古墳時代の土師器製の頸部と考えられる。布痕を残す刻目突帯が付く。古墳時代の所産であるが、流れ込みの可能性が高い。SD1の年代観と切り合い関係から、平安時代以前の所産と考えられる。

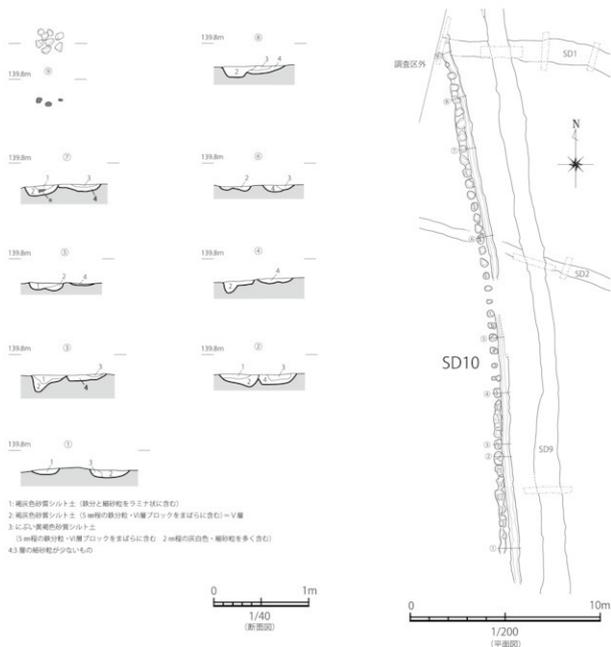
SD9 (第246図)

調査区西端を南北に縦断するように検出された溝状遺構である。西側に隣接してSD10が検出されており、走行方向はほぼ同一である。南北両端は調査区外に延びていくが、検出範囲の長さは45m程を測る。幅は1～1.5mを測る。検出面からの深さは最深部で26cmを測る。断面形態はU字状を呈する。

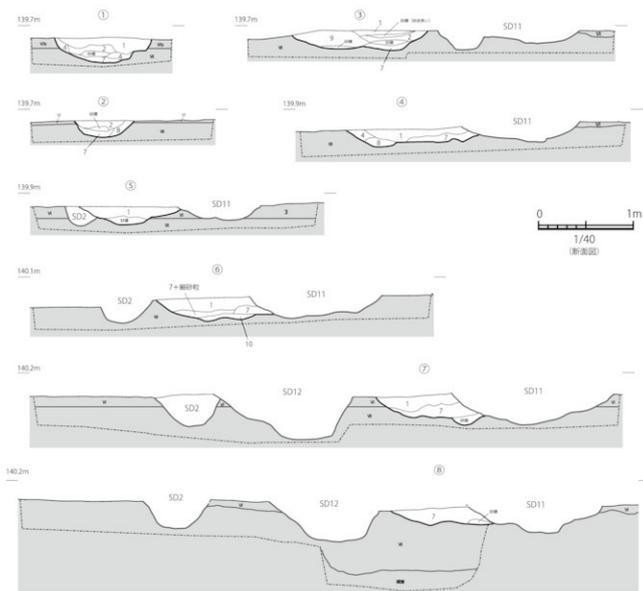
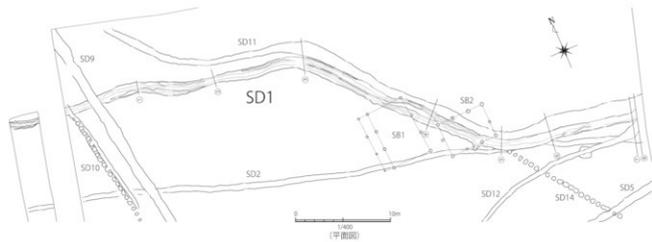
埋土の大部分はVI層ないしはそれに類似する層が堆積し、底面には硬化面を有する範囲が確認できる。溝の南半では西側ないしは東側にテラスが付く。テラス部分には硬化面は認められない。SD1・2を切る。

断面形態や底面に硬化面を有すること、ほぼ直線的に延びることなどから道路と考えられる。

95～97が出土遺物である。95は古墳時代の須恵器ハズウと考えられる資料である。孔部は半分程遺存する。口径は体部の最大径より小さく、外面の体部屈曲部と頸



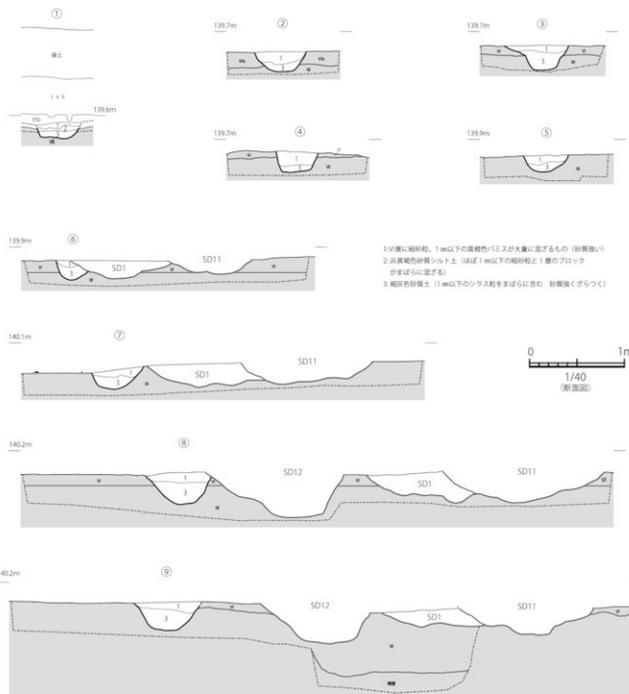
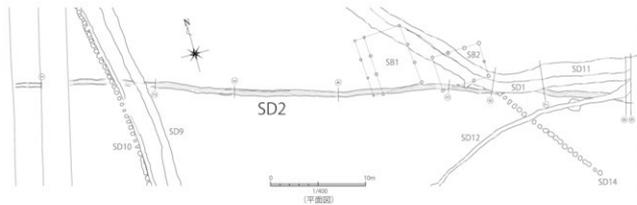
第243図 SD10実測図 (S=1/40・1/200)



- 1: 1層に鉄粉・細砂粒がわずかに混ざる
- 2: 黄褐色粘質シルト土 (3 m以下の高褐色(Feス)が少量に混ざる)
- 3: 褐色粘質シルト土 (砂質微塵)
- 4: 灰黄色粘質シルト土 (1 m以下の高褐色(Feス)も多く含む)
- 5: 層+5 m程度の厚層ブロック
- ※ 3・5・6 層は調査区周辺のみにみられる土層

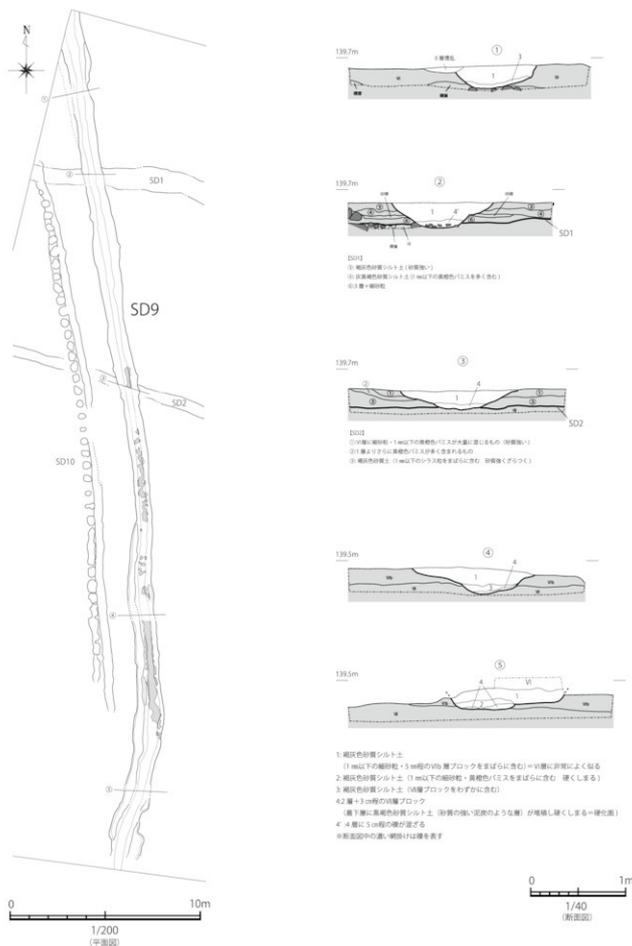
- 6: 3層+細砂粒
- 7: 黄褐色粘質シルト土 (1 m以下)の細砂粒・黄褐色(Feス)・少量をまばらに含む)
- 8: 黄褐色粘質シルト土 (1 m以下)の高褐色(Feス)・細砂粒をまばらに含む)
- 9: 黄褐色粘質シルト土 (1 m以下)の細砂粒・細砂粒 (5 m程度の厚層ブロックをまばらに含む)
- 10: 黄褐色粘質シルト土 (2 cm程度の、細砂粒を多く含む)

第 244 図 SD1 実測図 (S=1/40・1/400)



- 1: 1層に細砂粒、1 m以下の黄褐色(Feス)が少量に混ざるもの (砂質微塵)
- 2: 灰黄色粘質シルト土 (ほぼ 1 m以下の細砂粒と 1 層のブロックをまばらに混ざる)
- 3: 褐色粘質土 (1 m以下のシルト土をまばらに含む、砂質微塵が若干つく)

第 245 図 SD2 実測図 (S=1/40・1/400)



第246図 SD9実測図 (S=1/40・1/200)

部から口縁部にかけて櫛歯状文が認められる。5世紀中頃の産産であろうか。

96・97は土師器の小皿である。96は底部切り離し技法が不明瞭であるが、97は糸切りである。法量的には口径7.8cm前後、底径6.8cm前後、器高1.4cm前後にまとまる。これらの法量からは14世紀中頃～後半にかけての資料であると考えられる。

SD11 (第247図)

SD11とは同じルートで調査区を横断する溝状遺構である。検出した範囲での長さは55m程を測る。溝の幅は地点によって異なるが、0.6～1.6m程を測る。検出面からの深さは10～32cmを測る。調査区北壁の土層断面からは、VI層あるいはVIb層のどちらの層中より掘り込まれているか確定できなかったが、埋土の上層あるいは中層にVI層に似る土が堆積していることや、SD1との切り合い関係から、本来はVI層中から掘り込まれているものと考えられる。

埋土の土層断面を観察すると、砂礫層が幾層も堆積しているのが分かる。さらに掘り形や底面の形状が一定でないことなどから、SD1と同様に溝内で水が流れていたが、頻繁に洪水等の影響を受けていたものと推測される。緩くくの字に蛇行する場所では、溝の断面がW字を呈しており、水の流れによりバイパスが形成されたものと考えられる。底面のレベルをみると、調査区の東から北西に向けて緩やかに傾斜していくようである。

100～104が出土している。100は溝底面でも出土した土師器杯である。口径12.5cm、底径6.4cm、器高4.3cmを測り、底筋はヘラ切りである。やや器高が低いが、概ね9世紀第3四半期頃の産産と考えられる。101・102も同様の土師器杯である。103は高台付碗と考えられる。かなり肉厚な高台が付く。内面には赤彩の痕跡が残る。104は製塩土器片。内面に布目痕が残る。

SD12 (第248図)

E5～7区において検出した東西方向に走行する溝状遺構である。検出した範囲では長さ26m程を測る。遺構の東側は調査区外に延びていき、西端は徐々に浅くなり終息する。溝幅は0.4～1.4mを測る。検出面からの深さは最も深いところで46cmを測る。断面形態はU字を呈するところが多いが、調査区東端では幅が広がる。底面のレベルをみると大きな差はないが、わずかに東側から西に向けて緩やかに傾斜する。SD2を切るが、隣接するSD1・SD11との前後関係は不明である。遺物は出土していない。

SD14 (第249図)

6・7区の調査区南半で検出したピット列である。調査

区東壁の断面をみても、溝状遺構は伴っておらず、ピット部のみが確認できる。検出できた範囲では長さ19.2mを測る。南東～北西方向に直線的に延びる。南東端は調査区外に延び、北西端はSD1に切られ、消滅する。SD2を切る。検出面からの深さは6～14cmを測る。埋土にはVI層ないしはそれに類似する層が堆積する。底面には明確な硬化面は認められなかったが、一部埋土が硬化しているピットは確認できた。検出されたピットの掘り形は径0.4～0.5mの円形・楕円形を呈する。ピットの芯々間隔は70cm前後を測る。所謂波板状ピット列と考えられ、道路の可能性が高い遺構である。

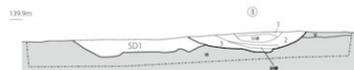
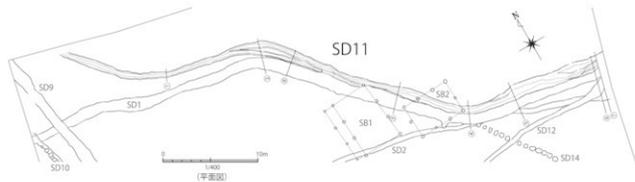
98・99がSD14出土遺物である。いずれも古墳時代の所産といえる。98はP12から出土した土師器杯で、口径15.6cm、底径6cm、器高6.5cmを測る。99はP16から出土した須恵器の坏蓋で側面の段は明瞭である。これらの出土遺物は流れ込みである可能性が高い。

以上、本遺跡で検出された溝状遺構を報告してきた。大きくV層期、VI層期と検出面の差から分けて報告したが、出土遺物が少ないこともあり、詳細な帰属時期を特定できる遺構は少ない。

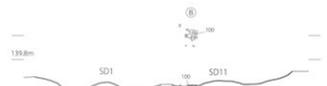
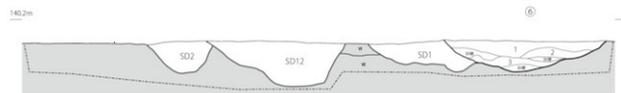
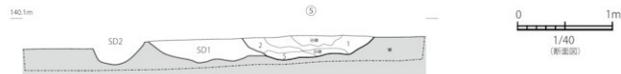
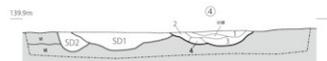
V層期の溝状遺構は、SD3～5のように土と連結するものが多い。溜め弁状の遺構という評価を与えているが、これは調査区の一部で検出されている畝状遺構と関連するものである可能性がある。ただし、畝状遺構は残存状態が悪く、検出できた範囲も深さ数センチ程しか残っていなかった。花粉分析でも畑作を示すような結果は得られていないが、わずかに残る畝状遺構と溜め弁状の遺構からは本遺跡で食物栽培が行われていた可能性を指摘できる。

この他V層期の溝状遺構であるSD10は波板状ピットを伴う道路である可能性が高い。これは、同じような道路と考えられるVI層期のSD9と走行方向がほぼ一線であり、時代・時期を越えて同じ場所が道路として継続的に利用されていることを示す。

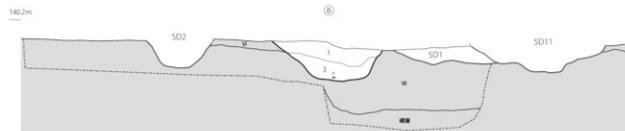
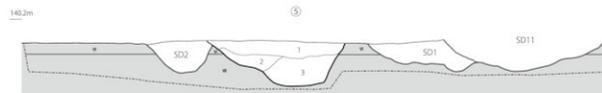
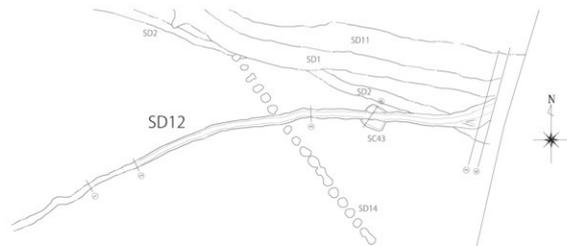
VI層期の溝状遺構は複数の遺構が複雑に重複しながら調査区を縦・横断する。その内の多くが水の流れを想定できる遺構ではあるが、本来的な用途・機能を特定することは難しい。洪水等の影響で本来の形状は残っていない可能性も考えられ、本来的にはやはり道路として利用されていたとも推測できる。波板状ピットと考えられるSD14については、やはり道路である可能性が高いといえる。VI層期の遺構は、出土遺物から想定する帰属時期が平安時代から中世までと時期幅が認められる。V層期の遺構は少なくとも平安時代まで遡る可能性は低いと考えられる。



- 1: 黒褐色粘質シルト土 (1 m以下)の腐植層・黄褐色(互土を多く含む)
- 2: 黒褐色粘質シルト土 (1 m以下)の腐植層・黄褐色(互土を多く含む)
- 3: 黒褐色粘質シルト土 (互土)層に相当
- 4: 3層+5 m以下の腐植層
- 5: 4層+小礫
- 6: 赤+灰層ブロック
- 7: 黒褐色砂質土 (1 m以下)の腐植層・黄褐色(互土を多く含む)
- 8: 黒褐色砂質土 (1 m以下)の腐植層・黄褐色(互土をまばらに含む)



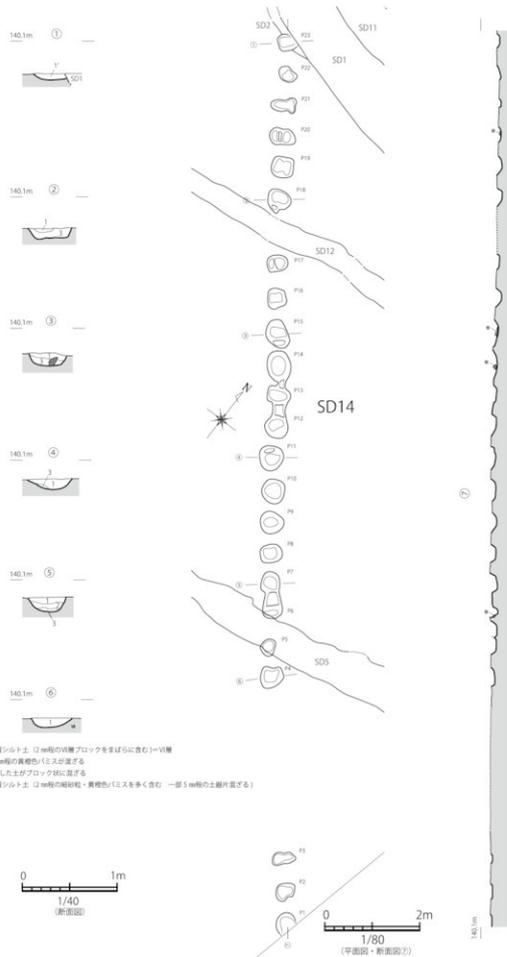
第 247 図 SD11 実測図 (S=1/40・1/400)



- 1: 黒褐色粘質シルト土 (5 m以下の腐植層ブロックをまばらに含む)
- 2: 黒褐色粘質シルト土 (10 cm程度の腐植層ブロックを含む)
- 3: 黒褐色粘質シルト土 (20 cm程度の腐植層ブロックを含む)

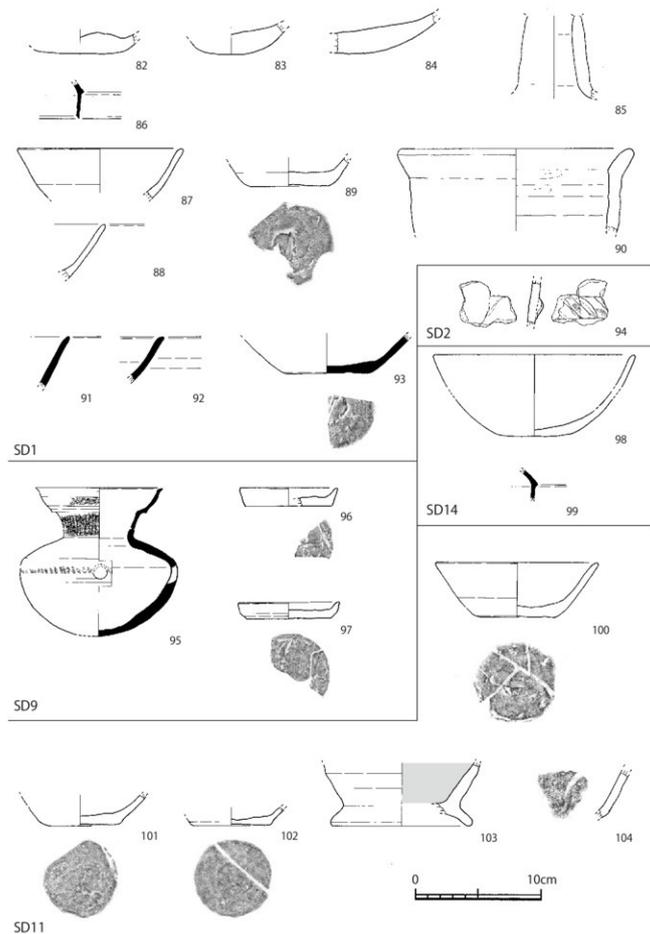


第 248 図 SD12 実測図 (S=1/40・1/200)



1: 黒褐色砂質シルト土、(2 m程度の埋層ブロックをまばらに含む)⇒V層
 Y: 1層に1 m程度の異褐色パミスが混ざる
 Z1層に硬化した土がブロック状に混ざる
 3: 褐色砂質シルト土、(2 m程度の埋層砂粒・異褐色パミスも多く含む、一部5 m程度の土層が混ざる)

第249図 SD14実測図 (S=1/40・1/80)



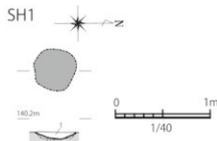
第250図 SD1・2・9・11・14出土遺物実測図 (S=1/3)

4 焼土遺構 (SH)

掘り込みを有し、堆積する理土に焼土や灰を多く含む遺構を焼土遺構とした。本遺跡は1基のみ検出している。

SH1 (第251図)

C・D7区で検出しており、径0.4mの円形を呈す。VI層上面で検出しており、検出面からの深さは7cmを測るのみである。理土には基本土層のV層が堆積しており、そこに焼土と灰が多く含まれる。遺物は出土していない。



1. 褐色砂質シルト土 (焼土・灰のブロックを多く含む) = V層

第251図 SH1 実測図 (S=1/40)

5 ビット (P)

七日市前遺跡では、掘立建物跡を構成する柱穴として認識できたもの以外の小穴は、単独のビットとして認識・調査している。土坑の項でも示したとおり、基本的には1m前後の土坑と区別して、径が0.5m以下の円形を基調とする遺構をビットとしている。しかし、厳密に線引きしているものではなく、それより大型のものや円形以外のものも含まれる。土層断面の観察から、柱痕跡と考えられるものが確認されたビットも存在する。そのため、認識できていないが本来は掘立建物跡を構成する柱穴であったビットも存在するものと推測される。ここでは、確実に建物配置の一部を構成すると考えられるもの以外は、単独のビットとして報告する。まずはV層期、次にVI層期のビットの順で、以下報告する。

P5 (第252図)

C5区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは7cmを測るのみである。

P6 (第252図)

D5区のVI層上面で検出しており、径0.28mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。土層断面中央に垂直方向の立ち上がりが見られる。柱痕跡の可能性が高い。

P7 (第252図)

D6区で検出しており、径0.22mの円形を呈す。検出面からの深さは24cmを測る。理土にはV層が堆積している。

P8 (第252図)

D6区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは22cmを測る。

P9 (第252図)

C6区で検出しており、長軸0.38m、短軸0.28mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。理土層からは人頭大の礎が出土した。

P10 (第252図)

C6区で検出しており、径0.24mの円形を呈する。検出面からの深さは22cmを測る。

P11 (第252図)

C6区で検出しており、長軸0.3m、短軸0.26mの楕円形を呈する。検出面からの深さは38cmを測る。理土中位より拳大の礎が出土している。

P12 (第252図)

C6区で検出しており、長軸0.32m、短軸0.26mの楕円形を呈する。検出面からの深さは22cmを測る。遺構の南はわずかにテラス状になる。

P13 (第252図)

D6区で検出しており、長軸0.34m、短軸0.26mの楕円形を呈する。検出面からの深さは22cmを測る。

P14 (第252図)

E6区で検出しており、径0.36mの不整形円形を呈す。検出面からの深さは11cmを測る。

P15 (第252図)

E6区で検出しており、長軸0.64m、短軸0.44mの楕円形を呈する。遺構の西側がビット状に一段深くなる。検出面からの深さは最深处で36cmを測る。

P17 (第252図)

C7区のVIb層上面で検出しており、径0.34mの円形を呈す。検出面からの深さは40cmを測る。理土中から大型の礎が出土している。

P18 (第252図)

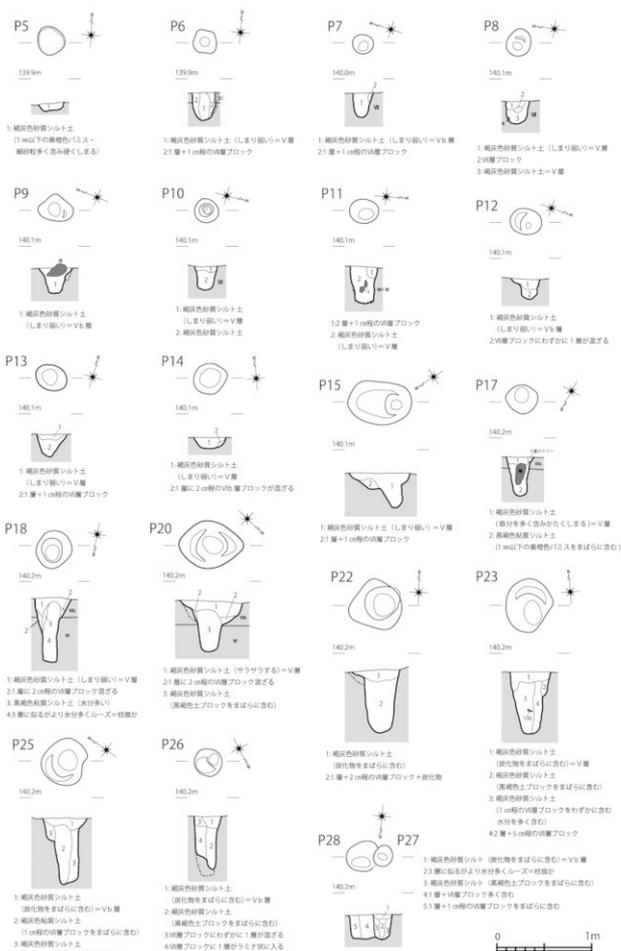
C7区のVIb層上面で検出しており、径0.38mの円形を呈す。検出面からの深さは68cmを測る。断面の中央には垂直方向の立ち上がりが見られる。柱痕跡と考えられる。

P20 (第252図)

C7区のVIb層上面で検出しており、長軸0.7m、短軸0.5mの楕円形を呈する。検出面からの深さは54cmを測る。遺構の中央がビット状に深くなり、両側にはテラスが付く。

P22 (第252図)

C7区で検出しており、径0.54mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは66cmを測る。105は理土層から出土



第252図 ビット (P) 実測図① (S=1/40)

した森田D群の白磁皿である。H期（14世紀後半～15世紀中頃）の所産といえる。

P23 (第252図)

C7区で検出しており、長軸0.56m、短軸0.5mの楕円形を呈する。検出面からの深さは66cmを測る。埋土中位からは106の粘土塊が出土している。被熱したためか、表面が赤色化している。

P25 (第252図)

C7区で検出しており、径0.5mの不整形形を呈す。検出面からの深さは68cmを測る。断面の中央に柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりが見られる。

P26 (第252図)

C7区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。遺構の西側が一段深くなる。検出面からの深さは最深部で56cmを測る。

P27 (第252図)

C7区で検出しており、P28を切る。径0.2mの円形を呈し、検出面からの深さは28cmを測る。断面を観察すると中央に垂直方向の立ち上がりが見られる。かなり細いが柱痕跡の可能性はある。

P28 (第252図)

C7区で検出しており、P27に切られる。径0.3m程の円形を呈すものと推測される。検出面からの深さは26cmを測る。

P29 (第253図)

C8区のVIb層上面検出しており、長軸0.46m、短軸0.34mの不整形楕円形を呈す。検出面からの深さは62cmを測る。

P30 (第253図)

C8区で検出しており、長軸0.4m、短軸0.3mの楕円形を呈する。検出面からの深さは40cmを測る。

P31 (第253図)

C8区で検出しており、長軸0.36m、短軸0.28mの楕円形を呈する。遺構の西側がわずかにテラス状となる。土層断面では柱痕跡の可能性のある垂直方向の立ち上がり確認されている。

P32 (第253図)

C7区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。底面中央に小ピットが穿たれ、一段深くなる。検出面からの深さは最深部で40cmを測る。

P33 (第253図)

C7区で検出しており、長軸0.28m、短軸0.2mの楕円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。

P35 (第253図)

C7区で検出しており、径0.28mの円形を呈する。検出面からの深さは26cmを測る。107は土師器である。

底部切り離しは糸切りで、底径7.6cmを測る。

P36 (第253図)

C7区で検出しており、径0.2mの円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。

P37 (第253図)

C8区で検出しており、径0.4mの円形を呈す。検出面からの深さは52cmを測る。

P39 (第253図)

D7区で検出しており、長軸0.5m、短軸0.34mの楕円形を呈す。遺構の南側がテラス状となる。検出面からの深さは42cmを測る。

P41 (第253図)

D7区のVIb層上面で検出しており、SB4のP5に切られる。長軸0.7m、短軸0.5mの楕円形を呈する。検出面からの深さは24cmを測る。

P42 (第253図)

C8区のVIb層上面で検出しており、径0.34mの円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。断面の中央に柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりが見られる。

P43 (第253図)

C8区のVIb層上面で検出しており、径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。SC19を切る。

P44 (第253図)

C8区のVIb層上面で検出しており、径0.3mの円形を呈する。P43の西側に隣接し、SC19を切る。検出面からの深さは28cmを測る。埋土中位から華大の縄が出土した。

P45 (第253図)

C8区で検出しており、P57を切る。径0.48mの不整形円形を呈する。遺構の北東側がわずかにテラス状となる。検出面からの深さは48cmを測る。108は滑石製石鍋の口縁部片である。断面三角形の罫が巡る。穿孔の痕跡が見られるため、石鍋の転用品の可能性はある。

P46 (第253図)

C8区で検出しており、長軸0.5m、短軸0.32mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。

P47 (第253図)

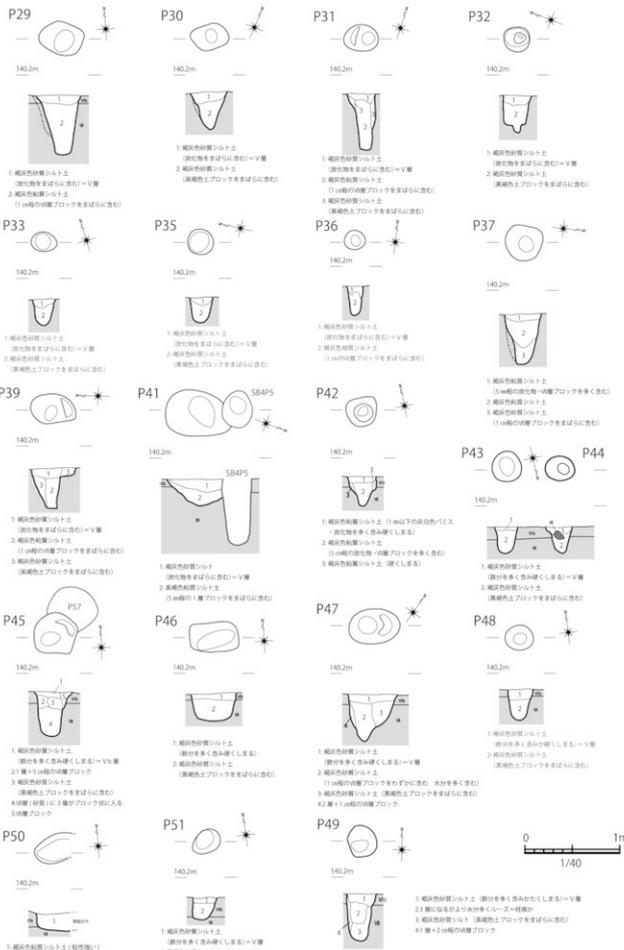
C8区のVI層上面で検出しており、長軸0.54m、短軸0.38mの楕円形を呈する。底面の中央が一段深くなる。検出面からの深さは最深部で50cmを測る。

P48 (第253図)

C8区のVI層上面で検出しており、径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。

P49 (第253図)

C8区で検出しており、径0.32mの円形を呈する。検



第253図 ビット(P) 実測図②(S=1/40)

出面からの深さは 50 cm を測る。断面の中央に柱痕跡の可能性のある水分を多く含むルーズな層が確認できる。**109・110** は出土遺物である。**109** は土師器小皿。口径 9.2 cm、底径 5.4 cm、器高 2.4 cm を測る。底部は糸切り。**110** は上田 B II 類の青磁碗。蓮弁文がみられる。H 期の所産である。

P50 (第 253 図)

C8 区の VI b 層上面で検出している。一部調査区外に延びるため、規模は不明である。検出面からの深さは 18 cm を測る。

P51 (第 253 図)

C8 区の VI 層 b 層上面で検出している。長軸 0.32 m、短軸 0.24 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 22 cm を測る。

P52 (第 254 図)

C8 区の VI b 層上面で検出しており、長軸 0.34 m、短軸 0.28 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 50 cm を測る。

P53 (第 254 図)

C8 区の VI b 層上面で検出しており、長軸 0.38 m、短軸 0.32 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 60 cm を測る。隣接する P54 を切る。

P54 (第 254 図)

C8 区で検出しており、P53 に切られる。長軸 0.32 m、短軸 0.28 m の楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは 16 cm を測る。

P55 (第 254 図)

C8 区で検出しており、長軸 0.66 m、短軸 0.42 m の楕円形を呈する。遺構の南側が緩やかなテラス状となり、二段掘り呈す。検出面からの深さは最深で 58 cm を測る。

P56 (第 254 図)

C8 区で検出しており、長軸 0.66 m 短軸 0.52 m の楕円形を呈する。二つのピットが重なるように、断面形態が W 字を呈する。同じ埋土が堆積するため同一遺構と判断した。検出面からの深さは最深で 54 cm を測る。P69 を切る。

P57 (第 254 図)

C8 区で検出しており、P45 に切られる。径 0.5 m の円形を呈する。検出面からの深さは 44 cm を測る。

P58 (第 254 図)

C8 区の VI b 層上面で検出しており、長軸 0.3 m、短軸 0.24 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 52 cm を測る。

P59 (第 254 図)

C8 区の VI b 層上面で検出しており、長軸 0.44 m、短軸 0.36 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 60 cm を

測る。

P60 (第 254 図)

D7 区の VI b 層上面で検出しており、長軸 0.36 m、短軸 0.26 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 36 cm を測る。

P61 (第 254 図)

D7 区の VI b 層上面で検出しており、径 0.46 m の円形を呈する。遺構の北側に緩いテラスが付く。検出面からの深さは 34 cm を測る。

P62 (第 254 図)

D8 区の VI b 層上面で検出しており、径 0.3 m の円形を呈する。検出面からの深さは 34 cm を測る。

P63 (第 254 図)

D8 区で検出しており、長軸 0.56 m、短軸 0.48 m の楕円形を呈する。底面は二つのピットが穿たれたように、断面 W 字を呈する。一方には柱痕跡の可能性のある水分を多く含んだ垂直に立ち上がる層が確認できる。埋土中からは礫が多く出土している。検出面からの深さは最深部で 60 cm を測る。

P64 (第 254 図)

D8 区の VI b 層上面で検出しており、長軸 0.4 m、短軸 0.34 m の楕円形を呈する。断面の中央に垂直方向の立ち上がりが確認できる。水分を多く含むルーズな層で、柱痕跡と考えられる。検出面からの深さは 60 cm を測る。

P65 (第 254 図)

D7 区で検出しており、径 0.3 m の円形を呈する。検出面からの深さは 46 cm を測る。

P66 (第 254 図)

C8 区で検出しており、長軸 0.68 m、短軸 0.46 m の楕円形を呈する。浅いテラスが付く。検出面からの深さは 48 cm を測る。

P67 (第 254 図)

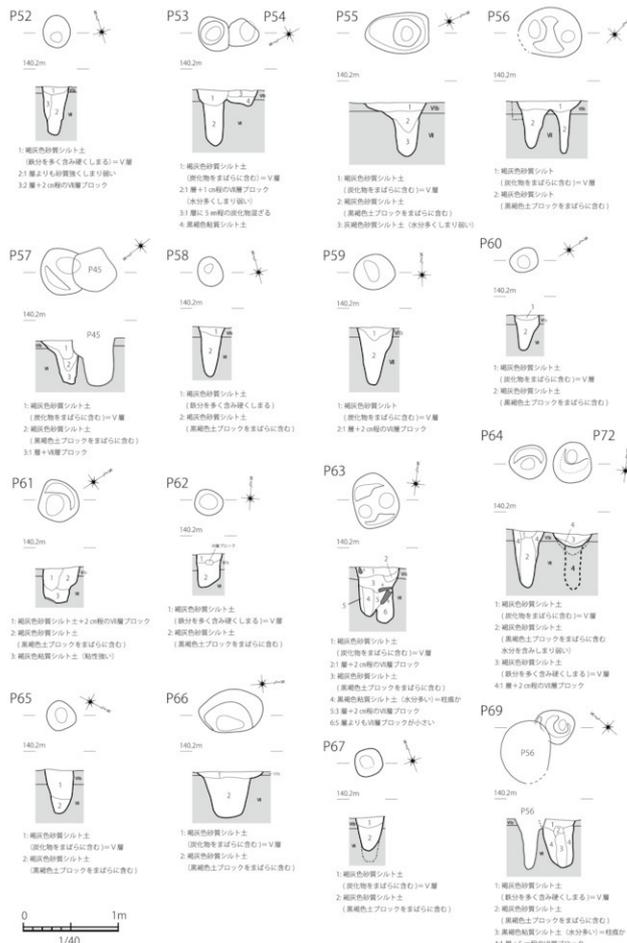
D8 区で検出されており、径 0.3 m の円形を呈する。検出面からの深さは 34 cm を測る。P70 を切る。

P69 (第 254 図)

C8 区で VI b 層上面で検出しており、P56 に切られる。径 0.4 m の円形を呈すものと考えられる。深い位置に緩いテラスが付く。断面の中央に水分を含みルーズな垂直方向に立ち上がる層を確認している。柱痕跡と思われる。検出面からの深さは 50 cm を測る。

P70 (第 255 図)

D8 区の VI b 層上面で検出しており、P67 に切られる。大部分が調査区外に延びるため、全体的な規模は不明である。底面には径 0.3 m 程の小ピットが穿たれている。検出面からの深さは、最深部で 50 cm を測る。



第 254 図 ビット (P) 実測図③ (S=1/40)

P71 (第255図)

D8区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは18cmを測る。

P72 (第254図)

D8区のVIb層上面検出しており、P64の東に隣接する。径0.4mの円形を呈す。遺構の南に浅いテラスが付き、北側が深くなる。検出面からの深さは最深部で60cmを測る。

P73 (第255図)

C8区で検出しており、長軸0.6m、短軸0.55mの不整形円形を呈する。底面の二箇所にビットが穿たれたような二段掘りとなる。検出面からの深さは最深部で42cmを測る。

P74 (第255図)

C8区で検出しており、径0.5mの円形を呈する。検出面からの深さは70cmを測る。

P75 (第255図)

D8区で検出しており、長軸0.24m、短軸0.16mの楕円形を呈する。検出面からの深さは24cmを測る。

P76 (第255図)

C8区で検出しており、長軸0.38m、短軸0.32mの楕円形を呈する。検出面からの深さは48cmを測る。

P79 (第255図)

D8区で検出しており、長軸0.74m、短軸0.6mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは71cmを測る。

P80 (第255図)

C8区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは43cmを測る。SC19を切る。111は埋土中層から出土した中国産黒釉陶器の壺ないし鉢である。C8区の5層出土資料と接合している。

P81 (第255図)

D8区で検出しており、長軸0.76m、短軸0.62mの不整形円形を呈する。断面形態がロート状になる。検出面からの深さは51cmを測る。

P82 (第255図)

C8区で検出しており、径0.26mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。

P83 (第255図)

D8区で検出しており、長軸0.28m、短軸0.22mの楕円形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。

P84 (第255図)

C8区で検出しており、長軸0.44m、短軸0.34mの楕円形を呈する。検出面からの深さは38cmを測る。

P85 (第255図)

C8区で検出しており、径0.34mの円形を呈する。断

面形態はロート状となる。検出面からの深さは51cmを測る。

P86 (第255図)

C8区で検出しており、長軸0.7m、短軸0.6mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは14cmを測る。埋土中からは拳大の礎が出土している。

P87 (第255図)

C8区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。断面観察からは、柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりを確認している。検出面からの深さは24cmを測る。112は砂岩製の砥石である。一面に砥面がみられる。

P88 (第255図)

D7区でP89に隣接して検出している。最上部に堆積する層が酷似しており、明確な立ち上がりを確認できていないが、異なる埋土が堆積するためP89とは別ビットと判断した。径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは48cmを測る。

P89 (第255図)

D7区でP88に隣接して検出した。径0.3mの円形を呈し、検出面からの深さは48cmを測る。

以上、VI層・VIb層上面で検出したビットについて報告してきた。次にVII層上面で検出したVI層期のビットについてみていく。

P90 (第257図)

C4区のVII層上面で検出しており、径0.12mの円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。

P91 (第257図)

C4区で検出しており、径0.32mの不整形円形を呈する。東側に浅いテラスが付く。検出面からの深さは20cmを測る。

P92 (第257図)

C4区で検出しており、長軸0.28m、短軸0.2mの楕円形を呈する。断面形態はロート形となる。検出面からの深さは38cmを測る。

P93 (第257図)

C4区で検出しており、径0.2mの円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。

P94 (第257図)

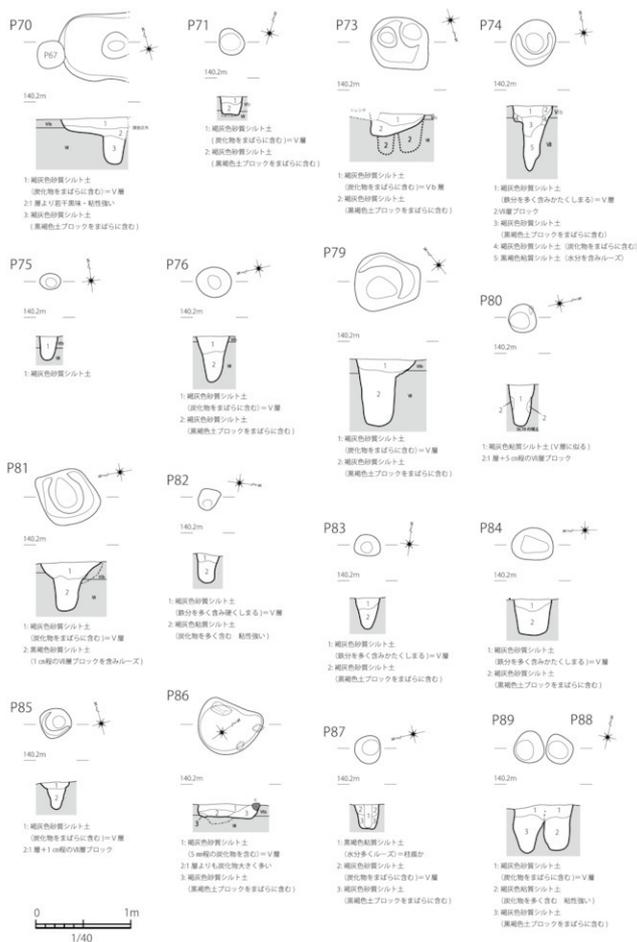
C4区で検出しており、長軸0.18m、短軸0.15mの楕円形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。

P95 (第257図)

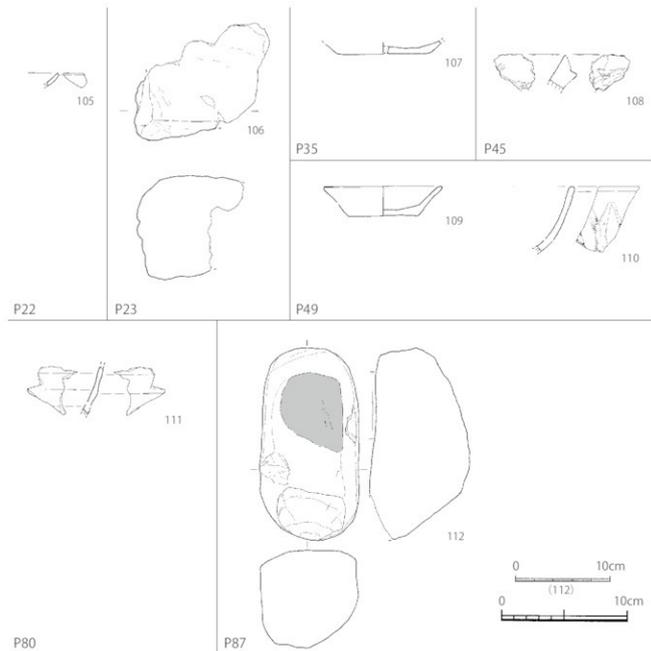
C4区で検出しており、径0.26mの円形を呈する。検出面からの深さは26cmを測る。

P96 (第257図)

B4区で検出しており、長軸0.32m、短軸0.24mの楕



第255図 ビット (P) 実測図④ (S=1/40)



第 256 図 ビット (P) 出土遺物実測図① (S=1/3・1/4)

円形を呈する。検出面からの深さは 10 cm を測る。

P97 (第 257 図)

C5 区で検出しており、長軸 0.28 m、短軸 0.24 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 18 cm を測る。

P98 (第 257 図)

E5 区で検出しており、長軸 0.52 m、短軸 0.28 m の楕円形を呈する。断面形態は三角形となる。検出面からの深さは 28 cm を測る。

P99 (第 257 図)

D5 区で検出しており、長軸 0.42 m、短軸 0.36 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 12 cm を測る。

P100 (第 257 図)

C4 区で検出しており、径 0.16 m の円形を呈する。検

出面からの深さは 40 cm を測る。

P101 (第 257 図)

B5 区で検出しており、長軸 0.18 m、短軸 0.14 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 24 cm を測る。

P102 (第 257 図)

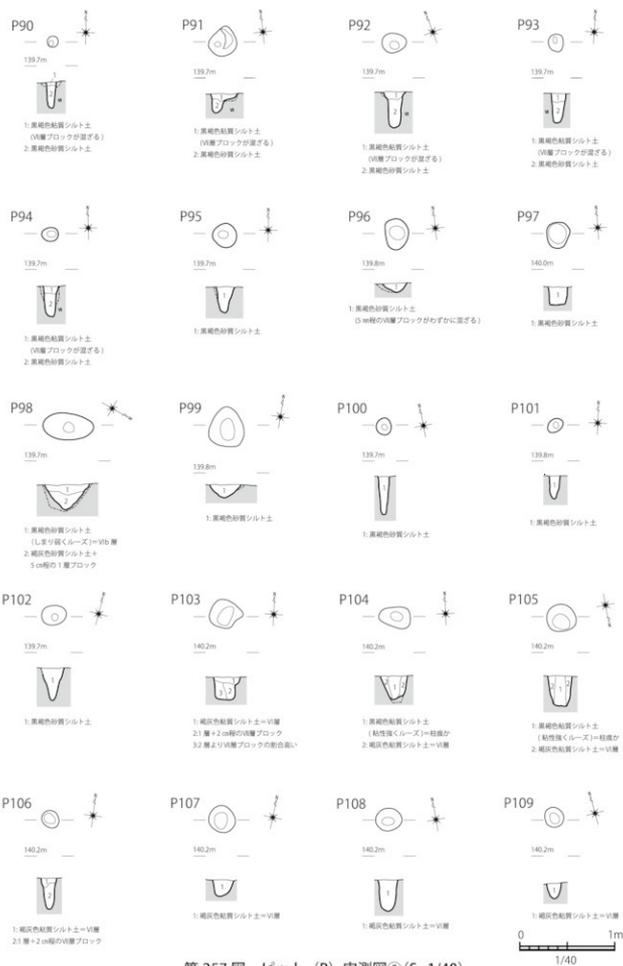
C4 区で検出しており、長軸 0.26 m、短軸 0.2 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 34 cm を測る。

P103 (第 257 図)

D7 区で検出しており、長軸 0.38 m、短軸 0.32 m の不整形円形を呈する。検出面からの深さは 24 cm を測る。

P104 (第 257 図)

D7 区で検出しており、長軸 0.32 m、短軸 0.22 m の不整形円形を呈する。断面観察からは、柱痕跡と考えられ



第 257 図 ビット (P) 実測図⑤ (S=1/40)

る垂直方向の立ち上がりを確認している。検出面からの深さは24 cmを測る。

P105 (第257図)

D7区で検出しており、径0.3 mの円形を呈する。断面観察では、柱痕跡と考えられる土層を確認している。検出面からの深さは30 cmを測る。

P106 (第257図)

D7区で検出しており、径0.18 mの円形を呈する。検出面からの深さは32 cmを測る。

P107 (第257図)

D7区で検出しており、径0.3 mの円形を呈する。検出面からの深さは16 cmを測る。

P108 (第257図)

D7区で検出しており、長軸0.28 m、短軸0.24 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは32 cmを測る。

P109 (第257図)

D7区で検出しており、径0.22 mの円形を呈する。検出面からの深さは14 cmを測る。

P110 (第259図)

D7区で検出しており、径0.26 mの円形を呈する。検出面からの深さは18 cmを測る。

P111 (第259図)

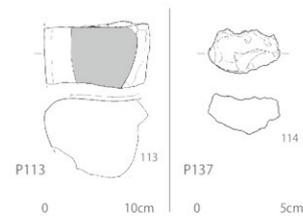
D7区で検出しており、径0.2 mの円形を呈する。検出面からの深さは20 cmを測る。

P112 (第259図)

D7区で検出しており、径0.22 mの円形を呈する。検出面からの深さは22 cmを測る。

P113 (第259図)

D7区で検出しており、長軸0.28 m、短軸0.22 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは34 cmを測る。113は埋土最上部で出土した砂岩製の砥石である。1面に磨面がみられる。大部分が欠損する。



第258図 ビット (P) 出土遺物
実測図② (S=1/2・1/4)

P114 (第259図)

D7区で検出しており、径0.22 mの円形を呈する。検出面からの深さは30 cmを測る。断面形態はロート状を呈する。

P115 (第259図)

D7区で検出しており、径0.22 mの円形を呈する。検出面からの深さは24 cmを測る。

P116 (第259図)

D7区で検出しており、径0.28 mの円形を呈する。北側に浅いテラスが付く。検出面からの深さは32 cmを測る。

P117 (第259図)

D7区で検出しており、長軸0.34 m、短軸0.3 mの楕円形を呈する。東側に浅いテラスが付く。検出面からの深さは26 cmを測る。

P118 (第259図)

D7区で検出しており、SC24に切られる。径0.24 mの円形を呈する。検出面からの深さは10 cmを測る。

P119 (第259図)

D7区で検出しており、長軸0.4 m、短軸0.34 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは28 cmを測る。

P120 (第259図)

D7区で検出しており、長軸0.18 m、短軸0.14 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは20 cmを測る。

P121 (第259図)

D7区で検出しており、長軸0.18 m、短軸0.1 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは20 cmを測る。

P122 (第259図)

D7区で検出しており、径0.24 mの円形を呈する。検出面からの深さは26 cmを測る。SD11を切る。

P123 (第259図)

D7区で検出しており、長軸0.32 m、短軸0.26 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは20 cmを測る。SD11を切る。

P124 (第259図)

D7区で検出しており、径0.3 mの不整形円形を呈する。検出面からの深さは16 cmを測る。SD11を切る。

P125 (第259図)

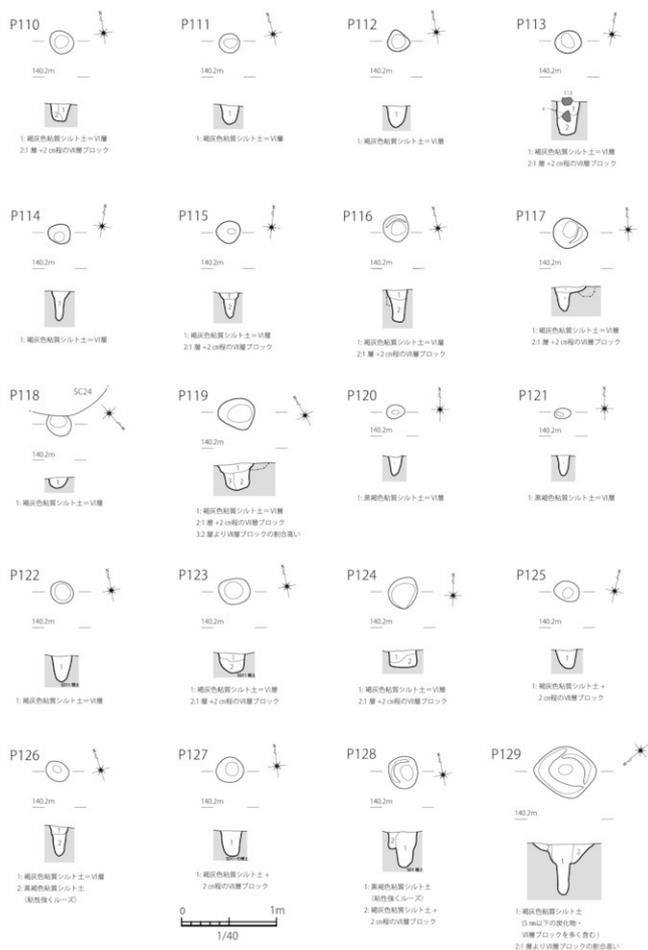
D7区で検出しており、長軸0.26 m、短軸0.2 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは20 cmを測る。

P126 (第259図)

D7区で検出しており、長軸0.24 m、短軸0.2 mの楕円形を呈する。検出面からの深さは30 cmを測る。

P127 (第259図)

D7区で検出しており、径0.26 mの円形を呈する。検出面からの深さは26 cmを測る。SD11を切る。



第259図 ビット (P) 実測図⑥ (S=1/40)

P128 (第259図)

D7区で検出しており、径0.32mの円形を呈する。北側から西側にかけてテラスが付く。検出面からの深さは36cmを測る。SD1を切る。

P129 (第259図)

C8区のVII層上面で検出しており、長軸0.66m、短軸0.54mの楕円形を呈する。断面形態はロート形となる。断面観察からは、垂直方向に立ち上がる柱痕跡と考えられる土層が確認された。検出面からの深さは最深部で54cmを測る。

P130 (第260図)

D6区で検出しており、径0.34mの円形を呈する。断面観察からは、柱痕跡と考えられる土層を確認した。検出面からの深さは30cmを測る。

P131 (第260図)

D6区で検出しており、長軸0.42m、短軸0.34mの楕円形を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。

P132 (第260図)

C6区で検出しており、長軸0.38m、短軸0.34mの楕円形を呈する。断面形態はロート形である。検出面からの深さは64cmを測る。

P133 (第260図)

C6区で検出しており、長軸0.4m、短軸0.3mの楕円形を呈する。検出面からの深さは50cmを測る。埋土上位からは縄が出土している。

P134 (第260図)

D7区で検出しており、長軸0.36m、短軸0.3mの楕円形を呈する。検出面からの深さは26cmを測る。

P135 (第260図)

C7区で検出しており、径0.28mの円形を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。

P136 (第260図)

C7区で検出しており、径0.22mの円形を呈する。断面では、柱痕跡と考えられる垂直方向の立ち上がりを確認している。検出面からの深さは31cmを測る。

P137 (第260図)

C7区で検出しており、長軸0.4m、短軸0.3mの楕円形を呈する。検出面からの深さは36cmを測る。114は鉄洋。

P138 (第260図)

C7区で検出しており、長軸0.33m、短軸0.23mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは25cmを測る。

P139 (第260図)

C7区で検出しており、長軸0.98m、短軸0.66mの楕円形を呈する。本来は土塔とすべき遺構である。底面の中央付近には径0.26m程のピットが穿たれる。検出面

からの深さは最深部で23cmを測る。

P140 (第260図)

C7区で検出しており、径0.25mの円形を呈する。検出面からの深さは37cmを測る。

P141 (第260図)

C7区で検出しており、径0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは31cmを測る。

P142 (第260図)

E7区でSD12に隣接して検出しており、径0.27mの円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。

P143 (第260図)

C7区で検出しており、長軸0.25m、短軸0.21mの楕円形を呈する。検出面からの深さは28cmを測る。

P144 (第260図)

C7区で検出しており、長軸0.36m、短軸0.27mの楕円形を呈する。検出面からの深さは19cmを測る。

P145 (第260図)

C7区で検出しており、径0.2mの円形を呈する。一部テラスが付く。検出面からの深さは20cmを測る。

P146 (第260図)

C6区で検出しており、長軸0.28m、短軸0.22mの楕円形を呈する。断面をみると底面が二段掘りとなり、その幅で垂直方向に立ち上がる土層がみられる。柱痕跡の可能性が高い。検出面からの深さは最深部で28cmを測る。

P147 (第260図)

C6区で検出しており、径0.23mの円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。

P148 (第260図)

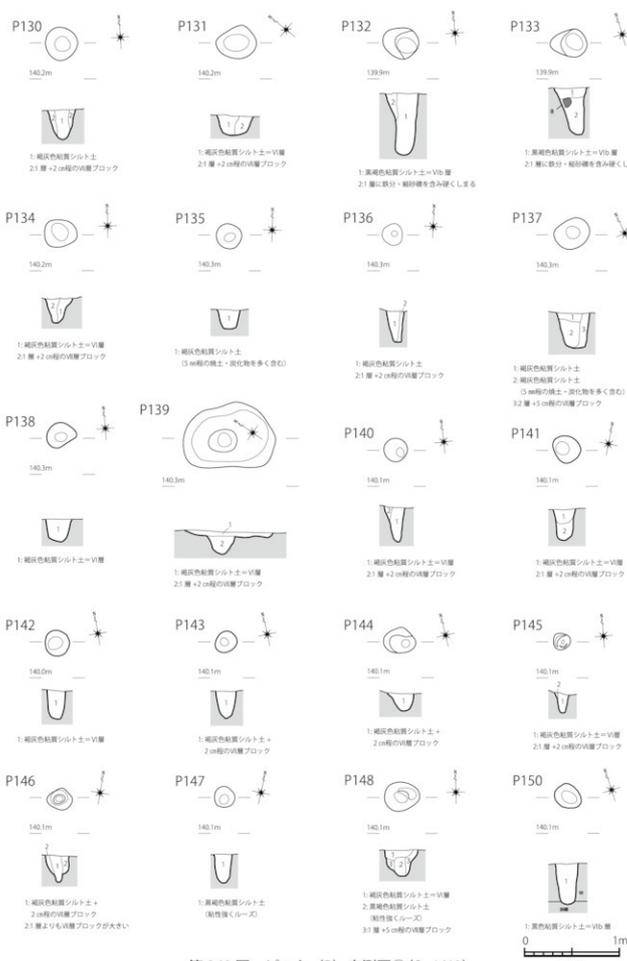
D7区で検出しており、長軸0.38m、短軸0.3mの楕円形を呈する。断面観察からは、柱痕跡の可能性の高い土層が確認された。検出面からの深さは28cmを測る。

P150 (第260図)

D7区で検出しており、長軸0.31m、短軸0.24mの楕円形を呈する。検出面からの深さは43cmを測る。

6 畝状遺構 (SU)

七日市前遺跡では、基本土層V層を理土とする畝状遺構と考えられる小溝列を部分的に検出している。しかし、既に削平されている部分が多く、検出面からの深さは数センチしか残っていないものばかりであった。検出したのはC-06区 (SU1~3) およびF7区 (SU4~7) である。いずれも平面で捉えたのみである。SU1~3については溜め井状の遺構と考えたSD3・4に隣接して検出されていることから、これらの遺構に関連する可能性が高いといえる。



第260図 ピット (P) 実測図⑦(S=1/40)

7 包含層出土遺物 (第 261 ~ 263 図)

115 ~ 161 は包含層から出土した古代～中世の所産と考えられる資料である。以下、種別に報告する。

115 ~ 126 は土師器である。115 ~ 119 は平安時代の土師器環と考えられる。115 は口径 13.4 cm を測る。116 ~ 119 は坯の底部である。いずれも底部切り離し技法はヘラ切り。その後ナゲが加えられるものもある。119 は

円盤高台環である。底径は 5.4 ~ 6 cm を測る。

120 ~ 122 は中世の土師器環。120 は口径 12.5 cm、底径 9.4 cm、器高 4.5 cm を測る。13 世紀後半 ~ 14 世紀前半頃の所産と考える。121・122 は底部片。これらの資料の底部切り離しはいずれも糸切りである。

123 は底部ヘラ切りの小皿。口径 7.6 cm、底径 6 cm、器高 1 cm を測る。13 世紀後半 ~ 14 世紀前半頃の所産と

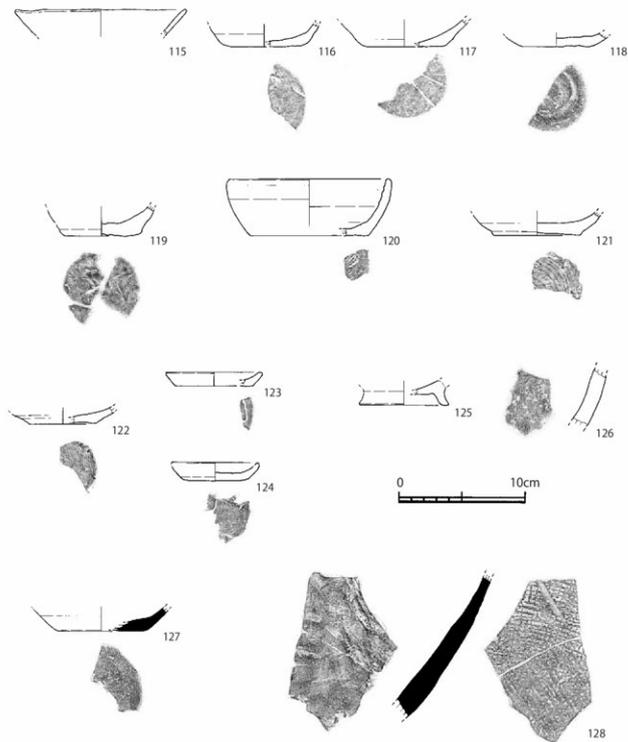
考えられる。124 は剥離する部分が多く、底部切り離しも不明瞭であるがやはりヘラ切りであろうか。

125 は平安時代の高台付椀。底径 6.8 cm、126 は布目痕を残す製塩土器である。

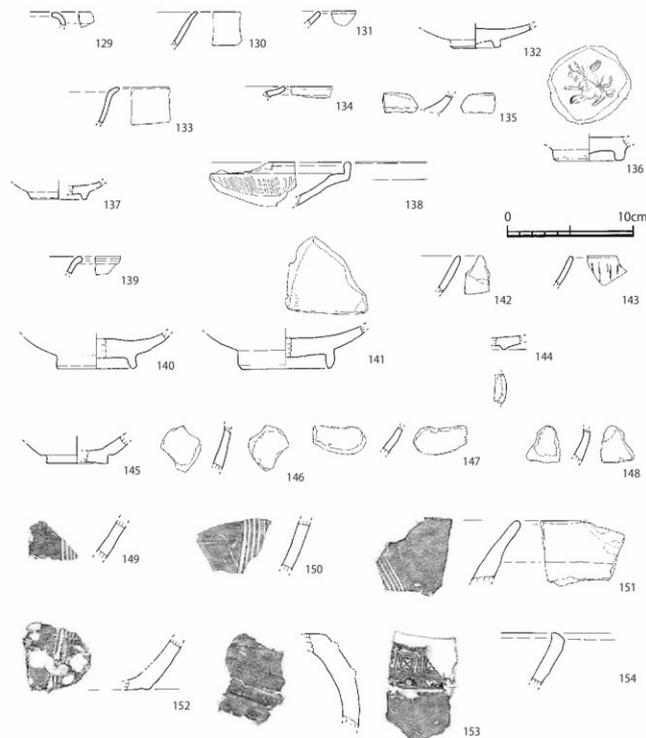
127・128 は平安時代の須恵器。127 は坯で底径 7 cm、129 ~ 132 は白磁椀・皿である。129 は内湾する椀の口縁部、130 は外反口縁の森田 D 群の皿であろうか。131 も森田 D 群の白磁椀であろうか。132 は森田 D 群の白磁

皿で、底径 4 cm を測る。内外面共に黄色がかった軸がかかる。高台曇付および内面は露胎となる。

133 ~ 143 は龍泉窯系青磁である。133 は外反口縁の椀 IV 類以降。134 は盤ないしは大椀の IV 類以降であろう。135 も椀 IV 類以降の体部片。136 は元～明代の椀。内面にはスタンプ文がみられる。底径 5 cm、137 も元～明代の青磁皿。底径 4.2 cm を測る。138 は大型盤で IV 類以降の資料といえる。139 は口縁端部が外反する上田 D II 類



第 261 図 包含層出土平安時代～中世遺物実測図 (S=1/3)



第 262 図 包含層出土中世遺物実測図 (S=1/3)

碗である。H期の所産。140は碗IV類以降で、底径6cmを測る。141は上田CないしはD II類の青磁碗である。内面にスタンブ文が認められる。底径7cm、H期の所産。142は上田B II類碗の口縁部片。143は上田B IV'類の碗である。J期(15世紀末～16世紀中頃)の所産といえる。

144は青白磁の大型皿であろうか。高台壘付のみ露出となる。

145～148は中国産黒釉陶器である。145・147は碗、146・148は壺と考えられる。145は底径4.6cmを測る。

149～152は国産陶器の描鉢である。149・150・152は備前産である。いずれも内面に数条の描目が見える。

153は瓦質の火鉢。154は瓦質の描鉢であろうか。

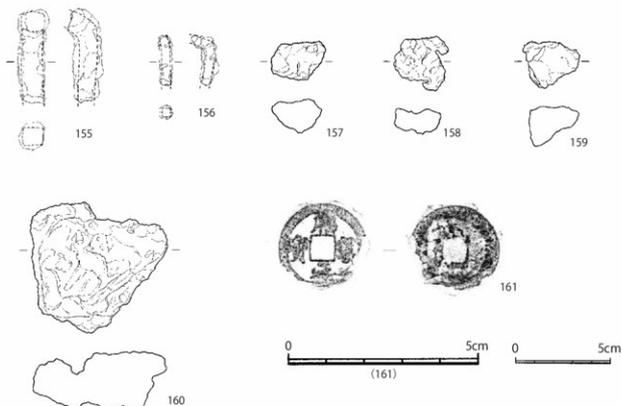
155・156は鉄釘である。両者共にくの字に折れ、頭部および先端部は欠損する。

157～160は鉄滓。大型の160以外はいずれも重量は15g前後を計る。160は178gを計る。

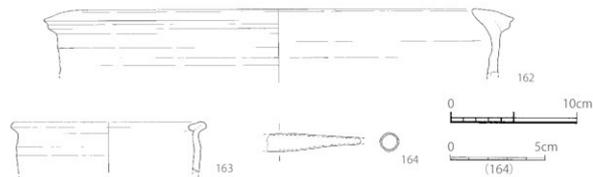
161はC8区で出土した銅銭である。中国北宋銭の「熙寧元寶」で、初鑄年代は1068年とされる。

第5節 その他の時代の遺物

古墳時代～中世以外の時代の遺物としては、162や163のような近世産摩滅の煙管鉢がわずかに出土している。その他、164の煙管が出土している。



第263図 包含層出土平安時代～中世鉄製品・鉄滓・銭貨実測図 (S=1/1・1/2)



第264図 その他の時代の遺物実測図 (S=1/2・1/3)

第7章 七日市前遺跡における自然科学分析

第1節 七日市前遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2. 試料と方法

次に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

| 試料No. | 採取箇所 | 種類 | 前処理・調整法 | 測定法 |
|-------|--------|-----|-----------------|-----|
| No.1 | SD4 下層 | 炭化材 | 超音波洗浄, 酸-7割-酸処理 | AMS |

AMS: 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。次にこれらの結果を示し、第265図に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

| 試料No. | 測定No. (PED-) | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | ^{14}C 年代: 年BP (暦年較正用) | 暦年代 (較正年代): cal- | |
|-------|-----------------|------------------------------|------------------------------------|---|----------------------|
| | | | | 1 σ (68.2%確率) | 2 σ (95.4%確率) |
| No.1 | 22239 | -25.72 \pm 0.48 | 605 \pm 20 (607 \pm 21) | AD1300-1330 (28.2%) AD1340-1365 (27.9%) AD1380-1395 (12.1%) | AD1290-1410 (95.4%) |

BP: Before Physics (Present), cal: calibrated, AD: 西暦紀元

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を用いている。統計誤差 (\pm) は1 σ (68.2%確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1

シグマ σ (68.2%確率) と 2 σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、SD4 下層の炭化材では 605 ± 20 年 BP (2 σ の暦年代で AD 1290 ~ 1410 年) の年代値が得られた。

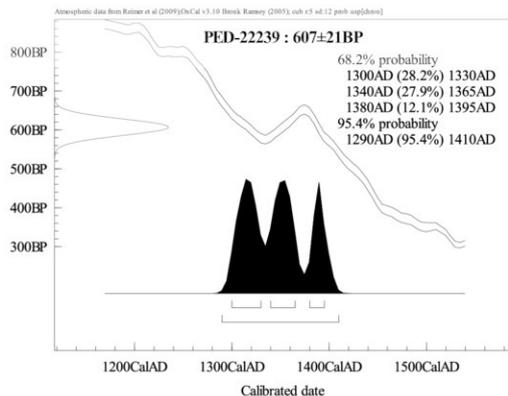
文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2), p. 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p. 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, p. 1111-1150.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p. 301-322.



第 265 図 暦年較正結果

第 2 節 七井市前遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO₂) が蓄積したもので、植物が枯れたあとでもガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、F2 区土層断面の V 層から VII 層までの層準から採取された計 7 点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。このうち、V 層は古代～中世、VI 層と VI b 層は古墳時代～中世とされている。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105℃ で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10 分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精度に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第 9 表および第 266 図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族 A (チガヤ属など)

[イネ科～タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科～その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、クスノキ科、マンサク科 (イスノキ属)、アワビキ科、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準をおよそ3,000個/gとして検討を行った。

F2区土層断面では、V層(試料1)からVII層(試料6, 7)までの層準について分析を行った。その結果、V層(試料1)からVII層上部(試料6)までの各層からイネが検出された。このうち、V層(試料1)とVII層上部(試料2)では密度が3,100個/gおよび2,700個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。VIb層(試料4, 5)とVII層上部(試料6)では、密度が600~700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作業以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもギンギ、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、キビ属型(キビが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題とした。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根葉類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、VIb層より上位層を中心にネザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、および樹木(照葉樹)のマンサク科(イヌノキ属)、ブナ科(シイ属)なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、古墳時代~古代とされるVIb層から古代~中世とされるV層にかけては、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属、キビ族などが生育し、遺跡周辺にはイヌノキ属やシイ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、古代~中世とされるV層および古墳時代~中世とされるVI層では、イネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、古墳時代~古代とされるVIb層でも稲作が行われていた可能性が認められた。

各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属(おもにネザサ節)などの竹笹類をはじめ、ススキ属やチガヤ属、キビ族などが生育し、遺跡周辺にはイヌノキ属やシイ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

文献

- 杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定~古環境推定の基礎資料として-, 考古学と自然科学, 19, p. 69-84.
 杉山真二(1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史, 第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
 杉山真二(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, p. 189-213.
 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標準と定量分析法 -, 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.

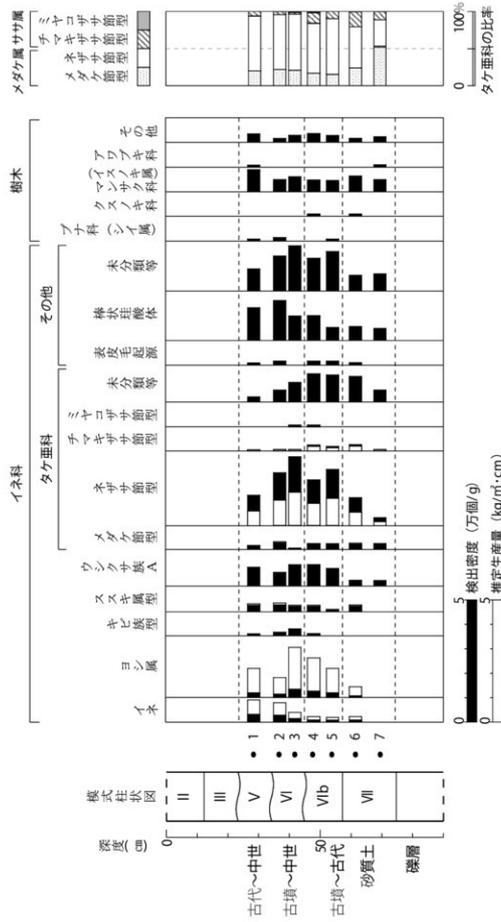
藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田跡の探査 -, 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

第9表 七日市前遺跡における植物珪酸体分析結果

| 検出密度(単位: ×100個/g) | | F2区 | | | | | | |
|-------------------|--|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 分類群 | 学名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| イネ科 | Gramineae | | | | | | | |
| イネ | <i>Oryza sativa</i> | 31 | 27 | 13 | 7 | 6 | 7 | |
| ヨシ属 | <i>Phragmites</i> | 19 | 13 | 33 | 26 | 19 | 7 | |
| キビ族型 | Panicoeae type | 6 | 13 | 26 | 7 | | | |
| ススキ属型 | <i>Miscanthus</i> type | 25 | 27 | 20 | 20 | 6 | 21 | |
| ウシクサ族A | <i>Andropogoneae</i> A type | 75 | 54 | 85 | 86 | 70 | 21 | 20 |
| タケ亜科 | Bambusoideae | | | | | | | |
| メダケ節型 | <i>Phlebotilus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i> | 13 | 27 | 33 | 30 | 19 | 21 | 20 |
| ネザサ節型 | <i>Phlebotilus</i> sect. <i>Nezasa</i> | 113 | 221 | 288 | 192 | 235 | 117 | 34 |
| チマキザサ節型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc. | 6 | 7 | 7 | 26 | 19 | 27 | 7 |
| ミヤコザサ節型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i> | | | | 7 | 7 | | |
| 未分類等 | Others | 19 | 47 | 78 | 113 | 108 | 103 | 47 |
| その他のイネ科 | Others | | | | | | | |
| 表皮毛起源 | Husk hair origin | 6 | 13 | | 13 | 13 | 7 | |
| 棒状珪酸体 | Rod-shaped | 132 | 161 | 98 | 99 | 51 | 55 | 47 |
| 未分類等 | Others | 88 | 141 | 183 | 132 | 159 | 62 | 68 |
| 樹木起源 | Arboreal | | | | | | | |
| ブナ科(シイ属) | <i>Castanopsis</i> | 6 | 13 | | | 6 | | |
| クスノキ科 | <i>Lauraceae</i> | | | | | 7 | | |
| マンサク科(イヌノキ属) | <i>Distylium</i> | 88 | 47 | 59 | 46 | 44 | 62 | 47 |
| アワブキ科 | <i>Sabiaceae</i> | 6 | | | | | | |
| その他 | Others | 31 | 13 | 26 | 33 | 25 | 14 | 20 |
| 植物珪酸体総数 | Total | 664 | 825 | 954 | 835 | 780 | 528 | 318 |

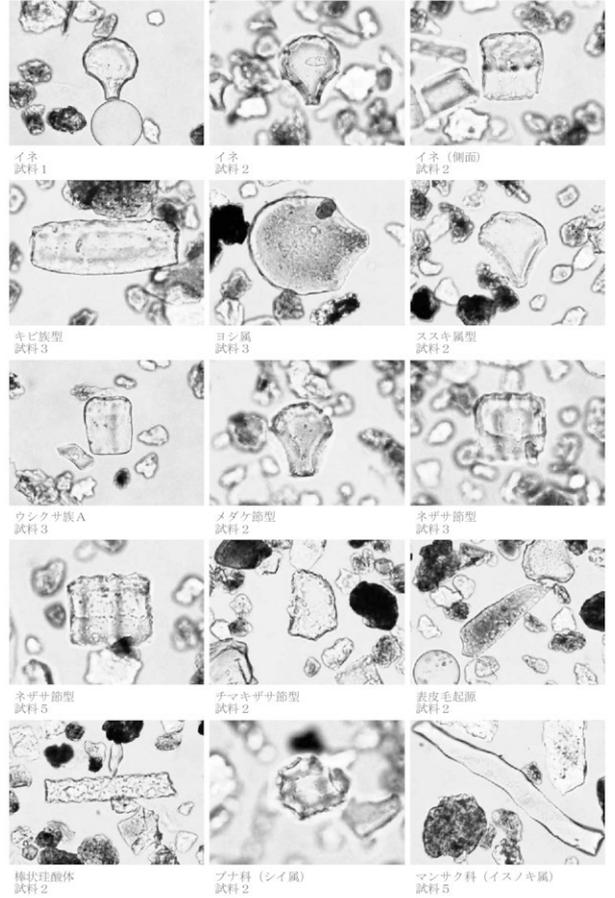
| おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ² ・cm) | 試料の仮比重を1.0と仮定して算出 | | | | | | |
|---|--|------|------|------|------|------|------|
| イネ | <i>Oryza sativa</i> | 0.92 | 0.79 | 0.38 | 0.19 | 0.19 | 0.20 |
| ヨシ属 | <i>Phragmites</i> | 1.19 | 0.85 | 2.06 | 1.67 | 1.20 | 0.43 |
| ススキ属型 | <i>Miscanthus</i> type | 0.31 | 0.33 | 0.24 | 0.25 | 0.08 | 0.26 |
| メダケ節型 | <i>Phlebotilus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i> | 0.15 | 0.31 | 0.38 | 0.23 | 0.22 | 0.24 |
| ネザサ節型 | <i>Phlebotilus</i> sect. <i>Nezasa</i> | 0.54 | 1.06 | 1.38 | 0.92 | 1.13 | 0.56 |
| チマキザサ節型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc. | 0.05 | 0.05 | 0.05 | 0.20 | 0.14 | 0.21 |
| ミヤコザサ節型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i> | | | | 0.02 | 0.02 | |

| タケ亜科の比率(%) | | | | | | | | |
|------------|--|----|----|----|----|----|----|----|
| メダケ節型 | <i>Phlebotilus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i> | 20 | 22 | 21 | 17 | 15 | 24 | 52 |
| ネザサ節型 | <i>Phlebotilus</i> sect. <i>Nezasa</i> | 74 | 75 | 76 | 67 | 76 | 56 | 36 |
| チマキザサ節型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc. | 6 | 4 | 3 | 14 | 10 | 20 | 11 |
| ミヤコザサ節型 | <i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i> | | | | 1 | 1 | | |
| メダケ率 | Medake ratio | 94 | 96 | 96 | 84 | 90 | 80 | 89 |



第 266 図 七日市前遺跡：F2 区における植物珪酸体分析結果

七日市前遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）



50 μm

第3節 七日市前遺跡における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下での堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、F2区土層断面のV層、VI層、VIb層から採取された計3点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で籾などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリス処理（無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表面断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉6、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉13、シダ植物胞子2形態の計22である。分析結果を第10表に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、サンショウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、アカザ科-ヒユ科、スベリヒユ属、ナゲシ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位のVIb層（試料4）では、樹木花粉のクリ、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科（イネ属型を含む）、チド

メグサ亜科、セリ亜科、ヨモギ属、およびシダ植物胞子などが検出されたが、いずれも少量である。VI層（試料2）では、花粉密度が比較的 low、草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、チドメグサ亜科、タンポポ亜科が優勢で、セリ亜科、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリなどが認められた。また、シダ植物胞子も比較的多く検出された。V層（試料1）では、樹木花粉のクリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科（イネ属型を含む）、ナゲシ科、チドメグサ亜科、タンポポ亜科、およびシダ植物胞子などが検出されたが、いずれも少量である。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

古墳時代～中世とされるVI層では、花粉密度が比較的低いことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、イネ科、ヨモギ属、チドメグサ亜科、タンポポ亜科などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、イネ属型が認められることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと推定される。森林植生としては、周辺地域に落葉広葉樹のナラ類（コナラ属コナラ亜属）やクリ、照葉樹のカシ類（コナラ属アカガシ亜属）などが分布していたと考えられる。

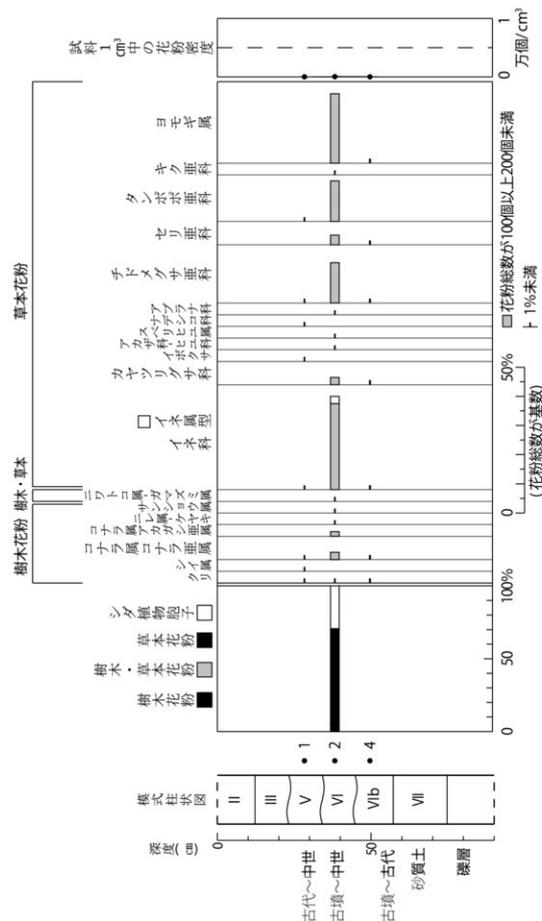
古代～中世とされるV層および古墳～古代とされるVIb層では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、少量ながらイネ属型が認められることから、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。花粉が検出されない原因としては、1) 乾燥もしくは乾燥を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、2) 土層の堆積速度が速かったこと、3) 水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが想定されるが、ここでは土層の堆積状況などから、1) の要因が大きいと考えられる。

文献

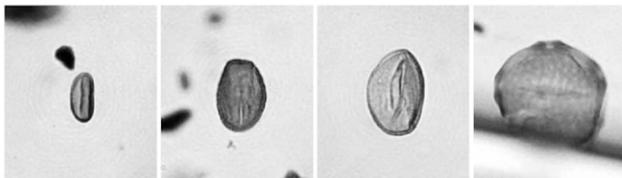
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p。
中村純（1967）花粉分析。古今書院、p.82-102。
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として。第四紀研究、13、p.187-193。
中村純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、第10号、p.21-30。
中村純（1980）日本産花粉の標鑑。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p。

第 10 表 七日市前遺跡における花粉分析結果

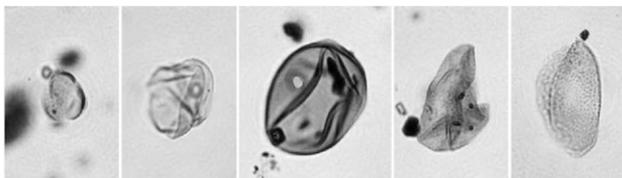
| 学名 | 和名 | 1 | 2 | 4 |
|---|---------------------------|-----|------------------|-----|
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | | | |
| <i>Castanea crenata</i> | クリ | 1 | 1 | 1 |
| <i>Castanopsis</i> | シイ属 | 1 | | |
| <i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> | コナラ属コナラ亜属 | 2 | 3 | 4 |
| <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> | コナラ属アカガシ亜属 | | 2 | |
| <i>Ulmus-Zelkova serrata</i> | ニレ属-ケヤキ | | 1 | |
| <i>Zanthoxylum</i> | サンショウ属 | | 1 | |
| Arboreal・Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | | |
| <i>Sambucus-Viburnum</i> | ニワトコ属-ガマズミ属 | | 1 | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | | | |
| Gramineae | イネ科 | 7 | 36 | 5 |
| <i>Oryza type</i> | イネ属型 | 3 | 3 | 1 |
| Cyperaceae | カヤツリグサ科 | | 3 | 1 |
| <i>Aneilema keisak</i> | イボクサ | 1 | | |
| Chenopodiaceae-Amaranthaceae | アカザ科-ヒユ科 | | 1 | |
| <i>Portulaca oleracea</i> | スベリヒユ属 | | 1 | |
| Caryophyllaceae | ナデシコ科 | | 2 | |
| Cruciferae | アブラナ科 | | 1 | |
| Hydrocotyloideae | チドメグサ亜科 | 1 | 17 | 5 |
| Apioidae | セリ亜科 | | 4 | 1 |
| Lactuicoideae | タンポポ亜科 | 1 | 17 | |
| Asteroidae | キク亜科 | | 1 | |
| <i>Artemisia</i> | ヨモギ属 | | 29 | 9 |
| Fern spore | シダ植物胞子 | | | |
| Monolate type spore | 単条溝胞子 | 5 | 49 | 12 |
| Trilate type spore | 三条溝胞子 | 1 | 2 | 2 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | 4 | 8 | 5 |
| Arboreal・Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | 1 | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | 15 | 113 | 22 |
| Total pollen | 花粉総数 | 19 | 122 | 27 |
| Pollen frequencies of 1cm ³ | 試料1cm ³ 中の花粉密度 | 6.0 | 3.9 | 9.0 |
| | | ×10 | ×10 ² | ×10 |
| Unknown pollen | 未同定花粉 | 2 | 7 | 2 |
| Fern spore | シダ植物胞子 | 6 | 51 | 14 |
| Helminth eggs | 寄生虫卵 | (-) | (-) | (-) |
| Stone cell | 石細胞 | (-) | (-) | (-) |
| Digestion rimeins | 明らかかな消化残渣 | (-) | (-) | (-) |
| Charcoal fragments | 微細炭化物 | (+) | (+) | (+) |



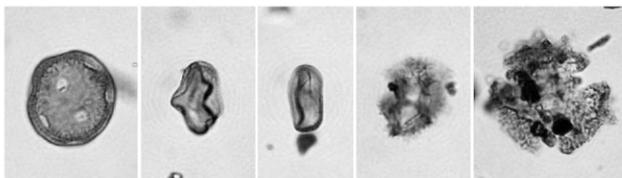
第 267 図 七日市前遺跡:F2区における花粉ダイアグラム



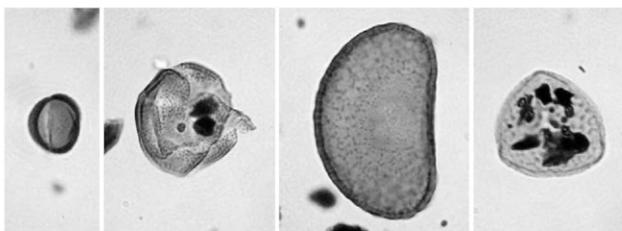
1 クリ 2 コナラ属コナラ亜属 3 コナラ属アカガシ亜属 4 ニレ属ケヤキ



5 コトメギ属コトメギ属 6 イネ科 7 イネ属型 8 カヤツリグサ科 9 イボクサ



10 ナデシコ科 11 チドメグサ亜科 12 セリ亜科 13 タンポポ科 14 キク亜科



15 ヨモギ属 16 スベリヒユ属 15 シダ植物単条溝胞子 16 シダ植物三条溝胞子

10 μm

第4節 七日前遺跡出土漆製品の塗膜構造調査

株式会社 吉田生物研究所

1. はじめに

七日前遺跡から出土した漆製品について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料

調査した資料は、表に示す中の漆製品1点である。

3. 調査方法

上の表の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを

| No. | 保存処理 No. | 品名 | 樹種* | 写真 No. | 概 要 |
|-----|-------------|-------------|-----|-----------|--|
| 1 | 1 | 漆桶? (漆片) | — | 1, 2 | 凸面が赤色で、凹面が褐色を呈する漆片。折れ曲がっているような部分もある。 試料を採取する際に、サンプルが層状に4片に分かれた。これらを別々に観察した。 |

作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4. 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を下の表、そして以下の文章に示す。

| No. | 器種 | 部位 | 写真 No. | 塗 膜 構 造 (下層から) | | | |
|-----|----|----|-----------|----------------|-----|------------------|---|
| | | | | 下 地 | | 顔料 | |
| | | | | 膠着剤 | 混和材 | | |
| 1 | 漆片 | — | 3~8 | — | — | 赤色漆/30~40層ほどの透明漆 | 朱 |

・No. 1の観察結果

塗膜構造：赤色顔料を含む層を最下層にして、顔料を含まない多数の漆層が重なる様子が観察された。漆層の色調には濃淡の違いがある。また、気泡を含む漆層や含まない漆層など、精製度の異なる漆層が30~40層ほど重なっている様子が観察される。漆層にはところどころに白く抜けた部分があるが、これらは土中にある間に劣化したものである。最下層の赤色漆層には、透明度が高く明確な粒子の形状を呈する朱の粒子が認められた。ただし粒子の大きさは小さい。

5. 摘要

本資料は漆の塊であった。これは漆用具（パレットのような）として転用された漆桶の内面に付着して残存した、漆の破片と判断される。そして凸面の赤色漆は、漆用具の漆桶の塗膜が転写したものと判断される。また、折れ曲がった部分は漆桶の内面からあふれてこぼれた漆であろう。なお漆桶は土中で腐朽した可能性が高い。



写真1 No.1凹面

写真2 No.1凸面



写真3 No.1①断面



写真4 No.1②断面



写真5 No.1③断面



写真6 No.1④断面



写真7 No.1①赤色漆層拡大

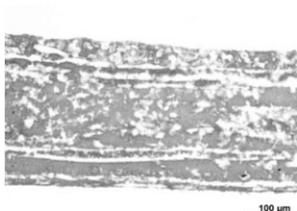


写真8 No.1④断面やや拡大

第8章 七日市前遺跡の調査のまとめ

第1節 古墳時代について

七日市前遺跡では、全体的な遺物の出土量は少ないが、その内の多くが古墳時代の土師器である。遺構については、確実に古墳時代の所産と考えられるのは、遺物を伴う土師器埋設遺構と土器溜まりの2基のみといえる。出土地点をみると、調査区西側から南西にかけてのVI層およびVII層が比較的厚く堆積する範囲から多く出土しているのが分かる。周囲から標高の低い方へ流れ込んできた可能性が高い。

出土遺物をもとめると、土師器の甕や坏、高杯がみられる。最も多いのは甕であろう。完形もしくはある程度全体的な器形に分かる資料は限定的である。出土した甕は、頸部に斜目突帯をもつ所謂「成川式」の影響が想定される資料と、頸部でく字に屈曲し、外反口縁を呈す宮崎平野部でみられる資料とが存在する状況になる。このような土器様相は同じ田高城町内の遺跡である上原第1遺跡でも指摘されており、本遺跡でも同様の傾向が看取できる(近沢 2004)。

さらに注目すべき資料として、筒形器台の存在が挙げられる。全て小破片で出土しており、全体的な器形・法量に分かるものではない。透かし部分は遺存していないが、径がかなり大型になると考えられることや、突帯で挟むように縞縞波状文が施文されるなどの特徴から筒形器台の可能性が高いと考えた。七日市前遺跡と大淀川を挟んで対岸にある志和池古墳群では、従来より九州内でも最古段階の資料と評価される筒形器台の存在が知られている。この資料は近年、同様に採集された壺および高杯と共に、愛媛県市場南組系須恵器という位置づけがなされ、注目されている(市来 2013)。本遺跡で出土した資料についても、今後産地の同定が必要といえる。さらに、SD9 およびその周辺の包含層から出土したハワウについても口径が胴部最大径より小さくなる特徴から5世紀中頃の資料と判断した。これも古手の須恵器の出土例として重要である。かえりの付かない扁平須恵器蓋(52)についても類例を知らず、年代的位置づけについては今後の課題といえる。

このように、七日市前遺跡では古墳時代の遺構はほとんど確認されていないが、出土遺物の中には重要な資料も多く含まれている。本遺跡の北に位置する台地には、県指定史跡高城町古墳群をはじめ、地下式横穴墓等の墳墓が多く存在している。これらの墳墓を造営した人々の集落が台地下、本遺跡周辺に形成されていた可能性が高く、今回出土した古墳時代の遺物についてもこれら集

落から流れ込んできた可能性は十分考えられる。今回の調査ではそのような集落本体にはあたらなかったが、周辺で当該時期の集落の存在を予感させるものといえる。

第2節 平安時代～中世について

本遺跡で検出された遺構は、大部分が平安時代～中世の所産と考えられるが、出土遺物が少なく、帰属時期の判断が難しいものが多い。掘立柱建物跡として認識できた遺構は合計5棟と多くない。調査区北東側ではピットが密集して検出されており、これらの中には、本家は建物跡を構成する柱穴であるものが含まれると推測される。これらの建物跡の同時性を検証することは難しいが、主軸が直交するSB1とSB2は同時期に存在した可能性が指摘できる。平安時代以前の所産と考えられる溝状遺構のSD11やSD2を切っていることから、それ以後の所産といえる。中世期の掘立柱建物跡であると考えられる。それ以外の建物跡についても、時期が特定できる遺物が出土していないため、帰属時期を特定することは困難である。ただし、いずれもVI層ないしVII層土層で検出しており、理土にはV層起源と考えられる土層で堆積しているものが多いことから、平安時代～中世期の所産といえる。

土坑も数多く出土しているが、その機能および帰属時期を特定できるものは少ない。SC14については、底面および壁面に硬くした土を貼り付けていることや、理土中から焼土・炭化物が大量に出土していることから鍛冶関連の伊跡、ないしは焼成土坑のような機能を想定した。遺物が出土していないため、帰属時期の判断材料は少ないが、理土にV層が堆積することから、平安時代～中世の所産といえる。SC19は隅丸長方形の平面プランや深さ、外形ではないが土師器坏と小皿がセットで出土していることなどから、土壇墓である可能性が考えられる。やはり破片資料であるが、銅鏡も出土している。

本遺跡の大きな特徴として、複数の溝状遺構が重複しながら遺跡内を縦・横断していることが挙げられる。SD1とSD11については、ほぼ同じようなルートを走行している。両者については、溝内に水の流れが想定できるが、これが洪水等の影響であれば、本来の掘り形や底面は既に改変されており、実際には道路として使用されていた可能性も考えられる。調査区の西側を縦断するSD9とSD10に関しては、両者に共通であるものと考えられ、時期は異なるがこれも同じようなルートを走行することは興味深い。遺跡の北に隣接してT字路や三叉路に履ぐのために置かれるとされる石敢當があるが、丁度この

辺りは近世薩摩街道が通っていたと考えられる場所でもある。上述のように、本遺跡でも古くは平安時代の可能性があり、少なくとも中世には道路として機能していたと考えられる遺構が複数確認されている。七日市前遺跡周辺は、このように大小さまざまな道が行き交う交通の要衝であったものと推測される。

既に述べたように、古墳時代の遺物に比べると平安時代～中世期の遺物の出土量は多くない。その中でも帰属時期が分かる遺物はさらに少なく、主に出土した貿易陶磁器から遺跡の年代を推定している。出土した貿易陶磁器は、森田D群の白磁碗・皿や龍泉窯系青磁碗IV類以降の元～明代の青磁資料が多い。つまり、大宰府編年でいうG～J期頃（14世紀初頭～16世紀中頃）の資料が出土しているといえる。その中でもH期（14世紀後半～15世紀中頃）の資料が多い。VI層上面で検出したV層期の遺構とVI層期の遺構の一部は、この時期の所産であるものと推測される。

特筆すべき遺物としては、SC26より出土した鐮杖が挙げられる。多くが欠損する状態であるが、遺跡の近辺にあったと伝えられる時宗の寺、高称寺との関連を想起させる遺物である。高称寺は延元4年（1339年）畠山直顕が日和城を攻略後、敵味方の戦死者の供養のために建立したといわれている。天文年間（徳満坊の不動寺馬場に移されたようだが、それまではこの七日市の地にあったとされる。建立年代と出土遺物から推定する遺跡の時期とは概ね符号する。直接的な関係性を示す根拠はないが、同じ七日市にあったとすれば関連する遺物である可能性は高いといえよう。

以上のように、平安時代の七日市前遺跡では、主に道路の可能性のある溝状遺構が確認されている。集落としての様相がはっきりと見て取れるのは中世になってからである。上述のように掘立柱建物跡の多くは中世期のものと推測される。溜め井状の遺構やわずかながら畝状遺構が検出されていることから、集落内で農作物の栽培が行われていたと推測される。この時期にも道路が検出されており、集落と集落を繋ぐものやより大きな幹線道路に至る道も存在したのであろう。鐮杖や漆碗の存在が特筆されるが、その他の検出遺構・遺物からは一般的な集落の様相が看取できる。

七日市前遺跡や真米田遺跡は所謂記瀬原に位置することから、これまでほとんど発掘調査の及んでいない立地にある。国指定史跡である大島島田遺跡も、両遺跡と同様に大淀川とその支流庄内川の合流地点の微高地に立地している。七日市前・真米田両遺跡や大島島田遺跡の調査例が示すように、今後は記瀬原でも遺跡が確認され、調査によって重要な遺跡の存在が明らかになる可能性も高いといえる。

【参考文献】

- 市実真澄 2013 「須恵器からみた古墳時代の地域間交流 - 南九州・伊予・畿内 -」 『第16回九州前方後円墳研究会 熊本大会 古墳時代の地域間交流1』九州前方後円墳研究会
- 高城町 1989 『高城町史』
- 近沢恒典 2004 『細井地区遺跡群』高城町文化財調査報告書 第14集

遺物觀察表

| 遺跡番号 | 種別 | 跡名 | 出土遺物・地点・層位 | 文様・図柄 | | | | | | | | 出土 | 備考 |
|------|-------------|----------|----------------------|--------------|------|------------------|------------------|-------|-------|-----------------------------|------------------------|---------------|----|
| | | | | 文様・図柄 | | 文様 | | 文様 | | 文様 | | | |
| | | | | 2区 | 3区 | 内面 | 外面 | 内面 | 外面 | 内面 | 外面 | | |
| 1 | 遺物類 | 溝 | 30793 上層 | - | - | 平行タタキ、 横目当て瓦葺 | 横目当て瓦葺 | 瓦 | 瓦葺 | 3m以下の瓦葺、横目当て | | | |
| 3 | 遺物類 | 溝 | 30794 上層 | - | 11.0 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 3m以下の瓦葺、自然瓦葺 | 瓦葺遺存 | | |
| 5 | 本館土層 | 埋没倉 | 30797 下層 | - | - | ナデ | 木葺 | 横 | 横 | 3m以下の瓦葺、黄色土葺 | | | |
| 7 | 土師器 | 埴 | 30791 下層/5区1区 | 11.1 | 4.0 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 3m以下の赤土葺 | →3区(1) 瓦葺土葺 | | |
| 7 | 土師器 | 埴 | 30791 下層 | - | 5.2 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の赤土葺 | →3区(1) 遺跡しくぼみ内 | | |
| 8 | 土師器 | 高台付埴 | 30791 中層 | - | - | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 横刺瓦葺 | 瓦葺遺存 | | |
| 9 | 遺物類 | 溝 | 30791 上層 | - | - | 平行タタキ | 平行タタキ→ 横目当て瓦葺 | 凹凸 | 瓦葺 | 3m以下の瓦葺、横目当て | | | |
| 10 | 土師器 | 埴 | 30792 中層 | 11.0 11.6 | 4.1 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 3m以下の瓦葺 | →3区(1) 全体跡に遺存 | | |
| 11 | 土師器 | 埴 | 30792 中層 | 12.0 | 5.3 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺/横刺瓦葺 | →3区(1)→ナデ | | |
| 12 | 土師器 | 埴 | 30792 上層 | 11.3 | 4.9 | 5.0 | 縦刺ナデ | 凹凸 | 横 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 3m以下の赤土葺 | →3区(1) 瓦葺遺存 | | |
| 13 | 本館土層 | 埋没倉 | 30792 上層 | - | - | ナデ | 木葺 | 横 | 横 | 3m以下の瓦葺/土葺 | 全体跡に遺存 | | |
| 14 | 本館土層 | 埋没倉 | 30792 上層 | - | - | ナデ | 木葺 | 横 | 横 | 3m以下の瓦葺、赤・黄色土葺 | | | |
| 15 | 土師器 | 高台付埴 | 30792 上層 30792 1区 | - | 8.6 | 縦刺ナデ | - | 横 | 横 | 3m以下の赤土葺 | | | |
| 16 | 遺物類 | 溝 | 30792 中層 | - | - | 平行タタキ | 横目当て瓦葺 | 凹凸・溝葺 | 凹凸・木葺 | 横葺 | | | |
| 17 | 埋没瓦葺 | 板・土葺 | 30793 上層 | - | - | 瓦葺 | 瓦葺 | 凹凸 | 凹凸 | 横葺、板葺 | 瓦葺・板葺 | | |
| 18 | 土師器 | 高台付埴 | 30793 上層 | - | 7.0 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 横刺瓦葺 | 瓦葺遺存 | | |
| 19 | 遺物類 | 溝 | 30793 上層 | - | - | 横目タタキ | 横刺瓦当瓦葺 | 凹凸 | 凹凸 | 2m以下の瓦葺/赤土葺 | | | |
| 21 | 遺物類 | 溝 | 30793 中層 | - | - | 平行タタキ | 平行当て瓦葺 | 瓦葺 | 瓦葺 | 横葺 | | | |
| 22 | 土師器 | 埴 | 30794 中層 | - | 4.9 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸 | 溝葺 | 横刺瓦葺 | →3区(1)→ナデ、瓦葺遺存 瓦葺遺存 | | |
| 23 | 土師器 | 埴 | 30794 1区 | - | 5.3 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 横刺瓦葺 | →3区(1)→ナデ、瓦葺遺存 | | |
| 24 | 土師器 | 高台付埴 | 30794 中層 | 14.2 | - | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 2m以下の瓦葺/赤土葺 | | | |
| 25 | 土師器 | 埴 | 30795 下層 | - | 5.4 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 3m以下の瓦葺、赤土葺 | →3区(1)→ナデ、全体跡に遺存 | | |
| 26 | 土師器 | 埴 | 3区埋没倉 | 30795 上層 | - | 6.3 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 | →3区(1) 全体跡に遺存 | |
| 27 | 土師器 | 埴 | 30795 上層 | - | 6.8 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 横刺瓦葺 | →3区(1) | | |
| 28 | 土師器 | 高台付埴 | 30795 上層/3区1区 | - | 5.8 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 横 | 横 | 3m以下の瓦葺、赤土葺、自然瓦葺 | | | |
| 29 | 土師器 (赤土土葺A) | 高台付埴 | 30795 上層/3区1区 | - | - | - | 土葺 | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺、横刺瓦 3m以下の赤土葺/赤土葺 | | | |
| 31 | 埋没瓦葺 | 板・土葺 | 30796 下層 | - | - | 瓦葺 | 瓦葺 | 凹凸 | 凹凸 | 横葺、板葺 | 瓦葺 | | |
| 32 | 土師器 | 溝 | 30796 下層 | - | - | 横刺 | 横刺 | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 | 全体跡に遺存 | | |
| 33 | 本館土層 | 埋没倉 | 30796 中層 | - | - | ナデ | 木葺 | 横 | 横 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 | | | |
| 34 | 土師器 | 埴 | 30796 上層 | - | 5.2 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 溝葺 | 3m以下の赤土葺 | →3区(1)→ナデ | | |
| 35 | 土師器 | 埴 | 30796 上層 | - | 5.0 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の赤土葺 | →3区(1)→ナデ | | |
| 36 | 土師器 | 埴 (内埋没倉) | 30796 下層 | - | 5.3 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 横刺瓦葺 | →3区(1)→ナデ | | |
| 37 | 土師器 | 埴 | 30796 下層 | - | 5.0 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 3m以下の赤土葺 | →3区(1)→ナデ、瓦葺遺存 | | |
| 38 | 埋没瓦葺 | 板・土葺 | 30797 1区 | - | - | 瓦葺 | 瓦葺 | 凹凸 | 凹凸 | 横葺、板葺 | 瓦葺 | | |
| 39 | 土師器 | 埴 (内埋没倉) | 30797 中層 | 11.6 | 5.2 | 4.6 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 横 | 横 | 3m以下の赤土葺 | →3区(1) | |
| 40 | 土師器 | 埴 | 30797 上層 | - | 4.9 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 3m以下の赤土葺 | →3区(1)→ナデ | | |
| 41 | 土師器 | 埴 (内埋没倉) | 30797 上層 | - | 5.8 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 凹凸・楕 | 横葺 | →3区(1)→ナデ、全体跡に遺存 | | |
| 42 | 土師器 | 高台付埴 | 30798 下層 | 14.0 | - | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺/赤土葺 | 瓦葺遺存 | | |
| 43 | 土師器 | 埴 (内埋没倉) | 30798 上層 | - | 5.0 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 横葺 | →3区(1)→ナデ、瓦葺遺存 | | |
| 44 | 土師器 | 埴 (内埋没倉) | 30798 中層 | - | 4.9 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 凹凸・楕 | 横刺瓦葺 | →3区(1)→ナデ | | |
| 45 | 土師器 | 埴 | 30798 中層 | - | 5.2 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 横刺瓦葺 | →3区(1) 全体跡に遺存 | | |
| 46 | 土師器 | 埴 (内埋没倉) | 30798 1区 | - | 5.2 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の赤土葺 | →3区(1)→ナデ | | |
| 47 | 土師器 | 高台付埴 | 30798 1区 | - | 6.9 | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 溝葺 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺、赤土葺/赤土葺 | 瓦葺遺存 | | |
| 48 | 土師器 | 高台付埴 | 30798 上層 | - | - | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸・楕 | 溝葺 | 3m以下の瓦葺、白・横刺瓦葺 | | | |
| 49 | 土師器 | 高台付埴 | 30798 上層 | - | - | 縦刺ナデ | 縦刺ナデ | 凹凸 | 凹凸 | 3m以下の瓦葺、3m以下の赤土葺 | | | |

Table with columns: 年度, 種別, 経緯, 出土品類/種目/数量, 数量, 用途, 内容, 方法, 内容, 内容, 発見, 発見, 発見. Contains 100 rows of archaeological data.

Table with columns: 年度, 種別, 経緯, 出土品類/種目/数量, 数量, 用途, 内容, 方法, 内容, 内容, 発見, 発見, 発見. Contains 100 rows of archaeological data.

Table with 18 columns: 調査年度, 種別, 名称, 出土層様(相対・数値), 用途 (土器, 瓦器), 内容, 材質, 形状, 用途, 相対・数値, 類似品, 備考. Rows contain archaeological data for items 1446-1504.

Table with 18 columns: 調査年度, 種別, 名称, 出土層様(相対・数値), 用途 (土器, 瓦器), 内容, 材質, 形状, 用途, 相対・数値, 類似品, 備考. Rows contain archaeological data for items 1495-1577.

真米田遺跡

Table with 10 columns: 調査年度, 横別・距離, 出土遺物・状況・部位, 長さ (cm), 幅 (cm), 厚さ (cm), 重量 (g), 形状・素材, 備考. Rows 1003-1544 list various archaeological findings like pottery and metal objects.

真米田遺跡

Table with 10 columns: 調査年度, 横別・距離, 出土遺物・状況・部位, 長さ (cm), 幅 (cm), 厚さ (cm), 重量 (g), 形状・素材, 備考. Rows 1545-2086 list various archaeological findings, including a large stone fragment (2086).

真米田遺跡

| 調査年度 | 溝形・規模 | 出土遺物・状況・量 | 位置 (m) | | | | 北山・方位 | 備考 |
|------|-------|------------|--------|-------|---------|--------|---------------------------|----|
| | | | 幅 (m) | 幅 (m) | 深さ (cm) | 数量 (個) | | |
| 2047 | 溝 | 65 土器 | 12.0 | 0.30 | 0.60 | 10.00 | | |
| 2048 | 溝 | 65 土器 | 6.0 | 0.30 | 0.75 | 10.00 | | |
| 2049 | 溝 | 110 土器 | 15.0 | 0.30 | 0.60 | 7.00 | | |
| 2050 | 溝 | 128 土器 | 16.8 | 0.75 | 0.50 | 6.00 | | |
| 2051 | 溝 | 127 土器 | 16.0 | 0.45 | 0.50 | 0.00 | | |
| 2052 | 溝 | 120 土器 | 14.0 | 0.30 | 0.30 | 0.00 | | |
| 2053 | 溝 | 120 土器 | 14.5 | 0.30 | 0.75 | 0.00 | | |
| 2054 | 溝 | 121 土器 | 14.0 | 0.30 | 0.45 | 0.00 | | |
| 2055 | 溝 | 123 土器 | 13.5 | 0.75 | 0.60 | 0.00 | | |
| 2056 | 溝 | 120 土器 | 13.0 | 0.75 | 0.50 | 6.00 | | |
| 2057 | 溝 | 107 土器 | 12.0 | 0.30 | 0.45 | 10.00 | | |
| 2058 | 溝 | 104 土器 | 10.6 | 0.30 | 0.60 | 9.00 | | |
| 2059 | 溝 | 122 土器 | 12.0 | 0.30 | 0.75 | 11.00 | | |
| 2060 | 溝 | 81 土器 | 10.0 | 0.30 | 0.30 | 6.00 | | |
| 2061 | 溝 | 110 土器 | 12.0 | 0.30 | 0.30 | 0.00 | | |
| 2062 | 溝 | 110 土器 | 11.6 | 0.45 | 0.45 | 0.00 | | |
| 2063 | 溝 | 96 土器土子 | 10.0 | 0.30 | 0.45 | 0.00 | | |
| 2064 | 溝 | 113 土器 | 11.6 | 0.30 | 0.50 | 7.00 | | |
| 2065 | 溝 | 110 土器 | 11.3 | 0.45 | 0.45 | 0.00 | | |
| 2066 | 溝 | 85 土器 | 10.0 | 0.30 | 0.30 | 0.00 | | |
| 2067 | 溝 | 98 土器 | 10.5 | 0.45 | 0.50 | 0.00 | | |
| 2068 | 溝 | 124 土器 | 12.0 | 0.30 | 0.75 | 6.00 | | |
| 2069 | 溝 | 123 土器 | 12.0 | 0.30 | 0.30 | 0.00 | | |
| 2070 | 溝 | 123 土器 | 12.0 | 0.30 | 0.30 | 0.00 | | |
| 2071 | 溝 | 122 土器 | 11.0 | 0.45 | 0.45 | 0.00 | | |
| 2072 | 溝 | 117 土器 | 11.0 | 0.45 | 0.45 | 6.00 | 掘削付録 | |
| 2073 | 溝 | 119 土器 | 11.0 | 0.30 | 0.30 | 17.00 | 掘削付録 | |
| 2074 | 掘削跡 | 110 表裏両面 | 11.0 | 0.75 | 0.75 | 19.00 | | |
| 2075 | 掘削跡 | 110 表裏両面 | 10.0 | 0.45 | 0.50 | 10.00 | | |
| 2076 | 掘削跡 | 110 土器 | 10.4 | 0.30 | 0.30 | 11.00 | | |
| 2077 | 掘削跡 | 108 土器 | 10.5 | 0.30 | 0.50 | 6.00 | | |
| 2078 | 掘削跡 | 110 土器 | 10.6 | 0.45 | 0.45 | 0.00 | | |
| 2079 | 掘削跡 | 104 5-6層一部 | 10.0 | 0.30 | 0.4-0.5 | 19.00 | | |
| 2080 | 掘削跡 | 104 5-6層一部 | 10.0 | 0.45 | 0.50 | 10.00 | | |
| 2081 | 掘削跡 | 104 5-6層一部 | 14.5 | 0.45 | 0.50 | 11.00 | | |
| 2082 | 掘削跡 | 104 5-6層一部 | 16.0 | 0.30 | 0.30 | 6.00 | | |
| 2083 | 掘削跡 | 110 表裏両面 | 16.4 | 0.45 | 0.3-0.4 | 20.00 | | |
| 2084 | 掘削跡 | 123 土器 | - | - | - | 7.00 | | |
| 2085 | 平塚掘跡 | 100 土器 | 10.0 | 12.0 | 11.0 | 10.00 | | |
| 2086 | 溝 | 128 土器一部 | 12.0 | 0.30 | - | 0.00 | | |
| 2087 | 掘削口 | 115 土器 | 11.0 | 0.20 | 1.00 | 10.00 | 溝底位置不明、 土子も採取されていない | |
| 2088 | 掘削口 | 表裏一部 | 16.0 | 0.50 | 1.00 | 66.00 | 溝底位置不明、表裏面 土子も採取されていない | |
| 2089 | 掘削口 | 112 土器 | 14.0 | 0.10 | 1.00 | 10.00 | 溝底位置不明 | |
| 2090 | 溝 | 124 土器 | 15.4 | 0.30 | 1.75 | 14.00 | 溝底位置不明 | |
| 2091 | 掘削口 | 81 土器土子 | 14.0 | 1.40 | 1.00 | 10.00 | 溝底位置不明 | |

真米田遺跡

| 調査年度 | 溝形・規模 | 出土遺物・状況・量 | 位置 (m) | | | | 北山・方位 | 備考 |
|------|-------|------------|--------|-------|---------|--------|---------------------------|----|
| | | | 幅 (m) | 幅 (m) | 深さ (cm) | 数量 (個) | | |
| 2092 | 掘削口 | 100 5-6層一部 | 12.0 | 12.0 | 1.00 | 10.00 | 溝底位置不明 | |
| 2093 | 掘削口 | 104 土器 | 16.0 | 14.0 | 1.00 | 10.00 | 溝底位置不明 | |
| 2094 | 掘削口 | 100 5-6層一部 | 10.0 | 11.0 | 1.00 | 10.00 | 溝底位置不明、表裏面 土子も採取されていない | |
| 2095 | 掘削口 | 81 土器 | 16.0 | 14.0 | 0.30 | 10.00 | 溝底位置不明、5m×2.0mの掘削口 | |
| 2096 | 掘削口 | 115 土器 | 12.0 | 12.0 | 1.00 | 11.00 | 溝底位置不明 | |
| 2097 | 掘削口 | 104 土器 | 12.0 | 11.0 | 1.00 | 10.00 | 掘削付録 | |
| 2098 | 掘削口 | 100 土器 | 12.0 | 11.0 | 1.00 | 11.00 | 溝底位置不明 | |
| 2099 | 掘削口 | 110 土器 | 16.0 | 12.0 | 1.00 | 17.00 | 溝底位置不明 | |
| 2100 | 掘削口 | 110 土器 | 15.0 | 11.0 | 1.00 | 17.00 | 溝底位置不明 | |
| 2101 | 掘削口 | 81 土器一部 | 12.0 | 12.0 | 1.00 | 6.00 | 溝底位置不明 | |
| 2102 | 掘削口 | 81 土器 | 12.0 | 11.0 | 0.30 | 17.00 | 溝底位置不明 | |
| 2103 | 掘削口 | 104 5-6層一部 | 10.0 | 12.0 | 0.30 | 10.00 | 溝底位置不明 | |
| 2104 | 溝 | 110 土器 | 5.7 | 6.6 | 5.9 | 20.00 | | |
| 2105 | 溝 | 110 土器 | 6.1 | 7.2 | 3.9 | 13.00 | | |
| 2106 | 溝 | 123 土器 | 7.4 | 7.1 | 1.1 | 23.00 | | |
| 2107 | 溝 | 81 土器 | 5.1 | 7.4 | 1.6 | 8.00 | | |
| 2108 | 溝 | 96 土器土子 | 5.6 | 6.5 | 2.2 | 9.00 | | |
| 2109 | 溝 | 101 土器 | 5.0 | 6.0 | 2.4 | 9.00 | | |
| 2110 | 溝 | 110 土器 | 4.9 | 3.7 | 2.2 | 4.00 | | |
| 2111 | 溝 | 110 土器 | 4.5 | 4.3 | 1.5 | 10.00 | | |
| 2112 | 溝 | 96 土器土子 | 3.2 | 3.1 | 2.3 | 4.00 | | |
| 2113 | 溝 | 110 土器 | 4.9 | 3.7 | 3.0 | 7.00 | | |
| 2114 | 溝 | 110 土器 | 4.5 | 4.2 | 2.4 | 6.00 | | |
| 2115 | 溝 | 123 土器 | 3.2 | 6.3 | 2.9 | 6.00 | | |
| 2116 | 溝 | 110 土器 | 5.0 | 6.0 | 3.2 | 9.00 | | |
| 2117 | 溝 | 110 土器 | 3.9 | 3.7 | 2.7 | 4.00 | | |
| 2118 | 溝 | 120 土器 | 4.7 | 7.2 | 2.0 | 13.00 | | |
| 2119 | 溝 | 101 土器 | 3.9 | 3.8 | 2.9 | 8.00 | | |
| 2120 | 溝 | 110 土器 | 5.0 | 6.0 | 2.4 | 8.00 | | |
| 2121 | 溝 | 110 土器 | 3.8 | 3.9 | 2.1 | 4.00 | | |
| 2122 | 溝 | 101 土器 | 3.4 | 6.1 | 2.1 | 3.00 | | |
| 2123 | 溝 | 108 土器 | 3.2 | 4.1 | 2.1 | 7.00 | | |
| 2124 | 溝 | 124 土器 | 3.7 | 4.0 | 1.8 | 10.00 | | |
| 2125 | 溝 | 123 土器 | 2.6 | 4.6 | 2.2 | 10.00 | | |
| 2126 | 溝 | 104 土器 | 3.8 | 4.4 | 1.7 | 3.00 | | |
| 2127 | 溝 | 81 土器 | 4.2 | 3.8 | 1.3 | 3.00 | | |
| 2128 | 溝 | 110 土器 | 3.6 | 3.7 | 1.9 | 10.00 | | |
| 2129 | 溝 | 110 土器 | 3.1 | 4.3 | 2.0 | 3.00 | | |
| 2130 | 溝 | 110 土器 | 3.3 | 3.7 | 1.0 | 3.00 | | |
| 2131 | 溝 | 110 土器 | 4.1 | 3.9 | 2.3 | 3.00 | | |
| 2132 | 溝 | 100 土器 | 3.0 | 4.2 | 2.2 | 2.00 | | |
| 2133 | 溝 | 110 土器 | 3.6 | 3.4 | 2.1 | 2.00 | | |
| 2134 | 溝 | 104 土器 | 4.0 | 4.7 | 2.3 | 4.00 | | |
| 2135 | 溝 | 101 土器 | 4.5 | 3.3 | 1.6 | 3.00 | | |
| 2136 | 溝 | 81 土器 | 3.3 | 3.3 | 1.9 | 3.00 | | |

真米田遺跡

| 調査年度 | 溝列・段溝 | 跡山遺構・柱石・溝柱 | 面積 (㎡) | | | | 所在・方位 | 備考 |
|------|-------|------------|--------|-------|---------|--------|-------|----|
| | | | 長さ (m) | 幅 (m) | 厚さ (cm) | 数量 (個) | | |
| 2017 | 跡溝 | E15 6号 | 5.5 | 4.0 | 2.8 | 340 | | |
| 2018 | 跡溝 | E15 6号 | 5.2 | 4.0 | 2.5 | 300 | | |
| 2019 | 跡溝 | E15 6号 | 4.0 | 3.0 | 1.9 | 240 | | |
| 2040 | 跡溝 | E15 6号 | 5.4 | 4.1 | 3.1 | 400 | | |
| 2041 | 跡溝 | E15 6号 | 5.5 | 4.0 | 2.0 | 310 | | |
| 2042 | 跡溝 | E15 6号 | 2.9 | 3.2 | 2.4 | 240 | | |
| 2043 | 跡溝 | E16 6号 | 1.9 | 3.1 | 1.3 | 70 | | |
| 2044 | 跡溝 | E15 6号 | 4.5 | 3.9 | 2.0 | 300 | | |
| 2045 | 跡溝 | E109 5号 | 2.6 | 3.9 | 1.6 | 320 | | |
| 2046 | 跡溝 | E15 6号 | 2.3 | 4.1 | 1.9 | 170 | | |
| 2047 | 跡溝 | E16 6号 | 3.7 | 4.1 | 2.1 | 140 | | |
| 2048 | 跡溝 | E15 5号 | 2.7 | 3.1 | 1.9 | 170 | | |
| 2049 | 跡溝 | E15 6号 | 2.7 | 2.8 | 1.2 | 40 | | |
| 2050 | 跡溝 | E15 6号 | 3.7 | 4.4 | 1.8 | 200 | | |
| 2051 | 跡溝 | E15 6号 | 3.4 | 3.9 | 1.9 | 210 | | |
| 2052 | 跡溝 | E15 5号 | 3.1 | 4.6 | 2.7 | 360 | | |
| 2053 | 跡溝 | E16 5号 | 3.9 | 3.8 | 3.6 | 310 | | |
| 2054 | 跡溝 | E17 6号 | 3.9 | 4.7 | 1.5 | 300 | | |
| 2055 | 跡溝 | E15 5号 | 2.9 | 4.6 | 2.3 | 300 | | |
| 2056 | 跡溝 | E16 6号 | 5.3 | 3.7 | 1.7 | 360 | | |
| 2057 | 跡溝 | E16 6号 | 2.5 | 4.7 | 2.0 | 260 | | |
| 2058 | 跡溝 | E19 5号 | 2.8 | 3.3 | 1.7 | 70 | | |
| 2059 | 跡溝 | E16 6号 | 2.4 | 3.4 | 2.0 | 160 | | |
| 2060 | 跡溝 | E11 6号 | 2.9 | 3.0 | 1.2 | 110 | | |
| 2061 | 跡溝 | E16 5号 | 2.5 | 3.4 | 2.1 | 190 | | |
| 2062 | 跡溝 | E18 5号 | 2.9 | 3.6 | 0.9 | 160 | | |
| 2063 | 跡溝 | E10 5号 | 3.5 | 4.3 | 1.6 | 210 | | |
| 2064 | 跡溝 | E15 5号 | 3.5 | 4.4 | 2.5 | 420 | | |
| 2065 | 跡溝 | E17 5号 | 2.5 | 3.7 | 2.1 | 200 | | |
| 2066 | 跡溝 | E19 5号 | 2.7 | 2.9 | 1.6 | 70 | | |
| 2067 | 跡溝 | E15 6号 | 2.4 | 3.5 | 1.6 | 110 | | |
| 2068 | 跡溝 | E19 5号 | 2.7 | 3.3 | 2.0 | 210 | | |
| 2069 | 跡溝 | E5 6号 | 2.5 | 3.3 | 1.4 | 140 | | |
| 2070 | 跡溝 | E15 5号 | 3.1 | 3.4 | 1.4 | 80 | | |
| 2071 | 跡溝 | E21 6号 | 2.4 | 3.3 | 1.9 | 100 | | |
| 2072 | 跡溝 | E10 6号 | 2.6 | 3.1 | 2.1 | 90 | | |
| 2073 | 跡溝 | E10 5号 | 2.9 | 3.0 | 2.4 | 230 | | |
| 2074 | 跡溝 | E19 5号 | 2.6 | 4.2 | 1.6 | 150 | | |
| 2075 | 跡溝 | E10 5号 | 2.8 | 2.4 | 1.5 | 110 | | |
| 2076 | 跡溝 | E10 6号 | 2.1 | 2.6 | 1.3 | 110 | | |
| 2077 | 跡溝 | E16 5号 | 2.4 | 3.1 | 1.6 | 180 | | |
| 2078 | 跡溝 | E18 5号 | 1.4 | 2.3 | 1.2 | 50 | | |
| 2079 | 跡溝 | E19 5号 | 4.5 | 2.5 | 1.1 | 50 | | |
| 2080 | 跡溝 | E19 5号 | 2.5 | 2.5 | 1.6 | 110 | | |
| 2081 | 跡溝 | E19 5号 | 2.7 | 3.2 | 1.7 | 260 | | |

真米田遺跡

| 調査年度 | 溝列・段溝 | 跡山遺構・柱石・溝柱 | 面積 (㎡) | | | | 所在・方位 | 備考 |
|------|------------|------------|--------|---------|---------|--------|-------------------------------|---------------------|
| | | | 長さ (m) | 幅 (m) | 厚さ (cm) | 数量 (個) | | |
| 2082 | 跡溝 | E18 5号 | 2.4 | 4.1 | 1.6 | 110 | | |
| 2083 | 跡溝 | E17 6号 | 2.7 | 3.2 | 1.7 | 160 | | |
| 2084 | 跡溝 | E14 5号(田) | 2.9 | 3.3 | 1.8 | 260 | | |
| 2085 | 跡溝 | E16 5号 | 2.8 | 3.1 | 1.2 | 130 | | |
| 2086 | 跡溝 | E10 6号 | 2.9 | 2.7 | 2.1 | 170 | | |
| 2087 | 跡溝 | E21 40号 | 2.0 | 3.5 | 1.6 | 150 | | |
| 2088 | 跡溝 | E5 6号 | 2.4 | 3.4 | 2.1 | 230 | | |
| 2089 | 跡溝 | E17 6号 | 2.1 | 2.8 | 1.8 | 110 | | |
| 2090 | 跡溝 | E109 5号 | 2.3 | 2.9 | 1.3 | 60 | | |
| 2091 | 跡溝 | E19 5号 | 1.6 | 1.8 | 1.1 | 20 | | |
| 2092 | 跡溝 | E19 5号 | 2.4 | 2.7 | 1.2 | 80 | | |
| 2093 | 跡溝 | E15 5号 | 3.1 | 2.4 | 1.2 | 100 | | |
| 2094 | 跡溝 | E07 6号 | 2.0 | 0.9 | 1.1 | 110 | | |
| 2095 | 跡溝 | E19 6号 | 2.2 | 2.3 | 1.0 | 60 | | |
| 2096 | 跡溝 | E19 5号 | 2.3 | 2.5 | 1.6 | 130 | | |
| 2097 | 跡溝 | E19 5号 | 1.5 | 2.1 | 1.3 | 20 | | |
| 2098 | 跡溝 | E19 6号 | 2.7 | 2.0 | 1.3 | 60 | | |
| 2099 | 跡溝 | E19 5号 | 1.6 | 1.8 | 1.2 | 20 | | |
| 2100 | 跡溝 | E15 6号 | 1.9 | 2.0 | 0.5 | 30 | | |
| 2101 | 跡溝 | E19 5号 | 1.8 | 1.9 | 1.3 | 40 | | |
| 2102 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 37.0 | 38.0 | 12.4 | 1150 | H&T下の粘土塊・黄褐色土 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2103 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 67.5 | 68.0 | (31~35) | 1410 | H&T下の粘土塊・白・黄褐色土 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2104 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 27.0 | (31~35) | (31~35) | 1310 | H&T下の粘土塊・白・黄褐色土・H&T下の泥炭・黄褐色土 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2105 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 37.0 | 111.0 | 34.0 | 2000 | H&T下の粘土塊・黄褐色土 | |
| 2106 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 37.5 | 14.0 | 27.5 | 1410 | H&T下の粘土塊・灰泥・黄褐色土 | |
| 2107 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 48.5 | 14.0 | 24.0 | 1200 | H&T下の白・黄褐色土 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2108 | 粘土塊 (伊賀型?) | E19 6号 | 36.4 | 36.4 | 11.8 | 1310 | H&T下の赤褐色土・H&T下の白・黄褐色土・灰泥・黄褐色土 | |
| 2109 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 35.5 | 16.0 | 13.0 | 1200 | H&T下の粘土塊・黄褐色土 | |
| 2110 | 粘土塊 (伊賀型?) | E19 6号 | 42.0 | (31~35) | 23.0 | 1240 | H&T下の赤褐色土・黄褐色土 | 黄褐色付層 |
| 2111 | 粘土塊 (伊賀型?) | E19 6号 | 156 | 15.0 | 11.8 | 1100 | H&T下の粘土塊・黄褐色赤褐色土 | 黄褐色付層 |
| 2112 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 86.0 | 14.0 | 27.5 | 1270 | H&T下の白・黄褐色土・灰泥・黄褐色土 | 黄褐色付層 |
| 2113 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 6号 | 146.0 | 14.0 | 14.0 | 1410 | H&T下の粘土塊 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2114 | 粘土塊 (伊賀型?) | E15 5号 | 44.5 | 14.0 | 14.0 | 1310 | 黄褐色・H&T下の白・黄褐色土・H&T下の粘土塊 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2115 | 粘土塊 (伊賀型?) | E14 5号 | 15.4 | 17.5 | 10.0 | 610 | H&T下の粘土塊・黄褐色土 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2116 | 粘土塊 (伊賀型?) | E16 6号 | 15.4 | 17.0 | 13.0 | 1100 | H&T下の赤褐色土・H&T下の白・黄褐色土・黄褐色土 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2117 | 粘土塊 (伊賀型?) | E16 6号 | 35.0 | 13.0 | 12.4 | 1310 | H&T下の白・黄褐色土 | 粘土黄褐色土層付層 |
| 2118 | 粘土塊 | E1 5号 | 3.1 | 4.4 | 2.4 | 150 | 黄褐色・H&T下の粘土塊 | 赤褐色 |
| 2119 | 粘土塊 | E1 5号 | 4.5 | 4.4 | 2.8 | 350 | 黄褐色・H&T下の白・黄褐色土 | 赤褐色 |
| 2120 | 粘土塊 | E11 5号 | 4.8 | 4.7 | 2.4 | 350 | 黄褐色・H&T下の赤褐色土 | 赤褐色 |
| 2121 | 黄褐色 | E14 5号 | 60.0 | 60.0 | 11.0 | 1400 | H&T下の赤褐色土 | 土間部付・伊賀赤土・粘土黄褐色土層付層 |
| 2122 | 黄褐色 | E10 5号 | 15.8 | 60.0 | 11.0 | 1470 | H&T下の赤褐色土 | 土間部付・伊賀赤土・粘土黄褐色土層付層 |
| 2123 | 黄褐色 | E19 5号 | 16.2 | 17.0 | 11.0 | 610 | 黄褐色付層 | 土間部付・伊賀赤土・粘土黄褐色土層付層 |
| 2124 | 黄褐色 | E17 5号 | 46.5 | 44.0 | 11.0 | 1310 | 黄褐色付層付層 | 土間部付・伊賀赤土・粘土黄褐色土層付層 |
| 2125 | 黄褐色 | E19 6号 | 14.5 | 13.0 | 11.0 | 1360 | 黄褐色付層 | 土間部付・伊賀赤土・粘土黄褐色土層付層 |
| 2126 | 黄褐色 | E16 6号 | 46.0 | 14.0 | 11.0 | 1320 | H&T下の白・黄褐色土 | 土間部付・伊賀赤土・粘土黄褐色土層付層 |

真米田遺跡

| 調査年度 | 溝形・設備 | 出土遺物・植物・動物 | 位置 (m) | | | | 用途・説明 | 備考 |
|------|----------|------------|--------|-------|---------|--------|-------------------|----------------------|
| | | | 長さ (m) | 幅 (m) | 深さ (cm) | 数量 (個) | | |
| 2017 | 土溝 | 50 土 壺 | 16.0 | 1.4 | - | 3.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2018 | 土溝 | 50 土 壺 | 16.0 | 1.0 | - | 14.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2019 | 土溝 | 46 土 壺 | 14.0 | 1.2 | - | 0.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2020 | 土溝 | 54 土 壺 | 15.4 | 1.1 | - | 14.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm 埋物類(遺物類) |
| 2021 | 土溝 | 54 土 壺 | 12.5 | 1.0 | - | 0.00 | 以上溝 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2022 | 土溝 | 53 土 壺 | 13.0 | 1.7 | - | 0.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2023 | 土溝 | 54 土 壺 | 13.0 | 1.5 | - | 0.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2024 | 土溝 | 520 土 壺 | 13.0 | 1.7 | - | 30.00 | 以上溝 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2025 | 土溝 | 50 土 壺 | 13.0 | 1.7 | - | 10.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2026 | 土溝 | 50 土 壺 | 13.0 | 1.9 | - | 11.00 | 以上溝 埋物 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2027 | 土溝 | 517 土 壺一組 | 13.0 | 1.6 | - | 30.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2028 | 土溝 | 519 土 壺 | 14.0 | 1.5 | - | 30.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2029 | 土溝 | 519 土 壺 | 13.0 | 1.3 | - | 14.00 | 以上溝 埋物 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2030 | 土溝 | 50 土 壺 | 12.0 | 1.4 | - | 10.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2031 | 土溝 | 46 土 壺 | 14.0 | 1.5 | - | 19.00 | 以上溝 埋物 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2032 | 土溝 | 50 土 壺 | 14.4 | 1.6 | - | 14.00 | 以上溝 埋物 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2033 | 土溝 | 44 土 壺 | 13.0 | 1.0 | - | 0.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2034 | 土溝 | 517 土 壺 | 14.5 | 1.0 | - | 1.00 | 遺物類 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2035 | 土溝 | 516 土 壺 | 14.0 | 1.0 | - | 1.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2036 | 土溝 | 46 土 壺 | 13.0 | 1.1 | - | 1.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2037 | 土溝 | 46 土 壺 | 12.0 | 1.0 | - | 1.00 | 遺物類 3m以下石段 | 溝長径 50cm |
| 2038 | 土溝 | 519 土 壺 | 13.0 | 1.9 | - | 1.00 | 遺物類 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2039 | 土溝 | 54 土 壺 | 13.5 | 1.0 | - | 1.00 | 埋物(遺物類) 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2040 | 土溝 | 51 土 壺 | 13.0 | 1.0 | - | 1.00 | 遺物類 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2041 | 土溝 | 46 土 壺 | 12.0 | 1.0 | - | 30.00 | 遺物類 3m以下石段・敷物 | 溝長径 50cm |
| 2042 | 土溝 | 54 土 壺 | 13.0 | 1.0 | - | 1.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2043 | 土溝 | 51 土 壺 | 12.0 | 1.0 | - | 1.00 | 以上溝埋物一組 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2044 | 土溝 | 519 土 壺 | 13.0 | 1.9 | - | 0.00 | 埋物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2045 | 土溝 | 516 土 壺 | 12.0 | 1.8 | - | 0.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2046 | 土溝 | 519 土 壺 | 12.0 | 1.5 | - | 14.00 | 遺物類 3m以下石段敷配物 | 溝長径 50cm |
| 2047 | 土溝 | 519 土 壺 | 13.0 | 1.3 | - | 1.00 | 遺物類 埋物 | 溝長径 50cm |
| 2048 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | - | - | - | - | 溝長 | 溝長 |
| 2049 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | - | - | - | - | 溝長 | 溝長 |
| 2050 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | - | - | - | - | 溝長 | 溝長 |
| 2051 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | - | - | - | - | 溝長 | 溝長 |
| 2052 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | - | - | - | - | 溝長 | 溝長 |
| 2053 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | 11.0 | 11.0 | 10.0 | 1.00 | 溝長 | 5m幅×5m長さ 溝長径 50cm |
| 2054 | 溝長径 50cm | 51 土 壺 | 10.0 | 10.0 | 10.0 | 14.00 | 溝長 | 埋物(土) |
| 2055 | 溝長 | 54 土 壺 | 17.0 | 14.0 | 17.0 | 30.00 | 埋物類 | 埋物類 |
| 2056 | 溝長 | 519 土 壺 | 10.0 | 10.0 | 10.0 | 10.00 | 埋物類 | 埋物類 |
| 2057 | 溝長 | 517 土 壺 | 7.4 | 3.1 | 3.0 | 10.00 | 埋物類 | 埋物類 |
| 2058 | 溝長 | 54 土 壺 | 4.5 | 2.4 | 1.2 | 5.00 | 埋物類 | 埋物類 |
| 2059 | 溝長 | 47 土 壺 | 17.0 | 17.4 | 17.0 | 10.00 | 埋物類 | 埋物類 |
| 2060 | 溝長 | 514 土 壺 | 10.0 | 10.0 | 10.0 | 17.00 | 埋物類 | 埋物類 |
| 2061 | 溝長 | 516 土 壺 | 10.0 | 10.0 | 10.0 | 11.00 | 埋物類 | 埋物類 |

真米田遺跡

| 調査年度 | 溝形・設備 | 出土遺物・植物・動物 | 位置 (m) | | | | 用途・説明 | 備考 |
|------|----------|------------|--------|-------|---------|--------|---------------------|----------|
| | | | 長さ (m) | 幅 (m) | 深さ (cm) | 数量 (個) | | |
| 2062 | 溝長 | 519 土 壺 | 11.0 | 11.0 | 11.0 | 10.00 | 埋物類 | |
| 2063 | 溝長 | 519 土 壺 | 17.0 | 17.0 | 17.0 | 10.00 | 埋物類 | |
| 2064 | 溝長 | 519 土 壺 | 17.0 | 16.0 | 16.0 | 14.00 | 埋物類 | |
| 2065 | 溝長 | 516 土 壺 | 25.2 | 11.2 | 11.0 | 17.00 | 埋物類 | |
| 2066 | 溝長 | 519 土 壺 | 13.0 | 10.0 | 10.0 | 10.00 | 埋物類 | |
| 2067 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | 1.0 | 1.7 | 0.5 | 3.0 | 溝長 | 溝長径 50cm |
| 2068 | 溝長径 50cm | 50 土 壺 | 2.2 | 1.7 | 0.6 | 4.0 | 埋物類 | 溝長径 50cm |
| 2069 | 溝長径 50cm | 51 土 壺 | 1.7 | 1.5 | 0.7 | 3.0 | 埋物類 | 溝長径 50cm |
| 2070 | 溝長径 50cm | 46 土 壺 | 1.2 | 1.0 | 0.5 | 1.0 | 埋物類 | 溝長径 50cm |
| 2071 | 溝長径 50cm | 519 土 壺 | 1.7 | 1.7 | 0.5 | 1.0 | 埋物類 | 溝長径 50cm |
| 2072 | 溝長径 50cm | 517 土 壺 | 1.6 | 1.4 | 0.6 | 3.0 | 溝長 | 溝長径 50cm |
| 2073 | 溝長 | 520 土 壺 | 9.0 | 1.9 | 1.0 | 9.00 | 埋物類 | |
| 2074 | 埋物類 | 51 土 壺 | 6.5 | 13.0 | 1.1 | 6.00 | 埋物類 | |
| 2075 | 埋物類 | 51 土 壺一組 | 14.0 | 16.0 | 4.0 | 10.00 | 埋物類 | |
| 2076 | 埋物類 | 519 土 壺 | 12.0 | 14.0 | 1.1 | 10.00 | 埋物類 | |
| 2077 | 穴状瓦 | 51 土 壺 | 1.5 | 1.9 | 1.7 | 3.0 | 溝長 | 溝長径 50cm |
| 2078 | 穴状瓦 | 50 土 壺 | 11.2 | 16.1 | 1.3 | 10.00 | 埋物類 | |
| 2079 | 瓦 | 519 土 壺 | 7.3 | 11.5 | 7.7 | 26.0 | 3m以下石段敷配物 3m以下石段・敷物 | 土質調査 埋物類 |
| 2080 | 瓦 | 46 土 壺 | 9.7 | 4.2 | 2.2 | 11.00 | 溝長径 50cm | 溝長径 50cm |
| 2081 | 瓦 | 516 土 壺 | 4.0 | 15.4 | 16.0 | 10.00 | 溝長径 50cm | 溝長径 50cm |
| 2082 | 瓦 | 519 土 壺 | 11.0 | 11.0 | 10.0 | 10.00 | 溝長径 50cm | 溝長径 50cm |

七日市前遠跡

Table with columns for 路線番号, 種別, 路線, 駅止間隔・利用・乗車, 乗車時間, 区画, 交通・設備, 駅間, 駅止, 備考. It lists train routes and stations in the area.

七日市前遠跡

Table with columns for 路線番号, 種別, 路線, 駅止間隔・利用・乗車, 乗車時間, 区画, 交通・設備, 駅間, 駅止, 備考. This table continues the list of train routes and stations.

七日前遺跡

| 遺跡番号 | 埋蔵・發見 | 出土遺物・地点・層位 | 測定 (cm) | | | | 出土・品目 | 備考 |
|------|---------|------------|---------|--------|---------|--------|-------------|----|
| | | | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 高さ (cm) | 重量 (g) | | |
| 61 | 銅釘 | 30292 上層 | 30.8 | 12.8 | 4.0 | 109.5g | 銅釘 | |
| 62 | 土製管瓦 | 3218 上層 | 1.7 | 1.4 | 1.4 | 8.0 | 管瓦(土製管瓦) | |
| 63 | 銅釘 | 3219 上層 | 32.0 | 11.5 | - | 95.0 | - | |
| 64 | 銅釘 | 3222 中層 | 32.4 | 10.0 | 10.0 | 11.0 | - | |
| 67 | 銅釘 | 3226 上層 | 31.0 | 14.0 | 10.0 | 118.0 | 銅製品 | |
| 68 | 銅釘 | 3241 上層 | 31.0 | 10.4 | 10.4 | 12.0 | - | |
| 71 | 粘土製瓦 | 3242 一帯 | 18.5 | 16.0 | 19.2 | 101.0 | 瓦片 | |
| 74 | 銅釘 | 3213 上層 | 34.5 | 10.0 | 10.5 | 18.0 | - | |
| 100 | 粘土瓦(平型) | P623 中層 | 17.0 | 19.0 | 18.5 | 152.0 | 19cm以下の形の子。 | |
| 101 | 粘土製瓦片 | P645 上層 | - | - | - | - | 瓦片 | |
| 112 | 銅釘 | P607 一帯 | 100.0 | 11.5 | 10.4 | 2000.0 | 銅釘 | |
| 113 | 銅釘 | P6111 上層 | 17.0 | 11.2 | 10.4 | 1015.0 | 銅釘 | |
| 114 | 銅釘 | P6137 一帯 | 14 | 18 | 2.2 | 25.0 | - | |
| 115 | 銅釘 | 12 5層 | 34.0 | 11.1 | 10.0 | 14.0 | - | |
| 116 | 銅釘 | 17 6層 | 33.0 | 10.1 | 10.1 | 13.0 | - | |
| 117 | 銅釘 | 18 6層 | 21 | 29 | 1.8 | 16.0 | - | |
| 118 | 銅釘 | 25 6層 | 29 | 29 | 1.4 | 10.0 | - | |
| 119 | 銅釘 | 31 6層 | 25 | 31 | 2.1 | 17.0 | - | |
| 120 | 銅釘 | 31 5層 | 29 | 22 | 3.2 | 170.0 | - | |
| 121 | 銅釘 | 38 5層 | 32.0 | 12.0 | - | 11.0 | - | |
| 124 | 埋蔵 | P1 2層一帯 | 14.0 | 10.0 | 10.1 | 13.0 | 銅製品 | |

写真图版



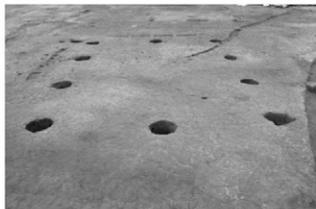
真米田遺跡遠景（東上空より霧島を望む）



真米田遺跡調査区全景

図版2 真米田遺跡の調査②

真米田遺跡



SB2 完掘状況 (南から)



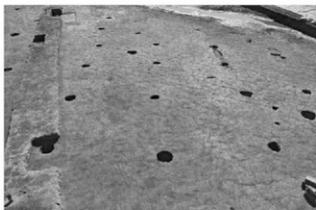
SB5・6 完掘状況 (北から)



SB4 完掘状況 (南から)



SB12 完掘状況 (北東から)



SB13 完掘状況 (北東から)



SB14 完掘状況 (東から)



SB15 完掘状況 (北から)



SB16 完掘状況 (西から)

真米田遺跡

図版3 真米田遺跡の調査③



SB7・8・SC26 検出状況 (北から)



SB7 P2 遺物出土状況 (東から)



SB7 P3 土層断面 (東から)



SB7 P8 土層断面 (西から)



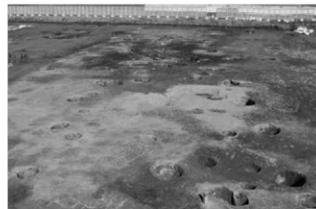
SB7 P8 遺物出土状況 (南から)



SB7 P13 土層断面 (西から)



SB7・8 完掘状況 (北から)



SB7・8・9 完掘状況 (南から)

図版4 真米田遺跡の調査④

真米田遺跡



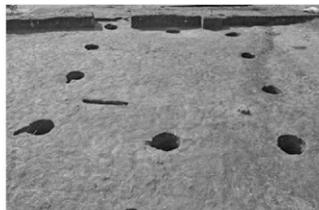
SB17 完掘状況 (南から)



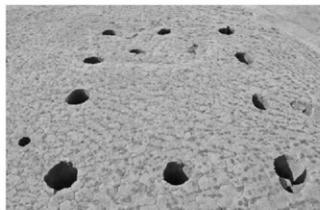
SB19 完掘状況 (南東から)



SB20 完掘状況 (北東から)



SB21 完掘状況 (東から)



SB23 完掘状況 (北東から)



SB24 完掘状況 (北から)



SB25 完掘状況 (北西から)



SB26 完掘状況 (北東から)

図版5 真米田遺跡の調査⑤

真米田遺跡



SC4 遺物出土状況 (南東から)



SC4 完掘状況 (南東から)



SC5 遺物出土状況 (南東から)



SC5 完掘状況 (南東から)



SC8 土層断面 (南西から)



SC8 底面ビット検出状況 (南西から)



SC8 底面ビット断面 (南西から)



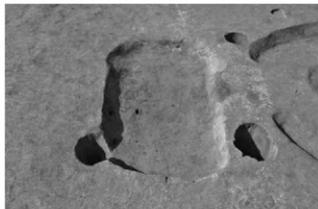
SC8 底面ビット炭化物層断面 (南西から)

図版6 真米田遺跡の調査⑥

真米田遺跡



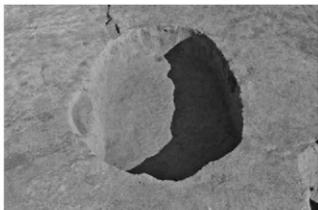
SC13 遺物出土状況 (東から)



SC13 完掘状況 (東から)



SC19 遺物出土状況 (北から)



SC19 完掘状況 (南から)



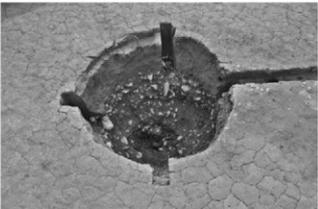
SC34 遺物出土状況 (北から)



SC34 遺物出土状況② (北から)



SC56 土層断面 (北西から)



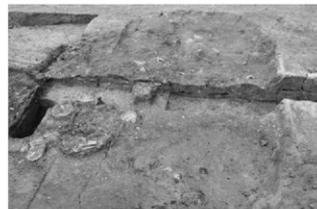
SC56 完掘状況 (北西から)

図版7 真米田遺跡の調査⑦

真米田遺跡



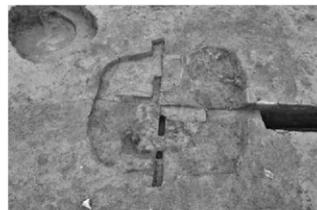
SC39 炭化物層検出状況 (南西から)



SC39 土層断面 (南から)



SC39 遺物出土状況 (北から)



SC39 完掘状況 (南から)



SC45+46 検出状況 (北東から)



SC46 土層断面 (北西から)



SC46 遺物出土状況 (北西から)



SC45・46 完掘状況 (北東から)

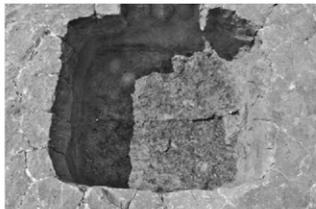
図版8 真米田遺跡の調査⑧



SC63 土層断面 (北東から)



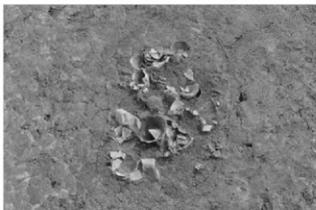
SC63 遺物出土状況 (南東から)



SC63 炭化物層 (北東から)



SC63 炭化物層断面 (北東から)



SC70 遺物出土状況 (北から)



SC70 土層断面 (北から)



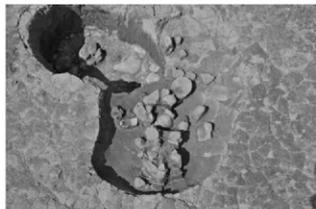
SC71・72 遺物出土状況 (南から)



SC72 土層断面 (東から)

真米田遺跡

真米田遺跡



SC72 遺物出土状況 (南から)



SK1 検出状況 (北から)



SK1 周溝土層断面 (南から)



SK1 緑釉陶器出土状況 (南から)

図版9 真米田遺跡の調査⑨



SC71・72 完掘状況 (北から)



SK1 墓壇土層断面 (北西から)



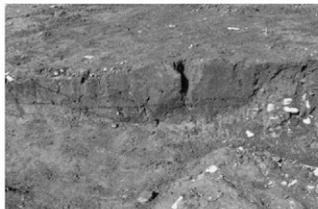
SK1 軽石製甕出土状況 (北から)



SK1 完掘状況 (北から)

図版 10 真米田遺跡の調査⑩

真米田遺跡



SD1 土層断面 (東から)



SD1 完掘状況 (南東から)



SD3 完掘状況 (南から)



SD4 土層断面① (南西から)



SD4 土層断面② (南西から)



SD4 完掘状況 (南から)



SD5 土層断面 (西から)



SD5 完掘状況 (北西から)

真米田遺跡

図版 11 真米田遺跡の調査⑪



SD6 遺物出土状況 (北から)



SD6 土層断面 (北から)



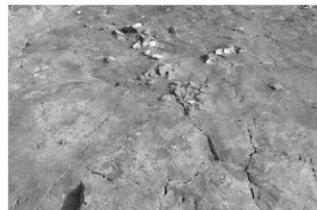
SD6 完掘状況 (南西から)



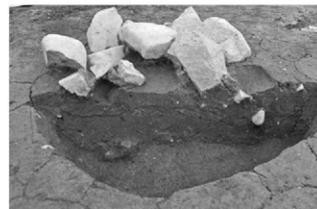
SD11 完掘状況 (南から)



SD14 完掘状況 (南東から)



SH7 検出状況 (北から)



SS2 土層断面 (南西から)

図版 12 真米田遺跡の調査⑫

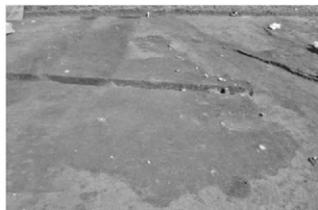
真米田遺跡



SS3 検出状況 (南から)



SX1 完掘状況 (南西から)



SX2・SD4 検出状況 (南西から)



SX2 土層断面 (南東から)



窪地検出状況 (南から)



窪地遺物出土状況 (南東から)



整地層土層断面 (北東から)

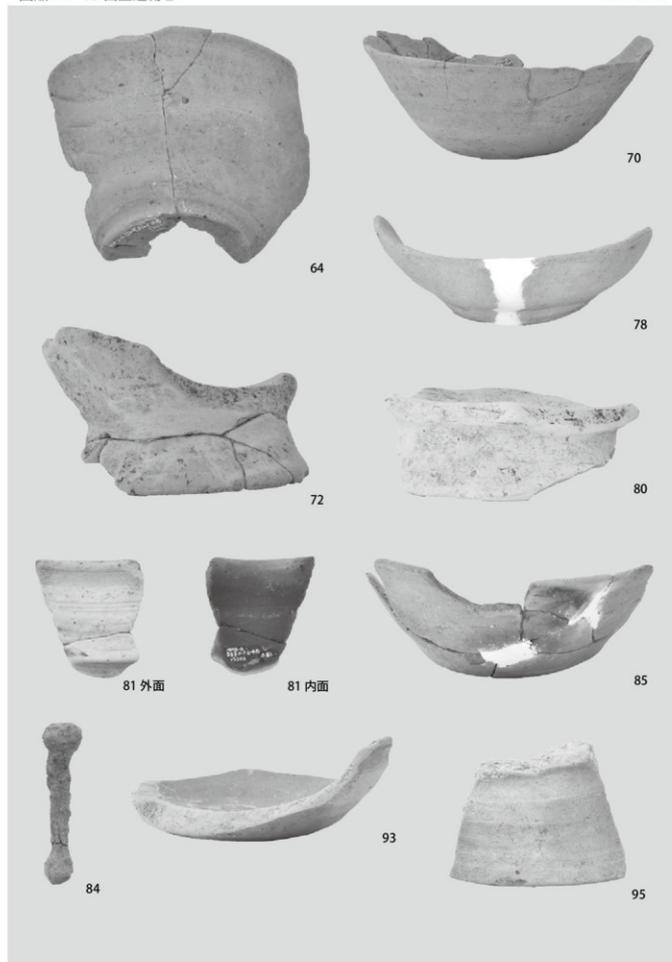
真米田遺跡

図版 13 SB 出土遺物①



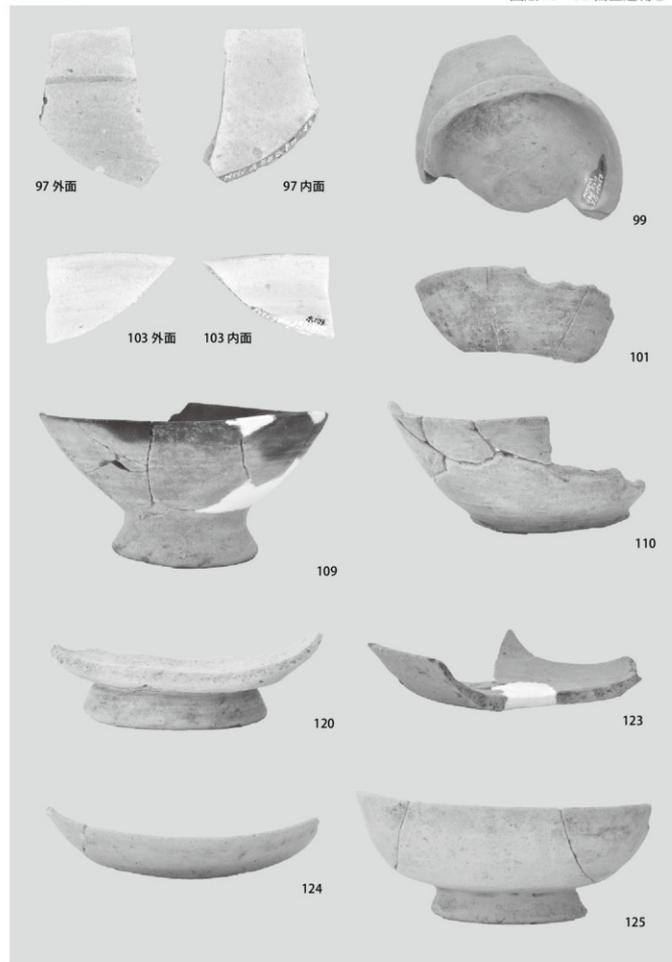
図版 14 SB 出土遺物②

真米田遺跡



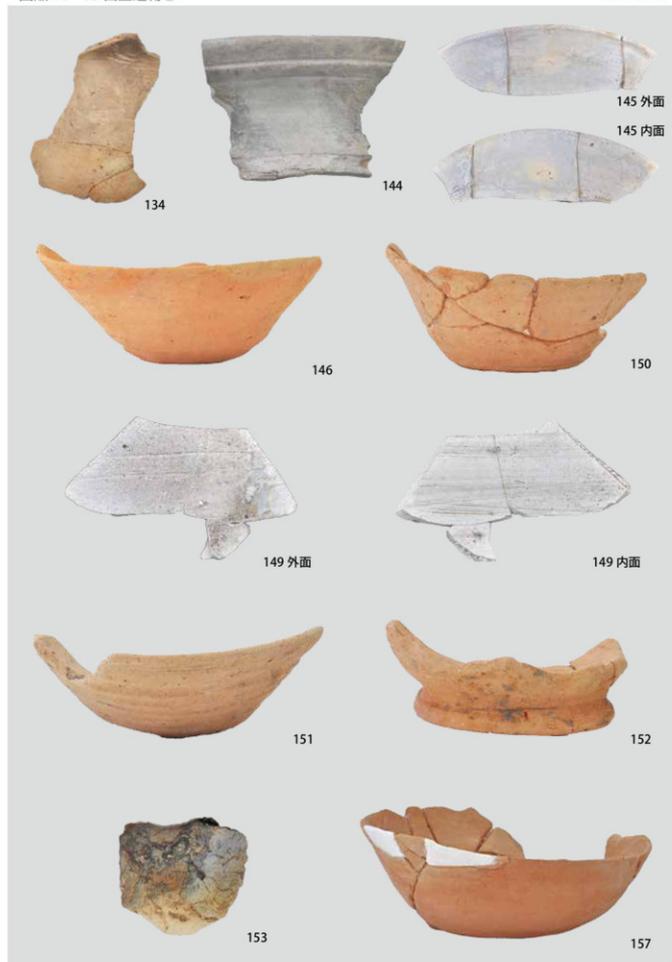
真米田遺跡

図版 15 SB 出土遺物③



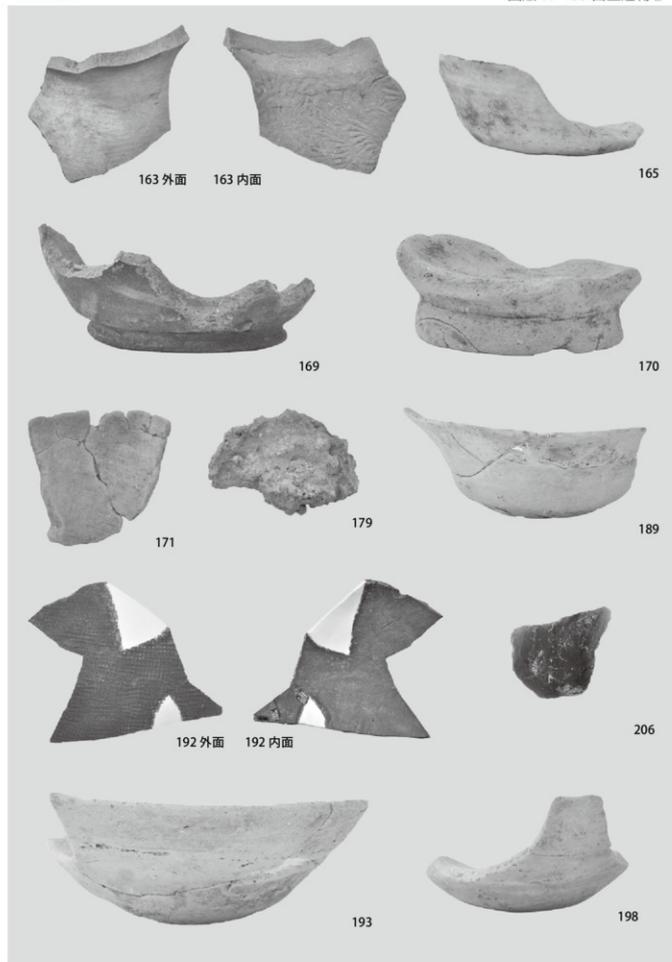
図版 16 SB 出土遺物④

真米田遺跡



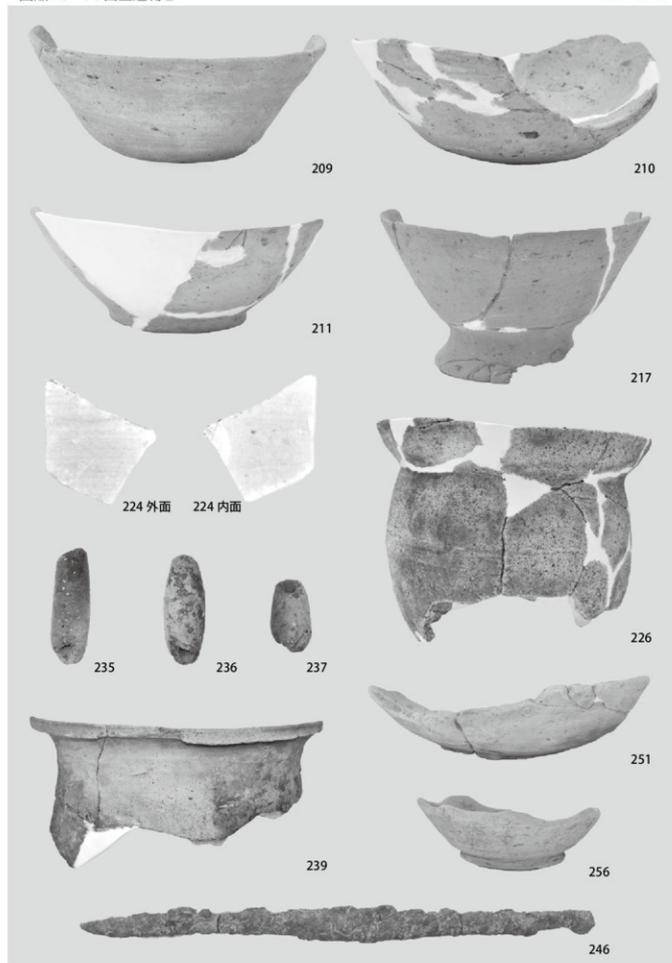
真米田遺跡

図版 17 SB 出土遺物⑤



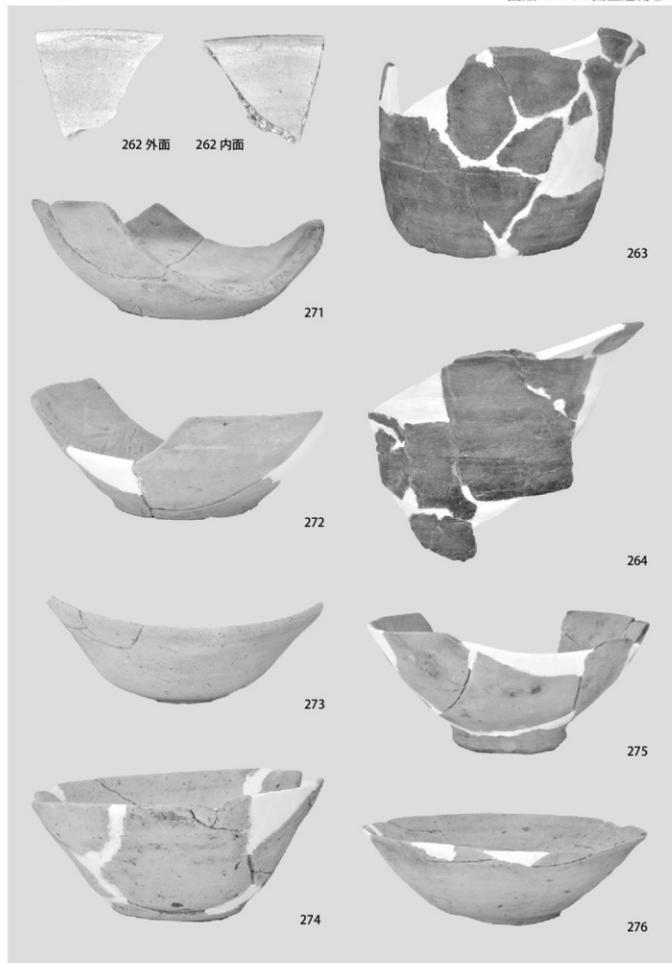
図版 18 SC 出土遺物 ①

真米田遺跡



真米田遺跡

図版 19 SC 出土遺物 ②



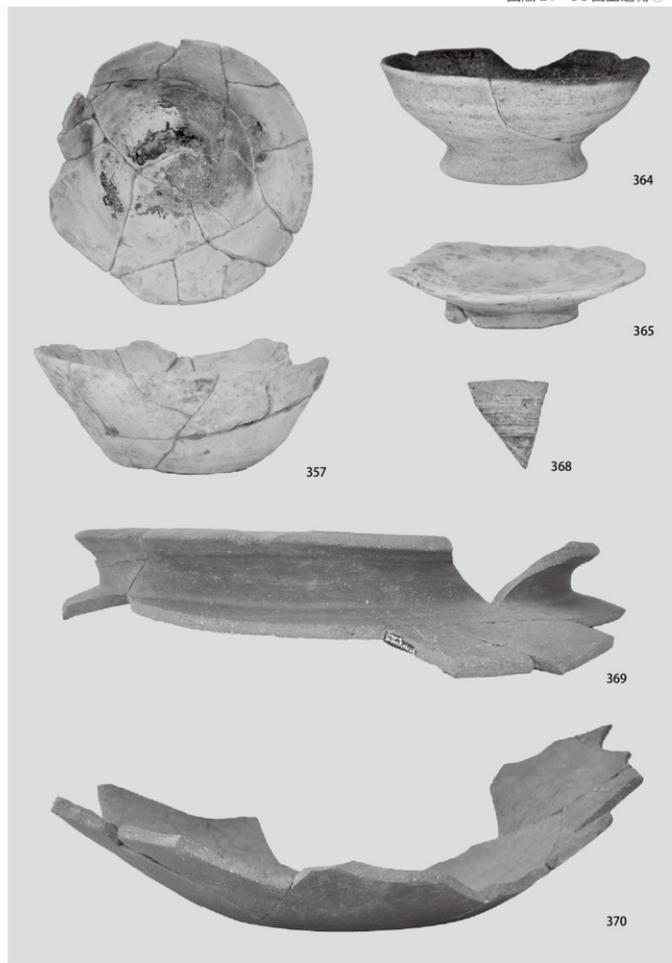
図版 20 SC 出土遺物③

真米田遺跡



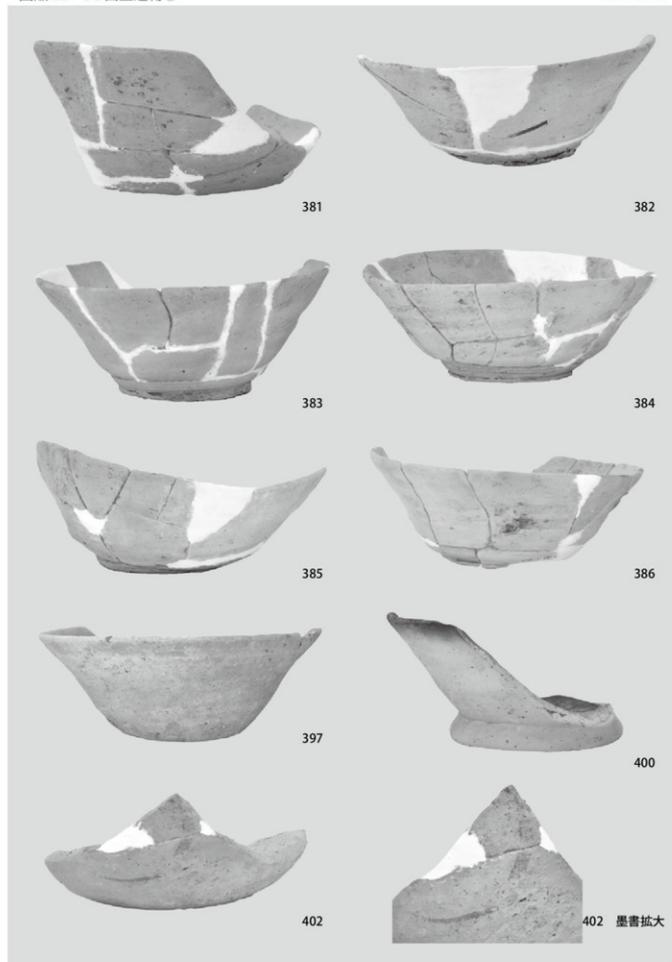
真米田遺跡

図版 21 SC 出土遺物④



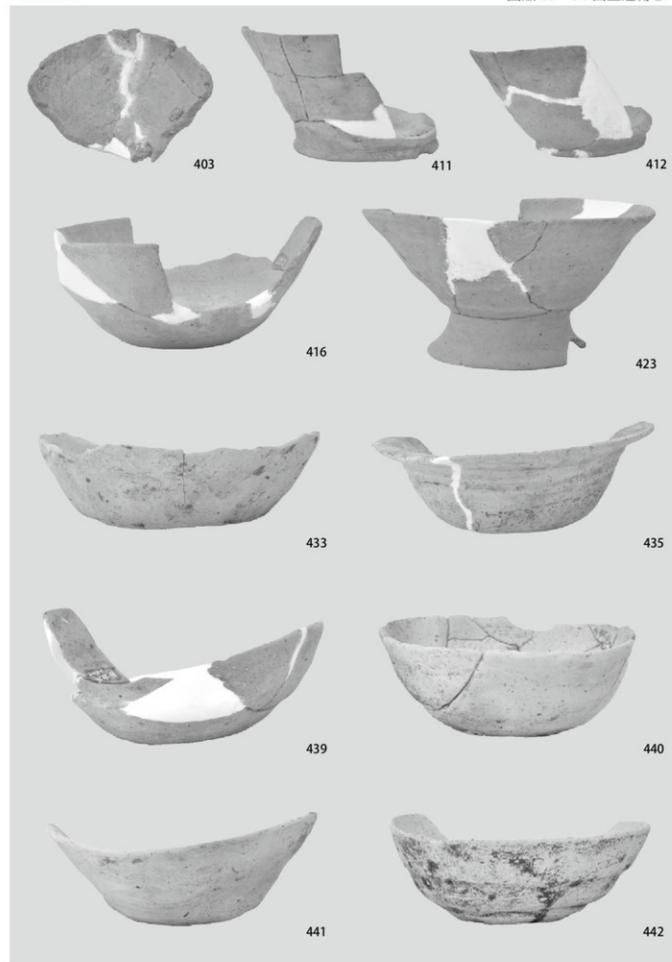
図版 22 SC 出土遺物 ⑤

真米田遺跡



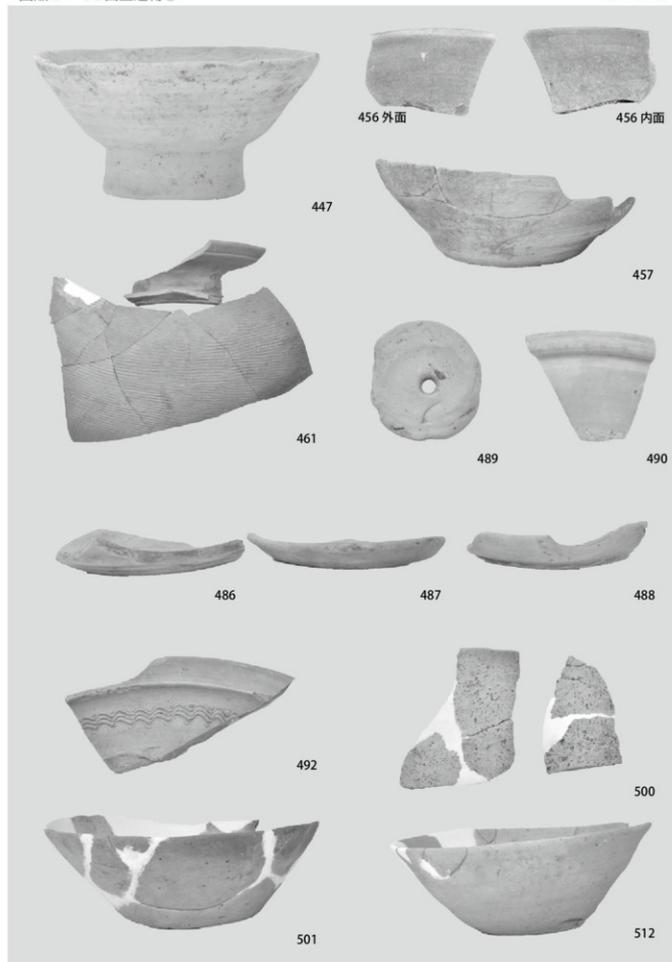
真米田遺跡

図版 23 SC 出土遺物 ⑥



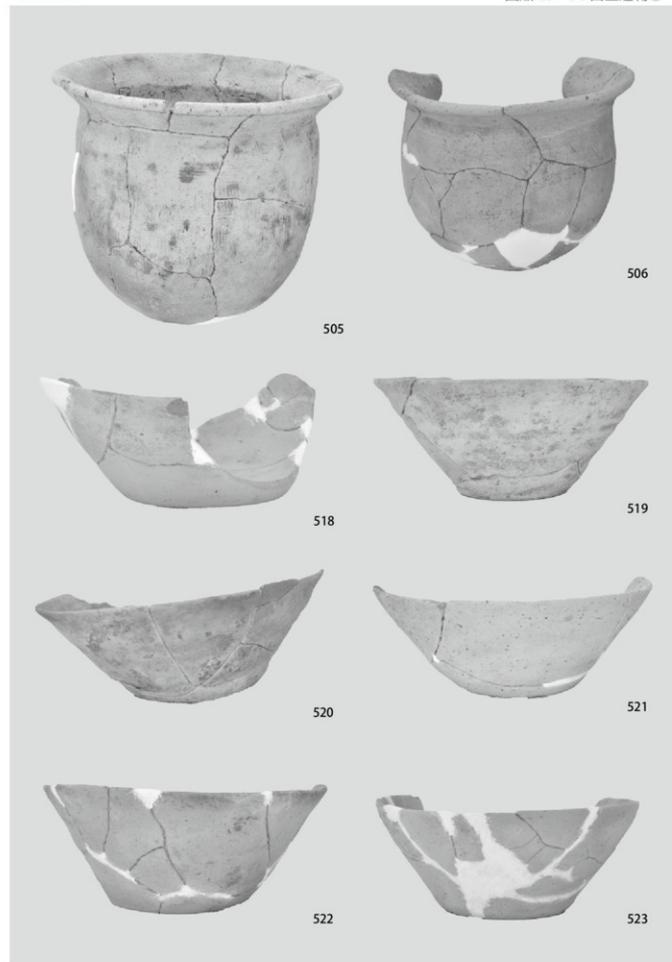
図版 24 SC 出土遺物⑦

真米田遺跡



真米田遺跡

図版 25 SC 出土遺物⑧





524



525



526



527



528



529



530



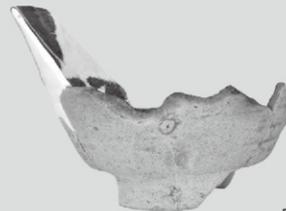
531



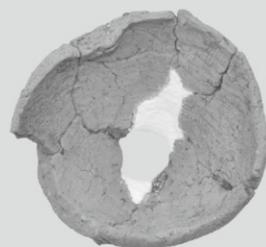
532



537



551



563



565



566



565



566



567



568



569



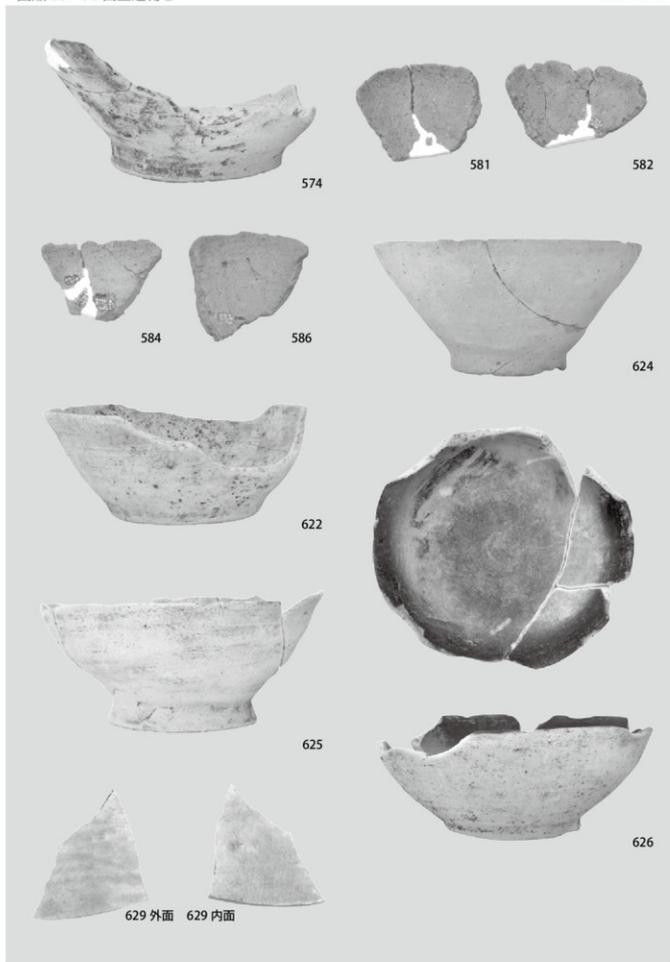
570



571

図版 28 SC 出土遺物 ①

真米田遺跡



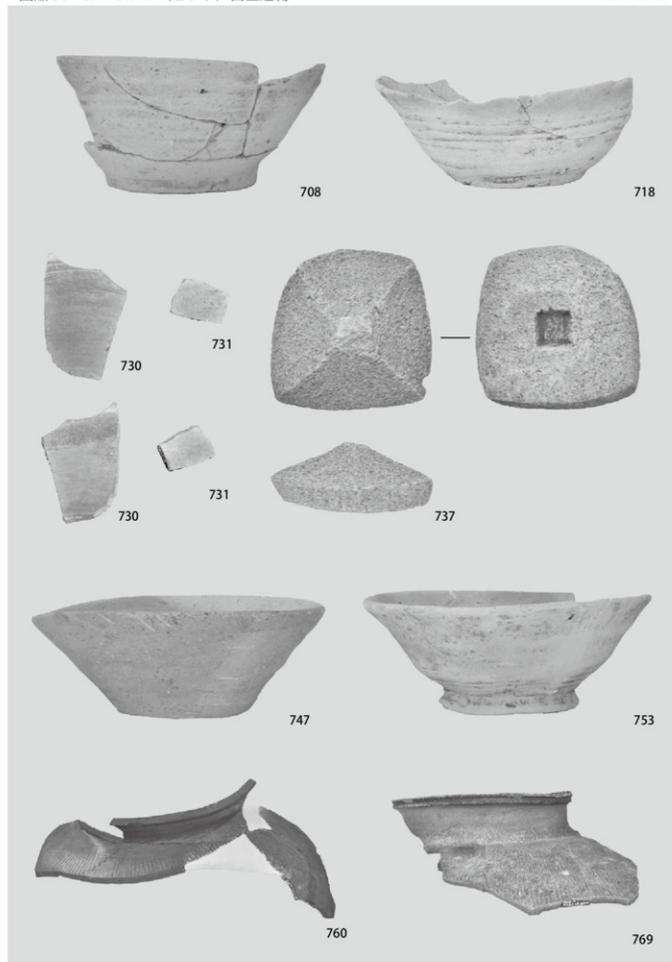
真米田遺跡

図版 29 SD 出土遺物



図版 30 SH・SK・P (ピット) 出土遺物

真米田遺跡



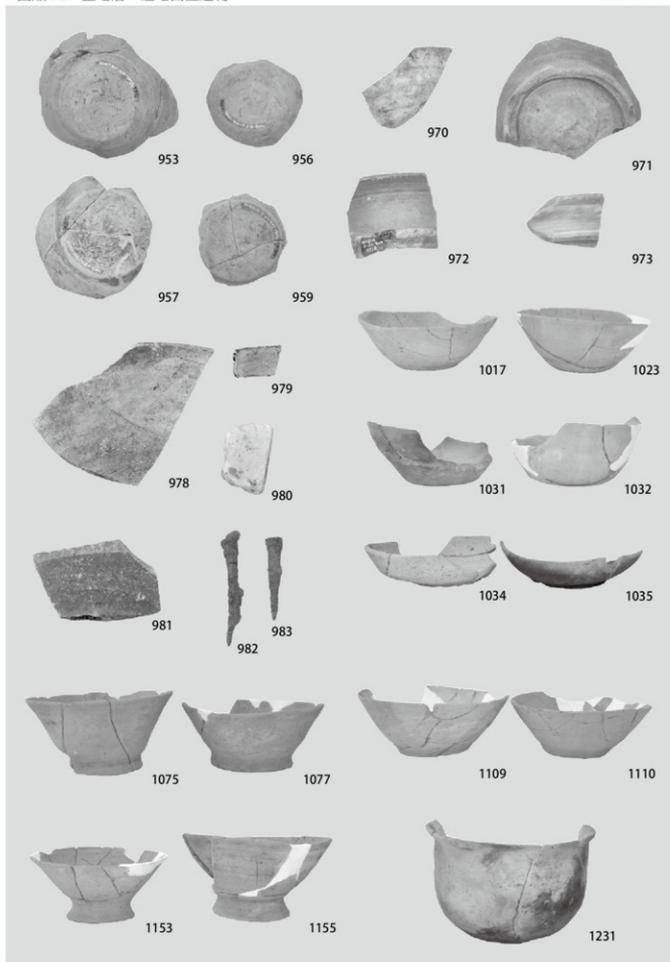
真米田遺跡

図版 31 ピット (P) 出土遺物



図版 32 整地層・窪地出土遺物

真米田遺跡



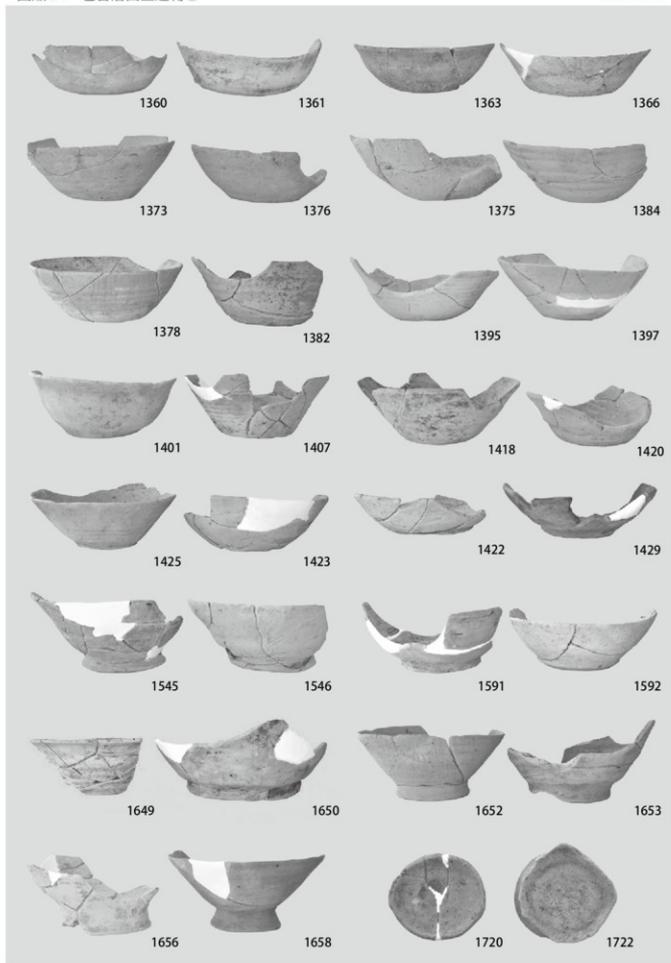
図版 33 窪地出土遺物

真米田遺跡



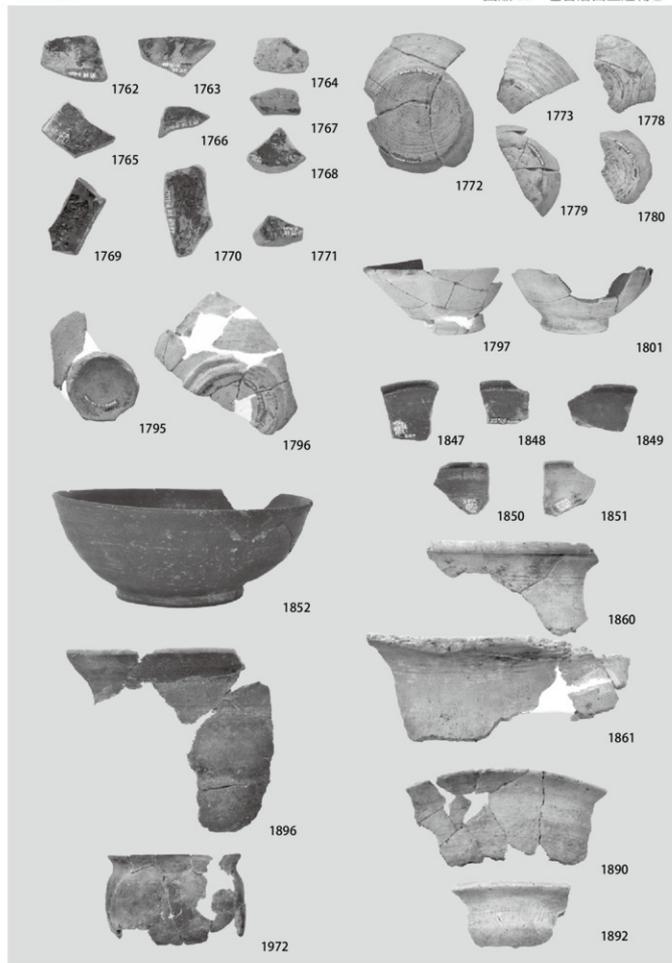
図版 34 包含層出土遺物①

真米田遺跡



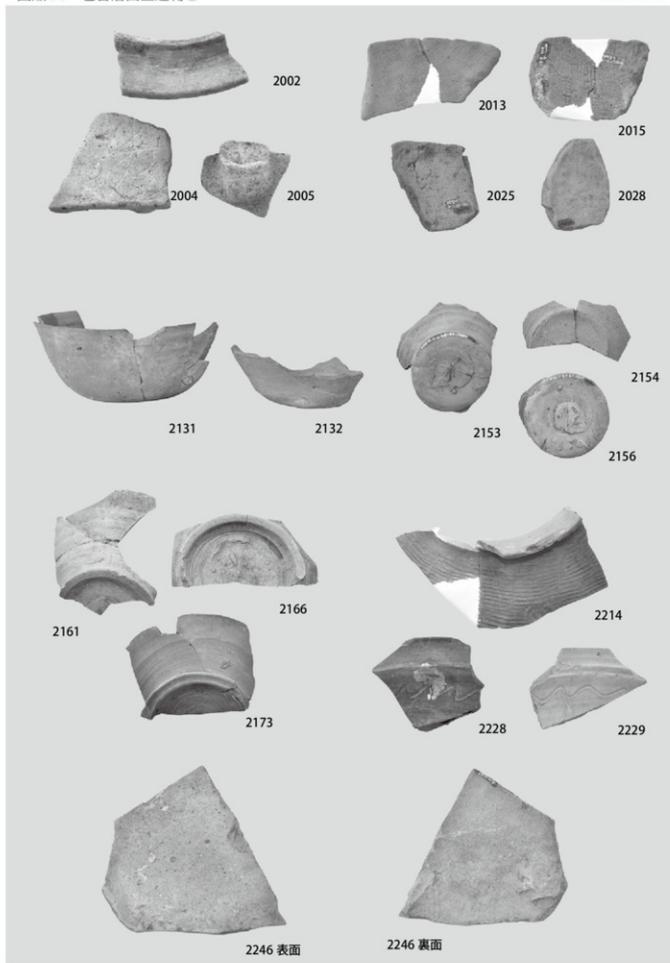
真米田遺跡

図版 35 包含層出土遺物②



図版 36 包含層出土遺物③

真米田遺跡



真米田遺跡

図版 37 包含層出土遺物④



図版 38 包含層出土遺物⑤

真米田遺跡



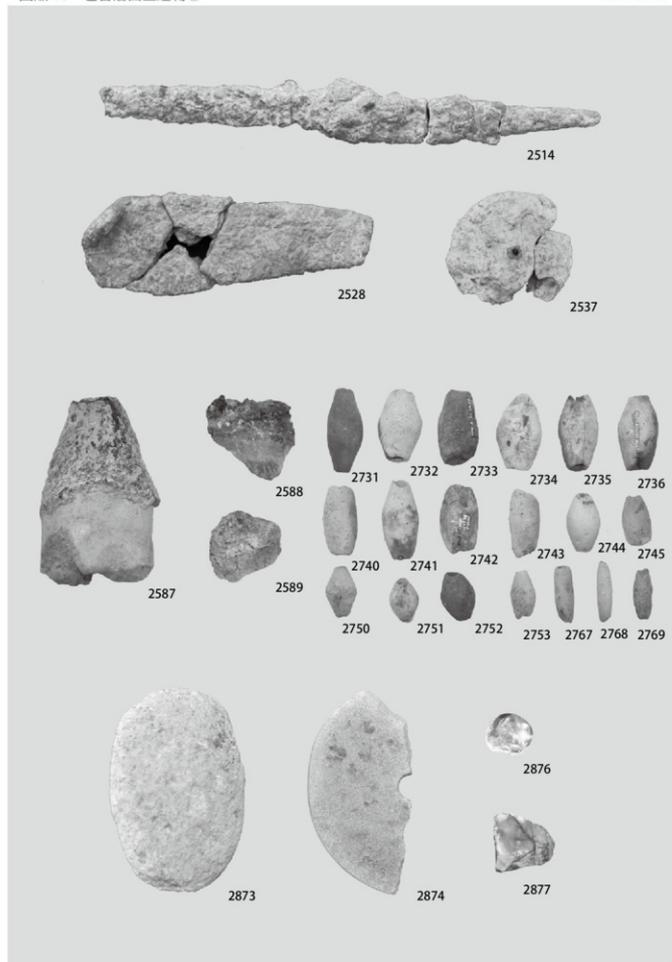
真米田遺跡

図版 39 包含層出土遺物⑥



図版 40 包含層出土遺物⑦

真米田遺跡



七日市前遺跡

図版 41 七日市前遺跡の調査①

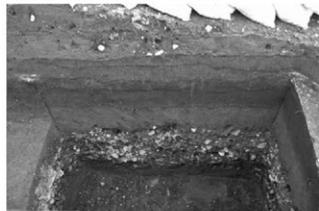


七日市前遺跡遠景（東上空より霧島を望む）



七日市前遺跡調査区全景

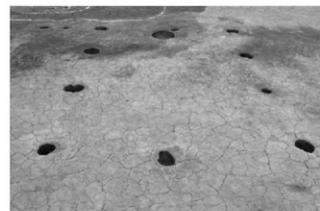
図版 42 七日市前遺跡の調査②



調査区土層堆積状況



SR2 土層断面 (北西から)



SB2 完掘状況 (西から)

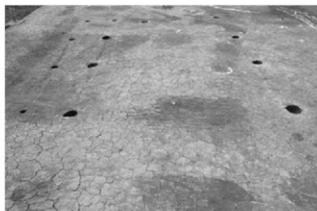


SC14 土層断面 (南東から)

七日市前遺跡



SR2 検出状況 (北西から)



SB1 完掘状況 (南から)



SC14 検出状況 (南から)



SC14 完掘状況 (南から)

七日市前遺跡



SB4 完掘状況 (南から)



SC26 完掘状況 (東から)



SD3・4 完掘状況 (南から)

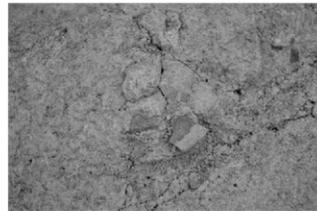
図版 43 七日市前遺跡の調査③



SC26 錐杖出土状況 (北から)



SD1・2・11・12 完掘状況 (東から)



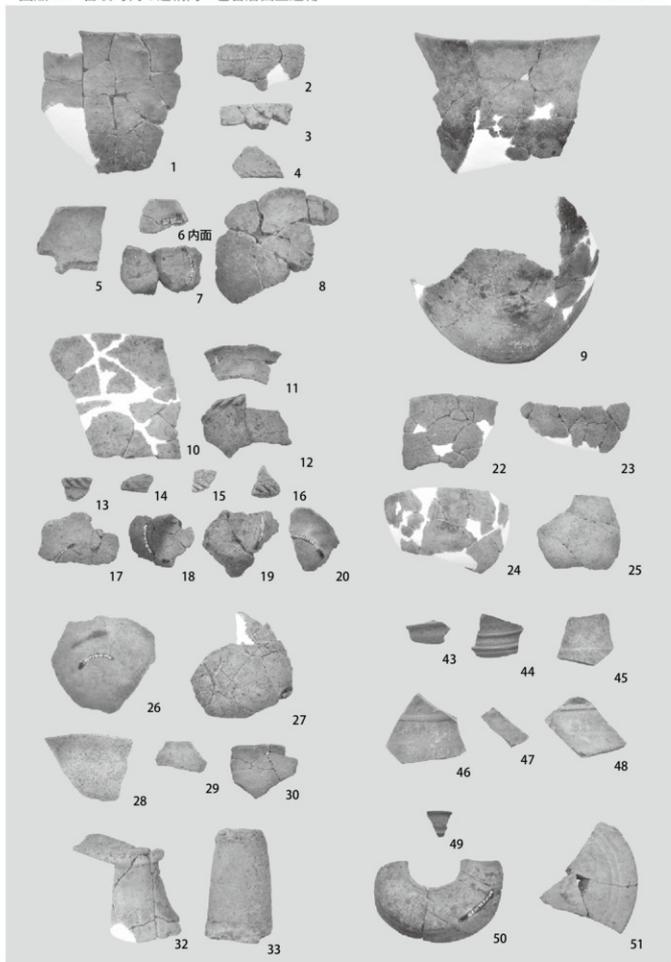
SD4 漆椀出土状況 (南から)



SD9・10 完掘状況 (南東から)

図版 44 古墳時代の遺構内・包含層出土遺物

七日市前遺跡



七日市前遺跡

図版 45 古代～中世の遺構内出土遺物



図版 46 古代～中世の遺構内・包含層出土遺物

七日市前遺跡



報告書抄録

| | | | | | | | | |
|--------|--|------------|--------|---|-------------------|---|---------|--|
| ふりがな | まめだいせき・なんかいちまえいせき | | | | | | | |
| 書名 | 真米田遺跡・七日市前遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 雇用創出ゾーン整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 都城市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第111集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 山下大輔 | | | | | | | |
| 編集機関 | 都城市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒885-0034 宮崎県都城市高浦原町19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2014年3月19日 | | | | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 真米田遺跡 | 宮崎県 都城市 高城町 穂満坊 | 45202 | TJ3009 | 31° 48' 0" | 131° 7' 31" | 2011.5.9 - 2012.4.13 | 10,900㎡ | 工業団地造成 |
| 七日市前遺跡 | 宮崎県 都城市 高城町 大井手 | 45202 | TJ2025 | 31° 47' 45" | 131° 7' 56" | 2012.4.9 - 2012.9.21 | 2,900㎡ | 工業団地造成 |
| 遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 真米田遺跡 | 集落跡 | 平安時代 | | 掘立柱建物跡 | | 土師器・須恵器 黒色土器 製塩土器 緑釉・灰釉陶器 越州窯系青磁 龍泉窯系青磁 白磁 鉄製品・鉄滓 風字硯 | | 大塚掘立柱建物跡・楕円形周溝墓・土師器焼成土坑が検出され、風字硯や大量の陶磁器類の出土から在地有力者の居住跡あるいは公的施設の一部である可能性あり。 |
| | | 中世 | | 溝状遺構 楕円形周溝墓 土師器焼成土坑 土坑 畝状遺構 | | | | |
| 七日市前遺跡 | 敷布地 | 古墳時代 | | 土器埋設遺構・土器溜まり | | 土師器・須恵器 | | 銅杖は都城市内で初出土。遺跡の周辺にあったとされる高杉寺との関連性が考えられる。 |
| | 集落跡 | 平安時代 中世 | | 掘立柱建物跡 溝状遺構 道跡 土坑 | | 土師器・須恵器 龍泉窯系青磁 白磁 鉄製品・鉄滓 銅杖・銭貨 | | |

都城市文化財調査報告書第 111 集

真米田遺跡
七日市前遺跡

－雇用創出ゾーン整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2014 年 3 月 19 日

編 集 宮崎県都城市教育委員会
発 行 〒 885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町 19-1
都城市役所菖蒲原町別館
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549
印 刷 有限会社 都城新生社印刷
〒 885-0004 宮崎県都城市都北町 7284-1
TEL (0986) 38-3500 FAX (0986) 38-4187
